(岡山製本)

大正三年十二月十七日印刷

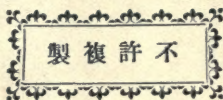
大正三年十二月二十日發行

有朋堂文庫 淨瑠璃名作集中 (非賣品)

編輯兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 三浦理

印刷者 東京市本所區番場町四番地 平井登

印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社分工場

發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 有朋堂書店

つて、早う去にたい母樣」と、縋り歎けばしやくり上げ、おかち「夫が叶ふ程ならば、私に如才があろかいの」と、親子の歎き九郎兵衛が、身にしみ渡り人々も、堪へ兼ねたるばかりなり。時刻延ると德兵衛は、無理に市松引立てて、繩を手繰つて後より、兩手を持添へ、德兵衛「サア九郎兵衛が親子の因果の瀬戸、かすり疵でも負せる程に、働きが緣切つた印、此方にも遠慮はない。サアこいやつ」と捕かけたり。九郎「ヲヽ、これも過去の約束事、廻る報は親子の絆、切つた印を是見よ」と、拔身を振り上げ見交す顏、「父樣怖い、伯父樣爰を離して」と、身を揉みあせるは修羅道の、苦患もかくやとあさましゝ。隙間を見て無理やりに、しがみ付かせば九郎兵衛も、程よくどつかと大地に仆れ、抑へて繩を懸るも涙、わつと取付く女房を、押退け突退け介松主計、主計「佐賀右衛門と諸共に、國へ引いての采配」と、引立てさせる天の網、かゝりや繋がる磯之丞、我身にかへて命乞、追付け目出度吉左右と、情も深き備中の、玉島にて德兵衛が、團七九郎兵衛捕つたりしと、云傳へしは義理の繩、情の繩と怨の繩、皆引連れて和泉の國、濱田の館へ立歸る。

夏祭浪花鑑　終

ず、佐賀「イヤサ、夫は手緩し〱。盗人たけ〲しいと、いつまでも諍ふもの、コリヤ拙者にお任せ」と、藪蔭へ引据させ、佐賀「こんな奴は手ばしかう、臺座離して仕舞ふがよい」と、刀するりと拔放し、振上げちやうと討つ所を、主計はすかさず其腕捻上げ、拔身捩取り、主計「ソレ磯之丞、其刀吟味あれ」と云ふに、はつと空繩はづし、明りに透して、磯之丞「ヒヤア、是こそ千手院力王のお刀、扨こそ知れた盗賊め」と、引擔いでのめらすれば、德兵衛釣船踏付け〱、「小うまう手盛をまゐつた」と、三寸繩に締上げる。主計はやがて聲張上げ、主計「ヤア〱團七九郎兵衛、藪の内にて樣子は見るべし、殿のお刀尋出したる功に依つて、磯之丞は先知に歸る、さすれば其方が願ひもあるまじ。サア尋常に繩かゝれ」と、呼はる聲を聞くより九郎兵衛、妻子を引連れ搖ぎ出で、九郎「忝き御差配、もはや浮世に心も殘らず、急いで繩」と兩手を廻せば、「ヲさもあらん。幸ひ繩かける役人是にあり」と、立寄つて、市松が手がねを赦し、主計「コリヤ德兵衛、躮は女房に付け離緣致したと申上げても、日限の相違にてお上の疑ひ晴れず、申譯の爲、母が代りに、市松に繩かけさせよ。但しは竹鋸を持たするか」と、是非なき仰に目顏をしかめ、德兵衛「コリヤ市松、父に繩懸けてお目にかけい」本の是が親子の別れと、涙ながらに捕繩持たせば、おかちはわつと泣くばかり。市松はよろ〱と、「俺そんな事いや〱〱。父樣と連立

て」と駈け寄る女房、家來の大勢手ごめにし、情なくも打碎く、二枚戸碎けばはら〳〵と、すはやと思へば内は明がら。佐賀「南無三寶、後を切つて迯げたるぞ、續けや來れ」と佐賀右衛門、追ひ駈け行けば女房も、死なば夫と諸共と、市松連れて跡に付き、裏道さして駈けり行く。裏は大藪十重二十重、追取り卷きし、中にもこつぱ、なまの八が待ちかけて、「遁れぬ、覺悟」と捕りかけたり。九郎兵衛は得手に帆、「儕等二人を待兼ねし」と、弓手と馬手に引受けて、小枕返しにどつさりどさり。加勢は「捕つた」と取付くを、「何ひろぐ」と捻上げて、弱腰ぽんと命の蹴上げ、其間にかゝる惡者二人、嬲殺しと眉間肩先、斬られて土手をころ〳〵、這上れば切付くる、むしやぶり付けば薙仆す。「訴人の褒美に此世の暇、冥土へうせい」と兩人を、削いだり切つたりはつつたり、嬲殺しと止めの刀。其間に大勢立かゝるを、薙ぎ立て〳〵切捲り、藪の内へぞ身を忍ぶ。かゝる騒の折も折、曳かれ來る磯之丞、言譯立たず縛り繩、跡にしを〳〵德兵衛釣船、願ひの揉手も聞入れず、主計「國へ引いた上の事、主計が力に及ばず」と、引立て通るを佐賀右衛門、それと見付けて小指出で、佐賀「是は〳〵主計殿、お刀の盗人召捕られしは重疊々々。しかし遙々と國方まで、引連れらるゝは國土の費、首にしてお歸り」と、日比の意趣を持ちかける。「イヤいまだ盗賊の筋治定致さず、さるによつて召連れる」と、云はせも立て

ば錠下りたり。「エあんまりな用心」と、戸をこと〴〵打叩き、おかち「九郎兵衛殿、まめで居て下んしたの。此子も元より逢ひたがる、私も逢うて一通、言譯せねば心が濟まぬ。あたりに人もござんせぬ、戸棚の戸を引放し、顔見せて下んせ」と、いふも涙のしやくり聲、戸棚の内には泣く音を隱し、九郎「市松よ、汝や父が代りに手がねを打たれ、嘸腕が拔ける樣にあらうな。さういふ難儀が懸ろと知つたら、何で大阪を立退かうぞ。今では德兵衛への義理があつて、薄紙一重の戸も破られず、此家で命を捨てる事もならぬ。とゝが顔が見たくば、獄門にかゝつて見るか、繩かゝつて逢ふよりは、逢ふ事もあるまい。おかち、坊主めが手ははれはせぬか」おかち「イエイエ、ちつとばかり水ぶくれに」九郎「かはいや喰ひ入る樣にあらう、きつう痛むとは云はぬか」おかち「次第に緊つて痛むかして、此中はしく〳〵泣いてばつかり居ます。ソレ市松、とゝ樣にちやつと物を言やいの」と、戸棚の傍へ押やれば、市松「コレとゝ樣、かゝ樣と一所に内へ戻つて下され、マア顔見せて下され」と、戸棚に縋れど、手は叶はず、あせり歎くを二親は、内と外との諸涙、こたへ兼て思はずも、わつとばかりに泣叫ぶ。早廻りくる報の刻限、こつぱが報に捕手の人數、表口より所の代官、裏口よりは大鳥佐賀右衛門、「捕つた〳〵」と亂れ入り、脇は構はず戸棚を圍ひ、佐賀「九郎兵衛が有所はこの内、戸を打めげ」と玄翁掛矢。「ナウコレ待つ

したは六月の十一日の夜、暇の狀は七日後、やつぱり身殺しになつて、市松が手錠、あんまり見る目がかはいさに、躮を媒鳥にして、九郎兵衛を尋出しませうとお願ひ申して、連れて下つた其心は、いつそ親子三人連で、筑紫の果へもやる思案、預づて來た俺が難儀は、コレ白髪首一つ。願うた後生はなし、是も慈悲そなたも慈悲、どうぞ逢はしてやつてたも〳〵、賴む〳〵」と、親子も倶に餘儀なく云ふに、德兵衛はずつと立ち、幸ひと湯玉の立つ茶びん引提げ、德兵衛「コレおかち殿、三ぶ殿、此内に九郎兵衛が居ぬといふ證據、見て疑を晴されよ」と、たぎりし沸湯を緣側へ、ざつと流せば下よりも、「あつや〳〵」と迯け出るこつぱ、すかさず駈け寄りそつ首摑み、德兵衛「コレ見られたか三ぶ殿、最前から蟲の音が止つた故、睨み付けて置いた。飛脚にうせたも此奴であろ」と、引擔いで門柱へ、打付けんとする所へ、又も飛出るなまの八、「コリヤさせぬは」と取付くを、「脩も踞んで居つたか」と、揉合ふ内にこつぱは遁れ、「九郎兵衛が有所は、慥に戸棚の内」と叫うで駈け行くを、「夫云はしては」八を蹴飛し、追駈け行けば遣まじと、續いて走るなまの八、夫又やらじと釣船も、跡を慕うて駈けり行く。二人の女房はあぶ〳〵と、お辰は猶も夫が氣遣、「おかぢ樣留守賴む」と、云捨て小褄引挾み、飛ぶが如くに行く跡に、おかちはうろ〳〵あたりを見廻し、人影なきを幸ひと、市松連れて戸棚の戸を、開けんとすれ

情と、歎けば三ぶも萎れながら、三ぶ「あの通りに常住泣いて居らるゝ、内儀はまだ得心もさせよいが、難儀をするは此坊主め、父様に逢ひたい〳〵と、泣いてばつかり居つて、此間は物も得喰ひ居らぬ、あんまり見る目が痛々しうて、跡先問はず連れて下つた内儀に、逢はす事ならざ、此奴ばかりに逢つてやつてたもらぬか」徳兵衛「ア、コレ、らつちもない、此方までが同じ様に、其逢ひたい見たいを堪へるが、天の責網の代りに辛抱さしたがよい」三ぶ「イヤ徳兵衛、もう天の網がかゝつたはいの」徳兵衛「ソリヤどうして」「コレ、是見てたも」と市松が、肌を脱がせば懐手錠。徳兵衛「ヒヤア、こりや忰に手枷か、いとしや此子を下手人か」と、お辰が泣聲、漏れ聞く戸棚、九郎兵衛は身も世もあられず、我子に憂目をかきよよりはと、戸を押破る。徳兵衛「コリヤ〳〵〳〵、爰を堪へるが男づくの義理合、此徳兵衛が志を破るのか」と、聲かけられて出もならず、是非もなき身の悔泣、胸に涙ぞせきのぼす。お辰は市松撫さすり、お辰「いとしやの、不自由にあらう。他人の私さへ悲しいもの、二親の心はどの様にあらうぞ。徳兵衛殿了簡付けてたつた一目」徳兵衛「イヤその手枷合點がいかぬ、舅殺しにさすまい爲、女房と緣切らした、スリヤ義平次とはあかの他人、他人を殺した九郎兵衛が、子までに難儀がかゝるとは、三ぶ殿、此方緣切つた事申上げずか」三ぶ「申上げた段ではないが、下司の智慧は跡の悔、義平次を殺

と琴浦殿とを兄弟分にして、磯殿の出世を待つて居らるゝ。また此二人も何やかやで連れて下つた。お嬶様息災に有つたの」と、取交咄せば女房お辰、お辰「コレマアよう連れまして下らんした、おかち様、市松殿も大きう成つて、ヤレ久や珍しや、サアマアこちへ」と挨拶も、身に付く様に思はれて、おかち「ほんにマア何からお禮申しませうやら、連合九郎兵衛殿のお世話、詞では云盡されませぬ。そしてマアいよ／＼息災で居られますかな」お辰「まめなとも／＼マアちよつと逢せませう」と、立つを徳兵衛、徳兵衛「コリャ待て女房、逢すとは誰にあはす」お辰「ハテ九郎」徳兵衛「コリャ九郎兵衛は北國へ下つて爰には居ぬが、エいやさ、假令居るにもせよ、一旦隙やつた女房に、逢う様な未練者でない。元より此内には居ぬ、ナ、居ぬ犬といふに氣を付けよ」と、呵廻せばお辰も氣が付き、お辰「ほんに私とした事が麁相々々、天に口とやら言へばナウ徳兵衛殿」徳兵衛「夫が直に壁に耳」「ソレイデ何にも云はれぬおかち様、アレあの戸棚の物いふ世の中ぢやわいなア」おかち「エそんならあの戸棚」徳兵衛「コレ内儀、テモ逢ふ事はならぬ、此所には居ぬ」と、言はれておかちははる／＼と、逢ひに下りしかひもなく、涙も胸に迫りしが、「縁を切つたは表向、心の縁は切らねども、去狀取つたが誤なら、成程わたしは逢ひますまい、其代に市松に、逢つてやつて下さんせ、主も定めて逢ひたかろ、顔見せて下さんせ、お世話の上のお

コレ此首と一所に。ハテ一度死んで二度死なん」と、臺座据たる大胡座、命を塵と投出したり。流石の主計も道理には、當る刃の刃金もなまり、暫し思案し差たる刀、鞘とも投出し、主計「コレ德兵衞、ハテ其方は性根魂の据りし男、見込で武士の一腰を預ける。コレ指添ばかりになつたれば身は町人、何と町人ぢやが、磯之丞を預けられまいか」德兵衞「ムウすりや此一腰を」主計「ハテ刀に恐れぬ其方が言譯」德兵衞「シタリ、御勝手に連まして御ざりませ」主計「スリヤ得心の召さつたの」德兵衞「ソレ女房ども日がくれさうな、小挑灯でもあげませい」主計「イヤ夫には及ばぬ、過分過分」と引連出れば門まで見送り、德兵衞「申しお侍樣、ちと御無心が御ざりまする」主計「何か何か」德兵衞「去方から頼れました、アノ此刀お買なされて下さりませ」主計「ハテ此刀は其方へ」德兵衞「イヤ代物には磯之丞樣の、お力に成つて下さりませ」と渡す心のしをらしさ、如何な武士でもほろりと折れ、「氣遣召されな請取つた」と、開た腰をば塞ぎ行く、互の心丸鍔の、金の目貫に銀の緣、よい拵の鞘持と、頼みてこそは、三重別れ行く。黄昏過ぎてとぼ〳〵と、女子供を引連れて、「慥爰ら」と釣船は、門口そつと、三ぶ「エ爰ぢや。九郎兵衞の女房や息子の市松連れて下つた。德兵衞マア悅びや、磯之丞殿がずかとやられた、彼の仲買の孫市めは、根がお尋者で、傳八が書置の手が違うたも何にもなしに、さらりつと事が濟む、小道具屋の孫右衞門殿の悅び、娘のお中

れば無念の齒を噛み締め、儀之丞「わが傾城狂ひも、もと佐賀右衛門めが勸とは云へ、今更侍の武具馬具を代なして、身請したと言譯がどうなる物ぞお内儀、是皆お主と親の罰、思ひ知つての切腹」と、もぎ放すを主計は聲かけ、主計「ヤア覺えなき身が切腹して、親迄恥辱を與へるか」と、一句で止められ死もならず、ハットばかりに忍び泣、心を察し、主計「ホヲ、兎角力王のお刀、尋出すが身の言譯、まづそれ迄は貴殿は科人、其儘には指置れず、イザ旅宿へ同道致さん、お立有れ」と引立られ、是非なくすご〳〵立出るを、徳兵衛立寄り捥離し、徳兵衛「コレお侍樣、此儀之丞殿は手前の客人、詮議があらば此場でなされ、旅宿へやる事なりませぬ」と、強ばりかかれば柔を入れ、主計「ホヽ、尤も去りながら、詮議を遂ぐるは胡亂の沙汰、儀之丞殿に限りよもや左樣な不所存は」徳兵衛「さないと思はゞ同道御無用」主計「イヤサ、そこが主命、一旦御不審かゝりし者、見遁し置いてはお上へ不忠」徳兵衛「イヤそりや其方の御勝手ばかり、友達どもより預つた若い人に、無實を云ひかけ、其證明の立つ迄と、連立つて貰うては、マヽ、此徳兵衛が男が立たぬ」主計「サア、そこが了簡、お身は高が町人、身共は武士」「サ其武士ぢやによつて猶ならぬ」「何故何故」徳兵衛「徳兵衛が町人か百姓ならば渡しもせまい。小見ずも云ふが相手が侍、ぢやによつて預つた人を渡した、刀が怖さと言はれては、此男一生が廢る、それとも是非受取りて歸りたくば、

を占むれば、お辰はきよろ〳〵徳兵衛は、聞き及んだる名苗字に、上足下し座を下り、徳兵衛「成程拙者が一寸徳兵衛、珍しきお尋ね、何の御用」と手をつけば、主計「外の儀でもない、此家に玉島兵太夫子息、磯之丞がお居やるであらう、迎に参つた、逢せておくりやれ」徳兵衛「是は思ひ寄らぬ仰、シテ御迎の筋は、善でござりまするか悪で御ざりまするか」主計「ヲヽサ悪とも、磯之丞には盗賊といふ御不審が立た」徳兵衛「エヽそりや又どうして〳〵」と、女房諸共仰天すれば、戸棚の内にも身を揉む音、一間に立聞く磯之丞堪兼て飛んで出で、磯之丞「お久しや主計殿。シテ此磯之丞を盗賊とは、何を以つて仰しやる、御返答によつて浪人の切味、御目にかける」と切刃を返し急に急いて詰かくれば、主計「ホヽ、まだ侍の性根残つて珍重々々。盗賊の筋は、御自分國方でお預の千手院力王のお刀、お藏の内にて紛失」磯之丞「ヒヤア」主計「大鳥佐賀右衛門申上げるには、磯之丞が殿のお刀を盗んで賣代なし、傾城を受出したと、悪説を云出し、お耳に入つて親兵太夫殿は物頭へお預け、拙者には御自分の有所を尋ね、急度詮議を糺せよと御上意、よもや左様な不所存はあるまいなれども、一生懸命、サア返答有れ」と云ひかけられ、ハット當惑さしもの徳兵衛、磯之丞は猶赤面の覺なき、身の氣はうろ〳〵せんかた盡きて切腹と、脇指抜くをお辰は押止め、お辰「コレお前は狼狽てか、但しお身に覺えが有るか、言譯なされ言譯を」とあせ

死たいか」九郎「イヤサ、夫ばつかりで九郎兵衛程の者が迯隱れる、殊に德兵衛の志破るは、人でも杙でもないと堪へては居れども、最前の樣な赤犬めがうせると、飛出て骨が挫ぎ度なる。是がわしが病でえす」お辰「コレそんな時にはな、大阪に居やんすおかち樣や、市松の事思ひ出したがよいわいな」と、云はれて又も故鄕の事、思ひ出する折からに、表へ歸る主の德兵衛、德兵衛「こりや何で門口閉めた」と云ひつゝしやくる潛戶の、音に驚き、「そりや又人よ」と九郎兵衛を、無理に戶棚へ押入れて、錠下す音敲く音、紛れてヲイと答さへ、聲とまくれて開けに出る。德兵衛「ハテ扨晝中に閉めて置くと、猪人が不思議立てる、大い阿房では有るはいの」と、云ひつつ入れば、お辰「さればいな、こな樣の留守の內、大阪からぢやと云うて赤犬が來てな」德兵衛「ソリヤこつぱの權めであろ」お辰「ムウ知つてかへ」德兵衛「ヲヽサ、今日代官所で樣子を聞けば、大阪表より、九郎兵衛が生國和泉の國へ訴へ有つて、大鳥佐賀右衛門といふ奴、詮議に下りしとの噂、こいつ根深い惡者、犬に犬を入れて嗅步かすと聞いた、假へ一家で有らうが、女房子で有らうが、肌の赦されぬ時節、磯之丞殿も內に居やるか、出步かれぬ樣に云へ」と、心を付ける折からに、所目馴れぬ侍の、編笠取つて內に入り、「卒爾ながらお身が此家の亭主一寸德兵衛と云ふので有らう、身共は泉州濱田の家中、介松主計と云ふ者、初對面でおぢやる、赦しめされ」と座

ぬ事ぢやが、都合が悪い、出かけ直してござんせ」と、ずつかりいはされ飛脚はきよろり、立はだかつて居る所へ、「どうぢや〳〵様子はどうぢや」と尋寄るはなまの八。飛脚「ア、失策つてのけて様子は知れぬ、あの體ならば九郎兵衛は此内に居らぬであろ、ナ、ナ」、と耳に口寄せ、飛脚「コレ斯うぢやによつて居らぬであろ、頼まれた佐賀右衛門殿へ申上げ、濱邊の方を詮議せう」と、言うては呫き頷き合ひ、何所ともなく立歸る。様子を立聞きお辰は安堵、扨こそ飛脚は廻し者、徳兵衛の内になら、鼻削いで去なさうに」と、云ひつゝ立寄り戸棚を叩き、お辰「九郎兵衛様、今の飛脚は廻し者。おまへを斯うした所に忍ばして置きまするも、あんな事も有らうかと主のりかん、ちつとの間暢氣させましよか」と、錠押開くれば戸を開き、手足を伸して團七九郎兵衛、九郎「テモ弛や〳〵窮屈や、起ればつかへる寝ればすくばる、疊提燈の様に成つて、足も腰もめりめり〳〵、ソノ、退屈な事、お嬶様、磯之丞殿は何所へぞ行かれました」お辰「アイ出の口の小座敷に本讀んでゞござんする」九郎「ア又氣がつけうが。最前來た飛脚めは、慥こつぱの權めが聲ぢやが」お辰「アそんな事でもごんしよかへ、佐賀右衛門に頼まれかき歩くと見えた」九郎「彼奴等に恐れこんな窮屈な目して居よより、早う名乘つて出て、仕舞がつけたい」お辰「ア、又そんな事言はんすかいな。磯之丞様の先途を見屆させんと、連合徳兵衛殿の心遣、夫を無にして早う

第九　親と子の緣を繋だ貫ざしの捕繩

名物は刃物燒物唐海月、備前備中兩國で、骨と云はれし一寸德兵衞、命にかけて九郎兵衞を、隱し遂げれば今日も亦、庄屋代官の呼使、是非なく行つて留守の內、飛脚と覺しき撥鬢男、門口より聲高に、飛脚「一寸屋の德兵衞殿は爰かの、大阪から來ました」と踏み込む足も草鞋がけ、お辰は駈け出で、お辰「是は〳〵、遠くの所ようこそ〳〵。シテ大阪は何所、誰樣」と問へば男はあたりを見廻し、飛脚「大阪は高津町釣船の三ぶ殿からの使、夫婦とも言はるゝには、永く九郎兵衞殿を隱まうて下はつて過分にゐんす、したが此間は其邊へもづきが廻り、ごろ付くと聞いたによつて、九郎兵衞殿を迎にやります、此者と連もつて戾してくつさんせ、といへでゝゐんす」と、常云付けぬ口上を云廻すれば、目高な女房打領いて、お辰「成程〳〵、則ち隣の明家に忍ばして置きました、連れまして去で下さんせ、大儀ながら」と賴むに幸ひ、飛脚「そんなら釣船も待つて居る筈、連立つて去にましよ。隣の明家はドレどこ」と、門口見るを跡ぴつしやり、鍥かけて、お辰「コレ大阪飛脚置いて貰はう。此國の御詮議は昨夜からのもめ出し、それが聞えて迎に來たとは、アノ五十里隔た大阪へ、鳥が觸たか風がいうたか、元來此方に隱まはねば構は

奥の騒動。代官「それ〳〵九郎兵衛が屋根へ逼げたぞ、突て捕れ巻て捕れ、突棒よ刺杈よ」と騒につれて徳兵衛も、何とせん、かとせんと、思ひ廻して表へ駈出で、梯子追取りおだれに打掛け、登るも心板屋葺、重ね重ぬる三重身の科も、爰ぞ絶體絶命と、九郎兵衛は屋根の上、力士の如く抜身を引提げ、寄らば斬んづ其勢。捕手の人數は後より、駈上つて右左、捕たとかゝるを唐竹梨割車切、はらり〳〵と薙倒す。徳兵衛が捕繩は、擔げて來る路錢の貫ざし、手繰て向ふへ立廻り、徳兵衛「ヤア卑怯なり九郎兵衛、とても逼れぬ身の大罪、尋常に繩かゝれ」と、高聲に呼はれば、九郎「ホヽ徳兵衛か逢たかつた。何かの樣子は皆聞いた。コリヤ何にも云はぬ、禮もいはぬ。サヽならば隨分捕つて見よ」徳兵衛「ヲ捕つて見しよ、こりや捕つた」と貫さし肩へ打かけて、落ちよ逼げよと突やり捩ぢ合ふ屋根の上、踏ぬくばかりめり〳〵〳〵。どつこいさせぬ、こりやさせぬと、抜身を取つたり取られたり。下には捕手が取りまいて、落ちば括らん十手早繩、一足突きやり二足歩み、逼れば摑んで引戻し、又駈け行くも七足八足、十足の貫ざし首に懸けさせ、せり合ひ行くも角屋敷、横町こして隣町、下は隱居の座敷前人なき所へ、「コリヤ爰で、捕つたはやい」と九郎兵衛を、おだれの上より突落し、徳兵衛「コリヤ〳〵落付く所は備中の玉島合點か」「合點ぢや過分」と九郎兵衛は、飛ぶが如くに逼れゆく。

「合點々々」と釣船は、親子の者を引連れて、奥へ行く間に程なく、所の代官捕手の大勢ばら〳〵と亂れ入り、代官「九郎兵衛はいづくに居る、舅茂平次を殺したる科明白に顯れたり、是へ出よ」と呼はつたり。德兵衛やがて指出で、德兵衛「コハ思ひよらぬ仰。夫には何ぞ慥な證據」代官「ヤアぬかすまい、其節泥の中に、山形に丸印の雪踏片足殘り有つたを、段々詮議をすれば、九郎兵衛が雪踏なるよし、遁れぬ所是へ出せ」と、仰の中より、德兵衛「イヤ、其印は私迚も斯くの通り」と脱いで見せれば、代官「イヤサそればかりでない、茂平次九郎兵衛喧嘩の場所より、女を乘せたる駕籠の者、立歸るふりにて見屆けたと、只今役所へ訴へ、何と夫でも爭ふか」と退引ならぬ訴人には、言句も出でず赤面しながら、德兵衛「さほど慥な證據御座れば、九郎兵衛は科人、しかし荒立て中々お手に廻りますまい。私に仰付けられませうならば、騙し捕に捕へて上ませう。夫ともお疑ひあらば、御勝手次第」と言放せば、代官「ヲ聞及んだる强力者迂濶には踏込れず、其方も俱々にお上の奉公働け」と、云付けて奥に目を付け、代官「ヤア裏道へ行くが慥に九郎兵衛、それ逃すな」と大勢が、捕つた〳〵と亂れ入る。ハット德兵衛見やる中、三ぶは妻子を引抱へ、走出で、三ぶ「モウ叶はぬ、若し此市松を擒にしられては、氣が遲れて九郎兵衛が思ふ樣に働きなるまい、親子の者を何方へぞ預けて來る中跡を賴む」「合點ぢや、ござれ」と三人が、見送る中に

くよく腹の立つ事が在つての事と思へども、情ないはお上の咎、今日も御前でお代官様が、コリヤ氣遣するな、今の間に詮議仕出して下手人を、取つてやるぞと仰しやつた、其時の私が悲しさ、泣いてばつかり居たればの、お町衆が腰押して、ソレ有難いとお禮申せ、お禮申せとせり立てられ、連添ふ夫を殺すと有るを、有難う御ざりまするると、云つた時の其苦さ、死れる物なら其場で直に、「死たかつた」とせき上げて、歎けば立聞く九郎兵衛が、胸に磐石熱鐵を呑むよりつらき血の涙、妻の心、三ぶが情、徳兵衛が實氣をも、聞いて遙に手を合せ、泣いて禮いふばかりなり。盡ぬ歎と三ぶは手を取り、三ぶ「此方が此家に居ては夫婦の緣の切れぬも同前、萬一の時言譯も喧ましい、兎角九郎兵衛が親殺しにならぬ樣、夫に名殘も惜かろけれど、俺が所へサアござれ」と、引立られておかちは猶、しやくり上げ〳〵、歎けば倶に市松が、市松「母樣どこへも行く事厭。惡い事もしますまい。父樣と一所に内に居て下され」と、縋れば思はず聲上げて、わつとばかりに取亂す。三ぶも徳兵衛も諸共に、「ヲヽ道理ぢや〳〵道理々々」と泣沈む。罪科遁れぬ天の網、四方を取卷く人聲足音。徳兵衛はつと三ぶも恟り、三ぶ「コリヤ泣いて居る所でない。アレ〳〵捕手と見えて大勢の人聲、まづ九郎兵衛を落さうか、裏表を閉うか」と、騷ぎ廻れば女房も、市松連れて氣もそゞろ。徳兵衛思案し、徳兵衛「暫の間隙どらん、其間に早う落したく〳〵」

れ、徳兵衛も打萎れ、暫し詞もなかりしが、思ひ合つたか三人が、ぢつと顔上げあたりを眺め、三ぶがそろ〳〵立寄る戸口、表におかぢは涙聲、おかぢ「ナウ三ぶ様、徳兵衛様、お前方の言はんす通りに、連合を騙し暇の狀を取つたれば、舅は親、九郎兵衛殿は親殺しに成りはせぬか」と、どうと伏し前後不覺に取亂す。三ぶもせきくる涙を押へ、三ぶ「舅は親、聟は子、親殺しに成つた時は、市松と此方が竹鋸でひかねばならぬ、それが悲しいばつかりに、徳兵衛に不義しかけさせ、俺も倶々口叩き、暇の狀を書かしました。此上に捕へられ殺さるとも一思ひ、他人同士の喧嘩に成つて、苦しい死はせぬではあろが、今日や顯れ捕へに來るか、明日や縄目に及ぶかと、案じて夜の目も逢ひませぬ。こんな氣ではなかつたが、エヽ年寄りたれば心まで、たゞの親父に成りました」と、しやくりあぐれば徳兵衛も、徳兵衛「何卒備中へ連れて行くが、明して言はゞ去狀も、相談づくで書かさうと、思うて問へど根深に隱す、戰法書きて云合せた通り、心に思はぬ不義徒、さぞ腹が立と、憎からう、如何した緣か兄弟より、親うしてたもつた人に、人でなしと思はるゝ、おれも因果、内儀も因果、因果同士の寄集り」おかぢ「成程さうでござんすとも、取分け女子は去れまい、隙取るまいとする筈を、愛憎づかしは九郎兵衛殿、皆こなさんの爲ぢやぞや。コレ市松もよう聞いてたも、わしは親を殺されても、憎いとも聞えぬとも思ふ心は微塵もない、よ

さぬ様に内證で、さらりつと隙やつて仕舞ふが、大極上々箱入の思案といふ。元より不義が有つたではなし、口先の戯談、それを云立て討果すは、彼極々悪い下の下の思案。そこを思うて此出入貰ひに出た。サア俺にたも〱、白髪にたも」と一向に、貰ひかけられ九郎兵衛も、思ひ廻せば我身にも、大事かゝへて是式に、命を果す様なしと、傍に立つて硯箱、さら〱さつと書認め、九郎「コレ三ぶ殿、此方を立て何にも云はぬ、夫渡して下され」と書いた一通投付けて、一間へこそは入りにけり。女房取上げ開き見て、おかち「ヤアこりや去状暇の状」はつと計りに泣き沈む。三ぶは突立ち、三ぶ「何めろ〱、覺があらうが有るまいが、此家に置れず立つた〱」と、引立られて「ナウ悲や、せめて別に市松に、一目合せて下さんせ、市松何處にぢや市松」と呼ぶ聲慕ひ走來る。「ヤア面倒な」と突退け〱、三ぶ「一寸には此三ぶが相手に成つて存分云ふ。サア來いうせい」と片手におかち、片手に徳兵衛引立て、三ぶ「九郎兵衛見てか、腹癒に頬恥かゝしてまつ斯う」と、門へ投出し、跡ぴつしやり、「ナウコレ嚊様々々」と駈出る市松引捉へ、九郎「畜生の親慕ふからは、此奴が性根も見えた〱。九郎兵衛が爲には猶足手纏ひ、犬の母めと一所にうせい、父親とは縁切た」と、ともに突出し門口引閉め、三ぶ「何と九郎兵衛腹が癒たか、其代俺は草臥た、いつそ爰に寢て去の」と、我身を横にやつころり、肘を枕の一休み。表に親子は泣仆

いさせぬはこりやさせぬと、彼方を突退け此方を跳ね、してこい止たと支へたり。九郎「ヤア邪魔せまい」徳兵衛「危い〳〵、怪我せぬ中に退かれい」と、引退けても駈入り〳〵、三ぶ「コリヤ〳〵切れ、勘忍ならざ俺切れ、サア此三ぶを切れ〳〵〳〵、コリヤ〳〵切れ〳〵〳〵」と、胸打叩き膝叩き、拔身をひくとも思はねども、思ひ切つたる刃にあぐみ、枕屏風を追取つて、合せた劍の眞中を、押へて直に骸を重り、どうと坐れば二人もべつたり。九郎「コレ親仁、邪魔仕やるのは德兵衛が、肩持つ心か、サ、どうぢや〳〵」三ぶ「肩を持つも背を持つも、樣子知らぬ上の事、知つて非道に與せうか。最前よりひかへて居たも、了簡思案を見よう計、討果さうとは若い若い」九郎「ヤ女房を盜まれ男が立たうか、若うても年寄でも此方は勘忍するか」三ぶ「勘忍する共、コレ九郎兵衛、世界に勘忍のならぬといふは、腹寒いより外勘忍のならぬ事はない物ぢや、此三ぶが此年迄見來りて來た中、密夫のおこなひ樣に上中下三段有り、若いによつて知るまい知るまい。先づ其中下の了簡といふは、今其方がする樣に討果すか、重ねて置いて四つにするを、極々下の下の下の思案、何故と云へ、男らしい事をしたと云はれうとすると、盜まれた鼻毛の尻が世間へぱつと立つ、そこを思うて內證で耳を削ぎ、鼻を削ぎ、坊主にするをよい樣に思へども、是がまた第二番めの中の思案、極上々の思案と云ふは、堪忍の胸を擦つて、世間へも知ら

ぬ、疾うから俺が惚れてゐれ共、友達の義理を思ひ齒節へも出さなんだ、時節も有らう物ぢや、其方から隔る樣に成つて、今では義理も瓢簞もない、サアいつそ内儀をおれにくれるか、さもなくば胸に有る事そこへまき出せ」九郎「ホヽヽヽ、賴もしさうに云ふと思うたが、女房欲しがる根性で、樣子がさらりと知れた、欲しか女房もやらう、聞いたる大事も云つて聞かさう、見事われ聞いたり貰うたりせいよ」德兵衛「ハテ二色共に望んだ事聞いたり貰つたりせうわい」九郎「ヲやろ」德兵衛「ヲもらを」九郎「云をわい」德兵衛「聞こわい」九郎「サア」德兵衛「サアさあ來い」と、身拵する表にも、三ぶも身構まさかの時、走り込まんと控へゐる。女房おかちはは あ〳〵と、氣を揉みあせれど女業、何とせんかたなき内に、九郎兵衛は袂より、取かはしたる片袖出し、寸々に引裂けば、德兵衛も持合せ、倶に引裂き一度に投付け、德兵衛「互に固を破つたからは心は殘らぬ」九郎「ヲそれ〳〵」「サア出い」出いと搖ぎ出で、ずつと立寄り額と額、目先三寸肩先四寸、ぢつと骸を小疊に、たよんで互に膝摺合ひ、九郎「思へばちつとの間の懇で有つたなあ德兵衛」德兵衛「ヲ是迄はいかゐせわ」九郎「ソリヤ互に」德兵衛「サア貰ひかけうか、如何して貰ふ」「ヲまつ斯うして」と切りかける。丁ど受止め受流し、ぱつし〳〵と討合ふ刃音、「コレ待つて」と女房が、支へる中に三ぶは駈入り、三ぶ「コリヤ待て〳〵」と制しても、はやり切つたる二人が勢、どつこ

ウそげめが頰は見たうもない、下地の杓子に燒鐵で、革足袋の焦けた様な」おかち「デモ久しぶりでじつぽりと面白かろ」德兵衛「ムウ面白けりや何とぞ思うてか、アノ爰なすつとの皮めが」おかち「ヲ何さんす痛いわいな」德兵衛「何の痛かろ、おりや此方の綻べた所が縫うてやりたい」おかち「コレ惡い事さんすと針で突ぞ」德兵衛「アヽ危い〱、エ卑怯な男では有る」と、惡戯高じる其中に、表へは釣船の三ぶが來かゝり、内よりは夫が出かけて見る共知らず、德兵衛「有りやうは九郎兵衛を下へ下した後での事と思うたが圖へいかぬ、ソレ戎島で頼んだ時の約束」おかち「サア其時はそう思うたけれど」「けれどで濟むか」と抱付くを、九郎兵衛飛出で取つて引退け、女房が持つたる帷子捩取つて、どうど打付け中にすつくり、ハットおかちは氣も上り、德兵衛はうぢ〱もぢもぢ、そつと帷子引取つて、著る中もまだへらず口、德兵衛「アヽ去んで吳りよ〱、大阪に居たとて花實の咲く事も有るまい、アヽ去んで女房の顏なと見て樂しまうはい。エヽ疾うに船に乗る物を、あの鈍臭い、綻び一つ縫うて貰うて帶解いた、俺が著る物俺がでに、俺が著るから俺次第ぢや」と、滅多無上に帶引廻し、「船が遲く成る、去んでくれう」と、行かんとするを、九郎「コリヤ待て德兵衛」とつくりと帶しめて、そこへ直れ」と聲かけられ、行くも行かれぬ命の際、破れかぶれと性根を据ゑ、德兵衛「何ぢや用が有るか九郎兵衛、内儀との事ならぐづ〱云ふに及ば

に、恨の涙はら〳〵と、保ち兼ねたる殊勝さよ。九郎兵衛も身の大事、麁忽にも明されず、指俯むいて居たりしが、九郎「段々の志、悪うは受けぬ過分な〳〵。さう言やれば其雪踏が、悪い所に有つた物でがなあろ」徳兵衛「マアよう思うて見や、泣くと喰はうと云ふ子はあり女房は若し、身を仕舞ふ様な事仕出してよい物かいの、サアそこが有るによつて、身に引受ける覺悟の雪踏」九郎「サア引受けさして見て居るやうな、九郎兵衛でもないわいの。元より身に覺のない事、必ず氣遣せずと、もう船も出る時分、早う下つて磯殿の事世話してたも、夫が眞の命を貰うた同前」徳兵衛「スリヤ如何言うても明して云はぬの」九郎「ハテ何にも言ふ事はないてや、日のたけぬ中早う行きや、俺も見さした夢見る」と、入らんとするを思ひがけなく、「九郎兵衛取つた」と聲かくる、はつと目を据ゑ見廻し、九郎「徳兵衛何ぢや、何に取つた」徳兵衛「イヤ今爰で蚤を取つた」九郎「ハテ仰山な」徳兵衛「コレ見や〳〵、蚤と云ふ物は愚な物ぢや、忽ち命を取らるゝ事を知らいで骸の内を、ナウコレ内を得放れぬ、なんぼ飛ぶ程の術を得ても、天下の息のかゝつた此指で、ドウ押へられては叶はぬ〳〵。捉へられぬ内に此蚤めも、高飛し居つたらよかつたに、ナウ九郎兵衛」何を云ふやらきよろ〳〵と、九郎「其蚤もぢつと縫目の内に居れば、捉へられる事もない、なま中にうじついて飛びあるく故押へられた、夫も又其蚤に、コレ此劒の様な

踏ぢやによつて、下へ行きやらぬかといふ事」九郎「ムウ夫が又俺が雪踏なれば、何で下へ行く事ぞ」九郎「イヤコレ九郎兵衛、此雪踏を味な所で拾つたの、長町裏の畠中で。ぢやによつて下へ行きやらいでといふ事」九郎「ムウイヤ其雪踏は、此中練物見ようと思ひ、小間物屋店へ上つたれば、片足犬に取られた、定めて夫を畠中へ銜へて行た物であろ、仰々しい、何ぞ事も有る樣に」と、けんもほろゝに顔色も、人を殺せし體もなし。徳兵衛は目も潤み、流るゝ汗と倶に拭き取り、徳兵衛「へエヽ聞えぬぞや九郎兵衛、そなたとは住吉で腕引く代ぢや、片腕ぢやと取交した片袖、おりや大事にかけて持つて居るぞや。あり樣は雜巾になしたであろ。これまで兄弟同前に心底明す友達中、何故物を隱してたもる。其方には市松といふ子も有る、しかも幼け盛、伯父樣々々と云へば、追從でない俺も不便な、もしもの事が有つたらば、女房子迄引出され、どんな憂き目に逢ふも知れず、其方一人の命は三人にかゝると思ひ、コレこれを見や、俺が雪踏も山形に丸印、片足見えぬがお上へまはり詮議の種に成つた時、この徳兵衛でござると、身に引受ける覺悟。これ程までに思ふ俺に、隱し包みは曲がない、何故明して俱々に、相談してたもらぬ、但しこの徳兵衛が性根魂が氣遣なら、肥叩くと思うて言はぬか、そりやあんまり聞えぬ。おれも男ぢや〳〵〳〵〳〵」と、肩振いかめ肱張つて、親の時さへ泣かぬ目

之丞殿を預けて遣たれば見舞がてら下つても大事有るまい」九郎「ホ顔に燒鐵迄當てて預つて去んだ内儀、覺束なさうに見舞にも行かれまい」徳兵衛「コレそりや大事ない」九郎「イヤ殊に俺は海船は嫌ぢや、板一枚下は地獄、今年は取分け川船さへ怪我するに、海上は俺厭ぢや怖い」徳兵衛「ムウスリヤあり樣は海船が怖いか、アノ海船が、ハヽヽヽヽこりや可笑しい、イヤこりや怖かろ、道理ぢや〳〵、ハテ人といふ物は見かけによらぬ、命は惜い物ぢやの」九郎「ヲ取分け此九郎兵衛は男ぢやによつて命が惜い、大恩受けた兵太夫殿が、よそながら頼むと云はれた一言、磯之丞殿の歸參が叶ひ、親御の手へ渡す迄は大事の命」徳兵衛「サア其大事の命ぢやによつて、彼の大病の起らぬ中に、下りやらぬかと云ふ事、ナウお内儀」おかち「さうで御ざんすとも、主が煩はれますと、私や市松が狼狽へまする、こりや徳兵衛樣の云はんす通りに」「何ぬかす、大阪を放れては和泉の樣子、磯之丞殿の歸參の程が知れぬ、女の出過ぎたすつこんでけつかれ」と、呵飛せば徳兵衛引取り、徳兵衛「アコレお内儀お茶一つ下され」と茶で紛かす主の機嫌、アイと返事を立つしほの、常の辛いを呑込んで、勝手へこそは汲みに行く。徳兵衛重ねてあたりを眺め、舅が最期の場に有りし、雪踏片足腰より出し、徳兵衛「コレ此山形に丸印の雪踏、見知りが有るか」と指出す。ぎよつとせしが、九郎「ヲ是は俺が雪踏、夫が又何とぞしたか」徳兵衛「サア是がそなたの雪

意趣有る者と云へば、大阪中に残る者がない、すりや知れぬ筈、定めて其事で九郎兵衛も心遣で御ざらう」おかち「推量して下さんせ、ぬしもほつとしたかして、寝て計居られます、どうで切つた者は知れまいし、いとしや犬死で御ざんしよ」徳兵衛「アレ又泣かしやる、犬死でも馬死でも時刻ぢや〳〵、モウあきらめたがよいわいの。俺も九郎兵衛にちよつと逢うて行きたい物ぢやが」おかち「ほんに起しませう」徳兵衛「アコレもうよござるは、可愛さうによう寝て居る物を」おかち「イヤ又跡で呵られましよ、ソレ市松起しましや」と、いふに立寄り屏風押明け、市松「コレ父様伯父様が逢ひに來てぢや、コレナウこれなう」と、搖り起され目を擦り〳〵、九郎「伯父様とは、徳兵衛か、旅立の装で船にでも乗るのか」徳兵衛「ハレ起さずと置きはせいで、ヤ此間の取込みで嘸草臥で有らう」九郎「推量してたも、舅太夫が惡死をしられた故、アヽフ、身中がぶき〳〵いふ程草臥た」徳兵衛「ヲ道理〳〵、イヤモウ主の大い氣扱ひわしにかゝつて」九郎「ハテそりや其筈の事、舅は親九郎兵衛が世話仕内の事」徳兵衛「したがそんな事は大う氣が揉る物ぢや、何と氣休めにいつそ俺と連立つて下へ行きやらぬか」九郎「イヤ何のいの」徳兵衛「ハテさうでないぞや、そんなもやもやした事の有つた上では、必ず大煩が出る物、俺が云ふ様におぢや下へ行こ」九郎「何をやくたいもない、備中三界何しに行く物で」徳兵衛「イヤまんざら用がないでも有るまい、俺が女房に磯

は、そなた計を置いて何處ぞへぞござつたか、よもやさうでも有るまいが、留守かや」市松「イヤあの屏風の内に父様は寢てぢや、俺は敵討の芝居事してゐたれば、彼奴等が親の敵というて擲居つたによつて、祖父様の敵と云つて擲返した。母様祖父様を切つた奴が知れたら、俺が殺してやるぞや」と、云ふを寢て居る九郎兵衛は、聞くに付けても胸塞り、是非も涙にくれ居たる。おかちは急き來る涙を押へ、おかち「そなたさへ夫程に祖父様の事思やるに、私は常から愛想が盡き、疊の上では、エ死にはさつしやるまい、ひよんな死をする人と思うた故、切つた奴を金輪際共思はなんだ、思へば私は不孝な者、惡い人でも親は親、澤山さうに思つたのが、今では悔しい悲しいと、口說き涙の折からに、心の合うた友烏、なきに立寄る一寸德兵衛、肩に貫錢引懸けて、德兵衛「九郎兵衛内にか、玉島へ下る故、暇乞にちよつと來た」と、菅笠取つて内に入る。おかちはちやつと泣顏隱し、おかち「ヲこりや今下らんすか、暑い時分に大儀な事や、したが日和續きもよござんしよ」德兵衛「コレ〳〵お辰様へよう心得て下さんせ」おかち「イヤモウ言傳受取つても死人同前、ついに云うた事がない」德兵衛「ヤ其死人で思ひ出した、親仁を殺した者は未だ知れぬか」おかち「サお上にも御詮議が強いけれど、まだ知れませぬ」德兵衛「さうであろ〳〵、あれが殺して物を取つたといふか、其晩に大きな出入でも有つたら詮議の手懸りも有らう、あの親父に

第八　友達に心を碎いて石割雪駄の合印

日數さへ早一七日、田島町魚屋商賣舗の有る、主は團七九郎兵衛とて、昔と今の名を合せ、手強き業も五人前、高津祭の其夜より、内へ歸りてゆつくりと、何知らぬ顏せぬふりに、人は夫ぞと氣も付かず、油斷枕の高鼾、子は友達と惡あがき、切つつ削つも親仁に似て、負けぬ性根ぞ逞しき。妻のおかちは父親の、敵なき最期常からの、心ゆるとは云ひながら、悲しさ餘り今日も亦、墓參して立歸る。子供遊びのわやく同士、「アレ市松の擲きやつた、私も打たれた切られた」と、泣く〳〵表へ駈出づれば、おかちはやがて抱留め、おかち「又こりや市松がせぶらかしたか、堪忍仕や〳〵、ヱ、憎い奴ぢやの、私が擲返してやろ」と宥めすかせば子供共、「此方の町へ來をつたら、寄つてかゝつて縛つてやろ」と、口々云ひて歸るのも、物が知らすか氣にかゝる。汝其口止めてやろと、竹引さげて市松が、追駈け出づるをおかちは押止め、おかち「ヤレこな子よ杖棒持つて、あの子供に怪我さしたら何とする、本に〳〵親に似ぬ子は鬼子と、九郎兵衛殿の一徹によう似たな、祖父様が七日後に、長町裏で殺され、其切人を御詮議、意趣有る者の覺はないかと、嗅は毎日御前へ呼ばれ、心も心ならぬに、如何に子供ぢやと云つてあんまりな、そしてマア父樣

ア、慮外ながら、親に向つて白眼蹴潰すぞよ。無念なか口惜いか。ムヽヽ、泣くか。可愛やなア、擦り歪めてやろう。此雪駄の皮喰へと、躙付けられ歯ぎしみ歯ぎり、透し眺めて、義平次「おのりや、脇指さいてびこつくか、面白い、斬られう。どこへ、跡へ寄りをる」と、付廻して引捉へ、「見事此赤鰯でやつて見るか」と持添へ引抜き、義平次「サア是で切れ〳〵、サア〳〵切らぬかやい」九郎「何の私がおまへを」義平次「イヤ切る氣で有らう〳〵。切られう、切つて貰ふ。一寸切つたら一尺の竹鋸で挽返す。サア切つて見よ、突いて見よ」と、指付け突付け捩取らん〳〵とせり合ふ中、思はず舅が耳の根ずつかり、義平次「ヤレ人殺しよ親殺し」と、叫る聲に折よくも、祇園囃子の大鼓鉦、九郎兵衛は殺す氣もないに、因果と舅が大聲、切つた〳〵と人寄の、聲を留んと又ざつぷり、四邊傍を見廻して、うろ付く中に摑み付き、横に拂へば又すつぱり、人は來んと氣もそゞろ、松の内行く挑燈の、明が厭さにどつさりの、音は囃に紛れても、紛れぬ命の終際、うんと歸れば是非なくも、取つて抑へて止めの刃、ぐつとさしこむ其内に、間ぢかく聞える御輿の太鼓、死骸を池へ投込み〳〵、血汐を流す桔槹、汲む水則ち三途八難、我身にかかる罪咎を、洗ひ落せど濁り井の、水より清き夏神樂、ちやうさようさの御輿の俄、是幸と紛れ込み、遁出したる千歳樂、萬歳樂や極樂橋、命の瀬戸の札の辻、八町目へとぞ紛れ行く。

ヤならぬ」「サア素手でお詫も申しますまい。友達共が頼母子を致してくれまして、爰に三十兩ござりますれば、是をお前へ渡しましよ、身の代に取つたと思召し、琴浦殿を三ぶが方へ戻して下され、外へやつては此九郎兵衛が顔がどうも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢや親仁様、一生の御無心。申し〳〵コレ申し」と、手引き袖引き膝を突き、無念涙の男泣、親といふ字は是非もなや。義平次も三十兩當分取に少し柔ぎ、義平次「琴浦をおつちへ渡せば百兩が物慥に有れ共、かかりやつながる娘の緣、たゞやつたと思ひ三十兩で戻してやろ。ヤコレ駕籠の衆、今乘つて來た所迄駕籠を戻して、駕籠代も存分先で取れい」と、惡氣付くれば、「こんな時、よい强請取、サアこい」と、競ひ勇みの駕籠の者、來た道へ又荷ひ行く。義平次「サア約束の三十兩受取ろ」渡せの催促に、九郎「イヤ其金爰にはござりませぬ、宿へ歸つて才覺と、立たんとするを飛びかゝり、かんづか摑んで引仆し、義平次「エ、腹の立つ〳〵〳〵〳〵。うま〳〵と一ぱい」九郎「何の申し左樣ではござりませぬ、内へ歸れば心當が、まあ〳〵爰を放して」「ヤアどこへ〳〵。うぬが樣な賣僧めは斯うして腹癒ようか、イヤかうしてくれうか」と、捻廻し引廻し、踏だり蹴たり擧句には、砂に摺付け石に打付け、引廻し〳〵引廻されても、手向ひのならぬも無念さ口惜さ、怺へかねれば、義平次「其面つき何ぢや、肩肘張つて其眼付何ぢや。コリヤヤイ、舅は親、

も有るまい。コレ駕籠の衆、大儀ながら其かご跡へ戻して」と舁よさすれば、義平次「コリヤ待て九郎兵衛、嗜む心が有るまい見下げ果てたとは忝い。其愛憎づかしを待つて居たはい。去年以來おれが娘を女房にして、慰み者にしてゐる、サア揚代囉ふ。ヤイ、爰な恩知らずめ。儕はく元宿なし團七と云うて粋方仲間の小あるき、貰喰ひで暮して居つたを引上げて、堺の濱で魚賣させ、まだ其上に娘のおかちをちよくり、市松と云ふ迄へり出さし居つた。月々の宛行取がよさに、目を眠つて居る中、乳守の町で喧嘩仕出し、和泉の牢へかまつて、百日の上女房子を誰が養うたと思ふ」九郎「サア夫は皆其元樣のお世話」「ぬかすな、せめて其入目を入合はさうと思うて、儲け事にかゝれば、儕が道具屋の内に居つて、ようぼく上さしたなア」九郎「イヤ夫は其場のつゐ」義平次「まだぬかすか、今日琴浦をちよろ魔化して來たれば、惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金にする氣」九郎「イヤア夫では顔が」「立たぬか、ア、長々頤を養うてゐた此、此顔が立たぬか。但し此方の此、此、此頬桁が立たぬか」と、立蹴にはつたと蹴られても、舅は親と無念を堪へ、歯を喰しばり居たりしが、兎角詫るに若くはなしと、揉手の上に膝折屈め、九郎「段々の仰せ、一つとして返す詞も御ざりませぬ。長々のお世話の上、又しては金儲を妨げ、お腹の立つは御尤、もうふつつりとお邪魔は致しますまい。が、あの女中の事計は」義平次「イ

駕籠まで持たして迎にお出」九郎「ヤア〳〵アノ、此九郎兵衛が言ふというて、舅の親仁が連れて去んだか」おつぎ「チイノ」九郎「シテ〳〵、其駕籠は何方へ」おつぎ「たしか南の方へ」「それやつては」と駈け出すを、おつぎ「コレ待つた氣づかひな、迎に來た事おまへは知らずか」「知つた知らぬは跡での事」おつぎ「イヤ、それ聞かぬ内は」「面倒な」と蹴飛し、舅の跡を九郎兵衛は、息をはかりに 三重 追ひかくる。

第七　舅が欲を止兼た紅粉紋の色入帷子

神と佛を荷ひ物、囃し立てたる下寺町、高津宵宮の賑ひに、紛て急ぐ舅義平次、駕籠の簾を細引で、くる〳〵巻の俄網、追立て行くを跡よりも、チヽイ呼かけ飛來る、聟の九郎兵衛、南無三寳と横切れに、畔道行けば追ひつゞき、駕籠の棒掴んで畠中、どうと打据ゑどつかと坐り、ほつと一息つきあへず、九郎「コレ申し親仁樣、此女中は知つての通り、恩ある方からの預人、夫を此方が何處へ連れてござる。こりやてつきりと惡者に頼まれ、金にする氣で有らうが、さう爲られては此九郎兵衛が顔が立たぬ、惡いぞへ〳〵。此中も内本町の道具屋で田舍侍に出立ち、贋香爐を以て五十兩の衒事、へエ、見下げ果てた、重ねて屹度と云うてからが、嗜む心

「一時には目立つ故、猶以て連れては行かれぬ、兎角あの衆の云ふ様に」と、宥めて別れ女郎は駕籠、磯とお辰は船場へと、表へ出れば三ぶが女房、おつぎ「義平次様渡したぞ。お二人様も御無事で」と、暇乞も挨拶も、互の思ひ暮過ぎて、又の便を松屋町、南と北へ引別れ、足早にこそ歩み行く。宮には喧嘩々々と騒ぐ中、若い者ども聲々に、徳兵衛「親仁殿もうよい〳〵。高が迯げる侍を、相手にするはおとなげない、マア去なれい、戻られ」と、徳兵衛九郎兵衛諸共に、三ぶを宥めて歸る店先、女房立出て、おつぎ「コレ皆様、出入の濟口どうぢや〳〵。こちのがひけではごんせぬか。年寄だけで氣遣な」と、問へば徳兵衛、徳兵衛「いかな〳〵、昔に變らぬ達者な和郎、八と權とを蓮池へ、何の苦も無うどんぶりいはせ、侍はふけつた〳〵」おつぎ「ヲヽそんなら入らんせ、祝うてわつと酒にせう」三ぶ「コリヤ女房、氣が付いた、徳兵衛には取分けて、内儀の事を咄さにやならぬ、九郎兵衛にも安堵さす」「サアまあ奥へ」と先に立つ。徳兵衛「どりや内儀の御馳走を喰べて去のか」と、徳兵衛は、伴ひ一間へ入りにける。跡に九郎兵衛立止り、九郎「お内儀、琴浦殿や磯殿が見えぬが、何處へぞ行かれたか」おつぎ「さればいな、どうやらそぶ〳〵いうによつて、お辰様に預け、磯様は備中へやる、琴浦様はたつた今、お前の方から迎に來た」九郎「ソリヤ誰が」おつぎ「ハテ親仁様が見えて、九郎兵衛が云ひまする、四五日戻して下されと、

左、摑付く腕ぐつと捻上げ、三ぶ「嗅、侍に逢つて來う」「いてごんせ」とやる女房、行く男より氣の強さ、外へ押出し門ぴつしやり、三ぶは二人を引立てて、宮の内へと、連れて行く。奥は暫しの別ぞと、琴浦に呑込ませ、酒汲みかはす折からに、表へ來るは九郎兵衛が舅三河屋の義平次が、駕籠釣して戸をこと〳〵、「誰ぢや」と云うて開けに出る。義平次「ホ三ぶ殿の御内室此中は逢ひませぬ、いつ見てもまめさうな」おつぎ「おまへも達者で。珍らしい、何と思うて」義平次「サ、年寄ると子につかはれます、九郎兵衛が云ふには、此中から悪者共が頼まれて、琴浦殿を盗まんと念がける、定めて三ぶも心づかひ、四五日此方へ取込んで置いたら、燈臺下暗しと氣が付くまい、女夫の衆の氣休めに、迎うて來いと云うて、駕籠までおこしました。是まではいかい世話」と、取繕ろへば、おつぎ「ナンノお禮に及ぶ事、今も今とていけず連が、わつぱさつぱ、連合は其出入に行かれました、いかさま二三日此家をあらけ、彼奴に鼻あかすも魂膽、九郎兵衛様も其胸で、俄の迎でござんせう。舅御のお前に渡すは慥奥にぢや、呼んで來ませう」と、つい立入れば義平次は、「駕籠の衆待つて貰はう」と、門につつぼり人顔の、見えぬを首尾と待ち居たり。奥は盃取納め、伴ひ出でて琴浦が、琴浦「そんなら私も三ぶ様や、九郎兵衛様に譯云うて、跡から行くが合點か」お辰「ハテ、そりや其時私が又、迎に來る」と辰が挨拶。磯之丞も倶々に、

侍といふは、大鳥佐賀右衛門といふわろであらうがな」「マアそんなもの」三ぶ「コリヤ、去んで云はふには、琴浦には磯之丞と云うて、歴とした男がござると、去んで云うてくれ」檻「コナ親仁は、俺らを子供の樣に思ふさうな」「ヲ俺が目からはいなごの樣に思ふ」「ドリヤ、そんなら摑んで去のか」と、立上つて兩人が、奥をめがけ駈入る所に、襖さつと押開け脇指提て三ぶが女房、おつぎ「コレ此方の人、私や先きにから聞いて居たが、こな樣もう堪忍がなるまいがの」三ぶ「嬶、五六年願うた後生を無にして、いつそ切つて仕舞ざなるまい」おつぎ「ヲ、そんな事もよござんしよ、が、あんまり夫も不便な事でもある」三ぶ「イヤ、こんな時切らざ切る時もあるまい」と、云ふに二人はうぢ／＼きよろ／＼、性根を据ゑて身を固め、檻「面白い、切られう。脚腰立たぬ老耄、切はづさして臺座後光、しまうてくれう」と、兩方より、「サア切れ／＼」とせがみ立て、入身になつて待かくれば、三ぶはすつくり立身になり、「嬶、モウ是非がない、切つてしまを」おつぎ「ヤ夫は」三ぶ「イヤ、俺が切るは此數珠」と、ふつつり切つて後へ投げ、三ぶ「サア是からが元の釣船、汝らに刃物がいらうか」と、はつし／＼と踏倒し、尻ひつからげ、三ぶ「ドレ其脇指」おつぎ「ハテもう刃物は入らぬでないか」「イヤ、此がらくたは爪にもたらぬ、根ざしの侍めをばらして仕舞ふ。男の丸腰も見苦しい」と、大たら腰にぼつ込む所を、どつこいさうはと右

た事、ヲ恥し」と袖覆ふ。惜しや盛を散せしと、三ぶが女房はいたはりて、一間へこそは連れて行く。早暮近く生なれの、立てるでもなし横に出る、男仲間のはね出され、こつぱの權なまの八、獅子に雇はれ赤頭、せんまの形を其儘に、權「三ぶ殿内にか、宿にか」と、つき聲やり聲、躙り込む。三ぶ「ホこりや二人ながら祭の形、まだ仕舞はずか、呑みに來たのか。今看經しかけて、數珠の手が放されぬ、そこらに樽があろ、一ぱいせい。南無阿彌陀〳〵。膳棚に鮹があろぞ。南無阿彌陀佛〳〵、それを肴」と口ではぶつ〳〵、爪繰る數珠と挨拶を、取交ぜ後生佛性。此方は牛頭馬頭惡鬼株、膝打叩いて、權「八よ、親佛に今のを言をかい」「ハテ、ぶつ〳〵を聞いて居よより、言出せ〳〵」權「コレ三ぶ殿、二人が連立つてきたは、こなたに貰ふ物があつてきた、花が欲しい花下はれ」三ぶ「ヤア〳〵何ぢや、花をくれい。ヘヱ扨は留守の間へだんじりでも持つてきたな」權「ヲ獅子持つて來て、美しい花を見付けて置いた。さる侍に賴まれ、其花を貰ひに來た。八よ、夫々つい摑んで來て進じやうと云うて、お侍を宮の內に待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど、白髮の生えた人をさうもなるまい。但しこみずいうて見る氣か、金にでもする氣か」と、しかける喧嘩を數珠で紛し、三ぶ「ヱ若い者といふものは、づは〳〵と、嗜め〳〵。わいらは住吉で初めて逢うて、夫からの出合、もう根性が直つたと思うたが、フム其

文、コレ此數珠にかけ、預けたい〳〵、こなたの根性を見据たによつて。が萬々が一、德兵衛が立たぬ事が出來ると、俺は勿論、九郎兵衛までが男が廢る、といふ事はあるまいけれど、外といふ字で預けにくい。マアさう思うて下あれ」と、事を分けたる一言に、連添ふ女房も理に伏し、お辰は元より詞も出ず、指し俯むいて居たりしが、何思ひけん立直り、火鉢にかけし鐵橋の、火になつたのを押取つて、我と我が手に我が顔へ、べつたり當る燒鐵に、うんとばかりに反返る。是は何故何事と、夫婦は慌て抱かゝへ、薬よ水よといたはれば、正氣付きしかむつくと起き、お辰「なんと三ぶ様、此顔でも分別の外といふ字の色氣があらうかな」三ぶ「出來たお内儀、磯之丞殿事を頼みます」お辰「スリャ預けて下さんすか」三ぶ「唐までなりとつれ立つて下され」お辰「アヽ嬉しうござんす、それで私も立つた。磯之丞様の親御兵太夫様は、備中の玉島が御生國、德兵衛殿の爲にも、私が爲にも親方筋、其御子息様を預からいではナ、連合の男も立たず、わしも主へ立たぬによつて、親の產付けた滿足な顔へ、疵付けて預る心、推量して下さんせ」と、語るを聞いてお次も涙、三ぶも涙の横手を打ち、三ぶ「ハテ德兵衛は頼もしい女房を持つたなア。なぜ男には生れてこぬぞ、あつたら物を落してきた。ソレ女房共、奥へ伴ひ磯殿にも引合せ、備中へ下す心拵へ。お内儀、疵は痛みはしませぬか」お辰「何のいな、我が手にし

配、頼んでよけりや俺が頼む、磯之丞をお辰殿へ預けては、此三ぶが顔が立たぬ」おつぎ「サア、そこを外へ預けるがあなたのお爲」三ぶ「マタぬかす、男の一分捨てさすか、面汚さすか、癡呆め」と、呵飛されもぢ／＼うじ／＼。徳兵衛女房聞咎め、お辰「イヤ三ぶ樣、無理に頼まれたうて云うではないが、私が其人預れば、お前の男の立たぬは如何して、但し女でまさかの時、役に立たぬと見据てか、まんざらひぢりかすりを喰ふ樣な、アイ女子でもござんせぬ。一旦頼むの頼まれたのと言うたからは、三日でも預からねば、私も立たぬぞへ。立てて下んせ親仁さん」と、辛い女房の詞の山椒、茶びんあたまを動かする。三ぶ「イヤ如何言うても預けては、此三ぶが男が立たぬ」お辰「サア、其立たぬ譯聞かう。如何樣夫には樣子があろ、そりやマア如何して立ちませぬ」三ぶ「ホ立たぬといふ譯は、内儀の顔に色氣が有る故。徳兵衛が思はふにも、三ぶといふ者は能い年をして、不遠慮な、身に火の付いたが切ないとて、若い女房に若い男を、預けてやつたは聞えぬと、思ひはせまいか、又思ふまいものでもない。あながち此方に限つて、さうした事はあるまいけれど、分別の外と云ふ事がある、によつて又疑ふまいものでもない、が、ない事ぢや／＼、ない事ぢやによつて、結句戸が立てられぬ。腹立つまいぞや／＼、いつそ此方の顔が歪んであるか、半分削てもあつたら、徳兵衛もなんとも思ふまい、又世間も濟む、俺や誓

は結構な事」三ぶ「イヤお内儀、徳兵衛も同道で下られますか」お辰「サイナア、女房の思ふ樣にもない、聞いて下んせ。お國の咎も赦んで、迎に來たを、ヤレ嬉しやといふ氣もなうて、マア四五日も跡から下ろ、先へくだれとひつしよなさ、未練さうに付はつても居られず、是非なう先へ下ります」と、咄の内に三ぶが女房、思ひ付いたる一つの頼、云出すしほに茶を指出し、三ぶ「イヤ申しお辰樣、馴々しいがお前へちつと、お頼み申したい事がござんす、何と私に頼まれて下んすまいか」とうらどへば、立直つて襟かき合せ、お辰「玉島の田舍に住んでも一寸徳兵衛女房辰でござんす、頼むとあるを一寸でも、跡へ寄らぬが夫のしにせ、引きはせまい、マア云うて見さんせ」おつぎ「マア忝い、お禮から申します。定めて徳兵衛樣の咄で聞いて御ざんせう、和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫樣といふお方の御子息、磯之丞樣と云ふが、樣子有つて町奉公なされてござつた所に、若氣の至りで人を、マア大阪に置かれぬ首尾、今も今とて駈けさせまする相談、此お方を何卒マア」お辰「私が方へ預りました」おつぎ「アノ預つて下んすか」お辰「そこを引かぬが一寸が女房、殊に其親御の兵太夫樣へ釣てはちつとこちに由緣も有る、預つて連れまして歸りましよ」おつぎ「そんならさうして下さんせ。ア落付いた〳〵。テエ呼びましてきませう」と、立つを釣船、三ぶ「コリヤ待て女房、女賢しうて牛賣られぬと、いらざる儕が差

磯之丞「不行儀せまい、三ぶがきつと見て居やる」と、お道化をしほに二人連、手を引合ひて入りにける。燒物を燒立てて、祭進じよと立つ女房。表へ二十六七な、所目馴れぬ笠の中、そこか爰かと見廻して、女「下り荷物の世話なさんす、三ぶさんといふお方は、爰らではないかへ」と、問ふ門内より、おつぎ「爰でござんす、どなたぢや」女「わしぢや」おつぎ「わしとはへ」三ぶ「ヲヽようござつた。アリヤ徳兵衛のお内儀ぢや」おつぎ「是はしたり、サアマアこちへ」と、挨拶を、馴染にして打上り、お辰「三ぶ樣には先程、九郎兵衛樣でお目にかゝり、何かのお禮を申しましたが、お前には初めて、私は備中の玉島に居りまする辰と申して、徳兵衛女房でござんする」おつぎ「コレハコレハ、よう上らんしたな」「アヽアイ、まあ連合徳兵衛殿事は、僅な科で、國を立退かれまして、和泉とやらに居られましたを、皆さん方が世話にして、しばらく大阪の住居、生付があらこましい、喧嘩といへば一番駈、肌刀指いた樣な人、定めて何角お世話がち」と、一禮云へば、おつぎ「ア他がましい何のお禮。イヤもう、あらこましいは何方にも覺の有る事、手前の人も、五六年以前までは、夫は〳〵喧嘩好でな、假初にも、ちよつと橋詰へ出て貰ふが每日每晚、夫も又直れば直るもの、今では蟲も踏殺さぬ佛性、アレあの樣に、片時も數珠を放さず、腹の立つ事があれば、念佛で消して居られます」三ぶ「嬶が云ふ通り、常住是ぢや〳〵」お辰「ハテナア、夫

恩のある人を、恨みさするはお前の業」磯之丞「いふなやい、据膳と鰒汁を、喰はぬは男の内ではない」「ソレ、其口が猶憎い」と、せり合ふ中へ主の三ぶ、數珠爪繰て門口より、三ぶ「女房共今戻つた。祭の料理出來てあるか」と、內入好きにお次もほれ〴〵、おつぎ「出來てある〳〵、誂への鯵の燒物、摺立汁に皮鱠」三ぶ「チット夫で喰へる〳〵」おつぎ「シテ、道具屋の娘女は戻して來たか」三ぶ「ハテ、人の大事の娘、勾引したと云はれて、磯殿の男が立たぬ。首くゝつた傳八めに、何もかも負せ、金の事もさらりと濟む、中買の彌市を殺した事は、彼の書置でしてやつたりと思うたが、厭な風說がある、お二人も聞かしやませ、其書置の手が、傳八が手でないと、一門共が云出し、御詮議を願ふとの噂。スリヤ磯之丞樣を、大阪の地には置かれまいと、九郎兵衞もいふ、俺も思ふ。マア當分立退かす相談、と云うて當途無しにやられもせまい、よい程なけんびき。マア端近へ出て、人に顏見せるも惡い。殊に琴浦殿は、目かける奴のある身の上、女房共も女房共、何故表へ出しまするぞ」と、呵り廻せば、おつぎ「ソレ見さんせの、榮耀らしい悋氣どころか、事によつたら二年三年、別れ〳〵にござろも知れぬ、暇乞と中直りの、汗を一度にかいて置かんせ。うじ〳〵せずと琴浦樣、連れまして行かんせ」と、粹な女房の挨拶も、よい折口と、琴浦「エ磯樣、言ふ事がたんとある。サアござんせ」と、手を取れば、ふいとふり切り、

釣船が、兩手に若木の花紅葉、打連れてこそ 三重 立歸る。

置を、死骸の傍に直し置き、「是でお前に難儀がかゝらぬ。夜明けぬ中に一時も、早う〳〵」と

第六　男の意地を立ぬいた燒鐵の女房作

賑しき、難波高津の夏神樂、練込む振込む荷込む、てうさようさの伊達提燈、門の揃へは地下町の、印を見世にいよ簾、竝ぶ家居の其中に、釣船の三ぶが内、客は內證預りの、乳守の太夫琴浦と、結び合ひたる磯之丞、見世を揚屋の祭見に、口舌仕かけて拗合ひて、炎の煙管打叩き、煙較べのひんしやんは、火皿も湯になるばかりなり。三ぶが女房は料理拵へ、火鉢にかけし燒物を、煽ぐ片手に、女房つぎ「コレ琴浦樣、もう好い加減に中直つたらよかろがの。道具やの娘お中殿とやらを、三ぶ殿が送つて行たも、悋氣辛氣な顔が厭さに、夫に何ぞや、ふしくた樣に、お前も粹の樣にもない、男に勤奉公をさしたと思たがよいわいな」と、挨拶すれば、琴浦「アノおつぎ樣の言はんす事はいの、お中殿と心中に出た淸七男、中直つたとて面白うもござんせぬ。じたい娘のある內へ、奉公にやらんした、九郞兵衛樣が聞えませぬ」磯之丞「ア、コリヤ、九郞兵衛に恨いふ氣なら、此淸七男に言へ。三ぶの世話してたもるのも、九郞兵衛の賴から」琴浦「サ、其

も欲垢煩悩、色も戀も投やつて、欲に目のない傳八、金せしめうと分別仕變へ、傳八「ハテそれ程に死にたくば、見遁さうが、よもやよう死にやさしやるまい」お中「イヤ〳〵死ぬる、冥土から此恨、清七にいはいでは、とはいふものの、刃物はなし、序に死んで見た事なければ、どう死んだがよからう、覺えてなら敎へてたも」傳八「ハテ滅相な、誰ぢやてゝ、死んで見た者何所にあろ、刃物がなくばないやうに、世間通用の首くゝり」お中「サア其首は如何して絞る、そなた何卒敎へてたも」傳八「是は迷惑、明日からは首しめの、指南の看板を出さずはなるまい。こなたは己が首くゝりの一の弟子」と、三尺手拭かゝへ帶、ひとつにしやんと引結び、傍なる枝にしつかと括り、傳八「扨是からが首しめの習ひ事、よう見やうぞや。此喉の佛樣を、斯うぐつとしめ付けて、アゝいかう術ないものぢや。此切株へ斯う上り、ひらりと飛んで見せたけれど、それでは己が堪らぬ。何と合點か〳〵」と、足を爪立て敎へるを、三ぶ後より傳八が、兩足どうと踏落せば、うんとばかりに虛空を掴み、七顚八倒目を見出し、手足を煽ち身を藻掻き、狂ひ死に死したるは、心地好くこそ見えにける。清七も走出で、清七「お中樣出來ました。工面の通り行きをつたは、己が罪己を責る天の罰」三ぶ「チゝさうとも〳〵。最前の書置に、宛名のないが是幸ひ、中買彌市を殺したを、此奴が科にする仕樣、三ぶが分別して置いた」と、清七の書

て淋しいなし」傳八「ハレわつけもない、こちとらにはせいめきめ、尋廻らしててつきりと、お中様は何所の蚊帳へぐすと入り、兩面子を見る樣にひつ付いて居さつしやろ」「イヤさういはれぬ、ことしの樣に爰かしこで、切つたの突いたのが流行る時は、上になり下になり、つかれて死んでゝあらうも知れまい。序でに茶臼も尋ねて見やう」傳八「チヽそりやよい氣の付けやう、十が九つ清七めが、伴で退たに極まつた。傳八は休んでゐる。大儀ながら尋ねてくれい」「心得太郎兵衞の、ば樣ではない娘御」と、仇口々に急ぎ行く。お中は木蔭を走り出で、お中「どこぞそこらに清七は居やらぬか、清七々々」と、尋廻るを傳八が、熊鷹眼「見付けたぞ」と鷲摑み、「なう傳八か、悲しやな。情に何卒見遁して、死なしてたも」と泣詫れど、びつく共動かさず、傳八「此方にかゝつて大勢が、らりこつぱい。夫程に死たくば、見遁してやりもせうが、エヽこなたは聞えぬぞやく、ようおれを出しぬいて、駈落さしやつた。此清七めは何所に居る」お中「されば今夜清七と、死ぬる覺悟で來たれども、俄に心が變つたやら、私を捨て胴慾な、あの人に見捨られ、片時も生きて居ぬ」と、駈出すを又抱止め、傳八「夫見てか、俺にむごう當つた罰、今から傳八がおか樣になる氣なら、旦那の手前はよしなに言はう、如何ぢやく」と懷へ無理無體。「イヤく放して殺してたも」と、云ふも聞かず手を指入れ、肌に付けたる金財布に、探り當る

通に認め置く」と、渡せば取つて押開き、提燈指寄せ、三ぶ「フウ何ぢや、書置の事、中買彌市に意趣あつて、今宵手にかけ切殺し、ハア南無阿彌陀佛〳〵、去るによつて安居にて相果つる者なり。扨は其衒めをおまへがばらして仕舞つたか。したり、夫で死ぬる覺悟ぢやまで。コリヤ尤々、したが、よう切らしやつた、後生一遍に取入つて居る此三ぶでも切らねばならぬ、アヽ切ります、誓文切る氣ぢや、が死ぬるには及ばぬ、傳「何故と言はしやれ、マア第一に彌市めは、どすごかしの大衒、殺すが世界の爲なれば、根深う切人の御詮議もあるまい。たとへあるにしてから、暫しが間、蔭をしてござれば濟む。此釣船が呑込んでからは、大船に乗つたと思うて、氣遣せまい」と頼もしき、詞に二人も安堵せり。三ぶ「アレ見さしやれ、他にも此手が流行やら、無上に人を呼びますぞや」と、いふ間にちか付く呼聲は、「慥にお中と聞える〳〵。何にもせよ此體を、見付られじ」と、提燈吹消し、三人諸共、かしこの木蔭に忍びゐる。清水の方より、「迷子のお中樣、迷娘のお中樣」と、呼び〳〵來るは道具や傳八、出入の男が手ん手に提燈、棒突散らし、淨瑠璃やら物眞似やら、身にかゝらねば半分は、雜口まじり聲々に、我も〳〵と呼立つる。傳八ほうどくはぬかし、傳「どう因果な娘にかゝつて、土用の中に跣歩き、からだはぱんや、男共も嘸草臥」男「イヤもう草臥も大概、斯う打揃うて歩いても、祭の俄と違ひ、所望がなう

所と云交したに、親に代へた大事の男、のめ〳〵と殺して、生永らへてゐられうか、眞に聞えぬ胴欲な」と、恨嘆ちて泣きゐたる。清七「ヲヽ其志は過分なれども、よう物を合點さつしやれ。二人一所に死んではの、安居の宮の心中と、大阪中の口の端に、かゝつて彌恥の上塗」「イヤどう有つても一所に死ぬる。死んでの後は笑はれても、恥かいても大事ない。所詮ながらへ果ぬ身を、早う殺して〳〵」と、最期を急ぐ心の中、思ひやられて痛はしき。かゝる折節向ふより、野道畔道ふら〳〵と、ふらつき廻る小提燈、振上げて、三ぶ「ヤア磯之丞樣か」清七(磯之丞)「三ぶ殿か」三ぶ「三ぶ殿所ぢやござるまい、九郎兵衛が留守の間に、行方が知れぬ故、預り人を取迯すと云ひ、萬一こな樣の身に、過ちあつては、九郎兵衛が男が立たぬと、日比のあれが氣、上を下へまぜかへし、川崎北野梅田堤の北方角は、九郎兵衛と一寸徳兵衛と二人づれで尋ねに出る。此女中は聞及うだ道具やの娘御ぢやの。かうあらうと思うて、此釣船も難波今宮生玉勝曼、心中くさい所を目利して尋廻り、今爰で逢うたのも、願ひ込んだ數珠のお蔭忝いが、二人共に嗜ましやれ。僅な金を衒られたとて、心中して死なうとは、無分別の花盛、娘御の内も嘸騷動、世間へぱつとならぬ中、サア〳〵早う」と氣をせいたり。清七「アヽお世話忝い。知らるゝ通り清七も、以前は武士、色に溺れ心中する所存でなし。我が心底ぐど〳〵と云ふに及ばず。此一

の尾張坂、登りつ下りつしやな〱と、思ひ合うたる二人が中は、陰と日南の二つ紋、「きたわいな〱、忍ぶ戀路は闇こそよけれ、顔が見たさに又傍へ、來たわいな〱、いとしかはい」と、しめ合ひて、變るな變らじ瓦屋橋、我を尋ぬるかへせにあらで、祭鳴らしの太鼓鉦、現か夢か夢ならで、極樂橋も早渡る、短き縁も長町裏、稻葉そよ〱吹く風に、連れて聞ゆる寺町の、鐘も幾つか四つ五つ、六つの御手に愛嬌を、願ふも嬉し勝曼坂、此世からさへ浮瀨に、騷ぐ火影のほの見えて、思切るとは死ぬとの事か、死なば野山の私や土となる。死ぬる覺悟と死ぬる氣と、心々の野邊の露、今宵限りの命ぞと、書置く筆の藻汐草、世の浮草や道草に、急ぐ先さへ的どなく、夜道はいとゞ身も疲れ、心づくしの天滿神を、爰にも移す神垣や、安居の森にぞ着きにけり。

お中はあどなき娘氣にて、お中「コレなう清七、斯う思ひ合うて出たからは、云ふに及ばず眞の女夫、殊には二人暮す程、貯へに事缺かねば、夜明けぬ中に、其方の古鄕和泉へ行て、一日なりとも二人一所に暮したい」と、心いそ〱急ぐにぞ、清七「ヲヽ成程、所存をわけて咄さねば、それも理り去りながら、金を銜つた彌市めなれども、殺した科は遁れぬ〱。たとへ隱れ忍ぶとも、遂には探し出され、縛首討たれては、親一門の頰汚し、物の見事に切腹せんと、道すがら清七が、覺悟極めた此書置」と、聞くよりわつと泣出し、「常々も云ふ通り、死ぬるとも生るとも、いつ

と手を引立て、行方も知れず 三重走り行く。

第五　道行妹背の走書

ヲ、ウイ〳〵。これ早う來てたもいの。ア、嬉しや今のは追手ではなかつたさうな。ヤアあの鐘は九つ心も、戀路の闇に、迷へど道は迷はじと、松屋町筋一筋に、思ひ染めたる紅梗桔、お中が振の目立つにぞ、見えつ隱れつ軒傳ひ、戀の道には主從の、わけも隔ても夏の夜に、空の暑さは凌げども、越すに越されぬ人目の關は、よに大阪の町續き、行けど歩めど果敢なきは、人を過めた挾き世の、憂身を何と淸七も、心の覺悟書殘す、筆の歩も道筋も、ともにあやなき矢立の墨、薄き此世の契りと知らで、私と其方はあの常磐町、千年の末の末までと、戀ゆゑつくる罪咎を、かけて見せばや兩替町、露の命の價さへ、見る影ほそき煮賣の灯、假初ならぬ身の上を、さら〳〵〳〵と走書、饂飩蕎麥切きり〳〵と、急げば跡は闇きより、闇きに迷ふ墨衣、後の世照す提燈の、影に立寄る二人連、死に行く身か痛はしやと、回向の聲も松蟲の、鐘細々と打ちならし、南無阿彌陀〳〵〳〵南無阿彌陀〳〵〳〵、いつか火宅を和泉町、我古鄕の名に愛でて、影耻しき朝日の宮、逆櫓の神も古への武士の身ならば祈るべき。今一腰とくづをれて、遂に此身

イヤ幸な入所」と、泣沈むを無理やりに、番屋へ押込み手盛を喰うて傳八が、外からしやんと閉括り、扨どうしてかうしてと、胸算用のどう中へ、提燈提て中買彌市、彌市「是は〳〵、よい所で傳八殿、今日は互に上首尾々々。晝の儲の五十兩、三河屋の義平次と、こなたとおれと三つ割。金渡す、請取らしやれ」「ヲヽ成程々々。早速ながら頼みたいは彼お娘、今夜連て退く工面で、番屋へ入れて置いたれど、俺が今動かれぬ、大儀ながら彼どや迄連て行て、傳八が行く迄動かすなと云うてたも。頼む〳〵」と、云捨て内へはいれば、「ヲヽ合點、生者を預るからは油斷がならぬ」と尻引からげ、「サアお娘出られい」と、何心なく番やの戸ぐわらりと開るを灯影に透し、淸七「彌市めか」彌市「ヤア淸七か、こりや叶はぬ」と迯げ行くを、ぼつ駈けぼつ詰め拔打に、肩先より脊骨迄、大袈裟に切り放せば、其儘息は提燈と、倶に消えたる戀慕の闇。斯くとも知らず傳八は、「彌市々々」と闇黑を、探り〳〵て「ハア爰にか」と、淸七が手をぢつと取り、「今取つて來たこの金と、配け口の金と二包、其方に渡す、是でよい樣にどやの支覺してたも。命金ぢや落すまいぞ。追付其所へ行く程に、早う〳〵。お娘もめろ〳〵泣くまい」と、いふ中に、淸七「傳八々々、早う〳〵」と呼立れば、傳八「アヽせはしや、是では何をいふ間もない」と、一度ならず傳八が、二度の手盛に甘い〳〵と舌打して入りければ、「コレ淸七」淸七「お中樣」「サアござれ」

うなつかしや顔見たやと、思へど叶はぬ此錠前と、戹にひしと身を寄せて、聲をも立てず歎きしが、「扨も〳〵そなた故、今日一日の物思ひ」清七「イヤ私とても金を衒られ、團七に預けられ、のめ〳〵として居られず、拙者が難儀の元はといへば、おまへの事を妬に持つ、傳八が皆する業、彼奴を今夜人知れず、ぶち放して仕舞合點」と、言ふをお中は聞取つて、お中「イヤ其思案は止しに仕や、それに及ばず悅ばす事が有る。コレよう聞きや、口でこそおつしやらね、そなたにやれとて父樣が、金五十兩下さつた」と、聞くより清七手を合せ、主人のお情有難と、戶に耳を寄せ口を寄せ、咄す折から內よりも、傳八「お中樣〳〵」と呼ぶ聲に、「そりやこそ人よ」と清七は、四辻の番やの戶、引明け內に忍びゐる。傳八「エ、お中樣、旦那殿の呼でぢやに、爰に何して居さつしやる。惣體今夜はそは〳〵と、合點のいかぬ身振。それで此傳八が、戶口に錠を下したれど、俺がゐれば氣づかひない」と、鍵取出し戹戸押開け、お中をはうど引抱へ、「旦那の呼ばしやるは嘘、俺が此方に逢ひたい故、一寸とござれ」と口に手を當て、無體に表へ引ずり出し、傳八「コレよう聞かつしやれ、清七めをぼひ捲つたは、此方に靡いて貰ひたさ。所詮親方の內では仕損じが有らうと思ひ、此方をぐつすり入れて置く、どや迄仕覺して有るは。是非今夜擔げて退く。最一返り內へ行て、臍繰銀取つて來る間、爰に待て、と言うとて待つてぢや有るまい。

よからう。お中も寢冷せぬ樣に、よう著てねよ。若われが煩ふたらば、おりや何とせうぞいやい。乳母も休め」と孫右衛門、心を殘して入りにける。「さつてもふしぎぢや、まへお家樣のござつた時、丁度此樣に金戸棚の鍵が見えいで、此鍵を合して見たれど、けもない事、合はなんだに、今此鍵の合うたのは合點がいかぬ」と、よく／＼見て、乳母「コレお中樣、今迄二つ有つた鍵が、三つになつたはこりや如何ぢや」お中「ほんにの、此鍵は父樣が、不斷提て居さつしやる、金戸棚の鍵ぢやはいの」乳母「エイ、それなれば此鍵で、戸棚を開けて、金取れと、口では言はれず心の謎々。ハア、忝なや尊とやな。是皆親のお慈悲ぢやぞや。マアコレちやつと拜まつしやれ」と、言へば娘も後陰、伏拜み／＼、嬉し涙にくれ居たる。乳母は悦び、乳母「サアお中樣、一時も早う／＼」と、氣をいらてば、お中「イヤ／＼待ちや、父樣はまだ寐ずにてあろ、咎められたらどう仕やる」「アヽ愚な事言うてぢや。コレ、親の慈悲にはの、目を明て寐てござる。おれ次第にして、サアござれ」と、打連れ納戸に入りにける。夜も早四つのかねてより、思ひ定めし清七は、頰被りに一腰ぼつ込み、内の樣子を窺はんと、門に耳寄せ聞くぞとも、知らずお中は今宵の首尾、清七に知らさんと、戀には太きかゝへ帶、引きしめ／＼表に出で、お中「エヽひよんな、まだ錠が下りて有る」と、呟く聲を表に聞取り、清七「お中樣ぢやないか」お中「さういやるは清七か、な

きり寢ぬかいやい」お中「アイ〳〵、もう其所へ參ります。コレ乳母、呼んでぢやに、マア行きやいの」乳母「いや〳〵行かれぬ、俺が行た跡で、こなたが此剃刀で是々せうてぢやの、ヲヽ怖しや。コレよう聞かしやれ、今流行心中も、金と不孝に名を流す。淸七の誤も、五十兩あればつくらはるゝ。爰な身代から見れば輕い事。たとへ千兩萬兩でも、我子にかへる寶はない。此乳母が金とてはなけれども、氣づかひさしやるな、どうぞして金調へ、淸七殿さへ歸參仕やれば、添はれまいものでもない」と、力を付る折こそ有れ、孫右「乳母よ〳〵、用が有るになぜ來ぬぞ」と、孫右衞門は息急立出で、孫右「俺も今日のもや〳〵で、きつう氣が上つたやら、戸棚の鍵の置所をとんと忘れた。乳母、わが鍵を貸てくれ」乳母「エヽそれはひよんな事やの、わしがのは長持と簞笥と、數もない二つの鍵」孫右「ハテ二つぢやとて合うまいものか、あはねばもと〳〵」乳母「アイ成程、どれ〳〵」と、吹散りさうな巾著より、鍵取出せば、「ヲヽこれ〳〵」と提て行く。乳母「お中樣あれ見さしやれ、時々はあの樣に、金戸棚の吟味が有つては、思ふ樣に成りにくい。アヽどうしたらよからう」と、思案とり〴〵樣々に、二人は胸を痛めける。孫右「乳母よ〳〵、今の鍵がよう合ふたぞ。金戸棚を明けて見たれば、中にきよろりと入れて置いた。アヽ年寄は物忘れ、ソレ鍵もどそ。宵から是が氣にかゝつて、むしやくしやとねられなんだに、是でさつぱりと夜が寢

なりとゆく〳〵は、旦那の耳へ入れうと思うてゐた中に、思ひも寄らぬ、淸七殿の仕損ひ、金の濟む迄請人に預けたを、こなたの氣では、萬劫末代逢ひ見る事もなるまいかと、思詰めてさつきにから、死ぬる覺悟で有らうがの。萬一其身にもしもの事が有つたらば、跡に殘つた父御の身では、なんぼ程悲からうぞ。殊に此春の大病から、あの弱りが目に見えぬか。こんな事聞かしたら、先へ死でのけさしやろ。云ふさへ涙が溢るゝ」と、歎けば一間の内よりも、親孫右衞門の聲として、孫右「乳母よ〳〵用が有る、早う來い」乳母「アヽアそこへ參ります」と、鼻打かみて聲を潛め、「それのみならずお袋樣、御臨終の枕元へ、此乳母を呼付け、何にも心にかゝらねど、黃泉の障は此娘、汝母に成りかはりて、育ててくれとの一言が、耳に殘つて忘れねば、乳母はコレ此樣に、皺も白髮も厭はず、そなたの背長の延るのを、蝶よ花よと樂みて、おのれやがて聟御を取り、玉の樣な子を產して、乳母が死だ其時に、冥土にござるお家樣に、土產にせうと思うてゐるに、病でも有る事か、美しい其肌に、刃をあてて死なうとは、未來の母御を奈落へ沈め、アレ此世の父ごや、コレ此乳母にも、泣死に死ねとの事か、あんまりむごい胴慾な」と、聲をも立てずかきくどけば、娘も倶に正體なく、「乳母誤つた、こらへてたも」やいの〳〵と手を合せ、かつぱと伏して、泣き居たる。孫右「乳母よ〳〵、先にから呼ぶに埒の明かぬ。お中もきり

に、ひよんな事してのけた。あの金の濟む迄は、逢見る事もなるまいし、淸七の今の詞を聞くに、生永へては居ぬ心。わしも後から追付いて、死ば一所」と駈出で、表を見れば錠おりたり。「ア、悲やどうせうぞ」と、立つたり居たり狂氣の如く、身を揉あせり歎きしが、お中「ヲ、それよ、あの人より一時も、早う先立ち、二心なき心底見せん」と娘心で一筋に、思詰たる手箱より、取出すは數珠剃刀、此世の緣は薄くとも、未來は一つ蓮ぞと、涙ながらにくる數珠の、お中「いとほしや父樣の、私が死だら悲かろ。此淸七も今頃は、何所に如何して居やるぞい。最一度顏が見て死にたい」と、聲をも立てずさめ〴〵と、忍び涙にくれゐたる。乳母は娘の形素振、心を付けて居たりしが、後より何氣もなう、「お中樣何してぞ」と、聲をかければ悔りし、お中「ヲ、乳母とした事が、きよと〳〵しい聲わいの。今宵は母樣の逮夜なれば、それで數珠をくつてゐる」と、けんによもない顏付を、乳母はつれ〴〵打ながめ、乳母「エ、こなたは聞えませぬ、生落さしやると、十七年の今日迄、そだて上た此乳母に、何故物を隱さしやる」お中「ヲ、あの人の、隱すとは何を隱す」乳母「あれまだ爭うてぢや、其顏鏡で見たがよい。ソレ目が泣きはらして有るわいの。それでも物を隱さぬのか。とうから此方と淸七と、わけ有る事知つてゐる。ア、よしない事ぢやと思うたれど、獨子の事なれば、どうで聟御を取らねばならず、互に好いた事ならば、ア、どう

眉をしわめ、「何を言ふもかを言ふも、皆此方の不調法、手前の用心ようすれば、盗人にも會はず、巾著切に取られもせぬ。ヤイ清七、儕も是迄奉公も仕付ず、惡う育たぬやつと思ひ、不便をかけて使うたれど、大枚の金を衒られたは引負同然、金の濟む迄請人なれば、九郎兵衛に急度預ける」園七「ア、成程、そりやもう請に立つからは覺悟の前、衒られた金のいきは、詮議しぬいて御損はかけぬ。サア清七殿立つた〳〵」孫右「イヤ〳〵、まだ明い内に其形で去なしては、此孫右衛門も名が出る、此編笠を」と親方の、御恩を戴く目堰笠。「云ひ甲斐もなき不居者とお憎しみもあるべきに、お情深き御詞、有難忝し。私とても金を衒られ打擲にあひ、どう永らへて居られうぞ、清七が心の内、御推量なされて下され」と、悔涙に顔をも上ず、「もうお暇」と園七が、預かり重荷、一荷にしやんと打擔げ、表に出で、園七「ア、これ大事ない〳〵、此九郎兵衛が居ますわいの。サア〳〵きな〳〵思はずと、早うござんせ。エ、殘り多い先の時、彼奴等が脚骨、ほつきほきと折てやりたい。鯛フンや、鱧チコウ生イ鱸や、より物コウより物、車海老」賣々連て出て行く。もはや世間も店さし時分、「傳八、表に氣を付けて、とつくりと錠下せ。ア、一日も苦の止む間がない」と、呟き呟き奥に入る。あるにもあられず娘のお中、人のない間を窺ひ、表の方へ走出で、お中「ヤア清七はもう行きやつたさうな、互に詞は交さずとも、せめて顔を見てなりとも、暇乞と思うた

はてなく〳〵、お侍ぢや迄、御人體に似合ませぬ、嗜まれよ」と突放せば、舅も俄にりき身を止め、惡い所に聟が居て、贋侍の手め上りと、水淺黄の帷子を、汗にひたして尻ごみす。親方は斯とも知らず、孫右「段々御立腹御尤、兎角憎い奴は手前の家來、たとへ香爐を求めうと、仰やつたにしてから、篤とあなたに折極めもせず、金お取換申したは淸七めが不調法、殊に其彌市といふ者、中買で聞及ばず、何にもせよ胡亂な事。マア此浮牡丹の香爐から、合點がいかぬ」と袋を開き手に取上げ、孫右「ヤアこりや贋物、ものの見事に騙られた」と、聞くより淸七ずんと立つて駈出すを、「こりや何所へ」淸七「彌市めをほつ驅て、騙られた金取返す」團七「ハヽヽ、甘い事言はれな、是程の事仕出す奴が、此あたりにまひ〳〵と狼狽て居てよいものか。氣づかひせまい、もう是から此團七が、どいつもこいつも詮議して、騙られた金取かへす。コレお侍、御自分には猶以て、ぐつと云分のある人なれど、心が有つて今は云はぬ、足元の明い中、疾とと早う去なれい」と、突飛せどぴくともせず、侍「身の證明さへ立つたれば、居よと言うても爰には居ぬ、町人めらを相手には猶せぬ。親方もどいつもこいつも、云分はないぢや迄」と立上るを、團七「コレお侍マア待た」侍「待とは身共に用有るか」團七「ヲヽ九郎兵衞が云ふ事有り。エヽこなたはの、見るも中々腹が立つ、がようござつた」「ヲヽ歸るは」としらばけに、家來引連立歸る。孫右衞門

契約ぢやとて、今更さうは言はれまい、衒と見たりや猶以て、首筋抑へて買はさにやおかぬ」侍「イヤ此奴慮外者、身に覺えのない事を、云ひかけるさへ有るに、武士をとらへて衒とは、素町人め、どの頬桁でぬかした。サア今一言いふて見よ、眞二つにぶち放す」淸七「イヤ〳〵云ふまい、俺も腹からの町人でなければ知つて居る。さうした武士の性根で、人が切るゝ物でない」「チヽ切つて見せう、動くな」と、刀の柄に手をかくれば、傳八中へ割つて入り、「アヽお前のが御尤、まづ暫く」と押とゞめ、傳八「コリヤ淸七、今の金戻して貰ふ」淸七「イヤサ、其金は此侍に請取て戻さう。此香爐をそれまでの質物」傳八「アヽ言ふな、明日渡す僞替金に、質物取つてよいものか。扨は彌市めとぐるに成つて、此傳八を衒つたか。親方への面晴ぢや、覺悟し居ろ」と飛かゝり、髻摑で投付ける强力者、背骨にぐつと乘かゝり、「大盗人の生衒」と、握拳で滅多打ち、「そこ退け傳八。惡口ぬかした其頬桁、蹴裂いてくれん」と踏付々々、相ずりどもが責めせつてう。かよはき淸七手ざしもせず、無念々々の聲に驚き、親方孫右衞門、園七も走出で、傳八が首筋摑み引擔き、取て投げ、踏付れば侍が、ずはと引拔き切りかくる、利腕取つてぐつと捻上げ顏見れば、我舅三河屋義平次。義平次「ヤアこなたは」淸七「ナニ御自分は、

ヤなるまい」と角目立つて爭へば、傳八も出て横突張り、傳八「あゝ言はれては淸七立つまい。傍輩迄の顏汚しなれば、旦那から請取た屋敷の爲替五十兩、傳八が借てやる。此金渡して男を立い」淸七「誠にさうぢや、忝い」と、封押切て五十兩、淸七「香爐の代金、サア請取れ。最一度頬桁叩かいでな」と、小判ぐわらりと投付れば、彌市は莞爾拾ひ上げ、「畢竟今の樣に云うたも、今日金が請取たさ。商人は相身互、耳に障つたら了簡さしやれ。仲間同士はいらねども、素人から出た道具なれば、念の爲ぢや賣上書かう。ドレ硯貸さつしやれ」「イヤモウ、さういやれば云分がしたうもない」彌市「夫なら嬉しい。又掘出しが有なるば持てきませう」さらば〳〵もそこそこに、金受取て立歸る。一間の中より以前の侍、刀引提立出で、侍「扨お手代衆、先以て今日は忝い。座敷を御無心申した上、色々馳走に預り、思はず一睡。さらばおいとま仕らう」といふを淸七暫と止め、扨お賴の彼香爐、如何やら斯うやら五十五兩にさらりと埒は明ながら、氣の毒は今日中に金請取らうと申して、私とやつつかへしつ詰開の上で、當分手前の金子お取換申したれば、明日中に香爐の代金、お渡しなされて下さりませ」と、聞きもあへず、侍「イヤコレ若い者、手前其方を賴みて、香爐買うた覺がない」淸七「ハヽヽ、御座興も事による」侍「イヤ座興でない眞實ぢや」淸七「エ、昨日も今日も香爐を見て、金五十五兩に直段をお付けなされたを、傍

彌市、清七「ヲヽ好い所へわせられた。幸香爐を求めたがるお侍も來てなれば、今日埒を明やらぬか」彌市「埒と言うてどの位ぢや」清七「ハテ今朝言うた通に負きやいの」彌市「イヤ〳〵氣もない事。所々方々の開帳へ貸ても、損料は夫程取るを、八十兩といふ發句から安ければ、負けぬ負けぬ」清七「夫なら、俺が取る口錢を打込で、最一兩で手を打う」彌市「さればなう、急に小判にしたいのなれば、先へ問ずと負もせう。さらり〳〵と手を打て」清七「扨言はぬ事は惡いが、明日でなければ金が渡らぬ。其時香爐と引かへ」彌市「ヤア夫では此方の工面が違ふ。百兩の代物を五十兩に賣拂ふも、今日金子にしたさ故、所詮こりや埒が明まい。人の大事の道具ぢや、香爐を此方へ戻して貰ふ。エヽ埒もない事に足手を引て悔しい」清七「コレ彌市、さう沒義道に言はれな。向ふも堅い武士なれば、明日金を渡さうといふ議定はちつとも違ふまい」彌市「ハテひちくどい。あすというてはならぬと云ふに。同じ事をぐず〳〵と、自體和御僚が埒明ず、明ぬも道理か、漸此比この内へ奉公に來て、道具の道も知らず、五十兩といふ香爐を、夢に見た事も有まいに、肝煎搔やるが大きな違ひ」清七「ムゥあぢな云分、道を知らうが知るまいが、香爐を肝煎て買したら何とする」彌市「ハヽヽヽうまい事言はれな、五十兩といふ金、盗せうば知らぬ事、溫によう出やうぞ」と氣を持すれば猶急上げ、清七「出して見せうが、汝や見るか」「イ

口、叩き立るも商旦那へ馳走ぶりとぞ見えにける。侍「イヤ苦しうない、構れな。何と昨日見た浮牡丹の香爐、五十兩にまけ申さぬか」「されば、私も段々申して見ましたれど、八十兩の口が一歩缺けてもならぬと申す。畢竟手前の道具なれば、又御相談の致し樣も有れど、と申して私が、かはくな口錢を取るでもなし、重て御用も承りたさに、力一ぱい、なう傳八」「チイさうぢや、跡々が大事なれば、買損な物お勸め申さず、見る所が正眞の、浮牡丹にまがひなければ、五十兩には強い掘出し、此比も一休の正筆に、坊主に成るな魚を喰へ、地獄へ行て鬼に負けるなとあるかな物を、紙屑買が十九文に買て來て、大分金を儲たと、大阪中の評判なれば、少々は思外して、何卒お求めなされませ。淸七も隨分とお膽煎申しや」侍「成程、拙者も正眞と見申した故、五十兩に付け申した。國元より申して參つた殿の御用なれば、是非求めでは成り申さぬ。是に預り召されたらば、今一度見申さう」と、詞の中に箱取出し、袋を開き指寄すれば、侍「成程是々、浮牡丹に違ひない。斯ういたそ、マア五兩付ておくりやれ、直がなつたらば明日屋敷から、金子持參致させう。同じくならば今日中に、なるならぬを聞切て歸りたい」淸七「夫ならば追付中買も參る筈、見苦しくとも暫が中、あれへごさつて御休足なされませ」侍「夫は幸、然らば少しの間、座敷御無心申さう。御免々々」と傳八が、案內に連て入りにける。待間程なく中買

段々に名の變るがゑぶなの出世、祝ひ事によからうか。イヤ名の變る序に團七殿も、前堺から見えた時と、今は名も變つたけなが、如何した事で替さしやつた」魚屋「さればく〳〵、去年えらい難儀に遭うて、大阪へ引越し、心も入替へ、名も九郎兵衛と變へたれど、云付た名なれば、今において團七九郎兵衛と云まする。イヤもう、次第〳〵に豆の數が重なる程、心も獨直るもの、爰に居さしやる淸七殿も、俺が請に立て手代奉公におこしたが、死なねばならぬ程の事でも、堪忍するが若い者の嗜、奉公する身は猶もつて、物事怺へさつしやれ。また嗜むのが色の道。イヤ色で思ひ出した、鱠の子には此赤貝が良からう。なうお乳母樣」乳母「ヲヽ、とでもない大口いはしやる。內祝なれば輕うても事が濟む、如何なと此方好い樣に、拵て下され」と、勝手へ行けば聲をひそめ、魚屋團七「申し礒之丞樣、なされも付ぬ奉公で嘸御難義、お國へ歸參なさる迄は、隨分辛抱なされませ」淸七「ヲヽさうぢやとも、何かに付けて、其方の大い心づかひ」魚屋「ハテやくたいもない、そんな事ぐづ〳〵思うて、煩うて下さりますな。後に〳〵」と團七は、荷を引擔げ入りにける。かゝる折節表の方へ、一僕伴れたる田舍侍、道具見物いたさうかと、店先へ立寄れば、淸七庭に飛で降り、淸七「ようお出なされました、サア〳〵あれへ、暫くお腰かけられませ」と、挨拶すれば傳八も奥より出で、ソレお煙草盆、お茶持て來いと、埃叩で揚

つちやう聲に恟し、こそ〳〵と入にける。傳八「コレ其様に何喰はぬ顔さしやつても、如何でもきやつと合點がいかぬ」と、云も果ぬに、清七「傳八〳〵。コリヤ手の悪い嗜め〳〵。今こそ旦那が眞實呼でぢや」傳八「イヤ〳〵嘘、俺を取のぢや」清七「ハテ嘘か誠か行て見りや知れる」「ハア夫ならば行てこまそ。けたいな事ぢや」と走行く。お中「コレ清七。今言うた通り疑うてたもんなや。死しやつた母様の言置なれば此中が、氣に入た男でなけりや私や持ぬ。殊にそなたの氏素性なら器量なら、何所に一つ難癖のないも理り、玉島礒之丞様〳〵」と言ふ口抑へて、清七「アヽわつけもない。そんな事云はぬもの」と、人目を忍びひそ〳〵と、呟き囁く其中へ、得意廻りの肴屋が、魚屋團七「御用ござりませぬか」と、門口から音なへば、ちやつと飛退きけんによもなう、清七「ホウ九郎兵衛精が出ます。ソレ魚屋が來て居らるゝと、お乳母にさう言はしやませ。早う〳〵」をしほにして、お中は勝手へ走行く。「どれ〳〵肴見やうか」と、此家のかうかつ乳母、煙管片手に表へ出で、乳母「今日は旦那様の病氣本服の内祝、鱠でもせうかと思ふが、もやすい物が有るかいの」魚屋「されば、此間の栗花落上りで、雜魚場にも物が少うて、籠にさらりと見えた通り。マア此鯛がぶりばんどう」乳母「チヽ俺そんな事知りませぬ」魚屋「おつと、知らでは二匁八分」乳母「チヽそりや高い」魚屋「夫なら、ゑぶなが十で八分」乳母「さればなう、秋口から

第四　手代が戀を掘出した浮牡丹の箱入娘

難波津に、爰も眼の内本町、通筋を竪横に、引廻したる角屋敷、道具屋の孫右衛門迚、手廣う商う大商人、表には茶の湯の道具、時代蒔繪の道具類、和漢の器物を店一ばいに取廣げ、人も羨む居なしなり。重手代の傳八は、埃叩をしやに構へ、掃つ拭うつ代物に、花を飾は此家の娘、嫁入盛のぽつとり者と、人も心をよせ敷の、暖簾の蔭より、お中「コレ傳八、清七は其所に居やらぬか」傳八「ハアお中樣、清七は今藏へ道具出しに參りました、何の用でござりますへ」お中「ヲヲ夫ならわがみでも大事ない。此五十兩の金は屋敷の爲替、伏見町の加賀屋へ渡しやと、爺樣の云付」傳八「エヽ其用ならば俺が請取ても濟む事を、新參の清七計しなつこらしう物言うて、聞えませぬお中樣、幸外に人もなし、兼々のお返事を、ちよつと爰で」としなだれかゝれば後より、清七「傳八〳〵、旦那殿の呼つしやる」傳八「ホウ清七か。何の用ぢやしらぬ迄」と云捨て立て入りければ、清七「コレお中樣、先にから傳八とぢやらくら〳〵」お中「又清七のあられもない疑ひ、私が心を知らぬか何ぞの樣に。聞えぬ人ぢや」と寄添へば、傳八「コリヤ〳〵清七見付たぞ。エヽわれは横著者、能う嘘をついたなア。旦那が汝を呼つしやる。きり〳〵いけ」と傳八が、ど

は此方へ連れて去んで、女中一人は引請う、磯之丞様はゆく／＼は、大事ない奉公でもさせましたらよからうと、市松と四人連、先へいんでゝござんしたはいの」團七「ヲヽそりや慥々、慥な序に固は如何する」徳兵衛「ヲヽ腕ひかう、か、血を呑うか」團七「イヤ／＼腕ひいたとて如何したとて、コレ肝心の爰が据らにや役に立たぬ、が、わが性根見据ゑた故、固の印渡さうかい」徳兵衛「何なりとも請取う」「コリヤ是を渡そ」と肌襦袢の袖引切て指出し、團七「コリヤ是は團七が身に付けた片袖、磯之丞殿を世話にする、片腕にする證據の袖、とつくりと請取れよ」徳兵衛「ヲヽ面白い、互に心底裏まず隠さぬ徳兵衛が、證據も又かうちぎつて渡すは、磯之丞殿を袖にせぬといふ印、どんな事があらうとも、御難儀に成る事なりや、そでないといひぬく證據」團七「サア請とれ／＼」徳兵衛「ヲヽ請取つた／＼」と、互に取替へ手々に通し、團七「俺が此袖斯う肩に引かけて、世話したら、なう徳兵衛」徳兵衛「ヲヽ俺もかう引かけりや、ヲヽ氣遣は微塵もない。俺も大阪へすぐに出やう。そんならばサア連立う」「サアいかう／＼」と、裏表なき氣の廣袖、固はしやんと住吉の、亡者の袖よりたしかな袖、引連てこそ 三重 いそぎ行く。

ウそんなら重々憎い奴、玉島の御恩を著て、磯之丞殿に仇をする、佐賀右衛門に尻持つ恩知らずの畜生め、もう赦さぬ」と飛かゝれば、飛退つて、徳兵衛「ア、待つた〳〵、其磯之丞殿といふは備州出のお侍、玉島兵太夫殿の御子息か。ハア知らなんだ〳〵、此徳兵衛も備中の玉島生れ、少の科で追拂はれ、國を出た時殘して置いた女房へ釣てもお主、俺が爲にも親方筋、其思はく琴浦殿に、横戀慕する佐賀右衛門に頼れた、傍輩の尻持たは大きな間違、立引く所か俺も倶々、お世話さして下され」と、ほつくり折れる吉野笹、一寸徳兵衛が一分の、立初とこそ知られけり。團七始終をとつくと聞き、團七「縁につるれば遠の物と、こりや珍しい出合ぢやな。其詞違ずは、何ぞ慥な固をせうわい」徳兵衛「ヲそりや何なりと望み次第。コレお内儀、此辻札の紿を見さしやれ、曾根崎心中の徳兵衛が、生玉で叩かれて、恥頬かいて居る所、其徳兵衛の看板で、此徳兵衛が薦被つたで、煩さがつて下さんな。したが餘り物は喰はなんだぞい」おかち「あのお人のいはしやる事、寺へ行た折聞きやんした、百人一首の天智天皇樣も乞食の相が有つた故、木の丸殿にござつたげな、浮沈は有る習ひ」と、會釋に團七心付き、團七「女房ども、此二人の衆は昆布屋にか」出入を止め、かう打明て融合つたは、明神の引合せ、エイ忝い〳〵。したが俺やちつとの間も「サイナ、三ぶ樣の言はしやるは、舅の所へ戻りがけ、掛人二人連で去んだら氣に入るまい、今夜

賴んだが無理ぢやない、ドリヤ出ておはふ」とのつし〳〵、徳兵衛「團七ちよと下に居て囉ひませうはい、同じ棒組賴むに退かず、一寸も後へは寄らぬ一寸徳兵衛が、ちよつとマア、ヘヽヽヽ、かうして見やうかい」と、帶の前側ぢつと取る。團七「ホヽヽヽ、こりや又身が有つて面白いはい。そんなら指詰斯うせうかい」徳兵衛「ムウさう仕やりや、コレ、ヤかうする」團七「ムウかうする」徳兵衛「イヤおりやかうする」「イヤかうするは」と打つ手止むる手右左、片手にりんと尻ひつからげ、出入花さく折も折、餘り遲さに新家から、迎におかちが只一人、來ればうてや又喧嘩か、「コレもう了簡さつしやれ」と、いふをもきかぬ摑合ひ、打つ打れつ止めても、踏飛すやら蹴飛すやら、止めぬ仕樣も雙び立つ、辻札取て二人が中へ、橫に仆かして機轉の綛、止まる夫止まらぬ相手の布子見知有る顏は、おかち「ヤア汝や此中の乞食め、下れ、此方の人に何で手向ひ、非人めが、人でなしめ」と、叱られて、徳兵衛「コリヤお家樣でござりますか」と、誤入つた顏付で、出入の腰は折れにけり。團七「コリヤ女房、俺やずんど合點がいかぬ、彼奴如何して見知つて居る」おかち「見知つて居いで何とせう、短ういへば磯之丞樣、お鯛茶屋からお歸りなされぬ其時の思ひ付、お遊びなさる濱先で、非人の喧嘩身の上咄、こいらを賴んで云付したが、お耳へ留つてお歸り、お袋樣のお悅び、其御褒美にあの布子、まだ其上にお金も有り、それから止た其形ぢやな」團七「ム

鴛丁「ハテ用がなうて呼ぼかいの。こつぱよなまよそろ〳〵と、仕懸けやい〳〵。汝等でいかざ助けてやろ、其間に抜きさいた髭ぬかう」と、床の床几に上足打ち、煙草入から出す鑷も、なんばう太き詮索なり。歪みと早う見て取る團七、團七「コリヤ出入でもする氣かなア、いらぬ事ぢやおけやい」鴛丁「イヤおくまいわい。名は言はいでも頼まれたと言や合點ぢやあろ。ハテ高が先きの女中嬲に來た、口手間いらずと請取ろかい」團七「ムウ聞えたが、そんな事言はぬ物ぢや」鴛丁「いはぬ物とは」團七「ハテサ、渡すまいと言うた時にや、ハヽヽヽ、如何も成るまいがな」鴛丁「コレ是で嬲ふ〳〵はい、此腕で、こつぱの權、なまの八が受取るわい」團七「イヤ此奴が、避けて通せば方圖がない、もうきかぬぞよ〳〵」鴛丁「やきかぬといううて如何仕やる」「イヤかう〳〵する」と右左、ばたり〳〵と蹴倒せば、「イヤこいつ脚出したぞ、疊んでしまへ」「合點ぢや」と、床に凭せし開帳札、手々に引提げ〳〵て、滅多無上に擲かゝれば、身を交して搔摑み、ひつたくつたる後より、こつぱ微塵に打付くるを搠だる札にて打落され、怯む所を續打にばた〳〵〳〵、扨も回向も二萬日、弓矢八幡壺井の札、こらへぬ我武者に打据ゑられ、二人ははふ〳〵片息に、「後を頼む」と云捨てて、命から〴〵迯げて行く。見て居たやつは大膽者、髭抜仕舞ひ鑷を納め」德兵衞「へヽヽヽ、テモ弱い奴らぢや、あれでも人に頼まれるぢや迄。と云うて退けても居られまい、俺

ぢやさかいに、あんな悪魔が見え集る。コレ私は磯様を世話にする、團七といふ者で」琴浦「エイそんならお前がおかち様のお連合かへ」「アイ〳〵」挨拶と刀のあしらひ兩方を、受けつこたへつ又切る腕、柄と拳を一握り、團七「ムウそんならおまへ此方の嬶」琴浦「アイ知つて居りますとも」「是はしたり」と踏のめし、「ワリヤマアどこで」は背骨に膝、琴浦「サイナア、お鯛茶屋へお迎にござんしてナ、初めて逢うて間もなく、磯様も私故に」團七「コレ氣遣しよまい、磯様もつい其所にぢや」琴浦「そこにとはどれ何所にエ」團七「何所はツイそこの、コレ耳寄越した、コレナア何と嬉かろが、サ、ちやつと早う行かしやんせ、早う〳〵」と磯之丞が、有家を囁き教へられ、いそ〳〵として急ぎ行く。「ヤアあの女郎やる事ならぬ」と、跳返して駈け行くを、首筋摑んで是はいな、團七「コレ東側ぢやぞへ、此時宜必ず言ふまいぞ、三ぶと云ふ者が居る程に、よう賴んで置かしやんせへ」と、底の底迄氣を付けて、世話やく隙に刀を鞘、納めた思案か佐賀右衛門、飛ぶが如くに立歸る。とは知らず、「お侍もう去にやらいで」と振返り、團七「是はしたり、何所へ失せた。てつきり新家のかざ嗅いで、先へはよもや廻るまい、とはいへ道が氣づかひな、宮へはいつでも參らるゝ」と、心は急いて行く跡から、「おゝい〳〵、ハアテ呼ぶのにこな男、待て囉はう」と三人連、中に二人は以前の駕籠舁、褞袍布子の懷手、團七「ムウ俺に待てとは何ぞ用か」

殘ると、仕舞のはては蔦田へ暴され、情所を犬や烏が、ヲ思ひ出すも身が顫ふ。まだ此上にひよつとすると、男は助つて女は死損、そんな危ない事せうより、さらりと氣を變へ、サアまあ難波屋で祝言の盃せう」と手を取れば、琴浦「エヽ厭らしい聞きとむない、コレ爰をマア放さんせ」ともがく程猶しつかと握り、佐賀「ハアぴんしやんしても此大鳥が、摑んでからは放さぬ〳〵」琴浦「エエ憎てらしいあれ〳〵」佐賀「ハテはしたない聲が高い」琴浦「高うても私や厭ぢや〳〵」「厭であらうが如何で有らうが、連れて去んで女房にする」と、合點せぬ者無理無體、引摺る意地張る床の前、「ハテおぢやいの」と引立てる、佐賀右衞門が利腕ぐつと暖簾ごし捻上れば、佐賀「アイタヽタ、こりやどいつぢや何ひろぐ」團七「イヤ何もせぬ俺でえす」と、ずつと出たる剃立の、糸鬢頭青月代。佐賀「ヤア俺りや今日牢から出居つた」團七「ヲヽ驚くまい、へヽヽ團七でえすはいな。さつきにからできますかよ、歴きとした侍が、女童を摑まへて、マ此手を放してやらうてや」と、拳痛めて突退くれば、佐賀「イヤ汝いらざる所へ出しや張て、邪魔ひろぐか何とする」と、言うても相手にならばこそ、團七「こな樣があの、お鯛茶屋に居やしやつた琴浦樣ぢやの。シテ磯之丞樣に會はんしたか、否やか、さうしてマァ供はどこに居るぞ」琴浦「イヽエ誰もないはいな」と、咄の半へ騙し打、「團七二つ」と切付けるを引外して翻筋斗打せ、團七「ハテ大膽な、そんな事

腹が立つても南無阿彌陀、笑ひ〳〵も南無阿彌陀、念佛講で忙がしい、賴母子がはやる。扨とついでに、われが贔屓の片岡仁左衛門、扨當つた顔見へ持越して、今に日向丸をしてゐるは。コレコレこちらの辻札、竹本義太夫曾根崎の心中で打破つたの、マア一日見に行けやい。イヤこんな事言や日が暮るが、一つ言はにやならぬ事有るはい、おかちが咄で詳う聞いた、磯之丞殿に只た今逢うた故、一所に昆布屋へやつて置いた」團七「ソリヤわしが大事の人」三ぶ「サア〳〵サア言譯も聞いて居るてや〳〵、兎角昆布屋で悠りと咄そ、おりや先へ行て居る」と、風呂敷包手に渡し、三ぶ「中にや錢も入れて有る、月代剃つて早うおぢや。コレ床の衆一してやつて、賴まする」と氣を付けて、内と新家へ別れ行く。我故にいとし男の身の難儀、聞く悲しさの跡追うて、大阪へとばかり的どなく、走爪づき琴浦は、痞を撫でて、「ア、爰は何所ぢや、ほんに住吉樣。磯樣と連立つて難波屋へもよう來たが、若しやあそこにぢや有るまいか」と、見返る跡に憎い奴、「佐賀右衛門が爰へくる、見付られたら捉へ居ろ」何處へ隱れる間もあらせず、佐賀「アコリヤ〳〵見付けたぞ迯まい〳〵。お鯛茶屋からよう抜けそをやつたなア。俺がいふ事何と聞くぞ。元來貴樣には此佐賀右衛門が行て居たを、アノ磯めが身請して、お鯛茶屋の箱入、指もさゝせず賞玩し居る。そこで我等が幇間を持ち、放蕩人に拵へ立て、勘當させた骨折も、皆そ樣から起る事。風來人に心が

日の當番、御法の如く囚人が繩解かせ、當番「コリヤサ團七、詳しくは屋敷にて介松主計、玉島兵太夫兩人申渡さるゝ通り、去年九月十三日、御家中大島佐賀右衛門が家來に手を負せ、雙方ともに牢舍の所、手疵は愈えて相手は牢死、其故死罪を御赦免なされ、和泉堺をお構ひなさる、ありがたう存じ奉れ」と、云渡す事云仕舞ひ、直樣屋敷へ歸らるゝ。跡見送つて團七は、古郷の方を伏拜み、團七「アヽ忝い、佐賀右衛門が中間づれの、下手人に取らるゝかと、思へば無念で口惜かつた。兵太夫樣お禮は申さぬ、其かはり磯之丞殿身の上、命に代ても微塵さら〳〵、御難儀はさせませぬ」と、ひとり呟やく後から、「團七〻」「と呼だはどこ」「イヤ床から」と、ずつと出るは、團七「ヤァ三ぶ殿、ても珍しい、息災にござつたの」三ぶ「ヲヽテヤ。俺や大阪から堺へ通ふ、汝や堺から大阪へ通ふ、商賣は違うても心は變らぬ念比、了簡強い汝があらした事、よくよく聞かれぬ事が有つてと思うて、扨案じたは。出かした〳〵、必ず恥ぢやと思ふなよ、江戸見ぬと牢へ入らぬとは、男の中ぢやないといふ。今朝から嚊衆も坊主めも、連立つて迎に來て待つて居た。エちやつと顏見せてやりや。ぢやが、テモ長い月代。ムウ臭い著物ぢやな、著代も一つ持て來た、幸ひな此床で月代剃つて、明神樣へもお禮申せ。おりや昆布屋へ行て落付そ」團七「アそりや大い世話でやした。貴樣見ぬ中にきつう數珠ぢやの〳〵」三ぶ「サア今はとんと、

へ行きます者、長町は何町目」磯野丞「イヤ何町目かは存ぜねど、三河屋の茂平次を尋ねて參る者」三ぶ「ムウあの茂平次に用が有るとは、テモ變つた者にお近付ぢやの」磯之丞「イヤ近付ではござらねど、其娘のおかち」三ぶ「ヘエ、そんならおまへはてつきり、磯之丞樣とやらでござりますか」磯之丞「とは又よく御存」三ぶ「サア斯うでごんす、今日團七が出牢迎におかちと息子と、わしが連れて來てやりました、道々お前の咄聞ましてお笑止に存じますが、團七がよい樣にしませうぞ、氣遣をさしやますな。おかちは宮へ參られたが戻りの遲いは、エイてつきりとコリヤ坊主がだゝけで新家の晝食、彼方やから往て昆布屋に居ましよ、三ぶに聞たと云はしやませ」磯之丞「是は重疊。昨日は堺で日を暮し、今日は大阪へ參る所、よい所でそこ元のお目にかゝり」三ぶ「アア其挨拶もゆるりと〳〵、マアちやつちやと行かしやませ」磯之丞「然らば後程御意得ん」と、昆布屋をさして急ぎ行く。三ぶ「アあの人、よい所で俺に逢うたぞ。イヤ逢うたは逢うたが此團七、もう來さうな者では有る、爰で問う」と暖簾をひらり、三ぶ「床の衆、今日のお拂ひ者、如何に遲うござるの。私や大阪から迎に來た、來るまで爰を借ませう」と、待間程なくさは〳〵。そりや科人ぢやと見る人も、十が九つ歪んだ世に、直なる道を引かれ來るは、兵太夫が情にて、助る恩と頼の詞、身にしみ〳〵と忘られず、我營みの生洲の魚、沖に出たる心地なり。警固の役目は其

算用して取つて仕舞う、下著なりと上著なりと、手繰つて算用濟さう」と、立ちかゝらんとする所を、三ぶ「コリヤ／＼／＼滅多な事して後悔すな」と横合から三ぶが聲。駕丁「ヤ何も知らいでそこな親仁、何言はるぞい」三ぶ「ホ、知つてゐる／＼、コリヤ歪むなやい／＼、サア足元の明い中にとつ走らいでな。こな様若いがア、溫順しい、よう堪忍さつしやるぞ。シテ駕籠代は何ぼの極め、直なしたは二百五十か、ても高い駕籠ぢやの。からしやつたこな様もこな様ぢやて、由緣かゝりはなけれども、コレ此親仁が、ヲ尻持」駕丁「ヤレわり樣が尻持ちか」三ぶ「ヲ此釣船の三ぶが尻持つた立引、此數珠で數へて見りや、丁度九百九十九出入有る、前なら汝疊んで仕舞ひ、千人投の數に合すけれど、堪忍して去なしてやる」と、啖切る顔をじろりとながめ、駕丁「ホヽ釣船面白い。如何して去なしやる、サア見よう」と、摑みかゝるを身をかはし、ころりと投たは百の錢、「高い極めは此方の損、了簡して半分やる。此格で歪んだら大きなめにあひ居ろ」と、丸う捌いた男作、美しいので氣味惡く、錢受取るも怖々に、尻痒ばうて雲助は、駕籠引かたげ歸りける。磯之丞は靜々と、三ぶに一禮、磯之丞「狼藉者に出合ひ難儀の所、其許のお世話にて事なく治まり大慶致す。只今拙者流浪の身、時を得てお禮を申す爲なれば、お在所は何所、承りたい」三ぶ「イヤさう有つては此親仁、所は申さぬ、長町邊と有る故に、わしも ちよつ ちよとあのあたり

サア〳〵作病ぢやて、殊に直にも無い和郎ぢやもの、こんな事誰も來とむながる、參つてござれ」おかち「アイそんならさう致しませう」「コレ考へ參つて來やんしよと云やいの」と、口うつし言ふ鸚鵡の鳥、親子は宮へ、三ぶは火打石に腰かけすつぱ〳〵。茶の錢始末と見えにける。駕丁「ハイハイ〳〵頼みませう、杖せんか。ヲ、大小路あたりから持つて來て、息杖の先にぶらりと駕籠突張り、駕丁「旦那申し、跡の立場の駕籠と代ます、錢やつて下さんせ」と、願へば垂の內よりも、乘客「きめたは大阪迄つけてから先で渡さう」駕丁「イヤサそれぢや少勝手が惡ごんす、跡の駕籠と代ねばならぬ、どうぢやあろと爰でやつて下さりませ」乘客「サアやる事は易けれど、錢を爰に持合さぬ、大阪で慥に渡す」駕丁「ハア相棒聞いたか、刎怪な物ぢやな、イヤ受取らにや勝手が惡いが、大阪は何處へ著けるのぢや」乘客「長町邊で尋ねたらば」駕丁「ムウ先は知れぬのでござりますか、イヤモそんなら彌爰で渡して下さりませ」「ハテ執拗い、爰には錢がないといふのに」駕丁「ムウそんなら俺等を衒るのか」と歪みかゝれば、乘客「ア、コリヤ麁相云ふな、武士に向つて」駕丁「ヤどこへ武士、有樣は丸腰、エイそれで衒の手見上げた、こんな奴はヤア斯うせい」と、思ひ合つたる惡者同士、駕籠をくるりと打かへされ、內より出たる磯之丞、落ちたるはずみに膝摺り剝き、くわつとせく氣も身の恥を、指うつむきて怺へゐる。駕丁「コリヤ棒組、何でなと爰迄の駕籠代、

第三　出入の數をつまぐつた數珠三昧の男作

住吉の、濱邊を春の名に高き、そればかりでは並木の蔭、新家の煮賣髮結床、指の齒をひく往來も、自由な堺海道を、大阪の方からひよこ〳〵と、來るは撥鬢糟毛の親仁、釣船の三ぶとては、人の厭がるぶう〳〵も、年が異見で直つたか、片手には數珠片手には、達磨の樣な小ぢよつ坊が、戯談歩き持あぐむ。母のおかちが付添うて、道々機嫌鳥居前。おかち「マア市、ちつと爰で休みや、三ぶ樣も休ましやんせ」三ぶ「チヽサテ此坊主はよう歩いたの。大方天下茶屋邊て、慥に駄々けうと思うて、廿五文が駕籠相輿で振舞ふ所を、三文地黄煎玉でまじなうた。昨日此方が戻つて、今日園七が牢から出ると聞いた故、嬉うて夜が寐られず、夜の明けるを待兼ねた。コリヤ坊主、追付け父に逢してやらう。イヤしたがもつと隙が費らう、祝うて明神樣へお禮がてら、連れて參らしやれんかい、間違のない樣に、おりや爰に待つて居よ」おかち「ほんに三ぶ樣此方の園七殿念頃な中ぢやとて、大い世話でござんす」三ぶ「何のいの。したが言ふぢやないが此方の親父、三河屋の茂平次が迎に來て遣やる筈、今日は又何故來ぬの」おかち「今朝から腰が痛いと言うて」三ぶ「サア〳〵

加な奴、去りながら家財を闕所して當地をお拂ひ、重ねて當所へ入込むと、急度曲事に云付ける。夫々役人共、彼奴を脚腰の立ぬ程、國境より擲拂ひ」兵太夫「イヤ先待れよ、彼が咎とて、さのみ掟を背いたと言うでもなし、口論の事なれば、家財闕所には及ぶまい。斯う言へばとて兵太夫が私の依怙ならず、殿の御慈悲。御政道の筋を以て、咎を御赦免なさるゝ間、有難う存じ、重ねて心を改めよ。身が悴磯之丞、不所存故に今日勘當、定めて方々を彷徨ひ歩き、果は野末か橋の下、斃死をし居らう。萬一大阪で遇うたりとも、身が恩を請けたなんどと思ひ、必ず〳〵情をかくるな、ナヽ、合點か、情をかくれば恨るぞ」と、口は立派に云ひなせど、心は頼む詞の色。上使は見ぬ顏聞かぬ顏、「早お暇」と座を立てば、兵太夫「最早お出なさるゝか、先以て今日は御苦勞千萬」主計「イヤサ貴殿にも子息の儀に付きお心遣」兵太夫「イヤまう其儀は御沙汰なし」主計「成程々々、御内證へも宜しく賴み存ずる」と、挨拶すれば佐賀右衞門、「アヽ御亭主、段々の御馳走忝い、お禮は重ねてて急度申さう〳〵」と、歪む大鳥直なる主計、云はねど夫としらすの警護、割竹打立て立かゝり、引立れば團七も、屠所の羊に引代へて、命助り廻り合ひ、親子の絆縛繩、引かれ出づるぞ三重惠ある。

れば、佐賀「コレ兵太夫殿、咎人の肩持るゝか」兵太夫「イヤサ拙者がお止め申すも、言はゞ未だ落居せぬ科人、萬一貴殿のお手が廻り、過有てはお爲にならぬ、如何若いとて少御麁相に存ずる」と、理窟に詰られ拔いたる刀、手持無沙汰に見えにけり。兵太夫「コリヤ〱牢屋の役人共、死骸を夫へ引出して、御上使のお目にかけよ。御苦勞ながら主計殿」「成程々々一所に見分仕らん」と兩人立合ひ、主計「コレ見られよ兵太夫殿、此疵は二十日も以前に愈えた金瘡」兵太夫「成程左樣、全く病死に極つたれば、團七に構ひなし」と云せも果ず佐賀右衞門、佐賀「疵はともあれかくもあれ、人をあやめし科人を構なしと言れては、國の政道立つまい〱」主計「イヤ夫はいはれぬ指圖、今日殿のおめがねを以て、役義勤むる此主計、國の掟は背かぬ。病死したは彼奴が不運、相手の疵平癒なれば、團七に咎はないと申すが誤りか。殊に以てお身の家來、御法跡の傾城町へ入込み、酒狂からの口論、道を言はゞ貴殿が糺明しらるゝ筈、但し其方が彼色里へお供に連られ、同じ穴の狐と思ひ、非を理に枉げて贔屓の沙汰をせらるゝか」と、只一口に大鳥も、云込められてしよげ鳥の、まぢ〱として閉口す。兵太夫女に向ひ、兵太夫「稚い者が孝心を感入り、汝等が願の通り、團七が咎を赦し、明日當所をお拂ひ、有難う存ぜよ」と聞くより親子は飛立つ計り、伏拜み〱、嬉し涙にくれければ、何がな彼奴に顏あてと、佐賀右衞門しやくり出で、佐賀「エヽ儕、命冥

らるゝ事おりや厭ぢや。菓子がほしい、殿樣」と手を指出せば、兵太夫「フウ牢へならば代りて入る氣、首切らるゝは厭ぢや迄。ヲヽよう言うたな、菓子とらせう。何と佐賀右殿、アレ見られたか、親に代つて切られうより、菓子欲しいと云うたのは、云含めぬ是證據」如何でも子供は正直なと、落つる所を兩人が、引上げ〳〵云廻せば、佐賀右衞門はむしやくしや腹、顏膨してゐたりける。程なく牢屋の役人共、見るもいぶせき牢死の囚人、畚に指荷はせ、肩肘怒らし引添うたり。跡へ引出す繩付は、日影見ぬ目の色靑ざめ、月代延びて顏付も、變り果たる有樣に、おかち「アレ市松、父樣ぢや。團七殿か懷かしや。常々に此方の短氣を異見しても聞入れなく、今此樣な憂目を見る、此子は可愛うない事か」と聲を上げ搔口說き、涙ながらに駈寄るを、寄るな〳〵と役人共、突退け〳〵白洲にどつかと引据ゆれば、佐賀右衞門緣より飛下り、佐賀「エヽ汝憎い奴、あの通身が家來を切殺したれば、下手人は遁れぬ。見るも中々腹立や」と、立蹴にどうと踏倒し、惡者作なしやつつらと、言うては蹴飛し〳〵、眉間肩骨鐵脚にて、くつ〳〵と踏付くるを、見る女房の其悲しさ、我身も供に踏まるゝ心地。短氣の團七ぐつとせき上げ、繩取引立て立上るを、役人共立懸り引据ゆれば、佐賀「ヤア其態に成り上つても、此佐賀右衞門に手向ふ氣か、しやらくさい娑婆塞」と、づはと拔いて刀の背打。兵太夫「アヽこれ〳〵、聊爾あられな」と、駈寄て止む

も聞きたし」と、念を押れて母の親、おかち「憚ながらお聞なされて下さりませ。園七殿が牢の中で、様々憂目に遭つしやる咄のそしりはしりを聞き、五つや六つの子にも悲しいやら、爺親に代り牢へ入らうと、毎日々々此母を泣喚いてせがみますれば、女子の愚癡な心から、あれが魂に神佛が入代つて仰るかと、夫故のお願ひ。なれど夫なり我子なり、何をどうとも悲しいものは私一人、何卒夫が此度の咎を御赦免下さらば、生々世々の御慈悲」と、白洲にかつぱと身を投げ伏し、泣詫るこそ不便なる。佐賀右衛門せゝら笑ひ、佐賀「ハヽヽヽハ、テ好い工面をやり居つた、子を持た者はどれ共に、あの手にははまらにやならぬ、あれは兼て小悴に云含めた拵物、子供ごかしに親めが命助からうと云ふ事か、エヽけち太い女め、巧い事ほざきあがれ」と、やりこむれば兵太夫、兵太夫「イヤ〳〵それは一途の了簡、既にもつて漢の楊修孔融は、五歳六歳で才智すぐれしと聞けば、況や日の本正直を基とする神の國、子供に孝行な者あるまいとも云はれず。コリヤ〳〵稚い者、物とらせう」と招き寄せ、かけ盤にうづ高く盛上し菓子取上げ、兵太夫「身共が言ふ事よつく聞け、爺親の代に其方が首を切らするか、此菓子が欲しいか、望次第」と問へば、そばから母親が、それ〳〵市松、父様に替りませうとお願ひ申しや、やいの〳〵とあせりもがけば佐賀右衛門「ヤァ女め云ひ教ふるか、退れ〳〵」とねめ付る。市松は會釋もなく、「首切

有る妻子共の願書」と、聞もあへず佐賀右衞門、佐賀「其相手は身が草履取、ぼてふりの分として、武士の家來に手を負せたる暴者、咎を赦し出牢させてくれよとは、のぶとい奴等、此願叶はぬ〳〵」兵太夫「イヤ〳〵これさう仰るな、此兵太夫が存ずるには、先彼等が願ふ一通を聞いた上、ハテ、赦さうが赦すまいが其時の評議」佐賀「イヤサ評議も絲瓜も入り申さぬ、身が家來は手疵が重つて今朝牢死致したからは、其團七めを下手人、品によつて汝等親子共牢へぶち込み、縛首の相伴さする、覺悟し居ろ」と睨付くれば、はつと計に女房は、賴みも力も落果てて、せんかた涙にくれけれど、まだ幼き市松は、親の歎も白洲の小石、拾集めて手轉合、「コリヤ市松、今のを聞かぬか、先の相手が死んだによつて、父樣の首切るといの。お詫申しや〳〵」と押出せば手を合せ、市松「コレ殿樣、私を代に牢へ入れて、父樣の首切らずに、怺へて進ぜて下され」と、あどなき願に兵太夫、目をしばたゝき居たりしが、兵太夫「御上使何と思召す、相手が手疵で相果なば、團七も極て死罪、何にもせよ囚人を引出し、死骸の吟味遂た上、彼等が願も決著致さん」主計「成程々々、ヤイ〳〵家來共、獄屋へ參つて二人の囚人連來れ、はやう〳〵」と追立やり、主計「コリヤ〳〵女、最前より稚い者が親に代つて牢舍の願ひ、訴狀の表も其通、囚人を引出し、死骸吟味の其上、爺親が咎を赦し、躮を牢舍さする事も有なん。願書相違はないか、其方が所存

辛いめ知らぬ身で、京大阪へ行た迚も、何處に一日半日の、佇が成べきぞ、不便の者や」と計にて、人目も恥ずかつぱと伏し、身を悶えてぞ歎かるゝ。兵太夫「コリヤ女房、未練な繰言見苦しい。イヤ／＼家來共、彼奴門外より阿呆拂ひ、情をかくれば同罪」と、嚴しき詞におぢ恐れ、遠慮會釋もあらしこどもに、引立られて磯之丞、先非を悔いても歎いても、再び返らぬ館の名殘、親に名殘の惜まれて、見やれば共に奥方も、見送り／＼伸上り、わつと叫び入り給ふを、腰元婢介抱し、伴ひ奥へ入りければ、母の歎も父の怒も、我誤と悄々館を出でて行く。取次の侍罷出で、侍「最前より女一人、稚き者召連れ、訴訟有りとて玄關に控へ候。通し申さんや」と伺へば、兵太夫打頷き、兵太夫「先達より其願の事聞及ぶ、幸御上使もお出なれば、此方へ通せ」の聲につれ、かちは我子の手を引いて、居馴し屋敷も心から、空恐ろしく臆々と、白洲へ出つれば佐賀右衞門、佐賀「願と有るは汝か、何事なるぞ、早々申せ」かち「恐れながら私は、堺南の棚に居ります魚屋團七と申す者の女房子、此度のお悦びに、數多の科人を御赦さるゝと承り、親子が願の趣、此一通に認め參りしが、女子の書いた物なれば、釘の折やら釣鈎やら、讀めぬ所はよい樣に、御覽なされて下さりませ」と願の一通指出せば、主計取上げ押開き、主計「何れも御覽ぜ、是は去年乳守の中で口論仕出し、相手に手疵を負せしによつて、雙方牢舍云付けしを、出牢さしてくれと

されし」と怒の面色、主計「イヤ〱夫は了簡違ひ、お上にも樣々と御賢慮を廻され、お慈悲を以て下置るゝ此掛物は、則ち殿の御折檻も同然、夫に御自分が子息を手にかけられては、殿のお心が無足に成る、とくと分別有れよ」と、主計の詞骨身にしみ、父もはつと頭を下げ、忝涙にくれゐたる。佐賀「ア、これ〱御親父、御立腹は尤なれども、傾城の梅花のかざ鼻の先へ滲込んでは、天から釣た異見でも、いつかないかぬ。此佐賀右衛門が申す通り、微塵も違は有るまい」と、言へば上使は親と子の、心を察し返答も、なく〱父は白洲に飛下り、磯之丞が襟搔摑みぐつと引寄せ、兵太夫「只今身が手にかくる奴なれど、殿のお慈悲を以て命を助け勘當、武士でも杭でもない奴に、刀脇指無用ぞ」と、大小捩取り、兵太夫「ホヽウ好い態〱、傾城に魂を奪はるゝ根性がら、恥かしうも思ふまい。他人に成つても兵太夫は、何れもに面目なうて此皺面を得上ぬ。汝が恥は身共が恥、今日賜はつたる二百石の御加增を、儕が申請けたらば、親の身ではな、何ぼう嬉しかるべきぞ。不忠不孝の祿盜人、憎い奴め」と齒を喰締め、目には憎めど恩愛の、涙先立つ計なり。かくと聞くより奥方は、一間の内を轉び出で、奥方「コレ磯之丞、心がらとは云ながら、淺ましい形になりつたの、此悲しいめを見まい爲、父御の手前は陰に成り日南と成り、母が異見を聞入れなく、勘當の身に成て、今思ひ知りやつたか。生落ちて今日の日迄、憂い

方は御親父兵太夫殿の役儀を大切にめさるゝ故、御懇情淺からず、此一軸を下さるゝ。殿の御思慮を廻されし掛物、有難う思ひ拜見有れ」と指出せば、「父のみならず拙者に迄重々深き御厚恩」と、押戴き〳〵、定めて殿のお物好なれば、墨跡の類ならん、何にもせよ拜見と、さらさらと押開けば、大和總師西川が筆を振うて書たる傾城の姿繪には、如何に〳〵と惘果たる計なり。主計「イヤサ驚かれな、聞けば其方當所乳守の傾城に身命を投打ち、晝夜を分かず通ひめさるゝ事、上聞に達し此掛繪遣さる。覺なくば明白に言譯々々」磯之丞「アヽ成程身に覺なき御不審を蒙れども、指當つて申譯致すべき樣なければ、誓言を仕らん」左賀「コレ〳〵磯殿目前に誓言の罰が當らぬ迚、此佐賀右衞門が聞く前で、ぬけ〳〵とした事言れな」磯之丞「とは何故」佐賀「何故とはしら〴〵しい、乳守の傾城琴浦を請出して、毎日々々歌舞伎狂言しらるゝを、誰知らぬ者がない」磯之丞「イヤ夫は御自分も」佐賀「ヲヽサ手前も此間住吉へ社參の時、戎島のお鯛茶屋で、傾城集めて銅鑼打るゝを黑い眼で慥に見た、爭ふ事成まい」と、さすが戀の意趣晴し、己が科を塗隱せど、誤り有る身は返答も、せん方なうぞ見えにける。父は始終默然として居たりしが、ずんど立て磯之丞を白洲へはつたと蹴落し、刀すらりと拔放し、振上げる手をしかと取り。主計「兵太夫殿こりや如何召さるゝ」兵太夫「イヤサ不所存な世悴、眞二つにぶち放す。お退な

はれば其方には、晝夜碁將棊の稽古に精魂を盡さるゝと、お上にも御沙汰有て、碁盤一面遣さるゝ、尤も盤將は軍の法に同じけれど、言はゞ遊藝、武士は武藝を勵むが肝要、此後とても心得の有べき事」と、詞の中手入られて、不首尾千萬將棊盤、碁盤かゝへて杢兵衛は、隅に目を持ち控へゐる。同じく音羽浪之進、髮のかゝりも四座風に、歩むも三つ地長地の間、のつし熨斗目の袖捌して畏る。主計「其許には此間小鼓をよく鍛錬せられしと有つて、此度の御土產に小鼓一挺下し置るゝ、有難いと頂戴有れ。惣別大名高家には、猿樂を召抱へお慰になさるを、武士は打囃せねば叶はぬと心得、武具馬具も代なし、小鼓に金銀を鏤めても、其鼓がまさかの時お馬の先の御用に立ず、遊藝に身を投打つは町人の業、重ねてきつと嗜み召され」と、やり込られて浪之進、ちつともホウとも返答なく、生れ付たる薄皮の、顏を赤めて猩々舞、まひ〳〵してぞ入りにける。跡へ出たる大男、年は四十七八手、名さへ羽根倉關右衛門、相撲好とぞ知られける。主計「御自分は先達つて上聞に達せし相撲好、戰場での組打に勝利を得るも相撲の手、武士の上では遊藝より遙かに勝り、まさかの御用に立べき業と、緞子三本化粧紙、お心付いたる下され物、此主計も茹鮹百ぱい花に進上仕らん」と、家老職の戲言に時の興をぞ催しける。次は玉島磯之丞。主計「委細は只今見らるゝ通り、銘々好む業によつて御土產を賜はる。取分け其

此度のお目出度に、夫園七の科を御赦免有る樣に、旦那樣や奥樣のお取なしなされ下さらば、此上もなき御慈悲」と淚と倶に賴むにぞ、奧方「ヲヽ夫ならば道理〳〵、今も云通り、今日は御家老主計樣も御出なれば、願うてもない幸、親子連れでお願ひ申しや。夫兵太夫殿へは自がお咄申そ、上使のお出に間も有まい、其間勝手へ行て休息しや。後に〳〵」と入り給へば、かちもいそ〳〵市松を、連れて勝手へ入りにける。直は武士の常なれや、和泉の國の執權職介松主計、跡に續いて大島佐賀右衞門、御用の長櫃家來に持せ、靜々と入來れば、館の主玉島兵太夫同苗磯之丞、其外組下の役人召連れ出迎ひ、兵太夫「先以て今日は御兩所共に御苦勞、いざ先あれへ」「然らば左樣」と上座に通り、各席を改むれば、主計諸士に向ひ、主計「扨何れも仰渡さるゝ仔細といつぱ、此度殿御入國の御悅びに、お國詰の諸役人へ御土產を下さるゝ。目錄に引合せ頂戴有れ夫々」と有れば、佐賀右衞門目錄ひかへ、主計「組頭玉島兵太夫殿是へ〳〵。扨貴殿には御在京の間役儀怠なく勤られ、非番の折々は組下の諸氏を集め、武藝を專勵れしと上聞に達し、殿にも殊の外御滿足遊ばされ、長船の刃一腰御土產に下しおかれ、御折紙に新地二百石の御加增、有難う思召れよ」と、渡せば退つて頂戴し、兵太夫「コハ冥加もなき仕合、武士の面目此上なし、御前宜く御推擧願奉る」と、一禮述べて控ふれば、主計「組下駒形杢兵衞殿」ハツト答へて立出る、主計「承

に來たか、アイと申上げたらば歸らぬお心推量して、お歸りのかの字も言はず、遠合からの御異見がお耳にとまり、早速お歸り遊ばした」奥方「ヲヽ夫は出かしやつた、磯之丞が此家を相續するも、偏に其方が働、返すぐ\も忘れはせじ」おかち「アヽ勿體ない事御意遊ばせ、扨私がお使の役目も是迄、お借り申した此お小袖、奥樣御免遊ばせ」と襠上著脱置けば、下は晴著の木綿物疊ざはりもしとやかに、親子諸共座を押下り手をつかへ、「憚ながら奥樣に、お願ひ申上げ度は夫の身の上、今さら改め申すには及ばねども、私がお家に御奉公の中、お屋敷へお出入の堺の魚賣、團七殿と不義致したる誤にて、直にお暇下され、それより堺の南の店で夫婦共挊の魚商賣、何とぞ御恩のお主樣へお詫び申しに、今日よ明日よと思ふ中に、此子は出來る、世帶の世話に絡れ、思はず御無沙汰、所に此度夫團七の難儀、定めてお聞及び遊ばさる、去年の九月十三日、寶の市の歸るさに、此御家中のお草履取と、乳守の中で口論仕出し、相手は主人をかうにきて、酒機嫌の刃物三昧、何が夫もきかぬ氣なれば、先の相手に手を負せ歸りしを、喧嘩兩成敗と有て、相手も倶に牢舍仰付られ、事の濟む迄大阪の長町、三河屋の義平次と申す私が親元へ、此子を連歸つて居ても、主の難儀を思ひやつては有るにもあられず、泣いて計をりませしが、殿樣御入國のお悦びに、數多の科人を御赦さるゝと聞くや否や、此子を連れて出牢のお願ひ、何卒

様は乳守の傾城に腰打抜かし、一昨日からづつと出られた」角内「さればいの、今朝から七度半の呼使でもお歸りない、あのお身持が親旦那の耳へ入らば、久離が物はぶらつく、仕舞はあなたの身の上を、歌祭文でやりおろ」と、さがなき下の口の端に、かゝる折節磯之丞三日酔を乘物に搖られ〳〵て戎島お鯛茶屋より立歸れば、おかちも後より息急と走付き、「コレお乘物直に直に」と舁入れさせ、音なふ間もなく奥方は稚子の手を引きて、疾しや遲しと一間を出で、奥方「ヲヲおかち戻りやつたか大儀〳〵」おかち「奥樣にも腕白者で嘸おやかましう思召す」奥樣「イヤなう其方の育が良さに年よりは温順い、此樣な子を持つは親の大きな氣助り、それに付き、今奥で磯之丞が顏を見て、嬉しい中にも腹が立つ。是迄の放埓は若い者の有る習と、父御の手前は愼みしが、今日は殿樣より仰渡さるゝ仔細有つて、俄に御家老介松主計樣の御出、此御用にはづれては再屋敷へ歸る事も叶はず、品によらば夫にも如何なるお咎が有うも知れず、其憂目を見る悲しさに、心一つで兎や角と案じ暮し、親子の縁も今日限りかと、其方が便を聞く迄は、なんぼう胸を痛めしぞや」おかち「アヽ夫はお道理、嘸お待兼なされうと私も心急たれど、何か御遊興の最中なれば、ほつかりとも行れず、御家老主計樣のお名を假つて、如何やら斯やら若旦那のお目にかゝつたれば、お聞遊ばせ、かちではないかと、夫は〳〵お目角強く、迎に來たか意見

れ客に去に神の付いては其處にたまられず、サアお歸りに漸〳〵と、息の出たるたいこ持、爰は一番さつぱりといなう峠の孫ぢやくしときたわいな。そゝるたいこが拍子には、あはぬ玉島磯之丞、送られ館に歸りけり。おかちも跡を見送りしが、小戻りして緣先に、手を五つ六つ打鳴せば、ざは〳〵〳〵と立戻り、濱邊につくまふ以前の乞食、「お家樣、お首尾は好ござりましたか」「首尾は好いとも〳〵其方達が身の上咄しで、唐の孔子の意見より彼方お一人御合點いて、館へお歸りなされたは大い働、お袋樣のお悅びおかちが今日の身の面目禮をいはう」と、勝手より取寄せ置し挾箱、蓋押明けて夫々にちはる布子の裄尺も、荒男には大島と目利手利の仕立際、手手に戴き〳〵て、乞食「コリヤお金まで下さりまする、お袋樣から當座の御褒美、お有難うござりまする」さらば〳〵の悅びは、おめでたい茶屋戎島おかちは屋敷へ三重いそぎ行く。

第二　殿の諚意を卷込だおやま繪の拜領物

治まる御代は國民に惠も深き和泉の國、濱田の御城主東より御歸國と、上下賑ふ家中町、表美々敷一構お國詰の諸士頭玉島兵太夫、今日御上使の御入と中間小者がはき掃除、庭の盛砂箒目に武家の行義を顯せり。中間なんと角内、お屋敷は此樣にお客儲で混ぜ返へすに、若旦那磯之丞

散した賽の目で、死だ親父が草葉の蔭から睨まれた、親の罰銀の罰、身の程忘れた罰で、繿縷著る樣に成つたとは、今では合點がいても跡の間、人の餘り喰ふ樣に成つて、くれぬ物つい取氣に成つたのは、榮耀榮花に戲へ過し、罰の當りたい程當つた骸、擲なりと殺すなりと、存分にしてくれ」と、命惜まぬ悔泣、歔り上げ〳〵、涙に亂が身の上は、二人が身にも外ならず。めんつに餘る囉ひ泣、實も乞食の涙なる。こつぱも涙押拭ひ、樵「エイハ聞きや素性も能い者なりなまよ堪忍してやれ」八「ヲ、汝が言ふ事なりや赦してやろ、重ねて盜ひろいだら頬手打折るが合點か、中直りに醬油囉うてきすほ燒かう、板お造酒でも振舞へ」と、腹の酒樽詰かけるは、伊丹にあらぬ薦被り打連れてこそ急ぎ行く。始終を聞いて磯之丞、物をも云はず片隅の刀引提げ立上れば、琴浦「ヤ、おまへは何なさる、どこへお出遊ばす」と、琴浦に咎められ、磯之丞「イヤ何處も行かぬ俺や去ぬる」琴浦「去ぬとは旦那そりや何故に」磯之丞「如何ぢや知らぬが、俺や去にたい」おかち「おまへがお歸り遊ばすと今日の私が使の口上、お袋樣の御内意を無下になさるゝ同然」磯之丞「イヤサア無下にならうが如何せうが、今の新米乞食が言分、俺が身持に違ない、胸にひつしと應へて來て、爰にはどうも居られぬ〳〵、内の首尾見て又來う太夫」琴浦「アイナ夫もお袋樣のお心休めぢや近しいに又お出で」磯之丞「松屋の門迄送つてたも、おかちは別に戻れよ」と、居浸

物心覺えるとのら友達に誘はれて、此堺の乳守へ來初め、太夫が傍では恥しうて爪衝へて居た物が、二度に成り三度に成り、四度目は面白し、五度めは可愛う成り、それから連も邪魔に成る、十日も廿日も居續けの他愛なし、寄障る者皆追從、旦那くわつとに乘上られ、粋と言るゝが嬉しさに、來ぬ日の紋日も買樣に成つて來ると、始には似ざりけり、のらめ〱と親父の異見、絲瓜の皮とも思はゞこそ、親を親ともせぬ俺を母者人はまだ抱へて、陰へ成り日南に成り幾度か女夫喧嘩、其母者人へは義理はなく、得手勝手の義理ぢや伸しや張るの、それからは身請ぜん策、親方が高ばる手代が困まる、此方はし疑る、親父は叱る、ひつ捉まへて二月ほど座敷牢同然、一寸も動かさず、物欲い時分に無理に嫁呼んであてがふ、何が親父が孔明をやられても、此韓信跨は潛らず、蹴飛して置く故に、五日歸りに直ぐに去狀、孔明が死んでから三國志の亂口、一七日立たぬ內、彼色を請出して女房に持つと、家の手代は見限つて引く樣に成つて來る。主が主なら家來も家來、新奇の手代は引負する田舍の客も餘所へ行く、仕樣事なしに商賣變へて、マア請酒屋と出て見れば、よその飲人は一人もなく、家內して飲上る、當分いらぬ衣裝道具、質屋へ飛んで月の切たも利の前、流の者を女房に持つた因果、まだ奇特にもお眞向樣は入殘しの取賣で、女夫暮すうち、盜人に遭ひ火事に遭ひ、ほんやしても猪口才でてらの錢皆はり込み、分

追つて來た旦那衆の巾著、儕が切てよう俺に難儀させたなア、大掏摸奴、大盗人め、コリヤヤイ此堺街道は夜夜半銀持つて通らうが、指さす乞食一人もない、儕が様な奴生けて置や、仲間の者の足が上る、其處退け彼奴打殺す」と掴みかゝるを、與「マヽ待てコリヤ新米よ、なまの八が云ふ通り、汝りやちよこ〳〵腰な物弄るな、そんなら手よう盗人せい、但し盗ぬといふ言譯有らばサアこつき出せ、まき出せ」と、こつぱの權にきめられて、頬も心もしよけ〳〵と、新米「こなた衆が皆尤盗まうと思うてした事ぢやない、帶の間ひから落ちかゝつてあつたを、一寸持つたらずるりと抜けたが、盗始めの盗をさめ、殺したか殺せ、おれが段々なり下つた懺悔を聞いて下はりませ」と、詫れば上には「コリヤけうとい、したが非人の言譯とは、あふひ下坂ぢや有るまいか、旦那それから御覧じませ」と、幇間が悪口耳にもかけず、新米「まあコレ二人ながら聞いて下はれ、わしが親は太物問屋、大名の掛屋もして、羽がいの下で人の百も養うた者、それ程に仕出した和郎ぢやによつて、何もかも始末しられたやら、四十過ぎての一人子が、俺とは違うてよい衆付合させにやならぬと言うて、謠を習ふ、舞を習ふ、鼓の茶の湯の何のかのと付合に錢の入る事ばつかり、伽羅かける外秤とやら手に取つた事もない、綿が高いの、錢が安いの手代どもが寄合ひて、勘定が合ぬの引くの出るの、そんな事は空吹く風、嘘しても人参三昧、

ア如何して出入を」おかち「ハアお赦はなけれども、お願ひあつて」礒之丞「ムウ成程知つた〳〵、去年の寶の市に、中間と口論して牢舍した」おかち「アイ〳〵其團七殿事に付いて」礒之丞「チヽサ氣遣すな〳〵、喧嘩の相手の中間が主の、大島佐賀右衛門は俺が友達、たつた今迄爰に居た、主計と云ふ名で聞き怯ぢ迯げて去んだは、弱い奴、俺が味よう云ひ聞せ、佐賀右衛門が申し下せばつい濟む事、追付け事なう濟してやろ」琴浦「そんなら何卒お世話しておかち樣の氣休め、佐賀樣へ人遣つて」と女の事は女同士、名にも引くかた琴浦が裏なき詞に牽頭の茶平、茶平「サア〳〵目出度い埓明いた、此悅びに今日の趣向、跡目論の先きの殘り、見物にはおかち樣、始めうでは有るまいか、但しそれより飲にして、大な物で始めましよ、お銚子早う」と叩く手の、返事も長き春の日の、濱邊の礒な踏みあらし、見るめけやけき非人の喧嘩、取さへ人も友つどれ、待てよ放せと聲かけて作りの下の騷は、「こりや一興跡目論より乞食論、賴光ぢやない貰ひかう、樣子を聞かうと緣先から、見おろす下に打叩き、八「ヤアこつぱとめな」こつぱ權「コリヤ八よ待て」八「イヤサ邪魔すな」權「イヤサマヽ待て、コリヤわれも仲間で口利者、譯も云はずにぶち擲、如何した出入ぢや云うてからせい」八「ヲヽ利窟がなうてせう。ノコレ此奴めは此比の新米、見れば骨も堅し、仲間に入れて大事ないと、思ひの外横道者、天下茶屋から廿町餘り、一文の錢貰はう迚

のお使者の御用承つた私が作、主計樣と言うたりやこそ、お逢ひなさるゝ樣にも成る、ホヽヽホお嬉しう存じまする、御口上は此通り」と、思ひの外に性惡の、腰押母の御意はよし、下地は好なり、「ムウ川止で戻りが遲い、夫迄はゆるりつと爰で遊べと言はるゝか、そりや眞にか」「アイ」「ア俺を產だわろ程有る、いかう粹になられたの。さうとは知らず麁相申した、そんならばついちよつと、狀おこされりや濟む事を、あつたら膽を冷やさした、茶平勘六來い〱」おつと障子を引き明けて、急々ひよこ〱、茶平、勘六「オイデ〱」磯之丞「どうぢや聞いたか」茶平「承りました。氣疎い段か、お袋樣は日本一の粹大明神、浦樣も追付け見だい明神にお成りなさるゝ瑞相めでたし〱」と、そゝり立つれば、磯之丞「コリヤおかち汝への今日の褒美には人に見せぬ取つて置き、乳守の里から琴浦といふ根引の鬼灯、丸貌を拜さう、太夫々々」と呼びて立られ、「つい爰には居るけれど行ても大事ないかへ」と面はゆげに立出れば、おかちは會釋し手をつかへ「おまへが琴浦樣かいの、若旦那のおいとしがり、ほんに御無理と申されぬ、お目元なら口元なら、殊にあなたをいとしほがつて下さります、ほんにお嬉しうござります」と、やさしい詞の貌つく〱、磯之丞「ほんに汝や前屋敷に居たお勝、茂平次とやらが娘ぢやな、先きには腹の立つと氣の揉たのでとんと見忘れ。コレ太夫、あれも嫌ひでないぞいの、色事で屋敷を出たが、マ

座に著けば磯之丞、喰違うたる使者設け、褞姿に合點得ず、磯之丞「そなたが介松主計殿な、介松氏とは懇意に致せば、奥方も存じて居る、但し主計はいつ女になられた、何用有つての只今のお出、まづあれへお通り」と慇懃に待遇へば、女「主計樣とはお目にかゝらふばつかりの作り名、お袋樣からお使に」磯之丞「言ふな〳〵、殿樣お歸りなさるゝ故、お留守に行てをる親兵太夫も、屋敷へ戻らるゝによつて、戻らぬ先に俺に戻つて居よとの使か、叱られうが如何せうが去んでから又出難い、往ぬまいと云ふからは、母者人が蜻蛉返りしやらうが、親仁が目玉むかるゝだけはむきやつても、去ぬ事ならぬ、勘當は御勝手次第と、去んで言へ、又しても〳〵戻れ〳〵と、役にも立たぬ使おこしやんな。遊びの邪魔に成ると言へ、何ぢや異類異形な者が來てあへ探す、きり〳〵いね」と腹立聲、おかち「アヽお見忘れも御尤も、前かどお屋敷へ御奉公申しました、おかちと申す者」磯之丞「サアおかちであらうがおまけで有うが、去ぬる事ならぬ〳〵」おかち「ならずばお歸りなされいでも大事ない、お使の御口上は、殿樣明日お歸りの筈なれど、大井川で三日の逗留、阿部川で又五日の川止、道中八日のお隙入お歸りもそれほど延る、お留守の內はお館に御用もなし、お歸り迄はゆるりつとお遊びなされてござりませと、お袋樣の粹なお使、だが來てもお迎かと思召してお逢ひなされぬ、折から私もお願ひあつてお袋樣へ參りました、出合頭

合した、身共はそつと抜けて去ぬ」と立よれば、磯之丞「アヽこれ佐賀右氣の悪い、貴様が取成言うてくれねば仕舞がつかぬ」佐賀「イヤサつがふがつくまいが身共は主計に逢うては濟ぬ」と、我身勝手の爭合半、「それもう爰へお通なさるゝ、跡目論も取置け」と手々に衣裝著代へるやら、譯も何やら知らねども言交したる夫の爲、碌な事ではあるまいと、そゞろ涙に汐汲の、太夫の傍輩「コレ太夫さん、エヽこれ〳〵泣く所ぢやない、おまへは奥へ、禿衆奥へ連まして」と、氣を揉む身内の冷汗に、紅粉の剝たる公時が、顔は斑の飛入椿、首が落はしよまいかと、騒ぐ末武八百屋物、嶌田の見世へ出やせぬか、「旦那樣申し聞えませぬ、やつぱり久三が役相應、米ふむ臼井がましぢやのに、定光尻がくるであろ」と、口合やら泣事やら引れ者の歌同然、夢中に成るを踏飛し、「如何であらうと俺や去ぬる」と、難儀を人に塗り付けて、去ぬる大鳥佐賀右衛門、悪事と後に知られたり。酒に亂れても武士は武士、磯之丞は著物著代へ、磯之丞「アリヤ亭主茶平、汝等も皆勝手へ行け〳〵、主計に逢うた其上は、如何した事が出來うも知れぬ、必ず騒ぐな、出まいぞよ、太夫も必ず出やるな」と覺期究めた詞の端、聞く氣遣は有りながら、早次の間の足音に、「短氣を出して下さんすな」と、心ならずも打連れて、奥の一間に潜居る。次の間も、嘸驚つ主計とは、女の名にも付くなれど、それにはあらぬ打かけ八町と、屋敷を合せ帶、骨牌結びの折目高、下

綱佐賀「扨も若王寺の、ハテサテ淨瑠璃待たでや、ヤ茶平そりや如何ぢやい、別當の裝束袈裟衣を忘れたか、昨日の役割僘醉うて覺えぬな、玉島磯之丞は源の賴光殿、此大島佐賀右衞門は、渡邊の綱、公時は此御鯛茶屋の亭主、八百屋の末武、久三の定光、琴浦その汐汲て、跡日論の淨瑠璃狂言、是まで鹽梅がよかつたに、頭取何と云ひ付けるぞい」と、叱られて公時も、公時（亭主）「茶平何と狼狽へてぢや、衣裝著て出直した」茶平「いや〳〵〳〵出なほし所ぢやないわいの」賴親の調伏より大きな事が出來て來た」亭主「ム、來たとは何が」茶平「來ました〳〵、しかも歷歷」「ム、又磯之丞、貴樣の迎ひか面倒な、去なしてしまやれ、いなせ〳〵」と放埒の、腰押惡事の佐賀右衞門にさかなやうはと乘せられて、八百屋「コリヤ去ねと言へ〳〵、去なずははやうぼい去なせ」と、酒が言はする我儘八百、茶平「イヤ〳〵いつものとは違ひまする、泉州濱田のお屋敷から、御傍輩の介松主計樣、堺のお鯛茶屋は是か、玉鳴兵太夫殿子息、同名磯之丞殿、明暮是に居申さるよし承り、使者に參つたと、乘物でぐわつたひし」賴光（磯之丞）「ヤア何ぢや主計がわせられた、そりやマア何しにわせられた。ヱ、ひよんな所へわせる和郞」と、驚く賴光慌てる綱、腕取れし顏付でも、口は利口に、綱（佐賀）「エ、コレ磯之丞何をうろ〳〵、主計がそれ程お身は怖いか、堅い自慢の尤も顏、異見に來たに違ひは有るまい、畏つたのぬらりくらり、當分遁に間に

忍び、六條河原の院に鹽竈を移し、難波の三津の浦よりも、うしほを汲せ遊興有りしは、何とやらん妙なる樣に存ずれば、御庭前に鹽屋の體を飾り、美女を集め蜑乙女に作り、汐汲む體の遊景は、如何あらん去ながら、兎角書付を以て言上然るべし」と、やがて一々相記させ、扨人人を召具して、御前をさしてぞ出でらるゝ。御前になれば、右の次第を言上有る。頼光御覽じ、頼光「先以つて某が病中を悲みて、精々を盡さるの段、誠に以て祝著せり、いづれも宜しき事ながら、中にも此血鹿の鹽竈の事は、我盛の古へ陸奥へ下りし時、少は見物申して有る、昔の體一入懐しく思ふ間、先づ鹽竈の風景望なり」と、御機嫌宜しく宣へば、俄に用意と、聞えける。心も詞も及ばれず、上下洒落たる遊びとて、さゞめき渡る海景色、目元に汐を汲む海士は、血鹿の鹽竈引きかへて、千話の鹽がま是や此、君が心を汲みて知る、賤が手業のしほらしき、色と情の二人連、なるかならぬか鳴尾崎、今日打解けてあはぢ島、通ふ乳守の廓にて、幾夜重ねん香田の端花の顔ばせ吹付ける。それ〳〵、こはい東風かぜのばつと吹井の浦かとよ、我名を問はゞ琴浦が、里にありしは昨日今日、興も一入增るらん。いざ〳〵汐を汲べし、サアなう汐を汲うよう、たんぶ〳〵と汲み分けて 謡持つや田子の浦、東からげの汐衣、二月の雪と見なせば消まじき、壽なりと祝ひける。時に紀州熊野の別當慌たゞしく參上し、別當(茶平)「ヲツト待て貰う」

團七九郎兵衛
釣船三ぶ
一寸德兵衛

夏祭浪花鑑

第一　色の水上汲分けた御鯛茶屋の鹽竈

諸行無常と響きつゝ、菩提を知らする遠寺の鐘、生者必滅四季轉變の花の色、定なきは娑婆世界。爰に六孫王の御孫多田の滿仲の御嫡子、攝津の守源の賴光とて、智勇尊き大將有り。然るに如何なる御宿運にや、御心地例ならねば、渡邊綱坂田公時卜部末武臼井定光、其外殘る諸大名、思ひ〳〵に相詰めて、御機嫌如何と伺ひ居る。中にも渡邊進み出で申すやう、綱「如何に方々、此度君の御病氣は、御心の結ほれと覺ゆるなり。御慰を催して御心を晴しなば然るべし」と述べければ、人々頭を傾けて、未だ詞も出さゞるに、公時やがて進み出で、公「先某が存候は、夫人の心をいさむる事、酒宴に增したる事は候はず。唐土の樂天が酒功讚を學び、御庭前に酒の泉を湛へ美女を揃へ、今樣朗詠さま〴〵に、音聲微妙を盡さん事如何あらん」と申さるゝ。渡邊綱是を聞き、綱「尤も面白くは候へども、それは異國の諺なり、近き我朝の風景を申すべし、嵯峨の天皇の御宇かとよ、融の大臣といひし人、思ひや空に陸奥の、血鹿の鹽竈を堪

碁太平記白石噺　終

常悦殿の情り、「南朝北朝和睦調ふ上からは、鞠が瀬殿も相助り、兩將に異變も有るまじ。常悦殿の情により、綸旨も手に入る千束お染も妻妾、新田楠石堂家の、契りは堅き白石噺、姉と妹が孝の道、道に道ある時津風、北は越後路、南は紀の路、津々浦々の末迄も、納り靡く君が代は、目出たかりとも中々、申すばかりはなかりけり。

とらせん」と、勇備の詞にさしもの師泰威に恐れ、如何はせんとためらふ内、どうど蟇し大石火矢、大地は裂けて燃え立つ炎、祕法の火術に師泰主從、微塵に碎けて死してけり。常悦につこと打笑ひ、常悦「年來凝つたる地雷の試み、アラ心よや悦ばしや。是より直に笠置の城へ後詰して、北朝を取挫ぎ、目出度御代にひるがへさん」と、英雄魏々たる丈夫の魂、實楠の二葉の勇氣、逞しかりける、三重有樣なり。

第十一

蚍蜉集つて大樹を動かす、義興を搦めんと、笠置の山を十重廿重、淀野木津川甕の原、甲の星を暉かし、喚き叫んで攻登る。爰ぞ一期と義興は、太刀眞向に差かざし、火花を散らして戰ひけり。智勇兼備の太刀先に、多勢もあぐんで見えたる所へ、思ひがけなく後陣より、崩れかけたる北朝勢、義興得たりと薙立つれば、右往左往に敗軍す。義興猶も追驅るを、常悦「しばしばし」と聲をかけ、宇治の常悦駈來り、常悦「金江熊川に謀を傳へ、北朝の後陣より只一戰に打勝つたり、心安かれ義興殿」義興「ハヽア驚入つたる貴殿の妙計、南朝ふたゝび榮える吉相、賴もしゝ〳〵」と悦び勇む折こそあれ、小治郎伴ふ寄浪御前、千束お染彌左衛門、金江熊川駈來

とお染が悦び、忙い中で妹背の固め。忍び立聞く八尾六が、身構へして踊出で、八尾六「何もかも皆聞いた、師泰公の下知を受け、犬に入込む此八尾六、報知は斯う」と有合ふ火入、もがりの竹に投付ければ、合圖の狼煙あがるにつれ、遠音に響く貝鐘太鼓、義興すかさず首筋摑み、ぐつと一しめ投付ければ、目玉飛出て死してけり。常悦は突立上り、「此場は我に任されよ、義興殿には二人の女、彌左衛門諸共に、一先立退き笠置の古城へ、早く／＼、道程近きは長池玉水、此地へ來る道筋は、皆常悦が味方となし、笠置の要害堅め置きたり。軍慮を爰より見せ申さん、彌左衛門」と詞の下、千束お染も奥の障子、明方近き笠置の城、中黑の旗菊水の、旗手にさし物數千の人馬、折知る花に色添ひて、晝と見まがふ提燈松明、目覺しくも又潔し。常悦庭におり立つて、何かは知らず川岸の、八重山吹をかきわけて、仕度する間に義興は、二人の女彌左衛門諸共に、引連れてこそ出でて行く。ほどもあらせず寄せくる師泰、大勢引具し大音上げ、師泰「此家の内に謀反の張本、宇治の常悦隱れ居るよし、合圖によつて向うたり、最早遁れぬ、尋常に腕を廻せ」と、呼はつたり。常悦騒がず悠々然と、床几にかゝり、常悦「ヤア謀反とは存外なり、敏達天皇の後胤、楠判官正成が一子正之、常悦と假名せしは大望露顯に及ばぬ以前、今日只今憚りなく、北朝を取挫ぐ、大元帥の目通なるぞ。德になつき禮儀を施し罷出よ。對面して

の今此時、味方に取つて不祥の逆氣、我手に於て事破れん覺なし、扨鎌倉に置いて秋夜が方に、凶事あるは必定、アラ不思議や訝し」と、そなたの空、詠めやつたる叡智の明察。義興千東人々も、共に怪む其折から、百廿里を二日半、飛鳥の如くに熊川三平、常悅が前に手をつかへ、三平「扨も今度の御采配、鎌倉表の惣大將と、定め置かれし秋夜殿、軍用金を集めんと、出入の具足師藤兵衞と云へる者、招き寄せて酒興の上、一味の密事を明かされしに、其場は承知の體にもてなし、内へも歸らず、鎌倉の決斷所へ卽刻注進したるよし、鞠が瀨殿を搦めんと、既に其夜の亥の刻過、捕手の役人市垣將曹、組子引連れ込み入る所、例の鎌鑓縱橫無盡、寢卷の素肌に術盡きて、怯む所を折重り、繩めに引かるゝ決斷所、其間に老母が卽座の氣轉、連判狀は火鉢の中、燃え立つ煙に立紛れ、漸と一方を打破り、此旨注進仕らんと、夜を日に繼いで參上」と、大息ついで訴ふれば、是はと人々呆るゝ内、凜々然たる宇治常悅、無念骨髓に押通り、眼は裂けて血を注ぎ、常悅「エヽ口惜や殘念やな、日頃短慮の鞠が瀨秋夜、一方を預けしは一生の我が誤、三平は樣子難波の浦の勘兵衞へ、片時も早く告知らせよ、急けく」の下知より早く、飛ぶが如くに駈り行く。彌左衞門はうろく聲、彌左「モウくかうなる上からは、此子の事は千束樣」「何のいなア」「悋氣どころぢやござんせぬ、大事の殿御を二人して」「エ、有難い」

ば、お染樣はお主ぢやないか」と、こねる紺屋の糊加減、ねまりの强き親仁なり。千束も氣の毒、千束「サア、其奉公人に、何卒お暇を」彌左「ヲヽ其樣にびら〳〵と長い物著た奉公人、職人の内には合はぬ、成る程暇もやらう、ガやるにしてからが十日と廿日は、お禮奉公も勤内ぢや、お染樣の得心さしやるまではマァならぬ、出替り時まで待つて貰をう、ならんぞ〳〵〳〵ずんどならんぞ。アヽ、あんまりしやべつて腹がへつた、コリヤお竹よ、飯炊いたか」千束「イヽエ」彌左「是は扨、早う焚をれやい。出來たらソレ、茶漬け一杯喰せ。コリヤ吉六よ、何うろ〳〵、ソレ味噌摺つて、汁拵へい」と、我儘も、主命何と長袴の、裾踏しだく膳拵へ、姫君變じてまま焚や、袖の錦に襷がけ、手拭ちよつと奧樣も、今更何といふ食の、まゝならぬ世を姫は氣の毒、「手つだをかいな」と云ひつゝも、男の袖をすり鉢の、目と目を味噌のこい中や、お竹は胸の中くわつ〳〵、じや〳〵時の釜の下、火を引き椀拭く、鍋取の、「お公家樣でも大名でも、喰はねばならぬ」と彌左衞門、箸箱取出し待居たる。常悅は諸手を組み、始終の樣子伺ひゐる。お竹は時分と杓子とり、櫃に移せば陰々と、湯氣立のぼる不祥の氣、常悅きつと目を付け、常悅「アヽラ心得ぬ、一掬の米一盞の水、釜中に熟して人間の生育す、生成の根元食傾の冠たる一物、宇宙の珍寶是に過ぎず。今器に移せる飯の湯氣、殺罰の氣を顯はすは、ムヽ、軍將合體

爰へ來い。コレ〳〵お染樣、何も泣く事はござらぬぞや。ヤイ二人とも爰へ來をらぬか、暇の乞捨は天下の法度ぢや。コリヤやい俺は何にも知らずに、奥の間に寢て居たりや、此子がござつて、コレ彌左衞門、吉六と云うたは義興樣、お竹は千束姫樣とやら、女夫ぢやげな、そんな上つがたに、紺屋の娘がどう女夫にならりやうぞ、止めたうても此樣な形で、あなた方に詞を交すも恥かしい。したがあんまり殘多い程に、せめても一度あなたから、何となりとお詞が聞きたい、ちつとの間なりと止めてくれてよ、寢て居る俺を搖起し、しく〳〵と泣いて居さしやる、ヤコリヤ又尤、無理ぢやない、ヲヽ一ばん云はにやならぬ所ぢや、大事ない〳〵、氣遣ひさしやるなと受合つて、留めに出た此親仁、論より證據、書た物が物云ふはいやい、書いたものが。お竹めといふ女房のある上、ナゼ此子に疵付けた、コレマヽいかな大身れき〳〵でも、大事の娘御の喰迯は、人體に似合はぬ〳〵」と、わよりかけたる主思ひ、理の當然に義興千束、行くも行かれず顔見合せ、默然として在せしが、義興「ハヽア尤の一言去りながら、聞かるゝ通り敵方を、取拉ぐ性急の場所」彌左「こりややい、紺屋の内に中形や、小紋の形はありうちぢやが、敵がたとは何の事ぢや、其樣な用を、誰が云付けてわりやするぞ、最前祝言までしたぢやないか」義興「イヤサ、夫はさうでも、しかと妻に致したと云うではなし」「サヽヽ妻でなけれ

上、今又奥にて亡母より某へ、殘し置かれし定紋の旗、彌左衛門より讓受けたり。イザ疑ひを晴されよ」と、懷中より取出す、楠家に傳ふる菊水の旗、折に幸ひ山風に、へんぽんと飜がへる、實かんばしき橘の、氏の系譜ぞ著るき。義興ハツト横手を打ち、義興「ハヽア誤つたり誤つたり、斯く明白なる楠の正統、いかで疑心を生ずべき。今より共に心を合せ、勢ひ微弱の吉野山、花咲く御代に廣へさん」と、誓は龍虎の新田楠、義兵の礎、常悅「ハヽハヽ、幸ひく、常悅が去りし頃白坂にて、思はず手に入る石堂家の綸旨、我が手にあつて益なき賜、千束殿への我寸志」と、渡せば取つて押戴き、千束姬「マ忝い、さりながら、我等夫婦が姿を窶し入込みしも、常悅樣を討取る手筈、斯うお心が解合からは、此場の樣子味方の者へ云聞かせ」義興「ホヽ能くぞ心付きしぞかし、片時も早う合體の委細を知らせ、師泰が捕手を破らん。千束來れ」と引き連れて、出行く兩人奥の間より、「コリヤ待て吉六、お竹も待て」と、しはがれ聲、お染が手を引き彌左衛門、力味返つて大胡座、彌左「ヤイ吉六め、イヤサ本名は新田殿であらうが、また千束姬で御座らうが、コリヤ見よ、コヽコレ、奉公人請狀の事、一此吉六と申す者、コレく、コレ、此竹と申す女、跡の文言讀むにや及ばぬ、サ是が此方にあるうちは、御大將でもお姬樣でも、やつぱり紺屋の下人吉六、飯焚のお竹に違ひはない。主の俺が用がある、マヽ爰へ來い

こそは入りにけれ。早灯火も眠る頃、遠寺の鐘のたうくと、やゝ更渡る丑みつ時、奥より出づる吉六が、以前の姿引かへて、大小立派の長上下、お竹も元の千束姫、見かはすばかりの裲襠姿、千束姫「申し義興樣」義興「コリヤ、シイ聲が高い。兼て云聞かせし通り、此家の𪜈勝助が、隱謀企ある樣子、疾より知つて入込む所、古郷を慕ひ戻りしは天の與へ、南朝へ味方せば差赦し、北朝方へ加擔せば、首討つて尊氏を亡す血祭、ぬかるな千束」と囁き點き忍び入らんとする一間、障子の内より聲高く、常悅「吉六と姿をやつし入込みし、新田義貞の弟義興、宇治の常悅見參」と、一間の障子押開き、長絹に長袴、金作りの陣刀、威あつて猛き其骨柄、義興臆す色もなく、傍近く進み寄り、義興「某が本名察する上は包むに及ばず、汝如きの育賤しき匹夫めら、謀反などとは事可笑しや。名もなき軍は萬民の愁、尋常に首さしのべ討たるゝや否や。但し心を改め義興に仕へ、南朝の御味方申すや、サヽヽ、返答聞かん」と、詰めかくれば、常悅「ホヽ健氣なり新田殿、南朝無二の忠義臣、實義貞の舍弟ぞかし、賴もしくく。某が宿意の一條、名もなき軍に豈天下を苦しめんや、我も南朝譜代の忠臣、楠判官正成の一子正之、ハレ珍らしき對面や」と、優美の顏色、義興からくと打笑ひ、義興「ヤア手詰に至り、此場を遁れん其僞に、正成の一子とは、何を證據、ソレ聞かん」と云はせも果ず、「ホヽ、不審尤、我正しく夢の告にて、一子なる事悟りし

なたはなう、おりやモウ其時にはの、コレ此白い目玉から、黒繻子の樣な涙がこぼれたはいなう」と、親方思ひの偏窟親仁、昔作の形板に、地味な涙を流しけり。常悦も打絶えて、勘當の身の悔泣、今更返す詞もなし。彌左衞門目を瞬き、彌左「コレ、まだ其上に母御さまも」勝助「イヤ、御死去の樣子は參りがけ、村はづれで承はり、申さう樣もない殘念千萬」彌左「其殘念が遲いはいの。ア、併し、今泣かしやるが眞實眞身、母御樣が存生の中云はしやるには、コレ長兵衞、此勝助めは何國に居るぞ、此母が死んだら、日頃の不孝思ひ知り、嘸勘當が悲しかろ、若し心も直り戻つたなら、勘當を赦してやつてくれと、親旦那の名をおれに讓つて置かしやつた、久離は切れぬ、赦します」勝助「何々、彌左衞門と名を變へ、赦してやるとは、ア、有難い御仁心、ぞつこんに滲み渡り、家來とは思はぬ彌左衞門樣、親父樣」彌左「爰な若子勿體ない、主が家來に何の禮」勝助「イヤそなたがあればこそ、勘當も赦りたでないか」「赦りたが夫程嬉しいか」「嬉しうなうて何とせう」「おれも嬉しい」此方もそちもこちもと手を取組み、盡きぬ主從緣の糸、袖や絞に染めぬらん。常悦猶も感じ入り、勝助「千金にも代へがたきは人の實心」彌左「サア〳〵さう思はしやるならアノ佛間で、改めてお詫事さつしやれや。まだ其上に母御樣の、くれ〴〵と云置かしやつた事もあり、委しい事はアノ一間で」勝助「誠に夫も老人の心休め、イザ同道」と打連れて、一間へ

えて笠取る庭の内、「誰そ頼まん」と案内の聲、彌左「アレどなたやら、お得意先からお人がある、ソレ茶でも持つて出ぬかいやい。南無阿彌陀佛〳〵」勝助「イヤ勝助ぢや、身共ぢや」彌左「トハ、前の旦那に生寫し」と、不審立出で透かし見て、彌左「ヤアこなたは息子殿ぢやないか」勝助「長兵衞堅固で祝着」と、草鞋解く間も待兼ねる、老が深切ほや〳〵機嫌、彌左「ヤレ〳〵嬉しや、サヽサあがらしやれ〳〵。今の先もこなたの噂、家出さしやつたを、數へて見れば十三年、アヽ今頃は何處に如何してゐやしやるやら、今日は出世して戻らしやるか、明日は心も直つて歸らしやるかと、待ちに待つたる今月今宵、ヨウマア戻つて下さつた、と云ひたいが、聞えませぬ。内の勘定なるらぬも知つてゐるこなた、厄介を儕に振向け、面白さうに薦僧姿、尺八の竹よりは、なぜもがり竹に氣を入れさしやらぬ、罰の程思ひ知らしやつたか。トいうて其厄介被つたを恩に著るおれぢやござらぬ、妹御のお染樣もモウ十七、髪の飾りや衣裝まで能い物が欲しい最中、此間も云はしやるには、コレ彌左衞門、アノ隣のおよし樣のしてゐるさんす、黒繻子の帶、私にもどうぞ買うてほしいとせがましやる、コレこなたも帶どころぢやあるまいぞ、ちと物に勘略さつしやれ、去年から段々の物入知らぬか、隨分内の仕事を精出さしやつたら、買うて進ぜると呵つたら、アイ〳〵、隨分仕事精出す程に、何卒買うてくれてよ、詞も返さず聞分けるに、エヽこ

ぬ、ガ、アノ、お前の兄御は、宇治の常悦樣と申しませうがな」お染「イヽエ、兄樣の名は勝助」吉六「サヽヽ其勝助樣が常悦と名を變へ、鎌倉にござるを、お前知らぬといふことはあるまい、斯赦されて夫婦になるからは、何事も隱さぬが互の眞實、サどうぢや〳〵」とうらどへば、お染「サイなう、兄樣は此内を、家出して行かしやんして、夫から一向便もなし、力になつて共共に、お行方も尋ねてほしい。何かの咄もたんと有る、モウ夜も更ける行て寢よう」と手を取れば、吉六「アヽ得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延して明日の夜か、いつそ紺屋の明後日になされませ」お染「エヽ何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない。こちへおぢや」と手を引かれ、絲によるべのふしの間も、お竹が手前氣の毒を、アヽしやう事もなく入りにけり。一間の内に彌左衞門、持佛に向ひ打鳴らす、かねては母の遺言を、立てし位牌へお染が緣、結ぶを告げる看經も、昔氣質の橦木の音、「南無阿彌陀佛〳〵」。ソレ新らしい夜著出して、ナ能いか、南無阿彌陀佛〳〵」春の夜の、そよ吹く風の音信も、あるかなきかの旅薦僧、此家の軒に彳みて、「昔に變らぬもがり竹、住居もかはらぬ我家なれど、今土手際の戸治が噂、母人は去年の夏、過行かれたと聞く殘念、念佛の聲は慥に長兵衞、冥途の母の呼入れ給ふと、我身の不孝が思ひ知られて、アヽ詮なき後悔　無益〳〵」と高きは父が讓の敷居、越

がの」彌左「ハテこなたばかり呑込んでは落付かぬ彌左衛門、おうといへば此三方が、直にこんこんの盃臺、何と八尾六さうぢやないか」八尾六「ハイ、イヤモウこん〳〵やら盃臺やら何ぢややら彼ぢややら、一向譯がない、とんとやくたいでござります」彌左「何ぬかし居るぞい。竹もまだ二階掃居らぬか、マヽ箒持ちて其態何ぢや、エヽきり〳〵行き居れやい」お竹「ハイ」行き居れやいと呵り付けられ是非なくも、塵に交はる紙屑を、お染が方へ掃付けて、ぴんしやんとして上り口、彌左「ハテ仰山な女子ぢや」と、呟きながら立上り、彌左「ヤおれが居るから結句遠慮、媒は宵の中、八尾六來い」と引連れて、勝手へこそは入りにけれ。跡にお染が何となく、今では結句改り、心どぎまぎ胸せかれ、言寄る詞納戸口、有合ふ針刺引寄せて、針のみすゞに願ひの糸、通りも早き色の道、吉六お染が傍に寄り、吉六「申し〳〵お染樣、此中染めた此手拭、ちよつと端に何なと印、松葉なりと縫うて下さりませ」お染「ソリヤアノ、いつぞや時行た寄せの唱歌、まつにこんとはわしや氣にかゝる、つれない心」と寄添うて「わしが心は此糸を、斯した所が判じ物」吉六「ハヽヽそりや知れた事、平假名のしの字」お染「サア、いとしいはいの」と糾れ糸、解けかゝりし下紐の、井手の下行く水馴竿、深い淺いを探りあふ。吉六「申しお染樣、チトお尋ね申したい事がござります」お染「チヽ改つた、何事ぢやいなう」吉六「アイヤ、何の事でもござりませ

吉六はたゞお竹が手前、顔もしかなの煙草盆、吞まぬ煙に紛らかす。詞改め彌左衛門、「ヤコレお染樣、呵るのぢやないが、わしが云ふ事よう聞かしやりませ。こなたの兄御勝助殿は、商人嫌ひの兵法好き、武者修行とやらに出て行かれたはとうの事、夫を氣病にお袋の死なしやつたは去年の夏、臨終まで苦に召され、俺を枕元へ呼付け、兄にこりた妹娘、好た男と女夫にせい、頼むは其方、家の家督の極るまでは、町所をも勤めてくれと、おれが前の名長兵衛を改め、去年から彌左衛門と、かへたは爰の旦那の名、お袋の遺言なれば、好いた男と見て女夫にするのぢや」エエと愕り吉六お竹、娘はとかうの返事さへ、靨に覆ふ振の袖、心の丈が手拭を、嚙んで捩向く夫の顏、夫と知らねば彌左衛門、「厭でないやら、恥かしさうな、嬉しさうな、何やらも欲しさうなアノ顏。へ、、、ハ、、、、コリヤヤイお竹よ、何をばた／＼し居るぞやい。吉六も厭ではあるまい、直に紺屋の旦那殿」と、云へば八尾六差出口、八尾六「ソリヤマアあんまり急で、早速に返事もなるまい。マア受人にも相談して、親判から庄屋組中、向ふ三軒兩隣、御念佛講へも談合極めて上の事、彌左「ハテむづかしい、女夫中に受判や、御念佛講は入らぬはい。又厭といへば爰には置かぬ、追出さるゝか聟になるか、二つ一つの返事聞こ、どうぢや／＼」と、詞にお染はもどかしく、お染「女夫にしやうと結構な了簡、何の否があろぞいな、ナウ吉六、さうであろ

める手を、すげなく振切り飛退いて、お竹「エヽ八尾六殿、何の事ちやぞいの、人の心も知らず、てんごうさんすと喰付くぞ」八尾六「ヤ何ぢや喰付く、へ、何の〳〵、喰付かるゝは愚の事、少々はモ喰殺されても厭やせぬ、幸ひ薄暮丁度能い首尾、帶をとかずとついちよこ〳〵」と、又取付けばしつこいと、下地のもや〳〵腹立まぎれ、傍に有合ふたばご盆、新式絹卷棕櫚箒、當り眼に投付け〳〵、奥へ走れば八尾六は、「コリヤ手ひどい」と云ひつゝも、同じく奥に入りにけり。春の日も西に傾く年輩も、昔小紋の片意地づくり、澁柿染のかうかつ親父、得意廻りの戻りがけ、ずつと這入つて、彌左「コレハさて不用心な、吉六よ、八尾六、ナニお竹も、ソレ行燈へも火を點さぬかい」ハイ〳〵〳〵と納戸より、附木をしほに皆立出づる。彌左「庄屋殿仕舞うて、商先の旦那衆、脈の上つた古懸、おこさぬは合點でも、次手ながら催促したりや、いかず村の孫三が、錢三百の内上げ、足の次手に戻りがけ、此三方ねぎり詰めたが、おれが年と六十八文、三方が若いか、おれが年が安いか、サヽヽ、皆よつて評判つきや〳〵。コリヤ八尾六、染物は皆出來たか」八尾六「ハイ、大方に片付ました」彌左「おつとよし〳〵」八尾六「ヤコレ、お染樣も吉六も爰へおぢや。コレ、こなた衆は味やるの、いつからのせゝくり合、隱さずと云はつしやれ」お染「チヽそんな事誰がいうた、こちら二人に覺えはない」と、口は涼しく手はもぢ〳〵、

紛れかつちかち、かち〳〵鳴らす火打石、竹が急く程火も移らず、お竹「エ、どんな火打箱」八尾六「エ、けたいなもがりぢや」お竹「モウ〳〵〳〵あの樣にしたよるうては、炭も硫黄も濕るが道理」八尾六「イヤモ〳〵〳〵染物も乾くものぢやないはいの」お竹「エ、まだ火が付かぬは、氣が付かぬか」八尾六「吉六殿も吉六どん、大事の染物のしはせいで皺だらけ、彌左衛門樣が留守なりや、爰の内は暗闇ぢや」と、火打こち〳〵八尾六は、仕事も脇へふくれ顏、八尾六「エ、吉六早う熨斗て仕舞はぬかい」吉六「イヤ俺はのらはせぬけれど、爰へ來いとお召小紋、何するも奉公ぢや。ナ申しお染樣、さうでん茶でござりませうがな」八尾六「ム、地口置いてくれよ、夫がどこに相傳茶、あんまり藍が勝過ぎるかな」お竹「ヲ、八尾六殿の云うてぢや通り、イヤモウ今日も明日もさめ小紋でござんす」お染「イヤコレ竹、聞きにくい。そなたの殿茶か何ぞの樣に、當世茶も知らずに、誰が頼んで色上吟味、こび茶な事置いてたも、お納戸茶にすつこみや」と、云はれてせき立つお竹が目色、術ない者は吉六一人、染物手早に疊み付け、仕事ばさして迯入れば、「イヤ〳〵〳〵、彌左衛門の留守の内、返事聞かねば氣が濟まぬ」と、續いて駈入る娘のお染、心ならねばお竹も共に、行かんとするを八尾六が、後より引抱かへ、八尾六「コリヤ〳〵〳〵君よ、二度とは云はぬたつた一度、又一度が厭なら一分二厘でも大事ない、コリヤ叶へてくれ」とし

コレ此八尾六、少々付は見にくからうが、心の内は糸櫻かな、何と付合ふ氣はないかいな」お染「エヽコレ八尾六、あだ口を聞く手間で、きり〳〵干物取入れや」と、主の權威にへらず口、「アアあるは否なり思ふは成らず、アヽ戀程せつないものはない」と、呟きながら立上り、節くれ立つたるもがり竹、竿にひら〳〵、こなたはじやら〳〵、お竹がくる〳〵、繰寄せて、引合せ見る吉六お染、「此紋所の蝶々が、直に祝言媒役、そなたは男蝶私や女蝶、斯う染込んだ此そめが、かう引く布は天の川、比翼の蝶々合點か、アノ不肖らしい顏はいの。コレ此布を斯う持つて、斯う引いて、斯う卷いて、斯う取付いて」と抱付けば、吉六「アヽ申し〳〵暑くろしい、アレ〳〵〳〵八尾六が、アレアノマ顏を御覽じませ」お染「エヽ何ぢやいの、八尾六は家來ぢやもの、大事ない」吉六「イヽエ大事が御ざりますぞ」「とつとモウ〳〵〳〵悟り切つた此八尾六でさへたまらぬもの、凡人間たるべきものが、コレガマア見てゐらるゝ態かいな。ナウお竹ぼん」お竹「ハテ、こちらは家來ぢやもの、構はずと見て居たがよいはいの」と、いへど尻目や頤で、當付らるゝ吉六が、吉六「アレ〳〵お竹も見て居りますぞへ」お染「ムヽ見て居れば何とぞするかや、そなたの女房ぢやあるまいし、かまはずとよい返事、おうといやらにや放しはせぬ」と、ちとまだ早き染色の、二人がじやらくら八尾六は、物干竿をぐわつたびし、闇り

お染「コレ八尾六、二人ながら主の云ひごとを、ねつから聞きやらぬはいの。ちつとさう云ひ付けてたも」八尾六「ヘヽン、アヽ結構な事で御ざりますは。全體お前には此私が、よつぽど氣が有つた故、ちよこ〳〵しかけて見たけれど、主と家來の悲しさは、蹴飛ばされたら夫ぎりに、張込も云はれぬ故、エヽ七面倒い打やつて、思ひ切つてゐた所へ、コヽ此吉六、始めて目見えに來た時に、コレお染樣、ソレお前がナ、アレあしこからちよつとのぞをくれた其時の、其目付の其いやらしさ。ヤこいつはけたいぢやと思うたが、角抜く度に鬢鏡で、俺が顏をつく〴〵見るに、どうでも父上や母上が、おれを拵へらるゝ其時は、甚喜悦で有つたかして、笑ひ〳〵刻まれたと見えて、つい此樣なちやり頭にしてのけられた。アヽいか樣、お染樣の氣のないも、無理とはさら〳〵思はれぬと、とんと悟りを開いた所に、コヽヽ此お竹女郎、お前と吉六が味な目付をしたといううては泣顏、何やら二人囁いたと云うては泣顏、ハアコリヤ浦山し涙ぢやなと思うて、何が寐所へ這かけたりや、久しいものぢやが、又はね出された。あちらでは突出され、こちらで彈出され、突出したり彈られたり、悉皆油鍋へ心太、てんとたまらぬ、コリヤおたぼう、おふくの中でこな樣に、コリヤどうぢやいやい〳〵。なんぼそもじが吉六に、氣があつても、お主の娘御といふ、向ふにアレ關がすわつてあり、埒の明かぬ事に手間取ろより、

ぞいの、人が見てもじだらくさうで、マア第一、主の此私へ不躾と云ふものぢや。吉六も吉六ぢや、ずつと此方へ退いてゐたがよいはいの。そして、コレ吉六や、此染物は始ての受取、念の爲ぢや、此注文と引合さう」と、何がな傍に置きたがる、娘心の戀の山、早入相に心急き、息せきとして八尾六が、戻りかゝつて内の體、ちらりと見るよりもがりの陰、伺ひゐるとも白布の、端をお竹がお合手と、向ふへ直れば、お染「イヤ〳〵〳〵そなたは賴まぬ、モウやんがて日も暮る、行燈の拵して、御持佛へも御明しあげや。コレ吉六、爰へ來や、サア此端持つて墨打を、見てたもやいの」と、寄添へば、竹が傍からつこど聲、お竹「マア〳〵〳〵お前も滅相な、いかにマお主樣ぢやと云うても、そりやモウあんまりあつかましいといふもので御ざんす。現在女房の、イヤアノ、女房のない吉六殿ぢやとても、姫御のお相手になると云ふ事が、どこの世界にあることで御ざんすぞ。人が見ても自墮落さうで、マア第一、傍で見てゐらるゝものぢやござんせぬ。ホンニ〳〵吉六殿も吉六殿ぢや、まそつと此方へ退いてゐたがよいはいな」と、無理に押分け引退くれば、猶逆立つて、お染「コレお竹、何の其方が騷いだて。コレ吉六、主の云付背きやるか」と、又引寄る主從が、あなたこなたと爭ひを、見てゐる八尾六むしやくしや腹、遠慮會釋も三人の、中へすつくり懷手。見るより悔り吉六お竹、うぢ〳〵もぢ〳〵娘のお染、

ぬ」と取付いて、わつと泣くにおさゆる袖。吉六「アヽコレ〳〵、聲が高い、又しても我を忘れて、俺が心を知らぬか何ぞのやうに、エヽ嗜みや〳〵」お竹「イヱ〳〵、何ぼ其樣に云はしやんしても、此道ばかりは」吉六「ハテ扨愚癡な事ばかり。大事を抱し此吉六、色に亂るゝ性根と見たか、皆是南朝の御爲。只我々が身の上を、けどられぬが肝要と、云聞したを忘れしか」と、詞にお竹も胸押さけ、「女の愚癡な心から、見捨られもする事かと、案じ過しの餘りぞや。そもや館を立退いてより、母樣にも兄弟にも、代へてお前が大切さ、手馴ぬ業も殿御の爲と、辛抱してゐるものを、常々からお前はアノ、此家の娘と何ぢややら、面白さうなさゞめ言、わしが男といふも云はれぬ下女奉公、飯を焚いたり水汲んだり、いとしい殿御を寢取る女、エヱ戀の敵に樣付けて、化粧手水の給仕まで、お竹どうしや斯しやと、呼つかはるゝ憂さつらさ、紅白粉やつや油、皆お前に見せうとて、髪まで私に小言ばかり、是で好いかの何のとて、作る女の顏貌、美しう移るとは、磨かぬ鏡の恨めしや。何の因果で娘御の、ある所へは奉公に、來た事ぞいの」と恨泣、洩れもやせんと義輿も、心遣ひの折からに、娘お染は吉六に、思ひ染込む暖簾の、間より出て二人がそぶり、見るより俄に顏色變へ、お染「コレ面妖なわがみ達は、人が居ぬと傍へ寄つて、見苦しい。女の傍へ男が寄るといふ事が、どこの世界にあることぢや

をお召なさるゝ。何ぢやか知れぬがござりませ」と、せり立てられて彌左衞門、彌左「そんなら序に得意も一ぺん。コレ吉六其布地拵へが出來たら、板場へ早う形付さしや。どれ往てこう」と引かける、羽織の袖を通す間も、あるきがせがむ表口、とつかはとして出て行く。跡見送つて吉六は、吉六「ハヽ八尾六、モウ歸りさうなものぢやが。干物も取入たし、紋の上繪も急ぐと有るは」何からしやう染物の、絹の色々取出し、吉六「ムヽコリャ幕地。何ぢや書付は、紋丸に二ツ引、ムヽはて合點の行かぬ。正數是は足利の定紋、今目前に見るは是、此虛に乘つて中黑を、押立よとあるしらせなるか、但時節を待つとあるか。ハアヽいや〳〵。エヽこちらは何ぢや、瑠璃紺に釘貫、ハヽテモ大きな紋ぢや。エヽコリャ折介の看板物ぢやナ。ヤ夫はさうと、お娘はもう出て見えさうなものぢやが、先きにかた〴〵の約束を、よもや違ひはあるまいが、首尾はどうぢや」と戀人を、松帆の浦の夕棚に、燒くや藻汐の身を焦す。お竹はそつと差足に、奥の透間を忍び出で、お竹「コレ申し義興樣、イヤ、アノナニ吉六殿、今更云ふに及ばねど、斯ういふさもしい宮仕へも、此家へたよつて常悅を、味方に付ける術の爲ぢやと、おつしやつたやうにもない、其常悅は打やつて、妹娘のアノお染を、どうやら味方に付けて、此家を取立てるお心と、見たはまんざら違ひはあるまい。それでは互に云ひかはした、憂き艱難も水の泡、聞えませ

彌左「イヤサア、夫でも滅多に氣を知らぬ者は、どうも入られぬてや。ヤ何吉六、其方は國に二親もないと聞たが、定てまだ女房も有まいなう」吉六「エ」彌左「サ有か」吉六「ア、いや」彌左「ム、まだ有るまい」と打點く、心の工面十面の、目顏で止めてもとまらぬお竹、竹「コレ申し旦那樣、夫聞ておまへ」彌左「ハテ何にせうと彼にせうと、そなたが構ふ事ぢやない。ナニ吉六、一人身なればちつと此方に、相談の品が有る」と、聞く程胸にあたりの人目、私が大事の男ぢやと、云つて仕舞をか如何せうと、急き立つ袂を引止むる、男の手先へ燒煙管、吉六「ヲヽアツヽヽヽ」「エ、仰山な。何所が熱い」と目に角を、立ては見れどどこやらに、流石夫とも得も云はぬ、女心のやるせなき。彌左「コレハしたり、騷々しい。吉六にとつくりと、在所の事を聞かうと思や、めんえう女子と云ふものは、得知れぬ事を差出るものぢや。コレお竹。其方は爰に用はない、奥へ行て共々に、お娘の髮を手傳うて、早う仕事にかゝらしやませと云や、サアいきや／＼」竹「アイ」彌左「エヽ何をうぢ／＼と、きり／＼行きや」と叱られて、跡に心は殘れども、是非なく立て入りにけり。折からひよか／＼所のあるき、使丁「申し／＼彌左衛門樣／＼、庄屋殿迄たつた今、ござりませとの云付、サア／＼、早う／＼／＼」彌左「エヽ喧しい何の用ぢや」使丁「イヤ何ぢや知らぬが都から、高の師泰樣とやら云ふお侍が、何ぢやか大勢引連て、お尋の筋がある故、村中

相手に商賣も、如才夏物仕入時、受取物は山吹の、花の女夫も夫ぞとは、云はぬ色なる伊達助が、姫諸共に此家へ、染り安きは下ざまの爪に藍滲む綛業、お竹と呼れ吉六と、變る姿ぞ浮世なる。彌左衞門「サアく、吉六もお竹も一服せい。ヤレく汝等はマア來てまだ間もない者共なれど、心一ぱい精出して𥇥るので、覺た者よりやつと仕業の果が行くわい。此八尾六は何所へ行たな。エヽ間がな透がな出歩き居る。アヽ大方湯屋で、又いけもせぬ新内節がな唸つてるをろ。ヤ夫はさうと此お娘は、まだ髮を仕舞ずかな。めんえう此間は身仕舞に隙が入る程にの、いつ迄も子供の樣に思うて居れど、親旦那がお過なされてから、わしが替つて世話するも、今年でかうと、ハヽヽ丁度あの子もモウ十七、そろくと蟲の付たがる時分ぢやてや。アヽどうぞ何事もない中に、實體な能い聟を取て、早う此世話を脫れたいものぢやが、ナウ吉六」吉六「ハイ左樣な事が隨分とようござります。ナウお竹どん」竹「ハイそんな事が大てい能事ぢやござんせぬ。聟樣がないとそこら傍がそはくく、ひよつともう此方の人に」吉六「ヤ何と云やる、お竹」竹「イヽエサア、アノ此方のお娘後のお染樣に、其蟲とやらが付うかと、私やたんと案じられます。どこぞかう遠い所から、早う聟樣を取て、お上なされ ますがよささうな事のやうに、私は存じられます」と、思ひのたけを綛目に、詞のはりやもらすらん。彌左衞門は氣も付かず、

聞えぬ」と顔背け、恨みかけたるなよ竹の、節を籠たる憂き思ひ、中に分入る八尾六が、引けど靡ぬ三味の糸、つんとしたのが猶たまらぬ。我等は何と奈良晒、せめて一臼搗かしておくれ、つき立の布なんどは、力を入れてとんとつく。とん〱とつくべと思へど、あの子の顔見りや手をつく。品ものめ。ぼつとり者めへ女夫晒が、ならざらしへ、とんとつく杵で、突張こうだずんばいほう、ふり〱づんばいほう〱と抱付き、靡け〱と八尾六が、付つ廻しつ、お竹をかこふ吉六に、纏るゝ娘振袖や、云ふも云はれぬ竹垣の、中を隔てて、アレ〱〱、見え渡る〱、笠置木津川みかの原、何れ劣らぬ名所かな〱、立浪が〱、瀬々の網代にさへられて、流る花をせきるよ〱。所から迚な〱、布を手毎に井出の里人打連れて、我家へこそは、三重 帰りけれ。

第十

京の水色よい染出しの、殿茶小紋を見初めて染て、今宵必かならずやいの、松葉小紋の變らぬ色を、其方もサ、此方もサ、其方も此方も、思合ふのが、ハテナ幸小紋、謠諷ふは泡の、寄る邊の水や井出の里、所に古き紺屋有り、彌左衛門とは通り名を、受けて世話役堅親父、弟子を

の川風に、戀風添へて二人連、若草や寢よけに見ゆる嫁が萩、さいな〳〵さうかいな。氣をつくづくし細々と、文のすみれは筆つばな、八重山吹のかへす書、さいな〳〵さうかいな。よい中同士としらつゝじ、浮名菜種のさいたづま、うら紫の藤の花、さいな〳〵さうかいな。浮名たつとも厭ふまじ、いとふまじとは思へども、袖を絞の鳴見染、思ひ切るせときらぬ瀨と、二世と書たる誓紙の誠、かならずやいのと寄添へば、私故仕馴ぬ賤のわざ、堪へてたもと締る手も、女たらしの袖のうち、ほんに此頃しみ〴〵と、お顏の窶を見るに付け、よしない私が有る故と、思へば身で身が憎らしさ。此世は儘の若楓、色にぞ井出の下紐の、結ぶ緣はいつ迄も、かはらに下りて褄絡げ、かいしよらしげな取裝も、面白や、布つく振のやさしさよ。なつきにけらし衣干すてふ〳〵、なつきにけらし衣ほすてふ戀人を、したひ紺やのやさ娘、八尾六つれて玉川の、水にうつらふ花の顏、遠目にそれと見るよりも、八尾六「チヽイ〳〵吉六イナウ、お竹ヤイ」とどす聲も、思ひは同じ心の色香、落る所は谷川の、流に二人が立寄つて、娘竹「コレ吉六、あれを見や」蝶が戀する色かせぐ、わけも女の心から、かいしよらしいがいとしうて、井出の山吹、男の木性、川の水性、夫婦ぢやと、固めた中ぢやないかいな。私も心は河原の眞砂、よみ盡くされぬお情と、寄ればお竹が押隔て、「コレ男下に居や。さりとては惡性な〳〵男づら。エヽ

めば心に危みなし。かへす〴〵も短慮の振舞、心に止めて出されそ。我は是より都へ登り、五畿七道を狩催し、金江勘平に牒合ひ、笠置の山に程近き、古郷の井出の親里に相留り、鎌倉の騒動次第、彼地にて旗上せん」と、秋夜諸共貞宗の、刃の血汐三人が、口に含める誓の暇、共に宮城野金江が噂、都の空も懐しき、奥の心も細布や、島田が連て行く二人、叔父への土産は臺七が、首を信夫がおし包み、涙も今を名残とは、知らぬ三人三方へ、別れ別るゝ一味の人數、共に評議の飛鳥山、淵瀬定めぬ　三重習かや。

第九　道行いはぬいろぎぬ

爰の在所に良いこの嫁御、外の男に氣を揉み洗ひ、かいげ柄杓の、縁は千年かけ水の、流と人の行末は、いざ白石や小石、千代に八千代と結びあうたる妹背の、契は堅き石堂の、館を出て伊達助も、角の取たる玉川の、里の紺屋の吉六に、千束の姫も陸奥の、古郷を捨て井出の里、きのふは袖の錦木も、けふの細布手に巻いて、花の露添ふ玉水の、水仕奉公も慣れやすき、賤の手業の晒布、晒して染て、水に幾度濡た同士、互に肩も春の川邊の、麗に山吹匂ふ岸傳ひ、洒場指して行方の、山の端毎に花曇、櫻を誘ふ春雨の、降らばかざさん笠置山、降らずば木津

大望成就も末廣がり、北朝を打破る、隱謀評議の場所と定め」秋夜「島田殿と我々三人、桃園に義を結ぶ、牛に等しき黑右衞門が、血汐を啜つて盟を立て、秋の木の葉の鎌倉を、ちり〲に打亡す、計策の手始よし。まづ奧州へアノ兄弟、送りの役を和殿に賴み、すぐさま軍勢催促を」と、引かせぬ詞に三郎兵衞、三郎「いつぞや廓でお賴みの、鞠が瀨殿も同座と云ひ、辭退致すもをこがまし。奧筋の一味を集め、此鎌倉へ登るはいつ頃」秋夜「ヲヽ夫こそ毒藥地雷の相圖、發する時を手筈として、南朝の汚名を雪ぐ旗上げの惣大將、鞠が瀨秋夜が心魂に徹したり」と、きつと目くばせ常悅も、心を悟つて上著を脫げば、兩勇劣らぬ大將出立、錦の直垂萠黃匂ひの小手脚當、人集の中より陣羽織、采配床几もいつの間に、菊水の旗翩飜と、揃ふ心の三郎兵衞。同じく上著取捨れば、肌に著込の滋金物、南蠻鎖も南朝へ、「一味の手始是見給へ」と、隱し持たる塗込鞘、拔ば玉散る燒刃も銳く、臺七が一の胴、死骸すつぱり血刀を、天晴血祭心地よやと、兩將立寄り打守り、秋夜、常悅「ハヽア見事々々。やきばは愚中心迄、一目にしるき貞宗の、刀は北朝不吉の切先、味方に有ては吉事の名作、ハヽヽ賴もしく」と、肺肝迄も見透す度量、神機妙算同意の人々、共に感ずる計なり。宮城野信夫も盡しなき、禮はつど〲おせつ樣、情の因おく筋へ、直に出立つ三郎兵衞、常悅も安堵の眉、常悅「關八州は秋夜殿、島田氏をば副將と、賴

あへず、宮城野「是信夫、兼てそなたに云置く通り、斯く本望を達した上は」信夫「アイ、合點で御ざんす」と、一度に一腰抜放し、我と髻切かくるを、目早き島田駈け寄つて、二人が刃物挘取り挘取り、三郎「コハ何故の剃髪」「イヤ〳〵〳〵お止めあるな」とせり合ふ内、常悦「ヤア〳〵兩人早まるな、しばし〳〵」と聲をかけ、常悦秋夜は假屋より、しづ〳〵出來る悦喜の顔ばせ、宮城野信夫に打向ひ、常悦「密事合體の谷五郎に、所縁ある其方達、秋夜殿と云合はせ、本望を遂げさせし上は、本國奥州石堂家の領分へ送りかへし、時節を待つて金江氏へ添はせん計ひ、我々が心をもだし、押て薙髪は其意得ず」と、秋夜と共に言葉の枷、有難涙の顔振りあげ、宮城野「船車にも積れぬ大恩、お心背くでなけれども、親の敵と云ひながら、女のざいに大膽な、人を殺せし罪亡し、親のため敵のため、尼になるのがせめてもの」三郎「ハテ氣の弱い、親夫に武士を持ち、姿を變へて先祖へ立つか。お世話あつた御兩所、此島田が先途まで、見屆けくれる所存はないか」と、理に抑へられ、ハアはつと、さすが所縁の島田が諫めに、思ひ止りし兄弟の、操違へず常悦が、討死の後骸の恥、雪むる心阿部川や、彌勒の世にも朽せざる、恩がへしこそ殊勝なれ。時刻移れば常悦秋夜、同意の諸士に打向ひ、秋夜「イカニ旁、勝負を見屆け當所の役人、假屋より退出あれば、日も傾きて遠慮に及ばず。宮城野信夫が勝利を得たる、爰は所も扇が谷、

じく入來る矢來の内、島田も引添ひ聲勵まし、三郎「仇ある者は相互の敵討、勝負の勞を太鼓の數、音を究めてかけ引させ、讐討つとも討たるゝとも、互の運に任せよと、常悅老の差圖なれば、雙方共に心得られよ」と、例格故實の茶碗に水、敵と味方の前に置き、三郎「イザ尋常に」と矢來の外へ、引けども心は引かぬ氣に、息を詰めたるばかりなり。兄弟進んで聲をかけ、宮城野「先つ頃奥州白坂の城下に置いて、其方が討つたる與茂作が娘宮城野信夫、爺樣の敵志賀臺七、サア立上つて勝負しや」臺七「チヽ身が手にかけた與茂作が娘兩人、返討だ、観念せい」と、拔身引提げ立向ふ。宮城野は以前の長刀、信夫も共に鎖鎌、互に心を一致の金氣、殺伐鋭どき臺七が、祕術に怯まぬ柳が枝、雪折せざる姉妹、目放しもせぬ三郎兵衛、外の見るまへ勵の勝負、火花を散らして、挑みあふ。始めの程は臺七が、嵩にかゝつて見えけれども、骨髓覺えし兄弟に、惱まされるも天命の、石突返しに脾腹を圍ふ、其間に得たりと鎌投かけ、打落したる左の腕、右へ廻つて又利腕、づんぼら立の志賀臺七、無念とあせるを長刀に、脚打かけて一揃ひ、薙倒し薙倒し、肋かけたる宮城野に、續いて信夫が逆手鎌、首掻落し聲涼しく、信夫「親の敵志賀臺七、宮城野信夫が討取つたり」と、につこと笑うて立つたる有樣、悅ぶ島田同意の面々、巢立の小鷹鶻が、鷲を羽うつて當てたる如く、感じ入る聲譽める聲、暫しは鳴も止まざりし。息つぎ

信夫伴うて、駈け付ける島田三郎兵衞、思ひがけなく出來れば、なほ〳〵不審のきよろ〳〵眼。三郎兵衞聲をかけ、三郎「ヤアうつそりの黑右衞門、宇治鞠が瀨の術にて、心を赦し傳授の祕方、篤と知られし上からは、我意に誇る汝が自滅、觀念して尋常に、此兩人と敵討、用意の場所へ誘き出せしと、松田吉見が知らせによつて、常悅殿秋夜殿になり代つて、身共が後詰、遁れぬ所、覺悟せい」と、聞いて臺七地團駄踏み、黑右「エヽ又謀られし口惜や、モウ此上は死物狂ひ、肩持つ賴みの女郎ども、ずた〳〵に切りさいなみ、汝等が大望殘らずぶちまけ、注進して腹癒ん」と、りきんで見ても鐵砲に、弱れど負けぬ佛頂顏、わるさ子供に二日灸、逃そよくれのだよけ者、追取卷いて宮城野信夫、今ぞ誠の敵討と、勇む人々サア勝負、勝負々々とせり立てられ、ふしやう〳〵に上著を脫ぎ、白無垢ばかりに身輕の出立、三郎兵衞氣色を改め、三郎兵衞「當所の役人諸共に、宇治鞠が瀨も遠卷ながら、あれなる假屋に見物あれば、晴がましき此勝負に、後めたき臺七が、白無垢の肌付、ソレ〳〵いづれも吟味あれ」と、差圖にみな〳〵立寄つて、兩肌無理に押脫せば、眼力違はぬ鎖帷子、ソリヤこそ大きな卑怯者と、人前にて剝ぎ取られ、面目砂にまぶしける。宮城野信夫もぞく〳〵小踊、天へも上る心地して、假屋の方を伏拜み〳〵、殘る方なき御恩の程と、矢來の場所へ立向へば、臺七も呟やき〳〵、恨めしさうに睨め廻し、同

お二人に聞きまして、すぐに裏から用意の出立。シテ〳〵黒右衞門は何方へ」「ヲ、兼ての場所は扇が谷、所の役所へ屆置けば、苦しうない早う〳〵。我等も跡より後詰、門出の餞別此やい鎌、お氣の付いた秋夜樣、宮城野殿へは此長刀」「エ、忝い」と兄弟が、勇み進んで立出づる。常悦「コリヤ必ずおくれを取らぬやう、心の備へは爰なるぞ」と、一句の示しに勵まされ、思詰めたる宮城野信夫、物をもいはず手水鉢の、片側すつぱり長刀の、音より妹が飛石を、二つに鎌のむね打割り、信夫「サ是では討たれますまいかな」「出かした行け」を氣のはり弓、矢竹心に追うてゆく。秋深き草葉も半てりそめて、露ぞ置くなる扇が谷、常悦秋夜が同意の面々、勝負の場所を固めの手配、立に立たり辰の刻、肩臂張て志賀臺七、一圖に目見えと仕濟し顔、來かかる陰に人數の騷、早押推の小腰を屈め、黒右「コレハ〳〵御大身より、某を御迎ひの旁ならん、嘸お待兼、思はぬ隙入、何れも御前宜敷樣、お取なし下されよ」と、揉手を構はぬ堅めの人々、警固人「ソリヤ黒右衞門迯さぬ樣、取卷き圍へ」と身構へに、悔り仰天黒右衞門、黒右「扨は汝等は最前の、女めが餘類ならん。夫もぬからぬ常悦老、秋夜の差圖は此時々々、ソレ火蓋を切らつしやい」と、猶も落付く黒右衞門、中に取込む一同に、動かば討たんと、狙ひの筒先、黒右「アア是、身共を討つぢやないはいなう。エ、惡い呑込」と、一人氣を揉むあひもあらせず、宮城野

火箭の奇法も序ながら」と詞に隨ひ文字に運びて口傳の奥義、殘らず暫時に書認め、筆差置けば一卷を、卷納めく、常悅「ハヽヽ、有難しく、英雄の士を得たればこそ、粉骨碎身しても得がたき此一卷、望足りぬる時節も今。秋夜殿、悅び召され」秋夜「誠にく身共とても、日頃の心願滿足せし、是と云ふも黑右殿の御懇志ゆゑ」と只管禮讓、詞についておせつもいそく、「是からはいつまでも、お中よう御立身を待ちまする。マア酒一つ」とあしらひも、東の空に茜さし、月も入るさのおしあけ方、常悅「アレく最早夜明の鐘、御目見えの刻限違へず、扇が谷の御屋敷へ、イザ黑右殿趣き召され」と、詞に猶も打點き、黑右「コレハく御深切」と、庭に折から數多の歩立、銘々鐵砲切火繩、左右にこそは居並んだり。黑右「常悅殿、コリヤ何故」常悅「ホヽウ、御屋敷までの途中にて、萬一今の女が餘類、待伏せなど致し居らば、彼等に云付けたつた一打、ヤモお手下されるには及ばぬ。コリヤく旁、黑右殿の前後に引添ひ、固めの手配氣を付けよ」と、殘る方なき心遣ひに、「却つて痛入り申す」と、おせつが送りを辭退の式臺、臺七郎が出世の門出、追付知行を鵜の羽重ね、おさらばくと見送る常悅、秋夜が實儀黑右衞門、力身反つて出でて行く。仕濟したりと三人が、吐息つくぐ次の間より、いつの間にかは宮城野信夫、白無垢襷鉢卷まで、用意につれた松田吉見、銘々出づる密々聲、松田吉見「御兩所樣のお心ざし、あの

され」と、制し止めて鏡を納め、襖障子に尻ざし轄、常悦秋夜は居間の床、常懸の大横物、掛地を取れば壁に隠家、扉を内より大の男、上下熨斗目青月代、身のしが隠す志賀臺七、正銘大小立派の人品、悠々として座に直り、常悦秋夜に一揖し、黒右「叶ふ山の軍用役、仕果せて立歸り、御所望故に天眼鏡を渡せし上、忍び松明毒藥傳授、御望なれども今以て、お傳へ申さぬ某が、心底を推量あり、宮城野信夫を追還されし、今宵の幻術驚き入る。高が女の事ながら、サ油断大敵、是より世間の廣くなるも、云はゞ御兩所入魂のお蔭。剰へ今曉明六つ、御大身へ御目見えの御推擧まで、なし下されしお世話のお禮、ヤモ詞にも盡されず。此上は毒藥傳授忍び松明、祕方の一巻、楠原普傳が家の祕密を御讓り申す、必ず他見御無用」と、したり顔に懐中より、出す一巻を押戴き、秋夜と共に繰廣げ〳〵、常悦「ハア明白々々、去りながら、鴆鳥の生血を搾り、砒石の煉様射罔の法、水に混へて濁らぬまで、全く傳書に顯し難き、口授口傳あると聞く、共に師傳を明かされよ」と、蛇の道さがす平身抵頭、餘儀なき詞に、臺七「ホ、流石の宇治殿奇妙々々。其口傳こそ祕中の祕事、申したけれど人や聞く。ソレおせつ殿、硯々」心得おせつが床の間の、料紙の蓋をとり〳〵や、黒右衛門筆おつ取り、かの一巻へ書添へる、毒の分量鹼味の奇製、殘る方なくさら〳〵〳〵、書く度々に常悦が、悦喜に連れてぞく〳〵鞠が瀬、「臥龍烽火の陣松明、

首は跡より送るべし。早う〳〵」とおせつもとも〳〵、「お詞背くは却つて無禮、そんなら皆樣よい樣に」と、彌多七勝衞に伴はれ、まだ明やらぬ出汐や、陸奥さして急ぎ行く。跡は月澄む客路次の、陰も遙かに見送る秋夜、おせつもともに一間に向ひ、秋夜「安堵有れ常悅老、事調ひし」と詞の下、障子押開け主の常悅、白無垢居士衣も祭忌の著服、出る燈火輝く庭先、黑右衞門がのたれし死骸、むつくと起て立つよと見えしが、水氣忽ち漲る白砂、見とれる宇治が照月にユソタヤディスの幻法祕印、ほどくに猶も吹く水煙、ともに跡方生々しき、血も屍も消失せて、殘るは以前の天眼鏡、居士衣の袖に飛移る、邪術の奇特目の傍、神變稀代と云つべし。二人も不思議と感ずるばかり。常悅指ざし、常悅「アレ見られよ秋夜殿、我兵部之助と云つし時、諸國を經廻り、洞理軒に習ひ覺えし隱形分身、奥にて示し合せし如く、幻法にて此鏡を、黑右衞門が形と顯はし、宮城野信夫に討取らせ、彼らか功を立てたると悅ばせ、本國へ追還せば、是より後に黑右衞門を、親の敵とねらふ者、鎌倉にはよもあるまじ。此術なさん」と明りを消し、「一旦捨てたる幻術なれども、去りがたき今月今宵、月陰にウルガンソン、觀念せしかひ有つて、英雄の士を助けしは、サンダマルの加護なるぞや。アラ心よや悅ばし」と、語れば秋夜が、「持病の短慮、麁忽の振舞、是も幸ひ、とは云ひながら、いとしいは二人の衆」「マダぐど〳〵と默り召

討てよ勝負」と突放せば、今更何と宮城野も、信夫もともに、「私ら故、御大望の妨げに、成ると聞いてはそもやそも」おせつ「イエ〳〵大事御ざんせぬ、今の樣な惡口聞いて、女の身でさへ悔しいに、秋夜樣のお腹立、更々無理とは思ひませぬ。構はず勝負」とおせつが諫め。猶逆立て黑右衞門、黑右「云ふまい〳〵、あいつらが荷擔せず、身共に弓を引くまいと、兩人が其神文、反古にして武士が立つか」秋夜「ヲヽ此神文こそ我々が、大望に代へ力と成り、其方を討たせ吳う」と、宮城野信夫へ遣す血判、「最前見ぬが汝が不覺」と、おせつ諸共押開けば、狼狽へ眼に見て悔り、黑右「エエ謀れたか殘念々々。此上は破れかぶれ、鎌倉へ注進して、追付吠顏、待つてをれ」と、駈出す後に宮城野信夫、懷劒拔く手も見せばこそ、伺ひ寄つて雙方より、かばと剔られ七轉八倒、無念々々と黑右衞門、狂ひ死に死たるは、心地よかりし有樣なり。秋夜おせつも煽ぎ立て、手柄手柄と賞する中、奥より出る松田吉見、旅裝束に風呂敷携へ、松田吉見「ハアヽ出來た〳〵。樣子はあれにてお聞きなされ、常悅樣のお差圖にて、アノ女中を介抱し、奥州表へ送りながら、先途見屆け立歸れ、急ぎの使延引すなと、我々に仰付けられ、取る物も取あへぬ此支度。宮城野殿信夫殿の支度も道にて調へん。サア〳〵早う」と急立てば、「何から何迄お心遣、せめてお禮を皆樣へ」松田吉見「ヤア禮所でない本國へ、早う知らすが此方の世話甲斐、關所も氣遣臺七が、

う持て」信夫「アイ」「早う」と大人氣なく、小柄に事寄せ差出す手先、取らんず氣色に宮城野が、笄ばつしり黒右衛門、腕に當つて拂ふ間に、遁れる信夫悅ぶ秋夜、おせつは早業敎へ方、心で譽るも、互の目遣ひ、膨れ返つて黒右衛門、黒右「どいつもこいつも、能い氣味さうな眼付、見度くないぞ、黒右衛門が云ひかゝり、宮城野口說が厭ならば、毒藥松明傳授する事も厭ぢや。常悅が世話に成り、身上片付望にない。ヲヽ氣に喰はぬ、いつそ大望鎌倉へ、注進するも出世の種、何と動きはとれまい」と、身をかへり見ぬひろ八町、一足飛の横渡し、傍からあぶあぶ矢橋船、志賀の浦浪吹きこして、擢取り兼ぬる高搖り。秋夜は日頃の短氣の蟲、堪へぬ氣性に寄るぞと見えしが、蹴落されたる黒右衛門、庭へどつさり眞逆樣。是はとおせつも兄弟も、驚く中に黒右衛門、はふ〳〵起立ち、黒「ヤイ鞠が瀨、重々恩有る黒右衛門、脚にかけた罸當り、目に物見せん」と寄るがんづか、緣先へ引摺寄せ、「人非人めが動くまい、師匠の惡事の腰押して、欲に耽り色に迷ひ、立場もない身の上を哀み、麴が谷の浪宅まで、お世話有つた大恩の常悅殿、剰へ出入する大身へ、お目見まで云ひ次いだ義理も思はず、拔道掘つたを恩にかけ、宮城野を口說ねば大望を注進とは、身の程知らぬ自滅の惡言、モウ毒藥の傳授も入らぬ、うぬがないとて此方ども、奇術にことを缺くべきか。コリヤ〳〵兄弟赦してくれる、今こそ敵尋常に、

まぜて、癪の痛か宮城野が、苦しむ體に妹が、心細くも介抱の、氣扱ひこそいぢらしゝ。おせつは心思ひやり、おせつ「いとしやなう、親の敵を討たう〳〵と、東のはてから鎌倉へ、難行苦行も厭はずに、けふが日迄私らへ氣兼、武士の詞に討たさうと、請合ひながら此神文、サヽ此神文を書く上は、彼忍び松明の祕傳、一國殺しの毒の祕法、サお傳へなされて下されまいか」とおせつもともに餘儀なき頼み、黑右衞門大口あき、黑右「ハヽヽヽ、ア貴樣達は豪傑々々、ヤ非道い物ぢや、如何にも祕方は是々と、殘らず身どもに云はせて置いて、煎じ殼をアノ女郎どもに、ウヽハヽハヽヽヽ」と、嘲笑ふ。秋夜「ハテ扨それは氣の廻り、斯程お頼み申すのも、明朝六には御身上相極り、御目見有りと常悅老、御懇意の密談故、是非に今宵と傳授を急ぐも時節柄、押推にはちと御短慮」黑右「アヽイヤ短氣にござる、拙者大きな短氣者さ」秋夜「ソレ其お腹立を偏にお直しなされまして」黑右「ヲヽ直したくばアノ宮城野、口說落しておこさつしやるか」秋夜「サアそれは」黑右「成るまい、否なら斯うぢや」と宮城野目がけ、きらりと手裏劍すかさぬ信夫、露路下駄取つてしつかと受け、信夫「コリヤ姉樣を何とする」と、詰寄す擬勢におせつが片唾、秋夜見とれて、秋夜「ア天晴々々、ハテ教へたり覺えたり」と、あたりさはらぬ詞の褒美。黑右「ヤきつい譽め樣ナア。コリヤ小あまめ、くすねられちやならぬ、其小柄是へ持て」信夫「アイ」黑右「早

がよい手本、骨も皮も粉に成つて、ぱつぱと散るが大事ないか、命が物種止しにせい」と、不敵の仕業にせき上げ〱、宮城野「コレ妹、モウ〱〱、義理も情も恩も實義も、思はれぬ樣に成つた。一度ならずお位牌迄、二度の敵の志賀臺七、覺悟しや」と立上がる。秋夜「ヤア兩人暫し疎忽すな、麁相せまい」と後の襖、引開け〱鞆が瀬秋夜、おせつもろとも小四方に、一通取戴せ黒右衞門が、右と左に差置いて、秋夜「貴殿を敵と附狙ふ二人の女、刀を指す役目なれば、賴むに引かず隱まへども、向後彼らに加擔せず、足下に弓引まじき神文」おせつ「アイ、秋夜樣と御一所に、常悅も同じ血判、お渡し申せと妾を名代、サア御披見あれ」と兩人が、詞に彌々鼻高く、黒右「ム丶ハ丶丶丶、ハテ御丁寧な神文、まづ何かは差置いて、へ丶見るにや及ばぬ。ソリヤ其筈、叶ふ山へ拔道掘り開け、軍用に手間へさせぬ、是一つさへ貴樣方の守り神も同前、其上に一國殺しの毒藥、忍び松明の傳授迄、覺えぬいた某、貴殿を始め常悅殿へも云はつしやれ、ソレ足も向けて寐さつしやつたら、眞赤な罰が當るぞや」と、上見ぬ鷲のはねかけ顏、せきのぼす氣を宮城野信夫、靜め〱て手をつかへ、宮城野「是迄段々お世話に成り、親の敵志賀臺七、討てばお望叶はぬとは、知らぬ願ひも詮ない事、お情の御恩報じ、私らをお手に懸られ、未來の父へ云譯させて下さりませ、コレ申し秋夜樣、おせつ樣、お情お慈悲に殺して」と、命惜まぬ姉妹打伏し歎くに取

あるまいなア。イヤ又廓で見た時より、格別違うた其泣顔、生地顯して美しい。コリヤ宮城野、とても義理ある常悅が、爲にならぬ敵討、さらりさつと止めにして、黒右衞門が心に從ひ、應と云つて抱れて寢い」と、いとゞ憎體應答もせず、無念々々を堪へる二人。黒右「ハテ其樣にひこしやくせずと、サア身が可愛くば返事しや、どうぢや〳〵」と支へる信夫、引退け突退け宮城野に、ほうど抱付く欲惡煩惱。宮城野「エヽこゝな大惡人の鬼よ蛇よ、そもやそも現在の」黒右「ヲツト敵は知れて有る、粹に育つた樣にもない、ね給へ〳〵」と、肌に手を入れ傍若無人、又取縋る妹を蹴飛し、黒右「ハテ氣の通らぬ、見ぬ顏せい」と、うきを宮城野ふり放す、手に當つたる以前の位牌、引出して、黒右「コリヤ何ぢや、棲霞了養信士、俗名與茂作、ムヽコリヤ身が手に懸たわいらが親の位牌ぢやな」「それは」と兩人取付を拂ひ退け、黒右「サア宮城野、應と云うて爰で寢るか、厭と云へば此位牌、踏割て退けるぞよ。エヽ否か應か、否なら親を踏み碎かうか、サア〳〵〳〵〳〵何と」と付廻され、不便や宮城野泣音さへ、聲を信夫がおろ〳〵顏、いつそ詞も出でばこそ、顏見合して齒をくひ締め、口惜淚堰あへず。黒右「エヽめろ〳〵としぶとい性根、目覺しさせん」と位牌打付け、踏付け〳〵粉微塵、「コレ〳〵待つて」も聞かばこそ、位牌と共に緣より蹴落し、黒右「コリヤ女郎どもよう聞けよ、敵なんぞと身が傍へ寄りあがれば、此位牌

其健氣なる汝達が所存を感じ、敵討の勝負して、討れて與れうと云ひたいが、マァならぬ」宮城野「イヤ〳〵、なつてもならいでも、此場を遁して濟むものか」「ヲヽ濟む、コリヤ濟む譯を云つて聞かさうか。元來常悅秋夜ともに、思ひ立つた大望有る故、此黑右衛門を密々に賴んでナ、アレあの空井戸より叶ふ山の寳藏へ拔道掘らせ、大望の用に立てる金銀を取入れさせは、なれども、人の聞えを憚り、麹が谷を出奔させたも、ナコリヤ、皆常悅と相談づく、汝らが怖うて迯たでない。斯うした密事を賴まれる黑右衛門、いもけの樣な耄、一疋や五六疋殺したとて何の事、また其上に楠原普傳が家に傳へし一國殺しといふ毒藥、忍び松明の祕授祕傳、普傳が死後に知つた者は、日本に某一人」宮城野「ム、スリヤ、其祕方こなたが知つて、常悅樣に傳へるのか」黑右「マちよつと小口がこんな物、まだ此胸に大海を呑み干す器量、兼備た黑右衛門、汝らが敵といふソヽ、其頰桁、歪まぬ中に取置け」と飽迄惡口憎しとは、思へど恩有る常悅が、望についてるる人と、聞いては刀の手も弛み、宮城野「ム、スリヤ先の詞の端々、未傳授も受け給はず、高野の奧の玉川の、水によそへし毒藥の、祕方を知つたアノ臺七、お二人望みの叶ふ迄、コレなう妹、此敵は討れぬはいの」「姉樣コリヤマア何と」「如何せう」と、積る恨を姉妹が、恩義に迫るはらはら涙、落ち瀧津瀨の吹越て、懸樋も月に照添へり。黑右衛門顏さし覗き、黑右「ちつとさうも

うと、悲しいはいの〳〵妹」「口惜しい姉樣」と、位牌の前に身を打伏し、涙にすだく蟲の音に、いとゞ秋さへ更けぬらん。宮城野やう〳〵泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹、そなたを世話の常悅樣、わしとても受出され、武藝を敎へ貰うたる、恩義の深い秋夜樣、譬お心背いても、黑右衞門さへ討果せりや、お二人の世話甲斐は有ると云ふもの。爰を拔出し黑右衞門、何所に居るとも尋出し、討たうとは思やらぬか」信夫「ヲヽさうでござんすとも、黑右衞門が居る所、火の中水の底にもせよ、顏は見知つて居りまする、探し出して討ちませう」宮城野「ヲヽ出かしやつた、サアおぢや」と、互に帶締め裾打合せ、件の位牌を守りと肌、用意の懷劍一文字に、驅け出すあとより、「待て〳〵女云ふ事有り」と聲かけしは、宮城野「座敷に誰も人は居ぬが、庭傳ひに來はせぬか」と、月に透せど定かに知れず、ハテ何所からと盤桓、「イヤ爰から」と庭先の、井戶の中より水にも濡れず、ぬつぼり鵜の羽黑右衞門、段平大小長月代、銹たる井桁靜かに踏越え、のさのさ上る緣の上、續いて兄弟かひぐ〳〵しく、面々懷劍拔連れて、左右に圍へばぢろりと見て、黑右「ヲヽ出かす〳〵。此黑右衞門を汝らが敵、志賀臺七と知つたか知らぬか、腰押して討たせてやらうと、常悅秋夜が隱まうた宮城野信夫、親の敵の此臺七、討つて本意が遂げたからうなア」宮城野「ヲヽ云ふにや及ぶ、思込んだ父樣の敵臺七、ヤそなたを討いで置かうか」黑右「ヲ道理〳〵、

う思やるは道理ぢやが、浪人ながら大名高家に、もてはやさるゝ常悦樣、かよわひ其方や此私に、賴まれさつしやる氣は金鐵。ガよもやとは思へども、目指す敵の黑右衞門、麹が谷を出奔して、行方知れぬと聞けば聞く程、云はゞ古主の惣六樣の、志も立たぬと云へ、便々と待つては居られぬ、工夫思案も互に女、果敢ない所存と此世の夫谷五郎樣、未來の父樣母樣の、草葉の蔭よりお呵が、思ひやられて悲や」と、手に手を取つて又さめ〲。苔の下行く木々の露、涙の隙に懷より、位牌取り出し庭の面、手向は父の恩に知る、須彌山形の手水鉢、上にとり〲、沖津海の、舟の位牌を立並べ、ともに敬ひ手を合せ、宮城野「棲霞了養信士、俗名は父樣の與茂作樣、丁度今宵が御命日、南無阿彌陀佛〲。それから程なうお果なされたお母樣、殘霧妙養信女樣、おまへの手引で遙々爰まで、尋ね迷ふ父の敵、陰身に添うて、お守りなされて下さりませ」と、姉諸共に回向の合掌、傳ふ雫に水晶の、數珠繰かけし桂陰、「御養育の御恩も送らず、程遠い此地へ來て、隔てて居れば二親の、お過ぎなされた月日さへ、七日々々の弔ひも、知らで過した不孝の不孝、重きが上の憂き勤、鏡に向ひ融く紅も、思へば血の池、氷の地獄、罪のありたけ仕盡した、今更せめてと付狙ふ、敵に廻り逢せてたべ。さは去りながら女の身の、二人より外便のない、わたしらを娘に持ち、極樂世界へ成佛とも、拜まれ給はぬ未來の闇、嘸かし迷うてござら

が瀨殿」秋夜「誠にそれが肝心要。常悅老の志、イヤサ譬へ心に忘れても、汲やしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水〱、ナ合點がいたか」と底意をば、殘す詞の露の夜や、暮に數ある鞠か瀨が、屈せず疊む胸の內、すゞしき宇治の常悅おせつ、松田吉見も諸共に、心を兼て入りにけり。跡宮城野が物思ひ、色なる浪の月代や、定に萩の穗に出づる、影さへ遲き願の一圖。宮城野「廓で皆のお咄し有つた、常悅樣のお情とは、どうやらそぐはぬ今の仕誼。合點の行かぬお心を、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の、水とかけたるお詞の、謎かは知らねど解けやらぬ、樣子ありそな仰り樣、ハテどうがな」と、とつ置いつ、軒端信夫が奥よりも、そろ〱朧月影に、「姉樣爰にござんすか」宮城野「ヤアさう云やるは妹ぢやないか」信夫「アイ」宮城野「ヲヽ息才で嬉しや〱。逢ひたかつた」と取縋る、便り涙の姉妹が、思ひに窶るゝ哀さは、血筋の縒や糾るらん。信夫は涙の目を拭ひ、信夫「申し姉樣、此東で名に知れた、常悅樣にお頼み申すは、佛神の御引合と、お前の云うて下さんした、詞にいとゞ頼もしく、お世話になる內おせつ樣のお情迄、殘る方なき稽古の修行、奥州者と知れぬ樣と、詞付までお世話に成り、恩に恩有る常悅樣。されども本望遂するは、急くな早いと止てばかり、其上先刻の碁の腹立、私や立聞して居りました。頼み切つた常悅樣、あのやうに仰つては心置れる姉樣」と、膝に凭れて嘆ち泣く。宮城野「ヲヽさ

つが駈出で、縋つて止むる一座のしらけ。秋夜は手を組み此場の様子、何を知つてと振切る常悦。〔常悦〕「イヤ申し左様でござりませぬ、様子はあれから聞いて居りました、常々のお心ばへに、似合ぬ御短氣、皆様の思召も氣の毒さ、殊更此子は鞠が瀬様、お世話に遊ばす今の身の上、云はゞ當座のお氣慰み、碁にお負遊ばしたが、恥辱に成るといふではなし、御機嫌直して下さりませ」と、詫る詞に宮城野が、「私が足らはぬ心から、お師匠様ともお主とも、力に思ふお二人様、お見捨あつて是がまあ、何と望みが叶ひませう。コレ申し秋夜様、お詫申して下さりませく。コレ申し彌多七様、お詫申て下さりませ。コリヤマァ何と致しませう。コレ申し常悦様、堪忍して下さりませ」と、願ひある身の木の下に、漏る涙のあやもなき。常悦は立てたる燈火、傍なる碁盤を片手煽り、闇と消ゆれば驚く面々。秋夜横手をはたと打ち、〔秋夜〕「ハヽア及ばぬく。天に翼し地に跨る貴殿が所存、察入つたは秋夜一人、端近で些細の論、云散らする拙なしく。奥へ推參仕う」〔常悦〕「ナニサく、常悦が火を消したは宮城野が阿婆摺の、所作柄見るも餘り氣の毒、暗闇の強異見、香やは隱るゝ我工夫、色をも香をも、アヽ秋夜殿の早呑込、深入ばしし給ひそ」と、故由籠り句の詞のにべ、心おせつも宮城野も、思案取々。常悦重ねて、「秋夜殿イザ一間へ、皆も一所に。コリヤ宮城野、必今の強異見、跡に殘つて忘れぬ様、篤と心をナウ鞠

宮城野「そこを一日かう上げては、秋夜様必油斷をして下さんすなへ」秋夜「ヲット合點油斷はせぬぞ」常悦「イヤまだ早い〳〵、油斷がよいぞ」秋夜「何早からう斯う追詰、ハア油斷せぬか」宮城野「油斷せぬとはお氣短か、それナア向ふを切るはいな」と、我を忘れて急立つ宮城野。常悦「ハテ差出過た默れ。女に習うて秋夜殿が相濟うか、不躾千萬、扣へて居よ。サア秋夜殿、お手はこなた、早く〳〵」秋夜「アヽ手前かなア、てまへがお手は女に習ふ〳〵、女々々、ヲヽ女でも岡目八目助言に付くが當世」と、渡らせぬ目算違ひに流石の常悦、常悦「イヤ秋夜殿、其お手御無用、折角助ける黒石を」秋夜「ヲヽ打詰た白石が智、此間の敵討、念なう本望遂げたり」と、聞いて一間に伺ふ信夫、宮城野諸共氣もいそ〳〵。常悦は氣色を變へ、常悦「ヤア差向ひの甲乙を、詞の助太刀受るさへ、大人氣ない鞠が瀬殿、女を頼みに打つ碁なら、常悦が相手に足らぬ、無禮至極」とねめ付くれば、秋夜「ハヽヽ、ソリヤ貴公が大人氣ない、尤も碁に打入るときんば、人事を忘れ禮義を缺く事、前九年の頼時なんど、まゝある例といひながら、それは格別、コリヤコレ高が女、アヽ嗜み召され」とやり込むれば、氣の毒さうに宮城野が、宮城野「ほんに私とした事が、座席もろくに辨へぬ、不調法は廓の癖、お赦しなされて下さりませ」常悦「ハテ扨喧しい、下れ。育賤い流の女、常悦に近寄て無禮の助言、嗜め」と、碁笥おつ取つて打たんず能圖へ、おせ

はず同道なされた秋夜樣の底意は」と、云ふを打消し、秋夜「ハテコレ〳〵松田殿、ソリヤ身どもが胸に有る。何は格別常悅老、兼ておきのが賴み居つた、時節は今と存じの外、黑右衛門は鞠が瀨の浪宅を出奔したと樣子を聞き、こなたの思案も此おきのへ聞かせ度く、同道したはそれゆゑ」と、云へどもとかうの答へもなく、常悅は傍の碁盤、吉見に云ひ付け引き寄せさせ、外へ散せし圍碁の他事、常悅「何と秋夜樣、先日勝て勝据ゑた返報がへし、敵討の氣はないか、サァ一勝負」と碁筒の蓋、取れどもとれぬ宮城野が、心に心おく石の、秋夜も探る胸の端、かけて四番と膝すり寄せ、秋夜「一勝負とはおもしろし、まづは先手」と打つ石の、定石ならぬ常悅が、手まへの角に扣へる黑石、しかける鞠が瀨遠巻がかり。宮城野は目も放さず、願ひの辻占つけの櫛、引いて見るのも心のねたば、松田吉見も密事の甲乙、是なんめりと差覗く、秋夜が思をはねかける、宇治が一物粘ける雁行。常悅「イヤ征とお出でか」秋夜「してうとは、へ、、、事をかしい、尻もむすばぬ兩手がけ、是では黑が」常悅「ア、遁れる手段、そこをしきつて追詰める」秋夜「ヤコレ此白、石ナ此白石の敵討」常悅「ム、敵討々々、今一打を此席で、のばすが上々上分別」宮城野「ソレ黑石が隅の手に續かうとするはいなア。ドレ〳〵黑石は水の色、北朝に渡らせぬはこびが見たいなア」吉見「ヤ小賢い黑石殿、どう逃げたうても此白石、ム、持か劫かと此吉見も」

さの秋の風防ぐ、障子吉見が建切る折から、次の間よりも咳拂ひ、鞠が瀬秋夜入り來れば、あるじ常悦吉見諸共、夫ぞと出づる入魂の挨拶、そこ〳〵に座も定まり、常悦「コレハ〳〵秋夜殿、在鎌倉の諸侯達へ、日々に出入の隙なき某、いつぞはお招き申し入れ、お咄と存じをつた。ヤモ折に幸、兼て密事の用談も、續く積鬱晴し申さう。イザまづ奥へ」と饗せば、それは身どもも同じ事、劍術指南の弟子衆は、皆歴々の大身故、平外の雜談も差扣へ、鬱散を心懸しに、今宵の招きは別して樂、秋の夜長の物語、久く絶しナソレ御秘藏の御調でも承はらう」「誠にそれよ、琴三味線の連引に、幸の相手を同道、ソレ松田氏おきのを是へ」早く〳〵の聲の下、彌多七連て宮城野が、今は目立ぬ袖頭巾、地味な小袖も愛くろしく、切戸開いて、宮城野「ヲヽ辛氣。御玄關に待して置いて、いつの間に此お座敷へ」秋夜「ヲヽサ、二月ばかり程經ながら、まだ宇治殿へは連立ぬ宮城野」常悦「ムヽスリヤ稀人とはおきのが事か、ヲヽよくぞ〳〵、サア〳〵こちへ」に、「アイ〳〵」と、いんす詞もどこへやら、町と廓とをなひ混の、かゝへ解くも艶めかし。常悦も片頬に笑ひ、常悦「ヲヽ今は廓の勤も引いて、秋夜殿の世話に成り、藝道修行と噂に聞いて、イヤモ何より重疊さりながら、今宵は分て其方にも、ちと遠慮有る密々咄、能く御存の鞠ケ瀬殿、同道せられしには様子が有らう」「イヤ其義は此彌多七が、參りがけにも申し居つたが、それに構

居やしやんすか、又とゝ樣やかゝ樣のやうに、ひよつとした事でも有るかと、案じて暮す私が心、思ひ遣て下さりませ」と、咄す中にも憂き涙、「ヲヽ道理ぢや〳〵、道理」と背撫で、身につまさるゝ露雫。落日の紅ういとゞ照そふ微醉機嫌、常悦は閑居の障子、吉見勝右衞門に開かせて、臂打かける脇息褥。常悦「ヤ、ナント勝右、今讀だ六書の中、柔能く强を制するとは、御身よくサ此語を會得有つたか」勝右「ハアコレハ〳〵、先生の存寄らぬ御尋、成程其語は孫子が、鷄陽山に入つて、賊軍を防がせるに、女兵を以て打勝たる、例を引いて注せしとは」常悦「アヽイヤサ〳〵、其女兵たるといへども、一致に心固まらねば、泰山に打つ卵にも劣る道理、季氏が野外に虎を射たる弓も矢も、鐵石ならねど心の羽ぶくら巖に立つ、何も案じる事はない。今鎌倉中に名を知られた宇治の常悦、受合た敵討、討さいで濟むものかと、サ醉紛れにむだ云うは、勝右御免」とそらせし咄、こなたにおせつが、おせつ「アレ今のを聞いてか、こつちへ聞けと主のお詞、アノ一言を賴にして、何にも案じる事はない、ヤ、モヽヽ必々急ぬがよいぞへ」と、諫めに嬉し悲さを、信夫が便杖ぞとも、柱時計の音冴えて、火や點さんと告げ渡る。常悦「ヲヽ秋の日足の心なう、今日も暮たか。ソレ今宵は鞠が瀨、稀人を同道と云越された心待、ソレおせつ、放れ座敷の床懸物、花も生たか、釜も懸たか」「アイ〳〵」あひの襖ごし信夫を連て勝手口、入る

け殿」おすけ「ヲヽおなよの云やる通り、此方とも男に尻餅を、ほつたりこ〳〵搗かす祕術を問ふ心掛、そちつと情に入て置こ」と才出れば、おせつ「アヽコリヤけうこつな物の云樣人聞も宜うない重ねて急度嗜め」と、行儀も家の躾方、信夫は氣の毒取りなして、信夫「おせつ樣のお詞、皆惡う聞かしやんすな。それに付いて姫御前の嗜みに成る稽古のお相手、毎日々々習うても、心ばかりの不器用者、必ず笑うて下さんすなへ、追付け日の暮お客のお出に程も有るまい、次へ〳〵」にてんばども、あんげり烏明た口「ア利口なお子や」を汐引に、皆々勝手へ入る跡に、かよへ解き捨て襷を外し、おせつ「ヲヽ信夫殿、敵志賀臺七等は、常悦殿とは近しい中、鵜の羽黒右衛門殿と云ふ事、そもじも姉御も知つての上、敵討を急ぐとの思ひためは尤もながら、鞠ヶ瀬樣との密事の企、それに付いて黒右衛門殿、親うするも一術と、常悦樣の奧深い御思案、女の私が問れもせず去りながら、兎角武藝が肝心關門、抑へて置く敵なれば、今討とも儘なれど、稽古が足らねばまさかの時に、遲れと成ると呉々の御詞、それ故心勵みの爲、私が稽古に準らへて、放れてゐる稽古、こなたは嘸かしもどかしう思はつしやらう」信夫「アイ私もさうは思うても、そもじの姉樣と、一つにならねば討れぬ敵、御二人樣のお情で受出されてござんしてから、一度文の便も聞ず、お爺樣ともお嚊樣とも、便に思ふは姉樣お一人、此樣に音信のないのは、若煩うても

つてやりやれさ」宮城野「ハヽア有難いお志、お禮は詞に盡されませぬ」と、伏拜み〳〵兄弟悅ぶ有樣に、秋夜「何妹迄も添られては此方も痛み入る、せめては殘りの三包を」惣六「イヤモシ其三つは捨鐘の、モウ九つの鐘も鳴る、コレ宮城野夜更けぬ中に早う行きやソレ」宮城野「コリヤ大門の切手エヽ忝い」惣六「ハテ禮には及ばぬ、アレ引四つのアノ拍子木」

第八

我家に、千尋の影を榎の木蔭、牛込邊にゆつたりと、浪人ながら貯へに、餘る風雅の茶心や、手前も淸き宇治の常悅、心置なき友どちと、つれ〴〵晴す夜咄の、用意をかねて妾のおせつ、身の願ひさへ世を忍ぶと、おのぶが名をも改めて、竹刀、鑓、仕合の稽古、懸聲いとゞ柔くも、流石手埀の閨の友、傍に並る女子ども、皆それ〴〵にかよへだすき、片唾口紅粉呑込んで、脇目も振ぬおせつが受太刀、付入る信夫が八重垣くづし。おせつ「ヲヽ出來た〳〵信夫殿、破軍の太刀を四寸に拂ふ利方の工夫、心懸が見えました」と、云はれてはつとよしばむ信夫、女ども口々に、おなよ「テモ扨も〳〵器用なお子、モシさう氣轉が利過ぎては、追付け男持たしやんして、お寢間の口舌に殿御をば、天井裏へ彈きあげ、腰拔させて拜ますは、ァヽ今の間の事で有る、ナウおす

跡金は明日迄と申されよ」惣六「宮城野の身受の金、是へお渡し下さりませう」秋夜「何其元は御亭主か、宮城野が身の代は六百兩とな、則ち手附三百兩、ソレ御亭主へ渡し召され」多島「ハッ」ト答へてならべる包、何心なく立寄る惣六、油斷を見濟し切込む多島、身をかはして鐔元確乎、惣六「コリヤ何するのだ、ハヽアコリヤ又五町が、茶番狂言の稽古か、眞劒ではヤ危い」と、突退る間も兩人が、一度に拔て切りかくる。「エイ」とさそくに蹴上る疊、我身の盾に飛鳥の早業。秋夜「ヤレ手の內見えた過あるな旁先づ引かれよ」多島作平「ハヽア」秋夜「ムヽ扨々驚き入つたる御働、隱しても隱されぬ新田家の浪人、島田三郎兵衞殿と疾々より知つたり、何卒南朝の御味方と成り、我々が大望の片腕とも成り給はらば、常悅も祝著致さん。偏に〳〵お賴み申す」惣六「イヤ大望と仰やりまするは、コリヤ夜具でも拵へるか、新造でもお出しなされますか、爰は廓諸人の入込み、洩るも安し何を仰やるも皆酒の咎、私は亭主、客衆の事は存じませぬ。又本名とやら假名とやらを明すも時節が御ざりましよ、何にも聞かぬといふ證據は、コレ誓紙の文言、宮城野そこで讀で見や〳〵」宮城野「ヤアコリヤ私が年季證文ぢやござんせんかへ」と、いふに駈出る妹のおのぶ。惣六は引捉へ、惣六「小娟の良い故詞付も直したいと思ひの外、此不器用では直るまい、內に置いても高が腰元、宮城野が受出された餞に付けてやる、隨分目を懸け遣

も謀を以て此場は見遁し返したわい」伊平治「ム丶スリヤ物影にて承はりし、谷五郎殿も宮城野殿は御存じないか」宮城野「ナニ谷五郎様とは、ドレ何處に」五町「ヲ丶其谷五郎も宮城野も、則是に居りまする」宮城野「ヤアお前は牽頭の五町さん、そんならお前も」五町「驚きは尤も形を窶し入込み、昨日も淺草にて、道ならぬ金の騙事も軍用金集めん爲、我本名は坪内多島」秋夜「ヲ丶聲色に眞似の名人適々」五町「ハ丶丶ハア丶」ひつそいゐる。秋夜「ヤコレ氣遣有な宮城野、常悅殿の頼み故、此廓を聞合せ、大福屋の宮城野は奥州生れと聞し故、某揚げて身の上を問落し、力にならんと來りしに、今日黑右衞門との出合、是も尋ねる志賀臺七、先彼が祕書を奪取らぬ其内は、敵討はマアならぬ、則常悅にも知らせやりし上は、兄弟が身の上も自由にならん」と、詞の中に大野や熊、息を切て駈來り、熊「秋夜樣是に、最前作平が贋筆、邪智深き臺七必ず油斷は致すまじと、兩人疾より申合せ、互に爭ふ狂言の楯、直に常悅樣の御宿所へ參り則ち用金三百兩、跡金明日持參の上、宮城野殿は身受け致さん、金子は是にござります」秋夜「ホ丶常悅殿の宿所迄行戻り二里餘り、半時かゝらぬ其内に韋駄天走り聞及ぶ、日に三十里行く道の達者」「ホ丶熊川三平出かされたり〱」と、譽る詞に作平多島は、作平多島「臺七此場を迯歸りし上は、如何致し候はん」秋夜「イヤ此場を遁れ逃去りしは、只敵討の用心ばかり、先づ宮城野が手附三百兩、亭主へ渡し、

谷五郎とはコリヤ堪らぬ、如何して爰へと胴震ひ、差足抜足表の方、こそ〳〵と迯て行く。
時分はよしと吉野屋が、緣先の釣燈籠、小石拾うて打付ける、音に秋夜は奥より出で、秋夜「伊平治首尾は」伊平治「まんまと仕果せ此狀箱」秋夜「シイ、兼て常悅殿と某が大望の企て、鎌倉中の井の中へ毒を流し、皆殺しにせん工、其第一の毒藥祕法、忍び松明軍慮の一卷、楠原普傳が志賀臺七へ傳授せし所、然るに彼當地へ登りしと聞き、何卒近寄せ奪取らんとすれど、面體知ぬ其上に、本名を隱し此里へ入込、是幸と此秋夜も、遊所の出合に心付け、疾より一味徒黨の面々、形を替へて付纒ひしに、黑右衞門と云ふは臺七と、しかと本名知れざる折から」伊平治「ハア、夫故に宮城野兄弟が咄を立聞き、又松兵衞が書し扇、最前拙者が貰受け、是を贋て內通の手紙を拵へ、本名を明せし上は、謀を以て一卷を奪取り、其上常悅殿の賴みの通り、宮城野に敵を討せ」秋夜「ヤレ音高し有竹作平、贋筆の達人ホ、、、でかされた」はつと計に此方より、隱せし一腰脇挾み、傍へ心次の間より、宮城野は身づくろひ、表をさして駈出す。秋夜「コリヤマア〳〵待つた、氣色を變へて何國へ行く」宮城野「どこへ行くとは知れた事、親の敵の志賀臺七、追駈て本望を」秋夜「ヤア討してよければ某が討してやる、敵討は今はさせられぬ」宮城野「ム、そりや又何故でござんすへ」秋夜「サレバサ、今敵を討せては某共が大望の、イヤサ爰は廓、夫故に只今

見廻し懷中の、矢立取出しさら〳〵と、手早に返事書認め、黑右「使は蔦屋に待てをるか。某直に逢うて」伊平治「イヤ〳〵爰を只今お歸りあらば、何か譯の有る樣で、却つて惡うござりましよ。何か知ねど其御狀は私が持つて」黑右「イカニモ〳〵心きいたる汝が有樣、云付ける事も有る。先返事をちつとも早く」畏つたと急ぎ行く。跡打詠め黑右衞門、狀繰返して、黑右「何々、先達つて貴殿手に懸られし、逆井村の百姓與茂作娘、八年以前江戶へ參り、只今にては吉原にて宮城野と申す由、又々妹も當地を立退き候、定めて是も江戶へと存じ候、必ず油斷有間敷候、急使早々申遣し候以上、唐崎松兵衞。スリヤあの宮城野が、ム、宵からの座敷の體、稍ともすれば心を付る詞の端々、昨日來た奥州者、慰みに呼んで見ろ〳〵と云たは是も確に妹め、モウ此家に長居はコリヤならぬエ。イヤ〳〵高が女郎さいたつた二人、人知れず打放し、枕を高く寢るがよい、夫」と刀の目釘を濕し忍入らんと伺ひ居る。あなたの座敷に密々聲、何事やらんと立聞けば、五町「そなたは親々の云號、某は谷五郎、今の名は金江勘兵衞」宮城野「そんなら云號の夫で有たか。何もかも妹に聞やんした。親の敵の志賀臺七、今日爰へ來たこそ幸、助太刀して敵を討せて下さんせ」五町「いふにや及ぶ。我爲にも舅の敵、某も奥州にて、彼を討漏したるが殘念、小指の先にも足ぬ奴、氣遣仕やるな今の間に」宮城野「ハヽア忝うござんす」と、互の咄を聞居る臺七、

お目にかけうぞ」と、云ふを後に立聞く熊、持つたる狀箱搔摑む。伊平治「コリャ何ひろぐ」と拂ひ退け「此伊平治が持てゐる物、ちよつかいをさつかけて、イヤどうするのだ」熊「ハ、、、如何するとは知れた事、何か密事の其狀箱、中を一寸見たいから」伊平治「イヤならぬわ、鵜の羽樣のお馴染から、內證の手管の文、持て來るのは船宿の役、外の者に賴みはせぬ、封目急度通ふ神、山の神には引裂かれても、いつかな見せぬ色紙をば、鼻つ紙の分際で、見樣とぬかすと、土手下の紙洗橋へ叩込で、還魂紙の淚を澄させるぞよ」熊「ハア、面白い、花のお江戶町廣い中、此熊が目通りで、時の京町と默つて居れば無上に味噌を揚屋町、モウ角町にして置れない、伏見町の節々を、碎いても取にや置ない、野郎め、水道尻を打叩かれて、謝りんしたと云ふなよ」伊平治「アノ汝が」熊「われが」と互に詰寄り軋合ひ、尻引からげ身繕ひ、奧は騷ぎの三味線の、拍子に紛るゝ二人爭ひ、後に伺ふ黑右衞門、作足きいたる伊平治が、急所をすかさず眞の當、うんと計にたぢろく熊、得たりかしこへ隱るゝ伊平治、何國迄もと大野屋は、跡を慕うて追て行く。黑右「伊平治樣子は見屆けた」伊平治「スリャアノ最前より何も角も御存か、先刻御國元より御狀到來、何角の樣子は存ぜねど、中は密書と承はる、夫を嗅付け熊めが狼藉、必ず拙者にお心置なく、御披見あれ」と差出す、狀箱の紐解きほどき、封押切て繰返し〳〵、讀度々に悔りびくり、傍

山、のふさとなとさよいよへ」伊平治「サア〳〵此奴が當ぶりで當をつて、又こじ付をるわい。イヤ申し旦那、口説の種の此扇、私がお貰ひ申しましよ。ヤお供の衆も嘸御退屈、いつそ川岸へでもお連申しましよか」黑右「夫もよからうぢや、早く行つて迎ひは七つ半に來さつしやいちや」伊平治「ハイ〳〵そんなら花魁皆樣。コレ五町、熊やそこを頼む」と提燈のぶら〳〵歩き出て行く。熊は手酌で大盃。熊「サア五町、さらば貴公へあげ屋町」五町「ヲツトいたゞき笠盛稻荷」宮城野「ヲヽ二人ながら大きな盃でぬし達はホンニアマすつてん童子を見る樣でおざんすにへ」五町「アイ私やすつてん童子だ」熊「ヲヽ俺もすつてん童子だ」五町熊「アすつてん童子〳〵。エハヽヽ」いかい戯と騒ぎ飲。秋夜「イヤ何、五町黑右衛門殿も最お休なされたからう。マヽヽ先二階へ」五町「左樣でござります。イヤ申し花魁、黑樣を必ず床で殺すまいぞ」黑右「殺すとは諸侍を」五町「ハテ可愛がつたりがられたり、氣も魂もハヽヽ、ぬける故、殺とは通の詞でござります。お侍でもお公家でも、名を取らうより床を取れ、サアマアあれへお出なされませ、秋夜樣と私は、奥へずるいきのぐい呑と出かけませう。皆樣奥へ入らせられませう」五町「すつてん童子〳〵〳〵」騒ぎにつれてぞ入りにけり。提燈提げて伊平治が、内を覗いて、伊平治「アヽ黑樣に逢ひたい物ぢやが、ドレマア座敷へ行て、アイ〳〵夫では人目が有る大事の御狀如何して

宮城野「サア其譯の有るお方へ」黒右「イヤサ身共が國元の下役唐崎松兵衛といふ者、宮城野の萩見物の折柄、彼奴手自慢で此扇、書て吳た古歌、又今日逢うたそもじの名も宮城野とは、誠に是も結ぶの緣」宮城野「イエ〳〵初にお目にかゝつて、かう申すもどうやら何とか思ひなんしよが、結ぶの緣の門違ひさ」「是は迷惑、執心で參たに違ひは御ざない、何のそもじにあかはらはたれ申さぬ」と、急ばつい出る國詞、新造「モシ花魁へ、爰にも赤はらがいひんす、主も奥州者だな」と云はれて鵜の羽が悔り眞面目、黒右「イヤ〳〵身共は京ぢや、京生れぢや、夫ぢやさかいで方方奉公して、奥州にも少し居た事も有れどチヤ、夫はずつと久しい事だ。今は西國の大家に奉公する、江戸は始めて、生れは京ぢや、京の六條數珠屋町夫でサ、酒を呑とつとやくたいぢやわいなう、無茶ぢやわいの」と、訛散らした京詞、宮城野は黒右衛門が奥州詞に心付き、妹を呼で見せたさに、宮城野「コレ五町樣、昨日來た十二三の子、奥州者とやら、モ可笑い物言ひ、一寸爰へ呼んしよ」五町「是は面白うござりましよ、サアしげり殿呼んで〳〵」黒右「アヽ是々なんの在鄕娘、呼んだとて酒呑相手には成るまいし。夫よりはおいねかおなほを呼びにやれ」と、何か心に黒右衛門、胸に當つた此場の時宜。五町「モシ宮城野樣あなたの詞を承るに、上もかみ最上でがなござりましよ、唐崎樣は女郎の名ではなし、松兵衛樣とやらの事、松は唐崎ナア、霞は外

造の上著を暫かりに著て、既に拍子を初めけり。歌通人舞を見さいな、大通人の客撰には、いつも廓へ通ふ神、文の文魚も走り出で、男の喜十立ぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせきではないかいな、首尾を占ふ六川の龜も八鵜と文洲に、來之有ればさい先も、よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森羅牧十、渭州左達に秀民眉月照さふ里の夕映、祇蘭秀でて菊ち香ばし、阿能待美や江戸の幸、墨河安穩千局萬川、歌の嘯柯も勇ましや。幇間末社のかみも賑はし、只今奏づる舞樂清く、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな。宮城野新造「やんや〳〵きつい物だ〳〵」五町「イヤこじ付けのあてぶりどう御ざりますか」秋夜「イヤ面白い事で有つた、それ一つ呑め」五町「マアコリヤ山吹色有難い〳〵」と、いふに鵜の羽も負けぬ顏、小判取出し扇の上、黑右「ソレ伊平治、皆の者にとらせい〳〵」伊平治「ハイ〳〵、サア〳〵時ならぬ惣花ぢや〳〵、皆々寄つて戴け戴け」「是は〳〵」とばかり花を吉野屋が、面々に配分し、扇をながめて、吉野屋「ハア何か書いて有る、秋夜様コリヤ何と云ふ事で御ざります」秋夜「ム、みさむらひ、御笠とまをせ宮城野の、木の下露は雨にまされり、コリヤ唐崎と書いて有る」宮城野「そんならお前は唐崎様のお客樣かへ、夫なれば彼方へお知らせ申しんしよ、定めて主が今宵は惡うござんすによつて、夫で私を名代の心かへ、しみ〴〵お有難うござんすにへ」黑右「是は〳〵迷惑千萬、此扇はちと譯有る事」

新造「アイ〳〵モウ今來なんす、それ其處へ」と、いふ間もなく、古の歌に讀みしも哀なり、宮城が原の旅寢かな片敷く袖に鶉なく、涙隱して、宮城野「ヲヽ、五町樣、皆樣ようお出で」と座に直る。五町「イヤようお出でなんした所が、先きにからお前をまつの太夫樣、サテ旦那、此大入盃で一つお始め」黑右衛門「イヤ先あなたから」秋夜「イヤ〳〵此秋夜より其元樣が、カノ宮城野殿をお待兼ね、初對面の盃」伊平治「ヤア是はきつい通り者、此伊平治が仲人で、御祝言の盃は、是三々九度の黑右衛門はサアおあがりなされませ。サテ花魁、是は私がお取持、ドレ〳〵お酌致しませう」宮城野「ヲヽ伊平治樣、つぎなんすな拜みんすに〳〵」伊平治「何、拜みんす〳〵ヤをがみんすの谷渡り、向ふへ渡つて秋夜樣、此盃はあなたから、一つあがつて誰樣へでも、宮里樣にかへ。よしよし、先是でお盃もすみ町の親方の所なれば、女郎樣方の御器量も日本一の君」新造「コレたんとは云はれぬぞ、モシあのおかめの面は、此頃方々に懸けてござりますが、何の爲でござります」宮城野「アノお德女の面の事かへ、あれを懸けて置くと仕合が能いとの事、それでかけて置きなんすわいなア」新造「アヽ仕合とは有難いナウ五町、是も狂言の筋に成りさうな物かい」五町「成るとも〳〵、此頃揚屋町のせうか樣が付けた通人舞、新造樣方彈ておくれ。今爰で神降し、末社と云ふも我々が名、牽頭といふも一つにて、コレ此面を斯う被り、あれにましますの新

今にでもよい幸が有る物ぢや。コレ身の上大事に時節を待ちや」と、曾我に比へて兄弟に道を敎へる通り者、宮城野は猶しやくり上げ、宮城野「常からお氣質知ながら親の別れに氣も亂れ、手向ひ致した私を、憎いとも仰しやれず、却つてお慈悲の御詞、有難しとも忝なしとも冥加の程が恐しい」と妹もともに手を合せ、只伏拜む嬉し泣き、惣六「アヽコレ〳〵其禮に及ばぬわい、モ聞分けてさへ呉れば、俺も嬉しい〳〵」と、義理を立貫く男の惣六、隱せど袖に隱されぬ、胸に餘し哀には、通も不通も涙なり。奥座敷より遣手のまさ、まさ「サア申し宮城野さん、先きにから客人もお待兼ね、コリヤ誰だと思や旦那樣、ヤ新參の在郷そこに居ずと下へ行きや」惣六「アイヤあれが事も宮城野に、内でなと遣つて貰をと、それを今頼みに來た。コレ宮城野、隨分今の事を、ナ合點がいたか」まさ「ヲヽそれなればよい。サア〳〵早う來や」宮城野「アイ一寸と顏を直して」惣六「ヲヽイヤ素顏でも隨分美しい」と、譽るも最屓、賣物に花も實も有る亭主が詞、アイと返事も泡沫の、淀む隙なく行く水の、流は絕えぬ勤の身、妹を爰に奥座敷、引別れてぞ、三重

新造伊平治「狐を釣らう、狐を浮かせ、狐を釣らう」五町「取つて見せうぞ」新造伊平治「狐を釣らう〳〵、サア〳〵釣たぞ〳〵、サヽヽ五町呑々」五町「南無三、化かす〳〵と思つたら、ツイ釣られた。ヤ釣れたで思ひ出した、此宮城野樣は遲い事、モシ新造樣方へ、早う呼び申してお出なんし」

かうぢや、是も孝行ぢやと其儘で置けば、おれも女郎屋をやめねばならぬ、コリャ浮世の身過世過。又面々の內の躮が女郎買に行くと聞けば、ヤイ爰な癡愚者めが、勘當するぞと呵り付け、人の子の道樂者が來ると、爲に成る客人者ぞ、隨分と大事にしやと女郎どもにも云ひ付ける。マ此樣な得手勝手な商賣はして居れど、慈悲と情と云ふ事は心に不斷忘れはせぬ。不思議に昨日淺草で、廻り逢うた奧州者、姉を尋ねるばかりに此身を賣るとの志、直に女衒に金渡し、連れて來たのもそなたの身の上、國に妹が有るとの事、若やと思うた甲斐有つて、二人寄つて最前から、何やら咄す、扨こそと煙草呑ながら、隣の部屋で聞いてゐれば、切ない哀な咄を聞き、悲しうて淚が溢れ、手に持てゐる煙管の雁首上りを打忘れ、火皿で口を火傷したわいなう。元より浮氣な事もなく、勤大事にして吳れた其方の事、何の惡う思ふぞ。まして何にも知らぬ女の身、今突かけた此刺小刀、俺にさへ打落さるゝ位で如何して、相手は武士ぢやないか、若歸り討ち、サ內へ歸つても手前が恥になる。それぢやによつて云號の夫が北條殿と云ふ樣な後立になる人が出來た時は、ハテ惣六は男ぢや、證文の金高は表向無代でもやるわい、必ず俺を笑はさぬ樣にしてくれよ。モ芝居の積物や俄の世話もせぬ法も有る、眞實誓文啌ではない。五つや三つの頃よりも曾我兄弟は心懸け、十八年の苦勞辛苦。それ程には待ずとも、アレ天道の惠があらば、

似にりや杜若花菖蒲、其五月雨の暗き夜に、敵を討つたは曾我兄弟、ハヽヽハアコリヤ假名本の曾我物語、第四の卷、幸ひ俺が讀で聞かそ。光陰惜むべし時人を待たざる理り、隙行く駒、繫がぬ月日重つて、一萬は十三歲になりけり。身の不肖なるに付けても、又公方を憚る事なれば竊に元服して、繼父の苗字を取り曾我十郞祐成と名乘けり。コリヤ十郞元服の事、又此末箱王は母の敎に箱根へ登せしを下參して、北條殿と云う烏帽子親を取り、曾我の五郞時宗と名乘り、マかう云うてはあぢいな所へ曾我物語、一つも合點は行くまいが、よう推量して見や。河津殿の種でさへ親の無い身はあれ是と、繼親の、イヤ烏帽子親のと賴む、サ其中の憂艱難、モ我一存では可かぬぞや。其方が若姿を缺落して、敵、ヤサ其堅き男を尋ねてもいはゞ女の身の上、しつかりとした北條殿と云ふ樣な後立がなければ、中々思ひは晴されぬ。其中には惡い魔がさして、むざ〳〵月日を送る事も有る物ぢや。ハテ曾我殿原でさへ、大磯化粧坂の傾城に心を奪はれ色色の貧苦、ハテコリヤモ芝居でもようする事ぢや。又譬此廓を迯げ果せてからが、遠國生れの其方が事、當分先の的も無う、うろ〳〵するのを內外の者が見付け、イヤ〳〵どこそこに居ますると云うを聞いて、打捨つて置くとは主の身ではどうも云はれぬ。ハテ其方ばかりが親に孝行ではない、勤をする者に親に孝行でない者は一人もないわいやい。それぢやによつてあれもかう

其お人の名所は」おのぶ「イヤ名も所も知り申さぬ」宮城野「シテ敵臺七とやらの顔は」おのぶ「アヽよう覺えてゐ申す。目まなこの大きい鼻の平たい男サ」宮城野「モウ宜い云やんな壁に耳、父樣は武士の果」おのぶ「スリヤ其方や俺も侍の種だから一時も早う敵が討たうござるわいの」宮城野「ヲヽよう云やつた、でかしやつた、コレ親の敵は倶に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の大一座、騒の紛れ此里を、缺落するより外はない、何角の事は一時も早う立退田甫の方、私についてサア來や」と抱へ引締身繕ひ、立出んとする所へ、惣六「宮城野何處へ」と主惣六、宮城野「エ旦那樣何時の間に」と恟りは、隱せど聲に知られけり。惣六「イヤおれはたつた今、恟りせいでもよい事を。コレ宮城野、マ下に居や、そなたはアノ敵、エ、イヤサ堅き約束した男がある故に、廓を缺落、ハテさうであらう〳〵、惡いぞや〳〵。又其子は其方知つてゐるか」宮城野「アイ、イヽエ、アノ先きに新造衆が昨日から來たと云うて、連れて來てぢやによつて、あまり不便さ」惣六「それで呼でおきやるか、是も尤も、サア二人ともに用が有る、ちよつとマヽ、爰へ」と、云はれて何と詮方も、流石ちひさき女の魂、「旦那樣赦して下さんせ」と突懸る刃物搔潛り、側に有りあふ鏡臺の、鏡おつ取り打落し、惣六「コリヤ早まるな急所でない程に、心を急ずとマヽ、俺が云ふ事を、サア熟くりと聞きやいなう。コレ兄弟、エヽ、アイヤサ是は鏡臺、鏡に映る二人が顔、似たりや

俄の時、仲の町に出て居ても、若父様に似た人のありと思へば心付け、又は莊廓の勤には、田舍ぞめきの見物が、覗く店先格子先、見るのも若や父樣が、尋ねて逢にござんしても、それぞと知れる種にもと、思うて暮せばあじやらにも浮氣心は夢にさへ、結びし帶の解もせず、云號ある此身にて、つらいせつない、エ、恥かしい、悲い勤も親の爲、何卒早う身儘に成り、父樣や母樣と、一所に暮して如何してと、それぱかりを樂に、月日を數へ指を折り、待ち暮したる甲斐もなう、思ひがけない父樣は人手にかゝつて果ない御最期、又其上に母樣にも長い別れに成つたとは、マどうした薄い親子の緣、親を大事にする者は天道樣の惠みがあると、云ふのも嘘ぢや僞りぢや、賴みをかけし稻荷樣觀音樣も聞えませぬ」と、愚癡に差込む癇癪も淚に洗ふ如くにて、身も浮くばかり泣きければ妹も共に正體なく、おのぶ「コレ〳〵姉サア、便と思ふ其方が其樣に泣かしやつて、俺は何と成る物ぞ、よいしやんしてくれもしや」と、すがり歎けば、宮城野「ヲヽ、いとしやなう、海山越えて遙々と尋ね逢うたる此姉は、あるに甲斐なき勤の身、それのみならず此わしを尋ねんばかりにそなた迄、又此里へ身を賣るとは、何の因果か情なや」と、兄弟手に手を取りかはし、あやも歎の有樣は、秋の最中の月星に、雨雲かゝりし如くにて、淚の時雨ぞ哀なり。歎きの内に宮城野は、氣を取直し泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹最前其方の咄の中、云號の夫も江戶へとやら、

戸の木部屋に留て貰ひ、又は邪見の人の家、軒下に寢そべつても、邪魔な餓鬼子とてへんさ打れ、なづきのするをこたへ〳〵、ほんにてきない思ひをして、尋ねて昨日淺草の、お觀音の引合せと、守に入れし戒名の道引で、廻逢うたも血筋の緣。コレ便になつてくれもしや」と、歎に交る國詞、涙になまりはなかりけり。宮城野始終聞く中にも、悲さつらさ身も世もあられず、急き來る涙押し下げて、宮城野「コレ妹、定し常々母樣のお咄にも聞きやらうが、慥其方が五つの年、父樣は水牢とやらのお咎め、其御難義を救はん爲、母樣と談合の上、八年以前に此身を賣て人手に渡り、遙々爰に流の身。ア、思へば〳〵世の中に、わし程因果な者はない、遠國隔て此里へ、來たは丁ど十二の年、とゝ樣やかゝ樣のお顏も覺えて居るけれど、外に兄弟とてもなう、そなた一人を便ぞと、案じぬ日とては、ないわいなう。客衆を送る後朝に、東雲つぐる烏鳴き、惡いとどうやら氣に懸り、お二人ともに御無事なか、妹はまめで大きうなり、お傍にゐるが浦山しや、つらい苦界の其中に、傍輩衆の母樣が訪ひ音信の度々に、悲い咄聞せたり。又仕合のよい時は、嬉しさうな顏をして、モウ何年で年が明け、内へ去んだら誰樣と、女夫となつて如何してと、身仕舞部屋の咄をば、聞く程胸に一ぱいの、涙は落ちて白粉の、融て化粧で隱くせども、向ふ鏡に僞の、なきて苦界の、我身の上、巡る紋日も松の內、桃の節句に菖蒲葺く、軒の燈籠二度の月、菊の節句や

るまい、とゝ様かかゝ様が付てお出なさつたか、もし道ではぐれでもしやつたか、サちやつと云うて聞しやいの」と、言へば妹はしやくり上げ、はつと計りになき沈む。宮城野「コレ〳〵、斯う廻逢ふ上は、悲しい事は何にもない。泣ては濟ぬ、さ何とぢやいの」と、問はれて妹はなほ涙、おのぶ「コレエ父は五月田植の時、代官の志賀臺七と云ふ惡でゝな侍に、切られてお死にやり申したわいの」宮城野「ヤア〳〵〳〵、そりやまあどうして〳〵」問うもうろ〳〵狂氣の如く、おのぶ「アコレ〳〵〳〵、其様におもしやると、胸先が突張申して、一つも口へ出申さぬ、マダ悲い事がござるチヤア〳〵。私もすんでに殺さるゝ所、庄屋の伯父御が駈付て、力んで見ても何のまあ、正銘證據が御座ないから、きつと敵と云ふ事もならず、父は犬死。語るも長い事なれど、そんたの云號の御亭にも尋逢ひ、此江戸サアへ歸り申した、跡は私と母ばかり、便ない身に下地の大病、重り〳〵てがァまは六月の十六日、悲しや終に死しやり申たハイナウ」宮城野「ヤア」おのぶ「ヲヲ悲しいは道理でござるチヤア〳〵。跡に殘るわし獨、何條にも彼條にも仕様はなく、庄屋の伯父御が引取て、福島の町へ出はつて、奉公しろと云ひ申す。何の奉公所かい、口惜いと悔しいでごせ腹はやめ申す。それからそこを駈落して、それ様がなつかしさ、坂東順禮すると云うたら、お寺で笈摺拵へてくれ、段々尋ねてくる道筋、慈悲ぜごんの有る人は、飯喰せたり手の内くれ、背

宮城野「コレ其子や、さつきにからの咄には、姉を尋て此里へ來たと言やるが、マア其方の國は奥州で、何と云ふ所ぢやぞいの」おの「ヲヽ私らは奥州白坂の在、逆井村といふ所」と、聞くにはじめて宮城野が、胸にぎつくり、傍を見廻し、宮城野「ムウそんなら其方のとゝ様の名は、與茂作樣と言やせぬか」おの「イヤ〳〵、母の常に云はしやるには、姉サアの方にも印が有る、それを互に合せた上、心ざしも打明ろと云召した、印があらば早う見せて吳んされなう」宮城野「ヲヽ常々大事にかけて置く、その證據見せうぞや」とい立つもいそ〳〵そこ〳〵に、簞笥の上に硯箱、夏書の帳に書かけの文も心は通ふ神、淺草寺の觀音の、扉表具にお備も、上は鼠が引出しを、開けて中より取出す、守袋を見るよりも、こなたも首にかけまくも、思ふ壺井の御守、「コレ〳〵、國を出る時母樣が、大事にせいと下さんした、アヽ河内の國壺井とやらの御守。ヲヽとゝ樣は楠家の御浪人、扨はそなたが妹で有つたか」おの「姉サアでござるか」「ヲヽ嬉しや」と縋り付き、外に詞も泣くばかり。折ふし亭主忠六が、奥座敷へ宮城野が、出ぬはいかにと座敷の口、覗けば内に泣入る二人、仔細あらんと暖簾の蔭、身を潛めてぞ伺ひゐる。背撫さすり宮城野は、顏つれ〴〵と打守り、「ヲヽ妹よう尋て來てたもつたなう。年はの行ぬ其方、よもや一人來はしや

んとは、マ滅相な尋ねもの」おのぶ「サアそれだァから頼み申すは。昨日觀音サアで、目まなこの怖い人が連て行て、逢せてやらうと駕サァに乘て來申す所を、爰の御亭の世話に成り申して昨夜から居申す。脚かけ申すも他生の縁。ほんに赤はらはたれ申さぬチャア」新造「ちよつと見なんしチャアこ言ひすはイナ。ホヽヽ。そして赤はらはたれぬとは、マむさい咄ぢやないかいな」と皆皆轉て打笑ふ、中に宮城野、宮城「コレ皆樣、少い子を其樣に笑はぬもの、誰も目見の其時は、恥かしい事ばかり、今あの子の云つた、だよァがァまと云ふのはナ、父樣母樣と云ふ事、赤はらをたれぬとは、嘘をつかぬといふ事ぢやわいなァ」新造「扨もがおれ其譯を、お前如何して知つて居なんすへ」宮城野「サアそれはの、ヲヽ毎度私が所へ旅人の客衆がお出なんしたから、それでよう覺えて居るわいな。イヤ客衆で思ひ出した、奥の客衆も待兼であろ、私も今行く程にな、お前方皆樣連てよい樣に。コレしげりも中の町の井筒屋へいて、孫治樣に昨日の返事は來たか聞いて來や。此子は私が用がある。皆樣早う」と姉女郎の、詞に面々立上り、「ほんに勤と云ふ物は、何國の人にも逢ねばならぬ、宮城野樣のお咄で、此子の咄が解りんした。私らとても外ではない、だだァやがァまの爲に賣れて、此勤をするからは、客衆と寢そべる度事に、赤はらたれて氣に入つて。小遣ひ貰を」と口々に、奥座敷へと急ぎ行く。跡打詠め宮城野は、おのぶが傍へ差寄つて、

だ、姉を知らせて呉んなされと云つては泣んす。モシ花魁へ、今一寸呼で來てお聞かせ申しんしよ。サア宮柴樣御ざんせ」と、打連れ下へ立つて行く。宮城野は打笑ひ、宮城野「ほんにあの衆とした事が、ひよかすかと苦勞のない、よい氣ぜんでは有るわいの。コレしげりや、此手拭も搾つて干して半插　櫺子へ出しや」「アイ」と禿がまめやかに、袂を帶へかいしよげに、取片付る其所へ、新造二人が伴うて、「サア〱こちへ」と座敷の內、おのぶはついに見なれぬ簞笥、錦の夜具に三ツ蒲團、赤らむ顏の緋縮緬、うろ〱見廻し。おのぶ「コレ女郎サア達、人の寐そべつてゐる所を、用サアあるから早く來いと、二階サアぶち上て、コリヤマア何たる所だツテヤア。どこもかも光り申て、お洒落の櫛サア見る樣に塗てべエた簞笥サア、其上に夜の物もコリヤ金切たア、モしやァ蒲團も蘇枋染の色のよさ、私らァ臥つたら踵の胼サア引懸つて、うつ切れ申すべい。おやつかな魂消申す〱」と云ひければ、皆々可笑さ押隱し、新造「コレ其子や、てまへが年は幾歳に成り、國は何所でどうして來た。夫を咄て聞かしやいなう」「ヲヽ私ら國サア奥州、父や母に別れて一人、江戸サアはあらく盛る所だアと聞き、其上姉サア吉原で名の高い女郎サアに成つてゐさるとの咄。童子の身として敵ない思をして、尋ねてくるも海山物語の有る事そふたァ」新造「モシヤ、コハ馬鹿らしい。ヤ何だかねつから知れんせんよ。其上に吉原で名の高い女郎衆が姉さ

書店も入相に、花莚巻いて片寄せて、簾下せば開く障子、勝手はとつかは膳盡し、美を盡したる妓女達が、皆様お出でと夕まヽの、用足す禿大根漬、一寸向ふへ一口の、茄子も色の榮耀喰、二階座敷は身拵へ、新造禿がてんぐ〜に、運ぶ櫛箱鏡臺に、其俤を映しては、花の姿を宮城野とて、本原の萩の露おもみ、觸らば落ちん愛敬は、里に名高き情知り、人のながめも細見に、山形のない氣散は、紋日もよそに宮里が、宮里「モシ花魁へ、先に本屋の重様が、此中お借なんした、曾我物語、其跡ぢやと云うて置て置んしたぞへ。イヤホンニ宮柴様、今日の客人は中の町の蔦屋から二人一座、お前にも早う身拵へして、お出なんせと遣手衆が申しんした」宮柴「ヲヽ急しない、今身拵へして行んす。したが知つた顔でも有るかや」宮里「イヽエ、どれも〳〵侍衆さ、一人はよいが外に獨は穢くろしい髭の、目の大きなが花魁の客衆だと、吉野屋の兄様が云ひなんした、モいやな客人でござんす」と、惡く云ふのも譽るのも、にべなき新造の後生樂。宮城野「コレ〳〵又そんな事云うて、遣手衆に叱られようぞへ。お前方はマァ座敷へ往きなんせ」宮里「イヱ〳〵、お前と一所にまるりんす。座敷では牽頭持の五町さんが、いつものお道化、眞に可笑ありんすにへ」宮柴「ヲヽ可笑次手に宮里様、昨日旦那様の連てお出なんした奉公人、をかしい物云ひぢやないかいなア」宮里「サアイナア、遠い國から來たと云うて、中居衆が詞を慰めば、姉を尋ねて來た者

甲武士「イカニモ左様仕らん」と、互に編笠脱ぎ捨て、秋夜「お名は聞き及ぶ黒右衛門殿、拙者事は鞠ケ瀬秋夜、以後はお心易く」黒右「イヤ御丁寧なる御挨拶。シテ宮城野を私方へ揚げさせ、其元様にはどれへお出」秋夜「イヤ拙者儀も申さば痩浪人、中々其元様のやうに、請出すなどと申す事は罷りならねど、もし今日は貴殿に揚げさせ、又明日にも拙者が参り、互に買論などと大人氣ない事も致さんかと、憚りながら思召も恥しく、それ故お近付にも成り申した。兎角遊びは一人ではさえぬ、ナント御一座申しても苦しからずば推參申さうかな」黒右「イヤサ強て求め樣と拙者は申さねど、此船宿が申した故、却てお氣の毒に存まする。先貴殿宮城野を揚げてお遊びなされ」と、義理もどうやら惜さうな、顔を五町が、五町「何さ〳〵、あの樣に仰る秋夜樣、一念の殘らぬ其證據打寛いで騒ぎませう。爰は店先サアマアあれへ。コレ若衆、マアお連申さつしやい」女郎「アイアイ蔦屋の若衆一寸爰へ。今日は此方の内は店も少い故、早う引きましたが、外はまだ引けませぬ、晝の分も」五町「コレやひを云ふな、皆五町が呑込だ。コレ熊、伊平治、手前達も其樣に白眼あうてゐる事はないわい。旦那衆さへ御合點なら、立つと云ふ物ぢや。何も角も俺に呉れ。サア是二人ともにわつさりと、一つ打て」しやん〳〵祝うて三度しや〳〵んのしやんと濟んだ此場の立引、呑込む鵜の羽黒右衛門、一物ありや鞠ケ瀬が、衣紋流の人品に打連内にぞ入にける。早

りには、名代なりと外をなりと、マア其談合かよかろぞ」と、手前勝手を聞かぬ伊平治、伊平治「イヤコレ熊、其方が旦那衆大事なりや、俺とても同じ商賣、お互に茶屋へ落合つて面倒なら、座敷を替へて遊ぶ事もあれど、ハテ客衆は知らぬ同士、殊に御馴染と云ふではなし、コリヤ此方へ大夫樣を貰をかい」熊「ムヽ遣るまいと云ふたら何とする」伊平治「ハテ一度も買はしやつた事ではなし、又此方の客衆は、此間咄にも聞たであろ。鵜の羽黑右衛門樣と云ふ大盡樣、初會から事によると請出さうと云ふも自由」熊「イヤ是伊平治、吉原ばかりは金の味噌は上られぬぞ、此方の客衆が請出したら、其時は何とする」伊平治「ハテそれぢやによつて今揚げるは」熊「イヤならぬ」と、互に云へば云ひ返し、藍けんぼうのうずあられ、小紋も兀る揉合の、出合頭に牽頭の五町、五町「ヲヽ譯はいはずと皆聞いたが、コレ二人ともに旦那衆が大事故尤もなれど、俺もお二人樣は知つてゐる、所を今我ら呑込で、宮城野樣にお目にかゝり、主の心でどちらへでも、馴染に成つた其上では、是非お一人は出物が出來る、浪風なしに納る思案を」甲武士「ヲヽ其思案は某が了簡。ナニ五町、宮城野は身どもは揚まい、彼方の合方にお取持申せ」熊「イヤそれでは此熊が」甲武士「ハテ立つ、たゝぬは馴染になつた上の事、其樣に急くに及ばぬ」と、言ふに鵜の羽は笑壺に入り、黑右「是は〳〵、どなたかは存ぜぬが、溫順しい仰やり樣、一寸お近付に成り申したい」

少ない故、世間より早うひけと旦那樣の云付、皆二階へお出なんせ。マ夫みせ先で戯するか。しけりも花魁の用が有る、早う行け。お前方も大きななりをして、玉取らうより客衆でも、取る樣にしなんせ、名代に出る計が勤でもないわいな」と、一寸云ふのも氣味惡く、商人どもは荷を背負ひ、商人「チヽ玉を取る〳〵と思つた中、遣手衆の目玉を取り、コリヤおそろだんべいきさごだ」と、門へ出づれば女郎ども、サア皆樣と夕ぐれの、打連立つて入る後は、又も賑ふ見せ先へ、大小しやんと立派な武士、人目を忍ぶ編笠の、内ぞゆかしき風俗の、後より付添ひ船宿熊、熊「モシ旦那、今中の町の蔦屋の店へ腰掛けて居た深編笠、此大福屋の宮城野樣を揚げたいとやら云ふ咄、お前も又宮城野樣をお揚げなされたいと仰る故、何かなしに私が、お急ぎぢや程に大福屋へお連申して行く、後から來いと茶屋へは申して參りました。サア早うお揚りなされませ」と、いふ間もあらぬ編笠の、供もよしのや伊平治が、來る道筋も長羽織、蔦屋の男が先に立ち、若衆「申し熊さん、お客人をお連申し、後から來いと有る故、參らうと存じました所、又此お方のお出、今日はいせ時平藏は江戸へ出ました故、自由ながらお二人樣を懸持」熊「コレ若衆、此お方に宮城野樣をお出し申して下され。サア早う〳〵。コレ待た、此熊が連れた旦那、そつちのお馴染ゆゑ、一寸訪れお先へ來たのは、彼の宮城野樣を揚やうばかり、後から來た替

東、本所邊」女郎「アイ慥神田土手下とやら云ふ所、そして内から毎日金を貸た所へ、大勢で取に廻るとやら云ひした」と、咄すを側で本屋の重、「コナ法印何をいふ、神田と云へば南の方、毎日取りにあるくとは、夫はかの日なしではないか」法印「ハテ所は南なれど、東と言うたは則日濟の云違ひ、指でも髪でも切代へて、隨分不參のない樣に、文でせがんで見たならば、物にならう」と辯舌に、「同じく私が客人は、どう云ふ心か見ておくれ」法印「是は久しく便がない。お前の部屋を持つた時、無心の文に返答も、なしも礫も面目なく、來ぬのも道理震爲雷、新造の時に逢た儘」乙女郎「扨も奇妙に當りやした」「サア〳〵おまへ」と又次は、「卜の表も巽爲風、好たが因果乾の卦の、髪の物迄用に立て、簞笥の中も坎爲水、客衆が有れば喧しく、髻を摑んで引倒し、乾兌離、踏んだり過言坤、八卦にあらぬもつけ事、終に遣手の耳に入り、二階をとんと風地觀、お前も方々鞍替に、其行先も火山旅の、格子も時に合はぬ客、あふも不思議、逢はぬも不思議伏見町、盡ぬ緣を待つたがよい」と、云はれて「ハア奇妙な祭卜樣、コレお初穗と十二銅、包に餘る見通しと、出せば法印したり顏、法印「當る道理此里に、愚僧も久しく年をへし表の袖の綻や」、袂に納め立歸る。又打寄て新造禿、「コレ大きなさゞ買て來いんした。サア玉取て遊うぞ」と、餘念他愛もなき折から、奥より走つて出る遣手、遣手「皆樣今日は店も

しつこい望ぢやな」本重「サレバ〳〵、抱めうがが男の紋なら、是もサゾうそ鈍な奴であろ」乙女「アイお世話さ、人の客を惡う云て貰やすまい。しみ〴〵好ねへぞよ」本重「アイついぞ好たと云て、一人でも文の取持して貰た事はなし、私も抱めうがでも付けやんしよか」乙女「ア丶云もんだ、見なんし宮里樣、夫でも色事が有るとさ」本重「ヲなくて如何しんせう。主達はあだ付きてゞ、方々の新造樣方は自由さ」乙女「コレ、なんぞ面白物が有るなら見せなんせ」「アイ」と風呂敷解きほどき、本重「マヅ女郎さん方には八文字お伽ぼうこ小夜嵐、是は糸櫻本町育、こちらは妹脊山、春太夫が當た物、モシ是は今年の新版藝者甚孝記、こちらは顧撰大通通寶、どれも面白うござります」乙女「そんなら夫を」本重「又何ぞ外に、ヲ丶此封じた本は」乙女「ヲヤ馬鹿らしいやア。一寸と見なんし、あきれもしない」と、大勢がどつと一度に笑ひ本、小間物やはさし覗き、小間物屋「イヤ是斗は無筆にも讀る。テモ大きな物、こちらも凄まじい、書いたわ〳〵。山伏の頭を斧で割た樣な物だ」と、惡口云ふも影がさす、君は三夜の三ケ月さま、甲子巳待庚申、當日念ずる本尊は、十七夜千手觀音。「ヲ丶祭卜樣よい所へ」と、早氣の移る女郎氣の、甲女郎「此中の待人はよう當りんした。又一寸と見て下さんせ」と、云へば法印算木取出し、法印「ム丶是は離の卦に當る。ム丶是は質屋か金貸だの」女郎「アイ所は何所と當て見なんし」法印「ム丶所は

の美しく、こぞり逢たるかべの峯、一網打ちたくありそ海、人魚の生簀も斯やらん。新造禿が寄あうて、甲女「コレしげり殿、竹が入しもモウ仕舞を、此頃は内のおかみ様も江の島とやらへお出なんして、跡は旦那さんばかり、私らも何卒よい男の金持たお客に請出され、江の島とやらへ行たい。しげり殿は何が望ぢや」しげり「アイ、私やなんにも望はないが、何卒大名とやらに成て見たい」と、いふを聞きゐる小間物や、「コリヤ凄じい望を云出した。して大名に成ば、てまへはどうする」しげり「アイ私や大名になるとや、中の町へ芝居を立て」小間物屋「ム、中の町へ芝居を立て、そしてどうする」しげり「アイ、使に行く度々に見んす」小間物屋「したり、こいつは有難い。こいつは咄に成るぞへ。ノウ本重」本重「ヲ、サかう云ふ所が此里ばかり。イヤモシ此中花魁へお貸申した曾我物語の跡、四冊めから持て參りました。是を宮城野様へ上まして下さりませ。又此間お頼申しました女郎様方の名前、書付て下さりませ、細見を急ぎます」甲女「アイ、書付て置きんせう。コレ小間物や殿や、下村の白粉を一つ、百助のくこを一貝置て行う」乙女「ソレ〳〵私にも元結紙と鐵漿楊枝、そして此象牙の櫛に、抱澤瀉と抱茗荷、比翼紋に付て、早う出來る様頼やす。二三日の中に客衆も御ざるから、其間に合ふやうに」と、色に見せたき紋所、精一はいの眞實なり。小間物屋「アイ〳〵隨分急ぎやしよ。シタガ抱茗荷に抱澤瀉とは、ナントどちらも

を云ふやらやくたいの、內證後に聞くどぢやう、葭簀の葭へ水飴を、塗つて待つのは氣轉の鷄

觀九郞は證文廣げ、薄闇に透し見て、觀九郞「ドレム丶、お賴み申す仕切證文の事、一つ此なべと申す女子、我等實の娘に紛れ御座なく候、此此度我等不勝手に就き、右の女子新吉原遊女奉公は申すに及ばず、道中旅籠屋飯盛下女、其外端々茶屋酌取奉公等にも差出し申度候へ共、我等方に其住口御座なく候につき、貴殿を相賴み、仕切奉公に差出し申候所實正に御座候、尤、年季の儀は、當亥極月より寅の極月迄、中年十五年、ム丶今年は子の年、子丑寅三年よし、うまいまい。ア丶是が有れば夢ではない。何時でも三十兩は取ると云ふものぢや。ア丶忝い」と、戴く所をちよいと差し、行方知らず證文の、紙は上らせ給ひける。觀九郞「ハ丶アこいつはやつぱり夢ぢやわへ」と、いふ間にどぢやうは一散に、跡を濁して三重急ぎ行く。

第七

古への葭蘆生し所をば、今は吉字に書替て、新吉原の繁昌は、外に類もなまめきし、或は貸本小間物屋、早いぞめきは淺黃裏、陣笠股引國侍、のさ〳〵歩く晝狐、一度もこんと云ひもせず、跡ふり歸りそゝより行く。所に久敷角町の、大福屋の名取の遊女、洗うた髮も晝見せに、素顏の儘

アイヤ申し〳〵、どうやらお前樣の聲は聞たやうな、ヲヽ夫々若やお前はどぢやう」どぢやう「アヽイヤ、コレ、ヲヽよきかな〳〵。賽錢變じて鰻と成る、地藏變じて泥鰌と成る、是も則ち因果の道理、最早我も文彌立歸らん、歸る所を見るなよ」觀九郎「ハイ見は致しませぬ」どぢやう「見るな〳〵、見ると一所に連行くぞ」觀九郎「ハアヽ悲しや、何の見ませうぞ」「見るな〳〵、ソリヤ見るは〳〵、見るな〳〵」と足早に、葭簀の蔭へ隱れ入る。觀九郎「ハイ〳〵見は致しませぬ。どうぞお連なされぬやうに。モウお歸りなされたか」と、天窓をあげてうつかりと、始めて心は付きながら、狐のぬけたごとくにて、觀九郎「コリヤマア今日はどう云ふ事だ、ア但し夢か知らぬ迄、夢ではないか、イヤ〳〵夢では有るまい。カウト、先爰へ日の有る中に來たは、順禮の田舍娘、騙して賣て、五拾兩懷へ入れたわ。そこで又宸筆の三百兩に成る物と替たわ。又夫が富の空札と替つたわ。追驅て行く、腹が減る、酒や肴を喰つたわ。錢が一本足らずと、南鐐一つ取られた。地藏はなくなる。ムヽこいつは夢かしらぬ迄。コリヤなんだ、ムヽコリヤ牡丹餅、ハヽア夢にぼた餅、アヽこいつはどうでも夢ぢやわい。アヽイヤ〳〵夢ではない事が有る。俺が懷にかの殘年の證文、三十兩になるやつがある、是があれば夢ではない。ドヽヽヲヽ有る〳〵、是があれば夢ではない。しかし、斯ういふ時節なれば、念の爲讀で見たいが、薄闇で讀めればよいが」と、何

「ヲヽよきかな〳〵。汝が其心正直なる故、去年孔雀長屋にて、此世を去りし汝が親仁も、今は極樂の東門の番人になつてゐるぞよ。汝に是も傳言あり」觀九郎「エヽ扨も〳〵、佛は見通と云ふが、色々の事迄御存じでござりますな。シテ親仁殿は、何と申しましたの」どぢやう「ヲヽよきかな〳〵、今の世は專ら後生願ひが多き故、極樂も大入、最早蓮花の上には居られぬ、門番のひきを以て割込でもしてやらん。一刻も早く來いとの勅諚」觀九郎「イヤ申し、エヽ氣味の惡い、憚りながら親仁にさう仰て下さりませ。よう云て寄越さつしやつたなれど、其樣なよい所へ今行くより、地獄でも大事ないから、マア五六百年も、待て下されとお傳へなされて下さりませ。定めて門番してをるなら、小遣も不自由にあろ。小僧めが事聞た故、どうやら心があぢになつた。イヤ申し爰に南鐐が一片ござります、是をお前樣と親仁と、山割になされてなりと、今行かぬ樣になさつて下さりませ」どぢやう「ヲヽよきかな〳〵」觀九郎「ハイ〳〵是はお聞届け有たさうにござります。お前樣も大抵の御苦勞ではござりませぬに、其重たさうな錫杖、アヽイヤ申しお前樣の錫杖は、どうやら鐵棒のやうでござりまするの」どぢやう「ヲヽよきかな〳〵。是も則ち因果地藏衆生濟度の暇には、汝が子供や親仁が噂、又方々の亡者の事、觸て歩く其故に、錫杖に引かへて、今では事を觸歩くを、冥途では洒落てな、鐵棒引と云ひやす。ハヽとんだ事よさ」觀九郎「ア

觀九郎「ヤ汝はコリヤしろんぼの宿なしか。早く其所をなくなれ」と、言へば妙なる聲を出し、どぢやう「善哉々々。我は是六ぞろのうけ、さいのかはりの四三菩薩とは我が事なり」觀九「ヤ何だ、四三菩薩々々といふのがあるものか、地藏菩薩と云ふは聞いた」どぢやう「ヲヽ地藏でも四三でも、好き名を付けて來たがよい。何でも半分まけてやる」觀九「べらぼうめ丁半の安目ぢやあるまいし」どぢやう「イヽヤ丁半とは、怖ろしや、鐵火やうちん阿鼻叫喚、一百三十六地獄、火責の罪を救ひ取り、極樂へ導く我が誓願。因果は廻る車の輪、今は錢の輪金次第、因果地藏と此地に現じ、又は塞の河原にて、十に足らぬ幼子の、中にも汝が躮めは、子供にませた徒者、一重二重積む石を、呵責の鬼の鐵棒で、突壞されてアレ地藏樣、あの鬼めがと吠えて來る。其外飴賣持遊びを、買ひたいと云ふ度々に、皆おれが賽錢を遣はせる。汝も哀と思へや」と衣の袖も泣地藏、袈裟で涙を拭ひ居る。さしも我强き觀九郎、我子の枷に縛られて、恩愛の涙ほた〳〵、觀九郎「アヽ悲しい咄を聞きました。扨はお前樣がアノ、因果地藏樣でござりますか。私の所の小僧めが參りまして、きつう御厄介をかけまする。承れば、お賽錢まで遣ひますとは、あんまりで勿體ない。こゝに四文錢が三百五六ござります、是で何ぞねだります時、買つてやつて下さりませ。エヽ大きにお世話樣、お茶とでもあがりませ」と、涙に啜る二本棒、一本足らずを差出せば、どぢやう

やう、三人見るより、三人「能い所へどぢやう殿、コレわしらが逢うてはわるい者が爰へ來る程に、コレこな樣の智慧で、追歸す仕樣はないか」どぢやう「ハテ智慧と云つては皆無な我々、追返す力は勿論、イヤモ是は御免下さりませ」三人「ア、コレ〳〵、力の入る事ぢやない、來ると云ふは女衒の觀九郎、わしらが逢うてはならぬしだら、コレ是非にこなたを頼みます」どぢやう「ム、そんならアノ女衒の觀九郎めかへ、ム、彼奴なら騙し樣がごんす、大抵惡い奴ぢやない。其罰でな、あいつの所の小僧めが、癇の蟲で死にやした。あいつが事は何もかも、よう知つてゐやす。が少し身拵へ、コレ此飴の片荷を借やす。まだ小道具がいる、ヲ、幸ひ〳〵、爰に鐵棒がある。したがおまへ方が爰にござつては、彼奴を騙すに心が置かれる、コレ氣遣ひなさんすな、一盃當てて見せませう。委細はナ、かう〳〵。爰かまはずと、サ、、、早う〳〵」三人「出來した〳〵」と云捨てて、皆々連立ち急ぎ行く。斯とも知らず尻くらひ、酒も喰つて微醉の、蒲闇がりをよろよろと、觀九郎「エイ醉つたぞ〳〵。エ、いま〳〵しい、どこを尋ねてもゐをらぬ、モシそこらには居らぬか」と、見廻す向ふへすつくりと、どぢやうは惣身に飴の粉の〳〵、顏もべつたりうどんの粉、袈裟と見せたる繼ぎ〳〵の、繻絆も千手觀音の、宿りも痒き古頭巾、錫杖がはりの鐵棒に、寶珠にあらぬぼた餅を、紙に包めどつゝまれぬ、そも出來合の地藏尊。觀九は悔り、

る奴なれど、赦してくれる、長居せばはりのめす」と、立蹴にはつたと蹴倒せば、尻をかゝへて迯歸る。五町は跡を見送りて、五町「どなたかは存じませぬが、御心入忝い。が、念のため中を改めて」觀九郎「ハテよいはいの、褒美の金は山割、人殺しを云はぬといふ證據は、此方も同類、ムヽ夫なれば其時まで。シテ此死骸は、奥山の片隅へ、人の知らぬを幸に」「合點々々」と引擔ぎ、繁みをさして急ぎ行く。觀九郎はしたり顔、觀九郎「コリヤ今日の樣に畫が付く事はないはい。一寸來ると田舍娘、五十兩の取り、又宸筆の掘出し、是を持つて行けば、三百兩の褒美、コリヤ無盡場で貰うた百、ざらちよぼで十貫になつた樣な物ぢや、ハヽヽヽ。シタガ、其宸筆とやら、どんな物ぢや見た事がない、序手に拜も」と封押切り、開れば中には紙札一枚。觀九郎「ヤコリヤ富の札、しかも一昨日突いたのぢや、扨こそやらかされた。遠くは行かじ」と追うて行く。仕濟したりと立出る五町、付添ひ金貸以前の飛脚、飛脚「五町樣首尾は」「シイ、胴欲な觀九郎め、一ぱい喰つてよい氣味〳〵」飛脚「ナント五町さん、飛脚の仕打絞殺さるゝ身振、何とあぢをやつたでごんしよが。ヤ是からは元の飴賣萬八」と、傍への荷箱取出せば、男衆「ヲヽおれが金貸の役もちつと譽めて下され」五町「巧いものぢや〳〵。イヤ今の觀九郎め、逢うたなら喧しかろ、こちらは顔が合はされぬ。どうぞ思案はあるまいか」と、いふ中來かゝる豆藏のどぢ

其浪人者に何の用で」飛脚「イヤサ其御用と云ふは此狀箱、急に渡さねばならぬもの、此中は忝くも、後醍醐天皇樣の御宸筆、えらい金になる代物」五町「ナニ、其中な物が金になる」飛脚「ヲヲサ」五町「ムヽどれちよつと見せさつしやれ」飛脚「アヽイヤ、是は大事の物、中々町人風情の見る物でない」と、振捥るのを引たくり、是はと立寄る首筋摑み、ぐつと一しめ七顚八倒、口に手を當て死骸片寄せ、狀箱を懐中する間も傍の氣遣ひ、閙がしさうに來る男、男衆「ヤア五町爰にゐるか、我は／＼ナア、先月限に貸した金、元利共に五十兩、今日の明日のと噓をつき、ようすつぽりとはめたなア。サア今よこすか、サアどうぢや。ムヽ返事のないはよこさぬ氣ぢやな、どうで只では返すまい、お代官所へ連れて行く。サア今あゆめ」と、引立つる。「マア／＼待つて」と詫るのも、聞かぬ半へ觀九郎、觀九郎「其金私が貸して進じやう」五町「ムヽついに見た事もない人が、金を貸さうとおつしやるは」觀九郎「サア、何やら急に此場の手詰、そこが相談。知らぬ人に只は貸されぬ、何ぞ質物が見たい」五町「アイヤ質物がある程ならば、此難儀は」觀九郎「ハテ扨、其質物はたつた今、こなさんの懐へ、ア、イヤコレ／＼、驚く事も何にもない。アノナ今の代物預りやしよかい」五町「ホイ、夫なればしよ事がない、まづ當分は貴樣に是を預ける」觀九郎「ヲヽ受取つた。ソレ五十兩遣はんせ」五町「エヽ忝い。サア金戻す取れ、汝云分あ

「ム、俺を呼んだは誰だ、ヲ、角町の親方、何ぞ用でもござんすか」親方惣六「イヤ外の事ではない、ガ惡い事をするなやい。高のしれた代物、笠の臺の飛ばぬ先、疾とと止にしたがよいぞよ」觀九郎「コレ親方、そんな厭味は云はるな、此娘は俺が姪、他人のかまう事ぢやない。ナア姪よ、コリヤ伯父ぢやぞ〳〵」おのぶ「アイをぢサアの世話となり申して、奉公に行き申す、必ずかまうて下さるな」と、譯も頑是も泣顔は、姉に逢ひたいばつかりに、苦界の淵に臨むかと、思へばいとゞ惣六も、不便さ餘り傍へ寄り、惣六「コレ觀九郎、何かと云ふもめんどしい、此奉公人俺が買はう、サ俺に賣つてくりやれ」觀九郎「ヲヽ何國へなと賣る代物、直段次第でやりませう」惣六「ムヽそんなら年も一ぱいに五十兩、但し不足なか、よもや不足はあるまい。ガ是で物いひあるならば、俺も正體急度糺す」觀九郎「アヽコレ〳〵〳〵親方、氣の短い、夫では元直がはづれるけれど、エヽしよ事がない」と矢立取出し證文を、認める中、おのぶ「コレ伯父サア、あの人に奉公すりや、姉サアに逢はれ申すか」惣六「ヲヽよい〳〵、委細は俺が呑込んだ」と、證文受取り惣六は、おのぶ引連れ立歸る。金いたゞいてぞく〳〵と、悦ぶ折から來かゝる五町、觀九は木蔭へ向ふより、鬧がしさうにハイ〳〵〳〵、飛脚と見えて撥鬢頭、行當つて、飛脚「是々物問はう、エヽ淺草の浪人者は何所だ」五町「ハテ滅相な、淺草の浪人者とはつまらぬ問ひ樣。シテ又

其名の高い女郎と言つては知れぬが、夫は何所の名は何といふ」おのぶ「コナ人は名を知り申せば夫へ行き申す、おら姉サアでござるチヤア。それを聞くべいと思つてナ、商人屋で聞けば髪結所へ行けと云うし、夫で聞けば、そりや通に聞けといひ申す。マア其通殿から聞き申すべいと思ひ付き申した」甲人「ム丶其通とはマアおいらだが」乙人「ム丶誰だらうな。ハテマア丁子屋で丁山か、雛鶴か、松葉で松の井か、扇屋で花扇か、中近で半夫か」丙人「イヤ〳〵、今では蔦屋の人町か、しほ絹か。斯ういつて聞かせても、長崎やへ阿蘭陀を見物に行つた樣なもので、一つもわからぬ、ハテ氣の毒なもの。ア丶もう遲くなる。イヤコレ何卒よい手がかり求めて尋ねて行きや。ア丶不便や」と夕間暮、鐘は上野か淺草を、わさくたいうて皆立つて行く。始終を後に觀九郎が、猫撫聲に傍へ寄り、觀九郎「コリヤわりや姉を尋ねる者さうなが、其姉に逢はせてやろ」おのぶ「ヤアそんなら逢はせてくれめすか」觀九郎「テヤヲ丶、逢はせてやるはやるが、コリヤ其汝が尋ねる吉原と云ふ所へ、奉公をせにやならぬぞよ」おのぶ「ハテ、こがいな者でも置き申す人があらば居申すはサ」觀九郎「サ丶そこぢやて、その奉公するには、大ぶんむづかしい。コリヤ俺を伯父ぢやと云はねば、奉公にも置かず、姉にも逢はれぬ、俺を伯父ぢやと云へよ。ヲ丶合點か〳〵。サア〳〵そんなりや俺が連れて行く、サアあいべ」親方惣六「エ丶イヤコレ觀九、マア待つた」觀九郎

はならぬ、おれが手先で三浦屋へやつた女郎、此頃受出されて殘り年が三年ある、此方の取込で構はいで居たが、先はれつきとした奴、此尻を持つて行くと、捨ても三十兩は取る、其證文はコレ此鼻が、懐にある」と咄せば番七、番七「ホヽソリヤ金になるはいの。ヤ金になる次手に、今日よい咄を聞きました、奥州の何とやら、ヲヽ石堂殿とやらの預りの、宸筆とやら、若し持つてゐる者があらば、持參せば、褒美は金子三百兩、下さるとお代官樣より云付、何でもこいつを持つて出ると大きな仕合、貴樣も廣く歩く人ぢや、隨分氣を付けさつしやれ。イヤおりや大家樣に賴まれた用がある、ちよつと行て來う。コレ茶屋樣、此鐵棒賴みます。觀九郎殿此頃に」觀九郎「ヲヽ行くか、其中逢はう」と兩人は、別れてこそは急ぎ行く。にた山通の二三人、茶屋が床几に腰かけて、甲人「御亭主何時ぢやの」亭主「アイモウ七つでもござりませう」甲人「ナント善公や、いつそ是から直に吉原へいつて、土手からまつちや呼のぐい上りは如何だらう」乙人「ヨシこいつは日本だ。コレ里遊、手前も行くか」丙人「知れた事さ。カノ柳樽にある、三人で三分なくなる智慧を出しとは、こいつはよく云つた」「コレもう一ぱいくんな」と煎じ茶も、ちやを云ふ通と知られけり。深き咎今より後はよもあらじ。ぉのぶ「コレ申し、問ひたい事がござり申さ、吉原で名の高い女郎サア何と云ひ申すぞ、知つて居なさるなら敎へてくんさいチヤア」旅人「ムヽ

前追從口合に、二文三文四文錢、並大抵な口ではないと、面々笑ひ催して、我家々々へ立歸る。跡にどぢやうは錢揃へ、どぢやう「有難い、今日もまづ五百にはなりました。モシお茶やさん、よつほどせが付きましたから、一ぱい呑んで參りましよ」茶や「ヲヽ御大儀々々々。イヤ先に内から持つて來たコレ此ぼた餅、時分がよか參らぬか」どぢやう「是は有難い。併し今は一ぱい呑んで參りませう、ぼた餅は又後に」喰うたら馬道の酒やをさして急ぎ行く。參り下向のその中に、人付合も吉原で、大福屋の惣六、同じく跡に牽頭の五町、五町「モシ角町の親方、私はちよつと寄る所がござりまする、おまへは直に御歸りなされまするか」惣六「イヤ、江戸へ行く所もあれど、待合す人もあれば、ちよつと堺屋へ寄つて行こ」五町「ハイ夫なら後程々々」と、五町はかしこへ惣六は、茶屋の奥へぞ入る跡へ、佛には後を見する尻喰ひ觀九郎と云ふ惡女衒、來かかる向ふへ鐵棒の、音もちりりん花川戸の番七が、番七「ホヽ、コリヤ久しう逢はぬが觀九郎殿、變る事もごんせぬか」觀九郎「イヤモ變る事だらけ、聞いてたも、親仁はなが／＼中風の上、去年の春そつくり往生、小倅めは癇の蟲が出てころりとやらかす、日濟の尻は七口喰ふ、そこで身代も賣つて仕舞ひ、嚊は今どぶ店で、稼して置くはい。俺も當時は苦に苦を重ね、部屋子でこそは候よ」番七「ハヽ、ヽ、此人はいつも氣に腐れのない人だよ」觀九郎「イヤ／＼、まだ氣を腐らして

り。

第六

どぢやう「サア〳〵旦那方、お茶屋樣へお腰でもおかけなさい。今日は結構なお天氣で、私も仕合、觀音樣もお仕合でござります。咄しも差合のない私が、作つたのをあげやしよ。お聞きなさい、旦那方の前だが、兎角世界は儒佛神の、三つでなければいきやせん、其中でも佛法は口あたりが能いから、とかく繁昌するはナ。お立合にお寺樣方もござりやせうが、アノ地獄極樂の繪圖をかけて、坊樣が繪解をするのをお聞きなさい、ハとんだ事よ、ハ丶此方に御ざるは極樂の體相、此世に置いて佛法信じ、善根の功力によつて、上品上生の佛體を得たる所でござる、こちらは地獄の體相、此世に於て牛馬をむごうしたる報によつて、人間の頭に牛馬の體が付いてござる、なんぞといふとナ、ばァ樣達が手を合して、なんまみだ〳〵、わしやァどうも呑込ないはい。旦那方の前だが、牛馬をむごくした報で牛馬になるなら、念佛を申さうより、手短に、此世で佛を惨くしたら、ナア佛になりさうなものヨサ。斯う云ふ所が方便、私共が斯う云ふも、錢が貰ひたさ、ハイ〳〵是はお侍樣、ハイ〳〵是は、町人方は格別、錢になる」と、お

反逆露顯の時至り、四天王寺の東門に、骸はさらせど名は朽ちぬ、金江が義心ぞ潔よき。兵部之助も莞爾と笑ひ、兵部「ホヽ、面白し〳〵。某も鎌倉にて、志賀臺七に尋逢ひ、楠原普傳が祕法の毒藥、術を以て受傳へ、其後二人に力を合せ、姉は長刀妹は、田舍に育てば手馴しやい鎌、晝夜鍛錬修行を積み、親の敵を討たせん事、此兵部が方寸にあり、必ず氣遣ひ無用ぞ」と、實頼もしき武士の、花はみよしの南朝に、二代の忠臣菊水の、流は世々にかんばしき。涙拂うて七郎兵衛、七郎「エヽいさましいお咄を、聞くに付けても果敢ない奥茂作、もとはやつぱり楠家の浪人、谷五郎殿へ云號の、娘は吉原傾城の、勤も親へ皆かう〳〵、必ず〳〵お見捨なう、お頼み申す谷五郎殿。兵部樣にも此娘、姉と一所に親の敵、お討たせなされて下さりませ」と、病の母もとも〲に、引合はす子も老の身も、目には涙の陸奥や、末の松山千代かけて、夫婦の固め之助、諸國を廻り武者修行、兵部「大願成就此上は、鎌倉に立越えて、姿を變るも一つの術、宇治經陀羅尼、顯を金江谷五郎、今日より親の名を繼ぎて、金江勘兵衛正國と、名乘り別るゝ兵部の常悅正之と、尋ねられよ」と、互の誓。亡骸送る泣く三人、出行く二人も亡人を、心ばかりの弔ひと、云はぬ色なる一包、黄金花咲く山おろし、夜もしら〲と白石の、親の敵の孝行一心、五十四郡や六十餘州、旭の勢ひ由比が濱、一天四海に菊水の、武勇の旗をぞなびかせ

授の一巻所持すれば、何卒傳へ聞かん其爲に、我手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治むる寶にあらねば、彼へ返して恩をかけ、態と此場を見遁したり。只此上は與茂作の、娘達に力を添へ、敵を討たすが肝要ならん。敵臺七も當所に居がたく、鎌倉へ迯行かんは必定、我も是より由比が濱に立歸り、猶も味方を牒じ合はさん。ヤ、ナニ七郎兵衛殿とやら、何かどの樣子はあれにて聞く、ハァ御愁傷察し入る。中陰事なら相濟めば、必ず尋來られよ。姉娘も江戸にとやら、何かの用事も承らん」と、慈愛の詞寛仁大度。ハアト兄弟かたじけ涙、谷五郎も理に服し、谷五郎「ハヽヽ、誤つたり〳〵、臺七ごときの國賊を、相手と云ふは大人氣なし、敵討は兄弟の女、お頼み申すは兵部殿。我は彌此程の、貴殿の指揮に隨ひて、難波の浦の惣大將、四天王寺の東門に陣所を構へ、寄せ來る諸軍、仁木細川吉良石堂、北朝無二の賊臣共、みつの濱邊の眞砂の數や、潮の如く起るとも、習ひ得たりし諸家の軍法、魚鱗鶴翼堅早破軍、進戰退闘利變の術、堅きを碎き、鋭どきを挫ぎ、奇正突衝立花八陣、五位の兼備、四十八箇七十二種、二百八十四箇の兵略、爰に開きかしこに寄せ、變に應じ奇に望み、時に大江の岸打つ浪、難波の芦の浦千鳥、むら〳〵ぱつと捲り立て、名を高天に輝さん。若しも天運至らば、固の場所を一足去らず、腹かつさばき討死の、末世の手本となすべし」と、詞は正に當れるかな、

茂作を殺せしは、汝等が主人臺七であらうがな。何科あつて手にかけしぞ、サ有樣に白狀ひろげ」と、挫付けられ、官平丹介「ア、申します〳〵、臺七樣は寶の鏡、田の畦へ隱されしを、與茂作に見付られ、夫故の此行動、私共は知らぬ事、命お助け〳〵」と、泣詫るこそ見ぐるしき。谷五郎「ホ、能くぬかした。何といづれも、モウ此上は某に」おさよ「ヲ、疑ひは晴れました。親仁殿の敵は臺七」谷五郎「ヲヽ此奴も敵の片割、當座の腹癒まつかう」と、ぐつと一しめ目をむき出し、手足をもがき死んでけり。「イザ此上は臺七め、追驅付けん」と立出る、向ふに臺七種が島、狙ひかたむる此方には、筒先き伺ふ表の松の戸、立切る曲者、「ヤア邪魔ひろぐな」と立掛る、志賀が眉間に打付ける、礫は御鏡悔り仰天、以前の手竝に二度のこり、鏡手早に拾ひ取り、跡を晦まし迯行く臺七、板戸蹴破り駈け出る金江、谷五郎「ヤレ待たれよ」と聲をかけ、覆面頭巾取捨つれば、「ヤ、昨夜明神の森にて」兵部「ホヽ義を鐵石に結んだる、宇治兵部之助正之」谷五郎「ムウ其正之が何故に、敵臺七を見遁せしぞ」兵部「ホヽ不審尤、さりながら、貴殿の爲には眼前舅の敵というとも、勢ひ破竹の北朝を打亡し、南朝を取立てんと、義兵の大切を思ふ者、斯程の小事に拘るべからず。卑怯未練の臺七なれど、コレ今の如く飛道具にて取圍まば、貴殿孫呉が術ありとも、などか是に敵すべきや。大功は細瑾をかへりみず、殊に臺七普傳が祕方の毒藥、傳

とも臆せず、谷五郎「云分は未練に似たれど、與茂作事は眞以て覺なし。如何にも明神の森の中にて、一人を害めしは、此金江谷五郎」と、聞くより表の志賀臺七、ソレとかけ聲官平丹介、十手を振上げ取圍めば、「コハ狼藉、何奴」と云はせも立てず、臺七「ヤア只今儕がぬかせし、森の中にて汝が手にかけし臺藏が兄志賀臺七、弟が敵遁れぬ所、覺悟々々」と呼はれば、から／＼と打笑ひ、谷五郎「與茂作の敵と切掛しは、老人と云ひ女はらべ、あしらひ居たるに好い所へ臺七とやら、相手に取つて面白し。誰かは知らねど明神の森にて一人の侍を殺せし一條、包まず語るよつく聞け。我武者修行の願ひを發し、あまねく日本六十餘州を廻りて、我に增りし人に逢はんと、一國に一箇の首塚を築き終れど、手に立つ者もなき所に、一昨夜隣鄕にても、一人を手に懸け首を手向け、祈願を込めし感應にや、天晴ゆゝしさ武士に出會ひ、再會の約仕たり。かく一人を切取れば、此家の主を何害せん。卑怯未練に包隱す谷五郎ならず、汝如きのへろ／＼武士、敵などとは事をかしや、一度にかゝれ」と身構へたり。「ヤア物な云はせそ討取れ」と、下知に隨ひ一二のかけ聲、左右に組付く丹介官平、首筋摑んで狗子投、手練の手竝にさしもの臺七、騙て討たんと引返す。遁さじものと駈出す谷五郎、どつこいさうはと帶際しつかり、取付く官平丹介を、蹴飛ばす金江の金脚に、叶はぬ赦るせと迯出す二人、襟際ぐつと引据ゑ、谷五郎「コリャ此家の主與

儕やれ年こそ寄たれ七郎兵衛、おのぶも必ず油斷すな。侍でも浪人でも騙す手なしぢや。ガ、マア病人は危ない〳〵、俺に任して奥へ行きや、サマア奥へ」と勸め遣り、幸ひ薄暮勝手もよし、鉢卷しつかと身拵へ、百姓業はなま中に、錆刀より棒三昧、娘は手馴し草刈鎌、帶引締めて谷五郎が、歸りを今やと納戸口、身を潜めたる心根は、健氣にも又萎らし：。永き日も早夕暮と入相に、迷ふ山道谷五郎、やう〳〵戻る表口、あとより付け來る忍びの武士、手手に十手差足拔足。とは知らず內に入り、谷五郎「コレハしたり、日が暮れたに火も點さず、コレお袋樣、痛む足で道に迷ひ、大きに隙取りました、嘸お待遠。親仁殿はお歸りか、コレどこにぢや」と探り寄る、後へぬつと七郎兵衛、薙倒さんと寄り棒の、さそくをきかして蹴飛すこなた、親の敵と打懸る、娘が小腕のなぐり鎌。「コハ心得ず」と谷五郎、かはしてずつと引寄すれば、わつと泣く聲母親が、差出す行燈七郎兵衛、膽を冷して力身居る。谷五郎「ヤア某を親の敵とは、仔細ぞあらん、何と〳〵」おさよ「ヲヲ云はいではいの、今日晝、上の田の畦道で、夫を殺したは儕であらうがな」谷五郎「ナニ與茂作殿を殺したとは」おさよ「ヒヤア云うまい〳〵谷五郎とやら、退引ならぬ證據は、ソレ儕が小袖に血汐と云ひ、一昨日明神の森に、一夜を明したと最前の物語」七郎「コリヤ其森の內に侍の殺してあつたも儕が仕業、武士に似合はぬあらがうか、勝負々々」勝負々々と詰寄れば、谷五郎毫

御代官か、ムヽ、スリヤ親父殿の敵は臺七め」と、立上るを七郎兵衞、七郎「コレ〳〵〳〵マヽマヽ、待て〳〵〳〵、マア急かずとあとを聞けやい。ヲヽ俺も畑であいつが泣聲聞き付けて、行て見れば臺七殿、日頃からの氣質と云ひ、コリヤてつきり手討にやられたと、思へどそれと證據もなく、村の衆も一統に、おのぶめが肩持つて、めつきしやつきの其所へ、臺七殿の弟臺藏殿が、一昨日の夜、隣村の明神の森に、切殺してあつたと、家來が注進、スリヤ與茂作を殺したも、臺藏殿を殺したも同じ切人に極ると、臺七殿の詞も一理、何でも近在に居る荒者か、浪人者どもが切取か、又は武者修行といふ樣な奴の仕業で有う」と、噂の内に谷五郎が、以前の咄に氣の付く母、おさよ「ムヽ隣村の明神の森の中に、一昨日の夜、ムヽヲヽ嬉しや兄樣、敵が知れた、おのぶ悦べ」おのぶ「エヽ」七郎「ヤヽヽ、敵が知れたとは、ドヽヽどこの何やつ」おさよ「イヤ外でもない聟の谷五郎」七郎「ヤア、トハ又どうして」おさよ「サア最前何かと咄の次手、一昨日の夜は明神の森で一夜を明せしと、ツイ云つた咄も耳に留り、今思ひ當りしも矢張佛の御引合せ。其上小袖の褄先に、血の付有のも見付けて置いた。私が爲には夫の敵、此子が爲には親の敵。コレ兄樣、何卒二人が力と成り、敵を討せて下さんせ、頼むはお前ばかりぞ」と、手を合すれば、七郎「エヽ頼むの力のとは何の事ぢやぞ、おれが身にも懸つて有る事、コリヤ親は泣寄氣遣すな、

ておきやいなう」と、獨氣をもむ七郎兵衛、おさよ「イエ〳〵、今にでも聟殿が、戻られては談合ならぬ」と、隔る兄を押退け〳〵、蹣跚ひ立寄る死骸の傍、コハ心得ずと引まくる蒲團の中、おさよ「マア親父殿は切られてか、ハアハツ」と計りにてうんと見つめる病人を、抱きかゝへて七郎兵衛、七郎「コリヤ〳〵おさよ、氣をしつかりと」おのぶ「嚊樣いなう」七郎「おさよヤイ。エヽおれがてつきり斯うであらうと思ふ事、エヽ如何せうぞ。コリヤ〳〵おのぶ、ソレ水を氣付に、茶碗を一口」何を云ふやら狼狽騷ぎ、七郎「コリヤおさよヤイ」おのぶ「嚊樣いなう」七郎「おさよヤイ」おのぶ「かか樣いなうかゝ樣」と、伯父姪聲の續くだけ、息をはかりに呼立つれば、漸〳〵に目を開き、おさよ「ヲヲ兄樣か」七郎「ヲヽ兄ぢや七郎兵衛ぢや、氣をしつかりと」おさよ「アイそしておのぶは」おのぶ「アイアイ爰に居るはいな」おさよ「ヲヽおのぶか」七郎「ソレ何ぞ呑む物一口」おさよ「ヲヽもう快い〳〵、氣がはつきり成りました、コレ兄樣、與茂作殿は誰が殺したへ。コレおのぶ父樣は誰が切つたぞ、何故母に隱しやるぞ、親の敵取る氣はないか、コレ其方も武士の種ぢやぞや。コレ七郎兵衛樣、敵は何所の何者ぞ、おのぶ知らぬか知つて居るか、エイ、何故此母には隱すのぢや、エ不孝者」と叱られて、云はんとすれど泣いじやくり、おのぶ「アイ〳〵コレ母樣、最前おまへに藥をあけに戻り、田へ行て見ればとゝ樣はあの通り、傍にござるは、御代官の臺七樣が」と皆迄聞かず、おさよ「ナニ

云ひくるめ、當分はそれで濟めども、行々は取戻さねば聟殿はもとより親達への聞も」七郎「ヲヲ立ぬは道理ぢや〳〵」おさよ「サと云うて金の才覺の出來る身代でも」七郎「ヲヽ無いも知つてるるてや」おさよ「サアそれぢやによつて私が思ふには、いつそエヽ妹のおのぶを、不便ながら替りにやつて」七郎「エヽもうそんな事云ひやんないなう、年も行ぬ者を可愛さうに」おさよ「イエ〳〵それでも早う姉を取戻さにや、傾城に賣つた事、ひよつと聟殿が聞かれたら、日頃堅い與茂作殿の氣質では、谷五郎殿の手前を恥ぢ、短氣な心でも起らうか、百姓なれど以前は武士、姉を勤にやる時さへ、腹切るの何のとて突詰めた侍氣質、煩うてゐる其中に、若其樣な事があつたら、私が先へ死まする。コレ兄樣、どうぞよい了簡を」七郎「サヽヽ合點ぢや、ガおれぢやと云つてどうせうぞ、マ此樣な悲しい事の數々が、一時に出來るといふ因果な事の聞役は、けふ一日で百年の命が縮む」と計りにて、涙呑込む横しぶき、顔を背けてくひしばる。七郎「エヽ可愛や妹何にも知らずに」おさよ「エヽコレ〳〵兄樣思案が付いたかへ、サヽヽどうせうぞいな」七郎「ヲヽ尤もぢや〳〵、が、どうせうぞ」おさよ「エヽおまへの子でない故に、返事のないも、ヤコレ〳〵〳〵、親父殿起ていなう」七郎「アヽモウ起さずとよしにせいやい」おさよ「イエ〳〵お前は遠慮がある、親父殿に咄して相談せねば氣が濟ぬ」と、死骸に這寄る女房を、七郎「ハテ扨コレ、マヽヽ寢さし

マ此子とした事が、私が煩うて居たとて、父様は達者なり、其上七郎兵衛様と云ふ結構な伯父様はあるし、何便ない事があるぞ。ソシテ父様は何處にぢや」おのぶ「アイ」おさよ「エヽコレ何處にぢやぞいの、急な用が有るはいの」七郎「ヲヽ用の有るも道理々々、逢たかろ〳〵、ガ與茂作はナ田から直ぐに我方へ來て、ナ南無阿彌陀佛、エヽ今年は取分苗の出來もよし、南無阿彌陀佛、アノ悦んでくれと云うたによつて南無阿彌陀佛、それでアノ祝うて名殘の盃、モそれからアノ酒呑で南無阿彌陀、それは〳〵よい機嫌で、そしてからアノよう寢入て居るわい、モウモウどんな急用があつても、あれではモウ間に合うまい程に、俺にでも相談しや、サ咄しや。急な用とは何事ぢや〳〵」おさよ「ムヽ與茂作殿は酒に醉うて寢てかへ」「ヲヽ寢てゐるとも〳〵、百年立つても起る事ぢやないはい」おさよ「エヽ時も時と今日に限つて、ヲヽそんならお前に談合せう。コレタべとめた旅のお人はナ、こちの聟の金江谷五郎殿ぢやわいなう」七郎「ヤア、ムヽシテそれが如何した」おさよ「サアあの人もこちらを尋ねて、やう〳〵今先咄し合ひ廻り逢うた嬉さ、酒とてくると隣村へ」七郎「ムヽまあよし」おさよ「サア夫に付てお前も御存の、其谷五郎殿に云號の姉のおきのは、八年あとの難儀の時に勤奉公」七郎「ヲヽ知つて居る〳〵、それも親の爲ぢやもの、大事ない〳〵」おさよ「イエ〳〵それでも聟殿の手前はさうも云はれず、お屋敷へ奉公にと

抱しめて、短羽織の褄先も喰しばりたる恩愛の、庄屋が涙は一村の時雨に増る貰ひ泣き、氣を取直し涙を拂ひ、七郎「アヽ泣くまい〳〵、モウ〳〵泣かぬ、モウ泣かぬ。サヽ皆の衆、そんなら内へ舁入て貰ひましよ、ヤコレ今も云た通ぢや、必何も云うまいぞ、おのぶも合點か、呑込だナ、サヽサ早う」と泣顔隱して内に入り。七郎「ホ是は又滅相な、其大病で端近へ出て堪る物か、コレハ扨寢て居るか、ヲヽそれも幸ひ、サ此間に早う〳〵アヽコレ靜に〳〵、チットよし〳〵」村人「ハイハイそんならお寺へ行くには」七郎「ハテ扨いらざる事云うまいてや、何も云はずと去だ〳〵。コリヤおのぶ、ソレ蒲團を出して、父によう著せて置け」と、おさよか寢姿打守り、「アヽ窶れたな、何として土用は越まい。端折鏡の兄弟、今汝が死んだら俺も力ないわい、カ此上へ風引したら堪るまい」と、立寄つて抱かゝへ、七郎「コリヤ〳〵おさよ、風吹に滅相な、サヽ床へ這入つて夜著きて寢や。コリヤおさよ〳〵」おのぶ「嬶樣イなう」と、搖起されて振仰のき。おさよ「ヤお前は兄樣、七郎兵衛樣か」七郎「ヲヽマヽヽ氣色も大分能さうで嬉しい〳〵」おさよ「アイシテ、お前はいつの間に」七郎「イヤたつた今、コレ汝や寢惚けたか、おのぶも爰に泣いてゐる、アイヤ笑うてゐる」おさよ「ヲヽおのぶ、わがみや父樣と、一所に戻りやつたか」おのぶ「アイ嬶樣精出して藥を呑み、どうぞ早ふ達者に成つて下さんせ、私は便ない」としやくり上ぐれば、おさよ「チヲ

わいの、知つての通り與茂作が女房はおれが妹、此春からの大煩ひ、此土用が持てまいと案じる程の病の中へ、與茂作は切られて死だというたら、いつそ直に泣き死。モどうでは云はにやならぬ事ぢやが、せめて一日寸時なりと息災で置たい。コリヤおのぶよう聞けよ、今内へ這入ても、與茂作が死だ事はコレ〳〵ぢやぞ。エヽ酒に醉てよう寢てゐるといふ程に、必ず汝も嗅に泣顏見せなよ、ヨ、サヽ悲しいは道理ぢや。無理ぢやない。が今知らすと母はナすぐに死でのける、モ一時に二親に離れたあと、汝が途方にくれて、うろ〳〵するで有らうと思や、モ思ひ返しが知られて、淚がはら〳〵〳〵〳〵と、イヤナウ皆の衆、一村の束もする者が、女子共の樣にめろ〳〵泣くと、笑うてばし下さるなや。シタガ又此佛の樣に不仕合な男はないわいの、其くせ正直で神信心、是を思へば世上に神も佛も、おりやないと思ひます」と、云ふにおのぶも泣く目を拭ひ。おのぶ「姊樣は遠い所へ行てなり。只さへ便のない上に、母樣のアノお煩ひ、杖柱とも思うてゐる父樣に此樣な、はかない別は何事ぞ。又此上に母樣が、若もの事があつたらば、妾やどうせう〳〵」と、わつと泣き出す口に袖あて、七郞「是はしたり今も今とて云つて聞すに、コリヤ其泣聲を嗅が聞くとすぐぢや〳〵。スリヤ第一嗅へ不孝ぢやぞよ、泣きたいも孝行、所を又泣かぬも孝行、ヨヽ賢い者ぢや聞分けよ。アヽ親ぢや物子ぢや物、泣のが無理ではないわいやい可愛の者や」と

憂勤め、それも浮氣徒ならず、親の水牢見て居られず、孝行からの勤奉公、やう〳〵未進は納めても、納め兼ねたる貧の病、さぞや娘が心にも今日や迎ひにくる事か、明日やとばかり在所の空、ながめて暮さん可愛やな、年月焦れた聟殿に、不思議に廻合ひながら、その娘はと問はれた時、何と返事がなるものぞ、うき川竹の勤の身、多くの肌觸れたと、聟殿が聞かれたら若愛憎も盡けうかと、思へば〳〵いぢらしい、どうぞ仕様はない事か。聟殿の戻らぬ中早う相談して置きたい、戻つて下され親仁殿、背中に腹はかへられぬ。いつそ妹のあのしのぶ、姉の替りにやつてなり取戻しては下されぬか。アヽそれも不便さ浪人の、いかに貧苦にせまればとて、姉も妹も浮勤あんまり惨いいぢらしい、只さへわしが胸一ぱい、辛苦艱苦の七重八重、何と命が續かうぞ、談合したい親仁殿、いつに替つて戻りの遲さ、どうした事」とのび上りおさよ「親仁殿、與茂作殿」と呼叫び病に弱る女氣に、それは此世を去しとも、知らで焦るゝ胸の火に、涙の湯玉涌返り、叫び慓がれ泣き仆ふれ、病疲れたる泣寢入、はかなき、夢をや結ぶらん。なき魂も、死出の田をさとはやなりて、歸るにしかじと泣くやらん。血を吐く思ひ七郎兵衛、泣入るおのぶが手を引いて、しほ〳〵戻るあとからは、戸板に空しき與茂作が死骸を乘せて、在所の者。村人「イヤコレ庄屋殿、此佛內へ入れたら直に惣黨の坊樣を」七郎「アヽコレシイ〳〵。聲が高い

が舅殿か」おさよ「ヲイノ」浪人「是はしたり」と互に手を打ち、「さうとは知らいで夕からよそ外の他人待遇ひ、戻つて聞かれたら嘸悦び、モそれ聞いて如何やら氣分もよい樣な」と、ぞく〳〵悦ぶ女房に、谷五郎も安堵の思ひ、谷五郎「イヤモほんの燈臺元闇し、奥聞かうより口祝ひ、晩は目出度う盃事」おさよ「ヲヽ昨日は旅の御浪人今日は聟殿」「姑御」「ヤレ嬉しや」と女房が病ふの床も忘れ水、絶えて久しき名乘合ひ悦びあふぞ道理なり。谷五郎心付き、谷五郎「シテ其以前親々が、云ひ約束致せしと有る御息女は何國に、夜前より左樣の女も見えず、心得がたし」と尋ねられ、ハツトと胸も突つめて何の返事も、どぎまぎ〳〵、おさよ「サア其姊娘は今は内には」谷五郎「ム、すりや、外々へ縁組でも」おさよ「イヤ去御屋敷へ御奉公、是も追付お隙を貰ひ、目出度く祝言させませう」谷五郎「ヲヽ重疊々々」然らば後程親仁殿、歸られ次第打明し、改めて聟舅、ドリヤ酒買うて參らうか、留守の内に戻られたら樣子德利引提げて酒屋へこそは急ぎ行く。後に女房がうつとりと、暫詞もなかりしが、おさよ「ア、世の中の、苦は色かふる習はしとは誰がいつの世に、云ひ初しぞ、元は楠普代の家來、杉本甚内と云れし身の、浪々の身の方便とて百姓と迄成さがり、本名かくすそのうちも、以前娘の云號、勘兵衛殿の惣領子谷五郎に廻り合ひ、女夫にせんと思ふ願ひも、過し年の水損旱損、仕慣れぬ業に辛苦の迫り、未進の替りに姊娘は、君傾城の

元は上方の浪人、今は此邊の百姓と成りゐらるゝ由、各方御存ないか」七助「さればなア、甚內とは覺えませぬ、錢ないならば此處ら一面、銀ないちやんないお望次第、うか〳〵咄て肝腎の仕事忘れて錢ないに、なつてはたまらぬもういにます」おうね「かみ樣隨分用心さしやれ、御浪人樣面倒ながら世話して進ぜて下され」と打連れ田の面へ急ぎ行く。浪人「アヽ流石田舍の正直一遍、が一ぺん尋ねて知れぬ人、ハテどうがな」と思案中、床をたよ〳〵病ふの女房、おさよ「御浪人樣、お足の痛は良ござりますか、却つてお世話になります」と涙ぐめば、浪人「アヽ氣の弱い、一人旅の迷惑は、宿貸さぬ時は山に寐たり野に寐たり、一昨日などは隣村の明神の森の內、一夜を明す程の事、一樹の陰一河の流も他生の緣、まして昨夜よりの宿の無心、見れば人手も內證の、暮し見る目も笑止さに、介抱致すもお宿の返禮」おさよ「コレハ又御迷惑、必ず氣兼なされますな。イヤ申しそれに付いて、今お咄しの杉本甚內といふハ何の御用でお尋ね」と、問ひかけられて、浪人「されば〳〵、拙者も面は見知らねども、其甚內と云ふは河州の浪人身が親とは至極懇意、幼少の砌其方の娘と某、行々は夫婦にせんとの云ひ約束、ふとした事で浪人せられ、此邊にと風の便、此方の親も相果て流浪の身、斯申すは楠家の浪人、金江勘兵衞が躮谷五郎」と、半分聞くより、おさよ「ヤレそれはお珍らしや、夫與茂作と申すは、則ち其杉本甚內」谷五郎「ナニ與茂作殿

れう」むさよ「アイ推量して下さりませ、したが今日つと見えた旅のお侍、足が痛むとて宿の御無心、今日も逗留して御ざるが、何から何迄氣を付けて藥迄煎じて下さる、ア氣の和かいお人樣、それ故與茂作殿もおのぶも田へやります、留たお人のお蔭故植付もはかいき」と、咄しに二人が、七助「さつてもなう、與茂作も元は侍であつたげな」おうね「ア、正直な善いお人、夫に引替へアノお代官の臺七殿、百姓の油を菜種の樣に搾りぬく無得心、此まあ代官には何がなるぞいなう」おうね「夫いの、ヤほんにそれで思ひ出した、爰の殿樣の御家に昨日大紛擾が有つたげな」七助「ヲヲそれ〱御家老の曽傳殿、何やら鎌を遣ひかけて、とう〱れこさをやられたとの噂、今の殿樣は御幼少でしほ〱髮のうへ付時、後室樣は四十足らず、どうでも後家御の青田でも刈りかけたか、但お姫樣をかいわり菜ちよびと摘菜と云ふ樣な事であろかいなう」むさよ「フン夫れでも武士と云ふ物か」七助「アイヤ武士はぶしぢやが穀潰、喰ひ潰し」と打笑ふ。藥求めて立歸る浪人姿窶れても、捨扶持にして五千石一萬石とは見えすく骨柄、浪人「ホコレハ在所の衆御免なりませアイタヽ、ヽ、ハア」七助「今かみ樣の咄で聞いた御浪人、お足が痛ますさうで氣の毒樣やの」浪人「されば〱、某は諸國を巡る浪人者、ふと足を踏損じ、昨夜から思はず此家の世話になります。」それはさうとナニちと所の衆にお尋ね申したいは、エ此邊に杉本甚内殿と申す人

詞、善と悪とは紛はねど、暫の曇天道の、鏡に心殘れども、家來引連のさばり行く。跡は泣き入る娘のおのぶ、庄屋が差圖に在所の者、傍の戸板に與茂作が、死骸を乘せて舁よれば、まだ幼氣なき子心に、思ひ詰たる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰とも白石や、石に矢の立つ例し迄、弓も引く方在所中、田の面の蛙なき連れて、我家にこそは立歸る。早黄昏の畦道を、うそ〳〵戻る志賀臺七、あたり見廻し見覺えの、深田押分け件の鏡、忝なしと押戴く、後へぬつと忍びの曲者、鏡捥ぎ取り臺七が、脾腹を一當一散に跡を晦まし、三重行空の、

第五

陸奥は、何處は有れど鹽竈の、それにはあらで朝夕の、煙も細く白坂の、城下に近き逆井村、與茂作が留守のうち妻は春よりぶら〳〵の、枕も床も散積る、山田の畦は見晴せど、晴ぬ思ひやありし世を、忍ぶ涙の六畝七畝、やせ百姓の氣も浮で、水に汗をや絞るらん。七助「ヤどうぢやかみ樣、ちと氣色は良いかの」と、ずつと這入れば女房おさよ、枕を上げ、おさよ「ホ七助殿おうね女郎ようこそ見舞うて下さつた、昨日今日は少し頭痛も止んで悅びます」七助「ホそりやよござる、折節見舞たうても知つての通り植付時分、與茂作もこなたの病氣何かで、憮わくせきとして居ら

の慮外は纔の事、畢竟申さばコリヤコレ、幼少の頑是なしと申すもの、それにお手打なぞとはへ、、、ちとお役柄に似合ひませぬ。又與茂作が殺されてゐた所へお出なされましたが不仕合、是非お前様もナコレ懸り合と申すもの、此通り殿様へ村中一統訴へます、さう心得て御ざりませ」と、理窟親仁に云ひ込められ、返答しかなの其折から、臺七が家來貫平、息を切つてかけ來り、貫平「お旦那是に、弟御の臺藏様、昨日よりお行方詮議致す所、隣村明神の森の内に此お首、お骸は一町ばかり、山道に捨て置いたを、漸見當り則持參」と、聞くより悔り、臺七「何弟臺藏が隣村に殺されゐたとな、へエしなしたり何者の仕業ぞ」と、驚く中にも一分別、臺七「コレ見よ庄屋百姓ども、身が弟一昨日より行方知れず、然るに今聞く通り、殺されたるも隣村、是を思へば人を害めるあぶ者、此近邊を徘徊するに疑ひない、すりや與茂作を殺したも、大方同奴と思はるゝ、見れば數所の刀疵、百姓づれが手際でない、浪人者など尾羽打枯し、荒れ歩行くに違ひない、何と與茂作は身が殺さぬと云ふ事、サ是で疑ひ晴たか」と、頓智の佞姦辯舌に、云ひ廻されて百姓ども、流石の庄屋も理の當然詞の一理、思案の吐胸、臺七は仕濟し顔、臺七「マナニ丹助貫平やい、ソレ弟が死骸、身が屋敷へ持ち歸れ、ア思ひも寄ぬ災難、七郎兵衛身が心を察してくれやれさ。ナニ與茂作とやらも不便千萬、娘が歎き思ひやる」と、此場をくろめる間に合

足摺りしたるいぢらしさ、涙ながらに四邊を見廻し、娘「ム、扨は傍にござる臺七樣、親の敵」と有り合ふ早苗手早に取つて打付け〳〵、娘「ヤレ人殺し來て下され、在所の衆〳〵」と呼たける。聲に馳寄る一村在所、村人「ヤア與茂作を殺しやつたは臺七樣か、お代官でもめつたに人を殺しては濟ますまい。此子の加勢は村中一統、サア元の樣にしてかへしや、何で殺した譯聞かう。どうぢや〳〵」と田舍育の高調子、聞付け馳け來る七郎兵衞、爭ふ中へ割て入り、七郎「マヽヽ村の衆俺が來るからは惡うはせぬ。おれに任しや〳〵〳〵」と、臺七に打向ひ、七郎「イヤ申しお代官樣には、エヽどういふ譯で與茂作を、此樣に慘たらしう、お手打にはなされましたな、日頃から正直正統なアノ男、無禮致さう樣もなし、樣子によつて此庄屋も、聞捨には致すまい、コリヤ急度吟味を」臺七「ヤイ默り居らう、與茂作とやらんが殺されたる其場所へ來かゝつた某、何ぞや身共が殺した、エヽそれには何ぞ證據でも有るか。土穿りめが、又それなる女郎め、親の敵なんどと譯も云はず、苗を以て打付け、コリヤ見よ、侍の顏に泥を塗つたる慮外者、眞二に打放す」と、反打かゝれば、とゞむる庄屋、娘を圍うて在所中、村中「ヤア何ぼでも切らしはせぬ、ヲヽそれ〳〵、非道な事に人が切れるか切つて見や。お代官でも怖うない、さうぢやさうざや」と口々喚く、七郎「ヤレ村の衆喧しい、靜かに物を言やいの、又臺七樣も臺七樣、此子

方へ渡せ。汝が持つて無用の物」と、取りにかゝれば、與茂作「ハヽコリャ御代官様、是は只今私が田から拾ひ出した此鏡」臺七「ヤア百姓連が持つ物ならず」と、引つたくれば武者振付き、與茂作「此方の田から出た物は、お代官でもさう無體には成りますまい、但しお前覺えが御ざりますか」臺「ヤア面倒な土穿りめ」と、突放せば又取付き、與茂作「ヘヽヽ滅多無上に欲しがらしやると云ひ、イヤモ隱した物に碌な事はない物ぢや。聞けば昨日殿様のお家に、何やら紛擾が有つたげな、夫を思へば、コリャコレ合點が行かぬ、此方から殿様へ、持つて出て伺ひます」と、いふに臺七胸にぎつくり、又取りかゝるを突飛し、迯げ行く首筋引戻す、放せやらじと競合ふはずみ、鏡は飛んで深田の中、「小言いはすな夫丹介」、心得拔打ひらりとすかし、あしらふ後を臺七が、手だれの早業後袈裟、ふり返つて、與茂作「エヽ非道な臺七殿、コレ〳〵わしが死んではの、かゝはあすをも知れぬ大煩ひ、スリャコレ娘一人が路頭に立ちますわいの〳〵、命は助けて下さりませ、娘ヤイ、おのぶヤイ」と、喚くも晝中人や聞くと、主從寄つて滅多切、倒るゝ上に乗つかゝり、ぐつととゞめを四苦八苦、無殘と云ふも餘り有り。血押し拭ひ立ち上る。折から何の氣も付かず、戻る娘が、娘「ヤア父様を誰が殺した〳〵。父様なう〳〵、コレ母様はあのやうに煩うてなり、お前に別れて、わしや何とせうぞいの、コリャマアどうせう悲しや」と

て退けた程にの、其様に案じ廻しはせぬ物ぢや、人間は老少不定、今煩うて居る嚊は長生して、達者な俺が先へころりと死ぬまい物でもない、其時にやわりやどうするぞ」娘「サア其時はわしや泣くわへ」與茂作「ハヽヽヽエ子供と云ふ物はなあ、コリヤ、ヤイ泣いた迚喚いた迚、死んだ者は歸らぬわいッ いつ何時か知れぬで持つた世の中ぢや」と、いふも女房が煩ひの、十が九つあつちもの、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀なり。與茂作は心付き、與茂作「ヤほんに思ひ出した、内に藥を煎じかけて置いた、いり付けぬ中汝太儀ながら一走り、一番煎じを嚊に呑して來てくれぬか」娘「イヽエ内には昨日來た旅のお侍樣、夫は〳〵氣を付けて、内の事は構はずと、田へ行て父樣の手傳せいてよ」與茂作「ヲヽあの人も由緒有る浪人衆と見たが、さう〳〵他人に任せて置かれぬ、つい一走行てくれ」と、云ふに娘も、娘「アイそんなら必とば〳〵怪我せぬ樣に、わしが來るのを待たんせや。どうやらわしは往きとむない」「ハテ逡巡と何言ふぞい、早う戻りや」と親と子が、見送り見返る畦傳ひ、是ぞ此世の別れとは、後にぞ思ひ知られける。「ソレはいぢばたの久六が畦は滑るぞよ、隱居の田へ廻つて行け、ヨヽ、利口な奴、どりやあいつめが來ぬ中に、植付けて悦ばせう」と、踏込む畦にしつかりと、足に觸るは以前の鏡、「テモマア替つた物」と打返し〳〵、見るを遠目に見付ける臺七、丹介引連れ驅來り、臺七「ヤア其鏡此

事の肩弛く、一荷に荷ふ早苗より、また若草の小娘が、介錯らしげに褄かゝげ、親の手助正直の、頭に戴く晝餉物、土瓶片手に、娘「是父様よその衆は植付けも、大方濟み、晝休みに行かしやつたが、此方は母様が寝てぢや故、何もかも遅なつた。嘸おまへは氣が急かう」と、いへばほろりと涙をこぼし、與茂作「ヲヽよう云うたなア、今更言ふではなけれども、俺も元は上方で、刀もさいた者なれど、ふとした事で浪人し、侍止めて物作、如才はせぬと思うても、挊に追付く貧乏神、未進に追はれて八年跡、姉めは江戸へ勤奉公、おのれやれ土に喰付ても、挊溜めて金調へ、姉めを取返さうと思ふ中、嚊は病付く人手はなし、エヽ俺や殘念なわい口惜いわい、蝶よ花よと樂は我ばかり、必ずきな〱思うて、煩うてくれなよ」と打萎るれば、娘「コレ父様、わしと云うても女の事、何處ぞから男の子貰うて成りと、早う樂して下され」と、眞實眞身のしほらしさ、與茂作「ヲヽ合點ぢや〱氣遣すな、疾と前侍の時、姉のおきのが生れると、直に傍輩衆の子と云號して置いたが、是も其後便も聞かず、其姉といへば吉原とやらに君傾城、とかく我が大きう成るを苗の延びる様に待兼ねる、又庄屋殿は嚊が兄なりや、何や角やと氣を付けてくれらるゝ、案じてくれな」と云ひつゝも落ちぶれし身の跡や先、思ひ廻せば味氣なく、歎く涙の玉苗や、植ゑぬ先より袖濡らす、浮世渡りぞ是非もなき。與茂作「アヽ愚癡な事云うて、終泣

サア／＼おれも歸り道、道々咄して歸ろぢや有るまいか」百姓「ハイ／＼今私共も晝休に歸る所、サア御一所に」と氣散じは、茶碗もそこに沖の石、乾く間もなき泥足を、引連れてこそ立歸る。館の騷動仕合と云拔けながら己が身の、志賀へはかくれぬ臺七郎、家來引連れ欵待顏、臺「イヤ何丹介やい、其方も知る通り昨日館の大騷動、楠原普傳を討つたる故、身共が身には構ひなけれど、エヽ殘念なは千束姬、又憎いは伊達助め、併し毒藥祕方の一卷と、天眼鏡は身が手に入る、是さへ有れば人を懷ける術の第一去ながら、騷動の擧句何とやら心懸り、一卷は懷中もなれど、是此鏡は置所に困る、上屋敷へ行き歸る迄、隱し所は有るまいか、」丹介「何さ／＼拙者めに御預け」臺七「アイヤ人手に置くも心障、ガ夫はさうと弟臺藏、一昨日から行方知れず、貫平めに申付けたが、未何の沙汰もないか」丹介「ハア、成程、貫平めも諸々方々、臺藏樣の御行方、吟味には出しましたが、今に何の沙汰も御はりませぬ」「ハテ心得ぬ」とと つ置いつ、思案時つく鐘の聲、臺七「ヤ南無三寶早八つ時、御用の刻限延引は疑の元、エヽ此鏡の置所ハテ」どうがなと屈託も、凝つては思案に四邊見廻し、臺七「エイ暫しの其間、人の心の付かぬ所」と、畦の間に鏡を埋め、草引覆ひ、臺七「先よし／＼、丹介來れ」と何氣なく、打連れ彼處へ急ぎ行く。爰に城下の片在所に與茂作と云ふ律儀者、元は河内の武士の果、女房の緣に撚糸の、袖布衣陸奥の、けふの仕

歌の雲の上、供御と云ふから下々の、盛切物相二合半、内裏女﨟も喰ふにや縦横十文盛、一膳飯の一粒も、皆百性の汗雫、艱難辛苦の種ぞとは、誰白坂の御領分、植付くる田にづらりつと、並ぶ菅萱一文字、二百姓「おくろャイ、もう晝餉時ぢや有るまいかい。ヲヽ今朝から精出しただけ、昨日よりははかがいた、植付ては跡へ寄りく、夫でか腹もア跡へ寄つた。武兵衛も藤兵衛も、お松も煙草にせうぢや有るまいか」「よかろく」とすき切火繩、樽に詰めたる煎茶も、畦を床几の一休み、甲百姓「何と又此與茂作は何して居るぞいなう。此方は昨日今日に植付仕舞に、三分一もはかどらぬ」與茂作「さればいなう、内の嚊衆が此春からの煩ひ、あの和女も心遣ひであろぞいの」甲百姓「サア夫でも植付時に遲れると、秋入の時分迄、草取肥しに大抵や大方骨が折れる事ぢやないなう」乙百姓「いゝやいの、何と云うてもあの與茂七の嚊衆は、庄屋殿の妹、年貢の時分はどうなりとなろかい」丙百姓「イヤ夫でも堅い氣の庄屋殿、眞直なお人ぢや」と噂半一村の、支配を庄屋七郎兵衛、七郎「ホ皆の衆精が出るよ、隨分と働かしやれ。外の人の爲ぢやない、今の辛勞が秋は酬うて來るわいの。シタガもう晝餉時、又休んで働かしやれ」と、下をいたはる慈悲詞、百姓「ハヽヽ結構なお庄屋樣、其おまへのお心を、お代官の臺七顔に、ちつと煎じて飲せたい」七郎「アヽコレく、かりそめにも上の噂、ひよと誰が聞くまい物でもない、愼ましやれく、

して置けば、竝に外れた惡味噌を、ぬかしたる代のしがはり鱓の齒ぎしり腹の皮、寺受狀の一番筆、切石丹下御座なく候、宗旨は代々笠の臺、離れぬ仲に臨終の、念佛申せ」と嘲笑ふ。「ヤア物な言はせそ打つて取る、かゝれ〳〵」に家來共、有合ふ手桶おつ取つて、火水に成つて三重打合ひける。手練の働き根限り、梨割立割捲り切、捲り立てたる太刀風に、むら〳〵ばつと小鳥武士、迯出す後を追うて行く、心得丹下が繰り出す鑓、ひらりとかはして伊達助が、鑓首摑んでコリャ〳〵、傍にハア〳〵危む千束、抱へ解いて卽座の氣轉、結んで引張る心の助太刀、ひらいて付込む切石が、思ひがけなき帶の羂、轉ぶ途端に投出す鑓、出合頭の家來が胴腹、二人重ねて鳥刺突、倒るゝ丹下を搔摑み、ぐつとさし上げ投付くれば、眼玉飛石切石が、微塵に成つて死してけり。外に相手も艶きし、姫に付添ふ伊達奴、是も一つは今日の沙汰、明日は女夫と鹽竈や、出世を松島まつ山の、御恩は母樣御主人へ、おほ隈川もならぬ身の、心のたけ隈名殘をば、岩手館を三重出でて行く。

第四

歌 奥脇街道に本宮なくば、何を使に奥通ひ、夫が旅路の憂さはらし、唄ふ皐月の草苗歌、歌や連

有所安々と、白狀も致すまい。謀でも不義の科人、二人が仕舞を見物」と、空嘯きたるいがみ顏、「ヲ、なる程尤ぢやが、家の政道正すのに、其方の差圖は受けぬ自、不義と浮名の立つ上は、二人ながら勘當ぢや」と、仰に伊達助千束姫、身の誤に應答なし。寄浪「ヲ、姫が歎きを察しやる去ながら、紛失の綸旨、尋出すはそなた二人、ヤ合點がいたか。其時はもとの親子主從、再び歸參の時節を待つ」と、情も籠る御仰、夫を力の有難涙、寄浪「ヤア／＼臺七、綸旨の日延よき樣に申上げよ。譜傳に一味の者どもも、そこらあたりに有らうも知れぬ。是より直に臺七は、鎌倉表へ、早急げ」と、詞に疵持つ足の裏、底氣味惡く立上り、不精々々に出行きしが、臺七「ヤイ家來共、二人の科人用捨はならぬ、門前より追拂へ」と、詞鋭く言放し、立切る襖。千束「コレなう暫し母上樣、せめて今一度お顏を」と、立寄る姫を止る伊達助、伊達助「長居は恐れ片時も早く、館を放れて綸旨の詮議、目出度對面待ち給へ」と、萎るゝ姫を伴うて、立上る向ふの方、大勢引具し切石丹下、丹下「ヤア伊達助の糸だて野郎め、似やつた樣に飯炊の、お玉杓子を引込んで、三百店でも持たうとはし居らいで、館の姫君千束樣を、女房などとは驕つた奴、罰が當つて此丹下が、刀に息を引取證文、死骸は店受葬禮は、投込む寺へお布施はころり、首を渡せ」と呼はつたり。伊達助にこ／＼打笑ひ、伊達助「ヤアぬかしたり裏店武士、此僕が新世帶、心祝ひと赦

曼珠沙華に男女の生血を灑げば、忽ち邪法破るゝとは、コレ時至る天の告」伊達助「ハツア仰の通り、辰の年辰の日辰の刻に誕生の女、未年未の日未の刻に生るゝ男、互の血汐は幸に、お娘様と拙者が生血、一ぱいまゐつて重疊々々。覺悟ひろげ」と嘲笑へば、普傳は無念の齒嚙をなし、普傳「エヽ奇怪や腹立や。よし是からは妖術も何かせん。後室始小太郎千束、奴めも捻り殺して我大望、一天下平均せん事まのあたり。迚も生けては置けぬ奴ら、我本名を語り聞かせんよつく聞け。我は九州七草に、洞理軒と云ひし者、先祖は唐土ヨウカクとて、黃巾の賊と呼ばれし者、故有つて日本へ押渡り、習覺えし妖術を以て日本を切隨へ、其虛に乘りて唐日本、魔國になさん我大望、軍勢催促の其爲に、石堂家の綸旨を奪ひ、小太郎を人質に先手始は、此家を押領せんと思ひしに、見顯はされて殘念々々。まだも工は某に、一家中も大半味方、術は失せても計置く、相圖を印、館も殘らず塵灰同然、仕懸けし地雷火是見よ」と、云ふ間に立出る志賀臺七、ひらりと電、楠原が、首をはつしと打落せば、驚く人々伊達助は詰寄て、伊達助「ヤア詮議の有る楠原普傳、何故首を討たれしぞ」と、せけば落付く志賀臺七、後室に打向ひ、臺七「アイヤ、最前より普傳が振舞、合點行かずと心付くるに、普傳が工 魔術を以て、又此上計り置かんも知れ難く、憎さが凝つて思はずすつぱり。去ながらコリヤ拙者が不調法、譬楠原生置ても、綸旨の

普傳「ムヽヽヽハヽヽヽこりや是唐土呂洞賓が繪姿、寄浪「サアコレ、忠義に僞りないならば、此一軸を足にかけ、踏んで疑ひ晴してたも」普傳「イヤ其儀は眞平」寄浪「ナニ、踏まぬは逆心」普傳「サアサア〳〵ハア」寄浪「ヲヽ踏む事は成るまい、其證據はコレかう」と、有合ふ銚子繪像の上、ざんぶとかくればコハ不思議や、さしもに猛き楠原普傳、もがき苦しむ懷中より、小蛇の形現れ出づれば霹靂、轟く雷いなびかり、形は消て失せにけり。夜浪御前は甲斐々々敷、「者共來れ」と詞の下、ハット答へて組子の面々、用意はかねて鐵砲の、筒先揃へ取卷けば、伊達助千束も走出で、後室圍ひ突立てば、普傳「ヤア某に何科有つて」寄浪「ヤア何故とは愚々。最前よりの立振舞、合點行かずと思ふ所に、若を助けて家を立てんと、表に見する忠義立、彌不審と手に入りし、呂洞賓の一軸を踏ませしに、邪法の印踏む事ならず。其上小太郎を腹切らせんとつつかけし、刀持つ手の働かざるは儕が術、最早遁れぬ、尋常に名乘れ〳〵、サア名乘れ」と千束も共に詰寄れば、普傳「ヤア斯く迄仕込し我大望、女童のあざとき手立に、見顯はされたか。ヤアヽ殘念々々さりながら、我傳へ置く妖術を以て、譬十重二十重に取卷くとも、物其數共思はぬ某、見よ〳〵一つの奇特を見せん」と、印を結んで唱ふる祕文、日頃の妖術消失せて、一つも印の有らざれば、寄浪「ヲヽさこそ〳〵、汝が工邪法を以て人を懷くる、此術を挫かんには、

くらむ心を取直し、思ひ切つて我子の腹、突かんとすれば楠原が、何か心に唱ふる祕文、痺る腕、寄浪御前、コハ遅れしと取直し、又突きかくれど叶はぬ手先、コハ／＼如何にと後室も、呆怪む計なり。やゝ有つて寄浪御前、寄浪「イヤなう普傳、其方を始め人々も、嘸かし未練と思やらうが、子故の闇に手も顫ひ、切つても切れぬ恩愛。そなた頼む、介錯して潔う、若の切腹」普傳「アイヤ、夫は御免くださるべし。勿體なくも主人の我君樣、エヽ亡君に別れ參らせしより、何卒若君を守立て、國家を治めんと思ふ我心、夫に付け後室樣へ申上げ度きお願ひ有り、此場の御生害を暫く御猶豫有りたきもの、暫の內は我君諸共、何も共に先一間へ。必ず早まり給ふな」と、樣子は何と楠原が、差圖にいなと志賀唐崎、皆々伴ひ入りにけり。後見送りて寄浪御前、普傳の傍へ摺寄りて、寄浪「今其方の思案が有ると言やつたが、どうやら心有りそな事、サア早う聞きたい聞かせてたも」普傳「ハア仰御尤の至り、最前申上げしつゝじの謎は、つゝじに似たるきり島、ナ、蕾のきり島、憚りながら女儀の才發、夫故に斯くの仕合、御身代を拵へ、首打つて鎌倉への申譯」寄浪「イヤそりや僞り、自が心を引き見ん其爲に、夫で其方の」普傳「ハイヤ、忠義に凝たる此普傳、若御身代顯はれて、云譯なくば腹切つて、鎌倉への申譯」寄浪「イヤモウ、腹切る迄もない、コレ其方に見する物有り」と、取出し給ふ怪の繪像。コレハト普傳が愕り仰天、

と言はねど心には、脱ぎし上著の鶴龜も、千代萬代と祝ひしに、變れば變る有樣と、喰しばるのも人々の、手前包めどせぐり來て、隱せど知るゝ息づかひ。小太郎「ヲヽ、コレ坊はよい衣服著た」と、稚子の今はと知らぬいぢらしさ。有るにもあられず千束姫、千束「エヽ、御心強い母上樣、何ぼう武士の子ぢや迚も、腹切れの自害のとは、成人した人の事、五つや六つで何の其、あの子の業では有るまいし、思案してたべ母上」と、身を打臥して泣詫れば、母上涙の顏を上げ、寄浪「そなたも武士の娘でないか、家の爲に侍の子が、腹切るにマ未練な繰言、自は覺悟極めて、コレ介錯をするわいなう」と、立派に云ふも諸士の前。千束「イヤ〱何ぼ立派に仰つても、子を思ふは親の常、少しの事の煩ひでも、神や佛を賴む身に、如何に云譯なき迚も、幼氣なあの若に、腹切らすとは胴慾な、死ないで叶はぬ事ならば、あの子の代りに私を殺し、云譯立てて給べ。母樣申し拜みます、拜むわいの」と身を打伏し、弟を思ふ眞實に、賴む身よりも賴まるゝ、母の思は百千萬、包む涙は五月雨の、晴れては曇る如くなり。寄浪御前は氣を取直し、寄浪「未練の歎に時移る、ヤア〱誰かある、切腹の用意せよ。早く〱」と仰の中、ハツト答へて唐崎松兵衞、三方に腹切刀御傍近く直し置き、座を隔てぞ扣へゐる。母上涙を押隱し、若君の御手を取り、口に稱名九寸五分、手に取りは取りながら、流石恩愛別れの涙、胸一ぱいに突詰めて、

が證據に成る物か」臺七「サア夫は」「サア〳〵何と」に行詰り、返答しかなの志賀臺七、臺七「イヤ慥な證據は此普傳が手に入りし此艶書、國取の姫君が、下司下郎と不義徒、モ隣國の聞えも如何。コリヤ家の掟は背かれまい」と、てつぺい拉ぎの折も折、息を切つて若侍、若侍「最前何者とも知れず寶藏を切破り、御綸旨を奪ひ立退きし」と、知らせにハット驚く人々、後室千束は重る難儀。千束「コレ〳〵申し母上樣、コリヤ何とせうどうせう」と、立つたり居たりうろ〳〵と、中に普傳も臺七も、呆れて詞もなかりけり。寄浪御前は當惑の、胸押さげて、寄浪「イヤナウ普傳、今聞きやる通りの一大事、緩かせに詮議せば仕樣も有らんが、自は女の事、其方は家の輔佐、家國を納むる了簡、其方の思案は」普傳「ハア某とても火急の場所、御家中列座の其中なれば、思案もあらば遠慮なく、申上げるも一つは忠義。アレ〳〵あのつゝじは、當家に名高き岩手山、アノ花に似たる花はハア何とやら、チヽ切しまつゝじの花も切りしまに、アヽよき思案も有りたきもの」と、底意は何と楠原が、詞はなぞ、眉に皺、寄浪御前思案を極め、寄浪「ヲヽ普傳の詞で自が心の覺。イヤナウ小太郎、幼けれども石堂の家を繼ぎ、讓を請くれば一國の主、綸旨の紛失、鎌倉への申譯」是非に及ばぬ此場の時宜、用意を何と白小袖、携へ給ふ手もふるひ御目もうるみ、「コレ小太郎、神樣へ參る程に、此衣服著や」と御手づから、上著の小袖引代へて、無紋の小袖死裝束、それ

き、暫應答もなかりしが、顏振上げて、千東「コレ伊達助、其疑を晴す爲、嘘か誠か見やいの」と、用意の懐劍小指をばつたり。伊達助「ア丶コレ夫は」千東「イ丶ヤ驚く事はない、お前へ立つる此心中、ア女夫に成つて下さんせ。伊達助とは世を忍ぶ假の名、御本名は」伊達助「シイ、イヤ申しお姫樣、疑は晴れました、ガ私が心もまづ斯う」と、脇指抜かけ小指の血汐、伊達助「幸ひ爰に有合ふ銚子、コレ二世も三世も變らぬ盃」千東「そんなら疑晴れたかへ」伊達助「晴れいで何と致しませう。イヤ申しお姫樣」伊達助「あれ又あんな事計」と詞をしほに抱付き、こちらも得手に帆を上げて、一色の湊を出船の、戀風受けし如くにて、何れわりなき風情なり。「不義者見付けた動くな」と、不間を出づる楠原普傳、二人ははつと消入る心地、普傳「ヤア下司僕めが高上り、主人を相手に不義ひろぐ、言語道斷憎い奴ら、不義はお家のきつい御法度、姫君迚も是非がない、觀念せよ」と云ふ聲の、漏れて奥より寄浪御前、續いて臺七走出で、臺七「スリヤ何ぢや、姫君も此有樣、ハテ斯う云ふ事が有る故に、ヤイ其處な糟奴め、生白けたしや面いまく〵しい。イヤ申し後室樣、此お捌は何と遊ばす」と、何がな戀の意趣晴し。寄浪「ヤイ扣へよ臺七、二人が不義と仰山に、夫には慥な證據が有るか」臺七「ハ、イヤ證據は則ち伊達助めが、爰に居るのが慥な證據」寄浪「イヤ夫は證據には成らぬぞよ、常から若が氣に入りのアノ伊達助、若が伽して夫で爰に、サア夫

衞様、若君様が召します」と、奴の伊達助出来り、伊達助「扨申し、私めはお庭の掃除、山程御用がごはりまするに、如何に御意なれば迚、歩中間の身分で高上り、部屋に居るとは違つて、行くも行くも備後表、滑るまいと致すので、一生覺えぬ身は冷汗、もう下郎めはお赦し」と、揉手をすれば、松兵衞「道理〳〵。身共が參つて其趣若君へ申上げ、其方にも休息させん。暫く是に扣へ居て、若し姫君の御用があらば、何仰らうとナイ〳〵と、ナ。イヤ申しお姫様、彼の内々の御用を、ナ、夫しつかりと仰聞けられ然るべし」と、底の心は知らねども、粋と不粋の紛れ者、奥の間にこそ入りにけれ。後に二人はさし向ひ、互に心おきの船、言葉のしほに寄り添へば、ちやつと摺退き、伊達助「エ、お嗜なされませ。物堅いお屋敷で、マこんな自墮落な事、後室様のお耳へ入れたら、チヽ怖」と、立つ其手をばじつと取り、千束「其方をふつと見初めてから、いとしらしいと思うても、人目の關に隔てられ、つい云ふ事も岩つゝじ、色をも香をも知る人は、そなた一人と思うて居て、胸は千束の錦木の、朽ちぬ縁を松島の、神に誓ひし我願ひ、どうぞ首尾していついつと、思うて居るにあんまりな、心づよい」と計にて、わけも涙の口說きごと。伊達助「ハ、イヤ、なんぼ左様仰つても、私は歩中間お前様はお主様、どうして見てもみんな嘘、輕い者でも心は一つ、上下の差別はござりませぬ。私は疾うから諦めて居ります」と、云はれてはつと差俯

いつぞは申上やうと存じました、能い折柄、別の儀ではござりませぬ、アノお前樣にはいつ〱迄も、お一人でも御ざられますまい。畢竟斯樣申すもあなたへは、お手習の水上を、致して上げた唐崎松兵衛、アヽどうぞな、能い聟君を、ヤ夫に付きアノ志賀臺七、アヽ苦みの走つた能い男、手跡は拙者、兵法は普傳が高弟、御家中での器用者、其上お前樣にきつい執心、お心がござりますなら、拙者がそつとお仲人致しませう。申しコリヤどうで御ざりまする」と、云はれて姫は面はゆく、千束「あの松兵衛のいやる事わいの、そんな事は此方知らぬ。夫に又臺七が噂聞きともない、耳穢る。モウ〱〱重ねてから云つてたもんな」松兵衛「ハテネ、左樣ならば、ぐつと下つてお草履取の伊達助め、サヽヽコリヤどうかお氣が有る樣に見えます。何と是にでもなされませぬか」と、口うら引くも胸に一物、とは知らずして、千束「コレ松兵衛、あの伊達助が樣な賤い者でも、女夫にも、アノならるゝかや」「ハテ扨夫が外見ずの懐子。コレ申し、エヽおまへ樣は、隱す〱と思召しても、とうからへヽヽ知つて居りますわい。ハテ何と致しませう。お前樣のおきらひなさるゝ臺七殿、拙者めがよい樣に申しませう。ハテ私も腹からの野夫ではさら〱ござりませぬ」と、可笑味交て姫君の、得手にはの字へ持ちかけて、乘せる詞に好いたのは、つい乘安く莞爾と、笑顏に戀の糸口も、顯はれさうな折からに、伊達助「申し〱松兵

戒、匹夫の勇は學ぶに足らず。南朝恩顧の味方を集め、時節を待つて旗上せん。夫よ〳〵」と打うなづき、立出でんとする塀の上、見越の松を傳ひ來る、忍びの曲者、透し詠めて兵部の介、樣子あらんと身を潛め、息を詰めてぞ伺ひ居る。奧庭傳ひ出來る普傳、相圖と思しき呼子の笛、夫と聞くより忍びの者、探り寄りて、曲者「普傳樣、彼の御朱印は」普傳「ヤレ音高し〳〵。暫く夫にて相圖を待て、盜出して手に渡さん。必ず傍に氣を付けよ」鼻息もせず奧の方、忍びの者は打點き、しすましたりと一人笑、今や遲しと待ちゐたり。始終とつくと兵部の介、探り寄つて曲者の、首筋摑んでぐつと絞め、うんと仆るゝ死骸の裝束、手早に著替る卽座の頓智、猶も潛みて待つとも知らず、普傳は奧より御朱印の、箱を難なく盜出で、探る庭先呼子の笛、時分はよしと兵部の介、以前の忍びと見せかけて、探り寄りて囁き聲、兵部「首尾は」と問へば、普傳「上首尾々々々。一刻も早く此御朱印、件の方へ急げ〳〵」畏つたと押戴き、天の賜物有難しと、闇は綾なし五月の空、行方知れず成りにけり。影も朧き銀燭の、光照添ふ千束姬、戀しき人のもしもやと、奧より忍び出で給ふ。松兵衞は姬君の、素振に氣を付け居たりしが、何氣なき體後より、松兵衞「コレ〳〵申しお姬樣、何をそは〳〵遊ばすぞ。先々是へ」と膝摺寄り、松兵衞「今日は峯の社へ御參詣、御神拜も相濟み、又若殿樣にも御跡目御相續、斯樣な目出度儀はござりませぬ。

普傳は呆れて、普傳「コレサ志賀殿、如何でござる」と、聲かけられて臺七は、苦しげなる聲音にて、臺七「エヽ胴欲なぞや千束姫、是迄下拙が口說く時は、七里けんばい寄せ付けず、たま〳〵傍へ寄ろとすりや、生猿の樣な爪立てて、兩手と顏に生疵の、本に〳〵絕る間とてはなけれども、爰が戀路と明暮に、堪へ〳〵し甲斐もなく、アレ奴めに頰摺を、させるといふは恨めしい、あんまり聞えぬ〳〵」と、傍なる人に云ふ如く、たわけのせいらい突立上り、戀の敵の伊達助め、まつ二つにしてくれんと、勢ひ込で駈出す。普傳「ハテ扨一興先待たれよ。ひらに〳〵」と止むるも聞かず、駈込む臺七楠原も、續いてこそは入りにけり。最前より物影に、樣子窺ふ兵部の介、手を拱いて步出で、兵部「ハテ心得ぬ兩人が振舞、殊に普傳が始終の有樣、南朝を慕ふ義兵なるか。アいや〳〵、彼が詞の端々、利欲に溺るゝ奸邪の相、天子を補佐の才に有らず。北朝一味の不義の軍か。ハテどうがな」と首傾け、見やるそなたは夕陽の、影入りはてて遠山に、幽に浮ぶを雲かと見れば、雲にはあらで不祥の氣。兵部「アヽ心得ず、時は五月、日は井宿、赤狗の如き雲氣の下には、血流るゝ事千里といへり。正に天市宮に屬せば、候太夫にあらず。ムヽハヽ、七草の一揆起らん、天のしらせか。ハヽヽ、ハテ怪敷雲の有樣ぢやよなア。イヤ〳〵、無道にこりし百姓原、一揆の企賴みなし。良禽は木を擇みて棲む、危邦に居らぬは聖人の

が小氣味惡さに、バア、コリヤ迯げるさうな。ア、イヤ〳〵、迯げはせいで、アあれ又傍へ寄りました。エ、アレ見さつしやれ小胸の悪い、姫は後で衿に顏。アレ膝で背中を突きながら、やいの〳〵と云ふ樣に見えます。エ、さうして何だほてくろしい。アレ〳〵互に肌へ手を入れて、エ、けち忌ま〳〵しい。ア、イヤ〳〵、もう〳〵此鏡は見ますまい。見るに目の毒障るに煩惱、モウ見ませぬ〳〵、ハテ埒もない。何、先生、埒此鏡は馬鹿々々しい鏡でござるの」普傳「ム、何、鏡が馬鹿々々しいとは。エ、埒は貴殿のお心に、僞事と思召すか。左樣ならば其鏡、ドレ此方へまづ納めませう」と、立たんとすれば、臺七「ア、イヤ〳〵なに先生、エ、とんともう、見まいとは申したが、何かのそこに、エ、ちと心がかりな事も有り、最一度ちよつと拜見を致さう」やはり夫にと押直り、見ればあり〳〵庭の面、移る二人が、臺七「アレアレ〳〵あのマ美しい頰べたへ、奴めが髭を摺付け頰摺は、エ、夫が痛くて堪へらるゝ物かいやい。エ、是ぢやによつて見まいと云ふものを。ヤア、〳〵アレ又二人が何か囁く樣に見ゆるが、ハア柄杓の水を、ハア、エ、情ない、アレ口移しにしけつかりくつさるわいの。エ、腹の立つ〳〵。コリヤ堪らぬ〳〵モウたまらぬ」と抱付く。普傳は恟り鏡はばつたり、臺七は小鼻怒らし眼を見つめ、兩手で前を壓へながら、鏡に向つて吐く息は、猛火といはんか阿呆らしゝ。

其心地、臺七「かゝる祕術を授け給ふ、尊師の御恩報ずるに所なし。夫に付き某、兼て松兵衛と示し合せ、千束姫を婦妻にせんと、いろ〳〵手段を廻らせども、見かけに似合はぬ木娘木像、堅きを砕く我軍學、大小衣服に綺羅を盡し、髮月代搨磨き、口中の掃除迄、備へをまうけて待ちかくれど、今以て埒明かず、先生の妙計あらば忽ち出世、其時こそ御厚恩謝し申さん」と、眞顔のやくたい。普傳は片頬に笑を含み、普傳「千束姫を娘などとは不目利々々々。あれは彼のお草履取の伊達助めと、ほてくろしい色事、性惡の徒娘、攻落さぬ抔とは、アいやはや愚將」と打笑へば、臺七は熱く成り、臺七「さう聞いては堪へられぬ。ガ併、拙者にさへ靡かぬ娘、中間づれに何として〳〵。コリヤ先生の御惡口、左樣不義はござるまい」と、合點せねば猶も摺寄り、普傳「ハテサテ貴殿人が好い、疑しくば證據を見せん」と、件の鏡押直し、奥庭へ指出し、普傳「アレ見られよ小書院に、蹲うて、人待顏は千束姫」と、いふに摺寄り差覗き、臺七「ハヽ成程成程、コリヤ奇妙。ハヽ又鏡で見る故か一倍見事。コリヤたまらぬ」と、餘念正體目も綾に、見とるゝ影は奴の伊達助、切戸を開けて水手桶、提げて入る體こなたの姫、何かは傍へ寄添ふ影、爰こそと目も放さず、肩で息して守り詰め、普傳「アレ〳〵先生、何か物を申す樣なが、エヽ聲迄は移らぬかい。ハヽなう悲しや、アレ抱付きましたわいの。アヽイヤ〳〵ついと立つたは奴め

一つひつしやりは、打殺さるゝ道具なり。伊達助「ハア、是は〳〵、何の是が氣を揉むのもまぬのと、お主樣の御意とござれば、憚ながら、たとへ手鍋を提げよと有つても、夫こそもう下郎めが身の仕合、冥加ない儀で御はりまするでごはります」千束「ヲヽ、そしたらアノどんな辛苦をする迚も、そなたは辛抱する氣や」伊達助「何のマアつがもない、お前樣に下郎めが、僞申してよい物でごはりますか」千束「ヲヽ夫で落付いた」必ずやいのと目で知せ、しづ〳〵上る書院先、草履取る手を人目のすき、ちよつと戴く尻目で見る、冥加ないやら嬉しいやら、妼共に誘はれ、奧と勝手へ別れ行く。引違へて志賀臺七、普傳を誘ひ立出て、席を改め、臺七「イヤ何先生、只今奧にて談ぜし通り、御印可傳授相違なく、賴み上る」と手をつけば、楠原ほく〳〵打點き、普傳「先刻より見られし通り、兵部の助へは懇望の妖術、貴殿は天眼鏡、御兩所へ引分て、祕密殘らず傳へ申した、元來拙者西國にて、一つの島に閉籠り、呂洞賓より授りし、祕法を以て土民を語ひ、時節を待つて南北朝、左右に握る我妙計。東國へ赴きしも、豪傑の士を求めん爲、先此鏡の奇特を見せん」と、雲氣の鏡臺錦の袱紗、敬〳〵しく飾り立て、西に向つて呪文を唱へ差出せば、漫々たる青海原、煙も雲も一つの島、城壘民屋整々と、時を松浦の沖津波、海人の燒く草藻鹽草、手に取る如き鏡の內、是はと計手を打つて、暫し感ずる計なり。臺七は悅びの、天へも上る

原普傳と申す、御見知り下されよ」と、詞に傍から臺七が、臺七「則ち是は拙者の師範と頼む博識の先生。自分は志賀臺七」「唐崎松兵衞」と、互に會釋打終れば、宇治は横手を礑と打ち、兵部「ハヽヽ、先生には御見忘れ候か、某は宇治兵部の助、西國經廻の折から、御門弟の列にもならびし者」普傳「其時の御名は、チ、成程々々、旅窶れ見違申した。今に出精頼もし〳〵。マ、コレ各、隔心召さるな、聞かるゝ通りあの仁も身が門弟」是は〳〵と計にて、挨拶取々なる折節、姫君樣お歸りと、先走の若黨が、しらせに普傳は、普傳「ヤコレ臺七殿、アレ早、姫君にもお歸りとや、とくと申度き儀もあれど、今はサ云はれぬ。兵部殿を伴ひ先奥へ、後刻々々」と式禮に、返答志賀も唐崎も、宇治は備はる兵部の助、打連てこそ入りにけり。家の名の石には有らでほんじやりは、大領の娘千束姫、積るは雪か玉笹の、一夜は寢たき品容、氏神詣の歸りがけ、乘物止めて道草や、伊達助と云ふ下部、月代青き繻子鬢も、紺に匂ふや花かつらぎ、さしも立派な柄前の、鍔は角でも物云ふは、角のとれたる色奴。伊達助「アお姫樣、モウお屋敷でごはります。腰元衆もお氣付けられ、おしとやかに御入」と、申上ぐれば、千束「アレ伊達助、今日の樣に面白い、樂な物詣は終にない。其方はさうも有るまいなう。お屋形へ歸つたら、すぐに小庭へ廻つてたも、いろ〳〵頼む用が有る。又部屋へついと往て、氣を揉ましてたもんなや。エヽ憎い」と、

り遅しと門の外、臺七「其處に居るは誰ぢやい。イヤ其處に御ざるは、ア、旅人か。是へお出の道筋、女中乘物はそと見給はずや。ガ又、其元は何故其處には休息」と、咎に兵部は小腰を屈め、兵部「ハ、イヤ、拙者儀は上方邊より武者修行に出でたる者、ガ餘り御稽古の聲羨しく、思はず足を止めし」と、語れば臺七、臺七「是は〳〵、御奇特の御志、傍輩共へも申聞せ、苦しからずと申しなば、ヤモ、未熟の稽古御目にかけん」兵部「夫は大慶仕る」と、草鞋とく〳〵其用意。臺七は内に入り、臺七「イヤナウ何れも、アレ門外に浪人と覺しき奴、武者修行と名乘る片腹痛さ、呼入れて慰まうではござらぬか」松兵衛「いか樣、大層にぬかす奴に、ヤモ、業の碌なはないものさ。日永の慰打て〳〵打据ゑん。コレ〳〵斯う〳〵」と囁いて、小蔭に松兵衛、心得丹下、伺ひゐるとも白菅の、笠脫置きて威儀繕ひ、靜々通る妻戸の蔭、聲をかけず左右より、はつしと打つを沈んでつま取り二三間、莞爾と笑ひ、兵部「ハヽヽコレ〳〵旁、拙者儀は片田舍より罷出でたる宇治兵部の助と申す者、私しきでも刀を帶せば、武士の數と思し召し、御當りなされて御覽とは、ヤモ、一分立てて過分の儀、以來は御入魂下さるべし」と、直に座に付く丈夫の眼中。二人は元より臺七は、手持不沙汰に見えにけり。普傳は始終手を拱き、見上げ見下す一工夫。兵部の助は顔振上げ、兵部「座上に在する御老人の御姓名は」普傳「イヤ愚老は楠

りと、へゝゝゝ、カノ女中交りの御目出た酒、お請り申上げます」と、己が戀路の得手勝手、寄波「成程々〱、打揃うて、後程ゆるりと逢ひませう。サア皆おぢや」と、夕なぎの、寄波御前は若君の、手を引連れて入り給ふ。後は一組人喰馬、相口同士が打くつろぎ、臺七「ナント先生、此程ちらとお咄の天眼鏡、百里二百里隔ても、手に取る樣に移ると申すは、眞の事でござりますか」劍術先生普傳「成程、先師呂洞賓より傳りしトンクルケリキヤ、漢字には天眼鏡、見たいと云ふ方角へ鏡を向け、祕文を唱へて是に向へば、世界の内は扨置き、地獄天堂迄鮮か。行法成就の門弟へは、附屬する了簡。其外にも忍び松明、毒箭炮弩の軍器の傳授、手柄は仕勝、精出されよ」臺七「コハ有難し〱。此臺七も追付傳授して見せませう。此頃上の御用で稽古も解怠、丹下松兵衛イザお來やれ」と、竹刀しなへ取寄て、庭に下り立つ一盃機嫌、袴の股立襷がけ、ヤア〱トウトウ互の勝負、普傳も悦び勵みのかけ聲、暫く時をぞ移しけり。絆なき身の氣散じは、野山越、何國泊と定めなく、人目飾らぬ麻羽織、綱代に紋も藍剝けて、刀を纏し宇治兵部の助、門外近く立ち止り、兵部「竹刀の音居合のかけ聲、誠に是は石堂家の屋敷、主君は幼稚と聞きつるが、後宮の操正しく、武備怠らぬは、ハアゝ奇特々々。我武者修行の志も、斯樣の家に因んでこそ。由縁なき身の殘念」と、好める道を過ぎがてに、暫し佇む其折から、臺七は姫君の、戻

牛の角、細工物で間に合はそ。ハヽヽヽ」と高笑ひ。奥は祝儀の獻々も、目出度納まる千秋樂、上使の顔も淡紅、立出づる赤橋將監、後に續いて寄波御前、志賀臺七楠原普傳、其外家中の諸侍、敬ひ傅く廣間上、將監も會釋して、將監「御念の入りし御馳走滿足の至、彌綸旨の改は、鎌倉にて御沙汰有るべし。家督の祝儀首尾能く濟み、後室の悦び察し申す。何れも心を一つにして、小次郎殿を守立て召され」と、厚き詞に皆々平伏し、「御前宜しくお執成、遠路の所御苦勞」と、武家の行儀の嚴に、上使は旅館へ立歸る。後室御機嫌麗しく、寄波「何れも此程の心遣、鎌倉の御請も首尾能く濟み、嘸かしの悦び、自が嬉しさ推量しや。コレ小太郎、今日からは石堂家の主、おとなしうせにやならぬぞや。皆の者へも挨拶しや」と、仰に從ひ、小太郎「普傳臺七皆大儀、母上樣有難うござります。コレ臺七、姉上樣は岩手の社へ御參詣、坊が好の伊達助もお供ぢや。歸つたらば追付侍にしてやると云つてくれ。普傳も目を懸けてやれ」と、舌も廻はらぬ一聲も、育隱れぬ雛鶴の、素性露れ愛らしき。寄波「アレ聞きやつたか、ホンニ胤は爭はれぬ、今の詞は先殿樣に其儘ぢや」と、嬉し涙も亡き夫を、思ひ出したる其風情、當座の挨拶志賀臺七、臺七「イヤモ仰の通り、大人も及ばぬ御發明、石堂の家は萬々年。又今日は千束姫にも岩手の明神へ御參詣、イヤ追付御下向でござりませう。ガ、マ後室には先御入。扨今晩はわつさ

「御縁あらば」と右左、締め直したる武者草鞋、別れてこそは 三重 行く空の。

第　三

六尺の孤を託すべし、大節に臨んで奪はざるは、君子の人なりといへり。石堂大領の後室寄波御前、過ぎにし夫の遺言を、守りも堅き岩手の館、鎌倉よりの上使を請け、若殿家督の御祝儀とて、三寶土器熨斗昆布、上下賑ふ計なり。浮氣盛の腰元共、一つ所に寄擧り、歌木「コレ早苗殿、此間から鳴騒だ御上使の御入、九獻も御膳も首尾よう濟み、追付けお立に間も有るまい。嬉しや明日から隙になろ」早苗「何云やる歌木殿、又是からが御一家方、御振舞のお能のと、大體忙しい事ぢやない。妾らは今年で丁度五つ、宿下の未進が殿様へお貸に成つた。盆にはきつと取立てて、芝居も見やうし、よい男の見飽しよ。ソレハさうと、御草履取の伊達助殿、殿様と云つてもよい品な色男、千束樣のきつい御贔屓。妾らもちつとおすべりでも戴きたいと思ひ、文迄書いても持殺、どうでこちとへお鉢は廻らぬ、いつそアノ、しつ深な臺七様へ遣つて見よ」歌木「おかんせ〳〵、あの臺七の憎體顔、臭い者の身知らずと、お姫様を附けつ廻しつ、色取りかけるが可笑しい。あの様な男に思はりよより、能い男持つ迄の心ゆかし、ソレ譬の通り、馬持つ迄は

山城の浪人兵部「ホヽヽ其甲乙を試し見ん」「サア〳〵さあ」と躙り寄り、修行手練の手利と手利、打合せたる刃先と刃先、陽に開けば陰に閉ぢ、進み退く虚々實々、千變萬化手を碎き、祕術を盡して切結ぶ。早月代も山の端に、白むや夫と橘の、片枝を目がけ切込む切先、シヤならぬはと我身を楯、押圍へば飛退つて、河内の浪人「ヤア心得ぬ汝が振舞、鎬を削り一命に代へ、此橘の枝を圍ふ貴殿の心底合點行かず。察する所是則ち、南朝の忠臣楠廷尉橘の正成の子孫なるか。先帝の御德全く再び榮ふ橘の、開くる御運と、表事によそふ花橘の香と共に、惜む心の香も深し」と、見透す計其一言、只者ならず見えにけり。横手を打つて、山城の浪人兵部「したり〳〵。太刀筋と云ひ推察と云ひ、天晴此身の片枝と、成るべき器量、ホヽヽヤ頼もし〳〵。互に夫と姓名を、口外せんも壁に耳」山城の浪人兵部「名乘る我名は山城の浪人」河内の浪人「面白し〳〵、我名とても河内の浪人。シテ在名は」山城の浪人兵部「山城の井出」河内の浪人「我は河内の八尾の邊」互の胸はアレかうと、砂掻平し指を筆、早月影も淸らかに、打明したる密意の神文、互に認め、河内の浪人「イザ血判」堅誓の砂起請、跡打消して、山城の浪人兵部「何御浪人、堅の神文見替す上は、神文はコレ此胸中」河内の浪人「ホヽヽ我とても誓の上、書いた物には心は留めず、白地の砂の胸の神文、委細は後の、面會を待つ」「しからば此場は別れ〳〵。アヽ井出の里の御浪人」「八尾の里の御浪人」

ば、よい氣味な事では有るまいかい」山城の浪人兵部「何として〳〵、勝つなぞとは思ひも寄らぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つまいともいはれぬて」山城の浪人兵部「サ、ソリヤ叶はぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つ」山城の浪人兵部「叶はぬ事ぢや」河内の浪人「勝つて見せう」山城の浪人兵部「叶はぬ」河内の浪人「イヤおれが勝つて見せう」山城の浪人兵部「アヽコレ〳〵、コレヤ咄ぢや」河内の浪人「ヤ、ヤサ咄ぢや。ヤほんに咄ぢや、あんまり咄に實が入つて、思はぬ高聲。ハヽヽ、ハヽヽ南無三、今の咄に思はず知らず、あんまり力んで煙管を焚火の中へ打込んでのけた。シカシ咄も斯う身に入れば面白いて。ガ又、其叶はぬと云ふ咄の發句は如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サ、俗人も云ふ通り、中の惡い物をさして、火と水の中といふ様なもの。イヤ南朝ぢやの吉野方ぢやのと、いしこさうに口には言へど、見る影もない吉野内裏と、田舎者迄が見こなして、新田楠の良將でも、持餘したる北朝の勢、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「なんと」山城の浪人兵部「イヤサ、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「ナニガ何と」山城の浪人兵部「ヤ、貴様は咄を聞くと、びこ〳〵とするが、貴様は何と思召すぞ」と、向へ廻る喧嘩の小口。河内の浪人「ヤアスリヤ御自分は足利贔屓、京方へ付く御浪人な」山城の浪人兵部「ハテ異な事を御念、若し京方へ付けば何とするや」「シヤ小癪な」と互の氣相、篝の炎燃立つ敵々、雙方顔に火花と火花、山城の浪人「サア此上は互の曠業、一立合勝負して」

山城の浪人兵部「イヤ、手前事は山城の出生」河内の浪人「ナニ山城」山城の浪人兵部「いかにも」河内の浪人「ハテナ、そんなら我等迚も同國同然、河内産で罷在るてさ」山城の浪人兵部「ム、何、河内の出生の御浪人とな」河内の浪人「いかにも」山城の浪人兵部「ハテナ、ヤモ境は隔つというた迄で、壁一重隣る山城河内、ア、不思議な縁」と、ゆふしでの、神の廣前出合も神慮、あたる焚火も冬めきて、世は道連の値遇の縁、」河内の浪人「コレ見給へ、忝い火德の用の、清光の月夜にひとしく、マア有難い陽德の妙用、御浪人左樣ではござるまいかい」山城の浪人兵部「ム、、河内の御浪人は扨々きつい陽氣を崇敬なさるが、ソレ此陽氣の明かな德と申すも、コレ此青葉といふ陰氣の體を、捉まへた焚物と云ふがなうては、陽の火德も徒になる」河内の浪人「スリヤコレ、陽德計が有難いでもござるまいか、ム、扨は山城の御浪人には、陰德が御信仰と仰るのか」山城の浪人兵部「ハテまあそんな物かいな。アして又、陽德が御信仰と仰るのか」河内の浪人「ハテまあそんな物かいな。アして又、陽德が御信仰と仰る心は、如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サレバサ、今戰國の其中に、南朝と位を爭ひ、年號迄を別々に、穩かならぬ世の有樣も、實はといへば、陽德の南朝が、陰德の北朝に勝たうとなさるから起る事、ぢやがコリヤ叶はぬ事ぢやて」河内の浪人「ヤ、貴公はお若いに似合はぬ咄に味が有つて、こいつはよつぽど面白いわい。ガ若又南朝方に、よい軍師でも出來て、北朝に勝ちたら

の一人と、定切つたる丈夫の魂、夏の夜ながら夜は深き、又寐の夢と笠引寄せ、見やる向ふへうそ〳〵と、闇はあやなし夫ぞとも、花橘の木の下へ、窺ひ寄つたる旅出立、怪しと見やり引添ひて、ためらひ居るともしらぬ火の、御燈も消えて眞の闇、傍り見廻し手頃の枝、折るよと計地を掘穿ち、口にくはへし生首を、そつと埋めて心の印、建てて腰より矢立を出し、筆の立度も星明り、河内の浪人「奥州白坂の町はづれ明神の森、一國一ヶ所の首塚」と、印にとめて過ぎ行く後、山城の浪人兵部「お待ちやれ旅人、イヤサ、待てと云はゞマア待て。一國一ヶ所の首塚と、今の詞に我を忘れ、卒忽に呼止めしは、ハテお互に武者修行の、心は一つ水と水、お頼もしう存じ、お近附にもとお止め申した。一河の流他生の縁、御隔心なく、イザ是へ」と、云ふも答も暗紛れ、聲をしるべに、河内の浪人「是は〳〵、ナニ貴公にも武者修行とな、武術御執心の程感じ入りまする」山城の浪人兵部「イヤ是は〳〵御挨拶、サアまあ是へ」と膝と膝、打くつろいで摺火打ち、煙草の煙底意なく、山城の浪人兵部「扨先お近付には成りたれど、未の六日の月代も遅く、モ是ではお互に面體見知らず、アヽどうがな」と立寄り、青葉の枝を切りくべて、用意の火繩炎々と、梢音なふ風につれ、燃え立つ衛士が篝火に、互に見合す顔と顔、山城の浪人兵部「ヲヽコレ〳〵、是でこそ眞の近付」河内の浪人「ムヽ、ヤ貴公も未お年若、シテ御出所はいづく何方でござりますぞ」

如何なる御方や」と、問へど答も口なしの、山吹の旗手に取添へ、神靈「ホヽ、いしくも尋問ふものかな。我こそは建武の亂に湊川の泡と消し、楠廷尉橘の正成が靈魂。汝が兄佐々目の兼房、吉野賀名生の皇居に於て淸忠に怪しめられ、罪なうして刑に逢ひし、彼が修羅の怒も休め、我鬱憤も晴さん爲、今又汝が胎中の、一子の胛肉に分入つて、南朝を助け奉り、功ならずとも一度は、足利と一戰なし、再來の忠を盡すべし。一子出生の後人とならば、宇治兵部の助と名乘るべきぞ。必ず疑ふ事なかれ」と、旗一流與ふと見ゆれば、遠寺の鐘に跡方も、さむるや夢の　三

幾世經し、荒れにし鄙の宮造、神寂渡る御燈の影、世を雲水の定なく、法の旅とは裏表、八重の汐路や峨々たる山、岩をも砕く武者草鞋、打違へたる一舍り、松吹く風も身に添ひて、拜殿の廣縁に、ふつと眼覺し四邊を詠め、山城の浪人兵部「ム、夢で有つたか。ア思へば希代の夢、我前生を眼のあたり、夫と知つたる夢中の示現。伯父兼房は楠の家臣。夫とも知らず此年月、筋なき土民の子なりと思ひ、井手の里の素町人と、埋れ果ん悲しさの儘、武術を勵む切瑳琢磨、胸に孫呉が骨髓を借り、三年に餘る武者修行も、今陸奥の果に至り、今宵はからず此宮居に、一夜を宿る夢の告、我先生を目前の奇瑞、今南北二朝戰國の中、何れを夫と心も定めず、漂ふ船のよるべを待ち、待ちおほせたる今日只今、ハア忝や嬉しや」と思ひ凝たる一心不亂、南朝無二

ざふと御簾巻上げ、主上は御聲爽に、主上「忠勤無二の正成、何條さる事有るべきぞ。只此上は湊川に立越え、不日に吉事を奏せよ」と、花も實も有る桃柳、色をも香をも知る人ぞ知る勅諚に、ハヽヽヽはつと有難涙。「ソレ咎人を引立てよ」と、歪む冠のこじかける。殿上二人の佞人に、庭上二人の忠義と忠義、命を的の湊川、空しく討死し給ひし、名は末代に有明の、月と見る迄三吉野の、花の御殿や春の風、袂に薫る橘の氏の榮えぞ　三重

第　二

丑みつの空物凄き夜嵐に、篠を突くなる雨の脚、空に枝折の電、閃き渡り更渡る、葎の宿の屋根の上、ずつくと立ちし立姿、丈の髢も烏羽玉の、闇に迷ふや立行の、淨衣の袖に鈴の音も、澄渡りたる聲震し、女「百日滿ずる我大願、感應あやまり給ふな」と、一念凝たる女心、思ひの念數摺立て〳〵、祈の聲も風に連れ、物凄まじき折からに、雲間を分けて其形相、一目に夫と白糸縅、弓手に立ちし旗の紋、是にぞ井手の山吹流し、さも欣然たる聲正しく、神霊「善哉汝、赤心を抽んで天に誓ひて願ふ所、滿ずる今宵感應有て、汝が胎中の一子に、我魂を合體なし、南朝を助け奉る」と、詞の下にハツトひれ伏し、女「コハ有難き御仰、斯く天勅を示し給ふ、君は

くといへども、宰相清忠なんど、我を嫉みて讒言まち〳〵、計略もはかぐ〳〵しからず。迚も微運の正成、大功なす事思も寄らず。今度攝州湊川の合戰、討死と覺悟極めし上なれば、兎に角其方は生殘り、我亡後を弔へかし。今も今とて宰相のさかしら、町人體の汝、見咎められては、其方計か我迚も爲よからじ。早く出でよ」と振切る袖、隔つ思ひは千里の外、勝利を計る大將も、流石主從恩愛の、泪の大敵防ぎ兼ね、歎に時も移りけり。折から宰相左少辨、其外公卿ばら〳〵ばらとおつ取巻き、清忠「ヤア正成の二股武士、御殿間近く怪しき男と囁き頷く、汝は慥に北朝の廻し者、楠と一味して、吉野を亡す計略に極つた。腕を廻せ」とねめ付くれば、判官正成取敢へず、正成「イヤ全く胡亂の者ならず、此者は某が家來」左少辨「ヤアヤ其家來が何故丸腰、楠家には町人の家來があるか。サア何と」と、罵る隆貫、清忠目早く、清忠「汝はどうやら見た顏付、先年天王寺の戰に、逐電せし兼房ならずや。彌以て心得ず。コレ使の廳の官人共、彼奴に繩かけ打はなせ」畏つたと下知につれ、捕た〳〵と打かくる。兼房も一期の瀬戸、無雙廻し膝車、柔術體術、祕術を盡す無刀のあしらひ。正成聲かけ、正成「ヤレ官人に過すな。穢有つては彌重罪、禁廷なるぞ」と主人の詞。はつと弛へ付入る捕手、折重り〳〵、壓へて繩をぞ懸けにける。清忠「ソレ正成も同罪、叶はぬ所、繩かゝれ」と、宰相隆貫、いらつて下知する聲の下、勅諚

堂上深く入り給ふ。後見送りて判官正成、正成「今に始めぬ宰相といひ降貫の放逸。ヤヨ恩地、若氣とは云ひながら、愼むが則ち忠義。汝は早く館に歸り、明朝湊川へ出陣の布れ流せ。和田の源秀、志貴源八、手筈は兼て談じ置く、早く〳〵」と主命に、座を立花の正成が、譜代の恩地左近の櫻、後に見なして出でて行く。正成も奥御殿へ、入らんとし給ふ大紋の、袖をしつかと町人の、麻上下もしほたれて、用有げにぞさし俯く、顔は正しく、正成「ヤア其方は佐々目の兼房」兼房「ハヽヽ、先以て御安泰の尊顔拜し奉る兼房が悦び、御賢察下さるべし。幼少より御傍に有し詮もなく、さいつ頃天王寺の戰に手筈を違へし我誤、切腹と覺悟極めし所、命ながらへ時節を待てと、君の諚意におめ〳〵と、浪々の今の此態、何卒歸參の御願ひと、御館の御門迄、行通うたは幾度か。誤ある身の悲しさは、御門の敷居は目よりも高く、流浪の有樣、古傍輩の手前を恥ぢ、すご〳〵と歸る計。幸かな今日の鷄合、諸人拜見の群集に紛れ入込み、久々にて尊顔を拜せんと、待に待つたる今日の優曇花、三千年に成るてふ桃の彌生の壽、花咲かぬ身を不便とも思召されて今一度、御勘氣御免の御詞、殊に御不便懸られし妹が懐胎、彼是思し廻らされ、御宥免の御一言御訴訟願ひ奉る」と、思ひ込んで泣き居たる。正成も心根を不便とは思せども、私ならぬ官軍の掟、假初にも赦されず、やゝ打潤み給ひしが、正成「ヤア如何に兼房、軍慮に心を碎

楠でも樫の木でも、とちめんぼうを振らぬが肝要、笑止々々」とあざ笑ふ。こたへ兼て恩地左近、憚もなくずつと出で、左近「我々が主人を嘲哢の一言聞いて居られぬ。十に八つは北朝の勝鬪とは何の癡言。目に餘る寄手の大軍、何の苦もなくぼつ散した、千早赤坂金剛山、釣塀から藁人形の計略も、神仙はいざ知らず、世の常の人間の胸からは出來ぬ事、御自分樣の冠、頭打割つて、四五百年案じてもあくびより外出る事でない。似合うた樣に鞠でも蹴つぶし、腹のへる御工夫なされ」と、ずつけり云出す主思ひ、左少辨「ヤア公家に向つて尾籠の一言、退り居らう」左近「イヤ退るまい。身が主人の謀、淸忠殿といひ合せ、又しては茶々入れる北朝贔屓、埃溜へ鳳凰が下りた樣な、萬里の小路藤房卿は、あはう烏の付合が厭さに、高飛をなされたわい」「ヤア重々の過言、彼引立よ」と淸忠隆貫、こなたも反打つ血氣の若者、正成中を立隔て、正成「ヤア推參なり恩地左近、高官に對し無禮の振舞、庭上なるぞ」と押鎭め、正成「イヤ何兩卿、某追打の宣旨を蒙れば、軍の事はお任せあれ。勝つも負くるも時の運、君の御爲國家の爲、何條疎略有るべきぞ。武の道は武士ぞ知る、公事有職は殿上人、今日の節會の鷄合も、早事終れば是よりは、御溝の流に曲水の、宴を設けて詩歌管絃、君の御心慰むる、是ぞ貴卿の職ならずや、早とく〳〵」と良將の、詞は優々管絃の、調につれて入御なれば、淸忠隆貫佛頂顔、恩地も尻目にかけ橋や、

鳥は藥喰、榧柏に合すは獻立の、平野の禰宜が祕藏鳥、迯れば跡を追鳥の、一羽ならず二羽三羽、何羽も蹴るは鞠の家、興を催す飛鳥井の、お家の裝束大臣家、爰を先途と鎧毛の、大縅の大鳥泥脛は、衞門の志と知られたり。しやむは住吉三位の飼鳥、中將のとう丸に、栗毛の鳥は右馬の頭、身の上白きは陰陽師、黑きは四位殿赤きは五位の、はふ〳〵迯るを追懸け追詰め、東天紅羽打つ羽叩き勝時は、目覺しかりける御遊なり。鬪鷄終る頃しもや、楠判官正成參上と披露して、優美の袂たぶやかに、智勇兼備と菊水の、流に隨ふ家の長、恩地左近召具して、御階のもとに拜伏し、今日の天氣を伺はる。淸忠卿遙に見下し。淸忠「ヤア判官正成、今日の節會に遲參は如何に、今迄何してお居やつた。御不審の勅諚も有つたれど、某よきに奏問遂げた。雛酒でも呑過し、晝寢でもおしやつたか」と、藪から突出す坊門宰相。正成猶も色を正し、正成「今南朝と立別れ、鎬を削る戰國の街、苟も勅命を蒙り、南朝諸軍の采配たれば、晝夜軍慮の工夫を運し、諸陣の手配出張の進退、其上今日注進有つて、敵兵攝州湊川迄押寄する條捨置き難く、兵粮運送彼是と、心に任せず只今の參內、恐れながら貴卿の執達、天聽宜敷希ひ奉る」と、悲謙辭讓の詞を打消す左少辨、左少辨「ヤア口利根にやつたりな、晝夜軍略に隙なしとは何事、此程續く味方の敗北、十に八つは北朝の勝鬪、負ける樣の軍術なら、工夫も絲瓜もいらぬ〳〵。

姉は宮ぎの
妹はしのぶ

碁太平記白石噺

誰か知る盤中の飧、粒々皆辛苦すと農を憫む言の葉も、仁に止る君と民、君、君たれば神國の、さればあやしの賤の女も、孝を守り義を知りて、婦人脱兎の勇力は、石に立つ矢の虎と見つ、龍の勢ひ南北朝、頃は建武の春の山、吉野の内裏時めけり。けふは彌生の三日の空、上巳の節會桃柳、色香爭ふ鷄合、南殿の御簾巻上げさせ、龍顔殊に麗しく、玉座の左は坊門の宰相淸忠卿、邪佞の冠巾子高く、右座も同じ我慢の相、智慧は纔に左少辨隆貫、其外月卿居流れて、今日の節會を拜賀有る。階下は町人商人の、大人子供も打群れて、入來る日の門、日華門、拜見門共いひつべき。制する北面めん〳〵に、抱へた鳥の檢非違使が、禿た天窓にたらたらと、汗の玉敷鷄合、爪も立たざる賑はしさ。まづ一番に白矮鷄の、地すりは地下と御垣守、衞士が自慢の籠の中、夜は燃え立つ鷄冠の色、横ひらつゝと左折は、烏帽子屋の黑裝束、互に目と目を狙ひ寄り、その糸毛の車毛、牛飼舍人も涎を流し、勝負付かねば和氣丹波、御醫者の

傾城阿波の鳴門 終

爲、いかにも國次の刀は盜み置いた、戻して仕まへば事は濟む。是より外云聞かす事はない、刀を持つて早歸れ」主膳「イヽヤ刀の事より大それた貴殿の工、大祿を戴きながら、何恨あつて殿を調伏」郡兵「默れ主膳、其方にこそ遺恨有れ、殿に恨は毛頭なし、さいふ汝が證據ばし」主膳「ホヽ其證人は是に有り」と、海藏院に繩をかけ、引立出る伊左衞門、もう百年めと郡兵衞が切込む刀、身を交して、腕首摑み、主膳「重々の極惡人、それ繩打て」と櫻井が、引搔いで頭顚倒、起上る間も十郎兵衞が、押へてかくる縛は、心地よくこそ見えにける。主膳「ヲヽ出來したく。盜み取られし國次の刀諸共、二人の囚人成敗は、殿のお差圖、伊左衞門儀は此度の御婚禮、お目出度の祝儀として、町人ながらも御扶持頂戴、それを規模に以前の如く、藤屋の家を取立つる、家の女房は粋屋お辻、夕霧は妾分、相續怠る事なかれ」と、詞にはつと勇立ち、昔に歸る伊左衞門、紙子姿も引かへて、古鄕へ餝る錦の袂、變らぬ國の末繁昌、治まる道も戀の花、情の月は武藏野や、名にし高尾が傾城姿、今國入のお姬樣、道中賑ふ竹本の、盡せぬ御代こそ目出度けれ。

熨斗付けて、只いつまでもお前樣の女房、此十郎兵衞は兄ぢややら仲人やら、御用も有らば澤山にお遣ひなされて下さりませ」郡兵「すりや身共が女房となゝ、夫は重疊、望み叶ひし上からは、高尾が兄の十郎兵衞、我が爲に言はゞ小舅、親しき一家となるからは、小舅殿へ頼みの印」眞向碎けと欺し打ち、心得はつしと水手桶、十郎「コリヤお前何なされます、一家中は御心安う、斯樣にお氣を張しやますと、我等いかう迷惑千萬、平に納めて置かれい」と、拂へば付込む郡兵衞が尖き手の内屈せぬ十郎兵衞、ひらりと交す身の捻り、猶も付入る間もなく、庭の飛石擔き上げ、受ける白刃の轉業稻妻、目早く高尾が取上げる「刀は正しく國次」と、云はせも果てず郡兵衞が、「夫見付けたら生けては置かぬ」と、又切る刀かい潜つて確乎と取り、十郎「殿の重寶見出さう爲捕へられた十郎兵衞、高尾樣と云ひ合せ兄弟と言うたも嘘、誠は先殿監物樣の御胤」と、聞いて驚く計りなり。一間の内より櫻井主膳、主膳「土手助、刀」「はつ」と答へて奥庭より、出る奴も詮議の種、主膳「適出かした十郎兵衞、一つの功の立たる上は、以前に替らぬ主從ぞ」と詞にはつと飛退り、悦び敬ふ計りなり。主膳「サア郡兵衞殿、最早遁れぬ貴殿のたくみ、包まずも明されよ」と、工みの裏道掘返され、叶はぬ所と性根を据ゑ、郡兵「ム、扨は土手助めも、主膳が家來で有つたよな。顯はれし上からは隱すに及ばぬ、出頭の其方を、科に取つて落さん

と、残んの雪も身につもり、思ひ重る託泣、みす〳〵刀を盗みながら、科なき者を罪に沈め、其身ばかりが立つものか、物の報いはたつた今、思ひ知らさで置かうか」と恨の涙はら〳〵〳〵、花は散々泉水の、流れにふつと心付き、高尾「ヲヽさうぢや、相圖に流す櫻花、己と獨り流るゝは神佛のお力」と、悦び勇む折からに、花を相圖に十郎兵衞、首尾は如何にと前栽の、繁みをそつと差覗き、見て恟くりの縛り繩、高尾「十郎兵衞か」十郎「高尾樣、この繩目は何故」と、解けどとけぬ涙聲、高尾「何故とは郡兵衞が戀を叶へぬ見せしめと、締搦まれて身は叶はず、今まで泣いて居たわいの」十郎「ヲヽ御尤々々、譬へ如何樣に思し召しても女儀のお手ではいかな〳〵。此上は私がお前樣を取持顏で欺すに手なし、仕損ぜぬ私次第になされませ」と、伴ひ入らんとする後、「ぞつこいやらぬ」と奴の土手助、土手助「お旦那を欺さんとて、妹でもないやつを兄弟とは心得ぬ、此旨主人に申上ぐる、待つてをれよ」と駈け出すを、何の苦もなく引摑み、傍なる井戸へ眞逆樣、「サア是で氣づかひ内證の、入譯知らねばサアお出で」と、開く障子の内には郡兵衞、郡兵「ヤイ十郎兵衞、縛り置いた其女誰が赦して汝解いた」十郎「いや深い樣子は存じませぬ、私が解たはあなたのお望、此妹を上げませうと、思うてそれで解たのでござります」郡兵「ム、すりや其方が得心させたか」十郎「成程々々、得心の上に

郡兵衞樣、わたしが事はふつゝりと、思ひ切つて下さりませ、其代には今爰で尼法師と姿を變へ一生殿御に肌觸ぬがおまへの詞を立つる道理、夫でわたしは此刀」と、又取かゝるを引き離し、郡兵「さうぬかしやふつゝり思ひ切る、其替り、十郎兵衞は云ふに及ばず、儕も共に目に物見せん。ヤァ〱土手助、此女を裏の樹木に猿繫、又此二腰は主膳が大小、詮義濟む迄汝に預くる。高尾を早く引立い」「畏つた」と荒氣なく、小腕取つて奥へ行く。かゝる折節海藏院切戸間近く入來り、海藏院「彼のお賴みの一大事、殿を調伏の御祈禱も七日に滿ずる今宵なれば、お賴み申した祈禱料唯今どうぞ」と、皆迄云はさず、郡兵「ヤレ音高し人や聞く、何かの禮は跡より通達、折惡しければ先づ歸りやれ」「然らばお暇、必ずお禮を手取早う」チ、サ合點も眼で知らし、點頭き呟く衣の袖、人を助くる體もなく巧は百八煩惱の、數珠の數々繰り返し別れてこそは歸りける。奥庭は、唉亂れたる櫻花、詠めにあかぬ泉水の、水は澄ども濁り江の、高尾は無殘や櫻木に締搦まれし縛り繩、今ぞ生死の境かと、涙の顔を振上げて、高尾「斯言ふ事とは露知らず、嘸十郎兵衞が待つて居やらう。どうぞ此事ついちよつと知らせん事も情なや、此身は櫻に搦られ刀の有家も得知らず、元より主膳の擒れを助る事も心に任せぬ、それも何故此繩目、エヽ誰ぞ解いてくれぬかい。エヽどうぞ切れぬか解けぬか」と、身を揉あせる氣はそゞろ、心も空に散々

惚れたがよい手懸、心得がたきは彼奴が大小、戀を叶へるお顔にて油斷の隙間に御覽なされ、拵は違ふ共もし國次に極らば、中心は則亂れ燒、鈕は金にて庭草に飛交ふ蝶の彫物あり、實正夫に極らば透を窺ひ手筈を遊ばせ、私は其間奴部屋に身を隱し善惡二つを待つてをります」高尾「ヲヽ成程々々、肌は觸ねど郡兵衞に假の戀路も刀の役目、取返さば主膳も安堵、そなたに知らす心の緣起、花は櫻木人は武士と、中に勝れし名に寄せて、知らす相圖も奥庭に、今を盛りの櫻花、此水筋へ流すべし、其時必ず合點か」「ハァ心得ました」と立上り、水筋清き我身をも、暫しは隱れ陸奥の、忍びてこそは別れ行く。早約束の兼てより、戀るゝ君がよしあしの、返事いかゞと郡兵衞が、出づるも知らず此方には、たゞとつ置いつの思案より、外は何にも夢現、郡兵「ても味い後付、見れば見る程堪られぬ、返事はどうぢや」と云ふ聲に、思はず悑り立退く所、「おつと遁しは仕らぬ、最前いうた約束の、かねは聞いたが返事が聞かぬ、一人爰に居るからは十郎兵衞が得心させ、大方抱かれて寐る氣ぢやあろ、エヽ忝い。サアおぢや寐よう」と我一人、せり立らるゝ身のつらさ、何と答へん方もなき、色に心の一大事、探して見んと慕ひ寄る、高尾を膝に抱き上げ、郡兵「斯した所は正眞の天女を抱いたも同じ事、どうもならぬ」と抱付いて、現に成つたる郡兵衞が刀をそつと、郡兵「コリャ何する。エヽイヤサ刀を捉へて何とする」高尾「何ととは

が身で儘ならぬ、もう此上は兄様次第、ハテどうなりと」と跡云ひさし、わき見する程猶ぞつと、郡兵「ムヽよい〳〵、さういや此方も思案を替へ、得心づくで抱いて寢る、仕樣は斯ぢや」と十郎兵衞が、縛しめほどき、郡兵「コリヤ高尾、噓か誠か知らねども、今の詞に取付いて、暫は緩める兄が成敗、嬉しいと思やるなら十郎兵衞に返事仕や。ヤイ十郎兵衞、現在其方は科人なれど、戀は曲者惚ぬいた高尾が兄、主膳が難儀を身に引受け、そちが替に成りたくば、高尾を口說て抱かして寢させ、此役目仕果せる迄汝體は汝に預ける、繩の解しを幸ひに迯隱れても逃しはせぬ、千里の野邊も獄屋の內、高尾も兄が助けたくば暮合限りに返事せい、兩人共に郡兵衞が暫の用捨は惚れたが因果、とつくりと思案して色よい返事を待つて居る。聞入れぬ其時は兄も妹も嬲り殺し、生死二つは一つの返事奧で待つぞ」と郡兵衞は色故にふる雨夜の空、見分兼たる胸の內、心殘して入りにける。とつくと見すまし小聲になり、十郎「申し高尾樣、刀詮議の爲ぢやとて、現在お主の御息女樣、御家來の郡兵衞に樣付けなさるゝのみならず、中間風情の妹と、怪我にも申すも勿體ない、御赦されて下さりませ」高尾「ヲヽあの言やる事わいの、今日そなたの入込みを待つて居たも今の始末、そんな事氣にかけずと、兎角大事は刀の有所、どうぞして今宵の內に」十郎「サア、拙者も左樣存ずるから、何卒少しの手懸をと思ふに幸ひ郡兵衞が、あなたに

きた、結ぶの神の引合せ」と、しづ〳〵立つて庭に下り、郡兵「ヤイ十郎兵衞、今朝程も尋ぬる通り、何科有つて身が家來佐渡平は手にかけた。其上山口定九郎まで、殺したも儕が業、其譯ぬかせ、何と〳〵」十郎「これは又しつこいお尋ね、主膳樣を待伏して、殺さんとせし佐渡平兩人、ぶち放したは主君の爲」郡兵「ハチ結構な御主人に、忠義を盡す家來も主も盜人」十郎「イヤ申し郡兵衞樣、拙者は主人に勘當受け、粮に盡きたる盜人衒、我名は汚せど御主人には、何を以て盜賊呼はり」郡兵「チヽ櫻井主膳は刀の盜賊、早先達て此家に押籠め、汝も大方同類ならん、白狀ひろげ」と刀の鐺、繩目に指込み、「サア何と」何と何との問狀に、かゝりつながる高尾が思ひ、郡兵「サア苦しくば白狀せい。コレサ高尾、此責が目に見えぬか、サア儕も苦痛が助りたくば、尋ぬる事を早く撒出せ。コレ若俯いて計り居ずとも、兄が態をよく見給へ、戀の返事と白狀を、聞かぬ内はいつ迄も、責道具の品をかへ、水責火責鎹責、術なか早く返答せい」と、怨と情を一筋の繩も喰ひ入る身の苦しみ、見るに堪へ兼ね聲を上げ、「お前も武士の身ぢやないか、情といふ字を書いてなら、少しは哀も知るぞかし、あんまり難面胴慾」と、泣きこがるれば、郡兵「無情とはそもじの事、おれが心に隨へば現在の小舅、責は扨置き科も見遁す、何と憎うは有るまいが」高尾「サイナ、夫程迄にわたしが事、思うて下さるお志無下にするではなけれ共、私

郡兵衛殿のお心任せ」郡兵「ヲヽよい覺悟、ソレ侍中、主膳を奥へ引立て」と、下知に隨ひばら〳〵と、取捲く家來の先に立つさやけき空の月影も暫しは曇る胸の闇、是非もなく〳〵立て行く。跡見送つて郡兵衛が開くる此方の一間には、高尾を假の座敷牢、戀とはしるき絹の香の姿は花も及びなさ、郡兵「コレサ君、なぜ浮々とし給はぬ、我等そもじに執心から土手助に申付け、漸々此比連歸り、押籠置くは人目を遠慮、能い返事さへし給はゞ誰憚ず直に奥樣、望を叶へ抱かれて寢るか」高尾「イヽエどの樣に仰やつても、何の益なき此身の上、尼ともなして給はらば生々世々の御慈悲」と、手を合すれば、郡兵「ソリヤならぬ戀なればこそ此樣に、人の目顔を忍びの一間、打明れば其通り、たつて厭といふが否や、憂目を見するが、サ夫でも厭か」高尾「譬憂目にあふ迚も是計りは赦して給べ、かう言ふが憎いと思さば、いつそ手にかけ一思ひ」郡兵「イヽヤ夫もならぬ、惚れた程又憎さも百倍、返事さす思案を見せう。ヤア〳〵土手助科人の銀十郎、早く是へ引出せ」と、聲に從ひ繩取に引立られて十郎兵衛、刀の詮議爰かしこ尋ぬる充も白浪の、科を身にしる憂き繩目、見合す十郎兵衛高尾が悔り、高尾「ヤアお前は兄樣、十郎兵衛樣、爰へは如何して其繩目」と、駈け寄る裾をしつかとおさへ、郡兵「ムヽ面白い、兄弟なれば猶以て、厭でも應でも抱いて寢る、よい橋渡が出來て

樣を、譬へて申さば大切な刀を鞘に納めた思案、先夫迄はおさらば」と、わつて云はねど刀の詮議。主膳は態聞かぬ顏、聞いた顏する小野田郡兵衞、郡兵「イヤごくにも立たぬ世迷言、ソレ引立て」と呼ばはれば、はつと答へて大勢に、引立てらるゝ十郎兵衞、心一つに國次の、詮議とさらに郡兵衞が、嵐に散らぬ櫻井が、胸の刃金は直燒刃、引別れてぞ。三重

第十

主膳「ヤア暫く待たれよ、いづれも刀の虚實改めもなく、持參したは某が誤りとは云ひながら、代々預かる殿の重寶、何望み有つて此刀隱し置かう樣もなし。察する所此盜賊はたしか外に」といはせも果てず、郡兵「ヤア其言譯暗い〳〵、殿の誕生三月三日、吉例の通りお屋敷にて餝る役目は貴殿と拙者、さるによつて今日内見の儀仰付けられ、立合の今と成り代々預かる其許が、盜まれたとばかりでは申譯立ちますまい、此通りを言上して殿の仰を聞く迄は、身動きさせぬ貴殿の身の上、只今より郡兵衞が預かる、まづ大小を渡し召され、違變ござらば某が踏付けて繩かけうか、何と〳〵」ときめ付ける。己が盜みし刀の詮議、非道ながらも差當る、言譯何と詮方も、無念を怺へ大小投出し、主膳「微塵聊か二心なき證據は、則ち家來十郎兵衞、召捕り渡せし我なれど

餘り御難儀と承り、聞捨ならぬも主人へ忠義、思ひ過した某が、繩かけたは重々誤り、縛めほどきお渡し申さん、ヤイ十郎兵衛、儕も命が助りたくば隨分手柄に切拔けい、勘當したれば遠慮はない。イザ郡兵衛殿受取り召れ」郡兵「ア、是さ〳〵、其繩解いてたまるものか、やはり其儘受取ませう」主膳「イヽヤさうは致さぬ貴殿の難儀を存ぜし故、以前の誼みも厭なく召捕つた某、何とやら其許を踏付けるとの御一言、尤至極に存ずるから、是非繩といてお渡し申するが、貴殿を立てる拙者が言譯、御覽なされ」と立寄つて、繩ときかくれば、郡兵「ア、是さ〳〵、それは畢竟時のはずみ、申し過しは手前の麁相其儘々々」主膳「イヤモ麁相と有れば言譯おりない、殊に當月は貴殿の役目お渡し申す此繩つき。ヤイ十郎兵衛今聞く通り郡兵衛殿のお役目なれば、隱す程爲にならぬ、何もかもとつくりと、ナ、ソレ、打明けて申上げたら叶はぬ迄も一命を、助かる筋が有るまいものでもサないと思へど、是とても此方に少しも構はぬ事、何と郡兵衛殿左樣ではござらぬか」郡兵「何の〳〵、譬どの樣にぬかしても助かると云ふ字は毛頭ござらぬ、狼藉ひろいだ其替り、拷問の仕樣はさま〴〵、覺悟ひろげ」と脅しても、びくとも思はぬ大丈夫、十郎「イヤ申し主膳樣、お久しぶりでお顏を拜し、其甲斐もない淺ましき此態にてお別れ申し、命の内に今一度、お目にかゝるは十郎兵衛が、胸にとつくと言譯の、工夫を致し、此縛めの解き

下知につれ取捲く大勢、屈せぬ十郎兵衛、十郎「よい所へ小野田郡兵衛望む相手ぢや、サアこい」と、立かゝらんず其氣色、どつこいやらぬと隔つる下部、シャ面倒いと取つては投付け摑んでは、ぐつと一しめひよろ〱〱、しどろになつて見えければ、いらつて打込む郡兵衛が目先へずつとさし付くる、家來がからだで受身の備へ、切りも得やらぬ刀の手前、詮方もなく見えたる所へ、斯くと聞くより櫻井主膳後ばせに駈付くれば、十郎兵衛見るより、「ハヽヽ、はつ」と寄らんとすれど此場の仕誼、思ひはかつて櫻井主膳、主膳「ヤア脩憎い奴、さしとめおいた此國へ立歸つたる其上に、郡兵衛殿に刃向ふは身の程知らぬうざい餓鬼、某が駈付しを跡先知らぬ汝が心に、主従の緣に寄り又もや助け貰はんと思ひ詰めた其眼色、イヤモ見遁す事は扨置いて三寸繩にくゝし上げ、屋敷へ引いて拷問する。覺悟せよ」とずつと寄り、腕首取つてぐつと捻上げ、「イヤ何郡兵衛殿斯く計ひし上からは、最早此奴に氣遣なし、先々刀をお納めなされ、十郎兵衛とは以前の事、今の呼名は銀十郎、櫻井主膳召取つた」と、口と心は裏表、かゝる繩目も御主人の、お情もやと十郎兵衛、いはぬ思ひぞせつなけれ。郡兵衛は當り眼、郡兵「サア此方から頼みもせぬに、我は顏に繩打たれしは、某を踏付けるのか、何と〱」と嵩かけて、底の無念を押隱し負けぬ顏して詰めかくれば、主膳「是は〱御尤、手前左樣の所へ氣も付かず、只御家來の手に

殿が有つては後日の難儀事やかましい、そこを存じて此密談成就せば立身出世、貴殿とても惡しからぬ、身の納りは此胸に仔細は斯の通りぞ」と、語ればほく〳〵打點頭き、海藏院「お氣遣なされますな、某が行力にて七日の内に落命さす、行法奇特は我が數珠先、お心安く思召せ」と、聞いてぞく〳〵小踊りし、郡兵「ホヽ頼母しよく〳〵當座の施物」と一包み渡せば取つて押戴き、「アお志の此施物、受納致す」と取納め、海藏院「心も急けばすぐ樣お暇」郡兵「ヲヽ一時も早く立歸り萬事の用意を、早く〳〵、必ず人に悟られぬ樣」海藏院「イヤ〳〵そつとも氣遣遊ばすな」と、人の難儀も身の欲に呑込む己が身の上と、知らぬが謠陰陽師、別れてこそは立歸る。折から家來が慌しく、家來「お尋ねの十郎兵衞向ふの茶見世で見受けましたが、此所へ參るは必定、いかゞ計らひ申さん」と、聞きもあらせず、郡兵「ヲヽよくも知らせた、暫くの間影隱しだまし寄つて召捕らん、此方へ來れ」と郡兵衞は、家來引連れ伺ひ居る。斯くとはいざや十郎兵衞、母の報知に隨ひて、此程よりも立歸る心當どは郡兵衞に、たよる衞のとつ置いつ、思案工夫の後より、「十郎兵衞やらぬ」と雙方から、取り付く家來を引捕へ、何の苦もなく右左踏付け〳〵仁王立、小野田郡兵衞聲をかけ、郡兵「ヤア十郎兵衞、江戶表より逐電して行方知れざる樣子を聞けば、今の名は五右衞門の銀十郎といふ盜賊なるよし、當地迄も聞及ぶ、お構の此國へ立歸つたは運の盡、ソレ遁すな」と

威を功に鼻たかく、跡に引添ひ海藏院、眞言祕密の行法も人に勝れし惡僧と、云はねど知れた人相見、家來諸共立休らひ、海藏院「イヤ申し郡兵衛樣、何やら私にお頼みの事有る故、此所へ參れと急のお使、シテ御用の筋は、いか樣の儀でござります」郡兵「アヽいやく〳〵さのみ氣遣ひな事ではおりない。イヤ何家來共、儕等は暫しの内社内にて待合せ、十郎兵衛を見付けなば、早速に相知らせ、油斷致すな、早行け」と、下部を遠ざけ小聲になり、郡兵「今日こなたを召寄せし仔細といつぱ、ちと密々に頼みたき旨有つて苦勞も厭はず此所へ、其段は御免々々、何と賴まれてくれられうや」海藏院「イヤモ樣子は何か存ぜねど、當所の御家老郡兵衛樣の仰しやる事、何しに違背仕らん。シテお頼みの密事はな」郡兵「アヽいや〳〵、樣子を語り違變有らば、郡兵衛が一事こなたの命にもかゝはる事、何に寄らず他言せぬといふ慥な心底見た上で」海藏院「ムヽ御尤、其心底お目にかけん」と、嗜み持し矢立より、筆押取つてさら〳〵と、紙に誓も卽座の血判、小指喰切り誓紙の表、「斯の通り」と差出せば、其儘とつて疾くと見、郡兵「ムヽ他言なき誓紙の文言、讀むに及ばぬ貴僧の胸中、見屆ける上は何をか包まん、密事といふは外でもなく、何卒こなたの行力にて、玉木衛門之助を調伏がして貰ひたい」海藏院「エヽ、あの御主人衛門之助殿を、調伏なさるゝお心は」郡兵「シイ聲が高い、成程驚きは理、某存ずる旨あれども、衛門之助

取捲とも、刀を我手に入れぬ内は、切つて切つて切拔る」と、娘の死骸引抱へ、泣入る女房を引立て〳〵、一間の内へ入りにける。程なく來る捕手の大勢、捕手「ヤア盜賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛、此所に隱れ住む由、武太六が訴人によつて召捕に向うたり、尋常に繩かゝれ」と聲々いへど音せぬは、捕手「風をくらうて逃げのびたか、家内殘らず打壞て、人數は半分裏道へ、廻れ〳〵」といふ下家、天井戶障子佛壇戶棚、粉もなく碎く壁下地、隙間も漏さぬ大勢の、捕手相手に十郎兵衛が、大亂髮に働くを、我組み止めんと追取卷き、差付ける松明の火花を散して挑みしが、十郎兵衛一人に切捲られ、皆蜘蛛の子の散り〴〵に、迯行く隙間に女房が、「此間にちやつと十郎兵衛殿」「ヲ、合點」と駈出しが、立ち止まつて、十郎「コリヤ女房、娘が死骸は何とした」お弓「そりや氣遣ひござんせぬ、コレ此通り」と死骸の上、落散る戶障子積重ね、松明の火を差付けて、人手に渡さぬ火葬の營、南無阿彌陀佛と合す手も、別れ、別れて　三重立出る。

第九

國民も豐鳴戶の阿波の國、德島鄕の町はづれ、弓矢神とてもてはやす、武士は取別け町人も、參詣群集をなしにけり。往來も多き其中に、先を拂はす小野田郡兵衛、國一ぱいに廣がりし、權

戻し、立身出世を草葉のかげより、くれ〴〵も待ちまゐらせ」十郎「スリヤあの郡兵衛めが所爲で、ヱヽ母人の御最期殘念至極」と云ひながら、有難きは刀の有所、是と申すも母の御恩、ハアヽ忝し嬉しやと、歎きの中の悦びを、聞いてお弓も顔を上げ、お弓「お袋樣の御最期、一日の介抱もせずに別るゝ不孝な嫁、せめて筐の其お文、わしにも讀ませて下さんせ」と、一通取つて涙ながら、「外に申す事はなく候へども、孤となりし孫が事、是のみ黄泉の障りに候、神佛の惠にて恙なう其許にもしも尋ね逢うたらば、隨分々々大事に育て給はるべく候、夫は〳〵器用者にて、物もよう書き琴も彈く、第一に縫物が手利にて、縮緬緞子の衣裳迄、手際よう仕立て候やう、敎へ置きまゐらせ、是計りは祖母が自慢に候まゝ、對面の後ぬはせて御覽なされ、夫婦ながら譽めてやつて給はるべく候」お弓「ヲヽばゝ樣の冥加ない。常々から蟲持にて、桑山がよう利き候故、たんと持たせて置候まゝ、もし蟲でも起つたならば、此子の年の數程、御呑ましなさるべく候、くどうも〳〵大切に育て賴上まゐらせべく。是程大事にばゝ樣の、育て上げて下さんしたもの、思へば〳〵胴欲な、惜や悲しやいぢらしや」と、又も正體なかりける。十郎「ヤアいつ迄言うても盡せぬ歎き、刀の有家知れる上は、彼地へ下り詮議せん」と、勇む折から表の方、俄に騒ぐ人聲足音、十郎兵衛きつと心付き、十郎「コリヤ〳〵女房、あの物音は必定捕手に違ひない、何百人

もや、年はもいかで遙々の、道を厭ず苦勞して、親を尋ねる孝行娘、親は夫には引きかへて、むごう難面う追返し、まだ其上に親の手で、殺すといふはアヽ何事ぞ、別れにいやつた順禮歌、父母の惠もふかき粉川寺、どこに是が惠が深い、こんなむごい親々が、廣い唐にも天竺にも、最一人と有る物か」と、死骸の顔に我顔を、押當て〳〵抱しめ、泣涕こがれ伏沈む。銀十郎も後悔の涙五臓をしぼりしが、いうて返らぬ事ながら、金の有る事得しらずば、かういふ事は有るまいもの、金が敵の死骸の懐、探して財布取出し、中改むれば金三兩、十郎「コリヤ是僅の金、いかい事も有るやうに、思違いがやつぱり因果」と、いひつゝ引出す財布の内、十郎「十郎兵衞殿 夫婦の衆へ、ムヽコレ、書いたは正しう母の筆」と、封押切つてよむ文體、「わざ〳〵認め送りら〳〵、國を立退かれし其日より、案じ暮すは互に親子の愛著にて、浮世の中の習なれば、くどう筆には記さず候、第一に申したきは日外申越れし國次の刀、郡兵衞に心を付けて密に手筋を求め詮義致し候處、則ち郡兵衞盜取り、所持致し候段、慥に聞出し候故、早速詮議と思ひ候へども、女子の身でなまなかの事を仕出し、却て妨に成つてはと差控へ、其元の有家を尋ね詮議させんと、孫のおつる諸共に旅の用意致し候内、遁れぬ無情の風に誘れ、力及ばず身まかり候故書殘し申候」十郎「ヤスリヤ母人は、お果なされたかいなア。ムヽ此一通屆き次第早々國へ立歸り、國次の刀を取

んで居る、どうして死んだどうして」と餘りの事に涙も出ず、立つたり居たり夫の傍、お弓「あの娘は、ドヽヽ、どうして死んだ、お前樣子知てぢや有らう、サアいうて聞かして〳〵」と、氣も取のぼす有樣を、見るに脾肉も離るゝ切なさ、十郎「ホヽ道理ぢや尤ぢや、樣子というたら因果づく、先きに内へ戻る道、其娘が銀を持つて居るを、非人共がよう知つて、取るのはぐのと聞いた故、可愛さうにと連れて戻り、樣子を聞けば銀も有る故、少々なりとも武太六に返す工面、二三日貸してくれと、譯をいへども子供の事、聲山立てて泣き喚く、近所の聞えが氣の毒さに、ついロをおさへたが、息が詰つて、ソレ其樣に死んで仕舞うた。エヽいぢらしい事したと、餘所の樣に思うたが、夫が娘で有つたとは、物の報いか因緣事、コリヤ、𢮦へて吳よ女房」と、聞く程身も世もあられぬ悲しさ、お弓「そんならお前が殺さしやんしたか、ハアても𢪸も是非もなや情なや」と、母は死骸を抱上げ、「コレ娘、是程酷い親々をよう尋ねて來てたもつたの、獨旅で泊人はなし、野に寢たり山に寢たり、怖い事や悲しい事も、父樣や母樣に、逢いたさ故といやつた時は、悲しうて〳〵、身節も胸も碎ける樣に有つたれど、そこをじつと辛抱して、親ともいはず去なしたはの、わがみが可愛さ計り。其時留めて置いたらば、かういふ事は有るまいに、去なした故の此間違ひ、夫から起つた事なれば、殺さりやつたもわしが業、コレ堪忍してたもやた

尋ねうと思うて戻つた。サアちやつと行て尋ねに行たれど、影も形も知れぬ故、お前と手分して尋ねうと思うて戻つた。サアちやつと行て尋ねて」と、聞くや聞かずに、十郎「イヤ白痴め、どんな事が有ろとて、俺にも知らさず追ひ去なすは、鬼でもそんな胴慾な事はせぬわい。イヤ斯う言うては居られぬ」と、かけ出でしが、十郎「コリヤそして幾歳計りで、如何な著物著て居るぞ」お弓「知れた事、年は九つ、中形の振袖に、笈摺かけて」十郎「何ぢや、アノ笈摺かけて」お弓「アイ笈摺も二親の有る子ぢやによつて、兩方は茜染」十郎「アノ茜染に中形」お弓「アイ」ホイはつと、肝に燒鐵刺さるゝ心地、お弓「エヽコレ隙が入る程心が濟まぬ、お前は跡からわしや先へ」と、いひ捨てかけ出すお弓を止め、十郎「コリヤもう尋ねずと止しにせい、娘は疾うから戻つて居る」お弓「戻つて居るとは、そりやどこに」十郎「ソレそこの蒲團の內に、よう寢入つて居るわい」と、言ふに不審も立縞の、蒲團を明けて顏見るより、お弓「ヲヽほんに娘ぢや、ヲヽ嬉しや〳〵。お前もこんな事なら疾からさうと言うたがよい、人に息急探まして、エヽ嗜ましやんせ」と、恨みながらも氣はいそ〳〵、お弓「何とマア見やしやんしたか、大きうならうがな。そしてまあ滅相な、如何に草臥れて居ればとて、からげも下さず、笈摺も懸たなり、ドレ〳〵帶解いてゆつくりと、久しぶりで母が添乳」と、笈摺はづし帶とく〳〵、見れば手足も冷え渡り、息も通はぬ娘の死骸。お弓「ヤアコレこりや娘は死

内には又拵へて戻さう程に。まあそれ迄はこちの内にゆるりつと逗留仕や、又觀音樣へも伯父が連れて參る。ヲヽよい子ぢや、聞分けてサアちやつと貸してたも」と、兩手放せばがつくりと、そこへ其儘倒るゝ娘。十郎「コリやく何としたく、どうした」と、言ども更に物言はず、息も通はぬ卽死の有樣。十郎「ヤ南無三寶、コリヤく目がまうたか、コリヤ順禮の娘やい」と、呼生け呼生け口押開け、「コリヤ氣付も水ももう叶はぬ」ホイはつと計りに俄のはいもう。十郎「エヽ聲立てさせじと口へ手を當てたが、思はず息を止め、夫で死んだか。ハアヽこりやマア不便」と計り呆果たる折からに、表へ聞ゆる足音は、女房ならんと蒲團で死骸、つゝみ傳ひをいきせきと、戻るお弓、お弓「ヲヽこちの人戻つてか、サアくちやつと行て尋ねてく」とせき切る女房。十郎「ヤイ白癡者、跡先もいはず尋ねてとは、何を尋ねて」「サア、お前の留守へ、國に殘した娘のおつるが、不思議と爰へ來たわいの」十郎「ヤ何ぢや、娘が來たとは、そりや母者人と一所にか、どうして來たぞ」お弓「イエくおつる一人でござんする。樣子をいへば長い事、不思議に娘と知つた故、飛付く樣に思うたれどな、悲しい事はお前もわしも、お尋ねの身分なれば、今知れぬ身の罪科を、何にも知らぬ娘に迄、倶に難儀をかけうかと、わざと親子の名乘もせず、氣强う言うて此内を、去なした事はいなしたが、跡で思へば思ふ程、どうも捨てて置れぬ故、直に跡から

順禮「ハイ、よその伯母様に貰うて持つて居りまする」十郎「ムヽ何がそんな事を悪者共がかんばつて、ヲヽ危い事〳〵。そして其銀はどれ程有るぞ、ドレ伯父に見しや」順禮「アイ、是程ござんす」と、貰うた銀を差出せば、十郎「ムヽこりや小玉が五十匁ばかり、もう外には銀はないか」順禮「イエまだ小判といふ物がたんとござんす」十郎「何ぢや小判が澤山有る、アノ小判が。てもマア夫はよい物を持つてゐやるの。コレ此邊は用心が悪いによつて、其様に銀持つて居ると、今の様に人に取られて仕舞ふ。ドレ伯父が預かつてやらう、爰へ出しや」と、武太六に約束の、足にもなろかと心の工面、欺しかくれど合點せず、順禮「イエ〳〵、此小判の財布には、大事の物が包んで有る程に、人に見せなと祖母様が言はしやんしたによつて、誰にもやる事成りません」と、大事にする程猶見たく、脅して見んと目を瞋らし、十郎「其様に隱すと爲にならぬぞよ、痛いめせぬ内ちやつと伯父に預けておきや」順禮「それでも大事の銀ぢやもの」十郎「サア、大事の銀ぢやによつて、持つて居ると爲にならぬ、片意路いはずと預けておきや」と、いふ程こはがる子供心、順禮「こんな所に居る事いや」と、迯出る首筋引攫めば、十郎「アレ怖い〳〵」と泣出す。十郎「コリヤ喧しい〳〵、近所へ聞える、聲が高い」と、口へ手をあて、十郎「コレ怖い事はない、有やうは、わしもちつと銀の入る事が有るによつての。何ほ程有るか知らねど、一二三日預けてたもや。其

レもう去にやるか、名殘が惜しい、別れとむない。コレ今一度顏を」と引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひ。それと知らねど誠の血筋、名殘惜げにふり返り、何所を如何して尋ねたら、父樣や母樣に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の觀音樣、父母の惠も深き粉川寺、佛の誓賴もしきかな、泣く〳〵別れ行く跡を、見送り〳〵伸上り、お弓「コレいま一度此方向いてたも。折角長の海山越え、艱難して憧憬れ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら名乘らで去なす母が氣は、どの樣に有らうと思ふ。狂氣半分、半分は死んで居るわいの。まだ長生のある子をば親故路頭に立たすか」と、其儘そこにどうどふし、消え入る計り歎きしが、起き直つて涙を押へ、お弓「イヤ〳〵どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、譬難儀がかゝらばかゝれ、又其時は夫の思案。程は行くまい追付いて、連れて戻らうさうぢや〳〵」と、子に迷ふ、道は親子の別れ道、跡を慕うて尋行く。旣に其日も入相の、かねの工面も引違ひ、我家へ戻る十郎兵衛が、順禮の子の手を引いて、十郎「女房共戻つたぞ」と、内へはいつて見廻し見廻し、「こりや日暮紛れに火も點さず、何處へ行た」と呟き〳〵、行燈ともし煙草盆、さげてどつさり高胡座、十郎「コレそこな子、爰へおぢや。今戻る道筋を、ソレ乞食共が寄集り、汝身を剝いで銀取らうとぬかしてをるを聞た故、夫でおれが連れて戻つたが、汝身や銀でも持つて居るか」

事ながら、兎角命が物種、まめでさへ居りや、又逢はれまい物でもない。コレ仕付ぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い、何所をしやうどに尋ねうより、其祖母樣の方へいんで居るとの、追付父樣や母樣が、逢ひに行てぢや程に、悪い事はいはぬ、思直して是から直に國へ去んで、隨分まめで親達の、尋ねて行かしやるを待つて居るのがよいぞや」と、宥め賺すを聞分けて、順禮「アイアイ、忝うござります、お前が其樣に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母樣のやうに思はれて、わしや爰が去にとむない。どんな事なと致しませう程に、申し御家樣、お前の傍にいつ迄も、わたしを置て下さりませ」お弓「エヽ悲い事を云出して又泣かすのかいの。先にからわしも子の樣に思うて、爰に置きたい去なしとむないと、樣々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事が有るによつて、それで難面去なすのぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや」と、言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを悦ぶ餞別と、紙に包んで持て出で、お弓「コレ何ぼ獨旅でも、たんと錢さへありや泊める、僅なれども志、此銀を路銀にして、早う國へ去にや、必ずく煩うてばしたもんな」と、銀を渡せば押戻し、順禮「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、澤山持てをります。そんなりやもう參じます、忝うござります」と、泣く泣く立つを引きとゞめ、お弓「それはさうでも是はわしが志」と、無理に持たして塵打拂ひ、「コ

エイエ勿體ない何の恨みませう、恨る事はないけれど、小さい時別れたれば、父樣や母樣の顏も覺えず、餘所の子供衆が、母樣に髮結うて貰うたり、夜は抱れて寢やしやんすを見ると、わしも母樣が有るなら、あの樣に髮結うて貰ふ物と、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣い噦するいぢらしさ。母は心も消え入る思ひ、「扨も〳〵世の中に、親と成り子と生るゝ程、深い緣はなけれども、親が死だり子が先立たり、思ふ樣にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顏も所も知らぬ親達、逢れぬ時は詮ない事、もう尋ねずと國へ去んだがよいわいの」順禮「イエ〳〵、戀しい父樣や母樣、譬いつ迄かゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は獨旅ぢやてゝ、どこの宿でも泊めては呉れず、野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲れたり、怖い事悲し事、父樣や母樣と一所に居たりや、こんなめには逢ふまい物を、何處に如何して居やしやんすぞ、逢ひたい事ぢや逢ひたい」と、わつと泣出す娘より、見る母親はたまりかね、お弓「ヲヽ道理ぢや、可愛やいぢらしや」と、我を忘れて抱付き、前後正體歎きしが、是程親をしたふ子を、何と此儘去なされう、いつそ打明け名乘らうか。イヤ〳〵それでは此子も同じ罪、其時の悲しさを、思ひ廻せば去すが爲と、お弓「ヲヽ段々の樣子を聞き、我身の樣に思はれて、悲いとも情ないとも、いふにいはれぬ

それでわし一人西國するのでござります」と、聞いてどうやら氣にかゝる、お弓は猶も傍に寄り、お弓「ムヽ父樣や母樣に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや、それが聞きたい。マア其親達の名は何といふぞいの」順禮「アイ、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父樣や母樣も、わしを祖母樣に預けて、何所へやら行かしやんしたげな、それでわたしは祖母樣の世話になつて居たけれど、どうぞ父樣や母樣に逢ひたい顏見たい、それで方々と、尋ねてあるくのでござります。父樣の名は阿波の十郎兵衞、母樣はお弓と申します」と、聞て恟りお弓が取付き、お弓「コレコレ〳〵アノ、父樣は十郎兵衞、母樣はお弓、三つの年別れて、祖母樣に育られて居たとは」疑ひもない我娘と、見れば見る程稚顏、見覺のある額の黑子、ヤレ我子かなつかしやと、言はんとせしがイヤ待てしばし、夫婦は今もとらるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはゞ此子に迄、如何な憂目がかゝらうやら、それを思へばなま中に、名乘だてして憂めを見んより、名乘らで此儘歸すのが、却つて此子の爲ならんと、心を靜めよそ〳〵しく、お弓「ヲヽ〳〵、それはまあ〳〵年はも行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さしやつたなう、其親達が聞いてなら、さぞ嬉うて〳〵飛立つ樣にあらうが、儘ならぬのが世の憂節、身にも命にもかへて可愛子を振捨て、國を立退く親御の心、よく〳〵の事で有らう程に、酷い親と必ず〳〵恨まぬがよいぞや」順禮「イ

の上も、けふ一日に迫つた難儀、昨日長町裏で危い所を漸〱遁れ、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、今又此狀の文體では、中々斯うして居られぬ所、我とても女房の身、殊に衒の同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚く氣はなけれど、一合取ても侍の、家に生れた十郎兵衛殿、盜賊衒と成り果てしも、國次の刀詮議の爲、重い忠義に輕い命、捨るは覺悟と云ひながら、肝心の其刀、有家も知れぬ其内に、若し此事が顯はれては、是迄盡せし夫の忠義、皆徒勞事となるのみか、死んだ跡迄盜賊に、名を穢すのが口惜い。盜衒も身欲にせぬ、女夫が誠を天道も、憐有つて國次の、刀の詮議濟む迄の、夫の命助けてたべ」と、心の内に神佛、誓は重き觀世音、順禮歌 補陀落や、岸うつ波はみ熊野の、那智のお山に、響く瀧つ瀬。年はやう〱とをゞの、道をかけたる笈摺に、同行二人と記せしは、一人は大悲のかけ頼む、歌 故鄕を、遙々こゝに紀三井寺、花の都も近くなるらん。順禮「順禮に御報謝」と、いふも柔しき國訛り、女房「テモしをらしい順禮衆、ドレドレ報謝しんぜう」と、盆にしらけの志、順禮「アイ〱有難ござります」と、言ふ物腰から爪はづれ、可愛らしい娘の子、「定めて連衆は親御達、國は何國」と尋ねられ、順禮「アイ、國は阿波の德島でござります」女房「ム丶何ぢや德島、さつても夫はマア懷かしい、わしが生れも阿波の德島。そして父様や母様と、一所に順禮さんすのか」順禮「イヱ〱、其父様や母様に逢ひたさ故、

からならぬなどと、根太切りはつた所で、三どつぱ打たれた樣に、がつくりさすのぢやないかよ、今度ちがへば直に代官」銀十郎「サア吞こんでゐる、最一度行たら慥に工面の出來る金、汝も去ぬなら連だとかい」と、云ひつゝ出る袂をひかへ、女房「其樣に慥にいうて、何ぞ當の有る事か、又違へば氣の毒な、まあ二三日も云ひのべて」武太六「イヤならぬ、二三日の事は扨置き、半時も待つ事ならぬ、サア〳〵こい」とせり立つる。武太六伴ひ十郎兵衞、我家を出て行く跡へ、引違うて息急と、飛脚と見えて草鞋がけ、內を覗いて、飛脚「申し此狀屆けます」と、投出す一通女房取り上け表書に、女房「銀十郎殿へ急用と書た計りで下の名は」飛脚「內儀樣覺がござりますか、私も人傳に、事遣つて參りましたれど、必ず先へ直々にと、念入れて申されましたが、內方へくる狀かな」と、念を入るれば、女房「ア丶成程々々、下の名はなけれども、表書の手は慥に此方に見知りがござんす、置て去んで下さんせ、夫も今は留守なれは、歸られ次第見せませう。マアはいつて煙草でも」飛脚「ア丶否々、まだ外へ屆ける狀、急用なればもうお暇、御返事あらば跡から」と、言捨て出る町飛脚、もと來し道へ立歸る。跡打眺め女房が、心がかりと封押切り、よむ度每に悔りびくり、女房「ヤアこりや是、夫銀十郎殿を始め、仲間の衆へも吟味がかゝり、詮議嚴く成つたる故、捕へられし者も有り、最早遁れず立退くとの知らせの狀。スリヤ夫十郎兵衞殿の身

に女房が不審顔、女房「アノ魚釣に行くに金が入るかへ」武太六「ヤそりや何いふのぢや」女房「テモお前、てこつる金が有るなら戻して行けと言はしやんすぢやないかいな、わしや又沙魚釣やうに白狭海老でつるかと思へば、金で釣ることといふ魚はどんな魚でござんすぞ」武太六「エヽ粋方の嗅に似合ぬきつい太郎四郎ぢや、金を餌にする魚が有つてたまるものか。コレてこづるといふはの、れこさの事ぢやわいの。此方も粋方の女房なら、ちつとてんしよでも覺えさうな物ぢやがな、今の世界に青二引ぬ者と、お染久松語らぬ者は、疫病を受取るといの。こんな事言ふ間はない、銀十郎〳〵起て來んかい、怖い事は何もない、高が借錢乞に來たのぢや、起ざ起しに行くぞよ」と、喚くを宥める女房も、持扱うて見えにける。銀十郎「エヽあた喧しうぬかすので、可惜夢を覺しをつた」と、欠まじくら立出る、銀十郎が寢惚聲、武太六「コリヤ銀十郎、汝あマア夢所ぢや有るまいがな、今日中に戻さうと、約束の通り受取に來たのぢや。サア今渡せ受取う、厭と言や此證文で直に代官所へお願ひ申す、が、汝でんどへは出られぬ身分ぢや有らうがな」と、病づかすは疫病の神と名の付く奇特なり。銀十郎「ハテ喧しい、日暮迄は今日の內、大方工面も出來て有る、是から直に先へ行て、才覺して來る程に、大儀ながら晩方來い」と、聞ては遉強も得いはず、武太六「ハテ晩方迄なりや待てやろ、其かはり暮六をごんと打つと、直に受取に來る程に、其時になつて

ば、眼へ入つてあいたしこ、狼狽廻る暗紛れ、長町泊の彈語り、瞽女がとぼ〳〵行き當り、かつぱと轉べばしてやつたと、折重つて大勢が、押ゆる隙間嬉しやと、足早にこそ 三重。

第　八

よしあしを、何と浪花の町はづれ、玉造に身を隱す、阿波の十郎兵衞本名隱し、銀十郎と表は浪人、内證は人はそれとも白波の、夜のかせぎの道ならぬ、身の行末ぞ是非もなき。人の名を、神と呼るゝ其神は、京の吉田の神帳に、入た神かや入らぬのか、野暮とも見えぬ惡ずいほう、とつぱ株の武太六が、蚤取り眼に暖簾押上げ、武太六「銀十郎内にか、用が有て逢ひに來た」と、いふ聲聞て女房立出で、女房「チヽ武太六樣かようお出、久しう逢ぬがまあ御無事で」武太六「イヤコレお内儀、逢ぬの無事なのと地を打つた臺詞ぢやない、無賴者の伊左衞門に貸た金、爰の銀十郎が受合てけふ中に濟す筈、それで其金受取にきたのぢや、きり〳〵逢して下され」と、聲も辰巳の上り口、尻まくりして高胡座、女房「チヽ其樣に聲高にいはずと、靜に物を言しやんせ。こちの人は夜が更たので、今晝寢して居られます」武太六「何ぢや晝寢ぢや、夜が更けたとは、エヽ聞えた、夜通しの挺摺かい、好い機嫌ぢやな、挺摺る金が有るなら、貸た金戻して行け」と、いふ

敷と、聞いてはつとは思へども、是幸ひと我々が袈裟にかけ、お仕置きにあふならば、少しは佛のお助にて、せめて未來は夫と倶に、成佛願ふ夫が身の上、是に付けても思ひ出すは、三つの時國に殘せし娘のお鶴、嘸二親を尋ねうと、思ふ程猶此身の罪、命の内に今一目、推量有れ」と泣く涙、空かき曇る春雨の、又降しきる如くなり。伊左衛門涙にむせび、伊左「ア、段々のお話、が最前我身の難儀の時、五十兩といふ金を、明日中に戻す請合、今の樣子を聞いた上は、どうもお世話も」お弓「アヽイエ〳〵、夫が一旦お受合申した事は返せぬ氣質、胸にせまつてあられもないお話し、日も暮ればお別れ申しませう、いかう暮ぬ中早うお歸り、さらば〳〵」と暇乞、伊左衛門はしを〳〵と、長町さして歸りける。お弓も泣目を押拭ひ、立歸らんとする所に、最前より樣子を聞き注進したる鈍才坊、捕人に案内し駈來り、鈍才坊「ソレあの女遁すな」と、云ふにお弓は悔りし、お弓「コリヤ何となされます」鈍才坊「ヤア何ととはまが〳〵しい、最前樣子は慥に聞いた、いつぞや寺へ盜にうせたは僞が夫、其時盜んだ打敷を、袈裟にかけたが慥な證據、ヤア隱してもモウ遁れん、サアうせをれ」と立寄る鈍才、心得お弓が早足の柔術、「シヤ癡れ者」と取付く捕人、右と左へ刎返され、又取つくを向ふつき、體は撓むお弓が早業、前へどつさり投付れば、後搦の蔦葛、身をかい沈んで眞倒、一度にかゝるをお弓が氣轉、砂を摑で投げかくれ

郎兵衛殿」と、手を合せて後影、拝む心の細道傳ひ、罪科防ぐ水晶の、數珠も涙に笠の内、伊左「ヤアお弓殿」お弓「伊左衛門樣、是は〱思ひも寄らぬ、マア此間は暫くお目に」伊左「さればされば、逢はぬが先とたつた今、銀十郎殿にもお目に懸り、又我故に差詰た金の才覺、お弓殿の手前も氣の毒」お弓「ヲヽあのおつしやる事わいの、お世話致さにやならぬおまへ、それは少しも厭はねど、只氣がかりは夫の身の上、ハテ如何がな」と目に溜る、涙隱せば伊左衛門、伊左「コレお弓殿、見ればそもじは涙ぐみ、顔の色もきつう悪いが、心持でも悪いか」と、尋ねにお弓は打萎れ、包めども色外に顯はるゝ、お弓「お話し申すも恥しき夫の身の上、幸ひ傍に人もなし、私が病の元、コレ是を見て下さりませ」と、上著の肩を脱げれば、下には淨土の五條袈裟、懸けしは如何にと伊左衛門、猶も不審は晴やらず。かゝる所へ鈍才坊、勸化廻りの戻りがけ、何事やらんと立聞くとも、知らぬお弓は顔ふり上げ、お弓「御不審は御尤、いつぞや夫が勘當の詫、願へど叶はぬ其場の仕誼、兼て主人のお預りありし殿の重寶、紛失して行方知れず、その刀の詮議を仕出し、それを功に勘當の詫言せんととつ置いつ、忠義一圖に夫十郎兵衛、切取り盗も刀の詮議、お主の爲とは云ひながら、盗賊術と呼ばれたる其科は遁れ難く、今日や召捕るゝか、明日や夫の身の上かと、日影を待たぬ憂思ひ、コレ此袈裟はいつぞやお寺にて、盗み取つたる打

た銀高詮議の仕様も有れど、借りたが誤り、今は云はぬ。五十兩なら五十兩にして、此銀十郎が待つて貰はふかい」武太六「ムン挨拶人か面白い、それなら待つてやらうが、明日の晩限に急度濟さうといふ證文が書て貰ひたい」十郎「何ぢや證文書け」武太六「ハテそつちに違はぬ慥な證據、それが厭なら伊左衞門を代官所へ引きずつて行く。サアくどうぢや」と弱身に付込む一言に、十郎「成程成程、氣の濟む事なら證文書かう」伊左「ハテ夫では」十郎「コレく伊左衞門樣、私が胸に有る事、氣遣ひは御無用」と、矢立の筆をおつ取つて、さらくくと書き認め、「是で能いか」と指出せば、受取て熟くと見、武太六「判は無ても汝が直筆、必ず明日の晩ぢやぞよ」十郞「ハテ馬鹿念つかずと早う去ね」武太六「チヽいぬるをわれに習はうか」と、足も心もとつぱかぶ、鼻いからして立歸る。伊左衞門打萎れ、伊左「いつぞやこなたの情により、夕霧と一緒に居れど、少しなりとも助右衞門の、世話を助けうと思ふ故に此始末、假初ながら五十兩と云ふ金、又もやこなたに苦勞をかけ、もしや難儀に成るまいか」と、涙ぐめば、十郎「ハテお前をお世話するはお主への恩がへし、御禮には及びませぬ、明日の晩迄受合つた詞は金鐵、お氣遣なされますな。モウ追付日も暮れば早うお歸り」伊左「そんなら今の金の事は」十郎「ハテよござります、何もかも私任せ、おさらばく」と銀十郎、玉造へと立歸る。跡見送りて伊左衞門、伊左「エヽ賴母しい十

て迯うとは横著者、われに逢ふと思うて、今長町に行く所、よい所で出つくはした。取かへた銀今受取う、サア渡せ」伊左「成程御尤去りながら、昨日も状で申した通り、今と云うては調はぬ、どうぞ明日中に」武太六「ヤア默れ、コリヤ一昨日というた日限が切れたぞよ、われも昔は藤屋の伊左衛門と云ふ大身代、今素寒貧になつても、別家の手代が貢では呉れますけれど、都度々々には云ひにくい、身分にちつと入用な銀、男と見込んで頼みますと、手を摺て頼んだ故取かへた五十兩、かよりうどの夕霧めと、汝が中に遣うた銀、半時も待つ事ならぬ。サア今渡せ」伊左「サア今というては」武太六「無いとぬかすのか、此方にも急に入用な事が有る、サア今戻せ待つ事ならぬ」伊左「ソリヤ餘り無理といふ物」武太六「何が無理ぢや〳〵、金借りてまだ其上に無理と云はふが猶ならぬ、是非戻さにや代官所へ、サア〳〵こい」と引立て行んとする所、疾くより立聞く銀十郎、武太六が手をもぎ放し、突退れば、伊左「ヤア銀十郎殿」十郎「伊左衛門様、氣遣せずと默つてござれ」と、落付く詞に、武太六「ヤイ銀十郎、いらざる所へ出て何で邪魔する」「ヲヽ、先にかゝらの様子皆聞いた、高が金づく、此お人様の事なれば、私が世話せねばならぬお方、その銀の出入私に免じて、今日はマア待て貰ふ。コレおれも銀十郎というては、誰知らぬ者もない男、われも又とつぱ株の武太六というて、ぐずり中間の粋方なれど、餘り綾抜のせぬ臺詞、取りかへ

そも逢ひかゝる始めから、女房はないと間に合な、今更退くにも退かれぬは、いとしらしいが病ぢやと、勘忍して」とかき口說き、すがる袂の妻と妻、町と廓の品かはり色は變らぬ一筋や、「傾城の眞實、誠が知らせたい」「コチヤ眞實殿御に思はれて、色里の一夜は勤がして見たい」一夜の情有りもせぬ、つらき戀しさ可愛さの、義理と義理とに絡まれて、藤屋も心ばら〳〵の一村雨を誘くる、嵐を人と忍ぶ身は、そこよ木蔭を尋ねわび、走れど跡へ夢心、覺ては現空蟬の、泣音ばかりや殘るらん、夢の浮世に借駕籠の、假寢の夢や結ぶらん。駕丁「ヤイ權よ、旦那殿はきつい魘」「ホンニナア、どりや起さう」と、駕籠のたれを引上げて、「申し〳〵」とゆり起せば、ふつと目覺す伊左衞門、走り出でれば引きとゞめ、駕丁「ア丶申し〳〵、どこへお出でなされます」と、言ふにはつと心付き、伊左「ム丶、正しうお辻と夕霧が悋氣の焰、扨は夢で有つたか」と、ほつと溜息つく計り。二人の駕籠は合點行かず、駕丁「エ丶聞えた、コリヤ夢がな見やしやりました物であらう。サア申し、極の長町裏、毘沙門でござります」伊左「ヲ丶いかい大儀でござつた、ソレ駕籠賃」駕丁「ハイ〳〵〳〵、そんならお靜にお出なされませい、又住吉參の節は、お乘なされて下さりませ、サア〳〵こい」と駕籠舁上げ、別れてこそは歸りける。かゝる所へ息急、とつぱ株の武太六、それと見るよりハツト計り、笠傾けて行かんとする。武太六「コリヤ伊左衞門、おれを見

舌は吉田屋の、二階ざしきの揚の客、それをひそりの廻氣な、萬才傾城置いてくれ、見るも厭にまします、心の腐つた吝萬才、よく客にごまんざい、今日立歸るあしたより、外の色と仕かへけるは、誠に目出度う候ける。夕「そりや何いはんす伊州さん、此夕霧をこな樣は、まだ傾城と思うてか。去年の冬から丸一年、二年越に音信なく、それが嵩じて癪の種、煎藥と煉藥と、鍼の力で漸と、命繋いでゐたものを、愛想盡しは何事」伊「と、泣くは女郎のお定り、客に逢うての空涙、雨の如くに降らす故、たいうと是を名付たり」夕「アレまだ酷い事計り、癪が嘘なら是見て」と、じつと取る手にさすが又、いなにはあらぬ引舟の、綱が機轉の一つ夜具、後は互にいふ事も、何の可愛が高ぞかし。おなじ戀路の迷ひ道、お辻は見るより走寄り、辻「なう伊左衞門樣かいの」と、其儘膝に浮く露の、たまに逢うてもそれぞとは、得も夕霧が氣をかねて、夕「ついに見しらぬ女中樣、いづくの誰」とよそめけば、辻「覺えがないとは餘りぞや、親と親とのいひ名付け、嫁といふ名は有りながら、袖も得詰ず此儘で、尼に成れとのお心か、夫も誰故川竹の、つれなき霧に隔てられ、水に數書く浮れ舟、焦れ死ねとは胴慾」と、うき年月の溜涙、早汲取りし粹の德、夕「お辻樣とはあなたかへ、おいとしほいともお道理とも、かうした定る奥樣の、私故とも思さうが、ほんに誓文お二人の、中を隔つる心はない。それ計りは辻さんの、お氣の廻りのすね詞、

帯なさるりや入る物」と、襷前垂お徳が進上、「お前に貰うた祐天様の、守でお癪の出ぬ様に」「わしや太夫様に放されて、是から便が」なく禿、泣く〲出る門送り、いつの間にかは郡兵衞、「御詮議の盗賊、阿波の十郎兵衞のがさぬ」と、いはせも立てず銀十郎、足首取つて長持へ、ばつたりひつしやり跡しら波、打連れてこそ　三重 歸りけれ。

第七　道行思ひ富士

鐵漿付は、娘心の離れ時、羽子板の繪の雛樣に、戀といふ物知り初て、殿御待つ夜の辻よ辻、お辻は二世と親々の、その約束も名ばかりに、只思ひ寢の夢にだに、藤屋を見たし懷かしの、何所をあてに大阪の、まち〲なりし世の噂、若しも此世に在せずば、長き未來へ嫁入と、思ひ詰ても振袖に、涙片敷く手枕に、馴し家居を立出て、現の闇に迷ひ行く、心の內ぞやるせなき。戀風や、其扇屋の金山と、名に立登る夕霧が、降りみ降らずみ空情、あはぬ客衆はいくよさか、裏紫の頰被り、深いと人も赦色、ゆかり藤屋の伊左衞門、忍ぶとすれど古の、花は嵐に落果し、身の行末と定めなき、水の流のうき苦海、紋日々々の八文字、禿立から生花の、水上初めし昔より、可愛男は只一人、外の客衆へ空言の、誓紙の烏後朝に、泣かすも熊野の御罰かや。過し口

て肝玉が顚り返り、胴顫が出ましたが、人には添うて見いぢや、段々聞けばさすが大きい御商賣をなさるゝ程あつて、譯の立つた粹樣、いや又、此方のお客も揃ひも揃うた、一人は幽靈一人は門立、一人は大それたお客樣。扨と、夕霧樣の身代、あなたの方から出ました金を、親方へ渡しまして、ひよつと跡でぼくは來やしよまいがな」十郎「何さ〱、五右衞門の銀十郎、たとへ明日召捕られ、いか躰の責にあうとても、同類もいふ男ぢやない、勿論お手前達に難儀かけてよいものか。主人の御用達するまでは大事の體、手足の付いて有る間は、めつたに捕へられもせぬ男、氣遣せずと金渡して、親方に落付かせいさ。亭主けふの世話代、有合ひの金子、取ておきやれ」と打つ露も、氣味惡さうに、亭主「ハイ、いやもう是には及びませぬ、あなたに納めて置かしやつて」十郎「ハテよいはさ、どうで是からせき〱來申す」「夫は近頃お氣の毒、是にお懲り遊ばして、必ずお出下さりますな。ソレ中居衆、ぬしう樣のお歸りぢや。夕霧樣の廓の名殘、男ども駕いうて、來いよ〱」と手を叩く。上の女下女、「太夫樣、マアおめでたい、身請は濟んでも伊左樣の、變つたお姿おいとしや」「ホンに馴染としをらしい、いつも門出の見送りには、傍輩女郎の祝ひの發句、今日の身請は袖乞の、泊定めぬ旅の空、歌や連歌のわけぢやない。敷島さんや金吾主にも、跡で宜しう傳へてゐ」「アイ〱、せめての餞別に、旅の用意の三尺手拭、世

乞食めに報謝にくれる、勝手次第に連れて行け」と、財布を其儘投出せば、助右「そんなら此お金を下され、身請して添はせと有る、どなたなれば此様な、お慈悲深い」と顔見て恟り、助右「ヤアこなたは日外の浪人、衒めぢやないか」十郎「チ、サ、いかにも其衒、衒つた金は藤屋から、息女への結納の印。其時藤屋へ返させては、お辻殿と伊左衛門の縁切れる、其離縁をさせまい爲、態衒た五百兩、則ち夕霧が身請金、今伊右衛門へ返辨すれば、衒の算用濟うがの」助右「スリヤそれもやつぱりお情、ア丶よう衒つて下さりました。有難い盗人様へ、お禮〳〵」に伊左衛門、見れば見知りの、伊左「ヤア阿波の十郎兵衛殿」十郎「コレ〳〵、阿波の客に近付は有るまい、此一腰は主人櫻井主膳殿の魂、手打になされた伊左衛門が、爰に居やう様がない。殿のお姫様の爲に、大名の假名して、科人になつた譯は、心で譽ても譽られぬが世の掟、そこを察して世話するは、人の心になりかはつての恩返し。金銀の貢は盗賊の一徳、此五右衛門の銀十郎が受取つた、死んで仕廻うた伊左衛門、科の帳面さらりと消る、吉田屋の幽靈客、夕霧太夫も世間晴れて、幽靈殿と未來かけて樂み召さ」と、粋な捌も主人のかはり、割符を阿波の銀十郎は、仁義正き盗人なり。次の間より喜左衛門、氣の毒さうにおづ〳〵出で、喜左「最前から何もかも殘らず聞いて居ましたが、去とは思ひがけもない、お前様があの、噂のお盗人様でござりますか、お名を聞い

上でお辻樣の身の上も、見捨てぬ樣に賴みます。おぼこな娘の一筋に、あなたをこがれて、秋の頃よりぶら〳〵と、今に煩うてござるげな、それ程に思詰めさつしやつた、心根がいとしさ、袖乞の中で、茶屋遣ひの仕送りするも、矢張お辻樣へする奉公、かいの廻らぬせんの詰り、嗅を伏見の泥町へ身賣、三つになる坊主めが、乳に離れてぐし〳〵と、泣寢入に寢をる顏、見れば浮世の義理と、諦めても、ほろ〳〵淚がこぼれます」と、歎けは道理と夕霧も、「お辻樣に義理立てて、思切らうと思ふ程、どうも切られぬ、こらへて」と、同じ思をかき口說く、心のたけは塵紙と、のべの幾重を染めにけり。二人が誠肝にしみ、衣裝櫃の蓋押開け、大盡姿引かへて、以前の紙子身にまとひ、すご〳〵出る伊左衞門、伊左「助右衞門、夕霧、おれ故段々の心遣ひ、何にもいはぬ、諸事このなりで推量しや」と、いふに二人は顏見合せ、「覺悟とはいひながら、室町藤屋の旦那殿の、是がなれの果かいの」夕霧「此お姿見ては、アイ、一倍思ひ得切らぬ」助右「というて、五百兩といふ金がなければ、外へ身請の極るお身」十郎「ヲヽ、太夫が身請は身どもがする」と、障子ぐわらりと田舍大盡、はつと驚き立ちのけば、十郎「イヤサ、何方へも逃がしはせぬ。身請の金子五百兩、則ち亭主喜右衞門、親方の相對濟んだれば、夕霧が身は身どもが儘、身請さへしたれば、武士の言分は立つ、乞食に身の穢れた傾城、侍の妻にはならぬ。廓を出た其跡は、

約束、結納の金子五百兩を、盜賊に衒られたは、此助右衛門が一人のあやまり、藤屋への言譯に、わしがでに勘當受けて、其舉句に大病やみ、少々の小道具賣喰、とう〳〵長町の裏屋住居、途中で伊左衛門樣のお目にかゝり、江戸のしだらのお咄し、京の本家へは、立寄る事もならぬと哀なお姿、いはゞ親方の聟樣、おれが爲にも旦那殿、マア〳〵と内へお供して、術ない世帶を知らしたら、氣兼なさるゝも氣の毒と、隨分貧乏を隱して居れば、コレ助右衛門、おれが大阪へ來たは、夕霧に逢ひたさなれど、此寒い裝で廓へは行けぬ、衣裝の才覺頼むと有る。お辻樣の事をあれ程に思はしやるならと、小腹は立てど、アヽしどのないがよい衆ぢやと、古手屋を詮議して、損料借も一夜さかと、思へば幾夜さも〳〵。適内にござると、本見るとて、小買の油に燈心を、十筋も入れて夜明し、晝になると氣が重い、食が味ないと言はつしやるも無理ではない、謠うたひの寄米を喰ひながら、高砂屋の羊羹をとてこいの、其間にはとつけもない、金四五十兩借て呉れいのと、つまんだ樣に言はつしやる。廓の贅に入るかね、お辻樣の仇になる夕霧殿、とはいへ誠の心底なら、本妻妾もあるならひ、欲でするのか眞實か、こな樣の性根を、試して見る乞食の色事、紙子姿に情をかける、驚入つた女郎の意氣地、なづましやつたも無理ぢやない。いふは管ぢやが、最前のわしが姿の通り、紙子著た伊左衛門樣と、隨分添とげ、其

惣兵「イヤモ何なりと承りましよ」「サア願ひといふはナ、わたしを抱て寝ずに抱て寝て下さんせ。ヲヽかういへば嬲るとも思うてゞ有らうが、神樣懸けてさうぢやない、藤屋の伊左衞門樣とは、ついした中ぢやないわいな、誓紙より堅い互の心、任せぬは勤の身、此間外へ身受の約束、伊州樣も部屋住の、急に才覺出來ぬ中、若し外へ定まつたら、此夕霧は生きては居ぬ、夫程心底立る身で、お前に抱れて寝ようというたは、貧しいお方の志を立てるも一つ、眞實はお前樣と寝たといはゞ、袖乞に肌ふれた女郎と、廓でぱつと噂になり、客の落ちるがわしや樂み、身請の沙汰もやむ道理、此方から賴んでどうぞして、惚て貰ひたい所を、ようゝ惚て下さんした。此上の御無心には、盃計りで了簡して、逢はずと逢うた分にして、面向計りの色になつて下さんせ。エヽ夕霧が命一つ助るはお前の心、一生恩に著ませう」と、乞食を拜む兩の手に、落ちて流の涙なる。つくゞ聞いて顏ふり上げ、惣兵「太夫殿、必ず其詞を違へず、伊左衞門樣の事を、一生見捨て下さるなや」夕霧「エヽさう言はしやんすりや、お前の心も」「いかにも、誰も聞いて居はせぬか」と、見廻す後の長持に、「ヤア伊左衞門樣か」「助右衞門か」はつと悄り蓋びつしやり、助右「コレ申し、隱れさしやます事はない、伊左衞門樣の事に付いては、夕霧殿に恨も有る、一通り、わしは今橋の紣屋の手代、親方の娘お辻樣は、藤屋へ嫁入さつしやる筈、親御同士の言

二腰も差いたお人が、理不盡に客の座敷へふん込むさへ有るに、なぜ此樣に打たつしやつた。お侍樣、こりや御麁相でござりますな」郡兵「ヲ、サ、まあ麁相のやうなものさ」「御麁相なればまつかう」と、足首取て突倒せば、郡兵「うぬ慮外やつ、何ひろぐ」「サア是も麁相でござります」「イヤ推參」と拔きかゝるを、喜左「マア御堪忍」と喜左衞門、止める顏して突飛せば、牽頭が詫言、「もう御了簡拜みまする」というては抓り、「御尤」では踏みこかす、尤もごかしに身はひよろ〳〵、腑拔になつて、郡兵「ヤイ亭主、あいつ打放す奴なれども、そち達が詫るが不便さ、助けて歸る」喜左「エ、有難うござります」郡兵「併ながら思へばあいつ」喜左「ア、もうよござります」「喧嘩はさらりと住吉屋で酒にせう、お身の痛に瓢簞町で、瓢簞酒もよござんしよ。チアンチキチ、タホ、、、チヤンチキ〳〵〳〵チン、瓢簞ぢや〳〵」と、お留守になつた留守居の腰、押立てこそは出てゆく。胸の晴間を夕霧は、禿に銚子盃持たせ、夕霧「手の惡い、どこへはづしてぞ。末長う固めの盃、一つお上り遊ばせ」と、客あしらひの嬉しさ術なさ、心は何にたとう紙、伽羅の薰に咽返る、悋氣の煙淺間山、藤屋はそつと長持の、二人が有樣見るとも知らず、物賞「此樣な思ひがけもない、有難い事はござりませぬ。コリヤまあほん〳〵にお前樣を、抱て寢るのでござりますか」夕霧「サレバイナ、お前の望聞入れた其代りに、又わたしが願ひが有る」

まあ伊左様に逢はしたい、お澤殿最一度尋て」喜左「コリャ〱、もう尋ぬるに及ばぬ、伊左様は死にやつた。サヽ違ひなし正眞事ぢや、藤屋の本家へ尋ねていて、様子を聞けば伊左衛門様は、此夏江戸の店で死なしやつた、しかも大名の名を衒たほくで、成敗に合しやつたと、早速店からいうて來て、とうに體見の葬禮、今日石塔を立る日ぢやと、坊様が經やら百万遍やら、始めて會た御隱居が、私捉まへて泣かつしやる。コレ戒名も書て貰うて來た、好色院粋容美男信士、たつた今迄姿の見えたは、夕霧様に心が殘つて、逢ひにござつた幽靈に極つた、悲しや跡の月からの揚代雜用、香奠になつたはいの。南無阿彌陀〱」喜八「ハアしまうた。かたみこそ今は仇なれこの紙花、此正月に牽頭持のかた三日、買つて呉るお客は有るまい。肩もしれた」と駕籠舁の、杖に離れし涙なり。郡兵「伊左衛門め爰にをるか、うせい〱」と引立て出で、郡兵「郡兵衛が戀の妨する、生白けた此しやつ頬」と、髻引上げ、郡兵「ヤアこりや違うた、ハテ面妖な」とつき放せば、喜左「アヽ申し、伊左衛門様は死なしやつたもの、何の私が所にござらう」郡兵「イヤサ、夕霧を揚詰の客は、慥に伊左衛門と聞いて來たはい」「イヤ申し、いかにも伊左衛門と申すは私、サア同じ名は何ぼもありうち、夕霧を買うたも私、お前様と近付でなければ、意趣請ける覺えもなし、何で斯様に打擲はなされます」郡兵「ソリャ人違へさ」「ム、

うとて、氣相變て見えたわいな。おなじか逢はせましとむない、それで一寸知らします」と、いひ捨て出れば、伊左「何の侍、怖い事微塵もない、逢うてこまそ」と強い事、云うては見たが、伊左「侍客、憎に意地悪の郡兵衛め、追放の身の伊左衛門、コリャ逢はれぬ〳〵」隱れう所も、伊左「何のその、夕霧が色の根を持つ郡兵衛、いつその事せりふせうか、イヤさうしては、どうせうな、太夫めが性根も見たし、破るは易し隱れて見ん」と、短い心を長持の、底に納めて忍び居る。上の女が詫るも聞かず、郡兵衛が高呼はり、郡兵「伊左衛門の大ずりめ、三ヶの津お構ひの身を持つて、大阪の廓通ひ、夕霧が蟲に成つて、立つ氣立洒落臭い、爰へ引出せ仕樣が有る」家人「どの樣に仰やつても、伊左衛門樣は爰には」郡兵「イヤサ隱すと汝等が爲にならぬ。よいよい、家捜して國元へ引きずつて行く。案内せい」と、そこら傍睨廻して入るあとへ、亭主吉田屋喜左衛門、船上りの合羽がけ、喜左「太四郎喜八來て居るか」太四郎「ヲヽ喜左衛門樣、待つて居る〳〵。京の首尾はどうぢや、かね請取てお歸りか。今も今、阿波の客が僻起して、伊左衛門樣に直に逢はうと、一遍三階迄家さがしすれど、面妖な伊左樣が、いつの間に何所へやら、とんと姿が見えませぬ。マア早う金の顔が見たい」と、氣おひかゝつて尋れば、喜左「なんぢや伊左衛門樣が見えぬか、そりやこそな、アヽ南無阿彌陀〳〵」太四郎「アヽ忌々しい何ぢやぞいの、

ひ」太四郎「ハヽヽヽそりやお下屋敷で有ろ、頭からお嬲は、もつとてうでござりましよ」物貫「サア其お長とは我等相住」太四郎「したり、あなたのお妾を、お長樣と申しますか」物貫「サア夫はおれに好う懐いて、戻ると尾を振つて手をくれる、蒲團の替りに抱て寢ると、温うてよい物ぢやが、時々足を背ぶるには困るてや」「ヱヽいやらしいお契ぢやな、さうした色樣有りながら、此廓へお出かけは、洒落木の金毘羅大盡樣、先づお通り」と、そより立て、足元にころり、太四郎「コリヤ何ぢや、うそ穢い米袋、乞食が爰へ來う樣はないが、捨てて仕まへ」と門の口、物貫「アヽ勿體ない大事の物、一握りを大體では呉れぬぞい」太四郎「コリヤきつい、吝いと見せる惡洒落は、是もちよぼくりちよんがれかい」物貫「ヤア貴樣も此方の町から出たか、よつ程下地があるはいの」と、素性顯はす歩きぶり。されども此人夜はくれども晝見えず、どうやらしゆんだ謠ぢやと、思へど知らぬ牽頭持、旦那上ぢやと付いて行く。素振見付けた伊左衞門、一人小腹の立ちつ居つ、伊左「生傾城の四つ足め、乞食にさへ惚れるからは、選嫌ひなしの助兵衞女郎、欺されたが悔しい。あれなら身請の仕人さへ有れば、何所へでもうせるで有ろ、引ずり出して踏うか、夫もあんまり野暮ぢや、どうぞ粋らしい頰打の仕樣が、有りさうなものぢやが」と、悋氣の仕樣に手を組んで、工夫の半お澤が走て、お澤「申し〳〵新住の阿波のお侍樣、お前樣に逢

夕霧「サイナ、お志と女郎の意氣地、立ちながらでは話しも成るまい、サアまあこちへ」と吉田屋の、内へ手を引き連れて入る。すぎが悧り興醒顏、杉「コレ太夫樣、其乞食を、お前は色にする氣かな」「イヤ色ぢやない、高うても低うても、お客樣に買はれるは勤の習ひ、此方のお錢一つは、世に有る人の千萬兩、それで夕霧が買はれたわいの」杉「エヽあの錢一文で賣るのかへ、お前それでも、揚のお客が有るぞへ」夕霧「ハテ貸借は女郎の儘、したが其姿では宿の思はく、コレ染之丞、幸ひ伊州さんの替衣裝、召換へさせて連れましておぢや、わしや奧へ行て居るぞや」「アイ」と禿が長持の、夜具に添へたる大盡小袖、著かへさすがの鑓人は呆れ、「いかに羽利の女郎さんぢやてゝ、物好も好い加減、太夫樣を乞食に借すとは、犬に伽羅嗅す樣な詮索、揚のお客へ知れぬ先に、早う戻して貰ひましよぞや。コレ夕霧さんの禿衆、染之丞〳〵、錢一文の太夫さん呼びましや、やあ」とわめいてぴんしやん出でてゆく。とかくする間に取繕ふ、破れ紙子は時の間に、たちまちかはる粹模樣、鬢撫付けつ撫でさすられ、物貰ひは夢見た心地、有難過ぎて身はがち〳〵。太四郎喜八飛んで出で、太四郎「やつちやお出で、初對面の判官樣、北か南か粹と見た眼は違はぬ」と、そやし立てられ冷汗ながら、「ヲヽ南とも〳〵、所は長町、イヤ南堺筋九丁目」喜八「へヱそれがあなたの御本家かい」物貰「ヲヽ〳〵本卦當卦うらやさんの筋向

受け下さりませ」と、貰ひ溜めの錢一文、破れ扇に差出せば、縮人「チヽ汚な、太夫樣ありや氣違ぢや、相手にならずと、サアお出で」と、いへど諾へず錢取上げ、夕霧「繻子縮緬が戀はせず、身には襤褸をかけうとも、心に錦が著たいとは、昔の粋な女郎衆の詞、御念もじのお禮忝う存じます」物貰「そんならお受けなされて下さりますか、エヽ有難い〳〵。其お情にあまへて、申出すも、近頃お恥かしい事ながら、太夫樣、私はお前に惚れました。もう〳〵惚れたといふ段ではない、忘れもせぬ跡の月の廿日の朝、時分柄物參りも少なし、氣の大きい色町へ行たら、手の中も多かろがと、九軒の方へ來たが因果、夕霧樣の道中、ふつと眼にかゝつてから、テモ美しい、こんな物を抱いて寐る人も有るにと思ふと、錢貰ふ事も喰ふ事もとんと忘れて、毎日毎日、外へは行かずに、此廓の中ばかり、お前の姿見る度に、あんまり滅相な事ぢやと思うて見ても、どうも〳〵忘られず、つがずほうの上に戀煩ひで、糸より細く痩れたと小歌の通り、此通りなら、どうで死るでござりましよ、不便なやつぢやと思し召し、どうぞ御報謝にたつた一夜さ、抱かれて寢てくださりませ、お慈悲ぢや、お情〳〵」と、手をする涙編笠の、辻にひれ伏し泣きゐたる。さすが名取の夕霧太夫、夕霧「扨も〳〵深切なお方、勤の身でもそれ程に、眞實惚れたといはるゝは、誓文嬉しい忝い、聞居ましたぞへ」物貰「スリャ叶へて下さりますか」

郎が一臼參らう、臼取は嗅の役、お澤どん、お德どん、二人を假の本妻妾、旦那囃して貰ひましよ」伊左「コリヤ〳〵〳〵、此方の嗅らやお妾や色めが、紅の襷をしんどろもんどろかけて、しんどろりと、磨ぎやりましたを搗こなら今ぢや」太四郞「旦那は金持、太夫は癪持、我等は牽頭持、喜八は荷持、中居は懷妊か、お澤が尻餠、悪戯さんすなお德がやきもち、送りの長持、もち込み取込む吉慶吉田や、さらば是からぜんざいらく、まんざいらく」と舌鼓、打連れ奧へ騷ぎ行く。苦界の中の樂しみは、勤めと色と二ツ葉の、音に聞えし全盛と、名に夕霧の立姿、雲の黛筆にさへ、誰書きなさん越後町、しどけ媚く裲襠の、跡に身代破れ編笠、紙子の燧朝夕の、煙も其日の貰喰、物貰「お情に預りませう太夫樣、申し太夫樣」と、付いて廓の揚や町、鑓人が見付けて走付き、鑓人「テモ拗も此乞食殿は、伊勢參りの道か何ぞの樣に、太夫樣の傍へ汚い裝で、悉皆花畑の鳥おどし、見なりの悪い、退いて貰を」とつかふどに、夕霧つく〴〵打守り、夕霧「コレなう、はしたなう叱らぬがよい、心有げな物貰ひ、紙子姿は粋の果、昔はどんなお方やら、おいとしぼや」と美しい、詞に取付き、物貰「さすが名にしおふ太夫樣、お見立の通り其以前は、分相應の花もやつて參りました、かうした風體のものを結構な御挨拶、あんまり有難うて、物貰ひます所ぢやない、何とお禮の申し樣も此身分、さもしい物ぢやが私の志、どうぞお

者、貴様はかご舁、俺は太鼓持、貴樣や俺は、旦那衆をせぶつて喰う節季候と同じ身ぶん」喜八「こいつはゑい、お澤どん、お上へ申上げさんせ」「イヤ聞て居る」と伊左衞門、伊左「太四郎喜八、隙がゐると思うたが、龍宮の踊の拵へ、此浦島を待たせて置いて、乙姫はどこにゐる」太四郎「染之丞どうぢや」染之丞「イエ太夫さんは、癪で頭がふらつくとて、私を先へ」太四郎「コレハしたり、そんなれば此子も此子、附まして居たが好いわいの、手鞠ばかりついてゐずと、最一走呼びましておぢや。コレ〳〵これいなう、ヲヽ聾」「アイ、夫でも手鞠がわしや面白い」とん〳〵〳〵走り行く。太四郎「イヤ又夕霧樣もきついきしましやう、旦那江戶へお出なされ、半年もお通ひなかつたに、此頃久しぶりのお歸り、磁石の樣にひつ付いて、ござりさうな所、扨は葭原でのお樂しみを、少しひぞりの筋と見える」喜八「イエさうぢやないぞへ、住吉屋の阿波のお客、身請の噂で起つた癪、どうぞ伊州樣の方へ、ちやつと身受さしましたいと、こちの旦那樣が氣をせいて、京の藤屋の手代衆に逢うて、金の降り乘りして來ると、それで一昨日京上り」伊左「何ぢや、喜左衞門はおれに隱して本家へ行たか、氣轉は利いたが、親共は惡い癖で女郎が嫌ひ、失策つて戾らにやよいが」喜八「ア丶旦那、そんな先折おつしやるな、大事の祝儀日、神樣へ早うお鏡備へまし、二人中もまん丸に、重り合うてござる樣に」太四郎「エ丶喜八下手ぢや、是から太四

酷い胴欲ぢや、毎朝此方が喰はぬ先に、初穂を上げるは何の爲、こんなめに合はぬ樣と、大事にした甲斐もない。去とは酷いのら如來、思ひ廻せば廻す程、腹が立つて身が燃ゆる。今夜始て枕かはせし、正貞の手前さへ面目もないわいの」と叉取り亂すしやくり泣き。ヲヽ、お道理と泣きたさを、泣かぬ鈍才才覺坊、弟子「アレ〳〵とやかういふ内に夜明烏のかしましや。サア〳〵出よう」と進められ、進まぬ和尚も裸身に、衣手々に二人の弟子。跡に正貞袋持ち、才覺鈍才聲張り上げ、弟子「横寺町尊正寺眼剝如來直の勸化盜人に合うて尊正寺」和尚はつちと口々に、衣の奉加口奉加、打連れてこそ　三重。

第六

とん〳〵、とんと世上の、色の湊は京の女郎に江戸の意氣張、大坂の揚屋で長崎衣裝著せて、一ふう三四五六に七八九軒町、師走の果も色里は、別世界なる賑ひに、胸の煤掃衣裝著せ、紋日の日和吉田屋の、庭は餅搗手鞠つく、春より先に春めけり。太四郎「節季候、だい〳〵〳〵」喜八「是は忙しない、今やう〳〵と搗かける所へ、もう催促か、五六軒行廻つておぢや、あんまり早い」と顏見合せ、喜八「ヤア太四郎樣、こりや珍らしい、何の間にトの字へお這入」太四郎「ハテ喜八田舍

へる。斯くと見るより正貞は、庭の隅より走出で、裸和尚に縋付き、正貞「さつきにから怖さに味噌部屋へ隱れてゐたが、此お姿は何事ぞ。今夜漸く此寺へ入佛して、いとし可愛と肌ふれた、其溫暖を冷したは、あの盜人の胴欲や。思へば〳〵和尚樣、目剝の如來で銀儲、銀澤山な此寺へ、來ると其儘盜人に、遭ふと云ふのはあたすかん、よく〳〵なすびな生れ性、夫が悲しい〳〵」と、身欲を思ひ詫泣き、正味の淚交りなし。和尚「ヲヽ悲いは道理〳〵、是に付けても聞えぬは、日頃飼つて置くアノ如來殿、盜人と一味して、ようきついめに合したなう。此評判が廻つたら、明日から參りは一人もなし、コリヤまあどうせう才覺坊」才覺坊「アヽ成程、御悔は御尤、いつまで泣いても歸らぬ事、明日から鼻の下を養ふ思案が肝心、鈍才何と思やるぞ」才覺坊「サアレバおれもそれが心がかり、アヽどうしたらよからう」と、思案とり〳〵さま〴〵に、四人は胸を痛めける。中にも和尚淚をとゞめ、和尚「ムヽよい分別が出たぞ〳〵、二人共に聞いてくれ、かゝる災難にあふ不仕合、明日から參りも有るまいし、無いと乾上る四人が鼻の下の養ひ樣は、幸ひ普請の時の地車に、アノ如來を乘せ、町々へ勸化に出る思案はどうぢや」弟子「シタリ、如何樣寺に置いて役に立たぬアノ如來、酷いめに合せ過怠、コリヤよからうと二人の弟子、勝手へ立つて引出し、住寺も倶に地車へ、乘せる如來に恨言、和尚「如何に知らぬが佛ぢやとて、あんまり

さらと押しもんで、三僧「抑我朝に尊き佛は多けれども、中にもこちの目剝樣、一に意地の惡い奴、二に睨、三に三々なめに合はせ、四に死ぬる程な苦しみかけ、五に五體をしやきばらし、六ッ夢中にならば七ッ泣いてもわめいても、八ッ役には立たぬ事、九ッ爰な大盜人を十で頓死をさせてたべ。南無眼剝の如來樣」と責めかけ〳〵祈りけり。時に不思議な雲おこらず、奇瑞も更に有らばこそ、和尙も弟子も手持なく、うつとりとして居たりける。十郎兵衛高笑ひ、十郎「ハヽヽヽヽ、テモうまい奴等ぢや、コリヤ皆よう聞け、手下の者に云付けて利もせぬ如來を願ふが利と云うて、此寺へ錢銀を上げさすのは、皆おれが仕業、根を尋ぬればおれが物で、おれが取りに來たが誤りか」和尙「ヤア、扨は此方の如來を時花すやうにして、錢銀を上げさせ、其銀を取りに來るのぢや。コリヤ壺ぢや、ドレそんなら報謝に少しばかり」と、取付く腕首引つかみ、「ヲヽ報謝には丸裸」と、和尙の著物剝取れば、「是は胴欲お赦し」と、二人の弟子が取付くを、引つまんで打付ければ、黑八道七俱々に踏み付け〳〵、十郎「ヲヽもう能いは〳〵、赦してこませ。したが、寶物の此刀、心當の代物」と、引拔いてとくと改め、「エヽ何の役に立たぬ生くら物、何ぢやきら〳〵とした此打敷、是も一緒に盜んでやる。又賽錢が蓄つたら取りに來る、必ず人に盜まれなよ。アノ大盜人め」と十郎兵衛、手下に諸色取持せ、悠々とこそ立か

頭き、黒八道七腰の段平引き拔いて、手練の早業藪垣一重、音もなんなく切り破り、一人はそつと忍び入り、内を窺ふ門の戸を、開けば十郎兵衛しづ〳〵と、指圖に隨ひ兩人は、指足拔足納戸の内へ忍び入り、銀箱かますを引抱へ、出るに和尚は眼を覺し、「ヤレ盗人よ」といふ聲に、二人の弟子は飛上り、わつと裸で胴ぶるひ、黒八道七睨付け、「ヤアあた喧しい、おどはね立てると儕等が爲に成らぬぞ、押默つてけつかれ」と、つかふど聲に和尚もわな〳〵、爰ぞ大事と胴をするゑ、和尚「ヤイ命しらずの盗人めら、此寺へ盗みに這入といふは、儕等が大きな不覺、爰を何所ぢやと思ふ、コリヤ、爰は寺町尊正寺ぢやぞよ。忝くも本尊は奇瑞の有る目剝の如來、諸人群集をなすをしらぬか。儕等が樣な盗人共が這入り錢銀を盗んで往かうとするを、アノ如來樣がお目玉を剝かしやると忽ち其體がひり〳〵〳〵、ぐにや〳〵〳〵と碎けて死ぬるぞよ。そんなめに合はぬ中に、盗んだ物を置いて、詫言をして早う去に居らう」盗人「ヤイヤイ、エ喧しいわい、アノぬかした面はいなう、おいらが手に入つた物を返すといふは、ア、如來が撥鬢奴に成つて、泥龜屋をする時節に返してこまさう」和尚「ヤ、こいつが〳〵、生如來樣を勿體ない事いうたぞよ。よい〳〵、コリヤ〳〵兩僧、此上は如來樣のお力を借らねばならぬ、わいらも倶に祈れ〳〵」「いかにも合點と裸身に、手巾鉢巻すた〳〵坊、和尚と倶に數珠さら

イヤもうかう解合うからは、云つて置かねばならぬ、拙僧が寺號は尊正寺、替名は正清と云ふ程に、よう覺えて居たが能いぞや」正貞「アイ〳〵、そんならお前のかへ名は正清様、いかにも正の字は正しく、清は清いといふ證據」和尚「そもじの名は」正「アイ正貞と申します。正は正しい、貞は貞女の貞の字でござんす。おまへの名は正清様」和尚「そもじは正貞、ハテ思ひ合つた名ぢやなう」と、坊主天窓をかち合せ抱付いたる有様は、蔓をからみて出來もよき、西瓜を見るが如くなり。淨慶「ヲヽ先々御氣に入つて大悦致す、仲人は宵の程、最早お暇申しませう」と、淨慶は庭に下り、ひよろり〳〵立歸る、和尚「サア〳〵餘程夜が更けた、あすはとうから起きねばならぬ、門をしめて火の用心、正貞おぢや」と手を引いて、和尚は一間へ入りにけり。跡に鈍才才覺坊、浦山しげにながめやり、鈍才「ひよんな氣になつた、夜が更けたらば拔けそもならぬ才覺坊」才覺「ヲヽおれも體がしやきばつて來た、虫養ひに抱かれて寢ようか」鈍才「ヲヽ抱かれて寢るけれど、此方も愚僧も同じ身の上、エヽこんな事知つたらば、去年落した前髪が、どちらに有つてもよいものを、アヽ任せぬが世のならひ、サア〳〵寢よう」と、帶解ひろげ抱き付き、寢るより早き高鼾、早更け渡る夜嵐に、水も寢入りし丑滿頃、皆一様の忍び頭巾、先に進むは闇の黒八、ばつたり道七、跡に控へし大男、大だら腰に名も高き阿波十郎兵衛、夜盗の一族呫き點

身の置所なき花の、べつたりとした厚化粧、人喰た様な口紅粉で、びらりしやらりの冬瓜顔、付添ひ來る浄慶は、門内窺ひ訪なへば、和尚は待受け出で向ふ。浄慶「コレ〳〵和尚様、約束の彼梵州、只今同道致しました」和尚「それは近頃御苦勞千萬、先々是へ」の挨拶に、伴ひ座敷に押直り、浄慶「扨て昨日何角お咄し申した通り、是から隨分可愛がつて下さりませへ」和尚「成程成程、衣の振合も他生の縁、可愛がらいで何としませう。貴僧何角とアいかい御世話でござる。コリヤ鈍才、ソレ盃を持て來よ」と、和尚の目遣ひ、取肴、銚子盃持出づれば、「是は〳〵御丁寧、然らば先仲人役差圖致さう。コレ正貞様、何ほ天窓は丸うてもお定り、サア呑んで差さんせ」正貞「そんならお慮外、ホ、、、」と、盃を取上ぐれば、「お酌仕らう」と三獻合せつぎかくれば、ずつと呑干し、正貞「此盃はどうせうへ」浄慶「ハテしれた事葬禮迄のお梵妻、其盃は和尚様へ」正貞「ホ、、、是は近頃お慮もじ、是から萬事御世話がち、兎角御念もじになされて」と、お極りなる口上に、和尚ほや〳〵打笑ひ、盃取上げ押戴き、和尚「世話は互に此方からも頼みます」と、是も三獻受持つて、謡一ツ鳴尾の沖過ぎて早住の江に著きにけりと祝儀の小謡、浄慶「是で固めは相濟んだ、仲人役の我等は茶碗」と、手酌に引受けがぶ〳〵〳〵、肴は酢鮹か、祝儀を祝うて酢鮹とは、コリヤ出來た」と、鉢をかゝへて無息呑、正貞「アヽ目出たし〳〵、ナア和尚様」和尚「ア

よりの御寄附でござる、得と拜なされい。追付け開帳に間もなければ、賽錢を上げて御緣を結ばれませう」と、緣起坊主の口車、老若男女押合ひ犇合ひ、奇瑞も取々聞傳へ、お百度參りの數取りや投げる散錢ばら〳〵〳〵、早閉帳の鉦の音、戸帳も下る七ツ過ぎ、思ひ〳〵に願籠めて、皆散散に立歸る。二人の弟子はほつと顏、鈍才坊「ナント才覺坊、此間は無上やたらに夥しい參詣、此如來の奇瑞には、根性の惡い者は、眼を剝いて睨ましやるの、お請けが有ると座頭の眼が明いた、膝行が立つたのと、世上で專の取沙汰、そこで我等が出鱈目の緣起、何と味やつたで有らうがな」才覺坊「いかにも貴僧の云やる通り、今迄何の役に立たぬ如來ぢやと思うて居たは、こちとらが根性の惡いの、是迄貧乏な此寺、和尙も俄に福僧になられて、今夜彼のお梵妻が見える筈、此樣に賽錢の上る時にしこだめて、買梵妻で樂まうぢや有るまいか」鈍才坊「コリヤよからう」とそより立ち、天窓掉いて悅ぶ所へ、奧より和尙立出でて、和尙「コリヤ才覺坊鈍才坊、もう日も暮かゝるに何をのらくら、賽錢集めて仕舞はぬか」と、呵られてとつぱかは、賽錢箱を打明けて、手ん手につなぐ數珠の實の、數は八貫蓮葉に、浮む小玉や包銀、一つに集めて、和尙「ホヽ昨日よりは銀納が多い、モウ日も暮るれば彼者が來るで有らう。鈍才は爰掃出し、火を點せ。才覺坊は此錢銀、納戸の內へ運んでたも」と、打連れてこそ入りにける。旣に其日も黃昏や、

迯行く曲者遁さじと、たぢろく足を踏しめ〳〵、跡をしたうて行く道は、大川筋の濱傳ひ、かけくる浪人追ひくるお弓、人なき所に立ちどまり、お弓「こちの人」十郎「女房ども、まんまと首尾好う出かした〳〵。五百兩といふ仕事、思ひの外心安う手に入つて有難い」と、財布取出し戴く後へ、いつの間にやら庄九郎、庄九「ヤア樣子は聞いた衒妻め、よう先にはえらいめに遭したな。衒どもを引きくゝり代官所へ引いて行く、覺悟しをれ」といはせも立てず引拔いて大袈裟切り、どつさり響く暮六つの、かね懷へ夫婦連、行方しらず三重なりにけり。

第五

坊主「南無阿彌陀〳〵、抑當寺の御本尊目剝の如來と申し奉るは、人皇廿六代武烈天皇惡逆無道の王樣にて渡せ給ふ、其時に此如來出現ましまし〳〵て御怒り給ひ、兩眼を剝せ給へば、武烈天皇眼をまはし給ひしより目剝如來と號し奉る。かゝる尊き御佛なれば、此攝州寺町尊正寺に安置し給ふ。一度拜する輩は、惡事災難を免かれ、時花病取つく事あたはずまた盜賊が這入らんとすれば、睨み殺し給ふ靈驗あらたなる尊像でござる。此度序に御開帳はござれども、又御開帳は稀なる御事でござる。信を取つて拜を有られませう。此刀は三條小鍛冶が打つたる名劍、義經公

れば、御家來衆がお縛なされますか、そこでは金を此方へお戻しなされて下さるれば、難儀も掛らず濟むといふ物」お弓「ムヽでかした遉上分別、然らば其旨申付けん」と、家來を密に小手招き、お弓「汝等は裏道より表へ廻り、コリヤかう〳〵」と呫き默く相圖の手配、助右衛門は何氣なく勝手へ出て、助右「申し御浪人樣迷惑千萬な御無心、私の心では濟ぬ故、女儀ながら親方に相談致したれば、お侍樣の命に代ての事無下にいやともいはれまい、よい樣に計へと有る故、仰の通り五百兩御用立ませう程に、御出世次第急度御返濟下されますか」と、いふにこなたも刃物を納め、浪人「然らば拙者が望の通り聞き屆て下されうか、是は〳〵過分至極」浪人「ハテお命に及ぶ事、手前も逼迫難儀なれどお取りかへ申します」と、戸棚開いて以前の金、包ながらの五百兩渡せば取て押戴き、浪人「拙者が命助る恩義、生々世々忘れは置かぬ、心もせけば早お暇」「左樣ならばござりませうか」「お禮は重ねて」「さらば〳〵」と金追取つて懐中へ、表をさして立出づる。待設たるお弓が家來、家來「こりや捕たは」と左右より、寄るを蹴倒しもんどり打たす、手練の曲者持餘す、家來が働見兼ぬるお弓、小褄を帶にしつかりと、挾箱より用意の捕繩、表へそつと窺ひ足、お弓「阿波の十郎兵衛遁さぬ」と、夕日も西へ入身の備へ、「イヤちよこ才な」とほぐしの柔術、互に裏取表口、助右衛門があぶ〳〵と心を配る氣を配る、お弓をてうど眞のあて、

劣らぬ盗賊、夫故五右衛門の銀十郎と異名する由、仔細有て此如く繪圖を取て尋ね捜す、此度夫の上坂も殿よりの上意にて、彼を捕ん爲の事、今日計ずも此弓が廻り逢うたも、數馬殿に手柄させいと天の賜、ハア丶忝なや嬉しや〳〵、家來にいひ付け召捕らん」と、勇立つを押とゞめ、助右「成程左樣な事なら疫病の神で敵とやらで、近頃氣味のよい事ながら、爰の内でお縛なされましたら掛り合に成つて、若し親方が難儀致す樣な事は御座りますまいかな」と、氣遣ひがれば、お弓「いか樣なう、爰の内で召捕らば掛り合の筋は遁れぬ。夫を庇うて依怙最屓の沙汰もならず、銀十郎を召捕つたは斯樣々々と明白に殿へ言上せにやならぬ。其時は掛り合、後家御を國へ召さるゝは定の物、また其上に科人の口書次第でどんな難儀がかゝらうやら、そこを思へば近比氣の毒、といふて手に入つたあの十郎兵衛、見遁しては夫へ立たず、召捕つては此家の難儀、ハテどうしたらよからう」と、思案の體に助右衛門、助右「イヤモ左樣な掛り合でお國へなど召れては、女の事なり難儀千萬、何とかう遊ばしませんか、如何なと欺してあの浪人を去します、所を御家來衆に言付けて門でお縛りなされませぬか、スリヤ私の親方にかけ構はないと申す者」お弓「成程尤も、併し大抵の奴でなければ、自由に此家を去ぬまいぞや」助右「イヤモそりや致し樣がござります、何で有らうとあの者が申す通り金貸ていなします。ハテ此家をさへ離た

思ひの外口にさへ頬張る金高、今逼塞の此絆屋、家内の諸色賣代なしても何として出來ぬ金、埒の明かぬ事に隙どらずと、又外々へ御出なされ」と、すつかりいへど動かぬ浪人、浪人「イヤサ外々へ參る所存なれば、押付て是へは參らぬ、家柄と云ひ金の有る事も存じて參つた。畢竟見ずしらずの我等なれば衒とも思はれうが、高の知れた金の事、衒られたと思うて當分用達てくりやれさ」助右「イヤなりませぬ、衒られるも用立つも、金が有つての上の事、盜人衒の用心には無い程慥な事はない」浪人「すりやどう有つても」助右「ハテくどい無いと云ふのに」浪人「ハア是非に及ばぬ、此上はちとお座敷を穢し申す」と、居直つて肌くつろげ差添するりと拔放し、腹切る用意は强請の兀頂、夫とはしらぬ正直者、助右「ア、申し、こりや何事をなされます」浪人「イヤサ放しやれ、所詮無心を聞きとゞけねば奉公の望も叶はぬ、此儘一生浪人せうより、切腹して相果る」助右「夫は御短氣まあ／＼」と、とゞむるこなたは、障子をひらき、お弓は何か繪圖取出し、引合す姿繪に、割符を合す浪人者、扨こそ是と心に笑み、さはらぬ體にて、「助右衛門／＼」と、呼れてはつとは云ひながら、爰も氣遣ひ立兼ねて、助右「イヤ申し御浪人樣、必早まつて下さりますな、又了簡もござりませう」と、漸宥めて隔の襖開けばお弓が小聲に成り、お弓「一部始終殘らず是にてきいたるが、あの浪人は阿波の十郎兵衛といふ海賊、昔の石川五右衛門にも

し、日の目眩き深編笠、浪人と思しくて尾羽を枯せし身の廻り、案内もなく打通り、浪人「粋屋三郎右衞門とは爰元な、在宿ならば御意得たい」と、聞いて居直る助右衞門、助右「どなたかは存ぜねど、成る程三郎右衞門宿は是でござれど、旦那儀は死去仕り則ち我等支配の手代、御用ござらば私に」と、慇懃にあしらへば、浪人「ムヽ支配人と有らば亭主同然、赦しめされ」と上座に坐り、浪人「御意得たい事別儀でない、見らるゝ通り我等儀は尾羽を枯せし浪人者、知緣の者の取持にて、播州のお大名へ召抱へられ、近々出勤致す筈なれども、何を言うても此風體、身の廻り何かの拵へ、少々金子入用に付此家へ無心に參つたのさ、暫くの内取換へて呉れられうなら、過分にあらん」と押柄に、いへど此方は律儀者、助右「夫は近比お氣の毒な事ながら、只今も申す通り、旦那相果て支配人の私、金銀の事は心に任せぬ事ながら、御浪人樣の御出世の筋と有れば、無下にならぬとも申されまい。マア其金は何程の事でござります」浪人「イヤ僅五百兩、夫程有らば當分夫で相濟む」と、いふに此方はぎよつとして、助右「申し五百兩とおつしやるは、小判の事でございますか」浪人「成程小判五百兩、いはゞ少々の事、家柄を見かけて參つた、用立てくりやれ」と、いふを打けし、助右「アヽ申し、もう御意なされますな、大概物には程の有る物、御浪人の御無心よく〳〵で有らうと察し、一歩か三歩か高々一兩までなら私の了簡でと、

樣」おまき「ヲヽそれ〲奥の間へお供して、無重寶なそなたの琴でもお慰に」お弓「夫は段段心遣ひ、もうお暇と存ずれど、左樣ならば今暫し、御馳走に預りませう」と座を立上り、娘の手を取り、お弓「驚き入たは此息女、貞女兩夫に見えずの敎を守る心ざし、器量といひ貞心といひ、武士の妻にも有るまい育」と、子を譽られて母親の、心いそ〱、おまき「コレ助右衞門、聟殿へ戻す金元の所へ入れておきや」助右「そんならどうでも此金を」おまき「ハテ變改するも娘が可愛さ、先樣へ戻さにやならぬ大事の金、戸棚へ入れて奥の間へ、いざ御越し」と母娘伴ひ奥へ入りにけり。跡に殘つて助右衞門、金取納め煙草盆、煙管相手に獨言、「日比から義理を立て人を憐む母御の氣質、夫に似合はぬ結納の印、戻して變改せうと有るは義理も構はぬ御了簡、又娘御の心はきつい物ぢや、どんな難儀がかゝつても、一旦定めた男なれば、外の男は持たぬとは、丁度忠臣藏の小浪が樣な心ぢやの。アヽどうで此云號を、變改さゝぬ仕樣が有りさうな物ぢやが」と、心一つにとつ置いつ、案じる此方彼方には、客饗應の琴の音、重扇の風薫る、匂ひを傳ふ蔦蘿、忘れぬ人は今さらに、さらぬ別れのしやらどけも、やがて結ばぬ岩田帶、助右「アレつい彈かしやる琴の歌でもとかく夫をしたふ唱歌、若し伊左衞門樣の病死が本の事なら、いとしやあの子は氣違にがなならしやるであろ。アヽどうしてなりと夫婦にしてしんぜたい」と、思案小首も傾き

ヲ證據はそちが胸の內に、慥に覺えの有る盜人」庄九郎「ハヽ、こりやをかしいわい、わしが胸の中に有る證據、夫が爰へ出して貰ひたいな。かうなつてはわしも身晴ぢや、侍の女房ぢやとて遠慮はない、サどうすりや胸の證據が出る、仕樣が惡いと赦さぬ」と、摑かゝる庄九郎が、小腕ぐつと片手に捩上げ、懷探して紙入取出し、お弓「ハレ助右衞門とやら、其內詮議」と投げやる紙入押開き見れば內には鍵一つ、合點が行かぬと戶棚の錠に合して見ればしつくり合鍵、おまき「コレほんの鑰は此母が腰に放さぬそりや合鑰、ても橫道な」と呆る主從、お弓は猶も手を捩ぢ上げ、お弓「主の難儀を救はん爲、主の金を盜んだれば忠義ともいふべけれども、此奴が心はさうでない、大枚の金を盜取り、侫が才覺した顏で、夫から付入り其お辻を女房にして、身代を丸取にせうといふ惡工する番頭殿、此內には置かれまい」と、庭へどつさり投付くれば、娘が悅び母親も、おまき「飼犬に手を喰る恩知らずの橫道者、隙くれる出てうせう」といはれて何と庄九郎、庄九郎「エヽあたぶの惡い失策てのけた、侫衒妻め覺えてけつかれよ、アイタタヽタアヽいたいおさんは都の町で、待ちてをれよ」と口へらず、頰をしかめて出て行く。跡見送りて母は手をつき、おまき「あなた樣のおかけにて不時の難儀を遁るゝ仕合、娘もちやつとお禮申しや」。お辻「ほんにわたしとした事が最前から御挨拶も、お蔭で煩い病の根ぬけ、お勞休にナア嬶

お弓「イヤ藏迄もなし其金は、やはりそこに」と聲かけて立出づる數馬が女房、庄九郎が尖聲、

庄九郎「ム、藏へ行くに及ばぬ、其金がそこに有るとは、して五百兩の金は何處にござりますな」

お弓「ヲヽ外迄もなし、そちが出した五百兩が則ち戸棚に有つた金」庄九郎「何ぢや是が戸棚に有つたのぢや。コレ是はの、わしが在所へ云てやつて取寄せた五百兩、夫が戸棚に有つたとは、あんだら臭い馬鹿盡な」お弓「ム、在所といふそちが所は」庄九郎「ヲヽ但馬の豐岡」お弓「シテ豐岡への道程は大阪から四十里餘り、日數にして幾日程に往て戻らるゝぞ」庄九郎「サレば急いで往ても行戻りでは八日程かゝらうか」お弓「ム、最前から樣子を聞に、結納を戻さう戻すまいと評議の有つたは今日の事、夫に八日もかゝるそちが在所へどうして金を取りにやつた。エイ伊左衛門とやらの死なるゝ事を、そちや前どからよう知つて、それで其金取り寄せたか。アノ横道者めが、サア盜んだ樣子有やうに白狀せい」ときめ付けられ、ぎつちり詰れど怯まぬ惡者、庄九郎「ハテ變た所へ出しやばつて、變つた世話をやく女中、一體伊左衛門といふ奴はどら打ちのお大將、大坂へ來ては新町の夕霧といふ太夫になづみ、幾日も〳〵居續の馬鹿者、そんな呆癡に大事の娘御を添しては、末が詰らぬと思うて、夫で疾から取寄せて置いた金ぢやが、夫が何とした人間の惡い、盜人ぢやの白狀せいのとは、又わしが盜だといふには、何ぞ慥な證據でも有るか」お弓「ヲ

や、まあ其金から戻さにやならぬ、差當つて是が迷惑」庄九郎「イヤこれ助右衞門、金事に拘はつて家の爲にならぬ事しては、此番頭の顔が立たぬ。戻す金が惜くば其金はおれが工面して出す、金づくで娘御に難儀はかけぬ。サア此金を戻してさつぱりと緣切つて仕廻しやりませ」と、取出す以前の五百兩、庄九郎「我金出して主の力になる、何とこんな手代は有るまいが。家の爲なら命も惜まぬ、お爲〳〵」と誠を見せ、娘を女房に跡式までしてやるお爲ぞ恐しき、おまき「ホヽ二人ながら家を思うての心遣、嬉しいといはうか過分といはうか、取分けて庄九郎、五百兩といふ金才覺してたもつた段、一入嬉しい忝ない。近年屋敷方の金は戻らず逼塞の身分なれども、娘が一世一度の嫁入、其結納に貰うた金、どの樣な術ない事が有ればとてめつたに遣うてよい物か。其時の封の儘取つて置いたを見せませう」と、戸棚の傍へ立寄りて、鑰取出し錠押明け、おまき「ヤア結納に貰つた五百兩の金、爰にはない」と恂りを、聞て驚く助右衞門、庄九郎も空とぼけ、倶に立寄り上を下、尋ね捜せどあら金の、お辻「ム、錠前も損ず盗人の業とも見えず、若し置き違はなされぬか。氣を靜めてとつくりと、思ひ出して御覽じませ」と、娘も倶に氣を付くれば、おまき「サアいづれ金銀は大切の物なれど、わけて大事の此金とわしが部屋の此戸棚へ、置き忘れう樣はなけれど、三度尋ねて人疑へ、念の爲ぢや、藏の戸棚を尋ねて見やう」とふと立上る。

様をやらなんだが大きな仕合せ、此上は結納を戻してさつぱりと、他人に成つてお仕廻なされませ。繼がつて居たらどんな難儀が掛らうも知れぬ。お辻様は一人子の事なれば、内へ聟取つたがよござります。アヽどこぞ爰らに良聟がありさうな物ぢやが」と、己が勝手へ引きかけて云廻すとはしらぬ母、おまき「いか様是は庄九郎の云やる通り、世間の取沙汰も悪い伊左衞門殿、殊に生たとも死んだともしれぬ人に便々と、繼がつて居やうより、結納を戻してさつぱりと、聟舅の緣切るが上分別」と、母の詞に悲しむ娘、お辻「そりや嚊様何いはしやんす、常々お前の御意見に、女子は其身一生に、殿御は一人持つ物ぞ、夫と定る其人に、女郎妾の色狂ひ、腹の立つ事あらうとも、悋氣嫉妬の氣を持つな。隨分夫を大切に、もしも不緣で去れても、又嫁入せぬ物と云はしやんしたをわしや忘れぬ。譬枕は交さずとも、云號すりや定まる殿御、其夫故どの様な難儀災難有るとても、娘故ぢやと諦て、必ず〳〵夫婦の緣切てばし下さんすな。若し死なしやんしたが誠なら、わたしや此儘尼に成る、外の殿御は厭々」と、誠を守る娘氣に、母も兎角を涙ぐむ。助右衞門も目をしばたゝき、助右「ヲヽ御辻様ようおつしやりました、人の誠はこんな時が肝心、伊左衞門様の生死は噂計りで知れぬ事、一旦の云號を變改するは水臭いといふ物、彼方は至極深切に、此方の身代の不勝手なを察し、五百兩といふ結納の印、今云號を變改すり

たは京へ登つたと聞いたがいつの間に戻らしやつた」助右「ホヽ夕夜舟に戻つたが、それに付いてお家樣にお目にかゝりたい、どこにござるぞい」庄九郎「イヤお家樣は奥にぢや、用が有るなら呼んで來う」と、いふを此場の立汐に、しほの目まぜと仕形にて、必ず何にもいふまいと、娘を宥め番頭は、奥の間にこそ入りにけり。跡はしらけて暫くは、挨拶もなき後の方、おまき「ホヽ助右衞門戻りやつたか、大義で有つた」と母親は、庄九郎諸共奥より立出で、おまき「さつきにから聲がした故早速逢うと思うたれど、今日は珍しい阿波の御家中、安松數馬樣の奥方樣、大阪御見物の序ながらお尋ねに預つて、御挨拶やらお伽やら久しぶりの屋敷付合」助右「夫は思ひも寄らぬ珍客、定めて何かお心遣ひ、まあ早速申しませうは、京都の樣子藤屋の家の騷動、伊左衞門樣の事は御病死とも、又生てござるとも取々の風聞にて慥な事は知れ申さず」と、聞いて娘も母親も、又今さらの憂思ひ、傍に差出る庄九郎、庄九郎「イヤ伊左衞門殿の事なら聞合すに及ばぬ、死なれたが本とも〲、根元根本僞りなしの大誠、病死といふは皆嘘で、眞の事は阿波の殿の名を衒り、何か江戸の吉原で太夫を揚詰め、段々奢の戯が過ぎて十二月の饗應、夏雪降の體をしたとやらが江戸中の大評判、其ぼくが阿波殿へかゝつて、夫で伊左衞門殿は阿波の屋敷で成敗に遭れたを、一家衆が隱して病死にして仕廻うたとは、大阪中に誰知らぬ者がない、まあよい事はあのお辻

あた猥らしい褻らはしい、わしには歴きとした云號の殿御が有るぞや、おじやらも手合も事による、重ねて仕やると嚊樣にいふぞや」と、恥しめられても構はぬ厚皮、庄九郎「ムヽ云號々々と、いはしやりますが、其云號の男とはそりやマア誰でござります」お辻「ハテ知れた事、京に隱れのない藤屋の伊左衛門樣」庄九郎「ハヽヽヽこりやをかしい、其伊左衛門殿は死なしやつたとの世間での噂、それをお前も能く知つて居てから。よし又伊左衛門殿が生きて居やしやるにもせよ、可愛さうに庄九郎が、思詰めて居る物を、見捨てゝ直に嫁入るは、大身代の伊左樣と、榮耀がしたさぢや皆欲ぢやと、お前樣を惡ういふぞへ、お主樣を惡ういはしては、第一番頭の顏が汚れる、惡い事はいはぬ、わしがする樣に成りなされ、こんなよい首尾又とない」と、厭がるお辻を抱きしめ／＼、しなだれ廻る眞中へ、いつの間にやら別家の手代助右衛門、お辻「オヽよい所へようおぢやつた」と、悅ぶお辻、庄九郎は折角入つた居風呂の底のぬけたる如くなり。それと悟れど助右衛門わざと何氣のない顏付、助右「是はお辻さん庄九郎二人ながら爰に何してござります」と、いふ娘が涙聲、お辻「コレ助右衛門聞いてたも、あの庄九郎が猥らしいわしをなぶりくつさる」と、いふを打消し、庄九郎「アヽ申し／＼私や何にもいや致しませぬ、お前が芝居話しをして聞かせと仰しやる故、三五郎と金作が色事を一寸仕形で話した計り、イヤそりやさうと助右衛門殿、こな

いお茶漬を上げる、獻立せいといはれたが、ハア、何であらうぞ、マア向ふが猪口に蒟蒻の白韲かい、そして汁がばくち汁、平は狗脊と油揚、こりや念佛講の料理ぢや、こりや俺ぢやいかぬ、最一度魚屋を呼びにやれよ」と、勝手口から奥納戸差覗き〳〵、小點頭してそろ〳〵と戸棚の前へ立ちかゝり、紙入から相鑰と見えて錠まへ手ばしかく、引出す財布の縞黄金、五百兩とは陸目から、お弓が見るとも仕濟し顏、懷へ捩ぢ込み押入れ、跡取膳ふ折からに、何心なく娘のお辻、お辻「庄九郎そこにか、嚊樣がお呼びなさるゝ」と、聞いて悔り狼狽へ眼、庄九郎「イヤ庄九郎は一寸どこやら參られました」お辻「ヲヽあの人の何いやるやら、其方に料理の事を云付けると嚊樣が呼んでござる」庄九郎「ムヽそんなら何にも見やなされませぬか、ハアヽまあ夫で落付いた、料理の事なら八百屋と魚屋にとつくりと云付けたれば、氣遣ひはござりませぬ、いつ見ても〳〵美し可愛此腰付き、申し難面ぞへ〳〵、お前の事を明けても暮れても暮れても明けても晝は終日夜もすがら、お辻樣〳〵エヽ、お辻樣〳〵と、重ね戸棚を踏張ので、中山へ日歸りにした程足に實がいり、其草臥で寢た間ばつかり、夫より外に忘れる隙はござりませぬ、名を呼んでさへ日本國が一所へ寄るやうなに、顏見て是がたまる物か、コレ御覧じませ、天狗の面を風呂敷に包だやうでどうもならぬ」と抱き付き、しなだるゝ手を捥ぎ放し、お辻「アヽこれ〳〵又しても

すうお屋敷へも毎度お出入、御厚恩に預かつた數馬樣の奥方樣、當地へお越は夢にも存ぜず、不躾だらけも女子の身、お赦し遊ばして下さりませ。コレ庄九郎そなたなりとも袴羽織」と、いふをとゞめて、お弓「其儘々々、此度殿の御用に付き、夫數馬も藏屋敷迄罷り登る、幸の事と思ひ、夫へ願うて京內參り、いはゞ忍びの事なれば、腰元はしたも遠慮いたし、今日は町方見物のついでがてら、身まかられし三郎右衞門は、念頃に有つた故、立寄たも夫の差圖、必ず〳〵心遣ひは無用ぞ」と、いふ內用意の挾箱、明けて家來がそれ〳〵に、直す手土產目錄書、戴く手代が押開き、手代「羽二重二疋おまき殿、白縮緬一卷御息女へ、郡內縞一反支配の手代へ、其外家內へ金子千疋」おまき「是はまあ〳〵お冥加もない、家內の者迄つど〳〵のお心付け、お禮申しや庄九郎」庄九郎「ハイ〳〵有がたう存じます、私は此家の番頭でござります、御用もごさらばお心置なう」おまき「あまりと申せば爰は端近、ヲヽそれ〳〵見苦しくとも奥の間へ暫くお越下さりませ、いざ御案內」とすゝめられ、お弓「然らば暫時お茶の御馳走、外にお世話は必ず無用」と、おまきが案內に伴ひて、一間へ入れば庄九郎、庄九郎「御家來衆はこなたへ」と、皆打連れて勝手口、暖簾押上け入りにけり。俄のお客に家內の騷、「ソレへお菓子煙草盆、豆腐取て來い八百屋へ走れ、此肴屋はなぜ遲い」と、喚きちらして庄九郎、臺所より出來り、庄九郎「扨忙しう成つてきたは、つ

上り、十郎「何れ吉左右致すまで、必ず御短慮ばし」主膳「ヲヽ何が扨我とても、隨分堅固で便を待つぞ」おさらば〳〵と雙方へ、立別れんとする折節、郡兵衛か下部と見え、主を迎ひの箱提燈打消す主膳十郎兵衛は行方、しらず。三重

第　四

浪花津に、いづれはあれど取りわけて、分限長者の寄り所、今橋筋の軒ならび、其名も紲屋三郎右衛門と人にしられし家柄も、夫に離るゝ不仕合せ、商ひ萬事不手廻りに、今は世間を逼塞の、身は氣さんじの二つ髷、娘一人を蝶花と、外にながめはなかりけり。春風に裾吹きそらす取り裝は、さながら武家の奥方と一目に、しるき供廻り、若黨中間徒士の者、其外笠籠挾箱、三郎右衛門表口、案内乞うて立ちやすらふ美々しき體に後家おまき、番頭の庄九郎、連て戸口に手をつかへ、おまき「どなたかは存じませねど、お歴々のお女中樣、御用あらば先づ〳〵あれへ」と、詞にこなたは打通り、お弓「ついに逢はねは不審は尤も去ながら、氣遣ひめさるゝ者ならず、わし事は阿州の家中、安松數馬が女房弓といふ者」と、聞いておまきが手をつかへ、おまき「是は〳〵思ひも寄らぬ、夫三郎右衛門存生の時は、殿樣の御用を聞き、數馬樣にもお目かけられ、お心や

失して有所知れず、慥にそれと推量はしつれども、是といふべき證據もなく、忍びやかに詮議せんと、思ふ折から小野田郡兵衛佐渡平に申付け、殿を害せんとせし極悪人、今打明ぬも國次の刀の有所を聞いた上と、手延にせしは主膳が越度、今更云うて返らぬ事、力となるは十郎兵衛舊恩を思ひなば、命にかへて刀の詮議、それも長うは延されず、三月三日は殿の誕生、飾る吉事にはづれては櫻井が家の大事と有つて、我手では吟味もならず、主持ぬ身の氣さんじは誰憚らず詮議せよ、此役目さへ仕課なば、以前にかはらぬ主従の、約束變ぜぬ證據ぞ」と、一腰脱いて指出せば、其儘取つて押戴き、「盡ぬ主君の御一言、こたへ〳〵し四十四の、骨々は碎くるとも、奪ひ取つたる刀の有所、詮議の手始御覧あれ」と、のたれ伏したる定九郎が懐中さがせば紙入に、たしなむ金子は十郎兵衛が肌にしつかと用意の路金、主膳「ヤレ待て十郎兵衛、金子は愚か塵一本、取掠めては忠義にならぬ」十郎「がハァ御意ではござれども、主君の爲の切取は武士の習、盗賊術と身をやつし、盗の手本は五右衛門の銀十郎と名も改め、貴人高位の門までも、只人知れず刀の吟味、拙者が胸に覺えの内、そつとも氣遣ひ遊ばすな」と、主命重く身に受けし、阿波の海賊十郎兵衛が盗賊術の始りは、斯とぞ思ひ知られたり。主膳傍に心を付け、主膳「二人の死骸此儘に討果せしと云ひ觸らさば、咎もあるべし去ながら、人の見ぬ内影隱せ」はつと計り立

へば十郎兵衛、見れば人をあやめし體口論なるか、いかに〳〵」十郎「ハツアなる程御推量の通り、郡兵衛の頼に寄り定九郎佐渡平と申合せ、此所に待伏してお前様を殺さん工、モ惡いやつと存ずるから、兩人共にまつこの通り、只今とゞめ致せし」と、聞くより主膳大に驚き、主膳「ムム其兩人こそ某が詮議の種となるべきやつ、去るによつて我屋敷で追歸せしを其儘に、捨置たるは深き所存、伊左衛門が云ひしごとく、吉原での狼藉を思ひ廻せば小野田郡兵衛、重々かさなる科人の詮議の元はナソレ其佐渡平、引捉へて白状させんと思ふた思案も皆はづれ、やつぱり我身にかゝる難儀、エヽしなしたり殘念や」と、悔を聞いて十郎兵衛、居たる所をどつと坐し、十郎「エヽ下司の智慧は跡の悔、お前様のお命が助たい計りで、さやうの所へ氣もつかず、殺せしは我誤、是も何故御主人に勘氣の詫の種にもと、極めし的も又それて此身に當る主君の罰、眞平御免下され」と落たる拔身拾ひ取り突込まんとせし所、櫻井「暫し」と押とゞめ、主膳「此儘死るは犬死同然、今の命を存命て一つの功さへ立つるならば、勘當赦して元の主從、そこへ心は付かざるか狼狽者め」と捥取る刀、十郎「スリヤ私が一命を、かばい下さる御主人のお心は」主膳「ホヽ主從となる事も深き因縁、武士の義理にて捨たる其方、功のたて様よつく聞け、殿の重寶國次の刀代々預る我家筋、過つる霜月廿六夜、例の日待と一家中招寄たる其夜より、紛

たかる汝から、マア仕舞うてやろかい」十郎「サヽ、其段は尤なれども始から云ふ通り、手前が命を捨てる替り、ナコレどうぞ主膳樣のお命を」定九郎「ヤアならぬはい」十郎「サアならぬ所を聞入れるが武士の情ぢや。申し定九郎樣。是佐渡平殿。十郎兵衛が手を合して、モ一生に一度の頼み、是拜みます、頼ます、申し〱是申し頼ます〱」定九郎「エヽ喧しいわい、頼みます〱と、暗中で駕籠舁くやうに、何ぼ額叩いても、そんな事聞く耳持たぬ、埒の明ぬ事云はうよりとつとと早う斃れ」と、蹴上る足首しつかと取り、十郎「ムヽ、スリヤどの樣に云うても御主人を」十郎「ヲヽくどい、ムヽモさう云や此方も百年めぢや、主人の仇となる儕等、コリヤもう此方から生けては置かれぬわい」定九郎「コリヤ面白い、さうぬかしや身が有つて相手に仕よい、忠義立に死にたくば望に任せ殺してやる、定九郎が刀の引導受けて冥途へつゝ走れ」と、切込む刀かい潜り、鍔元むづと佐渡平が、同じ拔身の稲妻や、又も降りくる雨につれ、空も閃めく稲妻の、光りを幸ひ十郎兵衛が、二人を相手に根限り目覺しかりける　三重　働に、定九郎佐渡平迯支度、何國を當と正體も、轉つまろびつころ〱、起上る定九郎が脇腹ぐつと氷の刃、はふ〱迯出す佐渡平が肩先丁と切下げられ、うんと計りに倒れ伏す、肝先ぐつと、とゞめの刀、空晴渡る橋の上、見付ける主膳に見合す顏、十郎「ヤアお旦那には只今お歸り」主膳「ヲヽ何者かと思

ふ圖へ來た汝が不運、主も家來も生けては置かぬ、觀念ひろげ」と又切る刀、「惡戲すな」と引摑み身動きさせぬ後より、只一打と定九郎が、騙し寄つて切りかくるを、持つたる刀で丁と受け、十郎「一人ならず二人まで、誰ぞと思へば山口定九郎殿か、こなたも主人を殺しに來たか」定九郎「ヲヽ推量の通り、佐渡平と諜し合せ、待つてゐた此道筋、汝から先へ了うてやる。叶はぬ腕立て取置け」と、佐渡平諸共詰寄れば、荒氣は返つて主君へ不忠、一旦詫るに若くはなしと思案を極め、兩手を突き、十郎「ムヽ理にもせよ非にもせよ、意趣遺恨はまゝある習ひ、是とてもまつその如く主人に恨あるに寄り討たんと狙ふ今宵の仕誼、モ無理とはさら〳〵思ひませぬ去ながら、我とても勘當の身分、何卒主人に詫言立て、最一度家來と云れんと思ふが故の賴みより、モ外には何と露ほども惜からん此命、サコレ主人の代に今爰でモ一分樣に刻でなりとも、お二人の御存分、サヽヽ手向ひ致さぬ、サコレ〳〵十郎兵衞が心の内を思ひやり、せめては武士の忠義をば、コレ立てさせて下され」と、投出す命主の爲、塵とも思はぬ兩人が手引き袖引き膝を衝き、忠義の胸の眞實心、思ひやる程殊勝なれ。定九郎「ヤイ十郎兵衞主膳がかはりに汝を殺したら其方の勝手はよからうが、夫では此方の工面が悪い、汝が主に忠義を盡せば俺も又主の云付け、手向ひせずと尋常に臺座からマアはふり出せやい」佐渡平「ヲヽさうぢや〳〵、主膳が替りに死に

知つてをりましたが、兩親に見放され、せう事なしの牽頭持、郡兵衛殿の目に入つて一大事を頼まれ、おのれやれ此役目仕負せてくれんずと、思ふに違ふ葭原のしだら、殿ではなうて伊左衛門、南無三失策してのけたと、思の外咎もなく、佐渡七を其儘に佐渡平といふ不中間、ガ是といふも郡兵衛樣のおかげ、お禮には主膳めをすつぱり殺して了うたら」定九郎「ヲヽ云ふにや及ぶ上分別、某櫻井が組下とはいへど、國元にありし時郡兵衛殿に心を寄せ、兼ねて主膳が預り居る殿の重寶國次の刀、人知れず盗み取り渡し置いたる今日迄も、盗まれしと云ふ評議もなく彼是もつて心得難し、彼奴が心底問に及ばず殺すが近道合點か」佐渡平「氣づかひ有るな」と兩人が、點頭き囁く其内に、雨もをやめば傘傾け、今や遲しと待ちゐたる。かくとや樣子知らねども、蟲が知らすか十郎兵衛は、主人の歸り待ちわびて、勘氣の願ひせん物と、心當どは橋の元、待つとも知らぬ闇紛れ傘はたと行き當り、十郎「ハッア御免」と云うて行過ぐる。うろたへ奴が段平物、「主膳やらぬ」と切り付けるを、落ちたる傘ではつしと受け、十郎「さういふ聲は中間佐渡平、主君の名を呼び切り付けたは、思ひ違ひの油斷させ、此十郎兵衛を殺す工か何にもせよ心得ぬ、胸に有る事撒出せ」と、拔身刎られ佐渡平が、星をさゝれて返答も、破れかぶれと性根をすゑ、佐渡平「樣子知らねばとてもの事、ぶち撒いて云つて聞かさう、高は主膳を待受けて殺して了ふ此方の思案、思

る身の、此後幾年ながらへても、藤屋伊左衞門と名乘るか否や、其時こそは見遁しならず、打つて捨てるが掟の第一、高尾太夫が身の上は、某慥に預つたれば、そちが頼みし親元へ、急度渡してくれんず」と、餘所を憚る表向、首桶だかへ立上り、主膳「郡兵衞殿も其儘御前へ、御苦勞ながら」と挨拶に、返答しかなのむしやくしや腹、當り眼に角立て、郡兵「ヤア家來ども伊左衞門めをほい捲れ」と、呼はる聲も割竹の、情用捨もあらしこに、追捲られて伊左衞門、名計り消えて生殘る、姿弔ふ親里へ、立寄る事も渚の千鳥、泣音不便と見送る夫婦、必ず無事でと一言も、いふにいはれぬ關の戸が、今ぞひらくる櫻井の、色香爭ふ難波潟、名も夕霧に逢阪や知るべの方へと 三重 行雲の。

第三

下總と、渡せる橋は兩國の、國境をば名に呼し、橋のあいろも見えわかず、猶降しきる夕立の、篠を劍せる雨の足、夜目にもそれと蛇の目傘、えならぬ工の二人連、兩國橋にさしかゝる。定九郎「コレサ佐渡平、郡兵衞殿の頼みにより、諜し合せし今宵の手番、主膳が歸るは此道筋、有無を云はさずたつた一討ち」佐渡平「ア、定九郎樣聲が高い、モ私も腹からの町人でもなく、刀さす譯も

ても似ぬ、郡兵「コリヤ何者の首、伊左衛門めはナ、何と召された」主膳「ホヽ驚きは理、此首こそは佐渡平に方人したる競組の團八と申す者、褒美のわけ口貰はんと僅な金に目がくれて、貰ひに來たは此奴が不運、思ひ計つて某が、裏より廻して此通り」郡兵「ヤ何が何と」主膳「ヲヽ知るまいと思召すが、最前歸つた佐渡平め、伊左衛門と顔見合すが否や、互に驚ぐ其座の模樣、聞合すれは葭原で、殿と思うて切込だれば、伊左衛門より大事の科人」郡兵「ヤア默り召れ、佐渡平めは國元より、召連れた身共が家來」主膳「イヽヤさうは言はさぬ、夜前此地へ到著召れた其許、其又家來の佐渡平が、伊左衛門とは何國で顔を見受けましたな」郡兵「サア夫は」主膳「たつて爭ひ召るゝと、追ひ返された奴がかはり、御自分にも詮議がかゝり、切腹召れずばなりますまい、そこを存じて此所へ、折幸ひな此首を、藤屋伊左衛門と名を記し、科の次第書顯し、鈴の森にて獄門にかけ、死骸は則ち京都の親元へ、送届くる上からは、伊左衛門は死にたると同前、助けて殺す拙者が政道、違變ござらば此首の、科を顯し申上げうか」郡兵「サア夫は」主膳「何と違背はござるまい」と事を納める主膳か情、小庭に聞きゐる伊左衛門、しほ〳〵として手をつかへ、伊左「お志は有難けれど、若し贋物と此事が、お上へ知れゝば御身の難儀」主膳「ホヽ其義は少しも氣遣ひなし、お咎あらば汝が次第、申開きは胸にある、とは云ひながら伊左衛門、假にも成敗した

感じ入り、主膳「殿のお胤を葭原にて傾城遊女と云ひふらさば、家老を勤る我々が誤り、其誤りを隱したる其方なれば、助け置きたき者なれども、郡兵衛を始とし、高尾樣を先殿のお胤と云ふ事、我口より露顯して、上へはどうも打明られぬ、さすれば御前で受合うた、紛れ者の詮議を正し、主人の明を立つるが第一、不便ながらも伊左衞門、覺悟せよ」と言放せど、心は健氣と感ずる涙、姫も涙の顏ふり上げ、姫「帶は解ねど自は、情を受けし伊左衞門、只一言の禮もなく、又わし故に殺すとは、餘り氣强いどうぞマア、あの人の命を助けかはりには此高尾、とても一度は葭原に、濡し此身を今となり、大名のお姫樣と、ふつつりいうて下さんな、やつぱり仕付た道中が、わしや嬉しい」と、どこやらに、こもる涙は一筋に、落ちて流の身にぞ知る、流石に殿の御胤と、背撫でさする閨の戸が、又も涙にくれ合時、主膳「ヤア／＼伊左衞門、最期を知らす暮六つの、かねての覺悟奥庭へ、我も用意」と立上り、姫を伴ひ入りにける。待に待たる小野田郡兵衛、刀提げ奥より立出で、郡兵「是は内室、主膳殿には、伊左衞門めが首打ちめされたか何とてござる、イヤサ閨の戸殿、人にばかり物いはし、なぜ御返答めされぬ」と、重ねかけたる一間の内、響く太刀音閨の戸が、胸にこたふる夫が聲」主膳「科人伊左衞門が首、不便には存ずれど、殿の名を衒たるお家の爲の大罪人、御覽なされ」と首桶の、蓋押明けて指出す。伊左衞門には似

さず殺したがる、詞の意地は夕霧に、叶はぬ戀の意趣晴し、爰で持込み立つて行く。とは知らずして櫻井主膳、主膳「身を失ふも戀とはいへど、惚た計りに輕々と一命捨つる其方ならず、御恩ある殿樣の御難儀と聞付けて、科なき其身に拵し科人となる志、御主人にもさぞ御滿足、併し此度の事計りは、誠の科人の知るゝ迄は」伊左「ハテ疑深い主膳樣、惚た印は互の誓紙、高尾の方から送りし起請、是見て給べ」と懷より、取出し渡す紙包、其儘取つておしひらく、内は白紙に卷添し、小柄を取つて見て恟り、主膳「ヤヽ此小柄こそ先殿のお胤を懷せしお娍へ、後の印と給はりし、三疋獅子に家の定紋」伊左「サヽ惚たと申すはその小柄」主膳「ムヽシテ是を所持せしおかたは」伊左「先達つて此屋敷へ、御入りありし高尾樣、早々是へ御出で」と、呼れてはつと關の戸が傅申す先殿の、姫も今更改る、主從共に深切の、嬉し涙に父の恩、昔を思ひ忍び泣き、主膳威儀を改て、主膳「先殿御死去の砌より、お前樣のお行方を、諸所方々と尋ぬれども、今迄知れざる主人の御胤」伊左「サァ私もお噂を承はつてをります故、惚たと申すも其小柄、葭原に置きましては、お家の瑕瑾と存ずるから、惚れてく惚れぬいた、太夫の身受け、大名の名を銜たる入譯、くどういはねど主膳樣、御得心なされたら、一時も早く御成敗、ハテ死でしまへば事濟」と、さつぱりした男ぶり、隱れ浪花の夕霧と、つがひ離ぬ蝶々の、花に飛びかふ中ならん。櫻井主膳

一人がわざにもあるまい、何者に頼まれしぞ、包まず明せ」と和かに、問はるゝを汐ににじり寄り、伊左「隱しても隱されませぬ、元の發は葭原の、名さへ色ある高尾とて、振袖なれど天晴な、器量勝れし太夫職、ちよつと見初めてそれよりは、夢ともなく現にも、只忘れぬ其面ざし、思出す程猶どうも、任せぬ此身は町人なり、高尾にもせよ誰にもせよ、太夫と名がつきや大名道具、町人風情がいか程に金銀積んでも怪我な事、買ふ事ならぬが廓の掟、叶はぬ事に骨折らずと、儘よと思へど儘ならぬ、戀は曲物心の外と、思ひ付いたる大名出立、玉木衞門之助樣と言ひふらせし上からは、手討にあふは覺悟の前、是より外に露いさゝか申上ぐる詞なし、一時も早く成敗なされ、御不審かゝりし申譯、偏に頼み奉る」と、命を塵と投出した、傾城狂ひの白狀は、樣子ありげに見えにける。郡兵衞一々聞きすまし、郡兵「ムヽさうぬかしや違もあるまい、暫しも主君を苦めし、其首刎ねて埒明けう」と、立上るを、主膳「先々暫く、彼が成敗を貴殿にさしては、此主膳は何を以て申開き仕らん、差圖を受けし拙者を指置き、其元が手討にして、又もや我に誤り付け、追失はん御所存か」郡兵「イヤサさうでは」主膳「ないと思さば暫が中、奥へござつて休息めされ、彼にもとくと覺悟させ、せめては念佛の一遍も、唱へさするが未來の爲」郡兵「ハテどうなりと勝手に召され、しばらく奥で相待つ中、ぶち落して仕廻れよ」と、理非を糺

不審、一ばい晴ぬ小野田郡兵衛、大口明いて高笑ひ、郡兵「ハテ樣々のやつがうせて、大切な詮議の腰折、ヤア〱佐渡平、アレ引立て」と呼はれば、はつと答へて立出つる、顏は互に見て恟り、伊左「ヤア、ヤアわりや葭原で幇間の佐渡七、じやがの團八と云合せ、此伊左衛門を殺さんとせし其方が、爰へはどうして、其形は」と、いはれてきつくり郡兵衛が、知らす目の内呑込む奴、佐渡平「ヤア素町人め慮外千萬、一合取つても武士の家來、幇間とやら鼓とやら、ない名を付くるうぬは何やつ、見た事もない毛二才め、主人の御意ぢや、きり〱立う」伊左「ム、アノお侍の御家來なら、猶以て詮議がある」佐渡平「ヤア細言いはずとうせおれ」と、肩口取つて引立つる。櫻井主膳「暫」と留め、主膳「殿の名を銜しと、申出でたる大切の科人、其儘にして次へ立て」佐渡平「主膳樣控へ召れ、主君の御意は背かねど、其元の差圖は受けぬ」主膳「ヤア己れ中間風情の樣をして詞を返す慮外者、早く立てうせおれ」と、はつしと投げる火入のさそく、頰にべつたり石灰も、染る血汐は十郎兵衛が返しと知らぬ短氣の奴、刀の鯉口留むる郡兵衛、郡兵「佐渡平下れ、疵は受けても苦しうない、定九郎殿と諸共に歸れ〱、何もかも此の胸に、ナ、サア無念をこらへ旅宿へ歸れ」佐渡平「ぢやと申して是が」郡兵「ハテ歸れといはば早うせう」と、きめて歸すは主從の、胸の一物向ふ疵、のり押ぬぐひ立歸る。櫻井跡を打見やり、主膳「サア、伊左衛門、そち

向ふのか、慮外なやつ」と傍なる茶碗、眞額碎けと打付れば、眉間に當つて流るゝ血汐、猶もこらゆる無念の顏色、郡兵「サア云分あらばぬかして見よ、刀脇差さすやつならば、よもや云分有るまい」と、いへど主膳も理の當然、はたとふさがる、關の戸も、何と開かんやうもなし。折から下部があわたゞしく、下部「京都の町人藤屋伊左衞門と申す者、御詮議の手がかりあつて、お旦那へ直談と申し、次に控へ罷りある、通し申さんや」と窺へば、主膳「ム、何にもせよ詮議の手筋と有るからは、遠慮に及ばぬ是へ通せ、關の戸は先奧へ、高尾太夫を同道仕やれ、十郎兵衞も早歸れ、勘當しても主の內、願ひに來るはまゝある事、咎に及ばぬそちが身の上、用事あらば重ねて聞う、早々立て」とどこやらに、こもる詞の締括、すご〳〵立つて行く姿、見やる女房も奧の間へ、しをれし枝におく露の、身にぞ知られて咲く花は、名にし藤屋の伊左衞門、馴し屋敷も改めて、白洲にこそは畏る。主膳「珍らしや伊左衞門、互の無事は語るに及ばず、まづ何は差置詮議の手がかり、殿の災難此身の難儀、いはずとも能く知つたり。シテ其方が手がかりとは、いか樣の筋なるぞ。早く〳〵」伊左「ハアイヤモお氣遣遊ばすな、其お尋者が知ました」主膳「何尋ぬる者が知れたとは、シテ其者の有所は何國、假名實名何と〳〵」伊左「イヤ外までもなく、葭原狂ひに殿樣のお名を汚せし大罪人は、則ち私でござります」と、思ひがけなきに詞

殿、左様ではござらぬか」「中々左様、譬貴殿がいか樣に尋ねられても、左程の大事を仕出すやつ、めつたにお手には入りますまい、いらぬ事に骨折つて、跡で後悔なされうより、身が前で切腹々々、彌主人に科なくんば、誤ない義を申上げ、家を立つるは拙者が役目」關の戸「イヤ申し、夫が詮議致さうと、承つて立歸つた、御前の指圖に違變はあるまい、さすれば吟味も此方から尋出す、此役目十郎兵衛、おぢや」と關の戸が、差圖にはつと立ち出る、心勇のひらく眉、關の戸「イヤナウ十郎兵衛、聞きやる通りの品なれば、主膳殿になりかはり、殿の名を衒し曲者、一時も早く詮議仕出し、夫に手渡しする氣はないか」十郎「何が扨最前より、始終の樣子承はり、出るにも主人の傍、お前樣のお情で、結構な役目をたまはる、此勢に一詮議、拙者にお任せ下され」と、聞もあらせず、郡兵「だまり上らう、郡兵衛が前とも憚ず、誰が赦して此家へうせた、うぬは元國元で、身が家來に手疵を負せ首ぶち放す所を、是なる主膳がぬつぺりこつぺり、命助る其かはり、一生脚は切込さぬと、潔白らしういうて置いて、內證で呼びにやり、此詮議さうなどとはのぶとい詮索、侍の禮義も知らぬ、犬同前の己等は、庭の小隅で尾をふり廻し、捨扶持喰ふがよい役」と、あく迄惡口こらへかね、短氣の十郎兵衛立ちかゝるを、押ゆる目遣ひ、「ハァはつ」としづまる弱身へ付込し根惡る。郡兵「屹相かへて立ちかゝるは、此郡兵衛に刃

女、何と覺えがござらうが」主膳「イヽヤ存じませぬ、拙者此江戸表に罷り居れど、吉原へ參つたは夜前が初め、傾城にもせよ何にもせよ、手前毛頭近付ではござらぬ」高尾「ヲヽさうでござんす」關の戸「イヤ申し女中樣、是に居らるゝは私が夫、櫻井主膳と申しますが、お前の尋ぬる心宛は、どこへお出でなさるゝへ」と、問れて高尾もうちにつこり、高尾「ついにおめもじいたさねば、お顏見知らう樣もなし、お名は違はぬ主膳樣、私はお前の御主人衞門樣に受出されし、高尾と申す者でござんすが、衞門樣のおつしやるには、屋敷の内は人目あり、櫻井主膳と名を云うて、何ぢやあらうとそこへ行け、委細は文で跡からと、敎の道もあとや先、尋ね迷ひし折からに、あなた方のお目にかゝり、尋ぬるや否、無體に私を駕にのせ、連れて見えた此お屋敷、わたしや何にも知らぬ事、惡い所はよい樣に取りなし賴み上げます」と、聲さへしどけなまめけり。櫻井不思議の顏色にて、主膳「ム、心得ぬ高尾の詞、我れを目充に入込せしは、某に越度を付け、切腹させんずたくみごと、コリヤ〳〵女房、詮議ある高尾太夫、奥へ伴ひいたはり置け、給はる日延の今日より、其曲者を尋ね出し、主人は勿論此身の言譯、さつぱり仕上げてお目にかけう、山口わせい」と立上る。定九郎「イヤさうは得致さぬ、拙者貴殿の組下とはいへど、疑ひかゝりし其元なれば、屋敷の内より外へとては、一寸も動さぬ、それが互に身の潔白、何と郡兵衞

前、武士に似合ぬ三絃太鼓、現ぬかして大名の家名を下すは何故ぞ、早く言譯致されよと、尋ねの内も立板に、水を流せる主人の返答、十が九つ其座にて、申譯は立ちたれども、衛門之助と云ひふらし、訴出たる上なれば、其名を付たる紛れ者、五十日の日延の内、某急度吟味を遂げ、主君の言譯致さんと遮つて願ひしかば、早速に相叶ひ我は夫より吉原へ馬鹿に成つて窺ふ所、衛門之助といひふらし、上もなき大騒にて、立歸つたる殘念至極、イデ追ひかけんと思ひしが、イヤ〳〵一旦此場の陣を引き、ゆるかせに詮議せずば、捕がたしと思ふから、我も是より身持放埒、主人の爲の遊興は、毒を以て毒を消す、主膳が極めし胸の內、連添者にも深く包み、惰弱に見せし、詮議の第一」郡兵「イヤ主膳殿おかれい〳〵、潔白らしう聞ゆれど、管領よりの仰の通り、衛門之助殿を唆かし、高尾といへる太夫を身受けさしたもこなたの計ひ、疾く存じてをる某に、うはぬんめりの突付賣、其手では行かぬ、もうよい加減にいうて仕廻やれ」主膳「マヽ左程實正御主人を、御供せしといふ」郡兵「ヲヽ慥な證據見せませう、山口定九郎殿、最前の女是へ同道めされ、早う〳〵」「畏つた」と定九郎、連立つ姿振袖の、打かけ模樣外ならぬ、實も廓の風俗と、紛ふ方なき其粧ひ、郡兵「主膳殿見られたか、今日是へくる道すがら、此者に出合ひし所、主膳樣のお屋敷はと尋ぬる餘り、樣子を聞けば右の段々、山口殿諸共に同道したる此

郡兵「問ふに及ばぬこなたの胸に覺有る今度の誤り、御先祖より代々續く、浪風立ざる家筋なれども、主膳といふ馬鹿侍にたらされ、毎日毎夜の廓通ひ、管領家の沙汰大方ならず、御主人には閉門との噂、聞くと其儘此家へ來たは、貴殿の口からいはさんため、サア有りやうに白狀々々」主膳「ハヽヽ、何事かと存じたれば、イヤモ其義なればお心遣ひ無用にめされ、微塵いさゝか覺なき廓通の御取沙汰、手前の殿の名を借つて奢を極めし紛れ者、尋ね出す其間、五十日の日延を乞請、やすらかに事を納め、主人を供せし某に切腹せよとは何の癡言」郡兵「ホヽ夫程の義知行米を戴く代り、生れ子でも申上うが、若又其尋ぬるやつが其元の手に入らぬ時は」主膳「念に及ばぬ切腹致す」郡兵「ムヽ貴殿が腹をめされば、衞門之助樣の御身が晴ますかな。イヤサ濟むと思さば今爰で、切腹を見屆ませう」園の戸「イヤ郡兵衞樣お控へなされ。イヤ申し主膳樣、お二人の爭ひを、聞けば聞く程只ならぬ、主人の御事お前の身の上」主膳「ヲヽ樣子知らねば道理々々、知りやる通り某急のお召と聞くや否、取る物も取りあへず、屋敷を出る其折から、主人も倶に御前へ參るべしと重ねて向ふ使者の口上、途中にて出合頭、直樣主君の御供申し、承りし其趣、衞門之助其身の德を甲に著て、日々の奢はいふに及ばず、剩へ吉原の廓へ入り込み、毎日毎夜の藝盡、又或る時は時ならぬ、月雪花の催にて、名有る太夫も我一と馴染重て手に手を取り、屋敷の内も廓同

ヤお羨しう存ずる」主膳「是は郡兵衛殿の、女夫の者を悄氣ささうでか、サア〳〵是へ、まづ是へ」と、合ぬ工合を間に合せて、持長ずれば、圖に乘つて遠慮會釋も高上り、櫻井主膳威儀繕ひ、主膳「最前主人に御意得たれど、其元のお噂もなかりしが、到著召れたはいつ何時、シテ殿には御對面濟みましたか」郡兵「ア、いや〳〵、國元を出ましてより昨日迄十日の道中、思ひがけなう參つたは、ちと折入つて其元へ、相談致さねばかなはぬ故、未だ主人にも對面遂げず、參りがけに山口定九郎殿へ立寄り、直樣是へ參りし所、貴殿のお顏を見受ぬから無禮は眞平」主膳「是は又痛入る、用事と有らばゆるりつと、打ちくつろいでお物語。コレ關の戶、早いが賞玩ついちよつと一種一瓶申付きやれ」關の戶「ほんに私とした事か、最前より取紛れお茶さへも上げませず、お赦しなされ」と立上る。郡兵「アいや奥方お心遣ひ無用々々、茶も酒も所望になし、しかし主膳殿のお志、無下に致すも本意ならず、迚も御雜作に預り次手、只一色の肴には、主膳殿のお手際、すつぱりと切腹めされし、夫を肴に一獻酌ふ、奥方早く御用意」と、聞きもあへず膝立直し、關の戶「申し夫主膳には何誤り、何科有つて腹切るのぢや、麁忽な事おつしやつたら、お國の家老とはいはしませぬぞ」主膳「女房默れ、假令いか樣の事あるとも、郡兵衛殿の差圖を受け腹を切る某ならず、殊に又切腹と有れば家の大事、左樣の大事を舌三寸申し出た其仔細は」

私が何と申ましよ」主膳「ムヽ夫でこそ主膳が女房、粋め〳〵」と背たゝき、いやといはさぬ釘鎹、打てば響す表の方、「小野田郡兵衛様御入なり」と、取次の聲に驚く女房、関の戸「アヽ申し今のを御聞なされたか」主膳「アヽ成程、お國の御家老、郡兵衛殿のお入りなれど、此體では逢れぬ逢れぬ、我等暫く睡眠致さん、宜しく計ひ給はれ」と、廻らぬ舌を巻きかける、管も縺るゝとろとろ目、奥へ行くさへ千鳥足、衣紋繕ひ関の戸が、出向ふ間もなく小野田郡兵衛、兼て心は隔の襖、さも荒けなく入り来る、顔も詞もにが〳〵しく、郡兵「コレサ関の戸殿、只今勝手で主膳殿とは尋ぬれば、館にござると承はつたが、手前が参つたと聞いて、最早おはづし召されたかな」関の戸「是は又あられもない、お珍しいお前のお下り、悦びこそすれ何のあなたに隠れましよ、去りながら明るに間なき夏の夜の、勞を暫し奥の間に、ソレ女子ども、郡兵衛様の御出と、主膳殿へお知らせ申しや、早う〳〵」の内よりも、主膳「櫻井主膳、それへ参つて御對面申さん」と、よからぬ中も面に出さず、上下改め一間を出で、主膳「是は〳〵、お下りの噂もなければ、思ひよらざる今の對面、いつ見ても御無事さうで先は重畳」郡兵「アイヤ主膳殿にも堅固の體、我とても衛門之助殿の家老といへど、殿様なしの田舎住居、貴殿はそれに引きかへて、花のお江戸の家老職、御主人のお膝元と云ひ、跡腹痛ぬお樂みで、御夫婦ともにきつい若やぎ、イヤハ

御門前に一時餘り佇む中に門番衆が、咎を機會に漸と、昔の誤り今の身に思ひ當りし此身の上、叶はぬ迄も御赦免の、詫の綱手は奥樣のお情お慈悲」とばかりにて、先非を悔みし男泣、心を不便と思ひやり、關の戸「ヲヽ其悔は道理々々、今日そなたが來たこそ幸ひ、よい時分に呼出さう、最早歸りに間も有るまい、次で待ちやゝ」といふ間なき、旦那の歸りと下部が聲、知らせ眩き奥庭へ、いそ〳〵立つて入りにける。早立歸る櫻井主膳、常には酌ぬ盃の、廻り過たる無意氣酒、羽織の肩の滑れるも知らず、ひよろ付く足元、「ナウ危なや」と關の戸が、取手をじつと引寄せて、主膳「ヲット開かせ給ふな北の方、手前お上より歸りがけ、思ひ付いたる葭原の揚屋で數獻下され、其上有り難い御意の趣、話して聞そか、イヤ〳〵よしに致さう、アヽ面白い手管の諸譯、聞きたからうがマァならぬ、何と憎いか〳〵」關の戸「ホヽヽ是は又ついに覺ぬ醉姿、か樣な事と知つたらばお乘物でも上げう物」主膳「ナヽ何とのたまふ、我等醉は仕らぬ、堅いそもじのお迎より、幇間中居に送られて、漸只今古きを去て新しう、外へとめ木の香箱に、かけとひなたの二つ紋、付けねばならぬ我等が心、お氣に入らずば御勝手次第、候べく候の暇の狀、書いて進上申さうか」と、酒がいはする戯言に、悋氣の口を閉られて何と云寄る片男浪、騷ぐ胸をば押鎭め、關の戸「ヲヽあのおつしやる事わいの、折々左樣の御樂しみも、且は御身の御養生、

願の筋有るとて、お次にひかへて居られます」闕の戸「ム、なに十郎兵衛がわしに逢ひたいとな、何はともあれ爰へ呼びや。早う〳〵」に婢ども、其儘立つて入り來る。館の住居かはらねど、かはる姿の十郎兵衛、勘當の身の幅もなき、身すぼらしげに蹲る。闕の戸「ヲヽ珍らしや十郎兵衛、歩中間とは云ひながら主膳殿の心にかなひ、立つにも居るにも十郎兵衛と、情が怨と成る世の中、連合の氣に背き國を出やつてもう六年、顏は見ずとも便でも聞きたいとは思へども、夫の氣質を計りかね、案じ暮せしそなたの身の上、お弓も無事で出來た子も、息災でゐるかいの」と、殘る方なき闕の戸が、尋ねも深き三世の緣、身にしみ渡る十郎兵衛、淚とともに兩手をつき、十郎「奥樣の仰の如く、見る影もなき私を人らしく思召し、重々厚き旦那の御恩、報ぜん事もあさましや、酒に犯され、郡兵衛殿の家來と口論の上、手疵負し拙者があやまり、縛首にもあふべき所、喧嘩兩成敗と有つて兩人ともに御追放、己やれ今一度、何卒旦那のお爲になり、御勘當の詫せんと、思へど叶はぬ足手纏ひ、三つに成る娘をば國元の母に預け、女房連て大阪の、知己を求め五六年、うき世渡りは致せども、御主人のお身の上拜まぬ日とてはござりませぬ。女房めが申すには、お赦の出る迄はお國へは入る事かなはず、承はれば今年は此地にお渡り遊ばさる、折を見合せ勘氣の願ひ、平に是非にと諫められ、心は先へ飛立ど、はいりかねたるお屋敷の、

ヲ合點の行かぬは尤も〳〵、宵に來りし團八と佐渡七兩人云ひ合せ、我を討ん面魂、我が歸るを待伏し、かゝる狼藉あらんと思ひ、そなたをあとから、駕の中なは我等が身代り」漢の紀信が計略、今は憚る人もなし、我身は駕に打乘つて、太夫を先に道中や、廓をぬけし籠の鳥、跡に殘りし友千鳥、大鳥大名大門口、別れてこそは、三重歸りけれ。

第二

櫻井主膳と表札を打たねど其名隱れなき、阿波の一城主玉木衛門之助殿譜代の侍、主從ともに武藏野の月も忠義に目もふれぬ、堅い屋敷の內庭に、掃除は得手のやつこらさ、打つ水玉の露程も、陰日向なく見えにける。立切る一間、音ないて、立出る女房關の戸、華美を好まぬ裲の、姿心もしとやかに、關の戸「ヲヽ庭の掃除は又平鐵內、日番の勤怠りなく二人共大義々々〳〵、殊に夫は昨日より管領職の御召にて、今において歸りもなく、御用の筋は知らねども、さのみ氣遣ふ事も有るまい、歸られ次第用事もあらん、せめてしばしの內なりとも、部屋へ行て休息しや、早う〳〵」といいたはる下部、「然らば御免」と兩人は、勝手へこそは立つて行く。取次役の婢どもばら〳〵と走り出で、腰元「申し〳〵奧樣、前方お館に勤られし中間の十郎兵衛殿、何やらお

と亭主がそゝより、九八「コレ〳〵たいこ衆、大門口まで七賢人の、はやしでお供はコリヤよからう。サア〳〵お立ち」と浮れ立つ、皆々打連れ騒ぎ行く。所は名におふ大門口、出口の柳夜の風、亂れ騒ぎし折からに、團八は宵よりも、佐渡七が知らせをば、今や〳〵と待つ所に、息を切つて佐渡七は、命から〴〵迯げ來れば、團八「ヤア佐渡七か、宵からほつと待つ退屈、首尾はどうぢや」佐渡七「ア、イヤモ首尾さん〴〵、思ひの外手强いやつ、まだ其上に客に刃向ふ大それた狼藉者、廓中への見せしめと、私が宿を叩き上げ、方々と詮議する。モウ爰には居られぬ、こなんの宿に隱れて居る、あとは貴樣のお働き賴む〳〵」と云ひ捨て、足早にこそ走り行く。團八「エヽ埒もない、よい〳〵何でもおれが一手柄」と、肩唾を呑んで大門の、傍に忍び待居たり。斯とも知らずうてんつてん、唐樂の音の囃子物、先にしづ〳〵舁き出す、俄練物七賢人、待設けたる團八が、駕を目充の手練の手裏劍、目充違へず打込めば、「スハ狼藉者遁すな」と、呼はる聲に團八は、しすましたりと逸散に、跡をも見ずして迯げ失たり。かくと聞より高尾はあわて走り寄り、高尾「ナウかなしやな衞門樣、お心はいかがぞ」と、駕の左右を引き上げて、見れば內には著替の風呂敷、是はと驚く後より、衞門「衞門之助は爰に居る」と、七賢人の出立にて、ぬつと出れば又悔り、高尾「ヤアお前はそこにござつたか」と、悦ぶ中にも不審顏、衞門「ヲ

な、是を呑んでたまるものでござりますか」衞門「ムン、すりやよう呑まぬぢやまで其筈々々。コリヤ佐渡七、此酒には毒藥が入れて有らうがな」と、星をさゝれて」佐渡七「何と」衞門「イヤ知るまいと思ふか、最前の物語皆聞いた、遁れぬ所覺悟せい」佐渡七「エヽ仕舞うた、見顯はしたれば百年目モウ是非に及ばぬ」と相口引拔き突きかくれば、衞門之助身をかはし、刃物もぎ取り緣より下へ蹴落せば、「コリヤかなはぬ」と佐渡七は、息も切戸にかけ出て、逸散にこそ迯げて行く。此物音に亭主末社ばら〳〵と走り出で、樣子を聞くより廓の見せしめと、追駈け行くを、衞門「コリヤ待て〳〵、詮議の有る奴なれども、身が存ずる旨有れば迯げば迯がせ、何もかもおれが心に取つてゐる〳〵、併し太夫が身受は日中に相濟み、此所に長居は無用、ナニ亭主、太夫を連れてモウ歸らう」と、いふに九八罷り出で九八「夫はお名殘惜う存じまする去ながら、此間からの大騷、世上での取さた、申し管領の御耳へもはいつた樣な噂、いか樣もうお歸りなされたもようござりまする」衞門「ヲヽ、さうなうてもいぬる心、サア太夫おぢや」と立上れば、大勢「そんなら旦那、又近々に御來臨を、松の位太夫樣、サア隨分おまめで〳〵」と、たいこ中居も口々に、名殘を惜む暇乞、高尾も倶に盡せぬ思ひ、太夫「お前方も御無事で」と馴染涙の袖の露、衞門之助氣をかへて、衞門「皆も隨分まめで居い、又月見には、太夫を連れて大騷」と、大風にはい〳〵はい

が顔を合しては後日の邪魔、身は屋敷へ罷歸る。隨分ぬかるな」おさらば、さらばと、手筈を極め定九郎、切戸口より立歸る。跡に佐渡七一工夫、奥を窺ふ其折柄、爰へ來るは衛門之助是幸ひと佐渡七は、勝手へ急ぎ行く跡へ、奥に末社を留め置いて、高雄伴ひ、衛門之助は立出で て、衛門「コレ太夫、今奥でとつくりと咄した通り、そなたと肌ふれ寐られぬといふ譯は、肌身を放さず所持してゐやる大切な一品、其譯さへ納らば、ハテ其時はどうなりとも、合點がいたか」大夫「アイ、とつくりと合點が參りました、忝うござんす」と、何か二人がしめやかに、話す間に佐渡七が、銚子盃持つて出で、佐渡七「コリヤ旦那手が惡い、私等をおまきのかばやき、太夫すとお二人甘いな／＼。甘い次手に何と爰で、一つ上りませぬか」と、口は諸白心の惡酒、醉はしかけてぞ進むれば、衛門「ヲヽ是はようぞ氣が付いた、サア一つ呑まうかい。サア一つ注げ」さらばお酌と注ぎかくれば一つ受け、何か思案し、衛門「イヤ／＼素直に呑んでは面白ない。サア一拳せう」佐渡七「ハテマア一つ上つてから、跡で一拳致しませう」衛門「イヤ／＼どうやら呑むに拍子がない。サア／＼是非に一拳」と、いふに違背も何のその、追付けて呑まさんと、佐渡七「サア參りませう」衛門「ロマ、チエイ、ハマ、おつと三拳サア勝ちぢや、佐渡七呑め」といはれて恟り、佐渡七「エヽ、アノ、此酒を私に」衛門「ヲ拳に負たりや知れた事」「アヽイエ／＼めつさう

で様子が知れました。したが最前團八様見えたれども、あの手ぢやいかぬと思ふた故、實事仕を見しらかしたりや呑込んで、投げられさんじた其ぎばの甘さ、イヤモウ芝居の敵役にしても金ぢや〳〵」と、譽めれば圖に乘り、團八「イヤ下地が有る、宮島の芝居も一年働いたて。ハヽヽ」佐渡七「さて衛門之助も今夜中にいぬる様子、殺して仕舞ふ思案はないか」團八「サア、いつその事呼出して、コレ此合口でぐつさりいはして」定九郎「シイ聲が高い。此定九郎が極上々の思案有つて忍び入つた」佐渡七「ムヽシテ、其御思案はな」定九郎「ヲヽ其思案は」と夕月夜、泉水の金魚をすくひ、手水鉢にうつし入れ、定九郎「コリヤ此様に勢ひ能き金魚なれども、殺す思案はコレかう」と、懐中より藥取出し、水にそゝげばこはいかに、働く魚も忽ちに色を變じて死てげり。二人の者は呆顔、團八「ハア奇妙」佐渡七「シテ此藥は」定九郎「ヲヽ是こそ唐の著玉が傳ふる毒藥、此藥を酒に入れ、衛門之助に呑ませ、殺して仕舞へば手間隙入らず、併し仕損じまいものでもなし、團八は大門口に待伏して、衛門之助が歸るを待つて只一打、爰で迯がさば出口で討取る、兩方遁さぬ鎹思案」と、聞くより團八、團八「できた〳〵。然らば佐渡七能い吉左右を待つて居る」ハツトばかりに團八は、大門口へと出でて行く。定九郎「コリヤ佐渡七、此妙藥はそちが氣轉で、ナ合點か」と、渡せば受取り、佐渡七「お氣遣なされますな、今宵の中に」定九郎「ヲヽでかした。身共

つて、興がさめた、氣をかへて離座敷で呑直さう」九八「そりやこそ旦那の御出ぢや、中居衆頼むぞ」ヒンヨイ〳〵、亭主がしやべるは、ヒンヨイ〳〵、打連れてこそ入りにけり。既に其日も黄昏に、人顔闇き樹木のかげ、切戸をそつと押開けて、忍び來るは以前の團八、跡に續いて定九郎、内の樣子を見廻す所に、時分を窺ひ奥よりそつと佐渡七が、傍に氣配立出でて、三人見合せ點頭き指足、庭の邊に立止り、定九郎小聲になり、定九郎「コリヤ佐渡七、そちも知る通り、小野田郡兵衛殿に頼まれて、衛門之助殿を殺す契約、然る所此間より此廓に居續の大騷、聞くを幸ひ其方を頼み置いたれども、吉左右心元なく、此團八を最前入込ましたが、何として殺して仕舞はぬ。樣子いかゞ」と尋ぬれば、佐渡七も摺寄つて、佐渡七「成程御頼み故昨日より座敷を勤め、仕果せたれば大金、殺すに油斷は致さねども、晝夜共に末社を集めて大騷、附々が多ければ只今までも延引。したか、又どして衛門之助殿を殺してお仕舞ひなさるゝ、樣子が篤と承りたう存じます」定九郎「ヲヽ成程不審尤、殿衛門之助一國の主として、酒宴遊興に長じ身持放埒、妾は其數知れず、夫のみならず國中の妹娘をかり集め、或は後家狩なんどと金銀を費し、樣樣と奢を極め、所詮生置いては我々が望も叶はず、郡兵衛殿と申合せ、密に殺す思案、仔細といふは此通り」と、我身の欲を尤に、云ひならべてぞ物がたる。佐渡七は打點き、佐渡七「ムン夫

込んでけつかれ」と、立蹴にかゝる足首捕へ、佐渡七「ハテ聞分のないお方、何ぼたいこ持ぢやとて同じ人間、お前のお脚でけらうとは、そりや餘りお胴欲、足元のあかい内、此お脚の滿足な中に、早うお歸りなされませ」と、足首しつかと痛むれば、顔を顰めて、團八「アイタヽヽヽこりや痛いがな〳〵、おのりやコリヤ手向ひをひろぐな」佐渡七「イヤ手向ひぢやない、足向ひぢや」團八「アイタヽヽヽたいこ持に似合ぬ、こりや手ひどいめに合しをつた、モウ堪忍がならぬは」と、ずはと抜いて切懸ける、腕首摑んで捻上げる。佐渡七「最前から詞甘い中に歸れば、こんな痛いめに合さぬ、御名を出されぬ遊里のお慈悲、腰骨に覺えたか」と、蹴飛す早業向ふへ輕業、間拍子もよいたいこ持、頓作もよき男なり。團八 漸起上り、腰をかゝへて、團八「アイタヽヽヽこりや又ふくりんかけたな、云分の有るやつなれど、了簡して去んでこますは。おのれ腰骨に、よう覺えたぞ、必ず覺えてけつかれ」と、ちんが〳〵、達者な物は口目玉、痛み〳〵もにらみ付け、足を引きずり歸りける。衛門「ヲヽ佐渡七出かした〳〵。たいこ持に似合ぬ働き、そちは見上げた者ぢやなァ」佐渡七「ハイいやもう二才の時からの、ほで轉業が過ぎての此身分、今のお役に立つと申すも、藝は身を助くる程な不仕合と、申す樣なものでござりまする」衛門「いかにも〳〵。コリヤ當座の褒美」と山吹色を投出す。「エヽ有難し」と戴けば、衛門「エヽ埒もない奴がうせを

其上、登詰めた梯子の曲が、呆れて居るぢやけれども、こなんが晝夜の揚詰、おれが手に廻らぬ故、けふ此座敷へしかけたは、太夫を貰ひに來たのぢや、かう團八が云出すからは、金輪際貰ひぬく。衞門殿、下あれ〳〵貰うた」と、腕まくりする竪横縞、並居る者もあぶ〳〵と、手に汗握るばかりなり。衞門之助詞を和らげ、「ハテ思ひ寄らぬ事を聞く、成程太夫に夫程執心ならば、其方に遣さうといひたいが、マアならぬ。身が寵愛の此女、殊に身受も今日相濟み、今晩身が屋敷へ連歸る、夫に何ぞや、下郎の分際で、身が座敷へ踏込む慮外者、生置かぬ奴なれども、遊興の妨にもなれば今は赦す。叶はぬ願ひ早歸れ」と、きつと答ふる鸚鵡返し。團八「イヤ歸るまい、是非太夫を貰はにやいなぬ」と、聞くより中居はむしやくしや腹、仲居「コレ夫は餘り長であらう、あなたのお慈悲有難いと思うて、早ういなんせ。あたいやらしいあの顔わい」と、恥しめられても蛙の面、團八「さういへばもう腕づく、サア衞門、くれる氣か今一言いへ聞かう」と、場所のあしきを付込んで、喧嘩じかけの面魂。たいこの佐渡七押隔て、佐渡七「アヽ申し〳〵團八様、最前から旦那のおつしやる事を、打消しておつしやるは、きつい御無理、かう座敷がしらけては、私が商賣たいこ持も上つたり、御機嫌直して一つ上つて、お歸りなされて下さりませ」と、詫る程猶付上り、團八「そりや何ほざく、うぬらが知つた事でない、似合た樣にすつ

の御無理が出た、したが憎けれど、助けて上げい」と、無息にずつと呑自慢、「テモけなやつ」と引受けて、衞門「サア太夫、中直りの盃」と、さらりと呑んで指す盃、高尾取上げ下戸の氣さんじ、ちよつと受け、太夫「中直りの盃は濟んだれど、堅けれどもお慮外ながら」と指しかゝれば次の間より、團八「しばらく〳〵、其間を仕らう」と、襖押し明けいか物作り一腰ぼつ込み、胸に一物邪面、のつさ〳〵と入來れば、たいこ持もじ氣味惡く、座敷の興も覺めにけり。衞門之助身繕ひ、衞門「ムンついに見馴れぬ男、太夫が間を好むは樣子あらん、マア其方は何者なるぞ」團八「アイ此野郎めは、蛇河の團八といふ者でゐんす」衞門「ムンシテ此座敷へは何用あつて踏込んだ、サア〳〵仔細を語れ」と、氣色鋭く見えければ、團八は猶强付き、團八「イヤコレ、怖い顏さんすないの、阿州の大名玉木衞門之助殿でも、此廓へ入込めば、わしらと同じ客、揚屋の座敷酒間をする事は、成らぬ法でごんすかな」と、物工なる詞の端、衞門之助推量し、じつとおさへる胸の中、こらへず中居が引取つて、仲居「コレ申し、お近付でもないお方、賴みもせぬに間せうとは、ヲヽすかん、お前はほんに梶原平次、間をせうとはそりや無理ぢや。横間から指出ずと、だまつて去んで下ださんせ」團八「エヽあたやかましう嘲るまい、そもじにや構はぬ、今の跡をいうて聞かさう高がかうぢや。此高尾を見切めてから、我等首尺は愚、四五尺をまだ

文言と笑ふに、太夫引舟禿、ばら〳〵〳〵と走寄り、太夫「松廣す、エヽ憎」と、抓り擲かれあいたしこゝ、「是は七賢けんによもない、赦せ〳〵」と迯廻れば、亭主九八押へだて、九八「アヽ申し高雄様、お恨は御尤、是は一番我等が貰ひ」と、いへども太夫は、太夫「イエ〳〵、此間から心のたけを書いた文、一ツに繼いで嘘八百のと今のしだら、わたしや腹が立つわいなア」九八「チチ太夫すのが皆道理、私とてもナウ三彌」三彌「アイ私も俱に」と立かゝれば　松廣「アヽコリヤ待て〳〵、わしは眞實に思へども、此末社の賢人共が、おだてかけての口拍子、祭の俄、下稽古、もう七賢人取置いて、中直しに奥座敷で酒にせう、堪忍仕や」といふに太夫は嬉しさの、笑顔に取付く牽頭持、牽頭持「サア御機嫌が直つたぞ九八様」九八「いかにも〳〵、東助、西助、佐渡七、辨助、大助、合點か」牽頭持「合點ぢや〳〵。旦那太夫すお先へ〳〵」手を引合ひて先に立つ。跡に皆々聲揃へ、「七賢人ぢや、西楽人ぢや、俄ぢや〳〵〳〵」と騒ぎ立ててぞ奥座敷、廓賑はふ大紋日、機嫌も吉原巴屋に、居續遊びの大名客、玉木衛門之助が大騒、美麗輝く燭臺の、火影まばゆき有様は喜見城ともいひつべし。大名風も打碎け、姿衛門もしどけなく、太夫末社を引連れて皆々座敷に入來り、衛門「サア〳〵是から酒にせう」ソレお銚子お盃、中居の政が會釋こほしてつぎかくれば、衛門「チツトこりや強い酌、にくさも憎し、助けてくれ」「ソレヤ大將

傾城阿波の鳴門

第一

唐の七賢、嵆康、阮籍、元咸、尚秀、王戎、山濤、列伶、思ひ〳〵に出立つて、離山の麓、長林竹に會合あり、種々の遊宴たのしけれ。嵆康各〳〵に打ちむかひ嵆「誠や琴詩酒の三ッの友、あら面白の氣色やな」竹の林に猛虎住み、池中は龍の住家といへども、此七賢は事かはり、竹中に酒を愛して蛇呑といふ、異名も殊にこつぶの盃、酌かはしたる不老不死、さいつ、押へつ盃の、間の手元を見ての間、廻る酒宴に、唐歌の、ちやんほんりんとん、すべろんちや、ぶくすい、べい〳〵、ぴん〳〵ろじつ〳〵、ぱい〳〵すべい、ろんびん〳〵、ゑい〳〵さ、諷ふ唱歌のあやもなき。「サ是からは拳酒」と、又つぎかけて、呑めや諷へや絲竹の、緣に雀の一踊、拳を拍子の踊ぶり、ムテ、チエイ、ロマ、ヤツトセイヨイ〳〵、ウ、キウ、ムテ、ヤツトセイヨイ〳〵、ゴウ、チエイ、ハマ、ヤツトセイヨイ〳〵、こんな踊が日本にあろか、有るは阮籍が懷中と、一巻を取出せば、六人立寄りさら〳〵さつと押拔き、立別れ讀む有様は、屏風襖の繪そら言、虚八百の

節籠に鬨の聲、どつと寄來る他戸の皇子、山も崩るゝ大聲にて、皇子「雷鳴丸を奪ひ取り、玄蕃を討つたる奴原、一々に引裂かん」と、飛びかゝるを新左衛門、源藏諸共兩方より、むんづと組めば事共せず、「シャ小賢しき蛆蟲奴等」と、兩手に摑んで引寄すれば、二人も負けじと五臓を揉み、組合ひ捻合ひ根競、しばし勝負もつかざる所に、和氣の藏人かけ來り、思ひがけなく後より、諸足薙いで皇子を押伏せ、「勅諚なり」と呼はつて、既に斯うよと見えける時、鷲塚彈正馳け來り、鷲塚「コレ〱藏人、惡人とは言ひながら、三公だにも死罪の例なし、況や天孫、劒を當つるは恐れあり、しばらく我に預けよ」といへども聞かず、藏人「ならぬ〱、萬民を苦しむる大罪、助け置いては天下の歎」と、爭ふ所へ馳け來る百川、百川「ヤレ早まるな暫く〱、皇子へかける繩こそあれ」と、神の岩戸の御注連繩、躰に確乎と纏ひ付け、「佐渡の配所へ御移り、鷲塚彈正供せよ」と、引立て申せばさすが又、神の御末の徳有りて、張切もせず打萎れ、引れ出づるも神國の、直なる處に安々と、治り靡く竹の末、豐なる代の例ぞと、世々に傳へて書きしるす。

て新左衛門、「ソレ遁すな」「合點」と、向ふに突立つ源藏兼連、その首摑んでどうどのめらせ踏付れは、群集の中を押分けかき分けかけくる苅藻が聲をかけ、苅藻「コレ／＼葛城源藏樣、本望お遂げなされたら、約束の敵討勝負々々」と立ちかゝる。源藏「ヲヽ合點、今暫く我から先へ本望遂げん、專太夫恨の刃受けとれ」と、振上れば新左衛門、新左「待つた／＼、契約なれば討てば討るゝ筈なれども、源藏が粗忽にて鄕右衛門を討たるも此專太夫、儕が命遁れん爲、方々へ宿替して、家札を殘し取違へさする巧、皆是彼がなす業なれば、強ち源藏を敵と討て本意でなし。鄕右衛門を討せし重罪、苅藻が討で叶はぬ敵、ソレ／＼よつて一の太刀、二の太刀は源藏兩人共に本望遂げた」と、事を分たる一言に、實尤と拔放し、苅藻「親鄕右衛門を討つたる敵、思ひ知れ」と切付れば、つゞいて源藏、源藏「父權頭を討つたる恨報ぜん」と、切付け／＼、二人一所に留の刀、さしも健氣に心地よき。時しも馳來る他力坊、始終を聞いて、他力坊「出來た出來た便なき此苅藻身の片付を賴みたし、此後互に遺恨なきやう、源藏殿の婦妻にせば、親々の追善是にましたる供養はあらじ、偏に願ふ兼連殿、源藏「イヤ／＼それは互に心好からず、敵を首尾能く打た上恨はない」と辭退も會釋、新左衛門も立寄つて、是非に／＼と手を取りて、勸むる功德倶々に、結び合する二世の妻、不思議の緣により糸の、長き妹脊と成りにけり。折

顯れ出づる白拍子、女姿を引きかへて、綠の角髮ふり亂し、肌に腹卷小手脛當、嶄然と立つたるは、摩利支天の前髮立、今見るごとき勢なり。源藏「ヤア〳〵新左衞門、其奴詮議に及ばず、雷鳴丸を所持するからは專太夫に極つたり。我こそ權頭兼政が躮、同名源藏兼連、親の敵を討たん爲樣々に身をやつし、廻り合ひたる今月今日、貴殿がかすり手負ふせても、某が本望ならず、尋常に勝負せん、そこ退れよ俊綱」と鐘投捨て立向へば、實尤と新左衞門、腕先取つて引立つれば、遁ぬ所と專太夫、飛退いてつき上り「推量に違はず、汝が親を手にかけた林專太夫とは我事、敵で有らうが仇で有らうが、當時皇子の家來に對し、慮外働く命しらず、皇子は熊野詣を幸、親王方の者を搦めん爲、此麓に御在宿、いで〳〵手配見せ付けん」と、合圖の呼子を吹立つれば、森陰樹間に忍びし大勢、拔きつれ〳〵打つてかゝる其隙に、迯けんとうろつく專太夫、遁さじ遣らじと新左衞門、寺中をさして追うて行く。源藏兼連事ともせず、四方に寄來る多勢を相手、「ヤア東方から御座んせ、南方にぐんにやりめら、西方に大いかずとも、北方蜻蛉蜻蜓めら、中に揃に大小えらばず、腦鉢碎いてほんさらば、來い〳〵〳〵」と小踊して、當るを幸人碎、ばらり〳〵と打付けはね付け打みしやけば、さしもの大勢大半討れ、殘る奴原足腰かゝへ、皆散々に迯失せけり。互番は寺中を追廻され、度を失つて迯出れば、跡に續い

けり。「花の外には松ばかり〳〵、暮れ初て鐘や響くらん。道成卿は承り、始めて伽藍橘の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名付たりや山寺のや、春の夕暮きて見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、花ぞ散りける〳〵」謡ひ返し舞ひ返し、祕曲を盡す今樣に、一人の役人參詣の、老若貴賤諸共に、暫く興に入りにけり。櫻子は人々の油斷を窺ひ折よしと、立舞ふ樣に狙ひ寄つて、玄蕃が髃只一打と、切付くるを抜合せて丁と受けとめ、玄蕃「扨こそ〳〵、供養を守護する我々に、仇なす女疑ひもなき淸姫が怨靈よな。如何なる惡鬼惡龍も、玄蕃が刀に切りしたがへ、永く障碍の根を絶たん」と、開いて付込み打合ひ切合ひ、たゝかふ内に玄蕃が刀、疊みかけて打落され、指添ずばと抜放せば、忽ち鳴出す雷の音、天地も裂くる計なり。膽にこたへ我ながら、南無三寶一大事と、袖に隱しうろつく內、新左衞門立廻り、櫻にかけたる鐘の釣綱切落し、邪魔な女と鐘に入れ、玄蕃が髃取て引伏せ、新左「コリヤ此劍は某が、家に傳はる雷鳴丸、是を所持した俺が本名、林專太夫で有らうがな。眞直に白狀」とひしぎ付くれば、玄蕃「成程劍は雷鳴丸、皇子より預り置いた此玄蕃を、專太夫とやう名を聞いた事もない。粗忽して後悔せられな」玄蕃「ヤアまだ論爭ふは比怯奴、頭上より脚下迄切きざんで白狀させん」と、刀さし付せ違ふ所に、鐘の中より「暫く〳〵待つた〳〵」と聲をかけ、撞鐘摑んでぐつとさし上げ、

は名にあふ更科や、月にうつらふ萩桔梗、尾花尾車女郎花、影に妻戀ふ小鹿の聲、かいろと鳴くと知らせたや。紫蘭芙蓉の花よりも、紅葉よりも戀しき人は、見たい物ぢや、見えつ見られつ水の面、流の身にはうき事も、又よき事も荒海に、帆かけし舟の風次第、揉れて我も身をづくし、心づくしの數々を、いはでの森か松原の、葉越に見ゆる鎗印、對のお道具飾り馬、臺笠立傘大鳥毛、行列揃へてぼつ立てろ。宿入り下馬先玄關先、けんがくはりかけぶつかけろ、合點か、合點だ、踵をぶん付顋突出し、手先を揃へてすつすのす、振好や見よやな今降つもる雪の暮、峯も尾上もおしなべて、皆白妙やしろ〴〵と、明行くも鐘暮るも鐘、思ひ有る身は聞くたびに、つらやうるさや腹立や、此方にもなり彼方にも、鳴か響くぞアレごん〳〵、鐘に恨は數々ござる、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を聞く時は、是生滅法とひゞくなり。晨鐘の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響けども、我は五障の雲晴れて、眞如の月をながめ明さん」眺も盡きせぬ四季の景色、玄蕃も思はず聲を上げやつちや〳〵。玄蕃「イャ何新左殿、最前は胡亂なるかと疑つて叱つたが、紛もない白拍子、櫻子と名を取りし程有つて扇の手の開山、迚もの事に今一曲、面白き事所望々々」櫻子「あら嬉しや涯分舞を舞ひ候べし。嬉しやさらば舞はん」とて、あれにまします宮人の、烏帽子を暫し假に著て、既に拍子をすゝめ

人禁制、其處立て早歸れ」と、苦り切つたる我は顏叱り付れば、櫻子「サア其子細は聞及ぶ、清姫の恨殘て、又もや仇をなさんかと、恐ての事で有うが、女子も女子によりけり、私隱もない白拍子、胡散な者ぢやないわいな。斯した場につらなれば、五障三從とやら女の罪を遁るゝため供養を拜んだ代には、お望み次第何成と、舞てお目にかけふがな」玄蕃「イヤサ舞謠も見たうない、禁制なれば何時迄も通す事ならぬ、邪魔ひろがば家來に云ひ付け、引ずり出すが歸らぬか」と、きめ付れば新左衞門、新左「イヤ先待れよ玄蕃殿、すべて佛事に舞樂を以て供養する事、歌舞の菩薩の員數にして、三國傳來是を學べば、斯かる砌に白拍子が來るは幸、殊に櫻子は今樣に名を得し事聞及ぶ。苦うない一曲奏でい、それ〳〵早う」と勸れば、はつと答も柔かに姿の立木若楓、はでな模樣も今樣の、扇開いて聲をあげ、櫻子「先青陽の朝には、谷の戸出る鶯の、聲なかりせば雪きえぬ、山里如何に、春を知らまし、綵遊に柳櫻をこきまぜて、都の人の行き交も、花に誘はれ招かれて、思ひ〳〵の晴小袖、伊達とじみとを染分けて數も限らぬ幕の內、音締を高く引く糸の、梅は咲かねど鶯の、折々通ふ心意氣、さうぢやといな、花の盛はちらちらちら、散來る我思ひ、眞實さうぢやいな、さうぢやそれかと夕間暮、蚊遣ふすぶる賤家の軒を、ほと〳〵叩く水鷄の鳥、卯の花菖蒲かほよ花、咲いたか〳〵盃の、廻る月日も夏過て、秋

建立、最上の鐘も有りしを、是なる新左衛門の妹清姫が所爲によつて、熱鐵となし失せたれば、他力を頼まず新左衛門、自ら寄進召るゝ筈、しらぬ顔で奉加さするは蟲強い穿鑿」と、例の雑言耳にもかけず新左衛門、新左「手前は鐘樓寄進の契約、鐘の奉加は和尚の望」行者「いかにもいかにも愚僧が願望、惣じて鐘鑄と申すは有縁無縁の衆生を勸め、無數の罪障を消滅さする爲なれば、他力を主と致すが法義、在俗の御存なき事。ヤアとかふ申す内午の上刻、鐘供養の時至れり、いで〱用意いたさん」と方丈さして 三重

今様亂拍子

つくりし罪も消えぬべし〱、鐘の供養に參らん。是は此國の傍に住む白拍子にて候。扨も道成寺と申す御寺に、鐘の供養の御入り候よし申し候程に、只今參らばやと思ひ候。月はほどなく入り潮の〱、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮ぬ、日高の寺に著にけり〱。櫻子「いかに申し候、是は此國の傍に、と云うては堅い。定てお前方も聞及んでござんせう。私櫻子といふ白拍子、鐘の供養と聞て拜たさに來たわいな。其處へ通してくれなさんせ」と、いふも媚く姿の花、玄蕃も暫し見とれしが、玄蕃「コリヤ〱女、此寺は子細有つて、鐘供養の場へ女

いづる情の禮はなまなかに、云はぬが云ふにましくる恩愛、娘よ我子と昨夜まで、呼れし姿も曉は、きえて行方もなき魂を、こがるゝも夢迷ふも夢、夢と見するも後の世に、夢といふべき言の葉も、なく〳〵別れ行く空も、心もくれてさめ〴〵と、降は涙か村雨か、濡れぬ袂はなかりけり。

第五

鐘は一魚千頭の苦身一聽鐘聲の所に離れ、永く菩提の因種を成すとかや。往昔右大臣橘道成卿の御建立、紀州日高の道成寺淸姫が所爲によつて、久しく撞鐘退轉せしを、御弟子行海再び鐘鑄の志願を立て、既に成就してければ、庭に折咲く櫻木を假の鐘樓と鐘をかけ、今日ぞ供養の道場に老若貴賤の參詣も、女人を堅く制するは、不時の鐘碍を隔の高塀、尊き寺は門からと實も殊勝に見えにけり。當時他戶の皇子の命によつて、供養の役人熊川玄蕃、相役眞子の新左衞門尉後綱、しづ〳〵と入り來れば、住持行海和尙出向ひ、行海「先づ以て御兩所ともに御苦勞千萬絕て久き當寺の撞鐘、信心の輩助力を加へし故、此度あらたに鑄立て愚僧が大願成就いたせば、いか許り大慶」と挨拶あれば、熊川玄蕃、玄蕃「誠に當寺は、文武天皇の勅願所道成の

道ならぬ皇子に仕へ、數度の諫言用ひなければ、折をもつて身退かんと存ずる折柄、御兩所の首受取との役目は、幸、何とぞお命助けんと思慮を廻らす所に、此元隆が忍び居る事、最前熟と見付し故態と無情く計ふたり、此上は少も御氣遣あるまじ、御兩所の身替は某が受取て主人の手前首尾能せん」と、忽天地と立替る鷲塚忠心に、二かたの御悦び、新左衛門も安堵の思ひ、新左「先は祝著さりながら、妹が首を姫君のかはりに立るは似寄し事、安珍樣の身替には何れをもつて」鷲塚「ハテそりや此元隆が首さ」新左「イヤ〱是は雪と墨、似ても似付かぬ面體」鷲塚「サア其似付ぬ首をもつて、身替に立樣は、まづ此通り」と首搔落し傍に沸れる藥鍋、おつ取て打かくれば、忽ち熱湯せんりうと、濺ぎ爛れてあやめもなき首さし出して、鷲塚「コレ見られたか、此安珍は清姫が所爲によつて、道成寺の鐘の中にて燒爛れしと、ナ眞直に申上ぐれば御前は濟む、元より蛇身と成つたる清姫、雲に跨り失せたれば顏も形もない筈、ナ合點か、といふが大事の方便、國々末世末代まで清姫は、現在大蛇と成つて安珍を取殺したと、世上へ廣く沙汰するやう、披露あるが肝要、御兩所は山城の國葛野郡にまします、親王の御方へ急ぎ落させ給へと、教はせぬ勝手に召れ。ナニ老母新左衛門、コレサ何をうろ〱、久し振で不時の對面祝著々々、緣あらば重て逢ふ罷歸る。ござらうか、さらば〱」と首桶携へしづ〱と、立

い、斯く顯るゝ上は破かぶれ、天地は覆くり返るとも、御兩所を渡さうか、いらざる無駄骨折らんより、素手振つて疾とゝ歸れさ、意地張ると首が飛ぞ」鷲塚「ハヽヽヽ、此鷲塚が首骨は金輪際より生拔し鐵石同前、汝如きの刀が立うか」新左「ヲヽ立つかたゝぬか、覺の刀受けて見よ」とずばと拔き、打かくれば、まつかせと、兩手に摑し二人を突出で、「サア左が所望か右から切るか、ヤレうて、ソレきれサア〳〵」と、劒の下にさし付ける。二人の心は消入るばかり、母も傍から、アレあぶ〳〵、さしもに猛き新左衛門、人質にあぐみはて、進みもやらずうろ〳〵と、詮方盡て見えたる所に、思ひがけなき大橋元隆、忍び入りたる床の下、疊はね上げ飛で出で、元隆「ホヽ出來されたり鷲塚、貴殿仰を承はり、此家へ向はるゝといへども、若二心もあらんかと、忍びて樣子を窺ひしに、天晴々々驚き入つたる忠心、早く二人の首討れよ、妨する新左衛門は某が受取た、眞二ツにしてこます」と、切付るを、はつしと受け、二打三打鬪ううち、鷲塚すかさず後より、すらりとぬいて元隆が、肩腰かけて大袈裟切ばらりずんと打放せば、人々是はと二度悸り 鷲塚「ヤア騷ぐまい〳〵」と飛びすさつて兩手をつき、鷲塚「某元來濱成が胤なれば、御兩所ともに疎略に致さう樣はなし、其上先年蹴鞠御會の節酒狂によつて傍輩を過ち切腹に極りしを、姫君の御父道成公の御憐愍をもつて命助りし御恩、片時も忘るゝ事なく、

子はいかに」と、色をかへて語らるれば、人々奇異の思ひをなし、割符を合す夢物語、敢なき最期の次第まで、語るも涙聞く涙、安珍大きに仰天あり、安珍「ナニ清姫は死したるとや、扨こそ胸にこたへし變怪、恨妬も一筋に、思ひ込んだる眞實心、はかなき縁とも知らずして、一生我を戀ひこがれ、苦に苦みを重るのみか、錦の前が代りに立ち、命を捨てる心根を思ひやるさへいぢらしや。今一足早からば、せめて末期に詞も交し、心よう往生させんに、不便の者の身の果や」と、人目も恥ず聲を上げ、歎き沈ませ給ふにぞ、猶も涙は止め得ぬ、姫君母も諸共に、又咽かへるばかりなり。新左衛門はつと心付き「マア泣いて居る所でなし、御兩所の首受取らんと、一間に控へし鷲塚に、見付られては叶ふまじ、安珍樣には姫君を伴つて、疾く何方へも落ち給へ、早く〳〵」と氣を苛てば、心得たりと身繕ひ、「サア姫おぢや」と手を取つて、既に出でんとし給ふ處へ、襖蹴放し駈出る鷲塚彈正、飛かゝつて安珍姫君、兩手に摑んでぐつと引寄せ、鷲塚「馬鹿つくすな新左衛門、呑まぬ酒に醉うた面して窺つたは、甘い方便を見やう爲、身替り古い贋物喰ぬ、サア我目通で此兩人、首打て渡せばよし、厭といふと鷲塚が、摑挫に雜作はない、返答せい新左衛門、なんと〳〵」と、憎ざうなる面魂は天の邪鬼、多門天の加護ならで遁れんべうは見えざりけり。新左「案外なり鷲塚、愚者に向つて此新左衛門、まだ〳〵と返答な

耳も聞えぬ、お別れ申す姫君樣、兄樣母樣もうさらば、南無阿彌陀佛」、彌陀佛の、聲も此世の名殘の霜、消えて果敢なくなりにけり。ハア〱はつと錦の前正體 涙にくれ給へば、母も堪へかね聲を上げ、母「禍 德に勝たずといふに、家に傳はる雷鳴丸、守となる劍が無きゆゑ、大事が出來、ふと案じたも斯うした憂目を見やう端、いかなる惡事災難も、此母が身にかゝりはせで、末賴ある娘に祟り、非業の死をすると思へば、一倍可愛さいぢらしさ、義理も恥辱も忍ばれぬ悲しうござる」と繰言も、甲斐なき死骸に抱き付き、前後不覺に取亂す、倶に不便さ新左衞門、目に持つ涙打拂ひ、新左「コレ〱母人未練々々、隙取て鷲塚に、氣取れては一大事、奥へ心を付けられよ」と、引のけ押退け妹が首、はつしと切れば母親は泣く〱一間をさし覗き、母「コレ氣遣ない、急きやるな〱、使者は酒に醉臥して、前後も知らぬ高鼾」新左「マそれは重疊、よい首尾」と、首取をさむる時こそあれ、土砂踏み散し馳來る安珍、緣先にすた〱息、安珍「某夜前此家を出で、道成寺へ赴きしを、嫉妬深き清姫、捨置き迯ると心得しか跡を慕うて追驅くる、形は眼前大蛇となり、我が隱れたる鐘を卷き既に燒死ぬべき處、日比信ずる熊野權現の御名を唱へしかば、不思議に命助かりしと、思へば忽ち夢さめしが、果して鐘は鐘樓よりおちて熱鐵となり、いまだほとぼり冷めず、訝きは清姫、身の上恙なかりしか、心元なし、樣

刀逆手に取直し、吭の鎖を搔切れば、覺悟しながら新左衛門、母も驚きうろ〱淚、錦の前は猶悲しく、錦の前「其方を殺すまい爲に、兎や角いふを聞きながら、早まつた事仕やつた。情なや悲しや」と、縋り付いて泣き給へば、淸姬くるしき息をつぎ、淸姬「お志は嬉しいが、私はお前の身代に、今たゞずともどうで死なねばならぬ譯、恥しながら聞いてたべ、宿世如何なる因果にや、安珍樣を思ひそめ、身も世もあられず、戀ひこがるゝ心から、今朝曉見た夢に、我身を捨置き、お前にそはんと、迯行く男の恨めしく、生ながら蛇身となり、道成寺へ追駈け行き、鐘を纒うて炎に焦し、安珍樣を取殺したと見たはまざ〱正夢の、覺て悲しさ恐しさ、我身ながら愛憎が盡き、直に髮切り、菩提の道に入る合點それともに、迷ひ安きは人心、たとひ姿を墨に染めても、安珍樣の顏を見ば、忽ち瞋恚の角も生え、身中は鱗炎を吐き、苦患に苦患を積むは必定、生ながら畜生道、地獄の種を蒔ん悲しさ、今本心になりし時、早う冥土へ旅立つて、此世の業を果さんと、思ふ折節お身がはり、お役に立つて死ぬると思へばせめても本望、私はなんぼう嬉しいぞや。とに角此身は先生より、廻る因果に責められて、恨に恨、仇に仇、數も限らぬ罪科を、背負て歸る未來の闇、不便と思ひ何事も、御赦されて下さりませ、安珍樣へも此通り、お傳へなされて何時までも、仲好う添うて下さりませ。云置く事も是ばかり、もう目も見えず、

ふ振も皆手段、殊に我身をさし付けて、切らるゝ覺悟でせし事ぞや。心ばかりははやれども、かよわき女の刀業、一思ひに切れはせで、却てあなたに手を負せた、勿體なさ恐しさ、今更悔むに其甲斐なし。とは云へ今まで安珍樣を戀ひこがれた我なれば、是も誠とし給ふまじ、死んだ跡での言譯と、認めおきし此書置、見て疑を晴してたべ」と、懐より取出す一通、母は取上げ押開き、母「コレ〳〵、姫君、新左衞門も見てたもれ、今の詞に違はない、それでこそ我子なれ、出來した〳〵けなげ者」と、さし寄つて撫さすり、褒美の詞も心は不便さ、目にもる涙おし包み、笑顏つくれば錦の前、錦の前「其心とは知らずして、非道の刃にむざ〳〵と、切らるゝ事の口惜さに、あしらふ刀もならはぬ業、ついねがそれて此樣な、むごたらしい事してのけた、こらへてたも、赦してたも。如何した緣かかほどまで、揃ひも揃ふ親子の忠節、身代と立てるも自ゆゑ、先だつてもいふ通り、皇子方の詮議強ければ、とても遁れぬ我が命、今手にかけて使者へ渡し、淸姫を助けてたも、賴む〳〵」と手を合せ、首さしのべて、待ち給へば、新左衞門押退けて、聲あらゝげ、新左「ヤア聞分なし姫君、妹が健氣の言譯、得心で立つ御身代無下になさるゝは、ソリヤお情ない。何事も我々次第に打任せ、サア構はずと一間へござれさ」錦の前「イヤなんぼでも淸姫は、殺さす事ならぬ〳〵」、新左「是はどうした御合點」と、制する内に淸姫が、

が望を叶へんと、我儘働くのみならず、大切なる姫君に、かすり手負ふせる天罰知らず、もう義理も情もない、生置いては主人の妨げ、打放さん」と、手を懸くる柄に取付き母「待つたく、全く此母が娘を庇ひ、止るではない、たつた一言いふ事あり」と押鎮め、母「コリヤやい娘、今も今、親子の義理づく、諍ふも皆忠義、其中で此様な大それた事仕出し、母が顔まで、好う汚すなあ。ほんにく姫君は、元より新右衛門の手前も面目ない、昨日の様子を見るからに、如何なる過あらうかと、此母が胸は板、手も口もだるい程、意見折檻色品かへても聞入れず、執著深い心から、此恥さらし業さらし、どうした因果な生性、憎うてく何と云はう様がない。コリャとても助け置かれぬ命、今兄の手にかゝるとも、せめて一言御赦されて下されませと、姫君にお侘を申し、潔う死んでくれ、是程の事辨へぬは、鳥獣にも劣つた根性、エツヱ浅ましや悲しや」と、口説き歎けば清姫は、顔ふりあげて、清姫「ナウ母様、お腹立も憎しみも、重重尤去りながら、全く錦の前様を恨妬で手は負はせぬ。最前からお前方の切ない諍ひ、陰ながら聞く悲しさ、血を分けた兄弟なれば、何程お勧めなされても、兄様が義理を立て、とても身代に立て給はじ、何とぞ錦の前様のお命に代つて死なんものと、態と戀の意趣に取りなし、無體を云ひかけ拔刀、此方から先に打廻れば、姫君もこらへかね、切付け給ふを受けつ流しつ、戰

乞食非人でも、似合しき者あらば、代りを立て、御命を救はんものと、日々に心懸れども、只今に至るまで、左樣の者も出合はぬは、御運の極め是非もなし、痛はしくは存ずれども、御首打つて鷲塚へ」母「イヤ是急きやんな、早まるまい。此瀨戸際に身代とまで思ひ付きながら、御首を渡さんとは、日頃に似合はぬ粗忽々々」新左「とは又何故な」母「ハテ身代があるわいの」新左「シテそりや何處に」母「イヤ外でもない、娘淸姫」新左「譯もない事、尤彼が面體よく似たれば、某も疾に心付きながら、討つ事ならぬ仔細は、此新左衞門は先腹の子、妹淸姫はお前の實子、一腹ならぬ兄ゆゑに、情なくも手にかけしと、未來永々恨まん事不便なれば、此儀に於てはなりませぬ」母「イヤそりや以ては同じ事、幸ひな身代有りながら、實子の命惜んで、なさぬ中の兄が忠義を立てさせぬと、世間の人に云はれては、此母が立たぬ。それはともあれ、現在實の親が指圖して首討すに、娘が其方を何の恨まう、隙取つては爲にならぬ、ドレ淸姫を呼出さう」と、立つを引止め、新左「コレ母人、どうあつてもそりやなるまい」「イヤ〱是非に」と爭ふ所へ、間近く聞ゆる鍔音刃音、こは何事と騷ぐ內、錦の前と淸姫が、雙方薄手負ひながら、打合ひ切合ひ切結び、追つ捲つ驅出づれば、はつと二人が中に入り、押分け新左衞門、淸姫をはつたと睨付け、新左「エヽエ憎くい女郎め、此兄が心を碎く始終の樣子を知りながら、數度の意見を用ひず、儕

り、留守の間にころりはあんまり爲たいがいなと、此母を恨ませう、願はくは直々に仰渡され、如何樣共お心任と申しますうちにも歸りませう、御苦勞ながら今暫、何卒お待ち下さるべし」と、餘儀なき、詞に眉をしはめ、鷲塚「ハテどう云へば斯う云ふと面倒い困つた物、尺寸の間も猶豫ならぬ、主命なれども爰は身が了簡、高が首さへ受取れば御前は濟む。エイハ新左衞門がお歸りやる迄待つてくれう」母「ハア、是は近頃忝ひ御了簡、然らば一間へ、ソレ女子共御案內申せ、御家來衆後程迎ひに、コリヤ白菊、お使者が退屈なされぬ樣、お氣晴に酒一つ、隨分と御馳走申してくれ」鷲塚「何さ〳〵酒所望にない馳走いらぬ、それ共に兩人が首今討放さば、それを肴に一盃呑う、女郞どもどしめかずと案內せい」と睨み散して入りにける。時も移さず立歸る新左衞門尉俊綱、常に替りし屈託顏、諸手を組んで眉に皺、母も心を揉む最中、母「よい所へ戾りやつた、今皇子の使者として、鷲塚彈正が來ていふには、錦の前安珍兩人共に此家に居る事、元隆の注進、首打て出せと有るゆゑ、安珍は熊野權現へ參詣と言譯立て共、媛君はどうも遁ず、新左衞門が歸る迄暫くお控へ下されと、一寸遁に云延し、一と間に待たせ置いたり。どうぞお命助けまする分別は有るまいか」と、氣をいら立つれば、新左「さこそ〳〵、隱すより顯るゝはなしと、媛君是にまします事、元隆が注進せず共、草を分つて詮議すれば、洩聞えん事疾より察し、たとひ

其儀は御容赦、急ぎ兩人の首打て渡さるべしとの仰、イヤサ驚き召れな、委細は歯醫者元隆が身が旅宿へ注進遁はない。陳じ立召さるゝと踏込んで家搜、サア目通りへ引出し召され。ヤア家來共首桶持て、早く〳〵」と追立てゝ、退引させぬ歪み頰、はつと思へどさあらぬ體、母「仰の通り安珍殿は、昨日ちよと立寄られしが、熊野權現へ參詣するとて、此家は直樣出られましたりや、それから先は存ぜぬ事、又錦の前樣とやらは、此母にも深く隱し、躮新左衞門が隱ひ置きたれば、留守の内に首打つて渡す事」鷺塚「ならぬといふのか」母「イヤ左樣ではござりませぬが、私は何にも樣子を存ぜず、姫君には、何の科で首打てと仰るな」鷺塚「ハテそりや知れた事さ、今一天四海を掌握有る他戸の皇子、色好を能知つて御心に隨へんと、諸國の人民我一に美女を選つてさし上ぐれば、御所はもや〳〵おし合ひへし合ひ、女が集んで爪もたゝぬ。其大勢の美女をさし置きうつ惚給ふ錦の前、有難しと尻もつ立てあつちから拜膳する筈、安珍と腐れ合ひつゝ走るは徒者、首切るは理の當然、新左衞門は留守で有らうが、紙子著て川へ打投められうがそりや構はぬ。今打放すきり〳〵出しやれさ」母「ハア、それでさらりと樣子が知れた、高いも低いも男が女に嫌れては、一分たゝねばお腹立は御尤、そんなら是非に彼方の首を」鷺塚「たつた今ころりと云はす」母「ホウそれもお使者の役なれば御尤、去ながら、親子の中でも遠慮も有り義理も有

んすんとお聲が高いは、魘れなさるゝ物であろ。起しませうと云うたれば、イヤありや甘い夢見なさるのぢや。其儘おけと猪口才ばつかり、ヲヽおいとしぼや、能々怖い夢で有つたか。此お汗の出た事わい、幸お藥も煎上げた、一口上つてお心を鎭めなされ。夢は五臟の業と申して、氣の草臥で恐しい事も見る物、それを咄すが懺悔とやら、又逆夢とて好い事も有る物、マアどんな夢御覽うじた、ちよつとお聞しなされませ。サア〳〵どうぢやと」口々に、問へど答もない噦、「それが何のむづかる事、お氣の弱い」と、とり〴〵に、諫めつ賺しつ氣の毒さ、背撫でさする計なり。折柄表に下部が聲、「他戸の皇子の雜掌、鷲塚彈正殿御出なり」と呼はれば、「それまあ姫君お部屋へやりましや。お袋樣へ使者の樣子申上げん」と立騷ぎ、皆々奧へ入りにける。程なく立入る鷲塚彈正國秀、底意地惡き面癖も、主の威光をはね袴、肩肘怒らしのつさのつさ、對客の間へ打通り、上座に就けば母は立出で手をつかへ、母「先以て遠路の所御苦勞千萬、何事かは存ぜねども、お使者とあれば、躮新左衞門が承る筈なれども、用事有つて今朝より他行いたす、苦しからぬ事ならば、憚ながら此母へ仰置かれて下さりませ」鷲塚「ヲヽ同姓の老母へ申渡すは、新左衞門も同然、よく聞れよ、使者の趣餘の儀にあらず、定めて聞きも及ばれん、主君他戸の皇子御尋の錦の前、安珍諸共此家に隱ひ置かれし由、言語同斷不屆なれども、

で置かうか」と、又駈出す草履塚、松原過ぎて行先は、間近く見ゆる森林、棟門高塀白々と、甍並べし道成寺、嬉しや爰ぞと走付き、門の戸険しく打叩けど、答も嵐の音ばかり、寺内ひつそと靜つたり。清姫「ム丶扨こそ〳〵、我追來る事疾く知つて、人を隠ひ置くからは、明けぬ筈通さぬ筈、こは何として入るべきぞ。ホウ究竟の事こそあれ、是よ〳〵」と門前の、一木の松に蔦葛、取るより早く飛上り、梢遙に傳ひ行く。裳裾は自然と蛇形の尾先、頭は憤怒の鬼女にひとしく、角をふり立て齒を鳴し、鱗を逆立てくる〳〵、枝を巻立て巻登り、塀を打越し眞逆様、どうど落つると見えけるが、寺中俄に震動し、鐘樓の撞鐘鳴りわたり、響渡れる有様は、百千の雷も一度に落來るごとくにて、凄じなんども愚なり。わつと戰慄く同宿共、門の戸開き飛んで出で、同宿共「ナウ怖や恐しや、安珍様のお頼故、鐘の中へ隠したりや、清姫が追うて來て忽ち蛇身に成るや否、鐘を纏うて熱鐵にし、いとしなげに安珍様を、蒸殺にし居つた。サア丶おぢや地頭へ此様子注進せう」と裾端折り、かけ出す空も曉の、鳥のなく音や鐘の聲、跡に響くも三重魂呼ひ、閨の中より清姫は、魘怯え走出で、邊見廻しうろ〳〵きよろ〳〵、額を撫つ身をさすり、忙然として立ちたりしが、心づく程怖しさ、「扨は今のは夢で有つたか」ハアはつと計に伏轉び、泣くより外の事ぞなき。妼共興醒め顔、妼共「ソレ見やの白菊、先にからふ

叶はぬ事をぐづかはと、とこ吠たり喋つたり、息筋張るので寢られぬわい。足本の明い内とつとゝ去ないでな、但し渡さにや死ぬる氣か、俺此れ迄、焦れ死といふ者終に見た事がない。さらは寢ながら見物せうか」と、舟梁に脚踏ん反し苦口いふも川向ひ、喧嘩じかけと見えにける。今は詮方泣く目をはらひ、清姫「ヲヽ渡さぬ迚爰迄來て、やみ〳〵と歸らうか、恨言はずに濟さうか。此水底に沈まば沈め死なば死ね、念力通さで置くべきか。百尋千尋も何の物かは、渡つて見せん」と身繕ひ、川へざんぶと飛込んで、逆巻く浪をかき分け〳〵、左手に沈み右手に浮き、拔手を切つてさつ〳〵さ、さつと飛びちる水煙、雲をさそへる蛟龍の、巨海を渡るごとくにて、跳ね立て、蹴立てゝ泳しが、瞋恚の猛火五體を焦し、口より吐く息炎々たる、炎を吹きかけ目を瞋らし、髮逆に振亂し、一念凝つたる勢に、舟長悔りわなゝき聲、舟長「ヤレ恐しや冷じや、鬼に成つた蛇に成つた。そりやもう來るはヤレ上るは、喰殺されては成るまい」と、舟を乘捨て駈上り、堤の原を横切に、命から〴〵迯げて行く。清姫は一筋の、瞋恚強勢弛まず去らず、難なく岸根に泳ぎ付き、照る月顔を水鏡、見れば額に角生立ち、髮も形も我ながら、冷じや恐しやと、しばし忙れて立つたりしが、「もう此姿に成るからは、迚も連添ふ望は絶えた。我添はぬから人も厭、錦の前にのめ〳〵と、何の添はせう寢させうぞ。可愛さ餘つて憎さが百倍、取殺さい

ほり、隈なく見ゆる向ふの岸、小舟もようて舟長が、笠傾けて眠居る。嬉しや此川越え行けば、道成寺へは一足と、聲をはかりに、清姫「ナウ〳〵其舟渡してたべ。早う〳〵」と呼はれば、寐耳に獨り舟長が、目を摺りこする佛頂頬、舟長「あた喧しい何ぢやいの。早う〳〵と仰山さうに、たつた㑨の舟賃取ろとて、彼方此方と舟廻しては肩も堪らず。第一ねむたい、夜が明けたら渡してやろ。エヽうまい最中を、けたゝましう起された、あた歩が悪い」と呟けば、清姫「イヤなう夜明の事は置いて、一寸間も待たれぬ急用、道成寺迄早う行きたい。情ぢや何卒渡して下されし」舟長「何ぢや道成寺へ行くと言やれば、宵に渡した山伏の、跡追うてきた女子ぢやな。それなれば猶ならぬ。彼山伏の頼には、樣子有つて某は道成寺へ迯行く者、十六七な女が來らば、必ず舟を渡してくれな、逢うては忽ち命づくにも及ぶ事、若し渡さば、其方共に難儀せう。くれぐれ頼むと云やつたりや、何時迄も渡しやせぬならぬ〳〵」と冷酷なり。清姫「コレなうそれは胴慾ぢや、たとへ渡して下さつても、此方に科も難儀もかけまい。思ふ男を人に寢取られ、私は行ねば焦れ死、捨る命は惜まねども、たつた一言恨がいひたい。つらい悲しい身の上を、不便と思ひ其舟に、載せて下され渡してたべ。慈悲ぢや情ぢや功德ぢやはいの、是ぢや〳〵」と手を合せ、拜つ侘つ身を悶え泣きさけぶこそ道理なる。舟長「ハテあつた執拗いとうばり女郎、

家札を捲つてくれで有らうが、此邊に家は一軒もない、近頃麁相千萬な。そして見ればびらしやらと、色よい著物、コレ惣體幽靈といふ者は、白無垢著て出る物ぢやわいの、いとしや其樣な迂濶者では、極樂淨土の道も知るまい。ドリヤ迷はぬ樣お念佛で、十萬億土へやつてくりよ。なまいだ〳〵」清姫「アヽ是々そんな者ぢやないわいの。私は先へ往た人に、追著かねばならぬ者、何處元で逢しやんした。それが聞きたい、ちやつと〳〵」修行者「ハレ又滅相な事ばかり、形恰好も云はいで、エヽ合點々々〳〵。そりや跡の松原で逢つた、山伏の事であろ。コレ其わろが云うたはの、若い女子が此道を來るならば、俺は川へ身を投げて、死んだと云うて騙してくれ。逢うては強う難儀する。どうぞ跡へ戻してくれと、頼みやつたれど此坊主、嘘ついては未來が怖さに、眞直に言ふぞや。アヽ是々其氣相は何事。ナウ怖や恐しや、おらが知つたる事ぢやない知らぬが佛、南無阿彌陀赦し給へお女郎、助給へ御誓願。なまいだ〳〵南無阿彌陀」ぶつ共這々迯足は、行方知らず成りにけり。「なう是それが眞かいの。エヽ腹立や胸苦しや、それ程いやな自を、女房に持たうと何故云うた、男傾城人でなし恨しや妬しや。噛付ぞ取付くぞ」と、怒る顏朱を注ぐ、色も嫉妬に迷の煙、眩む眼に涙の雨、ばら〳〵ばつと、裾を蹴はらし砂を飛し、駈け行く道も心から、果しも流の音凄き、日高川の渡し場に、漸辿り著けるが早月代もさしの

た」清姫「ハテぢやら〳〵と戲談云はずと有樣いうて下さんせ」飛脚「サア有樣は定めて此方の事であろ。十六七な娘が見えたら、おれに逢うたこと、いうてくれなと頼みやつての」清姫「サア其跡は」飛脚「イヤそれ云うて居る隙がない」清姫「無うても有つても問はにやならぬ、譯聞いて追付きたい。サア〳〵ちやつと行きたいわいの」飛脚「イヤ其方より此方が行きたい、急用ぢや其處退いた」清姫「イヤ〳〵聞ねば通さぬ〳〵」飛脚「ハテ扨邪魔なわろに出合た、時が切れうか知らねども、かい摘んで話さず成るまい。ハテ高が此方をほつと飽て、夜拔けするというたわいの」清姫「さうして如何ぢやへ」飛脚「さつてもくどし問殺すは、コレ是から跡は大事の咄、熟乎と云はねばならぬ。ドレ耳爰へ持てござれ」清姫「其跡はへ」飛脚「耳つ遠」恟りする間に摺拔けて、飛ぶが如くに急行く。清姫赫つと急上し、「扨こそ我を出しぬいて、錦の前にそはん爲、迯隱るゝは汚し憎し、命限り根限り、追驅け追詰め、今に思ひしらせん」と急げば、せく程足本は習はぬ道に疲るゝを、踏しめ〳〵行先に、鉦打鳴しひよつこ〳〵、無緣法界七墓を、毎夜さ廻る修行者が、行違ひさま、清姫「コレ申しちと頼みたい事が有る」と、聲かけられてわつと飛退き。修行者「アア寄るまい〳〵。どうやら今夜は氣塞なと思うたが、案の定出た程にの」清姫「ハアテ苦しうない物ぢやわいの」修行者「其方がなうても此方がくるしい。坊主を見かけて頼みたいと云やるは、

レ申し物問ましよ、廿許の山伏姿、器量の好いが先へ行かずや。お逢なされはせなんだか」と、問はれて、男「成程逢うた〳〵。それは餘程跡の事、宵闇で道筋が知れにくい、道成寺へは斯う行くか、と問うた顏付うぢ〳〵きよろ〳〵、それを尋ぬるこなたの素振、エヽ聞えた、コリャ色ぢやの〳〵、しかも莟の花の色、移にけりな徒も、添ふに添はれぬ事が有つて、一思ひに死んでしまひ、未來で添はうと思はしやろが、ソリャ大な無分別、是迄其手が幾もあれど、先で逢ふやら逢はぬやら、どうやらかうやら便りがない。殊に彼山伏殿には、たんと道が」清姫「おくれたか」男「おくれた段か、なんぼ急いても女子の足、追つく間にや夜が明る。引返して去んだがよかろ、去なうやれ、我古里へ歸ろやれ、我れも宿へ歸らん」と、足も取次に行過ぐる。「ハアア遲れたり口惜しや、いで追つかん」と氣をいらち、小褄引上げ帶引締め、駈出す先はせい〳〵と、一村しげる藪疊、右手の田の面に打續く、井路の懸橋、さゝやきの、橋も恨めし何時の世に、誰が忍びあふ薄の岡、跡に見捨てゝ行先へ、狀箱かたげた早飛脚、行きあたつて「あいたしこ、鼻柱がくわんと云うた。コレ目を明て通りやいの」と、叱ちらして行過ぐるを、清姫「コレコレ待つて」と引留め、清姫「ちと尋ねたい事が有る。二十許な山伏の」飛脚「ヲツト皆迄聞くに及ばぬ、たつた今跡で逢うたが、其山伏の咄には」清姫「どう云うたえ」飛脚「鼻柱がぐわんという

女中を寺に忍せ置く事、氣毒に思されんも計れず、先安珍樣御一人、先だつて御立越し、仔細を語り御賴み有り、苦しからずば早速おしらせ有るべし」と、氣をいら立れど安珍は、進もやらぬ後髮引別行く憂思ひ、さし俯向いてましませば、又縋り寄る錦の前、聞分なしと新左衞門引放して安珍の、髃摑んで突飛せば、すつくと立つて、安珍「コリャ何とする」新左「何とゝは未練千萬、姬君は此新左衞門が預つた。氣遣せずと道成寺へ疾とゝござれさ」おつと心得徒步跣足、日脚も早き暮紛れ、急ぎてこそは。

淸姬日高川之段

行空の道もあやなき戀路の闇、安珍立退給ふと聞き、はつと驚く淸姬が、胸も張裂く瞋恚の炎、焦れ焦るゝ我思ひ、心強くも僞りて、捨行く夫の面憎や、何處迄もおつかけて、恨を言はで置うかと、寢所を忍び立出づる。姿しどなき振袖の、裏吹かへす夜嵐も、身にしむ野邊の霜深き、草踏分けて只獨、呼ど叫べど其人の、影も形も鳴く蟲の、聲も恨めしちりりんく、蛬は我戀を、思ひきれとの辻占か、うるさや厭やと聞捨て、走り躓く小石原、小笹萱原打過ぎて、天田堤にさしかゝれば、向ふへちよこく小挑灯、提げた男の急ぎ足、間近くなれば聲をかけ、淸姬「コ

にやせぬ。微塵も構つて貰まい、此上は安珍様に直々、錦の前と此清姫、何方が女房に成か成ぬかたつた今譯立てる。其處退かしやんせ」と駈込むを、母は悲しく取縋り、「ア、疎ましや」と制すれども、生付たる嫉妬の萌、突退け跳除け駈行くを、飛かゝつて新左衛門、がんづか攫で引戻し、閨の戸明けて打込めば、聞えぬ〳〵と又駈出づるを止むる母親諸共に、突遣り押込み新左衛門、戸をはたと鎖し框下せば、一間の内より錦の前、安珍伴ひ走出で、錦の前「今の様子を聞からに、能々思ひ詰た清姫、心根もいぢらしゝ、添て進ぜて下さんせ。自は是迄」と守刀を取出し、既に自害と見えければ、安珍驚き押止め、安珍「それは一興、清姫が志無下にもならねど、其方が死では我のみならず、父百川が言譯たゝず、兩人共に見捨ぬ思案は某が胸に有り、恨妬は日頃に似合ぬ未練々々」と制し給へば、錦の前「イヤなう恨妬で死るではなけれども、自は皇子より詮議つよく、行く先々を捜さるればたとへ何處に忍ぶ共、中々思ふ様に添ふ事は成まいと、得心して生害。放して死せて下さんせ」と、取附給ふを新左衛門、引分けて刀捥取り、新左「御大切な姫君過有りては某が忠義が立ぬ。お身の上に恙なく、是非彼方へ添せまする仕様模様は追ての事、先さし當つて皇子方の詮議強ければ心ならず、幸道成寺の住僧は、御父道成入道数海公の御弟子なれば、御兩所に是へお出で、暫く御忍び有べし去ながら、いかに所縁あれば迚

あれば、母や其方も倶々に、恐敬ふお身の上、其方に縁切らそとは、慮外といはうか、勿體ないといはうか、道も法も辨へぬといふ物、其方が思ひ初たは、かうした事を知らぬ昔、所詮無い縁とあきらめて、さつぱりと思ひ切つて」清姫「イヤ成ませぬ」母「サア其ならぬ所を」清姫「コレはしたり、同事をくど〳〵と、そして何ぢやの、恐敬へ、兄様の爲にこそ御主人で有らうけれ、私は終に奉公せねば、お主でも杭でもない。まして戀路に高い低いの隔があらうか、高位皇妃の姫宮でも、大事の男を添せはせぬ、思ひ切る事如何ならぬ」母「コレハ扨爰な子よ、能加減に情張れ、是非々々ならぬと云ひ募れば、姫君も女子の意地、よもや負けてはござるまい、時には安珍様の御難儀、コリャ新左衞門が強い目に遭はすぞよ。とはいへ思ひ込だ殿御、此儘に打捨て殘多いも尤も、よい〳〵母が思案が有る。姫君に事譯いうて、安珍様と契約の通り、夫婦の盃取かはさせ、其上で思ひきらそ。暫く待や」と立て行く。障子押明け新左衞門、つゝと出で、新左「ならぬ〳〵、母の詞が甘ければ、附上つて様々の存外、主人に恨有る女、不時の災有まじき物でなし。只今よりきつと改め、御兩所の傍近く參る事堅うならぬぞ。コレサ母人何をくど〳〵。ソレ引立て部屋へござれさ」清姫「イヤ是兄様、いかに妹なれば迚云たいがいなそりや慘い、男の傍へ女房が行くに、怖い事も何にもない、さう胴慾に出さしやんすお前方を相手

る事、默し難き一大事、たとへ夫婦の語をなすとも、アリヤ畢竟立物、其方を思ふは眞實の戀路」清姫「アヽ是言ふまい〳〵、そんな間似合聞く耳持たぬ。たとへそれが誠でも、假にも煩さい女房穿鑿、外の女子にお前の顔、見せる事も嫌ぢや、厭ぢや。今目の前で錦の前と縁切て下さんせ」安珍「ハテ扨それは聞譯ない。マア氣を鎭めて」清姫「イヤ〳〵聞ぬ〳〵」と競あふ聲。聞かねて母立出で、母「コレ〳〵娘はしたない、そりや何事、マア爰放しや」と引分けて、母「如終は彼處で聞きました。安珍樣の餘儀ない言譯、聞入れぬは片意地と云はうか、我儘千萬嗜みや〳〵」清姫「イヤお前までが其樣に、叱しやんすりや猶腹が立つ、私が無理か片意地か、打明けていふ聞かしやせん」安珍「アヽ是お袋、それでは結句氣が逆立つ、却つて此安珍が難儀に成る」母「イヤ大事ござりませぬ、お前が爰にござつては、物に遠慮が有つて惡い、構はずと奥へござれ。後で合點の行樣に、母がとつくと申ましよ、サア〳〵お出」と押やられ、安珍「然らば宜う賴入る。コレ清姫、たつた今も言通り何々の誓文、其方を騙さう樣はない、堅い約束未來までも違はぬ程に、必短氣起しやんな」と、いひつゝ立つて後や先、思ひ廻して氣の毒さ、しほ〳〵として入り給ふ。母は娘の膝に摺寄り、母「親甲斐に無理無體叩き付ると思はずとも、物の道理を合點しや。安珍樣は誰有ふ。參議百川樣の御子息と、聞いて驚く其上に、姫君は新左衞門が以前のお主と

と、雪踏かたしに抜捨し草鞋引きかけたち歸る。白菊は跡見送り、奥へ入らんとする所へ、ばつたばつたと跫は、何事やらんと驚く内、安珍の胸倉取り引き立ち出づる清姫が、急に急いたる恨のしやな聲、清姫「コレ大嘘つき人でなし、エツエお前はの、此美い顏をして、ようもようもぬけ〳〵と騙された事ぢや、ヤレ私とお前が約束は假初の事ぢやない。抑大和の壺坂寺、茶屋の床机で互に見初しより、鞠場の中の云堅め、それより月々の熊野詣に、此家が定宿馴染程思ひも增り、母樣や兄樣に譯咄して、早う夫婦に成りたいといへば、まちつと待て、三十三度も今暫く大願成就した上では、女房に持う、一生添はうと、日本の神佛を誓ひに立て、外の女子は目もかけまいと、コレ此口で云はしやんしたぢやないか。それに何ぢや、錦の前に添はねばならぬと、濃てりとした挨拶、すりや彼方からも厭らしい、お前に逢ふ爲ばかり、館を拔たの走つたのと、あた舌たるいしこなし振、あんな女房持ちながら、なぜ騙しやつた、たらしやつた、今迄命も絶る程、思ひこがれた此胸を、元の通りに直して貰を。償うて返しや」と武者振付き、抓りつ叩いつ髃に、齒形喰ひ入る戀の意地、身を顫はして泣き叫ぶ。安珍ほつと持あぐみ、安珍「今の樣子を聞れては、成程腹立尤もさりながら、全く其方を僞りたらす所存でなし、錦の前は稚き時より、勅諚を以て親々が云號け、一度添はねば父百川は、違勅の科に落つ

御無事なお顔を見參らせ嬉き中にも安からぬ、修行の旅の御艱難痛しさよ」とばかりにて、思ひこがれし溜涙すがり付いて泣き給ふ。安珍「ヲヽ我とても添ねばならぬおことの身の上、心には懸かれども誰に尋ねん便もなし、先新左衞門の世話とあれば祝著々々、シテ此家へは何として來られしぞ」新左「イヤそのお咄は新左衞門が追て申上げん。扨はお前が少將安珍樣かや。いか樣某以前道成公に仕し時見覺し面差、御父百川公に其儘、存ぜぬ事とて是迄平懐に申せし段眞平御免、此上は御兩所ともに我家に忍せ奉り、時節をうかゞひ御代に出さんさりながら、皇子の方より姫君の有所、草を分けて尋ぬる由、壁に耳有り爰は端近、姫君は一間へお出で、安珍樣は旅の垢付風呂に召し御休足、いざ此方へ」と勝手口、伴ひてこそ入りにけり。元隆「いやもうお暇申します、それにござれ」と中の間の、襖押明け立ち出づる大橋元隆、妣の白菊がおくり出づれば、元隆「コレ女中、又今日も素手ふつて戻ります、去りとは片意地な娘御、お袋が甘いからやんちやいうて齒をぬかさぬは」白菊「サア私等なら術ない目をせうより、つい拔てもらひませうに」元隆「ヲヽそれ〳〵、惣體齒には限らぬ、十六七の血氣盛、ぬく時分に堪忍すれば、陰氣が凝て病に成る。其處を直すは此元隆が得物、何時でも賴しやれ、ついちよこ〳〵と拔てやろ。ハア南無三寶、ぬけいでも大事ない、履物の鼻緒がすつぽり、コレちよつと借ります」

は涙にあやぞなき。新左「コレハ〱又よしなき事仰出されて御歎き、それでは猶お氣の痛となる御病氣が出まする。誠に某、御館に勤しは若年の時、親庄司相果て家を繼ぐべき者なければ、暇を申し此所へ歸りしが、其後御父道成公には御遁世遊し、叔御廣純卿御家督相續ありて、此度皇子の謀反に組し剰へ、姫君を差上げんとの事、某館に有るならば、かく御流浪はさせませぬに、性根据りし御家來なき故、國土の亂れ御身の御難儀殘念さよ去りながら、御云號の安珍公、尋出して御夫婦となし二度御代に出すべし。御心安く思召せ」と世に頼もしき詞の末、錦の前「ヲヽ兎にも角にも其方を力、よきに頼む」と仰の内、表へ人音、はつと驚き、先御忍と一間の障子、ひつしやり引立て勝手へ出づれば、熊野行者の獨旅、通ひ馴たる山伏姿、安珍は定宿に案内もいらず笠取つて、によつとはいれば新左衞門、新左「テモ珍しや安珍、面妖毎月見える人が何としてか二月餘も參詣ないは、若氣色でも惡いかと、家内が毎日云ひ出し氣遣ひ致て居た」安珍「コレハ扨御親切忝い。我等も今度が三十三度の參り納め、大願成就いたせば是程嬉しい事はござらぬ。又何時もながらお宿の御無心頼まする」と草鞋の紐、解間おそしと錦の前、聲聞付けて走出で、錦の前「ナウなつかしの安珍樣、お前に逢はん爲ばかり、館を拔出で彼方此方と流浪の内、不思議に此家へ廻り來て、新左衞門の世話に成り、お目にかゝるも盡せぬ縁、

上にもたしなむ最中、厭といふも無理ではない」と、了簡付ける親心分別なきは習慣なり。折節つかく入り来るは、歯醫者大橋元隆、母「コレハく御苦勞にようこそお出で。惣ども煙草盆お茶持てこい」元隆「イヤ何もお構なさるゝな。扨昨日もちよと申す通り、惣じて三十三枚歯を生ぜし女は、必ず物妬強く執著深きと、世上の噂に申す如く、娘御の病氣は物思ひより起つて、歯を痛め癪氣を上せば、迚も本有の薬は浴せても驗はない筈、兎角あの歯を一枚ぬけば忽ち病氣の根を絶ども、ぬかす事は扨置悍馬のはねる樣に、ぴんくしやんく寄付けぬには困り物、今日はどうぞ騙かけ、拔て進ぜる工面がござらう」母「サア今もそれを申す事、お世話ながら何とぞ御療治頼上げます、いざ先奥へお通り」と、伴ひ皆々入りにけり。時しも一間の障子押明け、あるじ新左衞門尉俊綱、調へ置きし長持の蓋押開き、錦の前を出し參らせ、新左「不思議に奈良の町の道具屋にて此長持を買取り御目にかゝるも主從の奇緣、大切の御身なれば家内の者にも深く包み、長々御窮屈なる御住居察しやられて痛はしゝ。暫く是にて御氣を晴させ給へ」と、恭しく手をつけば、錦の前は世を忍び日影見ぬ目の面瘦て、麗かならぬ聲をひそめ、錦の前「昔の誼を忘れず、身にかへて段々の介抱、何時の世に忘れうぞ。惜からぬ自が命永へて、憂目をしのぐも夫故、此上ながら、何とぞ安珍樣の行方を尋ね二度廻あふ樣に頼む」とばかり打しをれ、跡

は、慰よりよりよい事があれども、それがどうも儘ならぬ」母「マアよい事とは」清姫「サレバイナいつもお宿を申します熊野行者のお山伏、安珍樣が覺えてござる、奇妙な加持を賴だら早速に直らう物、どうしてお出なされぬぞい」母「サア此人は熊野權現へ、三十三度の願有るとて每月參詣、此方を定宿に賴み、最早今一度で願も滿ると云はしやつたに、何としてか跡月も見えなんだは、若氣色でも惡いか、便せうにも確乎りと所は知らず」清姫「サア其所を知つたらば私がつい尋ていて、此病も直して貰ひ御無事な樣子を直に見て案ずる胸が休めたい」と、思ひ積し戀病を、包に餘る詞の端、母は悟れどそ知らぬ顏、母「ソレ〳〵其樣に深う苦にせいでもよい事を、假初にもくし〳〵と物思やる故、齒の痛も一倍强い。昨日も齒醫者の元隆樣が樣子を見て、どうで此齒は一枚拔かねば治るまいと云はしやつた。今にも見えたら意地むぢ云はずと拔てもらや」清姫「ヲヽ母樣の譯もない事言はしやんせ、大事の揃うた此齒をぬいてよい物か、あた見苦るしい恥かしい、そんな事假にも云うて下さんすな」母「ハテでも病の直る事、醫者殿が惡い事は仰しやるまい」清姫「アレまだいの、私なんぼでも拔事いや。聞もうるさい面倒」と、生付たるやう腹立、顏を振袖ぴんしやんと、寢所にこそは入りにけり。跡打眺め母親は氣の毒顏に、母「テモ扨も片意地な者では有るぞ。とは云ふものの若時は誰しも有る事、十六七になると早前後見て、よい

御子見送り賜は、六十餘州を御餞別、娘二人は母親の死骸を殘し稱名を、胸に唱へて未來へ餞別、行は神道戻るは佛道、中を隔つる藏人は、忠義の道の道直に、先長岡の花の地へ、宮を、供奉して立出づる。

第　四

義士は交りを絶つとも惡聲を出さず、忠臣は國を去れども、舊恩を忘れずとかや。名にし熊野の山疊む、室の郡に富榮え、世々に續し眞子の家、新左衞門の尉俊綱、美若の比は公に仕へし身の、父庄司歿して後、二度館に歸り花、幾春秋を置く霜の、老母に孝行妹を寵み、主持ぬ身は野邊の雲、心は塵の亂なく、寢覺を樂と暮せしが、近曾より妹の淸姫が病氣とて、館の内は密々と婢どもが立ちかはり入替り、爰を煎湯とりぐに量る水さへ澄かへり、ついの物音跫も、心を付て立ち振舞ふ、家の行義ぞ格別なる。實病女より見る母の傍で氣遣安からず、娘をつれて一間よりしづくと立出て、母「ナウ淸姫、心持はちとよいか、百病も氣からと、寢てばかり居やる程痞も下らず、齒の痛も募る道理　庭に折咲く花をも眺め、皆の者が世間咄聞くも慰則ち養生、心を晴しや」と有りければ、淸姫「イヤなう母樣氣遣うて下さりますな、私が此病に

返答せいサアどうぢや」と、引裂かねぬ面魂。詮方つきて見えたる所に、山の部の親王は、長押にかけし弓矢おつ取り、切て放せば誤たず、廣純が大推より咽吭かけて射落され、眞逆に落るを、藏人かけよつて、首打落し御旗を奪ひ、藏人「コレ〳〵百川殿、天皇玉座にましまさぬと、廣純が一言心許なし、イデ御行方を尋ねん」と、驅出すを、百川「ヤア待て藏人、玉體危く某が、夜前密に、愚妻にも隱し忍せ奉る。御尊顏を拜せよ」と、聖天の襖戸さつと開けば、御簾卷上げて御父天皇高座に悠々と、四方に立たる御旗は、玄武朱雀青龍白虎、風に翩翻人々は、魂悔り、はつとばかりに平伏す。天皇御聲麗はしく、天皇「絶えて久しき寶劒を、奪返せし百川が計略感ずるに餘り有り。妻の最期山の部が弓勢、驚き入りし」と詔り、親王はつと奏て曰く、親王「今廣純が禁庭を放火せしと申すは重疊、元此國は、四神相應の地にあらず、急ぎ都を山城に御遷し候へかし。それ山州遷都の地は、南北行程百里に餘り、山河四方に麗はしく、此地に新都を造營し、皇居と定むる物ならば、敵の恐も候まじ、山の部の親王が小智の願ひに候」と、年に似合ぬ江師名智、けに理りや此親王奈良の都を今の京、平安城へ遷れし桓武天皇、是とかや。心任と勅下り遷都の土地の御祓せんと、玄武の旗をおつ取りて進み給へば藏人は朱雀の旗を、預りて八重垣、檜垣青龍白虎、てん手に携へ御供に、月の都を立出づる、日の御神の御末人、

と云ひさして、はつとばかりに泣きしづむ。手負は猶もしやくり上げ、幾瀬「子に別行く親の身が、どう苦にせずに死れうぞ、分て迷ひは安珍事、親の勘當流浪して、長の旅路の熊野道、今に通ふか參るかと、夜は終夜案じ寐の、枕より外我涙、泣けど知るもの無きぞとよ、せめて未來の手向には勘當赦して下され」と、頼む詞の息遣ひ消入る如く見えたれば、百川悲歎の涙ながら、百川「元勘當も當座の計略、追付け赦して呼返さん、必々心にかけな。皇子へ因縁の深き身は、外より洩れても疑かゝる、生きて其罪受けうより、出來した覺悟をよう極めた、極樂淨土の導は、六字の名號忘れな」と、勸るに功德倶々に、唱へとなふる南無阿彌陀、佛の一字に息止り、眠が如く絶え果たり。「ナウ是しばしと二人の娘、縋る甲斐なく兩人も、涙に咽ぶ折柄に、表に響く攻太鼓、鬨をどつとぞ上げにける。はつと人々歎をとめ、「コハ何者」と見る所に、右大辨紀廣純、馬上に跨り手綱掻繰り、廣純「ヤア心得ぬ百川、今日内裏を炎上し、天皇を尋ねる所に在所知れず、扨は汝が隱したに極つたり、其上最前皇子を賺し寶劍を奪取つたるは、正しく一心、急いで寶劍天皇を渡せ、異議に及ぶとコリャ是を見よ。神代より傳はる、日月の旗眼前に引裂き捨て、官兵集る便を切うや。如何に〳〵」と御旗をば、兩手に引張見せかけたり。百川「ヤレそれ裂は天下の凶事、天命をしれ廣純」と、いへども聞ず、廣純「ナニ天命、あたる罰は汝等が身の上

事も有らうかと、廻遠き計略も、君の聖德厚きにより、まんまと奪返したり、皇子の發氣も本心ならず、數萬の軍勢集め給へば、かく謀し事、洩ては忽天下の亂、祕すべし〳〵一大事、サア何方も此聖天の間へ金打」と、勸に從ひ藏人夫婦、檜垣も俱に神罸明罸、洩さば受けんと誓の詞、何思ひけん女房幾瀬、有合ふ刃物追取つて、ぐつとさし込む心下、ナウ悲しや」と二人の娘、走り寄れば藏人も、「コハ何ゆゑ」と驅けよるを、「ヤレ寄るまい」と手負は起立ち、幾瀬「何故とは自は、現在皇子のお乳めのと、洩さで義理が立つべきか、彼方の影で此家へ嫁入、御臺樣よ、奥樣よと敬れるも皆御恩、其恩忘れ大切な、御身のひしに成る事を洩すまいとの金打が、どう成る物ぞ我夫、たとへ提婆を育てても、乳母たる者の習にて、養君が惡いとも、思はぬ癖に氣も僻み、后のお子に負けさせまい、二番と下げまい御位に、卽う〳〵と稚より、我慢自慢で育てたる、附子の鳥の科人は自にてさむらふぞや。お腹の內から惡人の、氣質も備り給ふまい、御意見加へ我夫、親王樣の後見とも、お願ひなされて下され」と、思ひ餘りし淚の體詮方もなく見えければ、藏人差寄り、藏人「ヲ、天晴貞女。是非なく最期いとしや」と、目を搯りこすれば二人の娘、娘二人「皇子樣も天子のお胤お心さへ直らうなら、何の如才がござんせう。何にも心に思はずとも、稱名唱へて下さんせ。私等二人が身の上も、苦にせずとも」―

つぐ者なし。是迄の積悪改めん、「父天皇へ奏聞し、早く位につく様に、汝等宜計ひくれよ。善心に立返りし證據には、渡す物有り是見よ」と、御懐中より錦の袋、皇子「コリヤ是こそは、紛失せし。三種の寶の内十握の寶劍、是を戻すからは、父天皇も疑有まじ、急いで即位の奏聞せよ」と、渡し給へば百川が、膝行して押戴き、取納むれば妻の幾瀬、「天下の父母と成るお方の、お生性はそれ程に、打つて變る物かいの、乳母が育たお子程有る」と、悦び勇めば二人の娘、御代は長久々々と、藏人共に祝しける。百川勇んで、「一時も早く御歸館、それ〳〵御迎の官人」と呼立つれば、皇子も歡喜の色顯し、皇子「是より麿が心をかけし錦の前を尋出し、后となして樂まん。傍祝義」と云ひ残し、還御あれば人々は、倶に千秋萬歳の聲で見送り奉る。親王跡に身の上を、聞いて悲しや恥かしやと、有合ふ脇指おつ取つて自害と見えしを、百川慌て刃物捥ぎ取り、上座へ直して聲張り上げ、百川「御位譲は山の部親王、御即位成るぞ」と呼はるにぞ、藏人驚き、藏人「ヤア手の裏返す一言、汝が躰へ即位とは、逆心成るか」といはせも立たず、百川「ホヽ誠は此寶劍を取返さん爲様々と計略、正しく皇子が隠し給ひしと見込たれども、取りかへすべき術もなく、親王まで奪取つて見すれども、中々寶劍は出し給はず、悪人でも賢きに、ほつと困り、親王を我子と僞り殺さんとせば、外に太子の無きに安堵し、出し給はる

り人々は、血迷うてか、狼狽て、狂氣したかと藏人も、忙れて顔をさし覗く。百川「ホヽ斯うばかりでは合點行くまじ。何を隱さうあの山の部の親王といふは、某が妾腹の躮」藏人「ヤアヽ」百川「年をいへば十四年以前、后御男子を御誕生、御悦び限りなき所に、七夜の内に雲隱し給ひ、密に帝へ奏せし所、后女が産後の歎きも不便、參議以上の子があらば、入替へおけとの綸言、折ふし某がめかけし女男子を産む、先當分の涙押へと思ひ差上置きしが、妾をおきゝやれ、鳶が鷹とて生れ上り、后女は元より天皇の御寵愛、餘て零るゝ竊の勅には、他戸の皇子は悪黨故、位に卽けては民の歎き、汝が躮と人知らぬこそ幸、山の部の親王に位を讓らんと、有難過ぎて恐しき詔、ぞんじもよらず、兎角く皇子へ御位と、四十餘日眼をさらせど、天皇許容ましまさず、所詮躮を討つて捨て、腹搔き切て御位の、評議を一圖に定めさせんと、覺悟極めて斯の仕合、死後に賴むは皇子の事、悪黨といへども、皆廣純がなす業、御意見を加へ、天子の位につけて給べ。正しき胤はあなた一人、我子は果報に道過ぎて、不便な最後を遂さする、ヤレ女房そこ退け」と、心强も突立つて、拔身引提げ立かゝる、皇子「ヤレまて殺すなしばし〳〵」と聲かけて、立出給ふ他戸の皇子、面をつくる柔和の相、御詞も穩に、皇子「扨は親王は汝が躮よな。鷹を位に卽けん爲、殺さんとは過分〳〵。さすれば天子の御胤なく、我ならで御位を

討つて言譯、妹合點か」「ヲヽ合點」と身繕ひ、駈け行く所を母親が、向ふへ廻つて、幾瀨「待つた待つた、今奥には他戸の皇子、夫百川評議の最中、それと悟らば親王を、害せんも計らず、今夜八聲の鳥を相圖、手引を爲うが何と聟殿、思案して待つ氣はないか。大事の前の小事ぢやが」と、さし止られて藏人も、藏人「いか樣時分は惡しからん、必ず夜更けて奪はす氣か」八重垣「母樣手引あそばすか」幾瀨「シイ聲が高い」「然らば後程、合點」と、點頭き囁き、三人は、間遠に隔つ勝手口、母は此方の一間へと、引別れてぞ歩行く。痛はしや親王は、急難のがれ走り出で、逃もやせん、隱れやせんと狼狽へ給ふを、主の百川見付けてかけ出で、取て引据ゑ觀念あれ」と拔放す、手本へ駈くる妻の幾瀨、「ナウ是待つて」と中に隔り、幾瀨「尤皇子を御位に付けたうは思へども、親王樣を殺すとは、思ひも寄らぬ惡逆、早まつて下さるな」と覆ひになれば取つて突退け、百川「ヤア狼狽者、其皇子の御位の、妨となる此親王、今殺さぬと藏人夫婦、奪取らんと忍入り、汝を手引の相圖も知つたり、手早く首を討落し、聟や娘に鼻あかす」と、立ちまふ後へ二人の娘、和氣藏人窺寄り、「大惡人め」と拔打に、はつしと斬れば、丁と受けたる百川が、蹌ぼふ所を疊みかけ、「冥加知らずの國賊め」と、ふり上げる太刀の下、手向ひせじと刃物拔出し、百川「ヤレまて藏人いふ事あり、誠それなる親王は、種腹卑しき贋物ぞ」と、いふに恂

育、手馴ぬ刃物の謎かけられ、はまらぬ時は何とせう」檜垣「ハテ氣の弱ひ、はまらざ無理におし込むか、叩き込んでも間を合そ」八重垣「ホンニいつそ叩き込も、それもよかろ」と緣先の、柱をあてと立かゝるを、襖を明けて母の幾瀨「ヤレまて兄弟、はまらぬ身をば無理やりに、叩き込むと鞘がわれる、まつ其ごとく兄弟が、無理に宮樣貰をというと、親王樣のお命の、鞘がわれるが合點か」二人「ヒエイ」幾瀨「それ知たゆゑ自が、ならぬといふを恨みつらみ、あまい爺御の渡そと有るは、御首打つて渡す氣と、知らぬ二人の愚さよ、忠が不忠となる時は、猶も舅に見限られ、夫婦の緣も絕果てん、合點の惡い娘や」と、敎訓せられ兄弟は、合點しながら立歸り、何んと云はうぞ如何せうぞと、案じに胸も痛むる折から、庭の繁の內よりも、藏人「ヤア〱女、眞忠義の心ならば、其親鮫を打割つて、親王を受取れ」と、聲かけ出るを、八重垣「ヤア我夫の藏人樣か」と、姉が叫べば妹も俱に、檜垣「どうしてあれにはお忍び」と、尋ねよれば上張脫捨て、藏人「某親王を奪はれしより、皇子廣純が館其外、心懸の御館を尋廻るに、思ひの外百川の業と聞き、十日餘りも窺へども、門戶嚴しく、忍び入らん便なく、今朝曉轟の細川より漸〱と忍び込み、繁みに隱れて最前より仔細はとつくと聞屆けた、後楯には此藏人、親鮫割つて受取らずば、親王のお命危し、但しは親を庇ふか」と、制せられて兄弟はつと、「實惡人の父の首

ハヽヽ小賢しき謀、憎しと思へど親王を、渡して二人に悦さう」八重垣「アイ〳〵有難うて嬉うてナウ妹、それ〳〵父の恩は須彌山より高いといなあ、母の恩は泉水より淺いといなう、親持つならば爺親」と、追従いうて勇みゐる。百川「ヲヽ悦ぶ體を見て我も滿足、シテ親王を受取るに、兄弟互に諍ふ體、姉へ渡さば妹が恨み、妹へやらば姉が恨まん、互の異論も氣の毒なれば、父が一つの計ひ有り」と、持たる拔身を二腰さし出し、百川「こりや此姉が刃物を鞘へをさめて見よ。又妹が此拔身を、姉が鞘へ、納めて見よ、かう後家寡と振違はせ、渡す劍が何方でも塡つた方へ親王わたそ、鯉口に瑕付けな、きつと申渡したぞ」と、刃物を投げ付け女房を、引立て一間へ入りにけり。跡に兄弟、何の氣も、つか〳〵よつて拔身を取上げ、檜垣「姉さん是はちやちな謎、お前も脇指私も脇指、身が替つたとて合そな物。何方もこつぽりはまつたら、結句に跡でをかしかろ、サアごんせはめて見よ。拔た時よりさす時があぶない物」と兄弟が、さいて見れども平身と細身、反の違か切先のあたるは芥か埃かと、拔いて叩いて吹いては覗き、八重垣「妹どうぢやはまつたか　檜垣「アイ大方でアア三寸、鞘の臀が細いかして、閊へた樣で鹽梅惡い」八重垣「サア私がのも二寸だけ、切先折るとついはまる、後家鞘でも、ヲヽ辛氣、又詰つた」と振廻し、捻廻して思はずも、ふつと吹出す許なり、八重垣「コレ妹笑ふ程猶さゝれぬ、其方も私も公家

別私は姉がひ、つい漏かして下さんせ」と、いふ内よりも、檜垣「コレ姉さん、妹は格別姉がひといソリヤ身勝手な仰り方、お前ばかりが受取つて此方には鼻あき手振で去なうか」八重垣「イヤ妹、親王樣を受取つても其方へは得渡さぬ」檜垣「ソリヤ何故な」八重垣「ハテ知れた事、此方の連合鷲塚殿は、皇子樣の御附人、其女房へ若宮を渡して自ら夫へ立うか」檜垣「イヤそりや以ては同じ事、御大切な親王樣を奪はるゝ樣な侍の、お内義さんは得やるまい、母樣私に」「イヤ俺に」と、諍ひせがめば母親は、辛さ果なく突きのけ〳〵、幾瀬「ヤイ其處な白癡ども、まだ遣らうとも遣るまいとも、言はぬ内から我物喧嘩は、ホヽヽヽをかしや〳〵、奥に皇子もお入なり、連合の居間も近い、疾つとゝ去んだらよからう。思ひも寄らぬ賴や」と取つてもつかぬ心根の、底意も知らず妹の檜垣、檜垣「そんなら願ひは叶はぬかへ」幾瀬「くどい〳〵」檜垣「ヘエ、もう是非がござんせぬ。コレ姉さん、願叶はざ此脇指、暇の印が命の暇の印ぞと、云合せたは爰の事、用意してサアヽごんせ」と、立上れば、八重垣「ヲヽそれよ、無情い親の目の前で潔よう、サアおぢや」と、互に白刃を拔放し差違へんとする所に、百川「ヤレ待て兩人、親王を渡してくれう、早まるな」と聲かけ出るは父の百川、「エヽそりや本か眞か」と、悅ぶ二人が傍に立寄り、拔身を捥取りえせ笑ひ、百川「舅濱成が子に迷ふ親心と、己が性根に引き較べ、云ひ付け越たは、ハ

皇子「ホウ是迄某に對し左程の事いふ者あらず、遉は皇子が乳の親出來た〳〵。其方が詞に隨ひ、我手にはかけまじ。何事も百川に任さん、何處に居る對面せん」と、振切り奥へ入り給へば、幾瀬「ナウ其夫が猶不詳なし、逢はずとお歸り遊せ」と、いふ間も隔つ襖戸の、陰に御臺は佇みて、案じに胸をいため居る。折から來る二人の娘、願望が叶はずば、倶に死なんと言合す、心細さと悲しさと、此身は何と奈良の京、春日の里に立歸る。それと見るより母の幾瀬、幾瀬「ヤレ珍しの兄弟や、いざ先是へ」とあしらひに、心せきたつ用無心、云出しかねしを妹の檜垣、檜垣「申し姉さん、何かの咄をさし置いて、今の願ひの一通り言出してお覽じませ」八重垣「マアこなたから」檜垣「イヤお前」と、互の辭儀も物らしく、心おかれて、幾瀬「ハテ改まつた二人の挨拶、聟殿達や舅御の機嫌はよいか變らずか」と、問も案じの一つかや。姉の八重垣打萎れ、八重垣「其機嫌の悪いに付き、兄弟ともに舅去、追出されて歸りし」と聞いて恟り、幾瀬「ソリャどうして、何仕損」と詞の中より妹の檜垣、檜垣「コレ母樣、仕損じは父の邪、皇子樣と一味して親王樣を囚にし、押込有ると聞き及び、兄弟の内何方でも、奪かへして來らば嫁、さもなくば是限りと夫々の留守ともいはず、濱成樣の舅去、邪な爺樣に言うたとて聞き入れは有るまい、どうぞお前の了簡で、親王樣を自へお渡しなされて下さんせ」と、頼めば姉も倶々に、八重垣「妹は格

子、俄の入來は穩便の、御沙汰有りとの知せによつて、出迎ふ女は幾瀨とて、元は皇子へ乳を上げて、誼も深く今の身は、參議の家の御臺とも、奥と口との間のまに、五十の花の闌をば、衣紋繕ひ待受ける、二品式部卿他戶の皇子、胤は王位の御末でも、賤しき腹の乳を受けて、邪智に固まる嚴つの相、濁尖として入り給へば、重くもてなし上座へ通し、幾瀨「夫は聖天の行にこもり、饗應遲はるにより取敢へず自がお迎ひ、俄の御光駕心元なし」と申上ぐれば、他戶の皇子、皇子「ホヽ珍しや幾瀨、其方事は麿に乳房をあたへ、傅り育てたる誼を思ひ切々の意見狀、役にたゝねど奇特々々、此度父天皇の愛子、山の部の親王を奪ひ土の牢におし込めし由、百川が忠節是も奇特、誠に彼奴は、弟ながら后腹とてもつちやうし、我は母方いやしきとて、兄ながら位を省かれ、既に弟へ卽位あらんとせしを、寶劍の見えざると、百川が四十餘日眠らぬ眼に睨み立てられ、其場を延した父天皇、たやすく位を讓らうや。山の部さへ殺すれば厭でも位は麿が物、いで捻り殺してくれんず」と、行かんとするを引止めて、幾瀨「コレ申し、乳母が惡い事は申さぬ、お心を持直し天皇樣へ御孝行、諸人を憐み給ひなば、此乳母が念願でもお前を位につけねばおかぬ、何の因果で其樣に、短氣にお生れなされたぞ」と、泣いては諫め諫めては、涙を拂ふ眞實の、母にまさりし敎訓に、逭の皇子も進み得ず、暫し佇みおはせしが、

と、手に手を取りて兄弟が、歎く涙は秋篠や、外山の里に時雨して、幾田川にや流すらん。流に慕ひ水に沿ひ、夫と夫との心根を、どうした緣に氏神の、儘にもならぬ事かいな。肱を枕に假寐の夢も、鴛鴦の思ひは離れじと、二世を結びし男帶、外にわる氣は有まいけれど、惡所らしいがなんよへ、思ひつゞけて行先は、杖突の里高山の、八幡宮の御社、遙に拜し親達の、心柔らぎ我我が、願ひも叶ひ妹と背の、緣を結ばせ給はれと、祈る印を松尾寺、佛の御足殘されし、佛足石は是とかや。敵にあうては勝間田の、池の彼方は生駒山、入日にうつる紅の、秋の照葉が風含み、はらりはら〳〵ちら〳〵と、飛ぶは小蝶か小雀か、いや木の葉ぞや、槇の原、西の大寺招提寺、暮れぬ内にと道急げば、行きかふ人の口の端に、なんぼ其樣にせきやつても、願ひかなよと思やつても、命にかけてと思やつても、日本に一人の大事の夫、思ひ切る事ならぬぞと、謳ふ唱歌は戀なれど、二人が身には大安寺、アヽまゝよ眞野の里、賣間の池も水越えて、哀浮世に川がな二瀨、思ひ切る瀨と切らぬ瀨と、いふもつらさのます鏡、野守の池も、早過ぎて、奈良の京へぞ三重急ぎ行く。諸鳥は高山を高しとせずして、高木に巢を造る、參議藤原の百川は親王を奪ひしより、己が館を二重三重、八重九重の御末をば、洞穴に押込しと、聞くに宮方せんかたも、なき名を呼で毒蟲の、苦百川と云ひ囃す。其張本の斑猫は、御腹替の兄宮他戸の皇

人早くお往きやれ」―「はつ」と答て八重垣檜垣、「兄さんさらばと云捨て、飛がごとくに、三重。

道行　塗分鞘

萩の露、こぼれやすきに月は澄む、誓ひし人も徒に、世に住みながらまゝならぬ、夫にもあはず、舅御に、去られて人目恥かしの、森の烏と諸共に、飛鳥の里を立出づる、姉の八重垣妹の、檜垣も倶に一腰を、見るも恨めし、暇の印、朱鞘黒鞘ぬり分けて、望は一つ二上の、山を見捨てて行くさきは、八重九重や古郷の空、春日の里へ迷ひ行く、情なき身の、父とへば、悪人とて世の人に、しがをいはせの森つゞき、天の香具山隠れなき、衣ほしける御製も有る、其御方も姫御前の、幾夜を假の旅枕、つひに女帝と成り給ひ、袖振る山の滴も、凝固りて御子をば、清見が原にて生み給ふ、其御産屋を啼澤と、鴫立澤も及びなき、夕暮ごとに來て見たや、見せたや栗毛、駒の岡、「叶堂とは吉左右のよいではないか姉さん」と、勇み進んで見せければ、「愚の事をいふ人や、親王様を奪ふとは、其方や私が女の身で、根深い父の巧のもと、どう取返して歸られう、頼に思ふ母様も、他戸の皇子へ縁深し、願ひ叶はざどうせうぞ」「ナウ其案じは館をば、出る時よりかた心、母様頼み叶はずば、直に其場が最期ぞと、思ひあきらめ給はれ」

其言譯して上げまする暇がない。邪魔せずとも其處退いた〳〵」安珍「ヲヽ尤なれども兄弟の誼み、頼む」といふを妹の檜垣、「イヤ兄さん、一味でないといふ證據、何をもつて何でなさる〻」安珍「サアそれは」檜垣「ナント」はつと安珍胸は板、詮方もなく妹が脇指、ぬき取り自害と見えければ、二人驚き縋りとめ、妹二人「詞荒いは銘々が身の上が切なさ、お果なされて言譯が立つかいなう」と取付て、泣しほるれば、ともに目をすり、安珍「言譯せうにも證據はなし。濱成公の疑は、則ち天子の御不審、是晴さいでは生きても死んでも。せめて御恩に腹掻き切り、安珍が曇なき胸の鏡をお目にかける。退いてくれ、放してくれ」と、押退け突退けあらそふ體を濱成卿、見るより駈出で中を引きわけ、濱成「ヤア〳〵安珍、まこと親と一味でなくば、コリヤ是を蹴れ。是こそは汝が親の首成るぞ」と、面體書いたる鞠さし出し、「君は天なり親は地なり。天につくや、地につくや、心底見たし」と件の鞠、突き付け給へば安珍はつと、是ぞ正しく父の顔、惡人なれど勿體なし、如何と心は七轉八倒、濱成「猶豫は一味か、君を捨つるか。主の爲には親の首、性根を据ゑてサア蹴れ」と、催促せられ苦しさ切なさ、八逆五逆の罪受けても、十善天子へ御味方、免させ給へ親人と、走りかゝつてはつしりと、蹴上る鞠の手を引れ、尻居にどうど。濱成「出來した安珍、蹴るに及ばぬ疑晴れた。後日に參内取次致さん。嫁達兩

の暇乞、心づきしか母親は、母「いつ迄いうても名殘は盡きぬ。暮るに近い、サアおぢや」と、無理に引立て押立てゝ、歸る時節のよき折羽、娘は重一打出せし、其甲斐もなうすご〳〵と。胸は涙のさゝ波や、しがを隱して立歸る、跡より安珍走り出で、安珍「其志いつ迄も忘れはおかぬ。約束の熊野參の度毎に、逢ふを互の樂みと、思うて暮して居てたも」と、影見ゆる迄獨言、後は涙の別れ水、岩にせかれし思ひなり。かゝる折節奥よりも、足音高く二人の妹、互に一腰ぼつ込で、諍ひかけくる音に驚き、安珍やがて立塞がり、安珍「コリャけたゝましや何事」と、尋に八重垣、「コレ兄さん、今舅濱成樣の仰には、其方達が親參議百川、かねて皇子と心を合せ、親王樣を奪ひ土の牢に押込置く、いはゞ朝敵の娘、藏人にも鷲塚にも添はして置かれず、夫の代りに暇をやる。若何れでも、親王を奪ひかへさば其時嫁、さもなくば是切と、暇の印の此一腰、親の内へかけ込んで、有無を糺す、其處退いて」と、行かんとすれば、安珍「ヤレ待て兩人、さう息切て驅出しても、六里七里の道の法、走り通しに成りもせまい、心を鎭め兄がいふ事一通り聞いてくれ。最前物蔭にて聞けば、安よしこそ、親百川と一味して、寶劍を奪ひ逐電せしと、難題を受けたれども、言譯せうにも出られぬ仕儀、所詮某に成りかはり、親と一味でない言譯、濱成卿へ倶に取成してくれまいか」と、いふ内よりも二人の妹、「お笑止なれども、

しく語り、貴殿の方の劔の詮議、倶々頼むといふうておくりやれ。寶劍の見えざる事、必々沙汰無用」と、仰あれば、母「何が扨、假初ならぬ一大事、手前の劍は手前から、詮議いたすがお上へ奉公、一時も早く國へ歸り、悴に委細申し聞かさんもうお暇」と立ちけるが、娘つれんと邊を見廻し、母「清姫其處にか、清姫」と、呼たけられて爰にとも、いうて出られぬ鞠場の内。母は猶しもそこ爰と、尋廻れば濱成卿、濱成「ナニ尋召るゝは、同道の娘か。奥にがな遊びつらん、序に呼出しおません」と、座敷を立ち一間へ悠々と、入る間もひやい冷汗を、身内に流し遁れける。跡に母親うろ〳〵と、若しやと思ひ勝手の方、「娘々」とよぶ内に、首尾見て清姫走り出て、清姫「嗚母様お待兼ね、嫁御さん方とおりは打、隙が入つた」と間を合す、母は何の氣もつかず、母「ナニ嫁御さん方と雙六打つて居た。ヲヽ出來しやつた〳〵、能く〳〵深い御緣と有難う思やゝ。彼方方は雲の上人も同前、又こんな首尾ないぞや」と、思合する一言は、正直過て氣味惡し。娘も心に勿體ない、親を騙すと思へども、しらけて云はれぬ暇乞、奥へいふ顔鞠場へさし當て、清姫「申し〳〵、もうお暇申します。不思議な緣で雙六の、簺目合せてお嬉しや。互に四の二と打つた目を、必々お忘れなされな、田舍娘は氣が堅い、外の女と乞目と聞くと、六さき塞いで動かさぬ。熊野參にお宿して、又の逢ふ目を待ちまする。お名殘をしの別れや」と、涙まじり

濱成當惑の顔色にて、濱成「誠に其劍恩借の砌は、公の御用とばかり云遣し、仔細云はせなんだも、祕する大事。何を隱さん日本の神寶、十握の寶劍紛失して、有所知れず、某奏して曰く、眞子の家の、雷鳴丸と申す劍は、神代三振の寶劍、是を假の十握となし、御卽位あらば、何か恐れ候はんと奏聞し、扨こそ劍を、無心申しにつかはせし氣の毒は、此末の物語。其使者に行きし身共が家來、葛城權頭といふ者、林專太夫といふ者に討たれ、其劍を奪はれたり」母「エヽ」濱成「まつた其後、春日の社にて、山の部の親王を奪取る、これも何者の業とも知れざりしが、天命遁がれず藤原の百川が計ひにて、己が館に土の牢を拵へ、押込め置しと慥な評議。さるによつて此劍も、百川が計ひと思しめす其仔細は、躮安珍といふ者を、術なくして勘當し、行方隱す。正しく此躮に二振の寶劍を持たせ、逐電させしに極つたり。急ぎ安珍めを捕へ、天秤鉛責にもせよと、評議一圖に極りし」と、聞て安珍鞠場より、出んとすれば淸姬が、引止め〳〵、餘處の事よと安珍が、今身の上とも白縫の、小袖の内に抱しむる。眞子の後家は樣子を聞き、母「テモそれは思ひ寄らぬお咄、手前の劍は數ならず、マア大切な十握の御劍御詮議が肝要、大方其安珍とやらが、親と一味でござりましよ」と、安珍を安珍と知らぬ母親濱成も、鞠場に居るとも知り給はず、濱成「兎角詮議は彼の躮、見付け次第に搦取らん。老母は立歸り新左衛門へ詳

肌に抱きしめ寝て見たい。口先ばかりのかい摘み、紫皮になる程な、深い心はあるまい」と、氣を持たすれば氣を持つて、清姫「ナアニよい手な事ばつかり。此方は疾うから鞠になり、早う蹴られて見たけれど、先のお方が厭かして、教へてくれる氣がない」と、戀のいろはの帆掛舟、漕付られて安珍は、安珍「習ふ氣ならば教へうか、傳授祕傳がある事」と、戯れ寄れば清姫も、清姫「そんなら教へて下んすか」安珍「教へいで何とせう」清姫「ヲ嬉しや」と取付いて、縺合ひたる折からに、「旦那お歸り〳〵」と、呼ばはる聲と足音に、二人は恟り狼狽へて、其處よ、爰よと駈け廻り、忍ぶ方なく鞠場の内、二人は暫しと身を隱す。程なく主和氣の前司、年を欺く身の達者、頭に雪は戴けど、心は花の都より、歸り足なみしと〳〵と、座敷へ通る跡よりも、眞子の後家がしたひ出て、母「申し濱成卿と見受け奉り、申上たい事あつて、待受けて居りませし」と云ひかけられ振かへり、濱成「ムウついに見馴ぬ老女、身に用事とは何の用、何處の人ぞ」とありければ、母「妾は紀州室の郡眞子の新左衛門が母でござりまする」濱成「コレハ〳〵去ぬる頃は、わりなき無心、それより音信も怠りし、近頃無沙汰」とあしらひに、母「コハ有がたい御上意、濱成様の仰とあるゆゑ、お渡し申した其劒は、雷鳴丸と申して、家の重寶、御用立てしまうたら、お戻しも有らうが、幸ひ娘が大和廻りの序、立寄りお尋ね申すのでござりまする」と、述べければ、

すんとして、殿御にしては揉上の、厚鬢繁りに繁つたは、どうもいはれぬ山の風、あつたもの
ではないぞや」と、教へ給へば、「實誠、しやんとして、凛として、わけて戀しき峯の松、人で云
をなら散切の、いとしらしいを見る樣で、どうやら傍へ行きとなる。あの松とんとはづめかし、
ならぬ事か」と眺めいる。折節安珍鞠手にするゐ、ひよこ〳〵出でて、安珍「コレ〳〵八重垣、我等
も昔を思ひ出し、沓裝束で蹴て見たい、相手が無い、詰めてたも」と、いふ聲娘がちらと見て、
清姫「ヤアお前は」と驅寄れば、ホンニこなたは壺坂でと、言はんとせしが妹の傍、疵持つ足で
口籠り、安珍「さつてもよう似た〳〵」と、云紛せば八重垣は、それと悟つて氣を廻し、八重垣「幸
ひ鞠のお相手に、此娘御を貸しませう。そもじも彼方に名所を訪ひ、邊に誰れも目なし川、耳
なし川の流をば、見て樂しんでお歸り」と、知つて其場をしらけずに、奥へ行くこそ粹ならん。
跡に安珍嬉しさも、胸にせかれてどきついて、安珍「壺坂でのお女中は、何として、マアようお
出」と、差詰つたる挨拶に、清姫は猶うぢ〳〵と、清姫「私は母樣同道で、願の事で好う來たが、
お前はどうして、ようお出」と心餘りて詞なく、遠慮深いは下紐の、解けぬ業とぞ聞えける。
安珍も頭から仕懸やうなく仲人なく、はづます思案で鞠ひねくり、安珍「我等が來たは此鞠に、
又逢ふ事もあらうかと、引れてふつと參つたが、見懸の樣にむつちりと、手當りのよい心なら、

し、是へ通せ」と云付けやる。座を改めて松に梅、老木と花の親子連れ、眞子の後家と娘とが、田舍育も場うてせず、會釋こぼれて立出づる。八重垣も只ならぬ人と見込んでしとやかに、八重垣「舅濱成樣には、今御隱居の御身でも、折節事のおり登り、其お留守へ來かゝりて、嘸本意なく思されん、自は八重垣とて則ち嫁、仰おかるゝ事あらば、御遠慮なう」と懇に、挨拶あれば笑顏をつくり、母「コレハ／＼下司近いお詞、妾は紀州室の郡眞子の庄司が後家、是なるは淸姫と申して娘。大和廻りの序ながら、同道して參りし仔細、日外お貸し申した、雷鳴丸の劍の事」といふ内よりも、いや其劍は紛失と、云はんと爲しがおし默り、八重垣「ハテナウ遠くの所を好うこそ／＼。娘御は大和廻り始めてか、爰も飛鳥の變る瀬と、歌にも讀みし都跡、名所古跡を敎へうか」と、機嫌取かけ催促の、劍の事を紛らかす。淸姫も目馴せぬ、所咄の聞きたさに、淸姫「是は有がたいお詞。七瀬の淀と萬葉に、讀みし名所は爰なりと、聞けど白齒の振の身で、問歩かれず家苞に、ちとお咄し」と摺寄れば、子に絆されて母親も、母「それ／＼序に雲の上咄、承つて土產にしや。妾はちつと御勝手のお茶荒しましよ、お免し」と立てば茶の間に案内させ、劍の返事をくろめると、此方は主濱成の、お歸り暫し松木燒く、勝手の方へぞ入りにける。跡に八重垣淸姫の、手を取り南に指ざして、金峯山より敎かけ、「西に葛城當麻寺、二上が嶽の

らお前は何にも知らずか、何時ぞや春日へ御參詣の折から、何者とも知れず、親王樣を奪取つて、お行方が知れず」安珍「ヒヤ」八重垣「お供した我夫は、取返さねば館へは歸らぬと、二月に餘れども、今に音もさなりも致しませぬ」安珍「ホイ。して、檜垣の連合鷲塚彈正は、何としてぞ」八重垣「是はやつぱり皇子樣に附き添うて、御位讓の相談で、是もすつかり館へは戻られず、私等兄弟の物思ひ、推量して下さんせ」安珍「スリヤまだ御位讓の評議が濟まぬか。俺も濱成卿のお目にかゝり、次手に勘當の詫願ひたい。鞠遊したが御隱居か」檜垣「否へ〱、姉樣や私等が、若しお相手とある時の、遊びがてらの下稽古、ほんに勘當の願は、舅御樣がよい手懸り、逢せましたいものぢやが、ナア姉さん」八重垣「それいなう、折わるう都左大辨兼實公より密のお召、今日は大方お戻りあらう待つてお逢なされぬか」安珍「待たうとも〱、たとへ五年が百年でも、齋料さへ貰へばやさが馬、三里乘つたで草臥た、一間へ參つて休息いたそ」八重垣「ヲヽそれ、妹案内しや」檜垣「サアまあ此方へ」と妹が、つれて一間へ入りにける。何がな馳走と八重垣が、姒よんで云付る。折を構はぬ取次番、取次番「申上げます、紀州室の郡の者、母娘と相見え、濱成卿へ直訴と申す、お留守と申せば奥方でも、お逢ひなされて下されと、お次に控へて居りまする」と訴へ出づれば、八重垣「ナニ紀の路の者が、お留守ならば奥方へ會はうとな、女とあれば苦しうな

めで居るか。久しう逢ぬが何としたぞ」と、思ひ廻する折からに、かゝりを越て外れる鞠、塀の外面へ飛來れば、安珍「コリャよき物を下されし」と、安珍やがてひろふ内、婢どもが取りに出て、腰元「惡洒落な山伏さん、戻して〳〵、もらかして」と、縋れば拂ひ一曲と、昔忘れず蹴る鞠は、草鞋懸とて捨られず。内に待かね妹の檜垣、物見に上つて表の方。見越す外面に鞠蹴るは、ありや慥兄樣、檜垣「安珍樣ではないかいな」と、いふに八重垣かけ上り、八重垣「ホンニ兄さん、なつかしや。ナアまあ爰へ」と、招くにぞ、此方も見上げ久しやと、裏門よりも走入り、安珍「珍らしの妹達、變り果たる安珍が、姿を見せるも恥かし」と、打しをれるれば八重垣も、八重垣「其お姿の變りし事、聞いて檜垣と云出して、泣いてばつかり居りました。まあ息才なお顏を見て、お嬉しいと申さうやら、おいとしいと申さうやら、皆父上のなす業と、思へば恨むる方もなし。いかに御苦勞遊ばすか、前よりお顏もナウ妹」「疲たはいの」と涙ぐむ。檜垣「お顏の疲より此袈裟や、錫杖は私や悲しい」と取付いて、わつとばかりに泣しづむ。安珍も倶涙、壓へかねしが氣を取直し、思ひをかけじとしら〴〵しく、安珍「イヤもう、今はいつそ氣散じ、母人の大願の、三十三度の熊野參りを始めて、もう四五度も參つた。扨先づ問はう、八重垣の連合、和氣の藏人は、日頃身共とは懇切、かはらず親王樣に附き、宮仕して居らるゝか」八重垣「ムウそんな

め、刀を流石武士の、娘質氣も立派なる、取形凛々しく引そうて、莉濱「伯父様さらば。諸事萬事跡はお前を頼みます、隨分お健康で」他力坊「そつちも無事で跡は氣遣なき人の、菩提を弔ふは出家の役、我は淨土、彼は法花、兄弟宗旨は變れども、八宗九宗の心をよめば、峯は雪、麓は霰、里は雨、解れば同じ谷川の、水溜らねば宿らず去らぬ眞如の月、迷はぬ道に引攝せん」と、死骸に合掌手向の水、掲ぐる火影は則ち光明、十方世界の雲晴れて、普くてらす本願力、誓に任す他力坊が、敎に別れ出でて行く。

第　三

鞠場の四方は花楓、柳腰なる女房の、ハリヤ恐れの聲するは、沓は離れず冠を、遁れて隱居飛鳥の里、和氣の前司濱成卿の隱家も、お留守の内の鞠遊び、蹴ると踏むとで笑ふやら、「好う揃うて」と譽るやら、姉の八重垣妹も、同じ嫁菜の齒を染めて、肩で流して𨉷へ、渡せば横に蹴飛ばかす、附々までも鞠稽古、かゝりの内の色めくは、ませた樣でも好もしゝ。熊野より、下向の道の樹風に、揉まれて頭巾篠懸も、羂になしたる綾の袈裟、首に纏うて安珍は、齋料乞うて通りしが、ふつと見上げて、安珍「ハア、是はたしか濱成の隱居屋敷、舅御に仕へ、妹どもはま

取付いて悦ばしやつたを見る樣な。死ぬる者は人懷しく、知音近付まで尋ね慕ふといふに、まして兄弟遇ひたうなうて何とせう。人は知らねど自然天然、急げ〳〵と心せく、冥土の旅の暇乞、語るも問ふも今生の、別れで有つたか悲しや」と、我を忘れて大聲上げ、わつと叫べば源藏も、思ひを察して貰ひ泣、防かねてぞ見えけるが、やゝあつて氣色を正し、源藏「御歎きは去る事ながら、時刻うつさば却て亡者の爲にもならず、某とても御了簡の上、長居は無益。一刻も早く敵の行方尋ねたし、お暇申す」と立出づる。他力坊「待つたまづ暫く、見らるゝ通り我は出家、殊に師匠に仕ゆれば、何事も心に任せず、便なき此女、敵討の實否を聞くまで、安閑と待居る心も定かなるまじ。日本國を尋廻る敵の次手、おのづから姫君の行方も知れまい物でなし、面倒ながら行くさき〴〵、召つれて給はらば、彼も我も彌安堵。偏に頼み存ずる」と、餘儀なき詞に打點き、源藏「それこそ此方に望む處、迯隱せぬ此源藏、行住坐臥にも心を付け、附け添ひ給はゞ旁の、疑念も有るまじ某も、心にかゝる雲もなく、敵を尋ね行先は、東に奥州外が濱、南は紀伊の三熊野山、西は九州壹岐對馬、北は越後の荒海まで、千里も飛び、萬里も追駈け追廻り、速に討ちおほせ、父の尊靈に手向なば、其場を去らず首さし延べ、本望遂げさせ申すべし。いざ打立たれよ苅藻殿」他力坊「ヲヽ潔し頼もしゝ。それ〳〵用意」「合點」と、小褄きりゝと帶引締

ひ、潔く本望遂げさせ、其上で源藏を討ち姫君を尋出す、性根はないか狼狽者。エヽ緩しや、齒痒うてならぬはい。なぜ其樣に愚癡なぞ」と或ひは叱り或ひは宥め、息筋張つて呑込ます、理窟理解のたら〳〵〳〵。汗を流して制するにぞ、苅藻は漸〳〵氣を取直し、苅藻「合點しました伯父樣、成程仰に隨うて、敵打は延しませう。コレ〳〵源藏樣、言ふに及ばぬ事ながら、契約違へずいつ〳〵でも、專太夫を討ち給はゞ、早速知らせて下さりませ、その便りを聞く迄私は爰に獨住。おいとしや父樣が、思ひ寄らぬ此災難、今日を限りに死なしやんせう端か、俄に佛壇ほしがつて、足らはぬ銀でわくせきと、行さまの怪我といひ、氣にかゝる物のいひ樣、斬られて死んでも大事ないの、今日の日が外れてはならぬのと、聖靈祭の供物、手向の水も香花も、我身の上とは知らずして、氣を苛だてゝ世話やいて、果は憂目に新尊聖、祭らるゝ身とならしやんしたは、味氣ない共悲しいとも、あるにあられぬ我が思ひ、推量あつて今一聲、娘よ子よと呼んで給べ。父樣なう」と亡骸に、すがりつき押動かし、涙の限り聲限り、泣き口說くこそ道理なれ。當前の理に他力坊、張詰めし氣も打萎れ、他力坊「ヲヽ悲しいは尤々、我迚も廿年來逢はざる兄、今日思はずも間違つて、對面したも血筋の緣、兄貴ぢやないか、他力坊でござるというたりや、年寄つて今日が日も知らず、遇ひたかつたに好う來てくれたと、地獄で地藏見た樣に、

ん。此詞僞あらば諸神諸佛の御罰を受け、二度刀を手に取るまじ。了簡あつて給はれ」と詞を盡し理を盡し、わりなく頼むぞ誠なる。理聞いて他力坊、實尤と得心顔、いつかな聞かぬ苅藻が若氣、苅藻「コレ誓言立聞きたうない。よし其詞が誠にもせよ、專太夫とやらいふ敵に、何時廻り遭うやら、べん〳〵だらりと當處も切もない穿鑿、一寸の間も待たれぬ〳〵。討ち討たるゝは互の運づく、サア其方から切りかけるか、此方から討たうか。ヲヽ何と勝負々々」と、ふり上げる刀をしつかと他力坊、腕首返し捥取つて、他力坊「コリヤまて苅藻早まるな。ヱヽいかに女なればとて、理非明らかなる源藏の詞、聞入れねば今返討、それを是非にと身を腕くは、鼠が猫に楯突く道理、近年の無分別、但むざ〳〵犬死して、父鄕右衞門が手向に成るか、手柄に成るか、却つて修羅の苦患の上塗、不孝の罪科恐しうは思はぬか。其上最前樣子をきけば、隱い置いたる主人の姫君、間違つて道具屋へ渡せし由、そりや如何した」と、問はれてはつと心付き、苅藻「なう情なや其姫君は、何處の者やら長持共に、買うて去んだと亭主が咄、それから戻る道すがら、彼方此方と尋ねても、何處へ往たやら行方が知れぬ。ひよんな事しました」と、涙ぐめば、他力坊「ソレ〳〵〳〵其樣な大事を抱へ、此場でやみ〳〵切殺され、どの命で姫君を取返へす。其方も武士の娘でないか、義を立て道を辨へて、源藏の詞に隨ひ、時節を待つて專太夫に廻合

くよりはつと身繕ひ、苅萱「エ、腑甲斐ない叔父様、いかに出家の身なればとて、それ程様子を知りながら、兄の敵を傍に置き、なぜきよろりとして居さしやんす。人違でも麁相でも、目の前の親の敵、一討延ばせば一時の不孝、女でこそ有らうけれ、物の見事に討て見せう切つて見せう。サア尋常に勝負しや」と、父が刀をおつ取つて、早打かけんと立ちかゝれば、他力坊「チツト助太刀他力坊、氣遣するな」と尻引きからげ、有合ふ擂粉木しやにかまへ、後に突張坊主の腕立、危くも又潔し。ちつ共騒ず源藏兼連、大小摑んでからりと投出し、源藏「コレ此通り手向ひせぬ、相手にならぬ」と云はせも立てず、苅萱「ソリヤ何んの眞似。此期に及んで手向ひせぬは、ム、聞えた、迚も我々に叶ふまじと、命惜さの降参か、詫ても泣いても遁しやせぬ」他力坊「ぐづかはせずと、サアきり／＼とやりかけうてい」源藏「ハヽヽ、事をかしや腹の皮、生付いて此源藏、力量人に勝れたれば、汝等が五人七人、片腕にも足らね共、誠の敵事太夫を討ざれば、父が孝養にもならず、誰が身の上も敵を討ち度き志は同じ事、いかに我身を遁れんとて、今兩人を返討にせば、情なきとや云はん、武士たる者の本意にあらず、爰が互の了簡づく、たとへば敵事太夫、逃隱るゝ其天地の間、足手限りに探し出し、本望遂げなば其後は、旁に此源藏、潔く討たるべし。それ迄何卒此勝負、さし延ばして給はらば、雙方共に本意を達し、互に亡父の手向となら

が聞きたい、サアなんと」と、顫ひ〳〵も腕捲り、弱味を見せずちつく〳〵、詰寄り〳〵振廻す、坊主頭ぞ健氣なり。侍「ホヽ其仔細は一天下に隱なき敵討、某は葛城源藏兼連といふ者、去年の秋當國欅の本に於て、我が親權頭を討つて、雷鳴丸の劍を奪取つたる林專太夫、某が斯く付狙ふともしらず、表の家札に名を記したは天命」と、半分聞いて、他力坊「そりやこそ大きな人違。コレ其專太夫が事は、疾く宿替したる由、漸昨日此所へ、家移りした我兄は、鳴見鄕右衞門といふ者、祭する所專太夫、儕が科を人に讓らんため、家札を殘し置いたと見えたり。それを其儘置いたも誤、討つた此方は猶誤り、誤といふ誤によい誤りはなけれども、是はあんまり慘しい、取返のならぬ誤り、エヽ是非もなや殘念や」と、目を摺こする淚顏、色もかはつて靑柿が、熟柿弔ふ如くなり。源藏大きに仰天し、源藏「何、此人は鄕右衞門、專太夫ではなかりしか、南無三寶しなしたり、ハヽヽヽ」はつと我れながら、あまり惘れて詞も出ず、たゞ茫然と立ちたる所へ、又間違て姬君を、道々尋ぬる娘の苅藻、駈戾つて、苅藻「アこりや父樣は誰が切つた、何者の所爲ぞ」と、狂氣のごとくうろ〳〵淚、死骸にひしと抱き付き、泣くより外の事ぞなき。他力坊「ホヽ思ひがけなき父が最後、驚きは尤々、久しう逢はねば見忘れつらん、愚僧は叔父の他力坊、家札を證據に敵と心得、兄鄕右衞門を手にかけしは、ソレ其處に居る源藏」と、聞

に、突掛とつ掛稍時うつる折こそあれ、はんちや合羽に三度笠、旅人と思しき侍が、うそ〳〵邊を見廻して、用有りげに立つたりしが、笠取捨て身繕ひ、ずつと入つて、侍「御亭主に御意得たい」と、聲かけられて郷右衛門、郷右「此家の主は某、何方より御出」と、云はせも立てず、「親の敵、遁さぬ」と、引拔いて郷右衛門が、弓手の髀ずつぱと切れば、郷右「ヤレ粗忽して後悔すな、敵と呼ばるゝ覺はない」侍「ヤア覺ないとは卑怯者」と、無二無三に切付け〳〵、蹌ふ所を疊み掛け、諸脛はつしと薙倒せば、「コリヤ待て〳〵」と他力坊、取付く腕先引摑み、戸口を打こし五六間、大道遙かに取つて投げ、ふりかへれば郷右衛門、數ケ所の痛手老の身の、うんと計りに息絶ゆれば、ハア〳〵はつと驅寄て髻引上げ 侍「是は扨、大切なる劒の在所詮議せんと思ふ間に、早斃ばつたる殘念や」と、死骸にどつかと打跨り、親の敵思ひしれと、留の刀一抉、突立ち上れば他力坊、手並に懲て怖々ながら、大事の所と氣を取直し、そつと寄つて、他力坊「コレサ前髪、此親仁は愚僧が兄、生得正直慈悲深く、無益の殺生せぬ者なれば、滅多に人を切りやせまい。其上今の一言、敵と呼るゝ覺はないと、いうたを無體に切りちや〳〵くり、留迄好うぐしやとやつたなア、粗忽で有らう、人違とは思へども、腕力が強さに困つて居た。マア其方何者、何の遺恨で親を討れた、慥に兄を敵といふ、證據が有るか。それ見たい、仔細

まないだ〳〵〳〵なまいだ佛なまいだ」郷右「ア、是々、經宗の内へきて、念佛申て叩鉦、ぐわんぐわんと何ぢやぞいの」他力坊「願以此功德」郷右「コリヤきやうとい」他力坊「きやうとう施一切、同發菩提心」郷右「コレ坊樣、爰は法華宗でござるはいの」他力坊「マアほんにさうぢや、デモ此内は此方の旦那に極つたが、どうやら御亭主の顏が、ヤアこなたは兄貴ぢやないか。俺や他力坊でござるわいの」郷右「マアどれ〳〵、成程弟坊ぢや。ヤレ〳〵久しや懐や、二十年も會はぬ間に老くろしうなつたで、とんと顏を見違へた」他力坊「イヤおれより此方の年がよつて、前の形はござらぬ」郷右「ヲヽさうで有らう〳〵、貧苦にせまれば一倍皺に皺のよる年、今日が日も知らねば、其方が事を明くれ案じて逢ひたかつたに、好う來てくれた。シテ今は何處にゐるぞ」他力坊「何處というたら前の如來寺に勤てゐますが、此方は何時爰へござつた」郷右「サレバ漸昨日宿替」他力坊「エヽそれでよめた。此家に是迄居た人は林專太夫というて、此方の旦那、表の家札がやつぱり有るゆゑ、麁相しました」郷右「イヤそりや此方にまくらぬが大きな無念」他力坊「イヤ其無念と麁相が合うたで、兄弟もべつたりあうて嬉しい。扨姪の苅藻は息才で居ますか」郷右「サア娘も今は奉公引いて内にゐるが、樣子有つて主人の娘君が家出なされ、隱し置いた長持を、留守の間に道具屋へ賣つた故、それ取返しに今出ていた。追付け戻らう逢うて去にや」と、積る咄を遣羽子

こそあれ、娘がわくせき供物、買調へて戻るやいな、刈藻「コレ父樣、爰に有つた長持は、何方へ直して置かしやんした」と、けゞん顏見て親仁はうぢ〱、鄕右「サアさう云はうと思うた。いつせき一つの入物なれど、佛壇の銀がたらぬ故、其代りにやつてのけた」刈藻「エヽ、そりや道具屋の與市殿へか」鄕右「おうさ〱」刈藻「テモひよんな事さしやんした。コレあの長持の中にはな」鄕右「ハテ何んにも無いてい」鄕右「イヤお前は知らしやんすまいが、私が今迄勤て居たお館の姫君が、樣子あつて家出なされ、追手がかゝる隱まうてくれと仰つたゆゑ、今の長持の中へ」鄕右「ヤヽヽそりや大切な事、樣子は知らねど其方を見込んで頼れた姫君、外へやつては一分立つまい。というて價の銀はなし、結句おれが與市に逢うては、四の五のいうて戻すまい。其方が往て云はうには、留守の間にやらしやつた長持は、私が大事の入物なれば、賣る事はならぬ。足らずの銀は近い內寄越さう程に、まあ戻して下されと品よういうて取戻せ。與市が中を見ぬ內にちやつと〱」といふを聞捨て氣を揉み上げ、足も取次に駈り行く。鄕右「ハレ忙しいに取まぜて、思ひもよらぬ難儀が出來た」と、呟ながら果物を、佛に供へ水手向け、唯我量無量と唱ふる內、如來寺の弟子他力坊、十方旦那を棚經廻り、表に立つて手帳を繰出し、ぬつと入つて親仁を押退け、持佛に向ひ大呪を唱へ、他力坊「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、なまいだ

ばならず跡も氣遣、不承々々の舌鼓、丹波笊に袖おほひ、足早にこそ出でて行く。エイ〳〵さつ〳〵さ、「サア〳〵妥ぢや」と佛壇もたせ、によつとはひろ道具屋與市、與市「ホウ親仁樣早かつたの。扨今もいふ通り鐚ひらなか、利とらず元直で寄越が六拾目、受取つた銀は四拾壹匁五分、引殘つて拾八匁五分の足らず。其代に何やら寄越道具が有るとは、どんな物か。マア見よかい」鄕右「ヲヽ見せうとも〳〵、といつて替つた物でもない、それ見て下され」與市「それとは何を」鄕右「ハテ其車長持、見掛は汚穢いやうなれど、昔物で第一木がよい、鐵物の見事さ、中の樣子もとつくりと、ハアこりや猪口才な、娘が錠をおろして置いた。イヤ見せる迄もない、中に微塵も疵はござらぬ」與市「成程々々、至極丈夫な長持、マアなんぼ程なら賣らッつしやる」鄕右「ハテそりや此方の目一ぱい」與市「付けませうか、ハヽアこりや丁ど拾八匁五分には高過ぎる」鄕右「是は扨、おりやもつとせうと思うた、もう貳參匁買はれぬか」與市「けもない事、まだ五分たりませぬが」鄕右「是非に及ばぬ何とせう、それでさつぱり濟して貰を」與市「ハテよござるわいの、念頃合ひに五分や七分、きつしにもいはれまい。そんなら是で算用なし」さらり〳〵と手を打つて、下人に長持引ずらせ、其内御座れ好う御座た、さらば〳〵と立歸る。鄕右「ヤレ〳〵嬉しや、久振で祖師樣佛壇へ直しましよ」と、押入より取出し、佛具とり〳〵香盛つて、題目唱ふる時

ちつ共惜うはおぢやらぬ」と、氣輕にいうて勇行く、後の哀と成りぬらん。娘は跡を取片付け、掃つ拭うつ急がしき、表へ息急馳け來る女、ずつとはいつて顏見合せ、女「マアそなたは苅藻ぢやないか」苅藻「コレハ〳〵錦の前樣、徒歩や跣足で只お獨、何としてお出なされた、樣子はどうぢや氣遣な」と、問れて涙にくれながら、錦の前「知りやる通り安珍樣に引別れ、悲しき中に伯父樣が、是非自を皇子樣へさしあげんと強意見、居るに居られず館を脱出で、何處に成共身を忍び、殿御の行方を尋ねん物と思ふから、其方の內とは夢にもしらず駈込だのも不思議の緣、追手の者が來ぬ內に、早う影を隱してたも、賴む〳〵」と氣を苛ち、そゞろ顫うて在します。苅藻「ヲヽそれなればお道理〳〵、私もお前と安珍樣の媒したが誤とて、隙の出るは此方も勝手、胴慾な伯父樣に、ふッつりと飽參らせ、今親の內へ戻つて居るこそ幸、命にかけてお隱匿申しませう、というてから何處に置きます所が」「ヲヽ有るぞ〳〵、只一つの車長持、御窮屈に有らう共、まあ此內へ」と押開き忍ばす、內もうろ〳〵あぶ〳〵、あつた蓋して車鎖、手早にぴんと折こそあれ、いそ〳〵歸る鄕右衞門、鄕右「娘悅んでくれ買たぞ〳〵、直打、安て結構な佛壇、今爰へ持つてくる筈、一時も早う尊聖殿へ果物が進ぜたい。ソレ暖簾にする素麵瓜茄子、何やかや取揃へて買うておぢや。今日の日が外れてはならぬ、早う〳〵」とせがまれて、往ね

それ出すまいと跪いた代に、肩も腕もめりく、むりく。ヤ、むりくの次手に無理な男は、今迄ゐた在所の家主、浪人を見立てて半年づつ家賃を先取、ない物寄越に困つた故、道具屋の與市の世話で此奈良の町へ宿かへたりや、まあ此難儀を助かつたが、いかに貧乏すればとて、よい年して佛壇一つもたず、大事の祖師樣を押入へ打込んで古蒲團と相住させますは、いかにしても勿體ない。殊に今日は七月十三日、祖師樣の日でも有り、聖靈祭がそこくになと仕たい。幸ひ與市の所に、よい頃な佛壇昨日ちよつと見て置た。俺あれが欲うてく、如何も斯も堪まらぬ」折鶴「サアそりや私もさう思へど、其銀の才覺が」郷右「イヤならぬ所をほつくと、いらぬ物賣た銀が四拾目餘り、あれでどうぞ賣てくれりやよいが」折鶴「ハテそれこそ與市殿にまあ談合して見さしやんせ」郷右「ホンニそれく好う云うてくれたな、善は急げぢやちよつと往て來う。其間に其邊掃いておけ」折鶴「つい居てござんせ」「合點」と、銀懷に押込んで、氣もわく雪駄はく拍子、轉たか打つたかあいたしこ、折鶴「爺さん何んとさしやんした」郷右「なんとは是見よ、古木の片に釘が有て親指をぐさと云はした」折鶴「ドレくほんに血塗ちんがい、なう情なや」と血止に煙草、付けるもはらく目に涙、郷右「ハテこな者はめろくと、申の年でもないが血を見ると泣程にの、なんの是式、俺痛うも痒もない。たとひ身打をきられて死んでも餘もない此親仁、

狼藉せば見逍しならずと、身繕ひして待ち給へば、四郎、九郎「ハアテ合點の悪いお袋、品によつたら此方衆も浮み上る事、四の五のなしに下あれ」と、せがみ立つれば母ははつと心付き、「どう仰つても成りませぬ」四郎、九郎「ソリヤなぜに」母「イヤあの娘には夫がある」清姫「エヽイ母樣そりや何を」母「ハアテ其方にはあれ、ノあれ、あの山伏殿といふ夫が有るによつて、皇子樣へさし上る事はならぬぢやないか。ほんにそれ〳〵、コレ申しお前も聟は俺ぢやと、つい云たがよいはいな」安珍「サアさういふは安けれど、彼等に一盃喰すつもり、サア皆汗が入つたらそろ〳〵先きへ往たがよかろ」と目眴で知せば母娘、姒共も頷き合ひ、足早にこそ急き行く。エヽ一盃くはせた腹立やと、九郎助やがて安珍の胸倉に取かゝる、其間に四郎八茶店なる手桶引さげ、聟殿祝ふと投掛るを、安珍得たりと身をかはせば、先きに進みし九郎助が、ざんぶりいはされ濡烏、コリヤ何しをると飛びかゝる、仲間喧嘩の摑合、跡に見捨て　三重急ぎけり。歸り行く月日計りは變れ共、變らぬは世の憂節や、竹の格子に井の字窓、荒し家居を假初に、宅替してまだ昨日今日、浪の身の寄る年も、六十に鳴見鄕右衛門が、娘相手に内繕ひ、走据たり棚釣たり、打つたり舞たり乖歪、無頂頰而直しても、足はぬ物で間に合す、素人細工ぞ不束なる。鄕右衛門ほつと精盡し、鄕右「コリヤ苅藻、庭廻りの勝手がよくば、まあ是切りで置うぢやないか、人傭へば錢が出る、

戀路の始めなる。斯共しらず母親は、奥の院より立歸り、母「ナウ娘、嘸待ち兼たで有らうの」と、いへ共清姫應答なく、さし俯向いてうつかりは、瘧ふるひの大熱の、冷めたる跡のごとくなり。白菊が笑止がり、白菊「お姫樣は如何した事やら、お腹が痛んで難儀遊ばし、あのお山伏のいかいお世話になされし」と、聞くより母は恟し、母「それはまあ何方かは存ませぬが、お世話の段忝うござります」と、一禮述て、母「コレ娘、もう痛は止つたか」清姫「アイお氣遣ひなされな。もう常の通りに成りました。マア結構なお藥を」とぢつと見やりし目の内へ、安珍も飛入る心地、母は何の氣もつかず、母「お山伏は清姫が命の親、是を御緣にお知人に成りませう。お國本は何處ぞ」と、いと懇に尋ぬれば、安珍「某は都の者、ちと願望有つて熊野參詣、三十三度を致すもの」母「それは幸我我は則ち紀州室の郡の者、重てからの御參詣にはお宿申しましよ。眞子の庄司が後家娘」と、打込じたる折こそあれ、里に名うての𠹭者、鷲の四郎八、烏の九郎助、茶店の先に立ちはだかり、四郎九郎「コレ〳〵旅の女中、卒爾な事ぢやがあの娘御が貰たい」母「エヽイ」四郎、九郎「いや別に悪い所へやるのぢやない、忝くも他戸の皇子樣より、何者によらずみめよき女は整へて差上げよ、褒美は望次第との御上意」母「マアそれはまあ思ひがけもない事、なんぼ皇子樣の云付でも、たつた獨の祕藏娘、滅多に渡す事は成りませぬ」と、口にはいへど當惑の、色目を悟つて安珍も、

う有ても去ぬる〱。イヤ〱ならぬとしがみ付き、離さぬ所を振切て」と、咄の拍子に淸姫は、床机の上より眞逆、こけ落つるを嫗が、周章かけ寄り抱起せど、正氣つかねば、腰元「コレお姫樣、御姫樣、ヤレお山伏水を〱」おつと心得杓おつ取り、茶の水汲でさし付くれど、齒を喰ひ締り通らねば、詮方なくて安珍は、自身に含んで口から口、ずつと通つて人心地、腰元「さつても氣轉のきいたお方、お氣が付たぞ嬉しや〱。コレ申し淸姫樣、氣をはつたりと持ち給へ」と呼立つれば漸に、マアと答へて目を開き、淸姫「白菊紅か、今自は床机の上から落て目が舞たの、何やらひいやりと咽喉を通ると思うたれば氣が付いた、其方衆が水でもくれたであろ」腰元「イヱ〱私等は狼狽て呼生るばつかり、あのお山伏が水を上げうとなさつても、齒を噛しめてござる故、彼方の口からお前の口へ」淸姫「マア自が齒を噛みしめて居たゆゑに、口から口へホヽヽヽおゝ嬉し。そんなら大事の命の親、忝いといひたいが、もと此身を殺さうとなされたも彼方故、いつそ今ので死んだらよいに、生きて結句思ひの種、やつぱり死なせて給いの」と、現なければ嫗共、腰元「お姫樣の無理計り、私等ぢやとて如何せうぞ。コレお山伏、お前が御療治なされし故、却つて姫君の機嫌が損ねた。元の樣にしてお返し、殺して御機嫌直して」と、無理からしかける仲人口、安珍「それは無體と迯廻るを、白菊、紅てん手に押伏せ、淸姫の傍へ推遣押付れば、元より互に戀の淵、深き

の句ではなかつたかへ」安珍「ホンニそれぢや〳〵」慶元「シテ〳〵跡はどうさんした」安珍「其古歌の心の嬉しさに、シテ返事せんと思ふ内、早日もくるゝに心せき、彼娘も下部下婢に引立てられ、是非なくかへる後影、見るに堪へかね小者を走せ、名所を問せたれば」慶元「いうたかへ〳〵」安珍「イヤいはぬ〳〵、只北山里に結び捨たる柴の庵とのみ、心憎しと思へ共、其日は互に別れし」と、聞いて妧力を落し、慶元「エヽ残多い咄ぢや」と、清姫諸共投首すれば、安珍「コレ滅多に力を落すまい、それから男の有らう事か、此壺坂の観音へ、七日七夜の願参り、奇験なお告が」慶元「有つたかへ〳〵」安珍「汝彼娘に逢んと思はゞ、供をも連ず只獨、雨のふる夜も風の夜も、徒歩や跣足で通ひなば、深き妹脊と成るべしと、聞くより嬉しく我家に歸り、夜更け人靜りて窃に館を忍び出で、北山里に尋行き、枝折戸ほと〳〵打叩けば、彼娘出向ひ、扨も遅て待兼ねしと、此手を取て引立てられた其時は、身柱元から」慶元「ぞつ〳〵と爲たかへ」安珍「ヲヽ何が寒う成り暑う成り、夢の心地に覺えしを、イヤ〳〵此處等が大事と辛抱し、ナンノ待兼たとへ、嘘斗と顔を背けりや、エヽ何ぢやの、人にばつかり物思はせ、遅う來ながら胴慾と取付く袂をふり切て、罷歸ると立上るを、イヤ去なす事はならぬ、イヤ去んで見しよ、去なすまいが如何さんす」と、仕方咄に聞入る清姫妧も、相撲を見物するごとく、肩を捻り身を捩ば、安珍「イヤど

える音で一つも耳へいらぬ。サア／＼爰へ」と招きて、「然らば御免」と腰打かけ、安珍「いかさま懺悔に罪を亡せぢや、さらば咄を始めうか」白菊「さらば咄を聞かうか」と、簪ぬいて耳の垢、渫てこそは鎮まりける。安珍「先其初戀の發端といふは、去年の春の彌生半、吉野の山の花盛、柳櫻をこき交て、都ぞ春の錦と見ゆる幕の數、爰では琴の爪音の、彼處では三味線の鼓のと、歌ふか舞か面白さ如何も云れず、此處彼處と眺る所に、とある幕の内より出でし、二八斗の娘の顔、見初たが緣のはじめ、目元なら口元なら、思ひ出せばよう似た顔も有る物」と、話しながらに清姫を尻目にかけて思はせ振、妼共も氣をとられ、段々うまう成かゝると、現ぬかして摺寄ば、安珍「其時我等も娘の顔を、餘處ながらぢつと斯う見る樣で、又見ぬ樣で、互に心は通へども」白菊「アノ近付きでもないのにかへ」安珍「サア何が頻に可愛う成て來て、飛立つ如く思へ共、其日は人目の關をこえ兼て、立歸らんとせし所に、娘はやがて懷より、矢立短冊取出し、さら／＼と一首を書付け、妼にもたせ密に我に送りし嬉しさ、取上げて開き見れば、其假名の美しさ」白菊「能書で有たかへ」安珍「能書しかも行成樣の散し書。サテ其歌は、見ずもあらず、見ずもあらず、見もせぬ人の戀しくば、ハア下の句は何んとやらとんと忘れた」腰元「ヲヽ辛氣、大事の所を忘れて」と、妼が勿怪顔、淸姫ふつと思ひ出し、淸姫「申し其跡は、あやなく今日や眺め暮さんといふ下

ほ下手でも大事ない、ナア姫君さうぢやないか」桐葉「アノ紅の云やる事わいの、田舍育の不束な自が手の筋、何んの彼方が見て下さんしよ。もう賴まずと止にしや。見た所が都方のお方さうな、嘸お宿本には美しい御祕藏樣がござんしよ」と、うら問かけるも是幸ひ、戀を仕かける寄框、口に任せる出放題、安珍「ヲヽ御推量の通り都の者、生拔の山伏でもござらぬ。稚馴染の妻に離れ、子細有つて此姿」と聞いて白菊、「ソレハまあ、生別か死別かへ」安珍「死別れ〳〵、しかも昨日が四十九日」白菊「サテハ左樣かお痛はしや、若い殿御の髮切て、廻國行脚し給ふは、御奇特と云はうか、心中と云はうか、嘸先き立たしやんしたお方とは、中が好かつたで有らうな」安珍「ヲヽよい段かいの、其有りしを思ひ出せば、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と云ひかはし、面白と云ふはいや早どうも口ではいはれぬ」白菊「ナニ其お方と添て居さんした間は、比翼連理と云交し、面白い事で有つたかへ、左樣ぢやあろ〳〵。迚の事に其初戀より別さんした時迄の次第、聞いておいたら後學にも成りそな事、幸ひお袋樣も爰にでなければ、互に旅の憂晴し、搔摘んでお咄し」とせがみ立つれば、安珍「イヤもうそれは此方から望む所、咄して成り共日頃の憂が忘れたい。さりながら外の事とは違ひ、まんざら聲高にもいはれぬ事、といふて其床机へ腰掛けるも、どうやら人目が」白菊「大事ない〳〵、其處から咄してはあの茶釜の煮

母の大願滿てん爲、熊野參詣三十三度の修驗者と樣をかへ、散切髮に輪袈裟をかけ、昔にかはる獨旅、殊勝にも又痛はしゝ。暫し疲れを晴さんと、此方の床机に腰打かけ、休らひ給へば淸姫は、跡の宿より跡先に見初めし戀の下紅葉、うつろふ色目をおし包み、淸姫「申し母樣、其奧の院には五百羅漢の像も有り、結構な所ぢやげな。拜でお出なされぬか」母「ヲヽ娘ようぞ氣が付いた。年寄は明日がしれぬ、そんなら今から參ろかい、其方もおぢや」と立上れば、淸姫「イヱ〳〵私も往てはお氣が張る、若者は重ても參られる、お前ばかり氣樂に拜んでお出遊せ。ソレ紅お供しや」母「イヤ〳〵二人ながら娘が傍に付いて居よ。俺が供にはコレ嚊樣、案内がてら賴みたい」嚊「ヲヽそれはお安い事、コレ〳〵お妼衆、跡の間に參りの衆が腰かけたら、お茶をさし出して下さりませ。イザお袋樣御出」と伴ひてこそ急ぎ行く。跡見送つて淸姫は、飛立つ斗り思へ共、まだ初戀の恥しさ。如何云懸けたら可かろぞと、もぢ〳〵するを妼の白菊が引取て、白菊「コレサ修驗者樣、此姫君は私が御主人、手の筋が見てもらひたいと云兼てござります。御苦勞ながら賴みます」と、いふに安珍扨こそと、思へど態とさあらぬ體、安珍「コレ女中、見らるゝ通り新米山伏、手の筋は扨置いて、足の筋も見る術しらず。こりや許してもらひましよ」白菊「イヱ〳〵喩にさへ怖いものは、山伏の樣なと云ひますれど、お前の樣な美しい山伏は又有るまい。なん

いさめる皇子、「ヲ、賴もしゝ鷲塚、ゆゝしゝ藏人、早急げ」と、勇の足音谺に響きどう〳〵と踏みならすは、恰も八大跋難陀、緊那羅魔睺羅の勢ひやと、怖れぬ者こそなかりけれ。

第二

大慈大悲の御誓ひ、何所はあれど名も高き、壺坂寺の門前に、參り下向の息休め、煎茶あきなふ床几店、紅前垂の色に染み、花香に愛でる人心、思ひ〳〵に立寄つて、暫く息を繼煙管、疲を晴し通りける。跡に續きて門内より、一連なまめく旅姿、附々迄も當世の、はでな模樣を紀の國や、室の郡に隱なき、眞子の庄司が祕藏娘、名も淸姫とて透通る、玉にたとへし品形、年も二八の大振袖、誰にひかれん戀盛、娘自慢の母親が、大和廻りに打連れて、遊山片手の氣儘旅、茶みせのさきに立休らひ、母「ナウ娘、涼しさうな見世ではないか、今日は思はぬ道のはか、こんな所でちと休みや、皆も倶に」と腰かくれば、サアお茶煙草と持運ぶ、茶見世の嚊が馳走振、嚊「マアお前方は何方から何方へお通り遊す」母「イヤ我々は紀の國より、大和廻りを致す者」嚊「ヲ、そんなら御存じはなされまい、高香山とて奥の院がござります、序に御見物なされいで、爰から纔十町計」と、咄半へ歩み來る、藤原の少將安珍は過し春日の一落より、父の勘氣を幸ひに、

へさいで置かうか」と、齒嚙をなせば扨は早、百川が奪取しと、思へど皇子はさあらぬ體、皇子「ヤア粗忽なり藏人、親王が見えねばとて、此皇子が知るべきか。僭こそよく知つらん、拷問して白狀さすか」藏人「イヤサ、いかに抗辨ひ給ふ共、御存じないとは云はせぬ〳〵。是非に御在所承らん」と、反を打つて詰よる所へ、皇子の傅鷲塚彈正遲れ馳に駈け來り、藏人を押し隔て、鷲塚「マア早まるまい兄者人、皇子御存なき上は、奪人は外にあらん。左程大切なる親王の、御在所も知れざるに、皇子へ敵對自滅がしたいか。相手がほしくば此鷲塚、兄弟とて用捨はせぬ、サアぬけ勝負」と罵しれば、藏人腹にすゑ兼しが、待暫し、彼が詞も一理有り、此場で命を果さんより、身を全うして親王の、御行方を尋んと思ひ定めて、藏人「コリヤ鷲塚、兄に向つて舌長の雜言、赦されぬ奴なれ共、仔細有つて此場は引く。必其腮忘れなよ」鷲塚「ヲ、サ、主を奪はれた狼狽者、いらざる贅口きかんより、早く親王を尋出し、二度供奉し奉れ」藏人「ヲ、夫を汝に習はうか、土を穿つて尋出し、朝敵退治の御旗をあげん」皇子「ヤア存外なり藏人、諸卿は殘らず此皇子が味方に付けたれば、最早天位は心の儘、まだ此上にも生公卿原我に敵たふ者あらば、片端に駈立ほつ立、禁獄さして憂目を見せ、麿は天子の位につかん」藏人「其時此藏人は官軍を引率し、皇子の卽位を妨げん」鷲塚「夫こそは鷲塚が、馳向つて追退け、武勇の譽を顯さん」と、挑む兄弟

子の命に隨ひ、百川が遲參を苛ち、下部引つれ驅來り、伴内「コレ〳〵藏人、主人廣純、親王を饗應せんと、水屋の社に待受らる、御迎の爲來りし」と、しら〴〵しくも聲かけたり。藏人「イヤ其手は喰べぬ伴内、いつになき廣純の饗應、馳走を受けずと此方は還御を急がん、立歸つて宜くいへ」と、云捨て行くを伴内が、騙討に後より、はつしと切るを引ぱづし、扨こそ僣親王を、奪ひに來かと拔打に、はつし〳〵ちやう〳〵〳〵、戰ふ内に伴内は、二つに成つてぞ亡にける。殘る奴原餘さじと、拔きつれかゝるを無二無三、あたるを幸ひ切立れば、さしもの大勢こらへ兼、一度に迯るを勝に乘り、汚し返せと追うて行く。其隙に百川人目を包む頬被、杉村傳ひに忍入り、親王を奪取り、小脇に搔込み驅出れば、すは狼藉と仕丁共、追駈け出るを事共せず、片手に提たる段平物、振廻し薙立てられ、近付く者もあらばこそ、爲濟したりと一散に、行方知らず落失ける。

斯共知らず和氣の藏人、深入しては親王の御身の上も危しと、立かへつて御假屋を遙に見れば、南無三寶、幕も蔀も引亂し、親王は在しまさず。扨は敵の計略にて奪取りしか口惜や。いで追かけんと氣も狂亂、かけ出す向ふへ他戸の皇子、大勢引具し寄せかけ給ひ、皇子「コリヤ〳〵藏人、よくも麿が命に背き、伴内を殺したな。親王は何所に有る、渡せ〳〵」と有ければ、藏人「ヤア惚けまい、其方から忍びを入れ、奪取られた親王、たとひ金輪奈落へ隱し置き給ふ共、取か

坊主となし、憂目をさするがせめての腹癒。名も安珍の文字をすぐに、安珍と名乘り、陪堂を乞うて世を渡れ」と、聞くより姫は泣出し、錦の前「イヤ〳〵〳〵、たとひお姿はどの樣に變る共、思切る事はならぬ〳〵。不義の科は同じ事、自も髪切て、供に修行の道連」と、縋り給ふを右大辨、取て突退け、廣純「役にもたゝぬ世迷言聞たうない。ヤア〳〵廣純が家來乘物もて」はつと答て杉村より、立出る家來の大勢、乘物を舁据れば、此方も同じく、百川「ヤア〳〵百川が家來參れ、躮安珍を紀の路の堺へぼつ拂へ」はつと答へて立かゝる。「ナウ是しばし」と錦の前が寄り給ふを右大辨、引止めて乘物へ、乘せてぴつしやり戸を押閉て、廣純「家來共乘物やれ」百川「家來共安珍をぼつ立よ」と、中に二人が仁王立、何とせん方泣く〳〵も、別行く身ぞ哀なる。跡に二人は顔見合せ、百川「イヤなう廣純公、躮が事に隙どつて、親王を奪取る刻限延引いたしたれば、皇子にも嘸お待兼、貴公は是より御歸宅有つて、此趣を仰上られて下されまいか」廣純「いかにも〳〵、何方からなり共片付るが忠義なれば、錦の前をさし上たらば嘸御滿悦、貴殿は跡より親王を奪取て來れよ、後刻對面、先さらば」と、引別れて百川は、又杉村へ廣純は、館をさして歸りける。とは知らずして和氣の藏人、「親王のお召なり、安珍殿はおはせぬか」と、呼はり〳〵出來り、傍を見れ共影もなし。コハ訝しと立つたる所に、間近く聞ゆる數多の音、まつ先に岩倉伴内、他戸の皇

は、どの安珍が云うたな」と、聲をかけて立出るは、右大辨紀の廣純、「マアく伯父樣そこにどうして」と、姫の悔り安珍も、仰天あれば苅藻がさし出で、苅藻「イヤ廣純樣仰やんな、誰しも戀には意地の有る習ひ、ありや姫君樣のお心を引見る爲の戲事」と、言はせも立てず右大辨、廣純「マア默り居らう、姫に入性根する女郎め、隙くれた、立つてうせう。誰か有る、苅藻を親里へ追返せ」畏つたと下部共、「サア失せあがれ」と引立てれば、苅藻「申し姫君樣、心を盡した今日の首尾、忠は不忠と事顯れ、お前も私も此難儀、只今お別れ申します。どうぞ伯父御樣の御機嫌直し、安珍樣といく久しうお添遊せ、お名殘惜しや」と泣沈む。姫君も詮方なく、錦の前「今迄は其方を力、是から誰と問談合、便なき身を推量しや」と、互にすがり歎くにぞ、廣純「ヤア家來共、何をまだまだ、ソレほつ立てよ、早くく」とせり立られ、姫君は、錦の前「おさらば、もう往きやるか、隨分まめで」「御無事で」と、涙を殘し立歸る。廣純重ねて、廣純「イヤ何百川、御邊父子が得心にて、緣さへ切るれば皇子の御望は叶ふといふもの、出家さする迄には及ばぬ事を」百川「コハ廣純公の仰共覺えず、緣計切りたればとて女は輪廻汚く、たとひ皇子へ差上給ふ共、愛著の念止むまじ。さすれば御心に逆らう故、只今姫の目の前にて、躮を討放し度思へ共、世の人口も氣の毒、殊に彼めは熊野權現の申子にて、あいだてなき母めが、三十三度の歩を運せられよと頼む、是幸ひ、非人

の、安珍様とは緣切るのと、うるさい事の有る條、たとへ天上の榮花を極るとて、お前を除けて外の殿御に添ふ氣はない」苅藻「夫なら勅諚を背いても大事ないかへ」安珍「ホヽ勅諚を背いてなり共、當時皇子の御心を宥るは親王の御爲、天下の爲」錦の前「スリヤどう有つても」安珍「くどいくどい」錦の前「ハア是非に及ぬ是迄」と、守刀をひらりと抜き、既に斯よと見えけるを、苅藻が縋止むる内、安珍はつと心付き、見捨て殺さば皇子の憤、彌募らん、賺し宥めて歸さんと、手を取て打笑み給ひ、安珍「ヲヽ左程切なる志何しに見捨てん樣はなし、二世迄も變らじ」と、打て變りし情の詞、姫はあまりの嬉しさに、夢ではないか夢ならば、覺めな〳〵と現なく、互ひにひしと抱しめ、深き妹背となり給ふ。木陰に忍ぶ父百川、走出て二人を引分け、物をも言はず指添ぬいて安珍の、烏帽子髮根元よりふつつと切る。「こは狼藉」と振返れば父百川、はつと驚く姫諸共左右へ投のけはつたと睨付け、百川「ヤアいかに云號あれば迚、婚禮もせぬ先に忍び契るは不義徒、見さげ果たる兩人、悴勘當ぢや、嫁去つた」「エヽイ」と姫君興醒め顏、安珍ちつ共わるびれず、安珍「エヽ情ない親人、度々御諫め申せ共承引なく、非道の皇子に與し給ひ、剩へ勅諚を背いて錦の前を離緣し、某が髮を切つて勘當とは、道ならぬ御仕方」と、いふを打消し杉村より、廣純「ヲヲ左程勅諚を重んずる安珍が、最前錦の前が口說きし時、勅諚を背いても皇子の心に從へと

遇はずに去なれうぞ、お顔なり共見せてたべ、頼む拜む」と苅藻と倶に袂にすがり頼むにぞ、岩木を結ばぬ藏人は、無情も云放さず、四邊を見廻し打點き、藏人「夫程思はるゝを達て留るも無得心、どうぞ首尾して逢せませうが、構へて密に顔見る計り、隙どつて人が見たら爲にならぬ、合點か」と、詞を和氣の藏人は、御假屋さして入りにけり。姫君嬉しげに、錦の前「藏人樣が御座らずば、かうした首尾は出來まいもの、皆の衆も悦んでたも」腰元共「テヽ姫君樣の嬉しい筈、今日はお蔭で私等も目の正月、ほんに藏人樣もよい殿御、先きから見とれて居た。此上に又安珍樣、見たてつきり目が腫う。お氣に入りの苅藻殿、獨殘して私等は、神主方で待ちませう。サア皆おぢや」と氣を通し、打つれてこそ急行く。藏人が知らせによつて立出る少將安珍、まだ青衿の身なれ共、親王社參の供奉として、衣紋美しく著なしたる、花奢風流の出立映、錦の前は飛立つ思、驅寄らんとし給ひしが、始めて交す言の葉に、身の上の憂さ辛さ、云ふも云はれずうぢ〳〵と、さし俯向いて在します。安珍心を察し給ひ、安珍「珍らしや錦の前、是迄慕ひ來り給うた、志は嬉しけれ共、既に伯父廣純公も合點の上、皇子へさし上んと有るよし、云號あればとて、我をしたはるゝは未練々々」錦の前「いへ〳〵何ぼう未練でも、伯父樣の合點でも、皇子樣のお心に隨がふ事はわしやいや〳〵。是といふも父道成樣が、此世に在さぬ故伯父樣の爲たいがい、皇子樣へ差上う

嬉しいとて、構へて此方からそゝるまいぞへ」錦の前「さればいなう、今日爰で安珍様のお目にかかるも明神様の引合せ、なんぼ嬉しいとて其辛抱は爲いぢやいの」と、戀の手管の奥底も、相口同士の媚し。和氣の藏人武國は御前を退き爰かしこ、勞をはらす幕の外、苅藻は目早く、苅藻「申し姫君、あれが藏人様とて安珍様のお妹聟、常々から大中好しぢやげな、何と彼方を頼んで、逢して貰ふぢや御座りますまいか」錦の前「ヲヽそれ〳〵、幸ひのお方頼んで見や」と、差圖に苅藻は頓て立寄り、苅藻「申し藏人様、ちとお頼申上たい事がござります、是へお供申たは、右大辨廣純公の姪君錦の前様」藏人「ホウそりや聞くに及ばぬ知つてゐる、が先頼たいといふ筋は」と、問れて姫は面はゆげに、「申出すも恥かしながら、御存の通り安珍様と自は勅諚の云號、まだ祝言もせぬ先に、マア大膽な者ぢやと思召うが、急に遇はねばならぬ事有るゆゑ、伯父様の目を忍び爰迄慕ひ參りしなり。どうぞお前のお世話にて、ちよつと遇はして貰ひたさ、初對面から馴々しう思召すも氣の毒ながら、何とぞお頼申ます」と、思入つて宣へば、藏人「ヲヽそれは何より安い事、不義密通を取持つとは違ひ、勅諚の緣組なれば遇せるも安けれど、舅百川を始め、廣純公の心入呑込まぬ所有り、先づ今日はお歸り」と、云宥むれば錦の前「互の爲を思召ての御意見を、聞入ぬではなけれ共、怖い伯父御の目を忍び、爰迄來ながら是がまあ、どう

申悪い事ながら、錦の前と安珍は勅諚をもつて云號あれ共、皇子見ぬ戀にあこがれ、戀慕はせ給ふ故、道ならぬ事ながら姫を皇子へ差上げたく思ふ所に、幸ひ今日某が目を忍び、安珍を慕ひ此所へ來る由、婚禮もせぬ先に、忍び逢しを不義と云かけ、緣をきらせん僞」と、聞くより百川打點き、百川「それは何より安い事、躮安珍めは、日頃道立て吐して我が心に叶はず、一大事の砌なれば、是幸ひに錦の前と緣切てほつ拂はん、氣遣ひ有るな。此百川がひん丸めて呑込むからは、天皇をぼつ下し親王を奪取て、一天四海を皇子の御手に入るゝはたつた今、とかく六ケ敷奴は濱成父子、折を窺ひ彼奴等も仕舞て取る合點」廣純「ホヽそれ程に御邊の魂据れば、皇子は元より我等も大慶、またよき事は鷲塚彈正、兄弟なれ共藏人とは格別、かねて皇子の御心に叶ひ、金鐵の如く變ぜぬ根性、兄弟とて赦さぬ奴、揃ひも揃ひし皇子の味方、萬事手番上首尾上首尾。此上篤と謀し合す事有り、いざ此方へ」と打つれて、杉村深く立忍ぶ。斯共しらで戀衣、浮名も四方に橘の、道成卿の獨姫、錦の前と聞えしは、年もいざよふ月の顏、情の靨笑の眉、比類稀なる品形、父道成の遁世より、伯父廣純に養はれ、儘ならぬ身の憂戀に、窶るるも世の習ひかや。お傍女中の其中に、氣も苅藻とて才發者、苅藻「申しお姫様、向ふに見えるが親王様の假御殿、戀君の安珍様もあの幕の內にであろ、どうぞ首尾して逢せませう。顏見たが

伺ひ寄つて源藏が、持たる一通引たくれば、無念の拳に握つめ、中より二つに引裂いたり。南無三寶と專太夫、するりと拔いて切かくるを、さしつたりと拔合せ、丁ど受たる手練の早業、機に消る腰挑灯、闇はあやなし叶はじと、有合ふ松に驅のぼる。音を導に源藏が、振上る一念力、斜に切たる大木の、危き枝を飛下りて、飛ぶが如くに　三重驅り行く。神は人の敬ふによつて威を增せり、ましてや是はいや高き、當今第二の宮山の部の親王、御父帝の御惱平愈の祈とて、春日の社に參籠有り。供奉は參議藤原の百川の嫡子少將安珍、守護の武士には和氣の前司濱成が嫡子藏人武國、非常を戒しめ威儀を正し、事嚴重に備へ居る。爰に藤原の百川は、他戸の皇子の賴によつて、窃に親王を奪取らんと、工む底意は深編笠、鳥居間近く步みくる。此方の松の一村より、「百川暫し」と呼かけて、立出るは紀の廣純、ハット驚き編笠取り近くさし寄り、百川「かねて申し談ぜし如く、兎角親王が在しくては、皇子御位に卽き給ふ事叶はず、人知れず親王を奪取らんと存ずる所に、今日此社への參籠、則ち供奉は躮安珍と聟の藏人兩人なれば、よもや某が奪取るといふ思ひ懸は候まじ、彼等が油斷を窺ひ忍び入らんと、斯のごとく身をやつし參る所、廣純公にも是迄の御出は、何故なるぞ」と尋ぬれば、廣純「サレバ〱、兼て知らるゝ通り、兄道成遁世の節より、娘錦の前を伯父の某に賴むと有る故、引取て養ひおく所に、貴殿には何とやら

は無言、無残の切捨、向ふへ飛くる挑灯の、影に驚き專太夫、劔の箱を小脇にかい込み道引違へ馳かへる。下郎が報知に源藏兼連十八歳の角前髪、振亂しかけ來り、腰挑灯の火影に透せば、朱に伏したる父が體、見るよりはつと狂氣のごとく、早事されしか悲しやと、見廻す骸は深疵ながら、いまだ止の跡はなし、せめての頼今一度呼生て見んものと、用意の氣付を口におし込み、聲をはかりに、源藏「親人樣、忰でござる、源藏が參りし」と、呼聲泣く聲通じけん、手負は息出で目を開き、「源藏なるか」といふに嬉しく、源藏「コレ〳〵氣を慥に持ち給へ」と、抱かゝゆれば權頭、權頭「エエ無念な源藏、死ぬる命は惜まぬが、大切なる劔を奪はれたはいやい」源藏「ヤヽヽしてそれは何者に」權頭「サア其名を知らぬが黄泉の障り」と、聞くより源藏、「エヽしなしたり、是は正しく欺討、イデ追駈て討とめん」と、駈出す向ふに落ちたる一通、取上て押開き、火影に透しつら〳〵と讀みも終らず、源藏「申し親人お悦びなされませ、敵の名が知れました」「ヤアどうして」と起直る、父が目先へ一通さし付け、權頭「寶劔を奪取られよと、頼人の名はなけれど、宛名は林專太夫」「アレ嬉しや」と只一聲、いふが此世の暇乞、笑ふが如く息たえたり。源藏は大聲上げ、源藏「エヽ今一足早かりせば、斯くやみ〳〵とは討せじものを殘念な親人、去りながら、此一通が手に入るからは、やがて敵の首討て手向ませう」と、我を忘れて泣叫ぶ。件の一通尋ねんと引返す專太夫、

吉左右相待べし」と互の挨拶、約束かたき岩倉伴内、館をさして立歸る。跡見送つて專太夫、年來の望叶へりと、件の一通戴き〳〵懷中にしつかとをさめ、松影深く身を潛め、今や〳〵と待居たる。既に其日も暮過ぎて、廿日餘の宵闇の、山路を照す對の挑灯、葛城權頭兼政、劍の箱を自身に携へ、數多の下部前後にしたがひ、夜を日についで急ぎの道、紀の路も跡に遠ざかる、櫟の本にぞさしかゝる。權頭下部に向ひ、權頭「サテ〳〵其方達が道積が悪い故、まちつとに成て夜に入た、大切の物を所持したれば、汝等も跡先に心を配れ」と、氣を付けられ、結句怖がる下部が臆病、下部「イヽエ何にも出や致しませぬがどうやら俄に寒氣が來た」と、跡先見廻し胴震ひ。此方に忍ぶ專太夫折こそ好しとつゝと出で、前に進し對の挑灯一二の刀に切落せば、「そりやこそ出たは」と下部共、皆散り〴〵に迯去りける。思ひがけなき權頭、「コハ狼藉者何奴」といふ聲導に專太夫、物をもいはず切付れば、かつぱと轉ぶを起しも立ず、携へ持し劍の箱、とらんとすれば遣じと引く、機に箱を取落し、是はといふも眞暗がり、尋さがす權頭、油斷を窺ひ專太夫、刀振上げ切かくるを拔合してはつしと受止め、權頭「ヤア卑怯者、意趣あらば名乘かけ、なぜ尋常には討果さぬ、察する所盜賊な」と、刀を拂うて立上らんと、あせるも甲斐なき老人の、疊みかけて切付られ、あしらひ兼たる手負の受太刀、次第に弱る髃髁數ケ所の深手、ヱヽ無念やといへ共こたへぬ相手

かけ、嚴にあゆむ向ふより、尾羽打枯せし浪人者、岩倉を見るよりも、編笠取て顔見合せ、浪人「エヽ伴内殿かお久しや」伴内「コレハ〳〵林専太夫殿、先御無事で」専太夫「貴公も堅固で、珍重々々、見れば供廻りもなく輕々敷體、何方へ御座るぞ」と、問はれて伴内邊を見まはし、伴内「サレバサレバ主人廣純公、貴殿をお頼なさるゝ一大事ある故、只今貴宅へ參る所、ちと急用なれば途中ながら」と小聲になり、伴内「此度帝御惱に付、紀州眞子新左衛門が家に傳はる、雷鳴丸といふ名劍を、御枕に置き給はゞ、御惱平愈あらんと濱成父子が計を以て、家來葛城權頭といふ者を眞子が元へ遣し、寶劍を所持して、則ち今日が歸國の日限、然るに他戸の皇子には、主人廣純公と御心を合され、かねて御謀反の御企あれば、彼の名劍を何とぞ奪取らん爲、先だつて味方の廻者を、權頭が供廻りに入置きたれば、此所を夜に入て通る手筈、貴殿に是を奪取て給はれとの御賴、首尾よく仕果せられなば望に任せ取立んと、則ち皇子の御墨付も持參せり」と、語る内より専太夫、生れ付たる强惡無道、打頷いて、専太夫「コレハ〳〵何事かと存じたれば、いと安き御賴、幸の此松生、最早暮るゝに間も有るまじ、爰に忍びて權頭を討止め名劍を奪取て御手に入れん、御心安く思召せ」と、事もなげに言ひければ、伴内「ホヽ早速の領掌某も大慶、立歸つて此趣申さん」と、皇子よりの御墨付渡せば受取り、専太夫「御前はよろしく伴内殿賴存る」伴内「何が扨〳〵追付

にや及ぶ、點合つた旁を一々に詮議する」「さういふ吾主を」「イヤ儕を」と兄弟柄に手をかけて、摺寄り〳〵龍虎と爭ふ詞戰ひ、皇子いらつて、皇子「ヤア鷲塚、汝が胸中くらしとは麿を疑ふ面當、兄弟とて容赦すな、そやつ急度糺明し、寶の有所詮議せよ、サア〳〵なんと」と三方論議、既に危く見えければ、兼實卿雙方を押しづめ、兼實「三軍の災は猶豫に生ず、彼等が諍ひに皇子の詞を添らるゝは大人氣なし、藏人は親王の雜掌、鷲塚は皇子の傅、兄弟といへども互に家を隔つれば、疑ふは理りながら、神寶を奪取る事一方ならぬ大望、所詮汝等が力に及ばざる謀計なれば、兩人共に疑念はない、盜賊外に有るは治定、草を分つて詮議すべし」と、理非明白なる一言に、各かへす詞もなく、詮議一途に極まれば、親王もやゝ御心を痛ましめ給ひ、親王「父帝御惱平愈の御爲に、春日明神へ兼て祈願をこめ置きしが、かゝる凶事の起りし事も、夜の大殿に引籠らせ給ひ、朝政怠らせ給ふ故、彌神慮をすゞしむるに若くはなし。麿は是より參籠せん、急いで用意有るべし」と、御座を立せ給ひければ、皇子は心に笑の眉、玉だれ深く入り給ふ。百川廣純したり顏、互に目と目を見合せて寛々と退出す。臣臣たらぬ勢ひに、誰か恐れはあらがねの、土も草木も君が代に、從ひ靡く時津風、吹傳へたる 三重 比なれや。紀の路より、都に近き櫟の本、往來しげき道筋も、黄昏時の跡絶を待ち、供をもつれず只獨、右大辨廣純が郎等岩倉伴內、主の威光を鼻に

あぐみし體、嫡子藏人すゝみ出で、藏人「雷鳴丸の劍と申すは、鯉口をはなるゝ時、雷の音四方にひゞき、魍魎鬼神の障怪も叶はず、惣て一家の災を防ぐ名劍と傳聞き、帝御惱平愈の御爲に、權頭を使として、紀州眞子新左衛門方へ先達てつかはしたり。十握の寶劍紛失とはゆゝしき大事、皇子には又何として、委しく知召されうやらん、先此筋がいぶかしゝ、承らん」と詰かくれば、親王を始め兼實卿、百官百司も顏見合せ、奇異の思をなしにけり。鷲塚「ホヽ、其證據是に有り」としづ〳〵と立出る皇子の傅、鷲塚彈正國秀、あやしき死骸戸板にのせ、庭上に舁据させ、鷲塚「寶藏の守護職神祇官大江の友高、寶劍を奪はれし越度によつて生害すと、委細の書置明白たり」と、一通をさし上れば人々披見ある内に、藏人立寄り死骸を改め、藏人「コレサ鷲塚、此友高が腹の切樣、刀の血の付き樣迄、自身の業とは思はれず、胡亂な死骸を證據といふ、汝こそ詮議の手がかり、盜賊の筋、いへ聞かん」と反を打て立かゝれば、鷲塚「ヤア騷れそ藏人、御邊は現在此鷲塚が見なれば、兼て胸中はよつく知られん。胡亂な物を大切なる證據に立てうか、切腹の吟味より、自筆の書置慥な證據を云ほぐす、御邊の心底呑込まぬ」藏人「アヽいふな〳〵、自筆やら贋物やら、友高が手跡ついに見ねば、死人に文言四も五もいらぬ、盜賊の筋聞う」鷲塚「ヤア親濱成殿さへ批判なきをいらざる御邊が出しやばり立ち、盜賊の筋聞うとは、此鷲塚を罪に落さん巧よな」藏人「云ふ

や」と、いはせも立ず、濱成「愚々、唐土は夷國賤しき民を天位と仰ぐ筋有らうが、日本は神國、天照神の御末ならで受つぎ給ふ理由なし。まつた后の御事は、天津兒屋根の命より、代々傳はる皇后、俗でいへば御本妻、上を學べば下々でも、本妻の子をさし置き妾腹につがす法はなし。其理を知らぬ汝にあらねど、忠臣顔に座をさらず、宮殿に突張るも合點々々。御邊が妻女は元來皇子を守育し乳母といひ、子息安珍と廣純卿の姪錦の前は勅諚の云號、蜘の巣程引ぱつた縁者、皇子に御位つがせたいも道理々々」と、いはせも立ず居丈高に成り、百川「ヤア案外なり濱成、縁に引れて道を忘れ、大切なる御即位に最たる評議をすべきか。今一言いうて見よ」と、面色筋をいら立れば、濱成「ホ、いはず共御邊が胸中、眼前に顯し見せん」と詰寄り／＼諍ふ中、怒れる皇子の雷聲、皇子「ヤア默り居らう老ぼれめ、儕が麿に位をつがせぬ巧知るまいと思ふか、誠は神代より傳はる三種の寶の中、十握の寶劍紛失して、父帝の御物思ひ、夜の大殿に引籠らせ給ふ故、密に汝と衆寶が心を合せ、紀州眞子の家に傳はつたる、雷鳴丸といふ劒を十握の代に立て、親王へ御即位あれと奏聞し、家來葛城權頭に云付け、眞子新左衞門方へ取りに遣したる事、自然と知つたる皇子が賢德、忝くも三の寶は智仁勇の三德、其理にそむく汝等ゆゑ、寶劍は神上りし給ふと思ひしらぬか、なんと／＼」と三人一所に席を打ち、言訽ればさしもの濱成はつと計、返答胸に

にょつて、御位讓あるべき所、兩宮の御諍ひ一決せざるに、百川の押奏一理有りといへ共、是をもかたよりて治定ならざれば、君宸襟を惱せ給ひ、彌御惱も治しがたし。去に依て前司濱成、汝は一たび官祿をさし上げ、今飛鳥の里に蟄居すれ共、老人といひ始終を存ぜし者なれば、兼て思ふ仔細もあらん、いづれか寶祚をつがせ給ふべき御器量や有る、憚なく申上げよ」とありければ、濱成謹んで、濱成「恐れながら此儀は御評議に及ばず、兄宮と申せ共他戸の皇子は、更衣の御腹に宿り給へば御次男も同然、山の部の親王は御若年と申せ共、后腹にて自然と傳はる天尊、此君に御卽位あらば、民萬歲を唱へ奉らん」と恐れも無げに言上有る。右大辨紀の廣純笏を上げ、廣純「ヤア嗚滸がましき一言、たとへ御腹はともあれ一の宮を差置き、二の宮へ御位とは、贔屓か但し賴れたか、山の部の親王は若年といひ、結構一遍の穩當、御卽位とは思ひもよらず、皇太子は他戸の皇子、諍ひに及ばず」と、云解せば濱成、濱成「イヤそりや無體の御評議、皇子は一の宮と申せ共、御心たけ〴〵しく、武勇を好ませ給へば君御心に叶はず、況や后腹を押退け、太子に立てる法や有る、御賢慮薄し」とやり込めれば、此方の百川くわつとせき上げ、百川「ヤア舌長なる批判、母方を改るは愚臣のなす所、既に唐土の舜王は、賤しき鼓腴の子なれ共、堯王の讓を受け、始皇は呂不韋が胤なれ共 莊襄王の位をつぐ、其外禹王高祖の賤陋擧て數へ難し。なんと是でも母方の評議有るや否

道成寺現在蛇鱗

事一ならざれば遂る事あたはず、象を圓にし機を灰轚に貫いて、思發々々濟事足んぬと、王淤雍子を諫めたる、喩を爰に日の本や、神と君との道直に、國を傳へて四十九代、光仁天皇の統御ある奈良の都ぞ豐なれ。比は寶龜八つの年、主上御惱によつて、皇太子を立てらるべき宣命に任せ、御連枝の御位定め、參議中の衞の大將藤原の百川、己が儲の一の宮、他戸の皇子を帝位に卽けんと、叡慮を恐れず公卿の評議も顧ず、只一人擢でて、儲位の一定を聞ずんば、宮殿を退かじと、日夜を分ぬ押奏聞、四十餘日が其間、またゝきもせず階下に坐し、魏々儼然たる粧ひは、たぐひ稀なる逌忠なり。旣に其夜もほの〴〵と、明はなれたる雲井の御殿、御卽位の評議とて、第一の宮他戸の皇子、第二の宮山の部の親王、左右の褥につき給へば、つゞいて左大辨小野の兼實、右大辨紀の廣純、群臣諸卿綺羅星の、袖を連ねて參列あり。御階の下には舊臣和氣の前司濱成、嫡子藏人武國、其外禁庭守護の武士、威儀を正して相詰る。兼實卿仰出さるゝは、兼實「此度天皇御惱

近江源氏先陣館 終

あるな時政公、近江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱、それへ參つて御見參仕らん」と、呼はる聲に流石の時政仰天あり、時政「稻毛の前司に勸められ、深々と入來り、又も佐々木が手立に乘りしか、思へば無念」と引返す、表の方より和田兵衛、三方携へ立出づれば、此方より三浦之助、長柄の銚子携へ出で三浦之助「只今城外に於いて賴家公實朝公、御兄弟御對面の上、互に和睦相調ふ」と、いふに和田兵衛引取つて、秀盛「兩將の御心解合ふからは、時政公にも異議あるまじ、御悅の御盃頂戴あれ」と詞の下、佐々木四郎遙に手をつき、高綱「某方寸の謀を以て、時政公を城内へ引入れしも、御和睦を調へん爲。君御一人の御心にて、萬民塗炭の苦を遁る。御承引下さらば、敵對申せし我々、御刑罰にあふとても、聊か恨と存ぜず」と、詞をつくし理をせめて、命惜しまぬ三人が、忠義を感じて時政公、時政「ホヽ適れなる忠臣義士、實朝公御許容の上は、某に何の野心、和睦は願ふ所ぞ」と、詞に三人飛立ち悅び勇立ちたる折からに、軍勢引連れ大江の入道、餘すまじとて追取卷く。「ヤア物々しや」と三人が、拔き放したる太刀風に、恐れて近寄る者もなく、入道一人を引挾み、是迄工みし惡の報い、思ひ知れと首打落し、悅び勇む和田、三浦、佐々木が家の四つ目結、その結び目は代々までも、解けず治まる秋津國、榮えの春ぞめでたけれ。

うたり、覺悟せよ宇治の方」と、いふ間もあらせず胸板へ、發矢と響く筒音に、脆くも息は絶果てたり。高綱「ヤアお騒ぎあるな宇治の御方、斯くあらん事を察し、つまり〳〵に守護する高綱、入道めが惡工、いかなる事も計られず、奧へ〳〵」と勸めやり、高綱勇んで大音上げ、高綱「鎌倉の大將北條時政を、佐々木四郎が討取つたり」と高らかに呼はれば、主人の敵遁さじと、拔連れ〳〵切つてかゝる。高綱「ヤアことぐ〳〵しき雜兵原、一々此世の暇をくれん」と、群がる中へ割つて入り、薙ぎ立て〳〵切まくる、その太刀風に木の葉武士、むら〳〵ぱつと逃散れば、佐々木も上帶しめ直し、太刀のはめきを冷さんと緣側に突立つ折から、矢一つ來つて高綱が、肝のたばねにかつきと立てば、うんと計りにどうど伏し、果敢なき息は絶果てたり。誰が仕業とも白書院、弓矢携へ悠々と入來る北條時政、時政「是迄數度の戰に、佐々木めにたばかられし其返報、稻毛の前司は某によく似たるを幸ひ、我姿に出立たせ、佐々木めに宛がひし故誠と思ひ、本體を現はせし狼狽者、和田三浦は先だつて入道が、謀計に死したる由、稻毛が咄に聞きたれば、最早高綱唯一人と思ひの外、我が矢先きに最期を遂げし誠の佐々木、今は大將一本立。ヤア〳〵賴家は何所に有る、時政直に見參せん」と、呼はり〳〵奧の方、のた〳〵歩む耳元へ、又もどつさり種が島、吃驚仰天振りかへる、お花畑の鳥威し、簑笠取つて高笑ひ、高綱「ハヽヽヽイヤお騒ぎ

と入道の勸め、誠と思ひ極めしに、今城外に和田佐々木とはの聞えしは、誰ぞ遠見して參られ」と、いらつて宣ふ詞を打消し、廣元「ヤア和田佐々木三浦を初め、其外賴む味方の大將、殘らず討死したは違はぬ、死ぬるのが悲しさに血迷うた空耳ならん、こゝま言いはずと早々生害」宇治局「イヤ此實否を質さぬ内は、滅多に自害成るまいわいの」廣元「ならずば某介錯」と、すらりと拔いて切付る。どつこいさうはと三方に、受けてもか弱き女業、剛氣の入道疊みかけ、既に危き其所へ、後の襖蹴放して、佐々木の高綱飛んで出で、入道を取つて投退け、高綱「某初め和田三浦、討死と佯り、御一方に生害勸め、夫を手柄に時政に、味方せんとは太い企、是迄、味方の謀内通したるも皆儕、主を賣るの極惡人、最早遁れぬ覺悟せよ」と、詰かけられてちつ共動ぜず、廣元「ホヽよい推量、儕等が忠義立てが胸惡さに、賴家親子が首取つて、時政公へ降參せんと、心を碎いた我が手立、十が九つ仕おほせしに、見顯はされて殘念々々。もう此上は死物狂ひ」と、佐々木を目懸け切付る。さしつたりと搔潛り、刀をちやうど踏落せば、詞には似ぬ大江の入道、奥をさして迯行くを、遁さし遣らじと追うて行く。跡に母君御聲高く宇治局「ヤア〳〵者共、かゝる事とも知り給はぬ賴家公御身の上氣遣はし、此通り注進申せ、急げ〳〵」に女中達、皆々奥へ走り行く。如何忍び入りたりけん、北條時政廣間に駈出で、時政「入道が知らせ故、時政直に向

との御事にて候」と、涙隱して述べければ、宇治局「ホ此方からも使を以て申し上げんと思ひし折しも、局大儀ぢや。シテ我君には、お隱まいようお入り遊ばすか」千草「ハア左樣でござります、未明より御覺悟よく、只母上樣の御菩提と、御經讀誦遊ばしてでござります」宇治局「ナニ自らが佛果の爲」ハアと答ふも尋ぬるも、跡は涙の玉霰、宇治局「御前へ歸つて申さうは、御念もじのお使、かく成る上は互に申すことの葉はなく候へ共、今生の名殘に御顏ばせ、今一目見まほしくさふらへど、入道の計らひ故、それも叶はず、冥途の旅へ赴き候、必ず母にお心をかけられず、大將たる御身に候へば、潔よく御生害をくれ〴〵賴み參らす」といふ聲涙に咽せ給へば、付添ふ女中も一同に、お道理樣やと伏沈む、涙限りはなかりけり。廣元「ヤア囂しい女ばら、局も早く立歸り、賴家公に早く切腹なされといへ、疾く〳〵行け」と追立てられ、是非なく〳〵も立つて行く。跡に入道聲荒らげ廣元「泣いても悔んでももう叶はぬ、さつぱりと諦めて、どれからなりと先陣お仕やれ。此入道が初めたけれど、年役なれば跡から罷る。女ばらは誰彼なしに立竝んで一所に死ね。サア宇治の方、時移る」と、三方取つて指付け〳〵、サア〳〵〳〵とせり立つるは、此世からなる呵責の鬼、外面は修羅の攻太鼓、矢叫びの聲喧く、母君耳を敧て給ひ、宇治局「ハテ訝しや、昨日の軍に和田三浦を初め、佐々木の四郎も討死せし故、最早この城保ち難し、生害せよ

日本無雙の名城に、立籠る源の頼家公、數度の軍に戰勝てども、目に餘る敵の大軍、味方は小勢矢も盡きて早落城と見えにけり。城内には大江の入道御母君を初とし、女中殘らず居竝んで、頼家公の御居間と、隔つる座敷は大廣間、今日を最期の門出と、お湯引き、髮に梳り、留木の伽羅に諸軍勢、心ときめくばかりなり。入道母君に打向ひ、廣元「天命とは申しながら、和田佐々木三浦之助、おのれ〳〵が片意地を言募り、此入道が下知を用ひず、その罰で殘らず討死、所詮開くべき運ならねば、御生害を勸めまゐらせ、某とても跡より御供、時刻移らば敵軍爰に亂れ入らん、敵に首を渡さんより、片時も早く御自害」と、頻つて勸むる入道が、底意の程ぞ恐ろしき。宇治の方打頷き、宇治局「和田佐々木三浦の輩、討死せしとある上は、最早叶はぬ味方の運命、何惜しからぬ自らが命さりながら、己々が身の始末疎になし置かば、是又死後の物笑ひ、ヤア皆の者、心殘りのないやうに、めい〳〵心付けあうて、自らが自害も見届け、其上は心次第、必ず早まる事なかれ」と、女ながらも上に立つ心は遙か奥よりも、頼家公の御使として局の千草、しとやかに手をつかへ、千草「母君樣へ我君よりのお使、微運は申上ぐるに及ばず、味方の面々討死の上は、生害の時節今日、潔う死出三途の御供せん、母上樣にも御心靜に御用意あそばせ、此期に臨んで申すべき事とては、彌陀の六字より他事なく候、その旨御肝要に思召し下されよ

て立歸る、天の助は人力の、及ばぬ運ぞ類なき。篝火「エヽ手に入る敵をやみ〳〵と、遁し歸へすは何事ぞ、未練共卑怯共、言ふに言はれぬ腰拔武士、お前は天魔が魅れしか、情なや淺ましや」と、恥しむれば、莞爾と笑ひ、高綱「敵の謀について謀を行ふ高綱、女如きの知る事ならず」篝火「ムヽ手に入る敵をやみ〳〵遁がすが、謀か計略か」高綱「ホヽ今歸つたは時政でない、ありや僞者」篝火「ナニあの時政を僞者とは」高綱「ホヽ是迄度々の戰に、此高綱に欺かれ、其無念已む事を得ず、面體恰好似たるを選み、時政に扮裝たせ、今日の軍に討死させ、時政こそ討取つたりと、味方の者に油斷させ、其虚を討たんといふ手立、疾くより計り知つたるゆゑ、攻口を弛めさせ、わざと助けてこの家へ伴なひ、城内の變一々聞かせて歸せしは、誠の時政を城内へ、誘き出さん我が智謀」と、語るにさてはと女房が、初めて悟る夫の心、感じ入つて横手を打ち、篝火「適れ我夫稀代の計略、そんなら和田殿三浦殿も」高綱「シイ謀は密なるを善」といふ間に取出す種が島、狙は松が枝ばつたり人音、篝火「申し今のは、敵より入る忍びの曲者」高綱「早明方も近づけば、我は是より城内へ」と、又も疊を明鳥、かはい〳〵の聲につれ、思出したる小四郎が、名は消えもせで其主は親を殘して西方淨土、彌陀の御國の道塚は、計り知られぬ佐々木が拔道、拔目なき智謀の程こそ三重たぐひなき。江州坂本の城と申すは、後に峨々たる比叡を負ひ、前には湖水漫々として、

取分け無殘は三浦殿、毒酒を以て和田を殺せし暴惡不道の大江の入道、摑み拉いでくれんずと、阿修羅王の荒れたる如く、入道めがけ驅け上る、板間にかねて陷穽、踏はづして眞倒樣、下に植ゑたる劍にさかれ、身はずた〳〵と三浦の最期、皆入道が謀計なれば、此上は賴家公御身の上も危し危し。片時も早く城内へ、御入あつて守護有るべし」と云捨て又も引返せば、始終こなたに立聞く時政。佐々木はとかう呆果て、暫し詞もなかりしが、高綱「ハア、天なるかな命なるかな、和田と云ひ三浦と云ひ、いづれも秀る當時の英雄、入道などが手立に乘りしは、よく〳〵味方の運の盡き、此上は片時も早く、城内へ馳せ向はん。篝火用意々々」と氣を急く折から、俄に表騷がしく、馬の嘶き數多の人音、三鱗の旗指物、弓鑓持筒引馬の、飾りもきらつく鎧武者、門口に謹んで、侍「鎌倉の大將時政公、此家に遁れまします由、忍びの物見が知らせにより、御迎の爲參上す、早く御歸陣然るべし」と、呼はり皆々平伏す。内に女房が猶急立ち、女房「アレ時政を迎の大勢、この場を助け歸しては、龍を淵へ放すも同然、サア今の内本望々々、サア〳〵」とあせる中、時政公一間を立出で、時政「誠に危き難を遁れ、殊に今宵の一宿迄、淺からぬ亭主が情、町人なれば褒美には、この濱邊に家屋敷を建て與ゆる間、濱屋敷として永く所持せよ、猶も望の事あらば、重ねての沙汰に及ばん。さらば〳〵」と馬引かせ、ゆらりと乘れば諸軍勢、四方を圍う

なし、萬事油斷なき様に、變あらば早速知らせよ。早行け〳〵」と云渡し、差寄つて耳に口、「ハア、畏まり候」と引返して拔道へ、飛込むあとの古疊、元の如くに押し直せば、女房篝火勇み立ち、女房篝火「今の注進聞くに付け、割符を合す奥の老人、時政に極まつた。此家へ來るは天の與へ、百萬騎よりたつた一人を討取れば、四海浪風靜まる手柄、用意さしやんせ四郎殿」と、急立つ女房騷がぬ高綱、高綱「ホヽ、圖らず我が手に落入る時政、とても今宵は過ごさぬ命」女房「いややい〳〵、落付くも時による、油斷大敵小敵とて、侮らずとは常々お前が教へる軍法、いざ討ち給へ、早う〳〵」と、急きに急き立つ折もあれ、又も知らせの鳴子の音、四郎心得手取早く、疊をちやうど跳のくれば、すつと出でたる四の宮太郎、四宮「御注進」と呼はるにぞ、高綱「ヤア汝が五音は甚だ不吉、心元なし如何に〳〵」四宮「されば候、城内には今日の勝軍、いづれも酒宴の興を催す中に、取分け和田兵衞殿、例の大酒數杯を傾け、餘程酒興の折柄に、大江の入道銚子盃携へ出で、和田兵衞の軍功大將感じ思召し、御悦びの御酒を下さる、頂戴有つて然るべしと、聞くより何の思慮もなく、土器取つて押戴き、ちやうど受けて乾し給へば、忽ち眼色土の如く、六穴より迸る、血潮は瀧の如くにて、さしも剛氣の和田兵衞殿、虚空を摑んで七顚八倒、其儘息絶え候」と、語るにはつと佐々木が仰天、高綱「ム、シテ〳〵其座に三浦之介は有合さずや」四宮「さん候、

谷村小藤治。シテ城内に變はなきや、今日の一戰、味方の勝利、次第聞かん」とひそ〳〵聲、侍「さん候、味方の軍勢粟津の汀に屯を構へ、戰を催す所に、敵の大軍どつと押寄せ、無二無三に駈け立つる。味方はわざと負色見せ、十町ばかり引退く。勝つに乘つて追來る大軍潮の涌くに異ならず、味方もこゝに踏止り、火花を散らして攻め戰ふ。仰置かれし時分はこゝぞと、四つ目結の旗さつと靡かせ、敵の後に大音上げ、佐々木の四郎高綱是に有りと名乘りかけ〳〵、驀地に駈け立つれば、そりやこそ佐々木が又出たぞ、謀に乘らぬ内、引けや〳〵とわれ一に、狼狽へ騷げば後陣より、大將時政采配振り立て、佐々木とて鬼神にてはよもあらじ、騷ぐな者共備へを立てて戰へと、高らかに呼はれども、佐々木といふ名に聞怖ぢし、崩れたつたる敵なれば、耳にも更に聞入れず、風に散り行く木の葉武士、迯げ行く者に目はかけず、目指すは時政只一人、餘すな漏すな者共と、稻麻竹葦と取巻きしが、天を駈けつて遁れしか、又地を潛つて走りしか、無念ながら時政は討漏らし候」と、息つぎあへず訴ふれば、二郎作「ホヽ適れ高名、手柄々々、併し時政を討漏せしは殘念至極、シテ時政が出立は」侍「鎧は緋縅錦の直垂」二郎作「何、緋縅に、直垂とや。シテ〳〵、徒立か、但しは騎馬か」侍「イヤ馬は其場に射すくめられ、乘換もなく身は徒立」次郎作「ムヽ、さこそ〳〵、汝は直に城内に立歸り、勝軍の油斷を窺ひ、夜討をかけまいものでも

わいな。まだ年はもいかぬもの、孝行せいと慘たらしい、父御の詞を子心に、大事々々と忘れもせず、立派にあつた其時の、姿が今に目先に見え、何と是が忘られやう、わしや忘れぬ得忘れぬ」と、どうど伏し、歎けば流石恩愛の、涙は胸につゝかけながら、二郎作「ヤイ聲が高い靜に泣け、我迚も肉縁の悴、不愍になうて何とせう、側であり〳〵見た其方よりも、見ずに案じる我が心、どの樣に有らうと思ふ、骨は碎かれ身は刻まれ、肝のたばねへ燒金を、刺れる樣にあつたわい」と、涙隱せば阿房は目をすり、ぼん太「アヽ利根な坊樣で、先度も、俺が穴一してゐたれば、コリヤ阿房よ、穴一すると手が下るといはしやつたによつて、コレ〳〵そんなませた事、いふとつい死ぬるぞやと云うたれば、俺や侍の子ぢやによつて、死ぬる事は何共ないが、ひよつと死んだら、嘸かゝ樣が、泣かしやろなアと云はしやつた、つい泣かしやる樣になつてのけた」と、大聲あげておい〳〵泣く。二郎作「コリヤもういうてくれな、聞く程苦しい此胸が、裂ける樣な」と伏沈む、涙は琵琶の湖に、漣寄する如くなり。かゝる歎きの時しもあれ、長押に掛けたる鳴子の音、風かあらぬかぐわら〳〵〳〵。二郎作聞くより突立上り、二郎作「コリヤ女房、城内より知らせの早打、奥の間に氣を附けよ、阿房は裏を」と追立てやり、戸口をちやうど指固め、居間の疊を跳ね上ぐれば、下よりぬつと鎧武者、侍「今日味方の勝軍言上せん」と手をつけば、二郎作佐々木高綱「ヤア音高し〳〵、

穂にも怖ぢるとやら、承つて益ない事、定めて御疲れでござりませう、見苦しけれど奥へござつて、御休息されませんかい」二郎作「イヤモ何にも御氣遣な事はござりませぬ、ゆるりつとお休みなされませ」老人「ホヽ何かに附けて心遣ひは過分々々」と、老人は靜々立つて奥に入る。跡に女房がくしくと、思ひ侘びたる憂き涙、夫も思案あり顔に、手を拱いてさし俯向き、互に詞納戸より、ひよかく出づる阿房のぼん太、重箱片手に、ぼん太「コレお家樣、お前忘れてござんすか、今日はぼん樣の一七日の逮夜、夫で一文餅三つ買うて來た程に、祝うて佛樣へ進ぜて」と、いふに思はずせき上げて、わつと計りに伏沈む。「ヲヽしほらしい、やう氣が付た、愚なわれが心ざし、供へいでなんとせう」と、しほく立つて押入の、襖開くれは釣佛壇、御燈明の火は有りながら、濕める香爐の香もりかへ、「智覺院幼幻童子佛果の爲」と手を合せ、伏し拜む目も涙なり。「申し佐々木殿」二郎作「シイ」女房「イヤ二郎作殿、お前もこちら向いて、せめて一片の回向なとして下さんせ、私が千遍唱へるより、お前のたつた一遍が、あの子の功德になるわいの」と又伏沈めば、「ヤイくたはけ者、奥に客人もござるに、見苦しい其の泣聲、エヽ未練な奴」と叱られて、女房「イエくなんぼ叱らしやんしても、是が泣かずに居られうか、いかに男のこうけぢやとて、お前計りの子かいな、私が爲にも子ぢや

してござれば、敗北とやらも有るまいに、定めてお腹が立つでござりませうな」老人「何の〳〵、勝負は時の運による。一旦の勝より始終の勝こそ善なるべし、計らざる今日の戰ひ、佐々木の四郎が謀に乘せられ、味方の大軍大半討たれ、某とても無念の敗北、陸路は佐々木に立切られ、石山へも歸り得ず、とやせん方も渚の方、途方に暮れて漂ふ所に、幸ひなる渡舟、危き難を遁れしも、全く其方が情故」と、始終を咄す軍の樣子、聞いて女房がさし寄つて、女房「申しその佐々木とやら云ふ人は、討死と聞きましたが、矢張生きて居られますか」老人「さればく〳〵、是迄佐々木を討取りしも度々なれど、皆影武者の僞佐々木、六日以前の戰に、佐々木が悴小四郎といふ者を、味方へ生捕るその砌に、討死せし佐々木が首、悴小四郎に實檢さすれば、誠の親と歎き悲しみ、直樣切腹、扨こそ佐々木は討取りしと、安堵の思に今日の出陣、又も佐々木に追立てられしは、幾人ありとも計なき、佐々木が謀の恐ろしや」と、舌を卷いて物語、聞く女房が打萎れ、女房「今のお話聞くにつけ、侍といふ者は、小い子でも軍して、命を捨てるといふ事は、果敢ないといはうか、いぢらしいといはうか、其の親々の身に取つては」といふを打消し、二郎作「エヽ何の影もかまはぬ他所の事を。イヤ申しかうお宿申しますからは、迚もの事にあなたの御名を」老人「ホヽ我こそは」といはんとせしが詞を控へ、老人「イヤ葉武者なれば嗚呼がましう」二郎作「ムヽ成程、芒の

り、老人「一樹の蔭一河の流、不思議に亭主が世話と成り、寒夜の一宿過分の至り」と聞いて女房が呆れ顔、女房「テモまあ仔細らしい物の云様、そして見りや生きた兜人形見る樣なお方、ありやマア何方でござんすぞ」三郎作「イヤどなたやら俺も知らぬが、今日は草津の方に軍があると聞いた故、何でもそこらあたりへ行たら、よい儲が有らうかと、矢橋の濱に舟付けて見合して居る所へ、彼方がひよつこりお出なされ、何かなしに舟へ飛乗り、ヤレ出せ、ソレ漕げと、滅多無性におだてられ、合點が行かねどマア沖へ漕出して、扨樣子はと尋ねたれば、石山の陣所へ歸る者、それ迄急ぎ舟を著けよ、望次第に舟賃やらうと仰やる故、畏まつたと精出して、押しても漕いでも向ふ風、ゝ一向石山へ舟は寄らず、仕やう事なしに爰まで連れまして戻つた。今夜はこちにお泊め申し、ゝ風が凪だら石山へお供する、隨分御馳走申してくれ」と夫が詞に、女房「それはマア〳〵御難儀や、見ました所鎧とやらを召してござれば、定めて軍に行くお方、ナ申し、左樣な事でござりますか」と、尋ねに老人打頷き、老人「ホウ推量の通り今日の軍に思はぬ敗北、夫故かよる世話に預る」女房「コレこちの人敗北とは何の事ぢやい」三郎作「ハテ軍に負けるを敗北といふわいやい」女房「ムヽそんならあなたはお負けなされたのか、ヲヽ夫れはまあ〳〵お笑止や。そして見ました所が、お年に不足もなさゝうなに、命がけの軍せうより、御子樣も有らうに、隱居

手へ探り行く。こなたは知らず高這に、探りあたる蒲團の內、何かはなしにぐすくく、はひれは阿房が大聲あげ、ぼん太「アイタヽヽヽヤレ盜人め、出あへくく」と呼はる聲に吃驚し、こけつ轉びつ侍は、何所ともなく迯歸る。跡にぼん太が高笑ひ、ぼん太「ハヽヽヽ逃るはくく。ヤイ侍め、汝が血氣に任せやじり切らうとかゝつても、滅多に切れるぼん太ぢやないわい。お爲樣も亦お爲樣ぢや、何のあんな奴が心を試す事があるもので、此間から來る奴等に、碌な奴は一人もない。エヽ隙費な、追付け旦那樣が戻つてござらう、湯なとたいて腰湯さそ」と、あたりこてくく取片付け、納戸へ入るやいるさの月影さへ暗くしめぐくと、空にちらつく雪よりも、齡の雪を蔽うたる、簑笠著たる老人を、乘せて我家へ戻り舟、櫓を押切つて陸に漕付け、二郎作「急ぎ候程に、早舟が著きて候、卽ち是が我等が內、サアくくお上りなされませ」と、歩みわたせば老人は、しづくく上る陸の方、船頭も舫綱、亂杙に縛り付け、いざ御案內と先に立ち、二郎作「女房共戻つたぞよ、お客がある、何所に居る」と、夫の聲に女房が疾しや遲しと納戸を出で、女房「チヽ二郎作殿戻らしやんしたか、今日は定めし寒かつたでござんせう」二郎作「イヤモ寒い段ぢやない、雪は散つく、向ふ風の比叡颪で、櫓束持つ手も切る樣にあつたれど、風に逆うて櫓押したので、おれは寒いを忘れたが、あなたには嘸お冷えなされう、いざまづあれへ」と勸められ、簑笠脫ぎ捨て上座に直

に出合はゞ助太刀して貰はにやならぬ、それ合點でござりますか」侍「よし〳〵助太刀呑込んだ」およつ「萬一返討にあふ時は命を捨て下さんせにやならぬぞへ」侍「よし〳〵返り討呑込んだ」およつ「ヲヽ何を言うても呑込んだと、大腹中なお人では有るわいの」侍「よし〳〵大腹中呑込んだ」「ヲヽそりやお前何を言ふのぢや」侍「何ぢや知らぬが早う寢たい」およつ「マアよ知れぬ事を云はず共、私が敵といふは兵法の達人、助太刀せうと仰やるお前、手の内が見たうござんす」侍「ヤア鉢坊主ぢやなし何の手の内」およつ「サア兵法の御鍛錬が」侍「アヽ兵法つかふのか、そりや心安い、何時なとつかうて見せう」およつ「左樣なら御手練の程を、ヤレ〳〵嬉しやと申してから、心掛けねば竹刀しなひの用意もなし、何を以て御手練を」侍「イヤ氣遣召さんな、竹刀しなひ用意致した」およつ「何竹刀を御用意とは」侍「ヲヽサ、心掛の武士だもの、竹刀がなくて何とせう、しかも長いと短いがある」と、兩腰するりと拔放せば、赤鰯でもない備前竹光、侍「何と適れ竹刀であらうがの」およつ「アノ是がお前の魂か」侍「イヤ魂は飛んでしまうてこりや人をだましいぢや」およつ「ヲヽいつそ呆れて物が言はれぬ。もう御手練見るに及ばぬ、そのお心なら寢て語ろ」侍「何ぢや寢よう、こりや忝い」といふ間に行燈吹消せば、侍「コリヤなぜ火を消した」およつ「エヽ明くては恥かしいな」と、勝手知らねば此所彼所、尋ね探ぐる其中に、阿房をそつと蒲團の内、およつは勝

こなたも打笑み、およつ「聞きますればあなたのお名は園部樣とやら、薄雪空の相合傘、お情深いも御縁の端、そしてどうやらいとしらしいお姿といひお顏付、女をなづます目元のしほ」と、こぼれかゝりし姿振に、現ぬかして氣は上づり、側に阿房が差覗き、ぼん太「エヽ惡い身をする侍、丁度股ぐらへ山猫挾んだ樣に」およつ「コリヤ又阿房口叩かずと、爰に用はない奥へ行け」ぼん太「アノ俺に奥へ行けかい、行けなら行こが、おれが奥へいたら、挾んだ山猫を出しおろぞへ」およつ「まだ徒口を」と叱られて、ぼん太は奥へ立つて行く。およつは門の戸差寄せて、押入開けてこて〳〵と取出す蒲團打擴げ、およつ「ヲヽ寒む。こんな寒い晩は、ちつとなと早う寢て、肌溫めう」と身を横に、なるたけ堪へる侍が、青うなり赤うなり、つく息さへも絕え〴〵に、侍「もう其所へはひろかへ、コレもう寢てかいな、どうもならぬ」と蒲團の內、はひればおよつが起直り、およつ「そんならお前はいよ〳〵私と寢る心か」侍「イヤモ、心は何所やら飛んで仕舞うて、身體ぢうが張り切れる」およつ「そりや眞實でござんすか」侍「ヲヽ眞實共〳〵、もう根問ひせずとちやつと寢たい」およつ「イヤ夫が定なら、お前へわけて無心が有る、何と聞いて下さんすか」侍「聞きたうても上氣して耳が聞えぬ、少々の事ならまあ寢所での事にせう」およつ「イエ〳〵、賴む事も賴んでから。何を隱さう私は敵討でござります」侍「よし〳〵敵討呑込んだ」およつ「夫ぢやによつて、若し敵

所から來た者の樣に。そして暗いのに火もともさず、ぐづ〳〵と何してゐる」ぼん太「サアその樣にぐづ〳〵すると叱られるによつて、ぐづ〳〵するかせんか、暗がりにして、お前の臍探ろと思うて」およつ「又阿房めが、火をともせといふに」ぼん太「合點角行燈」硫黃の花にハヽ嚔、およつ「又人を謗らんすかいの」と言ひ〳〵戸口さし覗き、およつ「アレ門口に誰やら居る、誰ぢや、何所のぢや。イヤあなたは傘を御無心申したお侍樣、お蔭で雪げを凌ぎまして忝う存じます。マア〳〵おはひりなされませ」と、いふに侍内に入り、侍「是がこなたのお宿元か、扨々綺麗なお住居でござりますな」およつ「イヤモ、やう〳〵このごろ此家へ參りし故、まだ取締りもござりませぬ」侍「シテ御亭主の御商賣は」およつ「イヤ亭主と申すは私計、營とても僅かな暮し」侍「ム、すりや後家御か」およつ「ハイ、左樣でござります」侍「是は〳〵まだお若いに、嘸御不自由にござらうな」およつ「イエイエ一人身に慣れましては、さして不自由はござりませねど、此浦風の烈しさに、又しても夜冴が致し、心細い折しもは、誰ぞ力になつてほしいと、サア、思ふ樣な緣もない物でござります」と、何所やら甘い咄に侍、襟かき合せさし寄つて、侍「我等花岡園部之介と申す浪人、未だ定まる妻もなければ、淸水の花盛にはこの園部を戀慕ふ短册も有らうかと、櫻の枝を見廻つても、當世は歌詠む姬も無いかして、閨淋しう暮らす某、何と相談する氣はないか」と、しなだれかゝれば、

過つたり我が命、暫く生きるは弟へ是も情の一つには、甥への寸志追善供養」秀盛「野送り萬事も一家の内證、諸事何事も此座ぎり、表は京方、鎌倉方、右大臣實朝の御座の白旗奪取りしは、軍の吉左右、重ねて再會、とめて見ぬか」と出て行く。盛綱「ヤア盛綱が陣中にて、味方の武士を討つたる曲者」返せ戻せは弓矢の儀式、因は兄嫁小姑、孫よ甥子の死骸に、うき事三井の暮の鐘、消え行く子より親心、我から崎の夜の雨、父に一目粟津の嵐、木の葉の紅葉かき寄せて、夕を照らす勢多の橋、門火は烽火敵味方、さらばとばかり、引三重別れゆく。

第九

比良の暮雪と賞せしも、誠は寒き暮の雪、冬ぞ寂しき大津の浦に、世を漕わたる舟長の、妻もともども外稼、内は十五の涎くり、留守の手習机の上、草紙にろくどの切かいて、「天かまいか」の玉錢を、一人打つたり飛廻り、遊びにたわひなかりけり。其日も西へ入相の、鐘に散りしく花ならで、雪解をしのぐ相合傘、よその宿に身を寄せて、我家に歸る女房およつ、およつ「阿房よ、戻つたぞよ」といふ聲聞いて玉錢隱し、ぼん太「ヲ、おるゝ樣ようごんたの」およつ「ヲ、彼奴わい、何ぞ他

すれば嬉しげに、高重「そんならわしが死るので、父様の軍の勝になるか、ヱ、忝い、祖母様は何所にぞ、わしや縛られても、卑怯者ぢやないぞへ、夫れで死んでも本望ぢや、伯父様伯母様祖母様にも母様にも、逢うて死るは嬉しいが、たつた一つ悲いは、父様に〳〵」と跡は得云はず、舌剛ばり、次第々々に弱り果て、惜しや實生の初花も、無常の風に散りてゆく。みめう「コレなう小四郎孫やい、今はの際に父親を尋ねて死んだ子の心、思遣つて只一目、なぜ顔見せに來てくれぬ。千騎萬騎の大將にも成るべきものを栴檀の、二葉で枯らせし胴慾は、神も佛もなき世か」と歎く微妙の聲限り、涙の早瀬篝火も、消ゆるばかりの思なり。三郎兵衛泣目を拂ひ、盛綱「ハア歎に紛れ後れたり。實檢を仕損じたる鎌倉への申譯、母人さらばと差添に手をかくれば、秀盛「ヤア〳〵盛綱、和田兵衛秀盛是に在り、敵を見掛けて自害とは、臆したるか」と聲かけられ、盛綱「シヤ幸ひのよき敵、歸らば其儘歸さんに、運盡きたる秀盛逃がしはせじ」と突立てば、秀盛「ヲヽ和田兵衛が習ひ得し南蠻流の懐鐵砲、受けて見よ」と、どうど打つ、狙は外れて鎧櫃、内に忍びしはんがへ十郎、太股射抜かれのた打つたり。秀盛「見よや盛綱、底の底まで疑深き北條の隱目附、汝が手にかけざれば、不忠にあらず彼めが不運、今又御邊自害せば、鎌倉への義は立つべきが、佐々木が首は僞物なりと、忽ち露現し是迄も、碎きし心は水の泡、時を待つて佐々木高綱、誠は爰に

しが手段の根組、最前の首實検、僞首を見て父上よと、誠しやかの愁歎の有様に、大地も見抜く時政の眼力を眩ませしは、敎へも敎へたり、覺えも覺えし親子が才智、見えすく僞首とは思へ共、か程思込んだ小四郎に、何と犬死がさせられう。主人を欺く不調法、申譯は腹一つと、極めた覺悟も負うた子に敎へられ、淺瀬を渡る此の佐々木、甥が忠義に比べては伯父が此腹、百千切つても駈合ひ難き最期の大功。其方が命は京鎌倉の運定め、出いたな出かした」と、手負の顏を打守り〳〵、悲歎の涙にくれければ、篝火いとゞかきくれて、「子を賞められる親の身の、悦ぶは常なれど、生きて高名手柄して、今の仰に預らば、何ぼう嬉しかるべきに、年相應より利發なが生付いた此子が因果、如何に武士の習ひぢやとて、斯う〳〵して自害せいと、敎ゆる親の胴慾さ、可慇や初陣の始めから、死に行くを合點して、俺や侍の子ぢやによつて、討死するは嬉しけれど、死んだら父様や母様に、つい逢ふ事がなるまいかと、夫ばつかりがと云ひさして、泣顏見せず勇んで行きしその利發さ、遖れ弓矢打物迄、誰に劣らぬ物覺え、腹切る事まで是程に、器用になくば何事ぞ、コレなう小四郎〳〵」と、手負の耳に口さし寄せ、篝火「この深手ぢやもの、耳も遠なろ、目も見えまい、今伯父様の仰つた事、聞取りやつたか。そなたの命捨てたので、高綱殿の忠義が立つと褒美のお詞、夫を未來の引導に、迷はずと佛に成つてたも」と云聞か

兵衛、時政「猶豫は如何に早實檢、何と〳〵」と御上意に、疵口拭ひ耳際まで、熟と改め故實を守り、謹んで兩手に捧げ、盛綱「矢疵に面體損じたれ共、弟佐々木高綱が首、相違御座なく候」と、御前に直し押し退れば、時政「ホヽウ骨肉の兄が實檢といひ、首に向つて小四郎が恩愛の涙、切腹の有樣、誠の首の證據明白。思へば昨日この首に、後を見せし時政が、今手の下に誅罰する武運の强さ、ハヽア心地好や嬉しやな。今といふ今時政が、初めて枕を安く寢るは盛綱が働き、我が著換の鎧一領、當座の褒美に殘し置く。小三郎其外には陣中にて、勝軍の恩賞せん。皆萬歲を唱へよ」と、悅喜の裝四邊を拂ひ、本陣さして歸陣あり。盛綱あたりを熟と見廻し、盛綱「佐佐木高綱が妻篝火、計略の僞首しおほせたれば、小四郎最期の暇乞、赦す是へ」と一言を、聞く間遲しとまろび出で、我子に犇と抱き付き、わつと泣くより外ぞなき。涙ながら母微妙、みめう「僞首と知つて、大將へ渡した其方は、京方へ味方する心底か」盛綱「イヽャいつかな心は變ぜねど、高綱夫婦が是程迄仕込だ計略、父が爲に命を捨てる幼少の小四郎が、あんまり神妙健氣さに、不忠と知つて大將を欺きしは弟への心ざし。彼が心を察するに、高綱生きてある中は、鎌倉方に油斷せず、一旦討死せしと佯つて、山奥にも姿を隱し、不意を討たんず謀。然れども底深き北條殿、一應の身代は中々喰はぬ大將、そこを圖つて一子小四郎を、うまく〳〵と此方へ生捕らせ

敬ひ請じ奉る。竹の下の孫八慌たゞしく罷出で、孫八「最前和田兵衛秀盛、御陣所へ參りし所、日比好める酒を強ひて醉ひ臥させ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥同然と思の外のしれ者、隱し火矢をもつて屋根を打抜き、御座の間の白旗を奪取り、立退いて候」と言上すれば時政公、時政「敵の軍中へ鎧も著せず只一人、踏込む程の不敵者、汝等が手に合ふべきか。第一の大敵佐々木高綱を討取りたれば、腹心の害は拂うたり。去ながら此の佐々木、古への將門にならひ、一人ならず二人三人の影武者有つて、何れを是と見分けがたし、誠の佐々木か僞首か、弟の首よも見損ずまじ、兄盛綱實檢せよ」と、仰の下るに新左衞門、首桶御前に直し置く。三郎兵衞承り、大將に一禮し、無慙の弟が死首に、是非もなき對面やと、呑込む淚うしろより、父の死顏拜まんと窺ふ小四郎、盛綱が引開くる首桶の、二目共見もわかず。小四郎「父樣さぞ口惜しかろ、わしも跡から追付く」と、氷の刃雪の肌、腹にぐつと突立つる。盛綱「ヤレ母人お止めなされ、何故の切腹。仔細を言へ。」樣子は如何にと人々慌て介抱に、小四郎きつと目を見開き、小四郎「何故死ぬとは伯父樣とも覺えぬ、卑怯未練も父樣に逢ひたさ、父を先だて何まだ〳〵と生恥さらさん、親子一所に討死して、武士の自害の手本を見せる」と、きり〳〵と引廻す、その手に縋り母微妙、みめう「ナウその立派な心を知らず、叱つた祖母が面目ない、悋へてたも」と右左。目を瞬く三郎

二千餘騎、鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと、死物狂の其有樣、鬼神の如く見え候。併し味方は豫ての用意、大將の陣は數萬の警固、盛綱公には氣遣なく、俘虜の枠を守護あるべしとの御ことなり。猶追々に御注進」と申捨てぞ驅けり行く。三郎兵衛大息つぎ、盛綱「ハヽア南無三寶しなしたり、さしもぬからぬ弟高綱、子故の闇に心眩み、謀に陷つたるな。摩利支天なれば迚、數萬騎のその中へ、いきがけの死軍、討死せんこと眼前たり。此上は親の御慈悲、佛間で御回向なされかし」微妙「盛綱」盛綱「母人」「エヽ力なき武運の末、殘念さよ」と計にて、眼を閉ぢて奥に入る。篝火なほも氣はそゞろ、我子も氣遣ひ夫も如何、千々に碎くる軍の破れ、ゑい〱おうの勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鐘足も空、二度の注進勇みの大音、侍「御悅び候へ、軍は十分味方の勝利、大軍に取圍まれ、集勢の高綱方度を失うて逃げ走るを、或は搔首あるひは射取り、殘る兵散々に追捲り、諸葛孔明と呼ばれたる四郎左衛門高綱を、はんがへ十郎が討止めて候」と、聞くより妻はハアはつと、心散亂燃えたつ篝火、夫の首は渡さじと、行くをやらじと止むる早瀬。侍「大將軍時政公、御成そろ」と呼はる聲、ハアはつと早瀬は大將の御座の設けと走入る。龍の雲にひいるが如く、一陽の春を待つ平の時政、近習の武士古郡新左衛門、佐々木小三郎盛淸御供に扈從して、御召換の鎧櫃御座の次に飾らせて、寬然と入給へば、三郎兵衛母微妙

望の通り親にも一目逢はした上は、サア／＼切腹、但し祖母が手に掛けうか」小四郎「サアそれは」みめう「サア／＼何と」と威に抜いて振り上る、劔の下に手を合せ、小四郎「母様の聲聞てから、一ぱい命が惜なつた。どうぞ助けて、お情ぢや、堪忍して下さりませ。アレイ／＼」と逃げ廻り、おくれる孫に猶氣おくれ、みめう「ヤレ最前の健氣な覺悟忘れしか、迚も叶はぬ期になつて、臆病者の名を取るかや。伯父が見ぬ先自害して、立派な最期と賞められてくれ、祖母が方から手を合す、頼む」といへど逃げまどふ。外には酷や無情やと、恨も三方三悪道、前生の敵同士が、いとしかはいの孫や子に、生れて憂き目を見するかと、老母が親身の血の涙、時雨の中の枯れ紅葉、露より先に散りぬらん。折からさつと山風の、遙に陣鐘攻太鼓、事こそあれとさつそくの早瀬、長刀掻込み走り出で、木戸口開けば駈け入る篝火、早瀬「待つた／＼、高綱のおかもじこりや何所へ」篝火「知れた事、我子の小四郎取かへす」早瀬「ならぬ／＼。相嫁の初見參、長刀に乗りたいか」篝火「イヤ推參な」ときしみあふ、眞中に三郎兵衛、小四郎小脇に引抱かへ、盛綱「石山の御陣所に事有りと覺ゆるぞ。ヤア／＼小三郎は何所にある」小三郎「ハア 即 只今御加勢」と、用意の小具足兜の緒、しむる間遲しと駈け出す。引違へて知らせの軍卒馳せ參じ、侍「時政公の計略の如く、佐々木四郎左衛門高綱、我が子を捕られし憤、今宵自身に馬を出し、手勢やう／＼

が一つの願、昨日軍の初陣に、直に敵へ生捕られ、此儘死ぬるは弓矢神の、冥加にも盡きたかと、何ぼう悲しい口惜しい。どうでも一度はお歸しなされ、父樣母樣にたつた一日逢うた上、せめて雜兵の首一つ取つて、立派に死んで見せませう、この御願ひを」みめう「ア、これなう、賢い樣でも流石は子供、預りの囚人敵へ歸して、盛綱が武士が立つものか。父や母に逢はされる程なれば、この憂目はないわいの。とはいふものの逢ひたいは道理ぢやわいの、尤ぢや。世が世の時なら二人の孫、右と左に月花と竝べて置いて老の樂しみ、この上もあるまいに、生捕るも孫、捕らるるも孫、小三郎が手柄したと、煽立てる眞中へ、縛られて引出されし、顏見た時の祖母が胸は、張裂く樣に有りしぞや。迚も甲斐ないそなたの運、期最が未練にあつたなどと、口の端にかけられては、親高綱が弓矢の名折れ、尋常に死んでたもヤ。介錯はこの祖母、可愛い孫を先立てて、いつ迄因果の恥曝さうぞ、祖母も直に自害して三途の川を手を引いて渡るわいの」と抱きしめ、泣く〳〵劍差付くれば、「只二親に逢ふ迄は赦して下され祖母樣」と、未練も親子の恩愛に、道理といとゞ目もうろ〳〵、孫もうろ〳〵隙あらば、迯げんと見やる木戸口の、「こゝに」と母の呼子鳥、小四郎「ヤア母樣か」と飛立つ計、驅出す孫を引止めて、せき立つ老母の聲あらゝか、みめう「エ、未練者卑怯者、扨は母親と内通して、爰を脱出る心ぢやな、それなれば猶やられぬ。

んと、思遣る程片時も忘るゝ隙はなけれ共、思ふに任せぬ敵味方。この上下は祖母がそなたへ引出物、著てたもやいの」と差出せば、何心なくおし戴き、取上げて不審顏、小四郎「申し祖母樣、この上下にはなぜ紋がござりませぬ、九寸五分が添へてあるは、高名手柄せよとある、首搔刀でも有るまい。こりや私に腹切れとの、死裝束でござりますな」と覺る利發に驚く篝火。微妙はがはと泣たふれ、暫し詞もなかりしが、微妙「チヽ流石は親の子程あり、人に優れてその樣に、聞分けよい程助けたさは、胸一杯に迫れども、殺さにやどうもならぬといふは、父親の高綱が、武勇智謀の優れたが、そなたの身の仇敵、助けよとある北條殿は、子を人質に高綱を、降參さする謀、夫迄は殺しもせず、まして助けて歸しもせず、何時迄も陣中に、囚へ置けとの主命、生きて居る程高綱が、武勇の妨、爰の道理を聞分けて、潔う腹切つてたも。エヽ見れば見る程目付なら鼻筋なら、眉に一つの黶子まで父親に此似樣、智慧才覺まで違はぬもの、老先も見ずむざむざと、蕾の花を散らすか」と、老の繰言涙のはぐき、漏れて外面に聞く嫁の、「何ぼ道理でも、餘り氣強いお袋樣、我子は殺さぬ〱」と、伸上れども葦垣の、隔つる中ぞ是非もなき。母の心の通じてや、小四郎おとなしく手をつかへ、小四郎「私が命一つで、父樣や伯父樣の手柄になる事なら、何の惜みは致しませぬ。尤も腹の切樣も稽古して置いたなれば、切損ひもせまいけれど、私

に立て切る障子の内、幼な心に油断せぬ、縄付ながら小四郎は、そつと一間を忍び出で、高重「今伯母様の讀ましやつた、矢文の手は母樣、爰を脱けて戻れとの、知らせは聞いても敵の中、見咎められては恥の恥、とは云へ母樣何所にござる、死ぬ共ちよつと、顔見たや」と、そろり〳〵とぬき足も、危き毒蛇の陣の口、あはや跡より窺ふ微妙、「小四郎待ちや」と聲に吃驚、小四郎「ア、イ、何所へも行きや致しませぬ、御赦されて」と斗にて、わな〳〵慄ふ有様を、つく〴〵見れば見るに付け、同じ佐々木の血筋でも、扨も果報の拙い子や、囚人の身となりたれば、子心にも氣おくれして、見すぼらしい顔容、今宵限りの命とは、云はねど蟲が知らすかと、思へばそゞろ先立つ涙、胸に押さげ撫下し、微妙「ヤレ孫よ、此所へおぢや。コレそなたの祖母ぢやわいの。器量骨柄揃うた子に、痛々しいこの縄目と、解いてそなたにこの祖母が、云聞かす事あり」と、立寄り解く血筋の縄、子故に引かれ篝火が、又立戻る陣屋の前、篝火「矢文の返事は兄嫁の早瀬の手跡、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、關とは時節を待てとの事か」如何にと見やる戸の隙間、微妙は孫の手を引て、一間の障子押開き、微妙「ナウ小四郎、高綱に別れてから十三年の年月、孫ありとは聞いたばかり、懐かしさ逢ひたさは膝元で育つた小三郎より、顔見ぬ其方の不愍さは百倍、殊更長の浪人の、貧しい中に育てられ、武具馬具迄もさぞ不自由に、口惜しう暮しつら

れ込み、妾迄は忍入つたれど、用心堅き陣屋の木戸口、心を通はす矢文の謎、小四郎が目にかゝれかし。祝ひ祝うた初陣に、忌まはしい繩目の恥、外の手でも有る事か、從兄弟同士の小三郎、憎くてらしい手柄顏、甥を縛らせ伯父の身で、夫が本意か恨しい。どうして居るぞ只一目、見たい逢ひたい間の戸に、我身を犇と立板も、通すは涙の矢數なり。洩れてや奥に聲高く、「侍中侍中、夜廻り怠り申されな」と、女の聲も敵の中、胸驚かれ篝火は、さし足ながら忍び行く。障子さつと目早の早瀨、紅葉の矢文拔取つて、つく〴〵眺め、「扨こそ〳〵、羽響もなき忍びの矢、女業と推量に違はぬ手跡、狀の文體にもあらず、名にし負はゞ逢坂山のさね葛、人に知られでくる由もがな、と古歌を書きしは、ムヽ〳〵手は見知らねど相嫁の篝火、囚はれの小四郎に、此の陣屋を脱け出で、人知らず來るよしもがな。こゝは處も近江路や、世に逢坂の關の戸を、明けて逢はんと知らせの謎、エヽ侍の母の樣にもない、未練なさもしい軍に立てば、討死は覺悟のまへと、立派な小四郎に惡氣を付け、若し取迯しやなどしたら、其不調法は誰にかゝる、一家の誼は生捕つても、命は別條ない樣子、知らせて安堵さす程に、必ず妾らに狼狽て、親子一所の繩目を受け、夫の名まで汚しやんな」と、恨のうらの反古文、打返したる返事の古歌、矢立の硯さらさらと、書したゝめて括付け、内にも人目滋籐の、弓打番ひ陣外の、小松にひやうど手答と、とも

御苦勞ながら母人、雙方全きこの役目は、情共いふべけれ、油斷の過りばかり、兄が義も立ち、弟が忠も立つ、申し宥めて助けるこそ、竊に小四郎に腹切らせて下されかし。現在の甥が命、今朝の矢合に敵は殺すを却つて情とは情なの武士の有樣や。如何なれば兄弟敵味方と引別れ、胸に磐石こ甥なり、味方は我が子、肉身と肉身の、劒を合はす血潮の瀧、修羅の巷の攻太鼓、母は手を打ち、たゆるつらさ、弓馬の家に生れし不祥、聞分けてたべ母人」と、事をわけたる物語。不愍もまさり、みめう「尤々、兄のそなたも弟の高綱も、我が子に依怙はなけれども、隔てて居る程有り樣はそなたにも、心を置いて居ましたが、弟に不忠の惡名を、付けさすまいと左程迄、心遣ひの親切、ヲヽ忝いぞや、嬉しいぞや。世の譬にも小の蟲を殺して大功を立てる事、眞實親身は子よりも可愛い孫なれ共、思ひ切つて切腹させう」盛綱「ヲヽお出かしなされた、健氣者とは見ゆれ共幼き小四郎、若し小腕に切損なはゞ、母人よろしう御介錯。早短日の暮近し、佐々木兄弟が苗字を汚すか名を上るか二つの境、涙ばしかけ給ふな」「氣遣ひめさんな遲れはせぬ」「必ず氣強う遊ばせ」と、渡す一腰受取る腰の張弓に、詞番うて別れ入る。峰吹き返へす木枯に、早園城寺の鐘諸共、誘はれ來る白羽の矢、紅葉の茂みに射込みしは、主は誰とも人目せく、陣笠、目深に篝火が、男出立の半弓に、やはか仇には歸らじと、陣屋間近く慕ひ寄り、和田殿の供廻りに紛

陣屋の隈々跡前見廻し、母の膝にすり寄つて、盛綱「親の役目を子が勤むるは順なれ共、御老體の母人に御苦勞御願ひ申さねば叶はぬ事、申さぬ先から心得たとある、御誓言承はりたし」と、事有りけなる願ひの品、聞かねど流石佐々木の後室、打頷き、みめう「親子の中に改めて、頼むと有るはよく／＼の事ならめ、仔細は知らねど心得ました」盛綱「ハツア早速の御承知忝し、お頼の仔細と申すは、最前の囚人、拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵のうちに母のお手に掛けられて」と聞きもあへず、みめう「コレ／＼盛綱、最前我君よりの仰渡され、必ず小四郎に過さすな、殺すなとの御諚ならずや」盛綱「サア其の殺すなと御諚故に、猶以て殺さにやならぬ、辯舌を以て人を懷くる北條殿、小四郎を殺すなとの上意は、生け置いて人質とし、子を餌に飼うて、佐々木四郎左衛門高綱を、味方に付けん謀、鏡にかけて顯はれたり。なか／＼心を變ずべき、弟高綱とは思はね共、如何なる大丈夫も我が子の愛には迷ふならひ、萬が一この謀に陷つて、降參などの心付かば、子故に不忠の名を流さん事殘念至極。よしさはなく共小四郎が、俘虜となつて生きある中は、恩愛といふ大敵に、高綱が弓勢も弱り、刃金も自然と鈍る道理、迷の種の此小四郎、一時も早く殺してしまへば、弟が義心猶々鐵石、是ぞ兄弟弓矢の情。と有つて我手にかくる時は、主君北條の命に背く、幼な心に此の理を辨へ、自身に切腹するならば、我は

の顔色。盛綱打笑み、盛綱「扨々弟ながら高綱は、大功の勇士と思ひしに、悴に迷ふ未練の性根、そこを察して朋輩の好、命を救ふ情のお使者、あれしきの小兒、如何樣共申したけれど、生捕の帳に記した上は、時政公より預りの囚人、盛綱私に渡されず。ならば踏込奪取つて歸られよ、其の座は一寸も立たせじ」と、反打つて詰めかくれば、秀盛「アヽおせきなされな、貴殿と拙者只今こゝで刺違へては、敵味方によき大將二人を失ひどちらも兩損。よし〳〵御邊の儘にならぬ囚人、此上は石山の陣に參り、時政殿に直談し、じた共所望致して歸らん。盛綱さらば」と立上り、廣庭におり立てば、盛綱「ヲそりやとも角も勝手次第、さあらば石山へ御案内申さん。ヤアヤア誰かある」と詞の下、小具足固めし覺えの力者、ばら〳〵と取巻いたり。秀盛「ハテ仰山な案内者、敵の陣中へのう〳〵と、一人參る和田兵衛、不知案内の無骨者萬事宜しう」盛綱「氣遣あるな、ソレ必ず大將の御座近く、御引合申すならば、大事の珍客、隨分御酒を、合點か」秀盛「イヤ御酒とは忝い、我等別して大好物、御馳走ならば湖もかへ乾して御目に懸けう、お肴の飛道具、槍薙刀の串肴、何本なり共賞玩致す。盛綱殿おさらば」「和田殿御苦勞」「案内大儀」と長袴、虎を放してやる勇氣、火焔の中へ行く大膽、心の具足鐵石の、石山さして出て行く。盛綱は只茫然と、軍慮を帷幕の打傾き、思案の扇からりと捨て、盛綱「母人夫におはするか」と、音なう聲に立出づる、

追立て遣り、騒がず座席取かたづけ、衣紋繕ひ出向ふ甲冑の姿、引かへて長上下踏みしだき、伊達拵の大小も、さしも無骨の荒くれ男、目禮式禮悠々と、上座にどつかと押し直り、秀盛「扨々此度の合戰、佐々木三浦かく申す和田兵衛、火水の勝負を決せんと、牙を嚙んで相待つ所に、鎌倉の悠長武士、一日寄せては二日見合せ、睨合ひて日を送る中、此方はほつと退屈、それ故今日は具足も取置き太平の姿、坂本の城より使者に參つた」盛綱「ハア〳〵、是は〳〵名にし負ふ和田兵衛殿、よく〳〵大切の義なればこそ。御使者の趣逐一に仰聞けられ」と有りければ、秀盛「イヤ別儀でござらぬ、今朝高綱構へにて、其許の手へ生捕られし小四郎高重、ちと此方に入用なれば、只今御返し下されとの使なり」と事も無げに述べければ、盛綱「ハヽヽヽ是は存じの外の御事、何ぞや一人の童連に、侍大將の自身馬を向けられしは珍說々々。あの小倅一人がなければ、合戰も得なされぬか、何故にさ程懇望、事をかしう存ずる」と嘲笑へば、秀盛「げに尤、しかし此方に不審なるは、其の童の小四郎を、貴殿の子息が生捕りしを、一城をも乘取りしが如く悦び勇み、鎌倉方の勝軍の基なりと、箙を敲き勝鬨作つて引かれしはこれ如何に、さ程鎌倉方に懇望せらるゝ小四郎故、此方にも惜しく存じ、是非所望に參つたり。其の代りに少分ながら、此の和田兵衛が髭首進上申す、お望ならば手柄次第に、隨分取つて御覽なされ」とむづと坐したる不敵

所へも盃此所へも頂戴と、もてはやさるゝ親の面目、それ故退出も遅なはる、首尾殘る方もなし、お悦び下され」と、語る中より早瀨が浮き〳〵、早瀨「何と御覽じましたか、かはいさうに軍の供したがるものを、足手纏ひぢや留守して居れと呵付けて、鎌倉に殘して御出なされたれど、今度の軍にはづれたら、生きては居ぬとせがみにせがまれせう事なし、一層祖母樣三人づれ、跡追うて來た時にも、さん〴〵に叱られたが、今日の手柄を見た時は、よう連れて來たと私が自慢、出かしやつた〳〵、生んだ母まで俄に肩が聳つて來た」和子樣お手柄〳〵と、賞めそやしたる囂しさ。微妙も共に出かしたと、勇んで見ても何所やらに、濟ぬは胸の潮境、わけ兼ぬるこそ道理なれ。小三郎手をつかへ、小三郎「わけて君の御諚には、囚人の小四郎、首討つ事必ず無用、何時迄も助け置くこそ味方の計略、縛は其の儘にて、隨分大切に仕れとの御事なり。ノウ小四郎殿、こなたとは從兄弟同士、初陣の軍に仕負け、嘸無念にござらう」と、言はれて小四郎顏振上げ、小四郎「父樣の豫ての敎、勝つも負けるも軍の習、まさかの時に迯げるのが、侍の恥辱ぢやげな。生捕られても恥とは思はぬ、早首切つて下され」と、目を瞑いだる立派さは誠に父が子なりけり。物見の侍罷出で、侍「和田兵衛秀盛と名乘り、盛綱公に見參致さんと、供廻り僅か一兩人にて通り候」と訴ふれば、盛綱「ハテ心得ぬ、敵方の侍大將輕々しく來るは一物、ソレ囚人奥に取迯すな、皆退け」と

手柄の合手が他人なればよけれど、やつぱりお前の孫の小四郎、嬉しいと悲しいと、片身がはりの御心を、思遣つて」といふを打消し、みめう「嫁女、そりや祖母への當言か、尤も孫の名はあれど、不所存な悴佐々木高綱、音信不通の中に出來た小四郎とやら、つひに顔見た事もなし、よしは不愍に思へばとて、かう敵味方と別れた上、我も源藏義秀といふ弓取を夫に持ち、盛綱を生んだ母、涙かけてよいものか、そんな事云出しても下さるな。シテ兵衞盛綱孫の小三郎、まだ歸館召されぬか」腰元「ハイお二人ながら御具足をお上下に召換へられ、道より直に石山の御陣所へ、御出仕遊ばしたとの注進、定めてきつい御褒美」と、さゞめき渡る程もなく、立歸る佐々木兵衞、小三郎盛淸、諸人の尊敬身の面目、上下衣服も花やかに、自然と威を持つ其跡に、無慙やな小四郎は、高手に締むる警め繩、左右に取まかれ羽交叶はぬしよげ鳥の、顔見初めの孫か共、いふにいはれず面差の、わかれし我が子高綱に、似たと思へば不愍さを、嫁の手前と紛らせど、胸つぼらしう姿形、見まいと思へば目にかゝる、血筋の因果ぞせん方なき。兵衞盛綱謹んで、盛綱「悴小三郎初陣の手始め、是なる繩付生捕りし事、誰々よりも目指す大敵、佐々木四郎左衞門が悴俘囚とせしは味方の強味、抜群の高名と時政御感斜ならず、御悅びの盃を下され、手づから感狀を下し給はる、御前に並居る諸大名、凡そ子を持つ程の人羨まぬ者もなく、子息の武勇に肖る爲、其

父があせれば篝火は、夫れ小四郎打太刀が鈍つて見える、そこを〳〵と力む父親あせる母、互に勝負も附かざれば、寄れ組まん尤と、馬を乗寄せむずと組み、ゑいや〳〵と揉み合ひしが、鐙蹴放し組みながら、両馬が間にどうど落ち、上になり下になり、ころ〳〵轉び打つたりしが、小三郎運や强かりけん、小四郎を取つて引伏せ、上帯解いて高手小手、折重つて大音上げ、盛綱「佐々木の小四郎高重を、初陣の手始め、生捕つたり」と呼はれば、寄手はどつと褒むる聲、櫓の上に篝火が、わつと泣く聲勝鬨は、谷に響きて三重騒しき。

第八

その源は近江路の、比叡山おろし隔てられ、便り堅田のかり絕えて、武夫の義は石山や、月の弓張矢叫びの、矢橋の歸帆陣幕も、ひらめく比良の陣館、小三郎が初陣の、手柄初めと父の悦び、妻の早瀬老母の微妙、軍の安否聞く迄は、心許さぬもち刀、腰元共も鉢巻しめ、追々告げる高名噂、腰元「目出度い〳〵、和子樣が今日の手柄の一番帳、同じ初陣同じ年の、小四郎を生捕り給ふは、大の男を仕止めたより遙かの譽」と口々、側から早瀬が嬉しさ、早瀬「申し、お聞きなされたか、ほんそ孫の小三郎、是からが猶祖母樣の甘やかしが思ひやらるゝ。去りながらひよんな事は、其

せよ」と撥押取つて陣太鼓、亂調に打ち立つれば、東の山に茜さす白旗、赤旗鬨の聲、早寄せ來る 三重朝嵐、待設けたる坂本勢、砦櫓の矢間より、敵を寄せじとさし詰引詰、射かくる矢先は雨霰、射竦められて寄手の軍兵、攻めあぐんでぞ見えたる所に、城の大木戸押開き、花やかなる若武者一騎、駒に鞭を打立て〳〵、手綱かい繰り乘出し、小四郎「ヤア臆したる鎌倉勢、我討取つて手柄にせよ」と鞍嵩に突立上り、「我こそ佐々木四郎左衞門高綱が嫡子小四郎高重、今日が初陣」と名乘りかけ〳〵、東西に驅廻れば、好敵なり討止んと、數多の軍兵ばら〳〵と押取卷く。櫓より母篝火、わが子の初陣勝負は如何と、見れば平場の戰に、多勢の中に取込められ、父に學びし手練の太刀打、前後左右より突懸る、琴柱熊手十文字、切拂ひ眞向縱割手を碎き、切立てられて軍兵共、立つ足もなく迯け散れば、櫓より見る母親は、嬉しき足も千鳥なき、濱邊の方より、年配恰好同毛の、駒に跨り乘り出し、小三郎「目覺ましき小四郎殿の働き驚き入る、某はそなたの伯父、佐々木三郎兵衞盛綱が一子、小三郎盛清、互に初陣從兄弟同士の晴勝負」と、兩人馬を駈寄せ〳〵太刀拔きはなし片手綱、互に覺えの大きよくぶきよくの太刀捌き、手を盡してぞ戰へば、左手の山の尾先より、小三郎が父佐々木盛綱、倅が初陣勝負は如何にと、戰瞰下す遠眼鏡。母は櫓に目も放さず、膽を冷やする子と子の勝負、そこを付け込小三郎と、傍なる人にいふ如く、

盛綱も返す詞はなけれども、御邊は一圖に忠計り、孝の道に心付かず、この比我が陣中へ慕ひ來る母微妙、御邊が爲にも親ならずや。どちらが討ち討たる共、お年寄られし母人の、御歎きを思遣り、生きる共死る共、兄弟一所にせん爲に、孝行の降參、聞分けて是非お取次、弟嫁も取なしを」賴む〳〵の眞實も夫の心はかり兼ね、何と挨拶口ごもる。高綱「ヤア恥を恥共思はぬ人畜、顏見るも穢らはしい、城内には暫時も叶はぬ、早出て行きやれ」と手を取つて、引出す義心の誠には、咎めん方もあら氣の高綱、高綱「あかの他人の卑怯者、ほひ捲つて門を堅めよ。無益の事に陣立の、支度延引暇惜しや。篝火來れ」と立つて入る。兄はすご〳〵計略の裏搔く矢先に返し矢も、思案とり〴〵寨の馬場先、窺ひ寄つたる侍は古郡新左衛門、新左衛門「盛綱殿か、城内の首尾何と〳〵」盛綱「イヤもう弟高綱が義心は鐵石、某も北條殿の御賴、何卒高綱を鎌倉へ味方させんと、よそながら心底を探り見れ共、いかな〳〵二君に仕へる所存のない事、しつかりと錠が下りました。とてもお手に入らぬ高綱、この上暫時も猶豫ならず、短兵急に取圍んで、城を落すが肝要々々。早明方も程近し、大將へ御注進」新左衛門「げに尤、いざござれ」と逸足出して行く跡に、高綱しづ〳〵動出で、高綱「時政に賴まれて、我を鎌倉の味方につけんと、あざとき兄が佯り表裏、計略を仕損じたれば、時を移さず寄せ來らん。ヤア〳〵陣所の諸軍共、鐵砲火矢の用意

義朝の保元の戰、正しく天の道に背けば、平治の亂に義朝は、長田に討たれ源家を潰し、永く武道の惡名を殘す。いづれが討ち討たれても、父尊靈の魂魄、悲しみは如何計、兄弟が不孝の罪、天より高く、滄海よりなほ深し。夫を思へば、何と刃が合されう。今日只今心付き、恥を捨て兜を脫ぎ、降參に來た此盛綱、骨肉同胞の好には、賴家公へ御取成、賴入る弟」と手をつき、頭を下げにける。物を云はず高綱、ずんど立つて入らんとす。盛綱「是さ弟、聞屆けておくりやるか、返答如何に」と引止むれば、立てたる滋籐押取つて、りう／＼發矢と擲り打つ。こは何事と驚く妻、本筈しつかと 盛綱「先づ待て高綱、現在の兄を打擲するは、何故の立腹」と、云はせも立てずはつたと睨み、 高綱「兄とは推參慮外千萬。凡そ弓取の操はな、善にもせよ惡にもせよ、一たび賴まれたる詞を變ぜず、危きを見て命を捨て、二君に仕へぬを道とする事、犬打つ童まで知る所、佐々木高綱が頭を踏まへし三郎盛綱、一旦鎌倉に味方しながら、今更旗色の惡しきを感じて、なま面下げて降參とは、よつく腰拔の犬侍、兄弟の緣切つた。それ共御邊、誠高綱が兄ならば、その腐つた性根を改め、いよ／＼敵味方と成つて、戰場にて四郎左衞門高綱が、首取つて見せうとお云やれ。それこそ誠の兄じや人、有難く存じ奉らん。いつの間にその樣な、臆病神は付いたるぞ。エ、情なや口惜しや」と、或は勵まし或は敬ひ、怒の眼にはら／＼涙。盛綱「ヲ、尤至極、

様に、御引合せ申して、何が差置きお盃を、頂戴致するが順道なれど、サア儘にならぬは敵同士、どうて明日は初陣に、父御に引添ひ出ますれば、御對面は戰場にて、忰小四郎が小腕の拳、矢一筋射かけませう、それを一家の盃と、思召して下さりませ」と否とは云はさぬ尤ごかし、盛綱返へす詞さへ、鴛鴦の間の襖押開き、高綱「四郎左衛門高綱、それへ參つて對面仕らう」と立出づるその形、軍の出立引かへて、兄弟因の長羽織、遙か下つて座に直り、高綱「一別以來御意得ねど、兄じや人にも御健勝、永々母の御介抱、身に餘つて大慶。先だつては由なき詞の論によつて、兄弟の中不和となり國を立退き、是まで疏遠に年月を送りし失禮、全く御免下さるべし」と、しんきやうの禮こまやかに、手をつき疊にひれ伏せば、盛綱も坐直つて盛綱「ホヽ音信不通は相互、今日來るは久々にて對面が致したさ、又その外に折入つて、頼みたき仔細有つておして推參」高綱「是はく兄じや人、改つたるお詞、身分相應な御用ならば、聞かうぢやまで」盛綱「先以て忝し。頼みたいは別儀でない、今宵潛かに陣屋をぬけ出で、只一人來た仔細は、某今日より心を改め、頼家公へ降參に參つた、何卒御前へ取次がしてもらひたい。かやうに云へば盛綱、卑怯者と思はふが、さうでない、明日の合戰は、何れが勝つとも定まらぬ互角の合戰、旗色悪さに降參する三郎ならねど、つくぐ思へば兄弟弓を引きあふも、武士の習とは云ひながら、昔の爲義

に、篝火不審晴れやらず、篝火「一家は内證、明日は互に劍を振合ふ敵の大將、三郎兵衛盛綱殿、如何なる手立も圖られず、内へは得こそ通すまじ。たつてとあらは用捨はならず、ソレ何れも防矢の用意々々」といふ折から、奥の間より早使、侍「高綱樣の仰には、兄盛綱樣久々の御入、門を開いて御通しあり、對面なされんとの御事」と、聞いて猶しも訝しながら、「夫の深い思案こそありつらめ。此上は門を開き、御通りなされと申しませい」と、禮義の詞裲襠に、小太刀隱してしづしづと、油斷あら木の門の閂、くわつた犇めく城門を、開けば盛綱のつしくヽ、通る容ぶり出向ふ氣配、互に見合す四つ目結、坐するも針の青疊上ずんべりの會釋して、篝火「コレハヽヽ珍らしい盛綱樣、久しう御目にかゝらねど、何方樣にもお揃ひ遊ばし、御健勝の御樣子、陰ながら承つて、夫を始め妾が悦び」盛綱「イヤもうそれは相互、今日も指折つて數ふれば、弟に別れて今年で丁度十三年、其節一子も當歳なりしが、定めて成人したであろ。此方にも小三郎といふ同年の悴、見かはすばかりの成人、先だつての合戰には、國に殘しおきたれど、此度は母も子も、是非に同道してくれと親子の願ひ、久々一家の對面せねば、餘りくの懷かしさに參つた。小四郎が成人顏、早く見たい、一目逢はしておくりやれ」と、世に睦じき盛綱の、詞は二心もあるまいか、如何かかうかと胸は燻る篝火が、篝火「成程あなたの仰やる通り、太平の御代なれば、小四郎も伯父御

り父御にとんと生寫し」と、母の悅び高綱も、我子を見上げ見下して、悅ぶ眼に涙を浮め、高綱「情なきものは武士の身の上、御主人の御爲に、明日討死も計られず、命は義によつて輕し。汝とてもその通り、伯父甥兄弟引分れ、骨肉の戰なれば、敵も味方も晴れ勝負、さり乍ら討死するを忠義とは云はれまじ、千變萬化に軍慮を廻らし、身を全うして始終の勝こそ武士の肝要、我幸ひに付從ひ、未練の働き致すな」と、父の詞に小四郎も、鐺づきしてゆゝしげに、勇み進みし武者振は、末頼もしく見えにけり。母は悅び軍配にて煽立て〳〵、篝火「ヲヽ出かしやつた、只今の父樣の教訓、忘りやるな。著初の儀式は奥の間で、父御の盃頂戴しや」高綱「成程々々、頼家公にも申上げ、初陣の門出を祝はん。篝火來れ」と打連れて、一間の中へ入りにける。夜もはや更けて深々と、音は湖水のなみならぬ、敵か味方か白妙の、雪にきらめく陣羽織、武者頭巾に目ばかり出し、後先見廻し城門を、忍びやかに打敲けば、豫てぬからぬ佐々木が下知、門番櫓にかけ上り、透し窺ふ星月夜、くわんしやうちやんと裲襠に押取刀篝火が、城門近く走り出で、篝火「注進の者か何者なるぞ」門番「さん候、供をもつれず只一人、敵の忍びか内通か、何にもせよ名を名乘られよ、何と〳〵」と尋ぬる聲。盛綱「アヽ騷がし音高し、斯くいふ我はこの城中の主、佐々木高綱が兄三郎兵衛盛綱、弟が顏見たさ、竊かにこれまで來りし」と、案内の趣取次

木三郎兵衛盛綱殿、未明に寄來る體と見え、數萬の軍兵弓弦をしめし、馬に鞍置き鐵砲火矢の用意最中、御油斷あるな」と述べければ、高綱「ヲヽ出かした〳〵、兄盛綱の軍立心憎し。さあらんと某も、かねて手當を仕置きたり。猶又汝諸軍に其旨觸れ知らせよ」と追立やり、其身は軍慮に他念なく、暫時の暇も几、眞草行の堅からぬ、あひにあひ持つ間の襖、物靜かに押開き、妻の篝火一子小四郎の手を引き立出で、篝火「是は〳〵まだ御休もなされず、夜晝合戰の御工夫、只今聞けば明日より矢合、寄せ來る敵は兄御盛綱樣、他人より晴の合戰、此の子も今年十三なれば、今夜鎧の著初させ、父上の御供して、初陣に手柄したいとたつての願、お聞届遊ばして、小四郎の初陣御許しなされ下されかし」と、母の願に小四郎も、小四郎「明日父上の、戰場への御供を、御赦免有れ」と幼氣に、思詰めたる顏色を、父も點き、高綱「尤々、主君へ忠義に魂を凝らし、我が子の年をはつたと失念、流石は高綱が子程あり、出かす〳〵。成程そちが願に任せ、明日の軍には我に引添ひ、初陣の手柄を見せよ」篝火「サア嬉しや父御の得心、其方も悦びや、鎧の著初に此母が、手づから縫ひ仕立た鎧下、裄丈藍の下染に、勝つ色見する紅梅縅、母が手を添ゆるのが陰陽和合で著初の故實、此上は作法の通り著せてやつて下さんせ」と、夫婦立寄り壽を、祝うて鶴の小手臑當、總角取つて打著すれば、父は上帶しつかと締め、篝火「適れ武者振、鎧の著ぶ

ば、一心五體は兜に残る、之を引出に姫の事、氣強きばかり武士とは云はぬ、コリヤ情も武士の道具ぞ」と、渡せば取つて三浦之助、三浦之助「此上何か辭退せん。さは云へ勝利を得る迄は、お預け申すおまき殿。家を出づる時、妻子を忘れ、戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常、若しも運盡き頼家公、御大事とならん、時これ此龍頭の兜を著し、君に代つて討死せん。名香薫る首取りしといふ沙汰あらば、この三浦が討死せしと知り給へ」と、詞は末にあふ坂や、關の淸水と湧きかへる、涙ながらの暇乞、離れがたなき初戀に、ほだしは見せぬ若武者を、伴出づる軍の門出、羨ましげに伸上り、見送る手負を介抱し、共に見送る姫女房、戀と無常を見捨てゆく、武士の道こそ三重是非もなき。

第七

名にし近江の景色も、今戰場となこの浦、源の頼家公坂本に居住し給ひ、家々の旗指物、比叡颪に飜り、霜に輝く弓鐵砲、陣所の篝火天を焦がし、要害嚴しく守り居る。御城預り佐々木四郎左衛門高綱、城中隅々つまり〳〵、寒夜を厭はぬ夜廻に、心を配つて立歸れば、物見の軍士新開次郎御前に畏り、新開「某只今遠見致せしに、寄手は比良に陣を取り、明日敵の大將は、御舍兄佐々

戰場の一大事、御馬前の御用に立つて名を上る、討死したら父上迄がお嬉しかろが、女子の身の腑甲斐なさ、父樣𢘟へて下されと、言うた時は出かしたと、賞むる事さへ胸に迫り、一言一句も出なんだに、親に優つて先に立ち、親は後れて步む足、此家へ來る道々の、堅牢地神の首には、嚥片岡が踏む足が、大磐石とこたへやせん」重き忠義にかへたる娘、よう死んでくれたな出かした」と、鍛ひに鍛ひし忠義の身體も、子故の轎に吹立てられ、咽ぶ涙は熱湯の、湯玉迸る如くなり。妹は正體泣沈み、「よく〳〵うすい兄弟中、たつた一人の姪子にも、名乘合もする事か、果敢ない別れ悲しや」と、歎けば共に時姬君、時姬「とても添はれぬ敵同士、疾うからわしが死んだらば、斯うした憂目は見まいもの、どうぞ添ひたい〳〵と、未練な心の迷ひから、親子の衆のこの最期、コレ勘忍してたもいなう。思切らうと思うても、儘にならぬが戀路の因果、つれない命死遲れ、面目ない恥かしい。叶はぬ戀を諦めて、此身の果は尼法師、それがせめての言分ぞや」と、身をから菊の兩袖に、保ちかねたる露涙、親子の爲の香花ぞと、兜を時の香爐に薰らす煙蘭奢待、「東大寺の寶物なれば、佛緣に誘はれ、未來の佛果」と合す手に、又も涙の數珠の玉、秀盛「こは有難き御手向、娘も我も成佛得脫、只此上は三浦之助へ、媒介賴む和田兵衞殿」秀盛「チヽその義はちつとも氣遣あるな」と、兜を取つて三浦に向ひ、秀盛「聟引出と望みし首、此兜ゆゑ命を捨てし片岡なれ

古今の忠臣。この兜手に入るからは、是より坂本の城へ走せ向ひ、鎌倉勢と分目の軍、たとへ時政何萬騎にて向ふとも、宇治勢多に壘を構へ、變に應じ機に乘じ、或は顯れ或は隱れ、千變萬化に寄手を惱まし、大將に舌卷かせんは、この和田兵衞が方寸にあり、心安かれ方々」と、坐ながら計る軍師の軍配。造酒正「ホヽ、驚き入つたる秀盛の明智、かゝる軍師味方にあらば、軍の勝利疑なし。我は有つても益なき臣、今こそ三浦の望に任せ、聟引出進上せん」と、いふより早く差添腹に突き立つれば、「ナウ悲しや」と姫妹、縋り歎くを押退け突退け、造酒正「京方には誰々と、指折の數にも入りし某が、暫くにても鎌倉へ、裏返つたるその惡名、何を以てか雪ぐべき、味方の内にも追從表裏の大江の入道、某再び城に歸らば、兼々より鎌倉へ、内通したる事共の、顯はれん事身の大事と、如何なる非道謀計を以て、味方の心を迷はさば、まちまちなる人心、我疑へば人疑ふ、人氣和せざる其の時は、軍の勝利思ひも寄らず。そこを思うて此の切腹、死後にても片岡は、返り忠せし不忠の臣と末代に名は汚すとも、一心五臟に忘れぬ忠義、何卒名ある軍師を、御味方させんものと、心當どは和田兵衞殿、妹が連添ふと聞けば幸ひ住所を尋ね、我が志を立てん事、此人ならでと娘を誘ひ、存念を立てたる某、妹悔むな、時姫君もお歎なく、御身に代る娘めが、志を立ててたべ。不愍やお主のお爲と聞き、悅び事は悅びしが、とても事に男の子に生れたら、

岡陳じもならず、表の方、乗物あくれば時姫君、こけつ轉びつ住の江が、死骸に取付き縋付き、時姫「親の許さぬ戀路故、かねて亡き身と思ひしに、自らが命に代つて、死んでたもつた住の江、嬉しいとも忝ないとも、いかで詞の有るべきぞ。只恨しいは造酒正、かくなる事を露はども、など知らしてはくれざりし、知らばやみ〳〵此人を、殺すまいもの味氣なや」と、恨み嘆ちの涙川、袖に淵なす計なり。造酒正「ヤア住の江とは紛らはし、其の死骸は時姫君、さいふ汝が我が娘、ナ御合點が參つたか、親に優つた娘が忠義、犬死さして下さるな」と、目をしばたゝく片岡が、心を察して妹は、三浦之助に打向ひ、女房「時政公の御息女といへば、添はれぬ敵味方、兄樣の娘御に何の障も味方同士、申し御了簡は」といふを打消し、三浦之助「ヤア味方とは汚らはし、鎌倉方へ裏返つたる不忠侍、その娘に何の緣組、某に心を寄せし時姫君、首討たれよと望みしも、敵の緣に引かれぬ潔白。是非時姫を娘とし、此三浦へ送りたくば、聟引出には汝が首、覺悟せよや」と詰寄すれば、秀盛「ヤレ早まられな三浦之助、命を捨てて名を揚ぐるは、誰しも武士の好む所、名を捨てて忠義を立る造酒正、その證據こそ此兜、これこそ將軍宣下の御寶、たとへ賴家軍に打勝ち、四海殘らず押領あつても、此兜なき時は、將軍宣下思ひも寄らず、そこを計つて片岡が、鎌倉方へ裏返り不忠の名を取られし故、念なう兜を奪取り、某に渡されしは、名を捨てて忠義を立つる

て試せし手練、和田兵衛ならで外に及ばぬ稀代の手の内、何卒味方に頼まんと、思へどたよる手段なく、如何と案じる時も時、時姫君を匿まはれし、これ幸と此の家に來り、首討つて渡されよと、渡せし劍が即ち雌の劍、我が心を推量ありしか、事故なく受けられしは、味方に加はる印の割印、此上は片時も早く打立ち給へ、御供せん」と、高らかに呼はつたり。片岡聞くより猶もせき立ち、造酒正「ヤア京鎌倉と引別るれば、我は鎌倉時政方、京方の奴原一人も生け置かれず。其上眼前姫の仇、何所までも」と驅けゆく一間、隔の戸障子踏み開けば、内に四斗兵衛悠々と、溫袍にかはる肌著の小具足、唐縫したる陣羽織に、十王頭の小手脛當、太刀と兜を兩の手に、牀机にかゝる有樣は、實に百萬騎の軍帥と、骨柄ゆゝしく見えにけり。和田兵衛兜を座前に直し、秀盛「如何に片岡、時姫の身に代り殺されし其娘は、定めて貴殿の息女ならん、痛はしさよ」と悔みの詞。造酒正「ムヽすりや某が娘と知つて」秀盛「ホヽヽ、敵の氣を見て士卒を使ふこの和田兵衛、況んや一人の女童、如何程に僞ればとて、親子の親しみ上下の人相、一目にも見違ゆべきか。頼家公に緣邊は切れたれども、不義の科ある時姫君、夫故娘を身代とし、時姫の心の儘、三浦之助に添はせんと、心を碎く片岡殿。其忠義を感じ入り、不愍ながら殺害致せば、時姫といふ名は消えて、今は憚る所なし、御迎の乘物に、忍びまします時姫君、早々是へ」と和田兵衛が、詞に片

て、春久「ハテ心得ぬ此の有樣」と、刃物拵取り眼を配り、春久「ヤこりや是、時姬君の御死骸、何者が手に掛けし。ア、しなしたり〳〵」と齒を喰ひしばる怒の面色。造酒正「妹が振舞といひ、拐は四斗兵衞めが仕業よな。儕下郎め主君の敵、一分試」と切付くる。心得むつくと起上れば、いらつて切込む刀は電、こなたのさゝくは飛鳥の翔、勢雲に龍頭、の兜を片手に引摑み、一間を指して驅込んだり。造酒正春久「ヤア卑怯者迯ぐるとて迯がさうか」と續いて驅行く向ふに妹女房「ヲヲお腹立は道理至極、酒故亂るゝ心を知り、匿うたは私が科、それよりマア先へ私を殺して下さんせ、さうない中は奧へはやらぬ」造酒正「ヤア邪魔ひろぐな」と引摺りのけ、驅けゆく鐺に又取付き、やらじ放せと爭ふ最中、表の方に大音聲、三浦之助「江州醒が井の住人和田兵衞秀盛殿、御用意よくば坂本の城へ御入城、三浦之助義村御迎に伺候せり」と、呼はる聲は以前の鹽賣。初には似ぬ勇士の扮裝、せきにせいたる片岡も、樣子如何と躊躇ひ居る。女房不思議立向ひ、女房「坂本の城へ誘はんとは、何時味方させ、何時の契約。殊には隱す夫の本名、和田兵衞秀盛とは」三浦之助「ホヽ陳平韓信が腸を探り、市人に姿をやつし隱されても、美名は四海に芳ばしく、宇治の方の仰を受け、何卒して味方に招き、雌の劍を授けんと、姿をやつし徘徊すれども、素より面體見知らぬ某、如何と心を碎く中、中山道にて不思議に出合ひ、我が姓名をしるしたる、手鑓を以

聞いたらもう爰には置きまされぬ、わしが供して兄様へ手渡しする」と、一間へ駈入りかひぐしく、姫の手を取り立出づる。盡きせぬ縁か見合す顔、「ナウ懐しや戀しや」と、立寄る姫を拔打に首は前にぞ落ちにけり。ハア、はつとおまきが氣も半亂。鹽實突立ち 長藏「ヲ、適れ四斗兵衞、出かされたり」と、云捨ててこそ驅りゆく。あとに女房が聲をあげ、 女房「扨も〳〵痛はしや、お命を助けう爲、心を砕いて兄様が、爰迄預けに見えたもの、其の時つれなう預らずば、かう云ふ事は出來まいもの、佛頼んで地獄の牛頭馬頭。若し今にても兄様がお迎に見えたらば、わしや言分がないわいの。一層殺して〳〵」と夫に取付きしがみ付き、恨み歎けばころりとこけ、前後も知らぬ高鼾。かくとも知らず片岡が、禮儀の上下折目を正し、御迎の乘物つらせ悠々と戸口に佇み、造酒正「ヤア家來共、云付置きし物この家へ持参し、案内せよ」と詞につれ、衣服大小しら臺に、輝く兜は龍頭、あたり狹しと並べ置き、片岡しづ〳〵内に入り、」造酒正「誠に雷の落くる空難、事故なく相すみし故、早速姫の御迎ひに参上せり。是と申すも四斗兵衞殿、御匿ひ下されし故、助かるまじき姫の命、助かりし命の親、直に鎌倉へ同道致し、時政公へ御目見え、契約の通り只今より武士に取持つ印の音物、御受納あつて姫諸共、御出立下さらば、此の上悦なし」と、慇懃に述べければ、女房あるにもあられぬ思ひ、兄の脇差拔き取つて、自害と見ゆるを片岡押へ

事、さらばお肴仕らうと藁苞解いて黄金作、長藏「太刀魚のつくり物、粗末ながら」と指出せば、四斗兵衛「ム丶こりやお肴がにくすぎて、我等ちつと食べにくい、この肴はマアお預け申さうかい」長藏「イヤ御辭儀には及ばぬ、太刀魚よりはコレ此鑓の鋩、嚙みこなした齒節の丈夫、適れ四海の軍師、サ醉狂人と見極めてのお肴、受けてすつぱり切つてもらひたい」四斗兵衛「ム、切れとは何を」長藏「時姫の首」四斗兵衛「ヤ」長藏「たつた今匿はれた時姫の、その首が貰ひたい。ガよもや貴樣得切るまいの」四斗兵衛「ソリヤモ、何より心易い事、切つてやろ〳〵。何の己が首ぢやなし、人の首の一つや二つ、望なら目の前で」と、又引受けてどぶ〳〵。長藏「然らば肴も」四斗兵衛「ハテ志ぢや戴こかい。時姫の首、夫も合點切つてやろ」と、初の心酒故に、打つてかはつた詞づめ、ひと癖者と知られたり。始終一間に聞居る女房走り出で、女房「コレ四斗兵衛殿、兄樣に詞番うたこなたの出世、知行取になる事も、酒で忘るゝたわいなし、如何に酒に醉うたとて、お姫樣の首切ろとは、あんまりな人非人。コレそこな人、酒の醉を合手にせずと、とつとと去んでもらひましよ」と、聲震はして腹立つ女房。夫は酒に廻らぬ舌つき、四斗兵衛「ヤイソ丶、そげめ、知行々々とぬかすが、何の五萬石や十萬石、此酒にかへらるゝものかい。それで姫の首討つてやるが、ナ丶ナ何とした」女房「ム丶すりやどう有つてもお姫樣を切る氣ぢやの」四斗兵衛「ヲ丶、切る」女房「それ

に誘はれ、靜々立つて入り給ふ。表に鹽屋が頓きよ聲、鹽屋長藏「駕籠舁の四斗兵衛殿とは爰でござんすか」とずつとはいつて顏と顏、長藏「ヲ、こな樣が四斗兵衛殿かい、つひに逢うた事も、又近付でも、内儀樣は留守でござんすか」四斗兵衛「ア、嚊は内に居ますが、貴樣マアどつからござつた」長藏「イヤおれや鹽賣の長藏といふ者でごんすが、ア、鹽商賣も身の廻りに張込んであふこつちやごんせぬわいの。それで元のいらぬ駕籠舁がしたさに、弟子になりに來やんした。マア近付のため少分ながら此一樽、寢酒に飲んで下され」と、酒樽なほせばにつこりと笑ひ顏、四斗兵衛「ハ、、、こりや忝い、酒さへ貰へばどつからでもようござつた。したが駕籠舁の弟子に上下とは、ア、裸で茶の湯に行く裏ぢやの。そして、こりやきつい氣の張りやうぢやが、是もまた水ぢやないかや」長藏「ハテそんなぢやない、小なから酒や八文酒、飲みつけた口には、ちつと重うて呑みにくからう、並酒でもないこりや鎌倉山」四斗兵衛「ヤ何と」長藏「サア鎌倉山といふ大切な銘酒ぢや程に、へ、味はうて呑んでもらひましよかい」四斗兵衛「ム、ムン呑んましよ、如何にしても云ひ樣が面白い。又この四斗兵衛が呑むからは、鎌倉山でござらうが、富士の山でござらうが、たとへ日本國でも、コレ此茶碗に引受けて、いでと思はどぐつと一飲み。マア試に一杯致そ」と、樽の口からどぶ〳〵〳〵「お辭儀なしに下される」と引受け〳〵續け飲み。「こりや見

ひさし、顔さし入るゝ懐の、内や涙の淵ならん。片岡座を立ち夫婦に向ひ、造酒正「兩人に預くる事此上の安堵なし、必ず人に氣取られぬ樣、隨分心を附けられよ」四斗兵衞「イヤモこの四斗兵衞が預るからはゆつくりと、通し駕籠に乘つた樣に思うてござりませ」造酒正「是は〳〵忝い、事によらば引かへしてお迎に」四斗兵衞「ハテ御念に及ばぬ御勝手次第」造酒正「然らば御暇おさらば」と娘にも禮儀片岡は、元來し道へ立歸る。跡に夫婦が氣もいそ〳〵、コリヤ嚊よ、きつう競口がようなつて來たわい。コリヤまあちつと御酒でも上げぬかい」女房「アノたつた今、禁酒ぢやというてもうかいの」四斗兵衞「ほんにな、その禁酒をとんと忘れた程にの、ハヽヽヽ。したが呑みつけた酒飮まずに居たら、氣が盡きてたまるまい、イヤ己が氣の盡よりお娘樣が、ア嘸御退屈にござりましよ、ソレ御慰に酒の糟なと買うて來て進ぜぬかい」女房「チヽ嗜ましやんせ、何のあなたへそんな物、御不自由も暫の中、轗てあなたの思召、戀人樣に逢坂山の實葛、人に尋ねてつひお出でござりましよ」と、諫め申せば時姫も時姫「よしなき戀に絡まれて、我身ばかりの片岡に、苦勞かけるも自ら故、夫婦の手前恥かし」と、顔は照り葉におく露の、袖にひたせる有樣に、おまきも詞涙ぐみ、暫し應答もなかりけり。折から來る鹽賣が、上下ため付け酒樽を、肩にぶら〳〵足音の、中に若しやとおまきが氣轉、「誰が見咎めても大事の御身、見苦しけれど奧の間へ」と女房

に我が儘な男選み、憎い奴不義者と、御手討に逢ふとても無理とは思はぬ身の淫奔、悔みは千萬返らぬ昔、其の御叱りもなう親身の御頼み、御氣遣遊ばすなと申したけれど、氣の毒は、酒故心轉々する夫の氣質」四斗兵衛「コリヤやい〳〵、二言めには酒々と男を打込むさいまぐれめ、魂を見込んでとあるからは、如何にも四斗兵衛が命にかけて御匿ひ申しませう」女房「イヤ合點が行かぬ、其の氣ならよけれども、酒呑ましやんすと忽ち變るお前の心」四斗兵衛「ハテお匿ひ申すうちは何年でも禁酒々々」造酒正「ハテ匿ひおほせたらその時褒美に四斗樽四五挺」四斗兵衛「マア夫迄はかざも嗅がぬ氣」女房「ヲヽ出かさしやんした〳〵、お前さへその心なら、アイ兄樣、何時までなりとお匿まひ申しませう。其のかはりに夫の身の上、よろしう頼み上げます」と夫婦が詞に片岡悦び造酒正「妹が縁につれ姫を匿まひくれられうとは、町人ながら頼もしき心底、首尾よく致さば妹諸共鎌倉へ同道致し、拔群の知行取る侍に取持いたさん」女房「そんならアノこちの人を侍にして下さんすか。コレ悦ばしやんせ、知行取にするといな」四斗兵衛「おつとよし〳〵、知行取になつたらかゝよ、酒買ひに行くも乘物に乘せてやるぞ」女房「アレまだそんな事ばかり、夫の出世もお姫樣、よう御出遊ばして下さりました」と追従も夫思ひと知られたり。時姫も顏を上げ、「不思議の緣で夫婦の衆、世話になる身は陽炎の、あるかなきかの憂き命、よきにとばかり」あと云

言の盃は後程、先づ手附に一杯致さう」と取出す茶碗、「ヤ女房「コレ滅相な、其酒呑んで嫁御とやらが爰へ見えたら如何せうと思うて」四斗兵衞「ハテ如何せうの斯うせうのと、高が女房に持ちやえいぢやないか」女房「アノわしといふ女房のある上に」四斗兵衞「ヲヽ酒さへ持つてくりや幾人でも女房にする、酒戻はせぬものぢや」と、茶碗についでぐつと一飲、女房「アレ／＼嫁御がもう爰へ」といふ間、表に風薫る二八の花の振の袖、町屋にあらぬぶつ裂き羽織、大小の拵へもりかたを好む立派の侍、侍「誰ぞ案内頼みたし」と音なふ聲に、おまきがむつと 女房「門違の嫁御樣、あたよう御出なされた」と呟く女房、四斗兵衞は酒が仲人の俄聟、これへ／＼に打通る。竝々ならぬ其の勿體。女房「ヤアお前は兄樣」造酒正「コレ／＼私の緣は緣、今日これへ參つたは、四斗兵衞殿へ折入つて頼みたき仔細有つて、嫁と名付けし此の御方は、鎌倉の大將北條家の御息女、賴家公へ緣邊を取結びし所、御若氣とて三浦之助にわりなき戀路、京鎌倉和睦と思ひし事、却つて破れの端となり、時姫の首討つて渡せと京都よりの難題、時政公も不義の娘、親子の緣切つたりと鎌倉へも入れられず、御身一つの御難儀は、此片岡が一心に迫り、樣々思慮を廻らせど、何を云うても火急の沙汰先づ御姿を隱し置き、其の上事を圖らん爲、魂を見屆けて御預け申す四斗兵衞殿、くれ／＼頼み存ずる」と餘儀なき體におまきが悦び 女房「親兄の許しもない

ない、こりや水だ」「何ぢや水ぢや」と茶碗にうつし、四斗兵衞「ほんに水ぢや、コリヤ、男をやり仕事にかけをつたな」女房「何と一つ上つたか、この手でさい〳〵こちの人に、騙られた振舞がへしの御馳走、奴樣よう上つて下さんした」と、云はれて月夜に鎌髭奴、奴「テモ酷い目にあはしたな、コリヤ湯奴ぢやない水奴だ、エ、あた歩の惡い」と、呟き〳〵立歸る。引違うて來る男、平樽片手に肴籠、男「申し一寸物が尋ねたう御座ります、何所ぞ此所らにさかひやの三右衞門樣といふのはござりませぬか」と聞いて女房が女房「イエ〳〵爰らにそんなお人は御座んせぬ」男「ハア何所やら此邊ぢやと聞いたが、そんなら外を尋ねて見ませう」と、行く酒樽に目の付く四斗兵衞、四斗兵衞「コレ〳〵待たしやれ、こなた其の樽肴何所へ持つて行くのぢや」男「サア今尋ねる堺屋の三右衞門樣へ」四斗兵衞「アノその酒をやるのか、よし〳〵、コレその堺屋の三右衞門といふは爰ぢやわいの」男「エそんなら内方でござりますか」四斗兵衞「爰とも〳〵、即ち三右衞門といふは己ぢや」男「これはしたり、左樣ならあなたが聟樣でござりますか、媒人蠟燭屋善兵衞申します、追付嫁御樣お越しでござります、これは少分ながら聟樣へ嫁御のお土產でござります」と、樽と肴を差出せば女房吃驚、女房「コレ〳〵粗相なそんな事はこつちに覺は」四斗兵衞「シイ〳〵、エ、すりや、こりや嫁御の持參か、コレハ〳〵御叮寧な、女夫の中に氣を張らいでもよい事を、祝

といはれて否とも客の手前、不承々々に女房は、徳利下げて出て行く。奴はなほも不思議な面付、奴「俺に酒呑ますとは如何やら嬉しい事だんべいが、振舞つたなどとは白癩覚のない事共、コリャ酒の奸悶だないかよ」四斗兵衛「エヽうまい和郎ぢやわいの、何の有様に酒一抔振舞はれた事はなけれどの、あんまり鼻めが呑まさぬ故、斯ういふ手段を廻らしたは、彼奴に酒買ひにやらうばつかり」奴「ハアヽそれでよめた、こりや己を餅のかたではない酒のかたにしたのだな。それ程に呑みたがるお手前も呑助だな」四斗兵衛「呑助の段か名さへ四斗兵衛」奴「何だ四斗兵衛、えらい名だな」四斗兵衛「これも初は一斗兵衛で有つたれど、段々呑上るに付き二斗兵衛と立身し、三斗兵衛と出世し、追付菰かぶりまで呑上るといふ心で、今の名は四斗兵衛、何とえらい呑助であらうがの」奴「こりやきつい、一斗兵衛から四斗兵衛までの立身、その位では今の間に、五斗兵衛と名を萬天に上るであるべい、エあやかり者め」と話のうち、徳利ぶら〳〵女房のおまき、四斗兵衛「イヤ待象山の不如歸、鳴く音は本尊缺徳利。マア客人から」と差出せば、女房「酒はあつても肴があるまい。奴様の御馳走に、湯奴なりとして上げう」とおまきは勝手へ入りにけり。奴「湯奴とは忝い。出來るまで一抔しやうかい」奴「エ、この和郎も近渇」四斗兵衛「そんならそれからお初めなされ」奴「エ忝い」と茶碗引受けどぶ〳〵、一口二口目を皺め、奴「エ、酒ぢや

いな」四斗兵衛「又男の咽喉締爲をるがな、おのれ食は食はいでも、酒が呑まずに居られるものか。小言いはずと貰うてうせう。行かぬかい。コリヤ頼む、何卒一抔呑ましておくれ」と猫撫聲も呑みたさの、餘りの事に女房は、呆れて詞なかりけり。折から表をひよか〳〵と、通り過ぐるやつこらさ。四斗兵衛見るより飛で出で、四斗兵衛「申し〳〵可内殿權平殿、申し〳〵」と呼びかけられて立戻り、奴「今呼かけたは御身か」四斗兵衛「ハイ私で御座ります」奴「私だといふそ樣は誰だ」四斗兵衛「誰ぢやとは外々しい、扨々先日はいかい御馳走に預つて忝うござります。マア〳〵お入りなされませ」と、いはれて合點の行かぬ奴、無理に伴ひ内に入り、四斗兵衛「それから一寸お禮に參らうと存じたれど、貧乏暇なしで、お禮さへ延引。女房ども彼方へようお禮申してくれ、この中あなたで結構な御料理を振舞はれ、その上結構な御酒を強ひられ、それは〳〵近年の御馳走。お禮申せ〳〵」と滅多無上に悦べど、根から覺えのない奴、奴「イヤこれさ、そりや何の事だ、俺はお手前に何にも振舞うた覺はないぞ」四斗兵衛「ハテ扨覺の惡い、あれ程振舞うて置いて、エ、こりや、その振舞返しでもせうかと御辭儀ぢやな。イヤモ御覽じます體なれば、振舞返へしとてはえ致さぬが、御酒は一つ上げませうかい。又此方の嬶が惡い癖で、人樣に振舞はれて居るがきつい嫌ひ、嬶が心休めぢや一つ上つて下さりませ。嬶ひと走り酒買うておぢやらぬか」

しはさてこそと、躊躇ふうちに井戸よりも、ぬつと出でたる件の駕籠舁、上るや否や發矢と打つ、穗先の手裏劍長藏は、眞俯けに倒れ伏す。四斗兵衞は見向もせず、何か心に打頷き、のさりのさりと懷手、村道さして行過ぐる。跡に長藏空死の、鎗の穗先は手に受止め、むつくと起きて身繕ひ、早暮渡る空の色、曲者が行く道筋を、遙に見やり見定めて、後を慕うて三重追うて行く。

第六

所の名さへ醒が井と、いへど朝夕醉臥して、酒手に諸色諸道具まで、酒屋へかき出す駕籠舁あり、名は四斗兵衞が内一ぱい、ふんぞり返る高枕。側に女房が賃仕事、小遣だけを紡出す、ぶんぶ車も世渡りも、廻りかねてぞ見えにける。四斗兵衞は大欠身中さすつて起き上り、四斗兵衞「エ、耳のはたでぶうぶうと、あつたら夢をさましくさつた。目覺しに一杯せう、一走り行て買うて來い」と、奈良漬臭い嘔氣しながら、まだ呑みたがるいけちな上戶、女房仕事の手を停め、女房「チヽたつたいまその德利を呑乾して又かいな。買ひに行こにも、もう値がござんせぬ」四斗兵衞「錢が無か儕がわんぼうぶち殺して買うて來い」と、無理邪も男の權柄。女房「サアわしが單衣は惜まねど、その樣に飮ましやんしては、身のためになるまい、ちつと嗜んだがよいわ

じや人もござります。なんぼ雲助致しても、大切なこの命、御免なされて下され」と哀れをつぐる空とぼけ、詫びるより外詞なし。軍治怒つて　軍治「ヤアどこへ〳〵、最前住所を尋ねし時、所所の森に寝ると云つた、スリヤコレ傍は知れた宿なし。絶體絶命覺悟せよ」と、刀ひらりと拔放せば、わつと飛退き、四斗兵衛「イヤそれから仰やりませ。私が申す事も、マア聞きわけて下さりませ。最前家がないと言うたは、酒の上の出放題、きつと家もござります。ア思へば〳〵この樣な、無法な事に出合ふのも、悪い星があたつたのか。何にもせよ此身の因果、さつぱりと諦めて、命は上げます、が只今も申す通り、今年八十三になる悴や、六つになる嚊にも暇乞、ちよつと歸して下さりませ」と、逃出すうしろ遁さじと、肩先かけて一刀、切つたか飛んだか古井戸へ、眞倒に落込んだり。鬼山すかさず手頃の木端、古井戸へ打込み〳〵熟と見、晉平「モウかく仕つたら氣遣なし、思の外脆い奴、御互に安心」と、八藤も刀を鞘に收め、軍治「存じも寄らぬ下郎にかゝり、思はずも時刻延引、これよりは夜道をかけ、國元へ急がん」と猶も何かを談じ合ひ、互に禮儀兩人は、京と東へ別れ行く。始終の樣子最前より、木陰に窺ふ鹽賣長藏、さし足して歩寄り、井戸へ落ちたる下郎こそ、只者ならず訝しく、試みせんと豫てより、仕込むおうこに穂長の鑓、井戸に立寄りさか落し、ぐつとつゝ込む手練の手答、透さず拔取る鑓の穂先、ほつくと折れ

二斗三斗、まだ其上もたべますによつて、この頃は名がかはり、四斗兵衛〳〵と何所でも申しますて、又ほんに酒に於ては、適れの手柄者、どなたでも叶ふまい」と半分言ひさしとろ〳〵寝入軍治立寄り、軍治「ヤイ〳〵〳〵、目を覺さぬか」と引起せば、駕籠舁「チツト合點ぢや〳〵〳〵。フウム、〳〵何と仰やる、我等に肴を致せか、イヤもう私大無器用者、駕籠舁く事と酒呑むより、外は何にも存ぜぬぢや。シタガ何ぞやりたいが、ホンニ此間子供らが、街道筋でうたふ歌、覺えてゐたが、ヤてんぽの皮、やつてのきよかい。おまん股ぐらへ太々神樂が飛込んだ、またすずふつて跳込んだ。ハヽヽヽ」と餘念なさ。鬼山いらつて軍治「ヤイこりや下郎め、譫言云はずときつと聞け、格別に其方に頼みたき仔細あり」と、聞いて四斗兵衛起き直り、駕籠舁「私にお前方が頼みたい仔細とは」軍治「ヲヽサ、其方が命がほしい」駕籠舁「エイ」軍治「イヤサ、其方が身體をくれい」駕籠舁「エイ」軍治「ヲヽ驚きは尤も〳〵、只今此御方と、主人の密事を談じ合ひ、話し終つて後を見れば、醉臥したる體なれど、兩人が不覺の第一、たとへ密事は聞かずとも、此儘に捨置いては、我々が後日の過り、是非がないと諦め命をくれよ」と聞く中に、四斗兵衛は猪吃驚、四斗兵衛「樣子聞く程膽がつぶれ、興も酒も醒め果てました。成程左樣に仰やるからは、定めて譯がござらうけれど、何にも聞いた覺もなし、又私には嬶もあり、悴もあり、今年八十三になる母

この頃京都頼家公には、諸國の武士を狩集め、密々の評議あり、その儀についての御使、幸ひに途中の對面、雙方の狀を取換へ、一刻も早く歸國せん」軍治「ホヽ、尤も」と兩人が、互に密書の箱取かへ、懷中して立上り、鬼山曾平あたりを見廻し、曾平「イヤこれさ軍治殿、兩人の外人なしと、一大事の物語、見ればあれに臥したる下郎、何者やらん」と尋ぬれば、軍治「ホー御不審は尤も、彼めは拙者を當所迄、舁て參つた駕籠の者、食ひどれてあの通り、イヤもうたはいもない下司下郎、氣遣あるな」と聞きもあへず、曾平「成程熟醉の體なれど、下郎ながら彼めが人相、逞しい生れ付、茅にも心置く時節、事漏れては一大事、拙者よろしく計らはん、コレかう／＼」と八ッ藤に、囁けば打うなづき、寢入りし下郎が側へ寄り、耳近く聲張上げ、「ヤイ／＼コリヤ駕籠の者、用事がある目を覺ませ」と呼ばる聲、ウンと寢覺の醉機嫌、駕籠舁「エッフッ、ム、何方かと存じたら最前のお侍樣、エッフウ、ム、まだこれや呑めと云ふ事ぢやな。イヤモまつさら一人は呑めませぬ、ちよつとお間を頼みましよかい。サアおさしなされませ」と、寢ても覺めても酒の事、鬼山はつつと寄り、曾平「イヤコリヤ下郎め、儕が名は何といふ。何所の村に住居致す」駕籠舁「ハイ、ハテ變つた事のお尋ね。我等住居は何所とも定らず、此街道でこんもりと、よう茂つた森のぶんは、慮外ながら拙者が寢所、又名がお聞なされたくば、本名は雲助、又かへ名が呑助。呑む事は

レ旦那、御覧じませ、肴はこれでよう御座ります」侍「ア、何とやら、ヲ、それよ、檑木も紅葉しにけり唐がらし」「此紅葉をお肴」と一と口食うてぐつと乾し、駕籠舁「エ、心地よい〳〵、コリヤたまらぬわい。申し旦那、ちと御願が御座ります」侍「ム、願とは何事ぞ」駕籠舁「ハイ〳〵いやモ外の事でも御座りませぬ、もう一つ是でたべませうかと申す事でござります」侍「ハ、、〳〵ム、何其の上をまだ飲むか、ハテ扨きびしい上戸だな、何程なりと勝手にせよ」駕籠舁「コリヤ有がたい」と立上り、手酌のはかり思ふ儘、てうど注いで、駕籠舁「へ、、、又たべます、今度はもう一息に」と桝引かゝへ、蟒が、瀧の流を呑む如く、侍も呆れ顔、駕籠舁「エ、忝い命〳〵、まだこれからが酒なれど、如何にしても無作法千萬、マア此の邊で入りませう。ハア扨と。ヤ慮外は御免。ちととろ〳〵とやりませう」と芝にころりと邯鄲の枕いらずに早や鼾、仙人界も斯くやらん。時刻移れば侍は立上つて身拵、用意の内に都路を、東の方へ急ぎの武士、顔見合せて、侍「貴殿は八藤軍治殿」軍治「コレハ〳〵倉平殿」と時の挨拶、雙方が互に禮儀事終り、八藤軍治聲潜め、軍治「貴殿の御主人大江入道殿兼ねて鎌倉時政公へ御内通の忠臣、京家にては出頭の入道殿、鎌倉へ内通とは神も知らぬ謀事、相互に三日目に逐一の御文通、定めて貴殿も此方の主人への御使ならん」倉平「如何にも〳〵仰の通り、主人大江油斷なく京城内の爲體、萬事具さに申上ぐる、

降つて湧いたる幸は得手の好物、嫣然と笑を含んで駕籠の錢戴き〳〵兩手をつき、駕籠舁「エヽ遖れなお侍樣、極めの外の褒美には五十三十增しの錢下さる所を酒と出たは、又違うた物ぢや。大將々々、何と仁作よ、是見たか」と、云ふを打消し相棒仁作、駕籠舁「申し旦那、結構な御意なれど、ア同じ事なら餅がよい。酒に優つた餅の德、年の初の鏡餅、重ねて神の二柱、或は茶粥の柱とも腹の減ること遲いなり。第一、駕籠舁に酒呑ますは、鶴に地黃を呑ますと同然、何處ぞの程では乘手の身に怪我の出來るは知れた事、酒をとんと止めにして、餅になされませぬかい、餅になさるが上分別」と、下戶と上戶の得手勝手、咽喉は鎌倉街道の食爭ひと見えにけり。侍は苦笑ひ侍「ホヽヲ其方にも望次第何なりと仕度致せ」駕籠舁「ソリヤ有がたい御意が出た。シタガ、ハア悲しや、此の店には酒計りで餅はなし」亭主「ヲット力を落すまい。堤の餅屋も此方の出店、後肩殿はあの壺から、お指圖次第に飲んだがよい。サア〳〵ござれ」と亭主が案內に相棒は、おのれ存分食ふべしと、旦那へ目禮、機嫌取、げんこ取をと急ぎ行く。後肩は立上り、勝手知つたる器の酒、有合ふ枡を盃に杓からてうど注ぎ移し、駕籠舁「然らば旦那たべまする」侍「コリヤ見事ぢや、枡で呑むか、何ぞ肴をくれたいなア」駕籠舁「アヽいえ〳〵御肴は持つて居ります、先づ一口」と隅呑に、がぶ〳〵〳〵と一息つぎ、腰の胴亂引明けて取出す唐辛、駕籠舁「コ

來そなもの、何にもせよ此邊を尋ねるにしくはなし。御氣遣なされな」と力を附る其折柄、後の方より同勢引連れ、北條の家來關口平太、姫を尋ぬるうろ〳〵眼、かくと見附け走り寄り、平太「時姫君にて候な、御行方知れざる故、方々と尋ね御迎に參つたり。住の江殿にも御供有り、いざ御出」と申せども、時姫「イヤ〳〵鎌倉へ何面目に歸るべし」と否み給へば關口平太、平太「片岡殿の思慮有つて惡しくは計らひ申さぬ由、是非御供」と住の江も、倶に引立つ大勢が東路さして急ぎゆく。雨の山阪花見りやすべる、花に思ひがよいとこ息杖しやんとせ。「ヤイ仁作狼狽たか、此の酒屋に駕籠立てて親方にもお茶上けい、憩む所で憩みもせず、コリャ奈落の底まで舁き込むかい、性根を付けい」と惡談に先肩もひやうまづき、駕籠舁「ナァニ馬鹿つくすやら、俺と合棒するが最後、定付の立場でも氣に入らねばすつとこな。酒屋さへ見りや何度でも休みたさうな面付」「それといふも呑たいから、どうで俺は聞及んだ、八つ目の大蛇の再來か、すつてんどうの眷屬か、いけちない酒好」と競合ひ〳〵、ヤットコ駕籠卸せば、「サア〳〵お呑み」と亭主が詞に、駕籠の垂上けて牀机へ歩み寄る十河額の東武士、悠々と押直り、侍「ナニ跡肩の者是へ參れ、最前汝に云付けたは、急用のある身共なれば、立場をぬいてほつ付けよと云うた通りに精が出た、極めの外に褒美をくれる、聞けば俺酒好きとやら、亭主ソレ、彼めに酒を飲ませよ」と

に姫住の江、義村様かと見合す顔、素知らぬふりに行く袂、二人はやがて右左、縋り止めて、「コレ申し、さ程無情い御心と、知らぬ私が憂き思ひ、都の方へ嫁入りも、父御の仰是非なくも、其場を紛れ落人と、かく成りゆくを可愛と、少しは思ひ給はれ」と、口説き給へば住の江も、「ほんに私がいろ〳〵と、口説き落した其上で、お姫様への媒人を、あとで思へば味な氣に」縺るゝ絲や青柳の、亂れて今は喞ぐさ、花と櫻の二思ひ、色香をわけて苔杖、手を取り〳〵や虎杖の、離れがたなき蔦若葉、縋り口説けど大丈夫の、心は空に春の風、吹わけらるゝ袖袂、放ちはせじと篠原を、あなたこなたと附纏ひ、亂るゝ裳裾紅の、入日の波と見え隠れ、木の間の櫻ばらばらばら、春のもなかの雪おろし、花ふみわけて 三重。

第五

近江野や鏡の山へ影遠き、高宮の村外れ、辿りて爰に時姫君、住の江諸共憂き旅に、うき戀人を見失ひ、其所よ此所よと立やすらひ、時姫「コレなう住の江、そなたの世話でやう〳〵と廻り逢うた戀人に、ふり捨てられし我身の上、推量して給もいの」と、涙先立つ喞言、住の江「ヲヽ御道理御道理、物堅い義村様でも木竹であるまいし、此方の心が達いたら、何ぼ無情男でも、情心が出

一と鳴りわたる、鐘もさやけき　三重夜嵐の。

第四　道行旅路の濡衣

憂き事のつかさを問へば世の人の、戀と旅とに有明の、光は空にいや高き、北條時政の深窓に、祕藏娘ともてはやす、名も時姫の時にあふ、鎌倉山をあとになし、都路さして嫁入りの、道は東路戀路はよそへ、それてはづして徒路の野もせ、數限りなき傳の、中を隱れ路近江路を、心のあてど共々に、お側去らずの住の江が、助けまゐらせ玉鉾の、道ならぬとや四方山の、噂に濡れん小夜衣、裾吹き拂ふ春風に、露ふみわけて辿りゆく、村々つゞき果しなく、物思ふ身は若草や、紫雲英土筆も目に添はで、葉越の瀧の木靈さへ、我を追ふかと怪まれ、木の間隱れに立忍ぶ、そなたの方より一群の、往來の中に聲高く、鹽の安賣山ばかり、噂都の伊達姿、商ふ鹽に數々あり、日月晝夜滿干の潮、どうと寄せ來る浦浪は、須磨の上鹽馴れ衣、松風村雨一荷にして、行平これをなめ給ふ。阿胡に名高き鹽の色、雪より白いを此の如く、富士の山もり安いが一德、おし合ひ犇合ひ、隣のお玉や向のお鈴が、こぼれかゝつて我等が袖を、じつと捉へて鹽の目の、戀路は桝にはかりなき。「サア召せ〳〵」と口上に、數多の往來輿に入り、笑ひを殘し行過ぐる。被衣あらは

木と名をふらし、こゝの森蔭彼方の堤、追詰め〱時政に泡吹かせんは高綱が胸に納めし軍の備へ」詞涼しく言放せば、造酒正につこと打笑み、造酒正「我とてもまつその如く、君に疎まれ君臣の禮義背きし上からは、本國に引籠り、旗上せんは易けれども、末代此身の瑕瑾となる、我が悪名もさつぱりと、流せば其名も楯の板、只いつまでも忠臣の、必ず二字を忘るな」と、味方に付くとも付かぬとも、善悪二つを一道に、納めて歸る造酒正、さらば〱と高綱も、御親子誘ひ奥と口、とうげんが采配にて造酒正を歸さじと、琴柱刺股ふり廻はし、逃さぬやらぬと犇いたり。造酒正「ヤア性懲もなきうざい餓鬼、殘らずうせい」と聲かくる。物な云はすな搦めよと、右往左往に打つてかゝる、鼓は奥の間、謠の拍子、舞延年の時の和歌、是なる山水の落ちて巖に響くこそ、秘術を盡して爭ひしが、さしもの大勢たまりかね、逃散るあとに我武者の二人、拔合せて切かゝる。かいしづんで翻筋斗打たせ、直ぐに腰骨踏みつくれば、やらじと取付く組子が急所、仕止めしは何者と、見やる後の障子の中、衣服改め佐々木高綱、高綱「判官を討ちとめて我を庇し小柄の返禮受納あれ」と高綱が立つる勇者の道々に、奥は安宅の舞謠ひ、とく〱立つか弓取の、心ゆるさぬ造酒正、暇申してさらばよとて、おひにはあらぬ相生の、祝言さへも三々九度、言分何と片岡が、虎の尾を踏む毒蛇の口、逃さぬ佐々木が四つ目結、紋にあらはす四天王、その隨

高綱「鎌倉よりの附家老片岡造酒正、佐々木四郎左衛門高綱見参ぞふ」と呼はれば、襖をさつと造酒正、出づる後に組子の侍おつ取巻くを事ともせず、造酒正「最前かくと見極めし我が推量に違なく、扨こそ佐々木でありしよな」と、いふ間もあらせず左右より、「捕つた」と聲かけよる所、その手をすぐに引摑み、造酒正「斯くも君より御不審のかゝり繋がる鎌倉に足を留めたる造酒正、たとひ主君の御意なりとも、滅多に縄はかゝらじ」と、彼方此方へどつさりいはせ、造酒正「臣は臣たる道を盡し、君を守るが習ひといへど、疑蒙る我なれば、只この儘に出城して、再會は重ねて」と又も組子が打かゝる十手を透さず引たくり、眉間眞向うち割つて、云はぬ互の胸と胸、宇治の方御聲かけ、宇治「誤つて疑へば人と倶に亡ぶといへど、意地を磨くは武夫の、道にはづれし造酒正、再び歸り逢坂の關を破ろと破らじと、其方一人にとゞめし」と仰の中より佐々木高綱、高綱「味方にあつては一方の旗大將ともなるべき御邊、その儘出城せしむること、虎を赦して竹林に放すとは云ひながら、我又斯くて有る中は、何條事のあるべきぞ。すは合戰に及ぶ時、何萬騎にて寄せるとも、高の知れたる葉武者ども、四方に亂るを鋒揃へ、掻首梨割鐵砲の、音も烈しき味方の軍勢、君の威勢を眞向にさしも功ある鎌倉方、どつと寄手の勢にて、勇めやかゝれと數多の士卒、諸葛が術をなすとても我が方寸の計略にて、そこにも佐々木こなたにも佐々木佐々

緩然たる御氣色にて、賴家「京鎌倉と隔りしこの頃の人心、圖りかねたる我が放埓、今改むる手始に、成敗せし此女、他人の手に人と僞り、入道が娘とは今日迄其身も知らず、初めて聞いて身を悔み、覺悟の最期主を謀る天罰、我が子に報うと知つたるか」と常に變りし御上意に、一く一統赤面し、思へば無念せん方な、自害と見ゆれば高綱押止め、高綱「ヤレ暫く、假にも先君賴朝より若殿の御師範と名を付けられし大江の入道、心を改め忠勤あらば生害には及ぶまじ。一旦內通の貴殿なれば、所詮生けては置くまいと思うての覺悟ならんが、佐々木四郎左衛門高綱軍師となる上は、貴殿如きが幾萬人內通しても苦には致さぬ、御心遣御無用」と人を育つる大器の詞、とうげん初めて生きたる心地、廣元「げにもく、今の命を戰場にて我が君に奉るが忠勤の第一、差當て御近習の比企の判官が打止めたる曲者、忠義はじめに生捕つて御覽に入れん」と立端の鹽しほからい目に大江の入道、とうけんの迯吠してぞ入りにける。大將重ねて、賴家「佐々木を軍師と招きし上は、母君諸共日頃の念願、時まさに到るはこよ、急ぎ士卒をさし招き、評議如何」とありければ、佐々木高綱暫しと止め、高綱「御諚には候へども、北條家には御存なき今日の次第を、次の間に窺ひ待つたる武士二人對面致せし上の事」と、家來を近づけ、高綱「ヤアく兩人、其方達は宿所に歸り、我が身の上を告げ知らせ、早くく」と追ひ遣つて、突立上り高聲に、

人の軍士待ち焦れたる甲斐あつて、今といふ今手に入るは、味方の礎　大願成就、頼朝樣より傳はりし雄雌の劍と名づけたる二口の太刀、軍帥と頼む上は手渡しする雄の劍、士卒を靡かす采配ぞ」と恭しく手に渡し、宇治「心得難きは大江とうけん、頼朝樣の御恩を受け、頼家の師範とも付置かれし身を以て、何怨あつて鎌倉へ内通は致せし」と仰せにとうけん起直り　大江「存じ寄らぬ御疑、鎌倉へ内通とは何を以て」　高綱「イヤ〳〵大江殿とぼけまい、豫てより北條家に心を通はし、隙あらば頼家御親子を害せんとする貴殿の底意、爭はれぬ證據は、最前我手に受け留めし小柄の手裏劍、片岡目あてに打つと見せて、正眞の狙ひの的は宇治の方であらうがな。ハヽヽヽ、其時我手に受けずんば、宇治の方はその座で落命、それのみならず貴殿の娘を若狹といふ白拍子にしたて、頼家公に放埒を勸むるが、鎌倉へ内通の證據、お隱しあるな」と一言は、三寸俎釘打つ如く、廣元「ム、流石の佐々木よく見付けた、淫亂不義の宇治殿を、殺さんと謀りしは家の爲を思ふ故さ、又白拍子若狹をわが娘とは何を證據」　高綱「ヲヽ其の實否は谷村小藤次、四宮六郎、主人の下知にて鎌倉の樣子を窺ふ忍びの犬、妾腹の娘若狹、藥の上より扇が谷の里に預けて置かれた事迄、聞きぬいて來たこなたの腸、サア〳〵白狀々々」と、詰めかけられてさしもの入道、返答塞がる障子の內、太刀音丁と唐紅、白拍子が首提げ、立出で給ふ頼家公、退つて敬ひ奉れば、

邪智を隱せし胸算用、獨り頷く思案の後、奥よりひよかく以前の男、思はずばつたり、花實「ハア是はしたり御許されて」と行過ぐる。廣元「待てく、汝合點の行かぬ奴、匹夫下郎の身を持つて後室に近寄る不敵奴、汝ら生けては歸されぬ、覺悟して居らう」花實「エヽイ是はまた迷惑な、花賣に來た御庭先で後室樣の御目に入つたは私が花の科、此方から仕懸けた色事ではなし、畢竟御前樣の御惡性樣ながら、私は何にも」廣元「ヤアぬかすまい、そればかりでない、汝最前から何ぞ聞いたで有らうがな」花賣「エイ夫は聞いたでもなし、聞かぬでもなし」廣元「それ聞いたら許されぬ」とすらりと拔いて切付けるを、脇息おつ取り、丁ど受け、花賣「こりや何となされます」廣元「ヤア御前樣を誑し、御家を亂す大罪人、觀念ひろげ」とまた切込む、鍔元丁と打落し、脇腹うんとたゞくく、透さず駈寄る比企の判官、主は誰とも手裏劍に、ぎやつと一聲敢なき最期、見向もやらず一間に向ひ、高綱「良禽は木を見て住む、大將の器量を選み、此の程民間に名を隱す、近江源氏の嫡流佐々木四郎左衞門高綱、今日たゞ今頼家公の御味方、軍師となる時到れり、家來、刀」と詞の下、ハアはつと一度に立出づる姿も、一對二人の佐々木。入道が悔りけてん、樣子如何にと窺ふうち、さし出す大小おつ取つて、床机にどつかと坐したる面體、主從かはらぬ、三人佐々木、三國一の勇士なり。御劍携へ宇治の方、御悅の聲高く、宇治「六十餘州に一

なり、廣元「何をか包まん其方の仇となるべき人こそ、館の後室宇治の御方」若狹「エヽ」廣元「ヲヲ吃驚は道理〳〵、エヽ情なや武將の母と云はるゝ身が下種下郞を引入れて、アレ寢殿に不義密通の私語、先君賴朝の御恩を忘るゝ人非人、鎌倉には賴家公謀叛などとなき名を立つるも、皆宇治の方の不所存から、この人を生け置いては賴家公の御身の仇、家の爲天下の爲、御身竊かに寢所へ踏込み、一刀に討つて給べ」若狹「アヽこれ申し、滅相な事ばかり、大事の〳〵殿樣の母君、殺せとは勿體ない」廣元「シイすりやこなたは賴家公が大切にはないか、大切ならば後室を殺すのが殿の御爲。よし〳〵これ程の一大事、口外へ出すからは最早暫時も猶豫ならず、こなたが得殺さずば、身が手に掛けて家國の禍を拂はん」と奧を目掛けて駈入る氣相、若狹「コレなう待つて入道樣」廣元「待てとは此方が討つ所存か」若狹「サアそれは」廣元「サア〳〵如何ぢや」と競り付けられ、若狹「そんなら宇治樣殺しませう。君に添たい殿樣を、大事〳〵にからまれて、同じお主といひながら、御家の爲にはかへられぬ、仕おほせて御目に懸けませう」と、口に云ふさへ勿體涙、胸にせきくる若狹の水。廣元「ヲヽ出かされた、天晴〳〵、それでこそ賴家公の北の方、これ此刀ですつぱりと、アレあの囃子の終らぬうち、時を過さず、合點か」「心得ました」と脇挾み、氣も太鞘の白拍子、目釘潤して忍び足、窺ひ〳〵入る姿、見やる眼も笑壺に入る、

れん」と立かゝるを、腕首摑んで眞逆樣、見向きもやらず搭寄つて 造酒正「たとへ御咎蒙るとも厭はぬ〳〵。此の上は頼家公へ直に御願申さん」と、いふ間あらせず入道は、推參なりと打かくる手裏劍、丁と身をかはせば、小柄は外れて裲襠あらはに、花實「アイタヽヽ」小手打ちこまれし以前の男、一座の驚きなまなかに、隱立して川霧の、現はれわたる宇治の方、暫し詞もなかりしが、宇治「恥かしや造酒正、最前そなたの意見、面目なさも切なさも、思はれぬ程可愛いは、眞實惚れた忍び男、女の因果と堪忍して、必ず呵つて給んな」と、詫びるは武將の御母君、天下晴れたる御身持、呆れて何とせん片岡、入道も苦笑、廣元「頼家公の御母公爲たい事なさるゝが武將の威光、誰が何と申す者がござらう。片岡が押付願、御得心ないは知れて有るも、身が取次してくれう、次へ立ちやれ」と權柄顏、破るは易く守るは片岡、結ぶは早き戀の殿、三つに別るゝ奧の間に、笛の響も大將の、機嫌取々鼓の音、銀燭臺の影高く、輝きわたるばかりなり。若狹はそつと奧の隙、出づる後にとうげんが、聞くとも知らず獨言、若狹「妼衆の話を聞けば、モウ祝言は止まつたさうな、これといふも入道樣の御蔭、エヽ忝い〳〵。それに引かへ片岡殿、わしが爲には戀の仇」廣元「イヤその敵は外に有る」若狹「エヽ外に有ると仰るは」廣元「ヲヽ理を知らねば不審は尤、君を大事と思込まれし志は切なる故、入道が語つて聞かせん、近う〳〵」と小聲に

毎日々々入込ませ、御目に止りし者とては御寝所に引入れさせ、放埒惰弱の御遊びと聞きたる時は造酒正、はたと塞がる胸の戸も明けて、一人誰有つて諫言申す者もなきか、エヽ是非もなき次第やと、思ふに任せぬ片岡が、屍は泥に埋むとも、一心變ぜぬ魂と知ろし召されぬ事ならば、再び生きて歸るまじ。穩やかならぬ鎌倉の、大事を前に置きながら、色に溺れ酒に長じ、世の人口にかゝるといひ、覺むれば夢のあと先に、御心付けて唯一言、賴家公に御意見の、杖柱ともなるべき御身、思ひ止つて給はれ」と忠に凝つたる片岡が、諫める五體に汗滴、袴も浸すばかりなり。宇治殿氣色をかへ給ひ、宇治「ムヽ、自らが身持放埒、町人百姓を引入るとは、跡方もなき噂を取上げ、貞女の道を背きしと、無き名を立つる推參慮外、女と思ひ侮つてか、詞が過ぎるぞ造酒正」造酒正「ハツ〳〵御心に障りなば、その儀は幾重にも御宥免、唯々返へす〴〵賴家公へ御祝言の御勸め、この嫁入を變改あらば、最早和睦も叶はずして、亂に及ぶは今この時、熟と御賢慮廻らされ、時姫君の御事のみ、偏に願ひ奉る」と、我身に代へて祝言の、治まり願ふ四海浪、ゆたかに見えぬ風情なり。入道とうけん聲荒らげ、廣元「同じことをくど〳〵と、主人に向ひ尾籠の振舞。ヤア〳〵誰かある、アレ引立て」と呼はる聲、「畏つた」と比企の判官、襖あらはに、能員「是さ片岡、鎌倉方のぬらりくらり、言分しても返らぬ事、去に端が無うて得立てずば、立たしてく

やいの」と打連れて、上る疊の裏表、片岡造酒正出仕なりと呼はるにぞ、はつと仰天、こなたにも人音すればせん方なく、隱し所も宇治の方、裲襠ひらりと忍夫、暫しは宿る下蔭に、身を潜てぞ窺ひ居る。春の日脚の長廊下板敷の音しとやかに、武士の鑑の大廣間、それと見るよりハ、はつと、座を立隔て造酒正、謹んで兩手をつき、造酒正「こは御前樣只お一人、心得がたき館の構へ、殊に只今侍中が申すを聞けば、片岡御殿へ通すまじと遮つて申せども、某却つて合點まゐらず、御所存如何に」と尋ぬる中、「ホヽ其の仔細某が云ひ聞かさん」と立出づる大江の廣元入道とうけん、頭ばかりは丸けれど、角稜立てる眼付、眞中にどつかと坐し、廣元「御邊一人奧御殿へ通さぬといふ仔細語るに及ばぬ、貴殿の胸に覺あり。今度の使者鎌倉へ參りながら、その役目は遲滯に及び、剰へ時政の娘時姫を頼家公に妻さんなどと、旁以て心得ぬ心底、さるによつて御前より仰渡さるゝ右の條々、言わけあらば言へ、聞かん」と席を打つて詰めかゝれば、造酒正「ホヽそれにこそ片岡が深き所存、此度鎌倉に立越え、事の樣子を窺ふ所、時政の心底如何にしてもその意得がたく、その儘にてさし置かば、遂には兩家戰の亂を押へん其の爲に、北條殿の指圖に從ひ、時姫を請ひ受けしは、なほ御一家の緣深く、自然と和談に及ぶは治定、そこを以て片岡が三ヶ條の御不審も只婚禮にて事を治め、立歸つて樣子を聞けば、宇治の方の御身持、武士は勿論町人百姓、

エ滅相な、女だてら男に惚れると云ふ樣な、無遠慮な事があるものか。なう〳〵こはや恐ろしや」と振切り〳〵逃け惑ふ、道を塞で宇治の方、宇治「そんなら手討にあひたいか」花賓「サア」宇治「それは厭なら此の戀叶へい」と、退引させぬ難題に、返答はうど行き詰り、宇治「サア〳〵」花賓「そんならあいで御座ります。アヽお前樣もいらぬ物好き、アヽしたが、如何でもそぐはぬ色事が當世の流行物、あなたもお公卿樣の娘御なら、我等さしづめ痛い腹、必ず切らして下さりますなへ。それはさうぢやが、如何いふ御心で惚れさしやました、譯を聞かして下さりませ」宇治「さればいの、君に後れておのれやれ、貞女の道は背かじと、思ふに違ふ起臥に、契り置きにし私語、思ひ出せし床の中、只一人寐の手枕に、深き思ひを打わつて、云ふべき人も有りなんと、武士町人の別なく、入込ませしは幾萬人、數も限らぬその中に、今日といふ今日其方の顏、一目見るより戀草の、闇を縫ひゆく螢より、焦るゝ宇治が袖袂、下ゆく水の流さへ、外には洩す人もなき、わしが寢所にこつそりと、忍男といはゞ云へ、サア打解けて給もいの」と、ひつたり濡るゝ雨が下、又とあるまいこの戀路、在所育ちの麥飯で、釣れし戀は淀川の、七年ものと知られたり。花賓「イヤ申し其の御心、何時迄も必ず違へて下されますなへ」宇治「ヲヽ何のいの、一旦惚れたる上からは、武士は勿論高家でも、いつかな觸れぬ肌と肌、そなたと合すが互の固め、サアおぢ

惜しいとは思ひませぬが、今此處で斬られたら、跡に殘つた女房子が、路頭に立つは知れた事、一人と思へど親子三人、見殺にして何の益、何卒お助け下され」と拜み度ても後手に、縛搦めし有樣を、見やるこなたも打曇り、淸くさせんと下立ち給ひ、宇治「歎き慕ふは道理ながら、助けられぬ其方が一命、移るほど思ひの思ひ、源家の大將賴家が母宇治の方が手に懸るを、果報と思ひ諦めよ」と、すらりと拔いたる刀の光、恐々そつと顏打ちながめ、花賣「スリヤ如何でもこなた殺す氣か、ハァ是非に及ばぬ、とても切られる上からは、潔う死んで見せせう。そのかはり又此方樣にもすつぱりとした刀の切れ味、サア切らつしやれ」と突付ける身體の捻りに宇治の方、きつと目を付け、合點と丁と切つたる覺の手の內、解ける繩目に吃驚し、花賣「ムヽこりや切つたのは繩ばかり、スリヤ殺しやなされませぬか」宇治「ヲヽ何のいの、生けて再び自らが、賴みたい事あつて、殺すというたはみんな噓、人前つくりし心を見や」と刀は鞘に納まれど、まだ治まらぬ胸の中、底意如何にと兩手をつき、花賣「百姓づれの私に、賴みたいと仰しやる理はえ」宇治「そなたに惚れた」花賣「エヽ、イヤモ今日ほど恐ろしい事を聞く日はない、長居したらどんな目に遭ふも知れぬ、もうおさらば」と立上る。宇治「イヤ去なさぬ、云ひ出すからは金輪際、たとへ何れの花にもせよ、その一枝は自らに折らして給も」と慕ひ寄り、取る手に縋つて、花賣「エ

はいつて見たさに痛い目した、命が物種おさらば」と、呟き〳〵立出づる。「夫繩打て」と宇治の方御聲かゝれば能員が、取つて引立て無二無三、提緒手繰つて小手搦、權威に壓され詮方も、投首してぞ居たりける。比企の判官取りあへず、比企「斯樣の奴等が徘徊致し、御前樣の御身の上惡樣に觸れ歩く愚人奴等への見せしめに、首ぶちはなし成敗の手本に致し候はん」と聞きもあへず、宇治の方「いか樣そなたの言やる通り、下として上を計らひ頼家や自らが掟を誹る者あらば、たとへ町人百姓でも生けおいては政道立たず、處刑の手初其者は自らが手をおろし手討にする、覺悟せい。イヤなう能員、斯くも濫りに入り込むは、外面を守る役目の過り、つまり〳〵のとほ侍に、守嚴しく申付け、ともに心を配るが第一、コリヤ腰元ども、其方達は奧へ行き、自らが腰刀早く、これへ持來れ」と仰に生きた心地もなく、花實「申し奧樣、今の樣に申したのでお腹が立たば幾重にも、コレ申し女中方、詫して給べ」とおろ〳〵聲、願へどいつかな弛めぬ判官、比企「スリヤ御前樣には自身の御手討」宇治の局「ヲヽ云ふにや及ぶたつた今、そなたは次へ腰元共、早う早う」と宇治の方、嚴しき下知に能員も、その儘立つて入りにける。圍れし今ぞ命の置所、居所の歩みの未より、響く時計は八つも過ぎ、七つ何とか女子共さゞめき渡る腰刀、御前になほし置き、立つて入るさの月ならで、花にその日を置く露の涙と共に、花實「コレ申し殺される此命、

「御免〱」と手をつかへ、花賣「イヤ申し女中方、私は近郷の小百姓、畑の隙には此ごとく花を擔いで賣りあるき、通る度々この御殿、外から見てもきら〱と、結構づくめを見るにつけ、アヽ内へはいつて見たい事ぢやと思ふが一つ覗いても呵人なく、はいりかゝつて御門の内、これが何と出られませう、とてもの事にとつくりと入れさして下さりませ」と云ひつゝ立て行かんとす。判官聲かけ、比企「ヤア何奴なれば尾籠千萬、御前樣の御側近く慮外致さば一討」と、叱り飛ばされ吃驚し、見付けたら、大抵の事ぢやあるまい、早う御門を出やしやれ」と叱る詞もなまめきし。

春より取出す梅の花、判官が前に置き、花賣「ハイ御許されて下さりませ、御前樣がかろ〲と出てござるとは夢にも知らず、アヽ勿體なや〱、お前樣の執成で拜まして下さりませ。其かはり此の梅を上げませう、イヤ申賣あまりでは御座りませぬぞへ、物は云はねど此花はお詫の種の一枝」と云はせも果てず、比企「ヤイ見掛けによらぬ土性根の太い奴、武士を提へて嘲弄する憎くい頰桁、いがめてくれん」と飛懸り、目鼻もわかず丁々と、打つ度ごとに散る梅の落花狼藉厭ひなく、びくともせば手は見せぬとつき放されて、今更に返へす詞もちり打はらひ、花賣「去にましよ去にましよ。慈悲專らと思ひの外、去とは慘いお衆達、何ぼ結構な著物きて、仔細らしい顏召されても、斯う邊がひどうては御出世はなりませぬ、貴い寺の門前から去んだがましで有つた物、

も躊躇ふ所へ附け込む家來、腕を廻はせと追つ取り巻く。「ヤレ暫く」と御聲かけ立出で給ふ宇治の方、君に別れし玉櫛、まだ艶やかな色も香も觸らば落ちん袖の露。宇治の局「ホヽ豫て聞得し佐佐木四郎左衞門、自らこそは頼家が母宇治の方、顔あはすは初なれど、昔にかへる主從三世、今より頼家が力となり、偏に頼む味方の軍士」高綱「ハア畏つて候へども、さ程に迄某を懇望あるに引かはり御家來中の今のしだら」宇治の局「ヲヽ其の不審は道理なれど、味方の士卒を靡かす高綱、その手練を見やう爲」高綱「ハヽヽヽコハ御諚とも覺えず、身不肖の某なれども、まさかの時は軍士にも、御頼みなされんとの御心には引換へ、劍術柔術の業くれにて佐々木が器量御試し遊ばさるゝは、淺はかなる御計らひ、左樣の武藝は一人に敵するは武者の技、軍師の器量に足らず、憚ながら大將の御賢慮薄く候」と、武威を恐れぬ辯舌骨柄、割符を合す二人の佐々木、心一つに奥と口、きつと御目を付々に、わつて云はれぬ此の場の仕宜。宇治の局「ヲヽ一言一句に備りし軍師の器量頼もしゝ〳〵。此の上は頼家に目見させ、事ゆるやかに奥の間で主從の盃事。コリヤ腰元共、佐々木を早う伴へ」と、仰にはつと高綱も、威勢は雲に立上る龍に翼や虎の間の、御前を指して立つて行く。かゝる折しも御庭の内、下れ〳〵も柔らかな妼共が口々に、腰元「見れば花を商ふ人さうなが、此處をマア何處ぞと思ふ、忝くも源の頼家樣の御殿とも憚らず、中間衆が

と、よも違背は有るまじ」と探る詞ににつこと笑ひ、高綱「先君頼朝一天下を切治め、草木も動がぬ今の世に、軍術武邊も益なき事と、跡を晦し山林に引込んだる佐々木高綱、今改めて御召出しは太平の世に武を忘れぬ名將の御心掛、委細の儀御尋ね申すに及ばず、御頼みの一大事、高綱承知仕る、御心安かるべし」と淀まず濁らぬ辯舌は、水を流せるごとくなり。煙たい相手にさしもの大將、頼家「アヽいかう遊びが滅入つて來た、佐々木を母へ目見えさし、コレ若狹其の跡ではしつぽりと、サアおぢやいの」と大將は、帳臺深く入り給へば、高綱「然らば後刻」と判官に目禮式禮高綱も、奥にお供し入りにける。又も奏者が聲として、侍「御前樣より仰せられし佐々木四郎左衛門高綱只今伺候致せし」と聞いて能員 比企能員「ソリヤ何の事、たつた今目見えした佐佐木四郎左衛門二人有らう筈はなし、ムヽ聞えた、名有る武士共召抱へある時節を考へ、匹夫下郎の騙事。何にもせよ仔細ぞあらん、是へ通せ、糺明さして實否を糺さん、用意あれ侍中」こやり戸口に身を潜め、握りつめたる柄の間も、心を配る高綱は、春待ちかねし鶯の、初音をうたふ心地してしづ／＼と入來り、高綱「召に應じて佐々木四郎左衛門只今參上仕る、取次頼み存ずる」と聞きもあへず判官が、ソレと指圖に雙方より取付く二人を引摑み、何の苦もなく投退れば、同じくかゝるも右左、うんと云はして寄せ附けねば 比企「上意なり」と判官が、聲に流石の高綱

岡諸共鎌倉へ下りし處、心得難き北條殿の所存、何時合戰あらんも知れず、まさかの爲の便にと、味方に招く諸浪人、中にも佐々木四郎左衞門高綱こそ、今の世の軍師、彼が行方を詮議いたし、此方の大將とせば、此上やあるべきと母上の御諚を受け、世を遁れ住む佐々木が在所、此程より尋ね捜す人衆の手配、殊に又造酒正が計らひにて、北條家の娘時姫殿と、御婚禮を取結び、追付け館へ參るは治定、御祝言とある時は若狹殿の爲にもならず、何と御思案はあるまいか」と、聞くよりはつと若狹が顏色、見て取る賴家、賴家「コレ〳〵だんない〳〵、片岡が指圖でも、そ文字をのけて賴家が妻と定める者はない。イヤ何。判官、我が思ふ所存も有れば、片岡出仕いたす共、奧御殿へ通すなと侍中へ申付け、堅く禁制たるべき由、小姓共より申渡させ。コレ若狹、構はずと一獻酌み、さらりと流しや」と、大將の色に心も亂れ絲、縺れかゝりし片岡が、難儀と更に白書院、取次の侍まかり出で、侍「御召によつて佐々木四郎左衞門高綱御次に控へ罷在り、通し申さんや」と伺へば、賴家「ヲヽそれ待ちかねし、是へ通せ、對面せん」と仰の下、御前間近く立出る佐々木四郎左衞門高綱、名にのみ聞きし武夫の行儀亂さず平伏す。判官佐々木に相向ひ、能員「對面致すは始なれど、名は聞き及ぶ高綱殿、此程より貴殿の行方尋ね索めるその仔細は、軍法智略隱なき佐々木四郎左衞門へ、我君竊かに御賴ありたき一大事あつてのこ

三浦之助「ハ、實に御潟となり、巖は湯玉とかはるとも、恨は晴れじ我心、推量せよや三浦之助」三浦之助「アレ〳〵御覧ぜ、あの一軸、天の時正に到るといふ、中なる文字こそお恨の目當ならん、只一矢にて御鬱憤散じ給へ」と義村が的を外さぬ黒星に 宇治の局「ヲ、心得し」と打番ひ、きり〳〵と引絞り、手先上りに切つて放せば過たず、文字のたゞ中はつしと響く暮のかね、御立の行列主従が、別れ勇んで三重立歸る。

第三

實に治まれる例には、松に小松の生添ひて、枝に枝葉に葉の榮え、契り盡きせぬ源や、御酒の機嫌も頼家卿、晝夜わかたぬ舞歌ひ、御側小姓が笛鼓、白拍子には若狭とて、容色も吉野櫻花、戀しき人は君樣と、舞に事寄せ頼家の膝に凭るゝ品形、よう濡事の生粋めと、側からはやす囃子方、いや〳〵どつと賞めにける。大將御機嫌斜ならず、頼家「何時見ても美しい容色につるゝ扇の手、どうも堪らぬ若狭の前、この頼家が北の方」若狭「ハイその御願は私からいつ〳〵迄も其通り、必ず變り給ふな」と又濡れかゝる一奏、比企の判官御前に出で、比企「君にも知し召さるゝ通り、片

時到り、六十餘州の總追捕使、御跡目の御しゆつくわい御互に遺恨とならば、いよ〳〵御代の爲ならず、熟と御合點なされしか」と、出家形氣の一行、和尚も名にし建長寺、すつぱりとした意見なり。政子の方理に服し、政子「先君の追善にはしたなき云爭ひ妾が過り。イヤナウ宇治の方、必ず心にかけられな」宇治「何が扨只今の無禮はお許し下され」と、互に和らぐ御挨拶。造酒正頭を下げ、造酒正「憚り多き諫言を御聞入下されしな。御恩は重き細石、巖となりし御代萬歳、見せ奉るがすぐ樣追善佛事、終れば御前にもいざ御歸館」と勸むれば、解けぬ心を裲襠に、包む式禮政子の方、片岡和尚御見送り、館を指して歸らるゝ。跡に局は張詰し心の怒止めかね、千々に碎くる思案の體、始終の樣子三浦之助、さはらぬ體に手をつかへ、三浦之助「日も夕陽に斜なれば、御立ぞふ」と申すにぞ、しづ〳〵かたへに歩寄り、懸け奉る雌雄の名劍、小脇に手挾み、宇治の局「如何に義村、太平の印を見せんと賴朝樣、この東大寺へ納め給ひしこの劍、雄劍は自ら、雌劍はその方、これを帶せん兩將を選み來らんそれ迄は、勘當なるぞ」と一口を、差出し給へば兩手に受け、三浦之助「四海太平なる時は、弓は袋にし太刀は鞘に納むると雖も、再び用をなすべき時節近きに有りとの御心候な」宇治の局「ヲヽ言ふにや及ぶ、先君の御恩を忘れし北條一家の權柄我儘、鎌倉山の月影を他所に眺めて、賴家を日陰の花となし果つる、其の口惜しさは如何計り、たとへ浪路は千

められてくわつとせき立ち、宇治の局「エヽ聞きにくい一言、女でこそあれ頼家を一度武將に立てて見せう」政子「ホヽ〳〵イヤそれや蟷螂が斧同然。取らるゝなら取つて見や」宇治の方「ヲヽ取らないでは」と裲襠ひらり、持たせし長刀互に掻込み、サア〳〵と詰寄りしは、野分に騷ぐ荻萩の亂れあうたる如くにて、すは事こそと腰元下婢、手に汗握る寺中の騷動、佛の會座も忽に、修羅の巷へ馳來る片岡、「待つた〳〵」と氣も狂亂、押隔ててどつかと坐し造酒正「エヽ情なき御有樣、御兩所の御爭は偏に天下亂れの端、此の御心付かざる事淺ましの御所存や、殊更今は亡き御靈、祥月の御命日、其の御位牌の御前にて、かゝるさがなき賤の女の、御爭は何事ぞ。國家の爲を存ずる故、京都鎌倉御緣を結ばゝ、自然と和らぐ御代の礎、さあれば草葉の亡君も、嘸な悅びましまさん、操の鑑思さずや。不肖の臣が胸廓を苦しめ碎くは千變萬化、九牛が一毛も聞召し分けられて、何卒和順なし給へ」と、わつゝ口說いつはら〳〵、淚は忠義隨一の、上に立つたる武夫の、諫に誠を現はせり。榮西和尙しづ〳〵と、御弟子引連れ出給ひ。榮西「兩後室へ愚僧が御意見是にて悟り下され」と持たせし一軸傍なる、松の小枝にさらりと懸け　榮西「なんと御覽なされしか。天の時正に到るといふ文字、兎角天下を治むるは天より自然其の人に與へ給ふにあらずんば、中々治まる事能はず、既にもつて今日追福し奉る右大將、蛭が小島の漂浪も、後には天の

みしか、誠に今日の追福も、あなたと自ら御一所に御弔ひ申す事、さぞ我君もお嬉しく思召さん」とありければ、こなたも左右御挨拶、政子「三年と過ぎる年月も果敢なの浮世、懐かしの今日の其日」と計にて、互の袖に玉こぼす、露こそ手向なりけらし。局はいとゞ萎れ入り、老少不定の憂きことも、誰が何時の世にはじめしぞ、我君此の世にましまさば、自らが事若が事、今の思ひはなきものを、一生埋れ果てなんと、悔み涙は妬みぞと、心に障る政子の方、政子「イヤなう宇治の方、アノ武藏野に見る月も、賤が伏屋の濁江に、宿りし月ももと一つ、所々の風雅により眺めも違ふ、其時々を辨まへて、世上に付くが良ささうな物ではないか」との宣へば、宇治の局「これは御尤、さり乍ら、春の花咲き冬は雪、天道四季に私なし、時をのり順を越え、辭儀も作法もなき時節」政子「サアさう思すのが心の僻、尤も頼家殿も君の御胤と云ひながら、妾腹なれば是非なき不運」宇治の局「イヤ其の母々の品位はかはるとも、頼家は惣領ならずや。兄を差置き弟が、上に立つといふ事が」政子「ヲヽ有るとも〳〵、たとへ乙に生れても君の妻たる自らが生落したる實朝を、世に立てるのが天下の掟。殊更子は母によつて貴し、そもじは誰ぞ、伊藤祐親の娘ならずや。現在我君と仇ある中、御敵の孫娘御咎もある筈を、却つて君の御情、活計歡樂榮耀の餘り、源氏の跡を嗣がせんとは、鷦鷯の巣を梅が枝にかけるより遙かのこと、中々及ばぬ叶はぬ」と云込の

仰天、住の江「迯げても迯がさぬ正眞の、惚手は其方に覺のある、御姫樣の御文の返事、サア〳〵いやとは言はれまい」と押しやる色の門違、戀の身替り住の江が、あんまり具合が出來過ぎて、如何やらひよんな氣になれど、悋氣もならぬ辛氣顏。時姫はなほ面伏、時姫「住の江を賴んで、そなたの心を引き見るも、思ひつめた自らが、心を推して叶へて」と手を取り給へば飛び退り、三浦之助「賴家樣と御緣組の御姫樣、夫故只今お局より」時姫「サアその使こそ自らと、御緣のないといふ印、香の煙の色もなき、移り香うすき形見とも、緣の切れるといふ心、わしや嬉しい」とのたまへば、三浦之助「イヤ〳〵たとへ御緣は切れる共、天下の後見北條家のお姫樣、我等體に御心掛けられしとは世の人口勿體なし、思切り下されよ」と、低頭三つ指。住の江差出で住の江「如何さま仰りやそこも有り、やつぱりあなたは賴家樣へ御嫁入遊ばして、いつそ私と三浦樣、ナア申し」と寄添へば、三浦之助「どこへ〳〵住の江殿、さう得手勝手は此方がさゝぬ」住の江「如何でも此うでもお姫樣エヽもどかしい」と、兩方を無理に配劑匙加減、調子合せた目出度と、さゞめく中へ御兩所御成と知らせの聲、驚きはつす三浦之助、姫は名殘もをしどりの離れがたなき後影、見送り〳〵是非なくも、御寺の方へ入り給ふ。案内も同じ東西の、幕絞らせて政子の方、宇治の局も氣高さは、吉野龍田か月雪の、光り合ひたる風情なり。宇治の局「是は〳〵政子樣、御佛前へ御燒香も相濟

し京家の御格式は知らず、女中方はまた女中の格式。此の幕の內は時姫樣の御殿同然、女中御殿へ殿連が、御使者に御出なさるゝからは、此方のあしらひにお付きなされにや成りますまい。それが御氣に入らずば此の御取次は得申さぬ」三浦之助「それは迷惑、女中方の禮義は不案內な拙者、無骨の段は料簡あつて、御口上早く御傳へ下され」住の江「イエ〱奏者を侮つたなされ方、私も武士の娘、此の樣に突仆されて、アイタ〱持病の癪が」と苦しむ風情、拗ねて見ると知りながら、女子合手に短氣も出されず、三浦之助「御藥上げん」と用意の印籠、住の江「イヱ〱お氣の知れぬお前の藥、どうも私は」三浦之助「ハテ疑深い、コレ此の通り」と、毒試の金打、住の江「ア、御心底見えました」と、戴き〱、住の江「此の御藥御前の手から受けましたが祝言の盃同然、女夫ぢやいの」と抱付けば、義村「是は又きついおなぶり」住の江「イヽエ誓文三浦樣、なんぼ堅うなされても、もう斯うなつたら否とは云はさぬ」三浦之助「サア我とても岩木にはあらねども」住の江「そんなら應でござりますな」義村「サア」住の江「夫はいやと仰ら何時迄も、此の奏者が癪はなほらぬ」三浦之助「ハテむづかしう仕込んだ癪。堅う見せるは刀の手前、此方も變らぬ仲人は此の印籠の重々、情の御禮はかう」と、締返す手の柔らぎ口、覗きこぼれて腰元ども、腰元「よう〱三浦樣しつくりの長門印籠樣、蓋があいた、サア御出」とつき出されて、雲間より松の葉越しの隈晴れて誘ひ申せば、吃驚

使者、三浦之助「宇治のお局より時姫樣へ使として參上、誰そ御取次頼み入る」と云入るれば、幕よりも「暫くお控へめされよ」と、勿體つくるも戀の仕掛、とは知らずして三浦之助、素袍の角びし澁面つくり、待つ間なまめく住の江が、出合頭に義村を、見ても見ぬ目の心意氣、これ戀知りの印なり。三浦之助謹んで三浦之助「宇治樣の仰には、今度造酒正媒酌を以て、時姫樣と主君賴家緣邊の御契約、まだ御輿は入れねども、嫁御といへば心安さ、たまに貰ひし儘、東大寺の名香、いと珍らかなる夢もがな、心計りの贈物、御慰み下されよとの御口上、御前よろしく御披露」と、袱紗包を取り出せば、住の江「これは〱御丁寧な御口上と申し、御使者柄と申し、御持參の香よりも色香の深い戀知りの、いとしらしい殿振りを見るに思ひの增さり草」三浦之助「アヽこれ〱、御奏者、拙者への御挨拶より早く御上へ使者の趣」住の江「ヲヽせはしな。そしてアノ御元服遊ばさねば定まる御內方樣はまだ御座りますまいな」三浦之助「左樣部屋住同然の三浦之助、妻とては持ちませぬ」住の江「ママそんなら內證に云ひかはしなさつた、かはいらしいお方があるかへ」義村「かつ以てかつ以て。洒落仰しやらずと、先づお取次〱」と、取出す包みの手をじつと。義村「アヽこれ何なさる、無作法千萬、この三浦之助つひに女中と、手から手へ物取りかはしたこともない家中の格式、御座輿も事による、放しめされ」と衝き退くれば、躓きそこに仆ながら、袂をひかへ、住の江「コレ申

時姫「ナウうたての緣定や。賴家樣には若狹殿とて御寵愛の愛妾、その中へ嫁入は、戀路の中を割きに行き、人の恨妬を受け、何たのしみがあらうぞいの」と仰せにお側の瀧浪が　瀧浪「エヽ住の江殿まだな事、賴家樣は都の殿樣、あんな堅苦しい大將はお嫌ひ、今度御使者の其の中で、極上吉粹 角前髮、都への嫁入より、疾からあなたのお心は、三浦の方へ走り舟、ひよんな事は狀文の、艪でも櫂でも行きにくい、荒磯の岩侍」住の江「ムヽ堅い程お姫樣の思の增すは御尤」瀧浪「サイナ、その堅みを打碎いてお手に入れたら、敵の城を落したより大きな手柄。住の江殿は片岡の娘御、よい謀はないかいな」住の江「サアどうしたらよからう」と三人小首傾けて、戀の評定しどけなし。住の江「コレ斯うぢやわいの、其の堅藏の三浦殿、お姫樣と云うては、お主樣の許嫁のと、猶以てむづかしかろ。その惚手に私がなつて、堅い所を碎いたら、それからあとはお姫樣の、御威光ごかしにやり付ける、天の川にも中立の、舟がなければ渡されぬ、そこで私が妹脊の舵取。したが、肝腎のその三浦殿、わしやつひに逢うた事が」瀧浪「ヲヽその逢はぬが丁度幸ひ、アレアレ〳〵向ふへ來る古文字の素袍は違はぬ三浦殿。サア急になつて來た、隨分首尾よう生捕つて、高名見たい」と女中達、姫は猶しも恥かしの、森の木隱れ幕の內、かくとは知らぬ使者男、やさ風流の角髮は、三浦之助義村、のつし熨斗目にかけ烏帽子、素袍の袖に春風の、そよと音なふ內意

忘れ、媒人の取持顔、見るも中々腹筋」と、取つても付かぬあてこすり、耳にもかけず和尚に向ひ、造酒正「近頃仔細あつて京鎌倉の御縁組、御取持仕るも、何卒國家の無事を祈る某、御推量下され」と、事を破らぬ一言に、尤もなりと感ずる智識、判官はえせ笑ひ 比企「鎖縄も言へば言はるゝ、自體、鎌倉の附人風が、お局の御氣に入らぬ、イヤモ彼方へも此方へも、塗廻すねれけ武士」造酒正「ヤア傍若無人の雜言、さ言ふ和主が不忠の臣」比企「何が何と」造酒正「ヲ、サ、主人に諫も奉らず、毒を吹きこむ邪非道」比企「ヤア舌長なり、聞捨ならず、おと骨切て切さぐる」造酒正「シヤ小癪な」と立かゝる。こは何事と榮西和尚中を隔て、榮西「大切の供養の場所、若し刃傷にも及びなば、後日の言分如何なさるゝ、短慮至極」と押鎭め、榮西「供養の時刻は間もあり、暫くは御休み、いざ先々」と勸むれば、互にすれ合ふ大紋の、袖揺直し兩人は、和尚の詞に從ひて、休息所へと入りにける。供養の御幕打はへしは、北條家の乙の君時姫御寮、頼朝の後室に姉妹の名はあれど、御腹がはり末の子に、後れて咲きし姫躑躅、造らぬ木なり手入れずは、何所へ枝のふりの袖、都まばゆき姿なり。お側女中多き中、片岡が娘住の江、住の江「御覽遊ばせお姫樣、京鎌倉の大名方、此の廣い境内も埋るゝばかりの賑ひ、殊に御父時政樣の御出され、お前を都へ御縁組遊ばすとやら、今日はお約束が定まる筈、さぞお悦びでござりませう」とほのめけば、

鄕に入つては吉村が、心々の三つ鱗、北條殿の智慧の海、底はかりなき鎌倉山、御代の榮えぞ三重久方の。

第二

八重櫻散りしく法の東大寺、總追捕使の御菩提を、弔ふ結構工を盡し、金銀瑠璃玻璃錦の帷、廻廊石垣悉く、五色の織絹幾重に包み、照る日に輝く裝ひは、これ彌陀境をうつされたり。さてまた千僧萬僧の、御經の聲澄みわたり、三尊こゝに來迎かと、殊勝なりける事どもなり。此度の導師建長寺の前住榮西和尚、朱の衣もいと貴く兩人に打向ひ、榮西「今日は御兩所共、警固の御役目さぞ御大儀。しかし天氣快晴にて愚僧も甚だ滿足」と、挨拶あれば造酒正、造酒正「誠に今日は御苦勞千萬、上々にも御悅び、則ち御寶筵に御出座もあるべくなれ共、女儀の事、不淨も如何、御遠慮あり、某よきに計らふ」旨慇懃に相述ぶる、詞にいがむ比企の判官、比企「たとへ何の樣な弔も、亡君何のお悅び、何故と仰れ、先君御逝去の跡目は當時實朝公、こりやこれ政子の方の若殿、又宇治のお局は御部屋なれども、賴家卿といふ惣領を生み落されたが修羅の種、弟に天下を乘取られ、何の快からう。それに何ぞや、緣組の祝言のと樣々の御戲言、役柄も打

より上を討たんと圖る、これを謀叛人といふ。若けれども頼家公は、正しく先君頼朝樣の御惣領、時政公今武將の祖父君にもせよ、元御家來には相違なし。頼家公憤り思召すことあらば、時政公に切腹あれと仰せられても濟む事、何が恐うて御謀叛なさるべき。下から思ふ私量見、控へ召され判官殿」と一句に靜める三浦が才智、人々感ずるばかりなり。時政御機嫌斜ならず。時政「三浦之助これへ參れ」と御座近く、時政「その方いまだ面を見知らず、若年に似合はぬハテ器量の若者よな。今よりしては造酒正同前、心置なく往來せよ、對面のしるし、それ〳〵」と三浦之助が名に寄せて、義弘の一腰、引出物に給びてげる、誠に當座の眉目なり。政子の方しとやかに 政子「御心解けて自らも、此上の悅びなし。人の噂も取々なる、互に緣の遠ざかる故なれば、緣に緣を重ねる爲、幸ひ時政公御局槇の方の腹に出生の末の娘時姫を、頼家の北の方にそなへなば、京鎌倉の和順の印この上なし。これ自らが御願ひ」と、仰に時政打頷き、時政「政子の發明は太平の瑞相、さあれば頼家が寵愛の、若狹とやらんを追出し、其後時姫を送るべし、媒介は造酒正」 春久「ハア畏り奉る」と領承すれば實朝公、實朝「今年則頼朝の三回忌、なんと東大寺にて追善供養取行へば、政子御前も宇治殿も、此の靈場にて對面の上、婚姻の契約あらば、靈魂も御悅び、供養の催し諸大名相心得よ」と御上意に、皆退出の谷七郷、松倉郷の拜領も

御謀叛などとの雜說恐ろし〳〵。身持放埒の御咎、噂に違はぬはこれ一つ。若狹と申す白拍子を殊の外御寵愛なされ、愛妾に引上げられ、夜晝わかず酒宴の興、たつて御諫め申せども、一切御用ひこれなき故、人の惡說を重ぬるも、元は好色の御過、これとても若氣の習、御齡だに長じ給はゞ、自ら改らん。この儀は我等に御預け、冀ひ上げ奉る」と事を飾らぬ申條、比企の判官進み出で 比企「イヤ〳〵賴家公に御謀叛の心、全くないと言はれまい、正しく賴朝の御惣領を指置き、時政公指圖として、孫の實朝公を武將に立て、祖父君の後見は、自然と四海を手に握る、北條殿の計ひと疑かゝりし宇治の方、賴家公御親子の心餘り無理とも存ぜぬ」と舌三寸で內はから、比企が底意ぞ訝しき。聞兼ねて造酒正 造酒正「御前をも憚らず尾籠の詞、アレ見よ、上段に飾置かれし兜こそ、源家の重寶、龍頭に鍬形打たるは、大將軍の御印、この兜を實朝公に讓り置き給ひしこそ、賴朝の明智の眼、それを今更僻事と御謀叛あるべき樣はなし。御邊如きの佞人が、御側に徘徊する故、賴家公のあの御身持」 比企「イヤいふまい、御身持の善惡は附家老の御邊こそ知る筈、夫さへ知らぬ造酒正、賴家公に御謀叛の心、若しあつたら何とする」と爭ひ募る無道の判官、末座に控へし三浦之助つゝと出で 三浦之助「御前なるぞ、靜まられよ。最前より兩人とも何の詮なき爭ひ、賴家公に御別心の有無いは申すに及ばぬ事、凡そ謀叛とは下

頼家公より御禮の使者參上」と相述ぶれば「それ待ち兼ねつ、早これへ」と仰次第に言ひ傳へ、鎌倉の附家老片岡造酒正春久、京都の近習比企の判官能員、遙か下つて小姓立の若侍三浦之助義村、十八歳の角前髪、諸士に式禮衣紋の著振、怯ず臆せぬ一器量、人に優れて見えにける。時政御覽じ、時政「年頭の祝儀早速の參著滿足せり。然しながらこの比、心得ぬ人の取沙汰、殊に頼朝御他界の後、京都へ退き、度々使を以て鎌倉へ招待すれども、今に於いて下向なく、酒宴遊興に日を送らるゝ放埒の振舞、片岡を附け置く上は、など諫言致さずや。是なる武將實朝は我が孫、祖父時政天下を後見する上は、武將同然の時政を侮り輕んじ申さるゝ頼家の心腹、それに從ふ諸士の胸中、旁以て心得ず」と凛然たる嚴命に、恐入りたる造酒正。心を察し政子の方、政子「人の噂を取上れば、天道の事迄も恨み譏るは下々の習ひ、わけて頼家は自らと繼しき中、故殿頼朝樣の愛妾、宇治殿の腹に生れ給へば、妾に隔もある樣に人の云ひなし、鎌倉を狙ふの、御謀叛のと、由無言を聞くたびに、自らが胸の苦しさ、推量せよ片岡」と、仰にはつと頭をあげ造酒正「我等儀は鎌倉より、京都に添置かるゝ附家老、何れに諂ひ、何れに僞を申上ぐべき樣もなし。頼家公鎌倉に御下向なきは、もとより多病の御生付、御殿を離れ御他行だに稀なれば、御疎遠の段はさして趣意ある事にあらず、實朝公時政公兩將に對して、恨み給ふ御心毛頭なし。

謹んで平伏し、盛綱「不幸の某身に餘る御恩賞、有難く存じ奉る。但し一つの御願ひ、某が弟佐々木四郎左衛門高綱、兄弟共に先陣を相勤めしに、弟高綱に御恩賞なかりしかば、一轍の生れ付き、恐れながら先君を怨み奉り、且は兄の某にも遺恨をはさみ、十箇年以前鎌倉を出奔して行方知れず。あはれ此度の序に、弟高綱が在所をもとめ召出され、江州の内にて分地拜領なし下され候はゞ、猶この上の君恩に候はん」と恐れ入つて言上す。北條殿莞爾と打笑み北條「尤の申條、去ながら、此度御邊を江州へ遣すは、謀あつての事、其故は先君頼朝薨去の後、嫡男ながら在中將頼家卿、惰弱の生れ付故に、舍弟實朝に武將を超えられしを心外に思ひ、鎌倉を立去つて、京都へ引こみ早三年。この頃聞けば謀叛の催ありとの風聞、江州は京都五畿七道の堺、關を固めて東國の軍勢を防ぐ用意ありと樣々の噂、御邊の器量を見立て江州へ發向さするは、此方より先を取つて、京都を抑ふる謀、中にも其方が弟佐々木高綱は、軍法の奥義を極め、陳平張良にも劣らぬ勇士、行方を尋ね、佐々木兄弟江州を固める用意肝要なり」とありければ、盛綱「ハヽア畏り奉る、弟高綱兄弟心を一致にせば、たとへ如何なる大敵も、暫時のうちに取挫ぐは方寸のうちにあり、御賢慮安く思さるべし」とお受の詞に政子の方、御墨付を給ひければ、盛綱三度頂戴し、時の面目身に施し、御前を立つて退出す。折ふし廣間に案内して、「京都

近江源氏先陣館

あら玉の春立そめて御園には、木々の緑も四方の波、しづけき君が御代とかや。されば右大將頼朝公、驕る平家を西海に切鎮め、源氏一統の御威風、野邊ふす草の鎌倉御所、太平の地を占め給ふ。時は建仁三年正月元旦の御壽、二代の君右大臣實朝公、立烏帽子に緋の御裝束、白書院に出給へば、上段には龍頭の兜を飾り、御母公政子の御方、武將の祖父北條相摸守時政公、先君らいてうより天下の執權を預り、孫君の御後見、御年ばいも六十餘州、自然と握る三つ鱗、其外關八州の大小名、烏帽子素袍もさゞめきて、袖を列る大廣間、御盃の大流小流、緣側には猿樂の役人、祝儀の開口相勤め、謠は老松梅が枝に、弓矢立合ひ弓取の、列を正して出勤有る。こゝに近江源氏の嫡流佐々木三郎兵衞盛綱、御前近く召出され、實朝仰せける樣は　實朝「其方儀は、親源藏秀義より二代の家人、ことに近年忠勤を擢んで、勳功他に超えたり。從つて近江の國は、元其方が故鄕なれば、一國をあて行ふ間、江州へ赴き、一圓に領知致すべし」と御諚の趣承り、

繪本太功記 終

つしと打落し、諸軍に向ひ聲高く、久吉「ヤア〳〵者共、此虚に乘つて敵の殘黨左馬助光俊、齋藤内藏助が備へを暫時に攻崩し、名に近江路の湖へ、一騎も殘らず追沈めん。旁來れ」と先に立ち、勇み進んで凱歌の聲、箙を叩き凱陣の、其悅びを今爰に、うつすも勸善懲惡の端ともなれとまさな言、書き納めたる君が代の、萬々歲の壽は、中々申すも愚なれ。

よ遁がすな」と、喚き叫んで切りかゝれば、光秀「シャ猪口才な蛆蟲共、冥途の導きしてくれん」と、振かざしたる刀の稻妻、瞬く内に先手の軍兵、十二三騎切て落せし勇猛力、叶はぬ赦せと一同に、嵐に誘ふ端武者共、むら〳〵ばつと迯失たり。相人なければ光秀は、太刀のいきりをさまさんと、藪の小陰に手綱を控へ、傾く運の口惜涙、鎧の袖にはら〳〵、降かゝりたる夕立の、空も哀や添ぬらん。折ふし藪の此方より、たゆみ佇む光秀が、鎧の透間を見極めて、ぐつと突込む猪突鑓、驚きながら切拂ふ、間もなく突出す竹鑓の、穗先は風の篠薄、なぎ立突立切拂ひ、暫し時をぞ移しける。梢にすだく蟬の經、手向となりし武智光秀、小手定まらぬ竹鑓を、身の毛のごとく刺通され、流るゝ血汐に夏草を、花と染なす紅の、田畑畔道刀を杖、蹌ひ蹌ぼふ無慙の有樣、ほつと一息撞出す鐘、寂滅爲樂攻太鼓、修羅の迎ひの百姓共、集り寄つたる一むら雀、叉突かゝる上段下段、一世の瀬戸ど受流し、爰を先途と切防ぐ、手練の鉾先百姓共、叶はぬ赦せと我先に、跡をも見ずして迯散たり。遁さじものと駈出し、心は矢猛とはやれ共、身體勞れどつかと坐し、拳貫く無念の齒がみ、弱る心を取直し、光秀「一元に歸す此世の暇」刀逆手に我腹へがはと突立引廻す。程なく來たる眞柴久吉、萬里に羽うつ大鵬の威勢は旭の登るが如く、悠々然と歩寄り、久吉「いかに光秀、主を討たる天罰の、報を思知つたるか」と、太刀拔放し光秀が、首をは

怯恐れ、少したゆみて見えたる所に、福島の陣中より、至つて小兵の桂市兵衛、斯と見るより飛かゝより、互に組み合ふ金剛力者、六尺豐の才藏を、難なく生捕、古今の手柄、勝つ色見する間もなく、川を隔てし筒井順慶、時分はよしと光秀が、陣所を目がけ無二無三、一手に成つて攻かくれば、敵は廢亡狼狽騷ぎ、崩立つたる其虛に乘つて、追つ立てぼつ詰め攻付くれば、是迄なりと光秀も、馬を飛ばして只一騎、小栗栖さして落延しを、追々駈行く味方の勝利、御歸陣有つて然るべし」と、悅び勇み訴ふれば、久吉「ヲ潔しく。イザ小栗栖へ後詰せん、旁用意」と久吉の、詞にはつと迎ひの軍兵いざ御歸陣と引居る、駒にゆらりと法の緣、結ぶ一世と二世の緣、切つて捨てたる亡魂の、しるしを直に野邊送り、又思ひ出す女氣に、涙の袖や鎧の袖、旭に映じきらく\/、綺羅一天に刈取る眞柴、仁德なりや風雅の德、忠孝全き其德を、世々に傳へて 三重 美嘆せり。

同十三日の段

神力勇者に勝ずといへ共、天遂に是を罰す。されば武智十兵衞光秀、筒井順慶が裏切りによつて、山崎の一戰破れ、漸く遁れ小栗栖の、藪陰近くさしかゝれば、追々駈來る眞柴方、「ソリヤ落人

づしづ立出れば、思寄らねど騒がぬ利休、宗左「ヤア犬死とは事をかしや、誠眞の失せし某が、既に報ふ此切腹」久吉「ホヽ遉は老體、斯も有らんと察せし故、陣所へ歸る體に見せ、とくより忍び窺ひ聞く。西國の探題たる眞柴久吉、實檢遂げし光秀が一子、天地廣しといへ共、今一人と有るべきか。主君を弑せし武智光秀、夫に引かへ子息政道、討死遂しは適勇者。せめては死したる人人の、菩提の爲に此所へ、庵を結び利休殿、久吉「好める道の茶を以て、往來の人に施さば、死するに増る節義ならん」と情の一句は則ち悟道、死をとゞまつて松田利休、宗左「ハヽ恵も厚き御仰、教の心は卽菩提、心の濁墨染の、衣がはりはコレ此居士衣、くもりを拂ふ誓ひぞ」と髻ふつゝと押し切つて、宗左「姿心も變る世に、我は茶道の道廣く、孫が其名の一字を取り、利休を其儘に、千の利休と改名し、浮世の塵に交はる共、只本覺の佛性たらん」久吉「ホヽヽ、天性備はる千の利休、今よりは久吉が、則ち茶道の師と賴まん」と、約束かたき小袖石、庭に哀れは稚子の、涙の種か袖すり松、古跡となりて末の代に、殘る其名の因緣は、此時よりと知られたり。かかる折しも眞柴の郎等、庭上に大息つき、御注進と呼はれば、久吉「ホヽ堀本義太夫、味方の勝利は何んと〳〵」義太「ハア、仰の如く備へを立て、兩陣互に鎬を削り、爰を先途と戰ふ中、敵の勇將蟹江才藏、陣頭に踊出で、味方の諸軍を手玉のごとく、打付け投付け驅廻る、其勢ひに

詫ぶるも涙聞く涙、栅「ア、勿體ない事おつしやつて下さりますな、嫁とは名計是迄に、お宮仕へもする事か、逆樣事を見せまする、不孝の罪が恐ろしい。とはいふ物の味氣ない、二世と契りし我が夫の、最期の場所に居ながらも、止める事さへ情ない、いとし可愛の千石迄、人も多いに祖父樣の、お手にかけうと親の身で、連れて來事は何事ぞ」と、歎けば遉利休も、恩愛死別の憂涙二つの首を見つ見せつ、取亂したる三人が、涙の雨に水嵩の、いとゞ增りて淀川の、堤も崩るゝ如くなり。利休漸く涙を押へ、宗左「悴が忠義を立させんと、信義を失ふ我が計ひ、天地を見拔く久吉殿、賜も有るべきに、小袖にかへて遣はすと、心得ぬ庭の居石、其上猶も不審なるは、金葉集に載せられし相撲が詠歌、菖蒲にも、あらぬ眞菰を引かけしと、引きぞ煩ふ賴政が、深意を取るは千石が、最期を花によそへし謎。躮が子袖千石と、心を込めし我への賜、今こそ思ひ當つたり」と悟るも遉久吉の、名智を感ずる計りなり。栅は膝摺寄せ、栅「スリヤ身代りといふ事を」眞弓「そんなら孫の千石が、身代りに立たのも、水の泡になりますかいなう」宗左「ヤアかねがね、敵を惠む寛仁大度、猶も願ひを立んと思はゞ、此利休が皺腹一つ、必ず止な」と指添を、既に拔かんとする所、取付き歎き止むる二人、放せ〳〵と爭ひの、折もこそあれ一間より、久吉「ヤア〳〵松田宗左衛門利休殿、狼狽ての犬死なるか、早まられな」と聲をかけ、障子をさつと眞柴久吉、し

春長公の御自服とも思されて、お詰有らば拙者が悦び」宗左「スリヤ其石を某へ」久吉「いかにも小袖代の小袖石、菖蒲にも、あらぬ眞菰を引かけし、かりの淀野の、忘られぬかな。ヲヽさらばさらば」と一禮し、從者引連れ久吉は、本陣さして歸らるゝ。跡見送つて宗左衞門、ほつと吐息も突詰し、女心の欄は、何思ひけん表の方、馳出す戸口立切る利休、宗左「ヤレ待て女、音壽丸が身代りに、二人が中の躮を殺し、夫が最期の忠義も立ち、嘸本望で有らうな」と、聞て悔り、槇「ムウそんなら此子を初めから、あなたの孫といふ事を」宗左「ヲヽ十六年が其間、對面せざる我が躮、たとへ幾年經る迚も、骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か。音壽丸に出立たせ、連れ來りし稚子の、面ざし目元鼻筋迄、悴に其儘生寫し、其時孫とは知つたるぞや。とは云ひながら、現在の、祖父が手にかけ一刀の、下に消行く不便さを、こらふる心の四苦八苦、コリヤ推量せよ」と大聲上げ、取亂したる溜涙、眠れる如き死首を、右と左に打守り、宗左「コリヤ悴、久々にてよく來たなア。十六年が夢の內、忠孝全き親子が最期、ヲヽ出かしをつた」と一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有りがた涙欄が、袖に露置く嘆言、槇「さうしたあなたのお心と、知らで恨みし不孝の罪、お赦しなされて下さりませ」眞弓「アヽ其詫言は此母が、云はねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死ぬるのを、夫と白髮の身の因果、憎い者ぢやとさけしんで、給もるなやいの」と姑が、

身に餘り、有難涙柵が、夫の首を抱上げ「なき我夫も諸共に、命のお詫」とさし付られ、遉剛氣の利休も、親子の輪廻に引かされて、撓む心を取直し、じりよ〳〵と付廻す、地獄の呵嘖三悪道、シヤ面倒なと突退け蹴退け、エイと一聲稚首、水もたまらず打落せば、二人はわつと泣倒れ、正體もなく伏沈む。宗左「主殺しの大罪報いも早き此死ざま、いで久吉の本陣へ」と、駈出す裾を止むる嫁、はつたと蹴飛し駈行く向ふへ許多の軍卒、高挑灯に威風を照し、靜々入來る眞柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄らねば宗左衛門、遙退つて平伏し、「コハ存じ寄らざる公の御入來、只今陣所へ推參の所、願ふてもなき對顔」と、敬ひ深く相述れば、久吉莞爾と打笑て、久吉「逆賊光秀が一子晉壽丸、足下扶助致さる由、家臣森尾が密事の注進、急ぎ討手と申すも餘り仰々敷く、久吉密に向うたり。いかに〳〵」と嚴然たる、詞に猶も恐入り、宗左「ハ、、計らず手に入る武智が悴、討取たるは某が、信義を忘れぬ兼ての交り、イザ御改め下さるべし」と、血汐を清め差出せば、久吉とつくと實檢有り、久吉「父光秀も此如く、やがて討取る主君の怨敵。とは云物の稚者、不便の最期遂たるよな。イヤナニ宗左衛門、云ば小兒の此切首、梟木にさらすにも及ぶまじ、由緣の方へ、サ葬り召され。御邊への恩賞は、風雅を好める別業へ、思ひ寄つたる寸志の一品、それ〳〵者共、早是へ」と仰の下に雜兵共、庭にどつさり一つの居石、久吉「何と宗左見られしか、亡君

手にかけうとは胴欲な、どうぞお命助ける樣、思案仕變て下さりませ」と、いへども更に答へなく、おのが好める薄茶の手前。稚子は座をしめて、音壽「おりや侍の子ぢやによつて何ともない、早う殺して下され」と云ひ放したる健氣さを、聞くに眞弓は堪兼て、眞弓「アヽ遉は武士の育から、聞分よい程尚不便な。コレいぢらしうはござらぬか、敵と味方と分登る、道は二つにかはれ共、同じ雲井に照る月の、分隔なき恩愛と、情の道を辨へて、どうぞ命を助るやう、思案して給べ我夫」と詞を盡し理を責て、涙ながらに泣詑る。山手は修羅の攻鼓、時しも遙に谺して、「松田太郎左衞門政道を、森尾義晴討取たり」と聞くより思はずすつくと立ち、「スリヤ倅宗太郎は、早討死を遂しとな、此上は生け置て詮なき音壽、此世の暇取らせん」と、解く縛め悦んで、手そゝぶりする有樣を、見るに心は弱れ共、四海の怨敵根を斷て、枯す枝葉と拔放す。「なう痛はしや」と支ふる眞弓寄るを寄せじと引戻し、爭ふ折も棚が、背に夫の切首を、結ぶ妹脊の別れ道、脛もあらはにかけ戻り、此體見るより、稚子を後に圍ひ、「マア待て」と、言はせも立てず聲荒らげ、宗左「ヤア此期に及び聞く事ない、悴討死せし上は、天王山を取切られ、光秀が敗軍も目下、妨げせずとそこ退け」と、尖き刀振翳す、其手に取付聲震はし、眞弓「コレ親父殿、慈悲も情も辨へながら、初て逢た嫁の思はく、生としいける身ではなし、先立老木若木の苔、どうぞ助けて進ぜて」と、涙に誠姑が、情の詞

は返つて恨むぞ」と、言ふより早く持たる刀、腹にがはと突立れば、なう悲しやと取縋り、歎く女房を取て引据ゑ、太郎「サア森尾、名もなき士卒の手に掛んより、武士の情に我首を、受取くれよ」とさし付れば、春久「ハヽ世の有樣とは言ひながら、かばかり惜き弓取も、主家の惡事は其身の不幸、殘念至極」と義晴が、是非も涙に立廻れば、太郎「ヤア愚か〳〵、死に臨むは勇者の本義、骸は廣野に曝す共、名は千歳に留まることそ、死しての悅び此上なし、早く〳〵」と唱名の、聲は此世の別かと、身を揉む妻を動かさず、膝に引敷く强氣の手負。義晴いざと潔き、勇者の最期あへなくも、首は前にぞ落にけり。わつと計に柵は、其儘死骸にいだき付き、聲も惜まず泣叫ぶ。心を察し諸袖を、絞るも血筋恩愛の、涙に變りなかりける。義晴は涙を拂ひ、義晴「ヤア〳〵妹、歎いて返らぬ松田が最期、遺言守るは音壽が身の上。又此首はそち持歸り、佛事もよきに」と詞の中、麓の方にゐい〳〵聲、響き靡ける兩陣の、入亂れたる鬨の聲、身にぞこたふる柵が、涙ながらに亡夫の、しるしの筐上帶に、包むも涙雨やさめ、ふり行末の末迄も、思ひつゞけし敵味方、兄の忠臣妹が、貞心くもり泣く〳〵麓の方へ 三重 辿り行く。短夜の、風吹拂ふ庭の面、隈なき月も哀添へ、涙の露かいたいけに、無慚なるかや稚子の、目は泣はらし袖摺の、其松が枝に絡まるゝ、妻の眞弓は差寄て、眞弓「ナウ利休殿、尤武智光秀といふ逆賊の子とは云ながら、我子の爲にお主の若殿、

かけず、太郎「ヤア義晴何を猶豫、内證の縁は縁、親子兄弟敵々と、鎬を削るは武門の常、早く勝負を決せよ」と、云せも果ず嫣乎と笑ひ、義晴「死人同前の政道、我相手には不足なり、光秀が先途を見届け死る共遲かるまじ、妹が止るを幸ひ、此場を早く退け」と聞くよりくわつと急立ち、太郎「ヤア奇怪なる一言、弓矢取ては誰に恥べき事や有らん、女房が兄とは云さぬ、首討取て修羅の奴となしくれんに、死人同前とは案外なり」と居丈高、義晴「イヤモ如何樣に陳ずるとも、死色を顯す汝が骨格、我に討れん心の覺悟、死人と云しが誤りか」と、明察違はぬ一言は、胸に磐石現とも、心は暗の棡が、聲も涙に掻曇り、椢「兄樣のあの心なら、どの樣に思はしやんしても、所詮死れぬお前の命、どうぞ死ずに濟む事なら、千年も萬年も長生して、二人の中の、サア二人が中に預かつた、主人のお種音壽樣の、行末も御無事な樣に、思案して下さりませ、コレ申し、夫婦と成て以來に願ひといふは是一つ、聞届けて給べ我夫」と、妹が歎き追にも、血脈の糸の亂れ口、涙呑込む義晴が、心の内ぞ切なけれ。何思ひけん太郎左衞門、鎧脱捨てどつかと坐し、太郎「實や名將の下に弱兵なしと、適眼力森尾義晴、主家の無道を見限りて、死出三途の先陣と、覺悟極めし心は鐵石、死後に賴むは此女。又是迄音信せざれ共、實父松田利休殿へ預置たる彼若殿、心を添へてよき樣に、賴置は貴殿一人。最早浮世に望なし急ぎ首討ち我存心、立さしくるゝも武士の情、猶豫

必ず恨有るまじく候」と、讀みも終ず立上り、柵「こりや斯しては居られぬわいなう。夫の最期は此曉、若殿の御身の程、奥へ踏込み取返さうか、イヤ〳〵、あれ〳〵あの鐘は八つの鐘、天王山へは一里の餘、夫の命も助けたし、こりやマアどうせう〳〵」と、主と夫の身の上を、我身一人に柵が、立たり居たり詮方も、涙ながらに氣を取直し、柵「何にもせよ是より直に天王山へ駈付けて、夫に一言、さうぢや〳〵」と帯引締め、常には弱き女氣も、夫に立る貞心の、曇らぬ鏡照る月に、照す道筋一散に、仆つ轉びつ慕ひ行く。山は血汐の唐紅、敵も味方も入亂れ、戰ひ挑む其中に、森尾松田が雌雄の爭ひ、人混もせずはつし〳〵、切結びたる電光の、刃の光飛鳥のごとく、鎬を削る其折しも、夫の生死如何ぞと、氣は張弓の女房柵、武家の育の甲斐々々しく、夫を思ふ一心に、木の根岩角獸ひなく、登る嶮岨も力草、足踏しめて難なくも、此方の岡に攀登り、夫と見るより分入て、柵「マア〳〵待て」も、身を惜まず支ふる女房突退けて、猶も付入る太郎左衛門、互に劣らぬ勇將猛將、中にうろ〳〵詮方も、渚の小舟柵が、浪に漂ふ其風情、心も切に有合ふ楯、切結びたる白刃のしづ、しつかとゞめ、柵「マア〳〵待て下さんせ、コレ兄樣茂介殿、必ず早まつて下さんすな。元より知た敵味方、討ちうたるゝは武士の身の、常とは知て居ますれど、相手も多いに姫同士、切つはつゝの爭ひを、何と見捨て置かれうぞ、思止つて〳〵」と、歎き喞つを耳にも

ず、獵人さへ懐へ入る鳥は助けるもの、縱令此身は去られても、夫に立る心の潔白、女でこそあれ松田が女房、主人の若殿滅多にお首は得渡さぬ。斯いふ内に片時も、置きます事はなりませぬ。申し若殿樣、いざさせ給へ」と立寄るを、突退け〳〵音壽丸小脇に引抱きはつたと睨み、宗左「ヤア龍の腮にかゝりし小悴、連歸らんとは叶はぬ事、惡く妨げひろぐや否や、身の爲にならぬがや」操「ヲヽ元より夫に去られし此身、生て詮なき我命、ちつ共厭はぬ〳〵」と、又立かゝるを「シャ面倒な」と眞の當、吽と倒るゝ其隙に、奧の間さして駈入たり。跡には一人操が、苦痛堪へて起直り　操「チエヽ胴欲とも慘い共、何に讐へん舅君、何辨へも七つ子の、首を敵に渡さうとは、心は鬼か蛇かいなう。たとへ此身はひし〳〵はに成る迚も、取返さいで置べきか」と心を配る緣先に、落散る一書は夫の手跡、操殿へ光高より。「スリヤ最前の文の中に封込めたる此一書、心ならず」と封押切り。「書殘す一書の事。ヤア〳〵そんなら夫太郎左衛門殿は、討死の覺悟で有たか。ハア何にもせよ」と又取上げ、操「ナニ〳〵今度の合戰、主君光秀公主殺しといふ惡名、其罪遁るゝ事有るまじく覺え候故、其方を賴み親人へ若殿の儀くれ〴〵相賴む事に候、又々明朝の戰ひに向ひ候敵は、其方が兄森尾茂助春久に候よし、元より討死の覺悟に候へば我等が首は春久へ遣し候。なれ共妹の緣につれ用捨も候はゞ、武門の中恥づべき事に候へば、是非なく暇遣し候段、

がと氣遣ふ嫁。舅は猶も眉を顰め、つぶ〳〵讀むも口の中、卷納めて嫣乎と笑ひ、宗左「何事ならんと思ひしに、少し計は侍臭い所も有り出かす〳〵」柵「そんなら夫のお願ひと申ますは」宗左「成程大切の密事、其方は知るまい〳〵。悴が我への願ひといふは、コヽ此小兒。光秀此度當山崎に於て合戰の挑むといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ぞ是を赦さん、然らば十が九つ負軍と押計つたる悴太郎、去によつて光秀が一子音壽、我に養育を賴み、成長の後は出家ともなしくれよとの願書、又柵事は敵方森尾茂助が妹に候へば、是も親が手より返遣しくれよと有る悴が文面」と聞て恟り柵は、膝摺寄つて、柵「ムヽスリヤ主君の若殿お預申さん其爲に、お詫の使と、一には私が身の上兄樣へ返してくれとは何の事、さういふ事とは露知らず、舅御樣へお詫して、嫁よ如何せい斯せいの、お詞受て歸りなば、夫の悅び此身の手柄と悅んでゐるものを、科もない身を去ふとは聞えぬ夫の心や」と、口說き歎くぞ道理なり。宗左「ハア扨何も歎くにや及ばぬ、此宗左衞門も元は武士、亂れたる世を遁れ、心を澄す茶道の樂しみ、折々は久吉殿の招に預り咄の伽、弓も引き方眞柴へ心通はす某、大惡無道の光秀が種と有れば、願うてもないよき得物、首打放し久吉公へ獻ずるならば嘸悅び、ハテ飛んで火に入る夏の蟲とは是ならん」と、舅の一言柵が、聞くより又も二度恟り、柵「ほんに〳〵親子とて餘りな情知ら

は歴とした侍、名も改て松田太郎左衞門と申まして、夫は〳〵遖の武士、どうぞ是迄の事は川へ流し、元の親子に」眞弓「ヲヽそりや云しやれいても知れた事、元より氣に違うて家出したと云ふでもなし、生れ付ての力強、草深い住居を嫌ひ、我と我手に家出した宗太郎、わしは明暮焦れて居ます。そして連てわせたは、夫婦の中に出來た子か。マア〳〵此方へ」と嬉しさの、子には目のなき母親が、悦ぶ中へ宗左衞門、刀片手に歩出で、宗左「お婆何をべり〳〵お言やるぞ、親を見捨た不孝の躮、夫に連添此女郎、嫁なんぞとは穢らはしい、早立ち歸れ」とつかふどに、言ふを押へて、眞弓「アヽコレ夫は一途な思ひ樣、毎日々々壁訴訟、願ひの折も幸と、初めて逢うた嫁の手前、どうぞ了簡し中直りして下され」といふも涙の種ならん。宗左「エヽ又してもく役に立ぬ悴が訴訟聞きたくないぞ。よい年をして女房去るも世間の笑、暇の代りぢや向後物は言はんず、早く奥へお行きやれ」と、常の氣質の情剛に、詞はなくてしを〳〵と、心殘して立て入る。棡は氣の毒の、中に願ひも言ひ兼て、俄に作る輕薄笑、棡「ホヽヽほんにまあよしない事から御夫婦のお爭ひ、もうお腹立は重々の御尤ぢやが、どうぞ夫の願ひ、則ち此子は主人と仰ぐ光秀公の御公達音壽丸樣、夫に付ての御訴訟」と何か樣子は白紙に、書き認めし願ひの一書、舅の前にさし置けば、遉骨肉同胞の、我子の手跡と溢々ながら、手に取上て押開けば、樣子いか

甲斐しく、忠義一途の女氣に、主君の若を伴ひて、定めなく〳〵短夜に、心せかれて辿り行く。

同十二日の段

誰を乞ふ鳴くや梢に唐衣、ほつてふ蟬の音を友と、世を厭うたる浪人の、風雅を好む一構、谷の流も水無月の、空半なる夕暮時、遠寺の鐘のかう〳〵と、兼ての願ひあり磯海、深き思ひに柵が、緣に寄邊の舅の住家、そこ爰と辿りくる〳〵長暇、稚子連て夜の道、漸尋あたりにも、家居なければ爰ならんと、柴の軒端に佇みて、柵「イヤなう音壽樣、夫松田太郎左衛門殿の差圖を請て來る事は來ても、つひに是迄音信もせぬ親御の所、どうやら敷居が高うなり、閃にくう思ひます」と、言へば音壽が打點頭き、音壽「そなたが得閃らずば俺から先へ閃つてやらう」と、何の頑是も上口、「アヽコレ申」をしほにして、閃る物音何やらんと、納戸を出る妻の眞弓、顏見合して柵が、手をもぢ〳〵と、柵「ホヽヽヽほんに私とした事が、いかに舅君の所ぢや迚、案內なしに不作法千萬、お赦しなされて下さりませ」と、いへど此方は不審顏、眞弓「夜に入て若い女中の子供をつれ、舅の所へ來たとは、此母は覺えはござらぬ」柵「成程々々、委細の譯を申さねばさう思し召すも理りながら、私事は十三の時家出致されました、御子息宗太郎殿の女房柵と申者、夫も今

眠り。欄「チヽ道理でございます、大切の密事を受けた俄の旅立、若や敵の間者に出合ひ、御身の御難儀有りもやせんと、心は千々に誰有らう、江州丹州兩國の御主、今では四海の御大將、惟任將軍の御公達、あまたの從者に引かへて、從ふ者は此欄、枝柱とも思召し、御心根がおいとほしい。是といふのも父上の、道に背きし御企、たとへ望は叶うても、勿體ない御主君の、春長樣に刃を合し、主殺しの大罪と、世の口の端に情ない。夫に連れたる我夫も、倶に汚名を下すかと、思へば悲しい〳〵」と、人目なければ聲上げて、わつと計に泣沈む、心ぞ思ひやられたり。立戻りたる赤山が、夫と見るより相圖の呼子、友呼ぶ千鳥はら〳〵と、顯れ出し以前の組子、與三「女遣らぬ」と追取卷く。驚きながら流石の欄、音壽を圍うてすつくと立ち、欄「ヤア心得ぬ人々の擧動、何者なるぞ」と咎むれば、赤山は大口明き、與三「ヤア何者とは舌長し、主殺しの光秀が一子音壽丸、軍の幸先久吉公へ差出す、早く渡せ」と罵つたり。欄「ホヽヽ事可笑しや、光秀公のお内に一、人も知たる松田太郎左衞門が女房欄、主なしの久吉殿、夫に隨ふそち達が、及ばぬ事を」と言はせも立ず、「ソレ者共」と赤山が、下知に從ひ一度に切てかゝるを事ともせず、右と左に薙立れば、口程にもなき雜人原、むら〳〵ぱつと迯散つたり。透を窺ひ後より、切込む赤山さそくの欄、ひらりとかはせば赤山が、首は前にぞ落ちにけり。欄「サア〳〵此隙に音壽樣、此場を早う」と甲斐

に哀を殘すとは、知らず知られぬ敵味方、睨み別るゝ二人の勇者、二世をかための別れの涙、かかれとてしも烏羽玉の、其黑髮をあへなくも、切拂うたる尼が崎、菩提の種と夕顏の、軒にきらめく千生瓢簞、駒の斷迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より、追ひ追ひ入來る數萬の兵船、威風凛々凛然たる、眞柴が武名假名書に、うつす繪本の太功記と、末の世までも 三重殘しけり。

同十一日の段

與三「家來共やい、彌々明日は山崎にて晴軍、時に拔目ないは久吉殿、敵方の間者、又怪しき曲者も有らんかと、此赤山與三兵衛へ密々の申付、汝等もぬかりなく、若や怪しき者も有らば、男女に限らず搦取つて本陣へ差出せよ、褒美は急度後日に御沙汰、必ずぬかるな合點か」と、示し合せて主從は、左右へこそは別れ行く。身は世を忍ぶ簑笠に、やつす姿も柵が、夫の詞守立し、主君の種の音壽丸、いたはり傅き參らせて、心ならずも夜の道、流に傳ふ淀堤、竝木の蔭に立休らひ、播「ナウ和子樣の西に旗の手の、月に映じてきらめくは、山崎の御本陣、父上の御座所、妾が夫政道殿も主君の御供、翌は早々光秀樣に御對面、お嬉しうござりますかへ」音「ヲ、嬉しい〱、早う父樣に逢ひたいけれど、どうやら眠たい〱」と、詞の内に、ふら〱

つたと睨み、光秀「ヤア珍らしゝ眞柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導渡してくれん、觀念せよ」と詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の、子故に手疵屈せぬ老女、さつき「なう久吉樣、我子に代る此母も、天命遁れぬ引そぎ鑓、作りし罪の萬分一、亡ぶる事も有らうかと、思餘つた此最期。武智が母は逆磔に、かゝつて無慙の死を遂しと、末世の記録に殘して給べ。それもやつぱり悴めが、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に殘らんより、孫と一緒に死出三途、ハアわたしもお供致まする、いづれもさらば。おさらば」と、未練殘さぬ武士の、花も實も有る此世の別れ、今ぞ果なく成りにけり。操の前も初菊も、更に詞も出でばこそ、あへなき骸を押動かし、天にあこがれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき。哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打向ひ、久吉「倶に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍、今此所で討取ては、義有て勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が、軍功をしらさん爲、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし、がいかに〳〵」光秀「ヲヽ、遉の久吉よくいうたり、我も惟任將軍と勅許を請し身の本懷、一先都に立歸り、京洛中の者共へ、地子を赦すも母への追善、互の運は天王山、洞が峠に陣所を構へ、只一戰にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ」久吉「ホヽヽヽ、何さ〳〵、たとへ項羽が勇あり共、我又孫呉が祕術をふるひ、千變萬化にかけ惱まし、勝鬨上るは瞬く内」と久吉が、詞は搖がぬ大磐石、忽ち廻り小栗栖の、土

の首途の其時にも、母樣今日の初陣に、適高名手柄して、父上や祖母樣に譽らるゝのが樂しみと、につと笑うた其顏が、わしや幻にちら付いて、得忘れぬ」と口說立て、口說立れば初菊も、「ほんに思へば此身程、はかない者が世に有らうか。とけてあふ夜のきぬ〴〵も、永き名殘の云號、二世を結ぶの枕さへ、かはす間もなう此樣な、悲しい別れをする事は、マどうした罪か情ない。わたしも一所に殺してたべ、死たいわいな」と身を悶え、互に手に手を取かはし名殘淚の暇乞。見るに目もくれ心消え、母も老母も聲を上げ、わつと計に取亂せば、道勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の紲に締め付けられ、堪へ兼てはら〳〵〳〵、雨か淚の汐境、浪立騷ぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲喧く、手に取る如く聞ゆれば、光秀聞より突立上り、光秀「アノ物音は敵か味方か勝利如何に」と庭先の、すね木の松が枝踏しめ〳〵よぢ登り、眼下の村手を屹度見下し、光秀「和田の御崎の弓手より、追々つゞく數多の兵船、間近く立たる魚鱗の備、千生瓢の馬印は、疑もなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃延ひ、手勢引具し光秀を、討取る術と覺えたり」といふより早くひらりと飛下り、「草履摑の猿面冠者、いで一挫ぎ」と身繕ひ、勢ひ込んでかけ出せば、久吉「ヤア〳〵武智光秀暫く待て、眞柴筑前守久吉對面せん」と呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、蹈戻つては

眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清是に有り、逆賊武智が小童共目に物見せてくれんずと、いふより早く太刀抜かざし、四角八面に切立てられ、瞬く間に味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念ながらも只一騎、立歸つて候」と息繼ぎ、あへず物語れば、光秀怒の髪逆立て、光秀「ヤア云甲斐なき味方の奴原。シテ四王天田島頭は」十次「さん候、四王天は、目ざすは久吉一人と、昨朝よりの一騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥にそれと承はらず。親人の御身の上心にかゝり候故、未練にも敵を切抜け、是迄落延歸りしぞや。此所に御座有ては危ふし〳〵、一時も早く本國へ、引取り給へ、サ早く〳〵」と、深手を屈せず爺親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、さつき「アレあれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極惡人の悴めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子は不便にないか、可愛とは思はぬかやい。脩が心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すは何の因果ぞ」と、せぐり苦しき老の身の、聲聞き付けて十次郎、十次「ヤアそんなら祖母樣には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顏が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母樣、初菊殿名殘惜や」と手を取て、妹脊の別れ愛著の、道に引るゝいぢらしさ。母は涙に正體なく、操「討死するも武士の慣といへど、情ない、十八年の春秋を刃の中に人と成り、いつ樂しみの隙もなう弓矢の道に日をゆだね、今朝

光秀は聲あらゝげ、光秀「ヤア猪口ざいな諫言立、無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我が諫を用ひずして、神社佛閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門のならひ天下の爲、討取つたるは我器量。武王は殷の紂王を討ち、北條義時は帝を流し奉る、和漢俱に無道の君を弑するは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、退り居らう」と光秀が、一心變ぜぬ勇氣の眼色、取付く島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫ぬく金鼓の響、あはやと見やる表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖に蹌ほひ〳〵、立歸つたる武智が一子、庭先に大息つき、十次「親人是におはするや」といふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、娘は傍に走寄り、「なう痛はしや十次郎樣、ばゝ樣といひお前迄、此有樣は情ない。お心慥に持つて給べやいの〳〵」と取付いて、介抱如才泣く計。光秀わざと聲荒らげ、光秀「ヤア不覺なり十次郎、仔細は何と、樣子はいかに、具に語れ」と呼はれは、はつと心を取直し、十次「親人の差圖に任せ、手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所をかため、今や歸國と相待つ所に、敵はそれ共白浪の、櫓を押切て陸地に漕付け、追ひ追ひ都へ馳登る、眞柴の軍勢ござんなれと、鬨をつくつて味方の軍兵、縱横無盡になぎ立つれば、不意を打たれて敵は廢亡、狼狽騷ぐを追立て、追詰め、爰を先途と戰ふ內、後の方より大音上げ、

一、只一討と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹を引そぎ鑓、小田の蛙の啼音をば、止めて敵に悟られじと、差足拔足窺ひ寄り、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の鑓先に、わつと玉ぎる女の泣聲、合點行かずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒。光秀「ヤアこは母人か、しなしたり。殘念至極」と計にて、遉の武智も仰天し、只忙然たる計なり。聲聞付けて駈出る操、初菊諸共走出で「ナウ母樣か情ない、此有樣は何事」と、縋り歎けば目を見開き、さつき「歎くまい歎くまい、內大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類、斯成果つるは理の當然。系圖正しき我家を、逆賊非道の名に穢す、不孝者共惡人共、譬がたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲。主君を討つて高名顏、天子將軍に成た迚、野末の小家の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立ば、盛相飯の切米も、百萬石に優るぞや。脩が心只一つで、驗は目前是を見よ。武士の命を斷つ、刃も多いに此樣な、引そぎ竹の猪突鑓、主を殺した天罰の、報は親にも此通り」と、鑓の穗先に手をかけて、抉り苦しむ氣丈の手負。妻は涙に咽返り、操「コレ見給へ光秀殿、軍の首途にくれ〴〵も、お諫め申た其時に、思ひ止つて給はらば、斯した歎きは有まいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、善心に立歸ると、たつた一言聞かして給べ拜むわいの」と手を合し、諫めつ泣つ一筋に、夫

是が別れの盃かと、悲しさ隱す笑ひ顏、「隨分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」と、跡は得いはず喰締る、胸は八千代の玉椿、散りて果なき心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの緒、しぼりかねたる計なり。哀れを爰に吹送る、風が持てくる攻太鼓、氣を取り直し突立上り、十次「いづれもさらば」と云ひ捨てて、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らずなりにけり。「ナウ悲しや」と泣入る初菊、母も操も顏見合せ、操「ばゝ樣、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざ〳〵殺しにやりました」さつき「ナウ初菊、十次郎が討死の出陣とは知りながら、なま中止て主殺しの憂死恥を曝さうより、健氣な討死させん爲、祝言によそへて盃をさしたのは、暇乞やら二つには、心殘りのないやうと、思ひ餘つた三々九度、ばゝが心のせつなさを、推量仕や」と計にて、始めて明す老母の節義。聞く初菊も母親も、一度にどうと伏まろび、前後不覺に泣叫ぶ。襖押明け何氣なう、つか〳〵出る以前の旅僧、僧實は久吉「コレ〳〵かみ樣、風呂の湯が沸きました、どなたぞおはいりなされませ」と、いふに此方は泣顏隱し、さつき「ヲヽ夫は御苦勞ながら、年寄に新湯は毒、跡は若い女子共、マアお先へ御出家から」僧實は久吉「いかさま湯の辭儀は水とやら、左樣ならば御遠慮なし、お先へ參る」と立上れば、三人は涙押包み、奥の佛間と湯殿口、入るや月漏る片庇。爰にかり取る眞柴垣、夕顏棚の此方より、顯れ出たる武智光秀、必定久吉此内に、忍び居るこそ究竟

二つには又初菊殿、まだ祝言の盃を、せぬが互の身の仕合せ、わしが事は思切り、他家へ縁付して下され」討死と聞くならば、さこそ歎かん不便やと、孝と戀との思の海、隔つ一間に初菊が、立聞涙轉出で、わつと計に泣出せば、はつと驚き口に手を當て、十次「アヽコレ〳〵聲が高い初菊殿、扨は樣子を」初菊「アイ殘らず聞いて居りました、夫の討死遊ばすを、妻が知らいで何とせう。二世も三世も女夫ぢやと、思うてゐるに情ない、盃せぬが仕合せとは、餘り聞えぬ光慶樣、祝言さへも濟ぬ内、討死とは曲がない。わしや何ぼうでも殺しはせぬ、思ひ止つて給はれ」と、縋り歎けば、十次「アヽコレ此方も武士の娘ぢやないか、十次郎が討死は兼ての覺悟、祖母樣に泣顔見せ、もし悟られたら未來永々縁切るぞや」初菊「エヽ」十次「サアとかういふ内時刻が延びる、其鎧櫃爰へ〳〵」初菊「アイ〳〵」十次「サ早う、時延る程不覺の元、聞分けない」と呵られて、「いとしい夫が討死の、首途の物具付るのが、どう急がるゝものぞいの」と、泣く〳〵取出す緋縅の、鎧の袖に降かゝる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪の、婆長柄の銚子蝶花形、首途を祝ふ熨斗昆布、結ぶは親と小手脚當、六具固むる三々九度、此世の縁や割小札、猪首に著なす鍬形の、あたり眩ゆき出立は、爽なりし其骨柄、操「ヲヽ適武者振勇ましゝ、高名手柄を見る樣な、祝言と出陣を一緒の盃、サア〳〵早うと、目出たい〳〵嫁御寮」と、悦ぶ程猶彌増す名殘、こんな殿御を持ながら

次郎光慶樣、後室樣に御願ひの筋有りと、只今是へ御越」と、いふ間程なく靜々と、家來に持せし鎧櫃、舁入させて打通り、十次「コリヤ〳〵者共、其方達に用事はない、陣所へ早く」と追つ立てやり、威儀を正して兩手をつき、十次「母樣を以て御願ひ申せし出陣、御聞居下されなば、武士の本意」と十次郎思ひ込でぞ願ひける。老母は見るより機嫌顏、さつき「ヲヽ珍らしい十次郎、出陣の願ひとな。悴を見限り此所へ身退きしに、叮寧な願ひの筋、最前嫁女に詳しう聞きました。迚も出陣仕やるなら、祖母が願ひは此初菊、今宵此家で祝言の、盃仕てから門出仕や。何と嫁女嬉しいか」と老の詞に初菊は、飛立計り氣もいそ〳〵、心の悦び穗に出る、顏は上氣の夏楓、色も媚く計りなり。只默然と十次郎、今日初陣に討死と、覺悟極めし此體、お暇乞に參りしと、知らせ給はぬ悲しやと、涙呑込み忍び泣。操の前も立上がり、「祖母樣の御機嫌の變らぬ內に固の盃、さつき「ヲヽそれ、孫も大かた心ぜき、操は九獻の用意仕や、十次郎が初陣の、鎧の役はすぐに花嫁」三國一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連れて、三人は奧の一間へ入りにけり。殘る蕾の花一つ、水上かねし風情にて、思案投首萎るゝ計り。漸涙押止め、十次「母樣も祖母樣にも、是今生の暇乞、此身の願ひ叶うたれば、思置く事更になし。十八年が其間、御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思召し分けられて、さき立つ不孝は赦して給べ。

道の軍の評定、聞くが厭さの此住居、が又孫を譽るではなけれ共、非道な悴光秀が子に、十次郎といふ武士が、生れて來るとは是も因緣、悔んで返らず、戰場の事聞きたうない、ア厭々情なの浮世や」と無量の思ひ百八の數珠爪繰て居たりけり。折節表へ草鞋がけ、風呂敷背にいつきせき、蛙飛込む道の邊の、淸水結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人、門口に立ち休らひ、僧實は久吉「諸國修行の一人旅、近頃申兼たれど、御宿の報謝に預りたし、押し付けながら」と云入れる、聲を老母が聞取つて、さつき「見苦しうござりますれど、お心置きなう御一宿」僧實は久吉「夫は千萬忝い、左樣ならば御遠慮なしに、御免々々」とあがり口腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かくれば、僧實は久吉「ア、勿體ない〳〵、搆うて下さりますな。旅仕付けた坊主の氣散じ、木納屋の隅でもついころり、蚊屋も蒲團も入ませぬ、お心遣ひ御無用」と、詞半へ表口、人目を忍び只一騎、窺ひ立聞く武智光秀、心得がたき旅僧と、生垣押分け差覗き、思はず見合す母の顏。老母は何か心に點き、さつき「ヲ、わしとした事が心の付かぬ、コレ御出家樣、此板圍ひが則ち風呂場、水は幸ひ汲んで有り、ついほや〳〵と燃して、暑い時分ぢや行水して休んで下さりませ、婆も跡で相伴しませう」僧實は久吉「ア、イヤ夫には及びませねど、相伴と有れば沸しませう。そんなら御免なされませ」と、包引提げ氣散じに、湯殿をさして入にける。味方の軍卒兩手をつき、軍卒「御子息十

ら悴光秀、當月二日本能寺にて、主君を害せし無法者、同じ館に膝並ぶるも、先祖の恥辱身の汚と、館を捨てて此在所へ、身退きし此婆を、見舞とはをこがましい。善にもせよ悪にもせよ、夫に付くが女の道、操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたは又孫の十次郎光慶が嫁でないか。生死分らぬ戰場へ赴く夫を打捨てて、浮世を捨てた姑に、孝行盡すは道が違ふ。妻城に留まつて、留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦暮しの樂しみには、夕顔棚の下涼捨つべき物は弓矢ぞ」と、云ひ放したる老女の一徹、跡は詞もなかりけり。常の氣質と逆はず、操「如何樣後室樣の仰やる通り、此樣に只お一人ござつたら、何もかも氣散じで、マア第一はお身の養生、今から私も初菊も、後室樣のお傍に居て、飯も焚たり茶も沸し、お宮仕へをせうぞいの」と、有合ふ前垂襠の、上に引締め茶釜の傍、端香の籠る姑の、しぶ〳〵機嫌を取兼る、娘心に初菊も、まどう濟む事か濁り非の、深き奇緣の釣瓶繩、水汲み上げんと立寄れば、さつき「コレ〳〵嫁達、シテ孫十次郎は城に殘つて居召さるか」操「さればでござります、十次郎が願ひには、何卒けふの軍に、高名手柄が願はしたいと、父上迄は願ひしかど、婆樣のお赦しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれと、くれ〴〵の願ひ故餘り健氣さ、祖母樣に御機嫌の程いかゞぞと、窺ひに參りました」と語る內、老母は淚をはら〳〵と流し、さつき「チヽ煩さの嫁が物語り、主を討たる逆賊の邪非

同十日の段

さつき「南無妙法蓮華經〱〱〱」御法の聲も媚きし尼が崎の片邊、誰住む家とゆふ顔も、おのが儘なる軒の褄、四邊近所の百姓共、茶碗片手に高咄し、百姓「なう婆樣、こな樣も見た所が、上方で歷々のお衆さうなが、何の爲に面白うもない此在所へはござつたぞいの」さつき「ア、コレ〱甚作、そりや言やんな、京の町は武智といふ惡人が、春長樣を殺して大騷動、大かた又下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて來て、武智と是非に一合戰、なけりや濟ぬはいなう」百姓「そんなら年寄はうか〱、京の町には居られぬ、兎角危げのない樣にこんな在所へ來てゐるか、大出來々々々。時に近付がてら妙見講を勤るとはよい手廻し、大な馳走に逢ひました。是から隨分お互にお心安う致しませう。サア〱逝う」と口々に、云たい事をたくしかけ、喋り廻つて歸りける。老母はつど〱門送り、庭の千草に打水も、たもつ葉毎に風かをる、軒を日當に來る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家來を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺ふ切戸の庭先に、花に心を養ふ老女、夫と見るより手をつかへ、操「後室樣の見舞として、只今參上いたせし」と、慇懃に相述る、詞に老女は打笑み、さつき「ヲヽ、珍らしい嫁女孫嫁、遙々の道ようこそ〱。去なが

汝を偽り誘き寄せ、討取んと計りしに、見顯はされて殘念至極」といふより早く藁苞に、隱せし業物拔放し、久吉目がけ切付くれば、ソリャ遁すなと軍兵共、群り寄て突かゝる。鑓の穗先は篠薄、薙立て〳〵切結ぶ、勇猛不敵の四王天、乾達婆王の荒れたる如く、突伏せ切伏せ駈上れば、あしらひ兼たる眞柴方、胴を失うて見えにける。久吉も心を配り、味方の勝利覺束なしと、有合ふ僧の袈裟衣、手早に取て我身に著し、馬にひらりと飛乘て、濱手の方へ只一騎、駈出す向ふへ四王天、夫と見るより繰出す穗先、得たりとかはし一散に、駒を早めてかけり行く。四王天「ヤア汚し返せ猿冠者め」と跡を慕うて追て行く。田畑畔道嫌ひなく追驅追詰四王天、額に無念の息煙立て、勢ひ込んで馳迫る。遙に夫と加藤正淸、踊上つて田島頭、觀念せよと切込む太刀、心得たりと渡合ひ、雙方劣らぬ勇猛力、火花を散して戰ひしが、いらつて打込む正淸が、凡人ならぬ希代の切先、あしらひ兼て四王天、漂ふ所を切伏せ〳〵、主人の安否氣遣ひと、跡に見なして走行く。さしも勇氣の田島頭、數ヶ所の深手に蹌ひ〳〵、四王天「チエ、殘念や、斯迄手に入る眞柴久吉討洩し、夫のみならずむざ〳〵と、名有勇者の首をも取らず、討死するが口惜やな。思ひ廻せば廻す程、運の强き猿冠者め、此土をはづれいつか又、彼奴を討取る期や有らん、無念々々」と云死に、爰に名のみを殘したる、田島頭が身の果の哀なりける。

手の衆は京街道に出張して、お前様を殺すとの謀、憎さも憎し、お馴染のお前樣、武智に討すは殘念なと此お坊との咄し合、そこで俺が一生にない智慧を振出し、お前様をそつとおらが在所へ連て逝で、思ひがけなう光秀めを、ころりと云してこまさうと、わざ〳〵迎ひに來ましてごんす。サア〳〵一時も早う用意して、武智を討取る魂膽さしやませ。ほんに又忘れた事が有わい、久しぶりでお目にかゝつた土產は是」と藁蒿より、こて〳〵取出す瓜二つ、長兵「コレ是は俺が空地に出來た眞桑瓜、切てあがつて下さりませ」と、自慢らしげにさし出せば、久吉「ヲヲ明地に出來しを切て喰へとは幸先よし滿足々々。殊更汝が光秀を手引して討せんとは、天晴忠臣出かした〳〵。恩賞褒美は兩人共、望に任せ得さすべし」と仰に悅ぶ兩人より、勝色見する味方のどよみ、皆勢ひを添へにける。かゝる折しもかたへに竝ぶ稻村より、鬨を作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかゝれば、加藤正淸、正淸「シャ猪口才な虻蠅共、目に物見せん」と大太刀拔て切りかくるを、受けつ流しつ亂軍の、互に鎬を削合ひ、濱手の方へ戰ひ行く。兩人は立つて居つ、長兵「こりやえらい大騷動、怪我のない内久吉樣、サア〳〵ござれ」と先に立ち、步む兩人明智の久吉、出行く僧を引戾し、ぐつと一締かたへに投退け、久吉「百姓長兵衞とは僞り、誠は武智光秀の舊臣四王天田島頭止れやつ」と聲掛られ、頭巾搔投りぐつと詰かけ、四天王「流石の久吉よく察した、

程左樣、大阪今里村の長兵衞、江州の觀音寺の僧獻穴が參りましたと、おつしやつて下さりませ」軍兵「ヤア長兵衞でもけれん穴でも、對面なさる用事はない、きり〳〵立て」と爭ふ軍卒、眞柴久吉御聲かけ、久吉「某に對面せんとは仔細ぞ有らん、是へ通せ」と御仰、ハツと恐れて兩人を、君の御前に誘へば、久吉二人を見下し給ひ、久吉「終に見馴ぬ其方達、仔細如何に」と有りければ、長兵「ハヽヽテモ扨も物覺の悪いお人、わたしを見違へてござるかいの。ソレ、アヽいつやらの事で有た、今川とやら庭訓とやらいふ大將に負さつしやつて、春長樣と二人連で、こちの内へ逃込ましやつたを、お世話申した今里の長兵衞でござりますはいの」獻穴「ハイ〳〵愚僧は前方江州の山寺觀音寺の住職致居りました時、岸田村の百姓の息子、岸田太吉といふ者を、私が小姓にして置ました時に、あなたがお立寄遊ばしまし、其小姓に御茶を汲したらお目にとまり、綺麗な小姓ぢや此方へおこせとおつしやる故、二言となしに若衆を獻じた、獻穴と申者、樣子有て只今は今里村に侘住居、あまりお懐かしいやら、又はお願ひの筋も有り、わざ〳〵是なる長兵衞殿と同道で參りし」と、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける。久吉は打頷き、久吉「成程聞けば一々覺の有る事、兩人とも無事で重疊。シテ汝達が願ひの筋は」長兵「アイヤ外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で、春長樣をころりといはした武智光秀、昨日から俺が在所へ陣を取り、先

同九日の段

徳は咎徹に勝ち、仁は凶邪を除くとかや。されば眞柴久吉中國の大敵を攻討んと、水をもつて手をぬらさず忽ち和睦相調ひ、大物の浦に著陣ある武名の程ぞ類なき。加藤正清進出で、正清「信長と云ふ鬼の再來と、おぢ恐れし春長公を、討取つたる逆賊の武智光秀、一時も早く都に攻入り、捻り殺すが君へ追善、早御用意」とせり立れば、久吉莞爾と打笑ひ、久吉「今に始ぬ正清が勇言、チヲ心地よし〳〵。去りながら此久吉中國に發向せば、都に足を入れぬ内、伏勢を以て討取らんと、武智が結構顯然たり。迂濶に上京なす時は、過つて死地に入らん、必油斷致すな」と、軍慮に敏き久吉が、詞にあつと諸軍勢、英智を感ずる計なり。折節ひよか〳〵濱傳ひ、藁沓片手に百姓長兵衛、旅僧一人引連れて、囃し交くり行過る。軍兵共は聲をかけ、軍兵「ヤア〳〵土民蛸坊主、眞紫筑前守久吉様の御前とも憚らず、のさばり歩く横道者控へをらう」と咎められ、長兵「アヽそんなら久吉様はそこにござるか、お坊爰ぢやとやい。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、マア一服しませう」と藁沓どつさり高胡坐。軍兵「ヤア〳〵まだぞんざいな蛆蟲めら」長兵「アヽコレ〳〵〳〵、其様にけん〳〵云んすな、久吉様のお目に掛つたら、さつぱり譯が分るものぢや、ノウお坊」獻穴「成

に船と帆柱を、かゝへて戀の港入、打つれ立て歩み行く。流るゝ水の音さへも、物騒がしき戰國に、行儀亂さぬ生立は、武智が一子十次郎、人目を忍ぶ深編笠、松原傳ひに歩み來て、有合ふ床几に腰打かけ　十次「ハア思ひ廻せば恐ろしき世の亂、昨日の君臣は今日の怨敵、親は子を討ち子は親に、刃を合す修羅の巷、是非もなき世の有樣」と暫し思に惱みけり。漸心取直し、父光秀が刃にかゝり、空しくならせ給うたる、春長公の靈前へ、御許容なく共後世の爲、イデ拜せんとさしかゝる、道を遮ぎる陣張甚助、家來引具し大音上げ、甚助「ヤア主殺しの武智が忰そこ動くな。汝が家來と僞りし某こそ眞柴方、久吉樣への奉公始、腕を廻せ」と犇めけば、十次「ハヽヽ、久吉方へ裏切のふた股武士の甚助め、腕立して怪我まくるな」と、股立取て身構へたり。甚助「ヤア猪口才な小童め、物な言はせず討取れ」と、いふより早く一同に、切てかゝりし刃の稻妻、暫し時をぞ移しける。いらつて切込む甚助が、刃物からりと打落し、付入るさそく十次郎、切伏せ〳〵とゞめの刀、相人なければ是迄と、衣紋繕ひ刀を鞘、納る不敵の十次郎、是より直に婆樣の、御隱居所へ發足し、此身の出陣お願ひ申し、敵の奴原斬立て薙立て、寄手を惱まし、骸は修羅の巷に曝し、武士の本意を達せんと、勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ず、憂を都の假住居跡に見なして。

顏。サアしてやつたと百姓共、庄屋を先に立上り、又もや御意の變らぬ內、代官樣へ差上る、出端の錢を儲けうと、挨拶そこ〳〵立歸る。あとに甚助只一人、燻らす煙草の煙より、胸に思ひの絕間なき、おこぶは後にもぢ〳〵うぢ〳〵。「ドリヤまからう」と立上り、步みかゝればこらへ兼、「申し〳〵」と呼かくれば、甚助四邊を見廻して、甚助「ハテ心得ぬ、柳の小蔭より申し〳〵と呼懸るは、夜鷹さんかいな」「アイナあいな」と走出で、恥しさうに縋付き、いはんとすれど赤む顏、甚助は探つすがめつ、おこぶが姿を眺め入り、甚助「見れば本肉の仕事盛り、身共に取付きこだれるは、仔細ぞあらん物語れ、つひに見えぬ衒妻殿」と、いはれて漸〳〵顏を上げ、おこぶ「エヽつひに見ぬとは聞えませぬ、去年の五月の夕まぐれ、道頓堀の奈良茶屋で、思ひ初たが緣のはし、丸寢の盆屋は丸淸の二階、千年も萬年も、變らぬ契り龜竹の、節々までが萎る程、心好かつた床の海、音はぎし〳〵岸本や、人の噂に鳴戶屋を、ほんに嬉しの森新で、私や悅んでゐるものを、夫におまへは揚物屋の、荷箱か大正の鰻の樣に、ぬらくらとしたぬめた樣、忘れゐるとは餘りな、聞えぬはいな」と取り付て、恨の尺を口說立て、啜上げたる有樣は、達磨の畫像に野良猫の、傍へかゝりし如くなり。甚助道理と背撫さすり、甚助「一々心に覺の合紋、顏見忘れたは惡かつた。幸ひおれも徒然の砌、アノ水茶屋へサアおぢや」と、いはれておこぶもぞつく〳〵、渡り

田春長の法事は、主人武智左馬之介樣の御差圖、情を以て萬事御宥免有れば、付上がりのした百姓共、誰が赦して輕業ぢやの、イヤ曲持のと、仰々しい振舞ひ、外は格別、當村は此陣張甚助が支配、立てうと臥せうと身共次第、小家掛茶屋に至る迄、今日中に取拂へ」と、主の威光に肩臂張り、さも横柄に罵れば、庄や太郎作頭を搔き、太郎「其お腹立は御尤でござりますれど、又してもく、エイくわあで村々は亂が騷、此頃武智光秀樣、將軍とやらにお成りなされ、少しこゝら近邊は穩、其悦びの參詣群集、せめて四五日御用捨を」と、言ひつゝ腰の早道より、取出す小錢茶碗にうつし、「マアお一つ」と差出せば、手に取上げて恟りし、睨んだ眼は何所へやら、ぐわらりと變る機關的、甚助「へゝゝゝゝハゝゝゝイヤ何庄屋、ソリヤ何かいやい、主人光秀公が天下を知召し、其御悦びとあれば苦しうないく。輕業なりと、唐の芝居なりと勝手次第。拙者元來茶が好だが、大服にして換てくれる氣はないか」と、肩からはえた爪長代官。百姓共は口揃へ、百姓「何が扨々、何杯なりと御遠慮なしに、お換なされて下さりませ」甚助「然らばどうぞ今一ぱい所望々々」と差出され、めいく紙入巾著を、淩へて漸八分目、些少ながらと差出せば、甚助「是はく重々の御馳走、いやもう此お茶さへ下さらば、少々は拙者の天窓で、土佐踊なされても苦しからず。用事あらば承らん、必ず心置かれな」と、欲に目のないにこく笑

の惠、久吉が情の計ひ、又清秀とやらんが志、過分至極」とのたまへば、清秀なほも敬ひ深く、清秀「コハ有がたき君の御諚、此上は御心置なく、早鷄鳴に程近し、いざ御發駕」と勸に君は下立ち給へば、重成「ヤレ暫く、御門出を壽きの、孫めが一さし、御上覽に入れ奉らん。嫁女、常々教へし扇の一手、早く〳〵」と舅の詞、涙ながらに取上ぐる、鼓の調べ重若が、重若「祖父様謠をうたうてや」と、扇をしやんと、身の備へ、謠あら目出たや末廣の、君の榮えは、謠萬萬歳と祝しけり。拍子につれて稚子の、奏で祝する末廣の、其一曲は末の世に、名を止めたる鱸が踊り、因緣斯と知られたり。「いざ御立ち」と清秀が、詞にふり出す行列の、おさへは二代の鱸孫市、武士の鑑となる鐘の、音もろともにあけて行く、夜もしら〳〵と白鷺の、森を離れて飛び交ふも、君の榮えを白烏の、神の擁護と勇み立ち、都の空へと三重供奉しけり。

同八日の段

憫むべし英雄の武將、刃の霜と消えて行く、内大臣春長公、今日一七日の大法事、と老若男女別なく、參詣群集を當にして、見せ物輕業力持、戰國の世も下々の、身過にかはりなかりける。所の百姓引連て、のさ〳〵來る陣張甚助、茶やが床几に腰打かけ、甚助「ヤレ庄や太郎作とやら、此度尾

和議を破りし無道の春長、其祿を喰む中川瀨平、納め過ぎたる上下衣服、御迎ひとは何の戲言」清秀「ホヽ一旦の憤りは尤も至極、此度の合戰は御舍弟春孝殿、事を計り禮を亂す、去るによつて眞柴久吉、內意をもつて立越しは、密に都へ供奉せん爲、早御用意」と云はせも立てず、重成「逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子、知るまいと思ふかや。石山方に名を得たる鱸喜多の頭重成、眼は日月、及ばぬ事を」ときめつくれば、淸秀猶も詞を盡し、淸秀「成程推量の如く當月二日、都本能寺に於て主君の横死、愁ひに沈む我々、僞りの有るべきや。取り分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一條、今より一子重若丸、父の忠義を頭に戴き、二代の鱸孫市と、名も改まる兩家の和睦、慶覺君の御本願照すも法の道廣く、やがて目出たき榮えを」と、情の詞に凝念も散じ、重成「ハヽ誤つたり〳〵、斯程厚志の眞柴中川、躮が願ひ我君の、法の門出一時に開け、此上もなき我が悅び、コレ〳〵嫁女、孫が手柄は二代の忠臣」歎きの中の悅びと、舅の詞聞くにつけ、いとゞ涙に雪の谷が、應答も更に泣く計、早御立の刻限と、追々警固の諸軍勢、見るより重成手を打つて、重成「萬事に馴し淸秀殿、イデ我が君へ此樣子申し上げん」と立ち上れば、慶覺「イヽヤ聞く迄もなし、とくより慶覺是にあり」と、しづ〳〵と立出給へば、はつと恐るゝ二人の勇士。慶覺君は御衣の袖しぼり給ひて、慶覺「いかに旁、孫市が忠死により、萬死を出しも佛

には、還相回向に回入せり。聲は如來の迎ひぞと、ゑい〱〱と孫市が、首は前にぞ落にけり。わつと恐れて飛退く子供、母は其儘打倒れ、前後不覺に泣き叫ぶ。始終見屆け重成が、目に持つ涙押拭ひ、重成「ハヽ、生者必滅の理、今日の前の見るも夢。せめて夫の切首に、暇乞を」と立上がり、繩解ほどけば雪の谷は、其儘首にしがみ付き、雪の谷「覺悟故とは云ひながら、いとし可愛い姉弟に、嘸や心が殘るであろ。魂魄去らずば今一度、物云うて給べ孫市殿、我夫なう」と押し動かし、盡きぬ名殘の百千行、聲を限りに泣き叫べば、重成「ヲヽ其歎きは理ながら、主君へ忠死の躮が功、出かしをつたと譽そやす、親が心を推量せよ」不便と計り詞數、云はぬ心のせつなさを、思ひやつたる雪の谷が、正體涙の聲を上げ、雪の谷「家を忘れ身を忘れ、討死するは武士の、習ひと覺悟しながらも、得諦ぬは女だけ、お赦しなされて下さりませ。長い別れと知らぬ子の、常の遊びか何ぞの樣に、親の首をばむごらしい、切るが手柄になるといふ、教は外に情ない、如何なる宿世の報いぞ」と、口說き立てたる恩愛の、心は一つ重成も、瞬き繁くはらはらはら、涙は雨か夕雨の、車軸を飛す如くなり。折しも吹來る風に連れ、響く貝鐘攻鼓、又も敵や寄するかと、驚く雪の谷騷がぬ老人、思ひがけなく彼所より、清秀「足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲、中川清秀參上せり」と、呼はり〱入來る清秀、喜多の頭はくわつとせき立ち、重成「ヤア

りや恨んでばしぐれるなよ。我とても骨肉の躮を見殺す胸の內、どのやうに有らうと思ふぞいやい。チエヽ是非もなき次第や」と、胸に湯玉の涌返る、親の思の有難涙、見上見下す一世の別れ、手負は涙押し止め、孫市「ハヽ有難き父の恵、忠孝全く望は足りぬ。サア重若松代、最前父が申し付たる役目は只今、サ早く〳〵」雪の谷「コレ〳〵必ず切るまい、切つたらば母が灸を据ゑるぞや」と脅せば遉子心に、ひかふる手先。孫市「ヤア詞背くと子でないぞ」松代「エヽ父様の御用を聞くと母様が呵らつしやる、其母様はあの樣に縛られて居やつしやる。コレ重若、かゝ樣のアノ縄を解いて上げて給いなう」重若「サア夫でもあの樣に白眼しやるもの」雪の谷「ヲヽ何ぼう呵らしやつても大事ない、此縄解いて給ひなう。コレ申舅御樣、同じ樣に脇見せずと、なぜとめて下さりませぬぞ。現在孫を親殺しにするが、情か慈悲かいなう。此縄といて下され」と、頼む嫁より頼まるゝ、舅が胸の苦しさを、堪ふる辛さ皺面は、涙に增る思なり。斯ては果じと孫市は、我子の腕先持添へて、しつかと當れば頑是なく、ともに力身て、重若「とゝ樣斯かや」孫市「ヲヽそうぢや」出かす〳〵も一世の別れ、二世の名殘と雪の谷が、消ゆる間を待つ夫の命、神も佛もない事かと、亂るゝ心亂れ髮、血汐爭ふ血の涙、上には父が稱名の、聲諸共に鈴の音、慶覺君は他念なく、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛の回向の恩德、廣大不思議にて、往相回向の利益

盡す女房を、思はぬ仕方情ない。親の別れも身の科も辨へ知らぬ佛樣、鬼にせうとは胴欲な、せめて此子が生先を、見屆る迄生て居て、下さりますが親の慈悲、賴むわいの」と計にて、譯も詞も涙川、膝に漲る風情なり。孫市「ヤア益なき譚聞きたくない、三千世界に子を思はぬ、親が有らうか白癡者。左程躮に此首を討し難く思ひなば、子供にかはつて介錯せよ」雪の谷「サア夫は」孫市「得心なくば緣切うか」雪の谷「ぢやというて是がマア」孫市「ヤア未練至極の其吠頰、所詮介錯思ひも寄らず、見下げ果たる女め」と、取て引寄せ提緒の早繩、庭木の杉に確乎と、結ぶ妹脊の亂れ口、こがるゝ其身は梢の猿、腸を斷つ憂思ひ。母の有樣見るよりも、二人の子供はおろ／＼顏、雪の谷「コレコレ松代、重若も、父樣の兩の手に取付て居や、必ず放して給るな」と、あせれど夢か現なき、夫は今を最期ぞと、諸肌脫ば弟の重若、重若「父樣もうかや」孫市「ヲヽサ今が親への孝行時」と、云つゝ短刀我腹へ、ぐつと立てばはつと散る、唐紅に目も眩み、心も消る雪の谷が、闇路を辿る思ひにて、正體もなく伏沈む、歎の折も一間より、喜多「ヤレ躮其刀引廻すな云ふ事有り」と父重成、しづ／＼と立出で、喜多「ホヽ適忠臣よくしたり、今こそ勘當赦しくれる。是を此世の思出に、心靜に最期をとげよ。とは云ながら二人の孫、親の死別も夢現、嘸成人の其後は、歎くで有らう悔み居らうと、思へば不便彌增して、我は老木の末近く、便とするは母の親、むごい祖父ぢやとコ

は知らで弟の重若、重若「コレ父様、私はお前の子でござるわいの」孫市「何ぢや父が子ぢや、ヲヽよく云た出かしたなア。サヽ姉の松代はどうぢや〳〵」と、問へど年だけうじ〳〵と、母に氣兼の云兼れば、孫市「ムヽ返事のないは母が子か、我が子でなくば出てうせう」と、呵り付けられ泣く〳〵も、松代「何の母様の子ぢやござりませぬ、とゝ様の子でござります」孫市「スリヤ其方も我が子とな、ヲヽよく云た出かしたなア。父が子ならば、身が云ひ付る事背きはせまい」松代「アノ親の云ふ事聞かぬ者は不孝者ぢやと、母様が常々からのお呵り、どんな事でも聞きまする」孫市「なう重若、そなたも云ふ事聞きやるかや」重若「アイ、よう云ふ事を聞くわいなう」孫市「ヲヽ扨々うゝいやつ、然らば申付る役目が有る、今父が此短刀を腹へ突立つたらばな、コヽ此刀と脇差にて身が首を引切り、此一書を添て久吉殿へ持參せば、此上もなき孝行者、合點がいたか」と細かに、云敎ふれば驚く母、睨付られくひしばる、親の心は知らぬ子の、譯も七つ子重若丸、重若「夫なら父様の首を此脇差で切ると、孝行になりますかや」孫市「ヲヽなる共〳〵、日本一の大孝心」重若「コレ姉様も合點かや、サア早う腹切て下され」と、いふに堪らず母親が、我子引退け、雪の谷「エヽ忌はしい子供では有るわいなう。コレ孫市殿、いかに望が立てたい迚、何辨へない此子供に、親を殺せと敎る人が、又と世界に有うかいなう。夫や我子を安穏に置きたい計に兎角と心を

伜を手渡し」と、かたへに直せし鎧櫃、蓋取退くれば重若が、母様なうと走出で、縋り歎けば母親も、胸に涙の滿汐の、引くや血脈と奥よりも、姉の松代が聲聞き付け、松代「お父様のお歸りか、重若も戻つてか、嬉しい〳〵、早う遊ぼ」と手を叩き、悦ぶ姉弟雪の谷が、膝に引き寄せ聲曇らせ、雪の谷「ヲヽ、嬉しかろ〳〵、何ぼう其樣に悦びやつても、久しぶりでお目にかゝた父様は、腹を切らねばならぬといなう。コレ孫市殿、是を見てかいなう、なんにも知らぬ二人の子供、お前は可愛うござんせぬか。此姉弟をふり向けて、死ぬる覺悟を極めたとは、餘り氣強い胴欲な、武士が立つても捨たつても、死なさぬ〳〵死なさぬ」と、かき口說のも忍び音に、奥へ憚るうき涙、道理と知れど聲に角立て、孫市「ヤア未練至極の其吠頬、弓矢取る身の切腹は此身の本懷、今計らずも寄手の大將、是角六郎を討つて捨て、懷中の一書を見れば、都本能寺に於て春長父子、光秀が爲に討死と、春孝よりの報知の密書、此騷動に寄手の奴原、一旦圍みは開く共、再び寄せんは必定たり。危急を救ふは此孫市、君と父との命にかはり、首を則ち久吉が、陣所に送り和を乞はゞ、元より寛仁大度の眞柴、よもや違背は致すまじ。使は伜重若丸、兼て認め置いたる一書、斯迄思ひ込んだる某、妨げなす不所存者。コリヤ〳〵二人の子供爰へ來よ、兄弟ともに父が子か又母が子か、云うて聞かさば賢い者」と、撫つさすりつ尋るも、胸に無量の思ひ有る、心

たの茂みより、忍び出たる大の男、あたりうそ〳〵窺ひ足、奥を目がけて忍び行く。後の方より
孫市が、曲者やらぬと腰を、むんづと組んで引き戻す。大の男「シャ猪口才すな」と振り解き、直
に抜討ち刃の光、かい潜つて抜合はし、手練の切先はつし〳〵、打合ふ刃音何事と、手燭片手
に立出る雪の谷、火影を覆ひ物蔭に、息をひめてぞ守り居る。庭には二人が上段下段、飛鳥の働
き孫市が、難なく曲者切り倒し、乘懸つてとゞめの刀、血押し拭ひ刀を鞘、納める丈夫死骸の
懐中、探る手先に取出す一書、扨はと月に透し見て、孫市「ム、スリヤ當月二日に春長父子、光
秀が爲に亡びしとな。チエヽ心地好や嬉しや」と、悦び勇む後には、紛ふ方なき夫の聲、飛立つ計
り走寄り、逢ひたかつたと縋付き、嬉し涙ぞ先立てり。夫も流石夫婦の愛情、やゝ打潤む目をし
ばたゝき、孫市「誠や飽ぬ夫婦が銘々に、倅を連れて思はぬ離別、父の勘氣を蒙りしも、暴惡非道
の尾田春長、約を變ぜし故なれば、何卒彼奴が首討取り、親人の實檢に備へなば、勘當詫の綱に
もと、心は矢竹にはやれ共、悴重若召連れては、足手纒ひと未練にも、子に引かされて送る月
日、鐵砲疵にて脚さへも、思ふに任せぬ畸人者、武運に盡きし我が身の上、せめて御主君親人
の、お役に立つて死なんものと、覺悟極る今日只今、死後に頼むは二人の子供、心得たるか」と夫
の詞、聞くに女房が泣出す、其口押さへて、孫市「コリヤ親人のお耳に入らば却つて妨げ、イデ

ひ得させよ」と、御目を閉て稱名を、唱へ給へば重成も、君の惠の有がた涙、胸に押へて氣色を變へ、重成詞「チエヽ云ひ甲斐なき御仰、それ軍は和に有つて衆にあらず、馬洗厩養に等しき尾田の弱兵何程の事や有らん、凱歌を上るは瞬く内。君にも知召す如く、國大なるといへども戰を好めば必ず亡ぶと、近くは武田勝頼、父信玄まで其威隣國に併ぶ者なく、猛虎の如く諸侯も恐れ候へども、勇に誇り武に慢じたる太郎勝頼、累代の武名も一時に朽ちぬ。春長迚も先其如く、御心弱くて叶はじ」と諫め申せば慶覺法師、打頷かせ給ひつゝ、慶覺「重成來れ」と御座をば立せ給へる其所へ、大息ついで鷺森八郎、御注進と手を突けば、人々いかにと仰の下、鷺森「されば候、軍は味方の勝利なれ共、力責には叶はじと、數千の車に燒草を積載て、櫓々の其下へ、山の如くに積み重ね、たゞ燒打に」と云はせも立ず、喜多の頭はつたと睨付け、成重「ヤア馬鹿々々しい、何の癡言、其刈柴こそ身が申付けたる一つの計策、御大將の御前なるぞ、麁忽の注進。早く立て」とわざと怒りの一言も、知らで鷺森八郎は、拍子拔け〳〵引かへせば、いざ御入りと八方に、心を配る重成が、底意を汲みて慶覺君、奥殿さして三重入給ふ。夏の日の長きも我を恨むなる、物思へとや夕暮の、空を待ちけり孫市が、肩にしつかり鎧櫃、人目を忍ぶ陣笠の、歩にやつしたる俤は、昔に變る勘當の、身は猶更に心の隔て、なんとせんかた切戸口、佇むこな

よ見よ追つ付け世を廣う、足利の正統たる慶覺君の御代となさん、何と此上もなき悦びではを
りないか」と、未前の察す明智の眼力。こなたは一途に夫思ひ、よき折からと摺寄て、雪の谷「イヤ
もうお嬉しい段ぢやござりませぬ、が、どうぞ成らう事なら、其白氣とやらが立ちましたが、孫
市殿の御勘當が赦りますといふ知らせなら、ほんにどの様に嬉しう存じませうぞ。憚りながら
慶覺様と御一所に、どうぞ世に出られます様に、親御のお慈悲お情で」と、いふを打消し、喜多「ア
レまだしつこい、かゝる目出たき折からに、よしなき癡言聞きたくない。お身も孫を連れて部
屋へ行きやれ、エヽ何をぐづ〳〵、早く立ちやれ」と嚙付られ、何とせん方投首し、娘松代を
伴ひて、しを〳〵立つて入にける。跡に重成只一人、立上つて通路の鈴、引ならせば一間の御簾、
さつと小姓がかゝぐれば、念珠他事なき慶覺君、慶覺「重成が音づれ何事か有るやらん」と、仰に
はつと頭を上げ、重成「今朝より御機嫌を窺ひ奉らんと存ずれども、敵の朝駈短兵急に寄せたれ
ば、軍配に暇なく、一泡吹せ味方の勝利、攻口を退き候へば、一息の間と漸只今御前へ伺候、
不禮の段は御高免」と敬ひ深く述ければ、慶覺「誠忠俊又の一人時に合はねば、此程よりの心勞
推察せり。兄義輝君は、三好松永が爲に亡び給ひ、今又我は春長が爲に斯のごとし。よしなき
命永らへて、萬民塗炭の苦しみと云ひ、諸卒の命を失はんより、早く我が一命を斷ち、萬死を救

どうなる事と自が、心の内を推量して給やいなう」と有りければ、妼始め士卒共、顔見合せて詞なし。娘松代は母の顔、打詠め〳〵、松代「コレ申し母樣、〽おまへは何をむつかるぞ、同じ樣に皆迄も、何を泣きやる、早う父樣や弟の重若を呼びまして來てくれやい。此間の清書をお目にかけて、譽めて貰ひたいわいなう」雪の谷「チヽ譽めて貰ひたからう、そなたより此母が逢ひたさは山々、暫しが間も母の傍、得放れぬあの重若、定めて泣いてばつかりゐるで有ろ、可愛いの者や」と喰締り、泣く音を包む雪の谷が、心の内ぞせつなけれ。襖の彼方に重成が、高らかに咳拂ひ、扨は舅君のお出なるぞと、いふに心得、妼が席を下れば雜兵共、地に鼻付けてかつ跪ひ、待つ間程なく悠然と、立出る鱸喜多の頭、不興氣に四邊を見廻し、重成「ヤイ女原、此所に用事はない次へ立て。軍卒共も何をうつかり、要害を賴みに搦手の守り怠るは一大事、早く罷て心を付けよ、サヽ行け〳〵」と追立やり、重成「イヤナニ嫁女、そなたにも云ひ聞かし、悅ばす事が有るてや」雪の谷「アノ私に悅ばす事が有ると御意遊すは、ムヽ夫孫市殿の」喜多「ハテ扨、又しても不吉者の悴が事、左樣の事でをりない。當月二日の曉に、天文の考みし所、東に當つて白氣自然と立登る、是則敵の大將、春長が腹身と賴む勇者の内に變心の者有つて、事を破るの前表、今日迄口外せざれ共數日の籠城、お身も定めて心勞と思ふから、安堵させん爲申し聞かす、見

の森、砦を構へゆゝしくも、寄手を防ぐ唯一心、矢叫びの音鬨の聲、天地に滿て動搖せり。かゝる險しき其中に、媚き集ふ𡛷共、軍に馴て氣は張弓、襷鉢卷腰刀、遉ゆゝしき身の備へ、中に小笹が才發顏、小笹「イヤなう浪江、なんとマア騒がしい世界ではないかいの、切つた〳〵と切つゝはつゝを世渡りに、まだ仕足らいで春長殿、慶覺樣を相人に取り憎てらしい軍事」浪江「サイナウ追付け如來樣の罰が當り、首がころりと飛ぶであろ」といへば兵卒口々に、兵卒「ヲヽサ飛ぶとも〳〵。一向一心に固つたる我々、殊更御主人喜多の頭樣の軍配、石山に於ても度々の勝軍、ヤモ負る事はけんによもない事。」一「殘り多いは王樣の御挨拶、頭の役でお溫順しく丸う納めて慶覺樣が、石山の砦を引拂ひ、此杉の森へ御陣更へ、性懲もなく又寄せかけた尾田の大軍、どつと寄せても不可思議光如來のお力にや叶ひませぬぢやないかいな」𡛷「あいなアあいな」兵卒「オツト待つたり、叶はぬ次手においとしいは若旦那孫市樣、尾田と和睦が破れた計りに、御使の越度ぢやと爺御樣の御勘當、」なんと可内、御詫の願ひを一統に、して見る心はないかいやい」と、おろ〳〵淚惣々が、啜上げたる水涕も、忠義のはしと殊勝なり。斯と漏聞く一間より、孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしとやかに、出る姿もおのづから、思ひ有る身の打萎れ 雪の谷「ほんに主なり家來なりと、思うて詫しい其方達が志、聞く嬉しさにいとゞ猶、悲しき夫のお身の末、

も背かん者共を、悉く誅戮せん。急ぎ是より我は參內、汝等二人は久吉が、都へ登るを半途に待受け、一戰にぼつ返せよ。イデ裝束を」と立上がれば、近習小姓が心得て、運ぶ大紋立烏帽子、立派に著なす骨柄は邊輝く其粧ひ、早引出す栗毛の駒、光秀ゆらりと打乘つて、光秀「ヤア〱十次郎、田島頭諸共に西國へ馳向ひ、必ず共に油斷なく軍功を顯はせよ」と、詞にはつと四王天、四王天「ハ、、、、、君御出陣には及ばず共、某彼地に向ひなば、猿冠者めが素頭を、討ち取るは手裏に有り」光秀「ア、イヤ〱、彼もしれ物、定めて遠き計略有らん」十次「コハ親人の詞共覺えず、父に代つて某が、軍配取つて一戰に、敵の首を實檢に備へん、コレ氣づかひ有るな」と、勇み進みし我子の骨柄、光秀「ホ、、天晴々々潔よし〱。我も跡より出陣」と、手綱かいくりしと〱、乘出す駿足馬上の達者、轡の音は秋の野の、蟲には有らでりん〱〱、綸旨をやがて頭に戴き、刃向ふ奴原打立て追立て切散し、追付け四海に羽を伸さん。いそふれやつと一散に、大內山へと 三重 急ぎ行く。

同七日の段

攝化隨緣眞實に、無量の惠み洩されども、佛敵猛威の春長に、世を狹られ鱸重成、無念ながらも杉

筆喰濕し唐紙の、表に何やらさら〳〵、かくと見るより、十次郎瞬もせず物陰に、守りゐる共白書院、只一心に書認め、筆投捨てむんづと坐し、諸肌寛げ指添を、抜くや玉散る氷の刃、やゝ打詠め兩眼に、はら〳〵涙喰締り、既に斯よと見えければ、主從小影を走出で、十次「ヤレ早まり給ふな父上」と、取付く十次郎四王天、鏡の如き兩眼を、くわつと見開き辟震はし、四王天「コレ我君、コリヤこなた狂氣召されたの。今朝より始終の樣子、心得がたく思ふ故、萬事心を付る某、物陰より窺へば、出かし顏に辭世の一句、順逆二門なし、大道心深に徹す、五十五年の夢、覺來て一元に歸すとは何の癡言。君臣を見る事塵芥の如くせば、臣君を見る事怨敵の如しと。春長猛威に增長して、神社佛閣を燒失し、萬民の苦しむる暴惡、神明是を誅するに、光秀の御手をもつて討し給ふ。天の與ふるを取らざれば、災ひ其身に歸す。左程の事を申さず共、よく御合點のこなた樣、切腹とは馬鹿々々しい、人は知らず此四王天田島頭、殺す事罷りならぬ」と居丈高。十次「チ、さうぢや〳〵、父の命は我々始め萬卒に至る迄、御一身に及ぶ御命、臣義を守る共、君是を補助せざるは、それ將とは申されず。只生害はとゞまり給ひ、下萬民の苦しみを救ひ給へ」と右左、涙と倶に諫めの詞。光秀はたと横手を打ち、光秀「ハヽ、誤つたり〳〵、一天の君の御爲には、惜しからざりし此命、暫しは永らへ事を計らん。先は綸旨を乞受て、猶

叔齊を習ひ、只雲水に從うて出行く母、是が此世の別ぞ」と、義強い母も恩愛の涙紛らす有樣は、いとゞ哀れぞ增りける。光秀は默然とさし俯いてゐたりしが、操の方は涙ながら、操「コレ申し我夫、母樣の只お一人、いづくを當てと長の旅、なぜお止めなされませぬぞ」光秀「ホヽ不忠不孝との御輕蔑、今更申す詫もなく、せめては母のお心に逆はぬが寸志の孝、四海の内は此光秀が掌にある、お止め申な其儘々々」さつき「ヲヽ、遉は惡人程有つて根強い魂、チヱヽ云はん方なき人外め」と、睨む目元にはら〳〵と、涙かくして立出る、心の張弓強弓の、引ぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が、初菊「是なう申し祖母樣」と控へる手先振拂ひ、見返りもせず出て行く。わつと泣出す人人を、制し止めて、光秀「ヤア〳〵者共、母人の御行方いづく迄も見屆けよ、御手道具の用意々々」と光秀が、鶴の一聲許多の軍卒、簞笥長持挾箱、其外雜具鋲乘物、御母公樣のお姿を、見失ふなと足早に、跡を慕うて急ぎ行く。影見送りて光秀は、何角心に打うなづき、光秀「奥操躮十次郎、嫁初菊諸とも次ぎへ立ちやれ、用事有らば手を鳴す」と、心有りげな詞の端、アイとはいへど立ち兼る。光秀「ヤアぐづ〳〵と何を猶豫、早く立てよ」ときめ付けられ、心は跡に殘れ共、親子三人打連れて、是非なく次へ入相の、鐘が無常を告渡る、實物凄き庭の面、忍び出たる四王天、主君の樣子如何ぞと、身を潛めてぞ窺ひゐる。それとは知らぬ光秀が、有合ふ硯引き寄せて、

口說き、恨み嘆つぞ道理なり。思ひは同じ十次郎、十次「ハテもう今迄は不調法、以後は急度嗜む程に、コレ赦してたも〳〵」初菊「そんなら願ひを」十次「ハテ誰憚らぬ云號、世間廣う遠慮はいらぬ」初菊「エヽ忝や嬉しや」と、ひつたり抱付く妹と脊に、わりなく見えし縁なり。折から轟く轡の音、「光秀公のお歸り」と、しらせに恟り飛退く二人、所體繕ふこなたより、妻の操も出で向ひ、待つ間程なく立ち歸る。武智十兵衞光秀、武威轟かす强將の、常にかはりし屈託顏、席を改め詞を正し、光秀「ホヽヽ三人共出向ひ大儀、シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか」操「サアイナア先程も田島頭と自が、わつつ口說つ、どうやら斯やらお口が和らぎ、母公樣とも睦じう」光秀「ムヽ、ホ夫は重疊出かした〳〵、左あらば直樣御對面」さつき「イヽャ夫には及ばぬ、母が直直參らん」と、聲うちかけを引かへて、木綿布子に風呂敷包、背にちよつこり賤の女の、姿見るより驚く人々、操は傍に摺寄つて、操「系圖正しき武智の御家、殊更四海の武將とも、仰がれ給ふ夫光秀、天下の御母公樣共云はるゝ御身が、淺ましきお姿は、若やお心違ひしか」と、尋ねに嫣乎と打笑ひ、さつき「ホヽ忝くも淸和源氏の嫡流たる武智の系圖、元より武勇の家柄なれば、誰に恥べき謂なし。老は寄れども心は鐵石、渴しても盜泉の水を呑まずとは、お身達もよう知つてゐやる筈、心穢れた我子の傍、片時も座を同じうせんは我日本の神明へ、恐れ有り〳〵、伯夷

腹、其理なきには有らね共、夫は一途の思召し、幕下となつて春長へ、身を寄せ給ひし御大將、時を得て其機に臨むは、天の時を知るといふ。何卒御機嫌直されて、光秀公に御對顏、偏に賴み奉る」と、願へば倶に嫁操、「只幾重にも」と手を突て願ふ心の夫思ひ、道理にも又殊勝なり。皐月は少し面を和らげ、さつき「夫程に迄皆の衆が、賴みを聞かぬも年寄の片意地、そんなら息子殿の歸り次第奥へ知らしや。コリヤ女共は來て腰を打て、ヤアヱイ」と老の立居も重々と、嫁が介抱四王天、引添てこそ入にける。斯たる世にも花開く、色香もしるき初菊が、奥の透間を立出て、初菊「ほんにマア此十次郎樣は、辛氣なお方では有るわいなア、こちの思ふ樣にもない、間がな透がな軍學とやら、色の道には疎いので、一倍心を痛める」と、女心の物思ひ。後に立聞く十次郎、十次「初菊殿是にか」といふ聲聞いて、初菊「ヤア十次郎樣か、エヽ聞えぬわいな」と計りにて、跡は得云はぬおぼこさは、赤らむ顏に顯はせり。十次「是は又嗜みやいなう、又してもく、顏さへ見れば恨のたらく、親々の赦しを受け、コレ未來永々かはらぬ女夫、少しも隔はないわいの」初菊「アヽイヱく、づんともうアタ辛氣な、永々とやら未來とやら、其さきの世は知ね共、緣を結ぶの神樣が、御苦勞なされ髫髮子の、振分髪の其中から、あれと是との結び合、親の赦しもあるものを、つひに一度の逢瀬さへ、ないは餘り胴欲な、お情ない」と娘氣の、胸の有りたけかき

する眞柴、弛みを見せじとつつ立上り、久吉「主人の敵武智光秀、都に登り弔ひ軍、三家の助力あるや如何に」と、聞くより隆景嫣乎と笑ひ、隆景「ホヽ軍の備有りながら、手を空しくせし味方の若者、研ぎたて置たる弓矢の手前、願うてもなき後詰の加勢、隆景采をなし申さん」久吉「ホヽ、頼もしく〳〵。早上京の用意をなさん、者ども早く」と御下知に、加藤正淸始とし、人馬狹しと居竝んだり。憂ひに沈むやり梅を、諫め宥めて隆景公、隆景「父に劣らぬ武士と、小梅川が成人させん、心殘さず旅立て」と、籠る情に嫣乎と笑ふが暇乞ひ、此世の念も宗治が、忠義の家名稚子を、守育つる仁者の道、雲きれ空も靑々と、天王山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲につれ、いざや武智を討んずと、いさむ正淸兩將も、都をさして出てゆく。

同六日の段

扨も逆賊武智光秀、多年の恨一戰に、春長父子を討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝誇つたる諸軍の勢ひ、倶に威風を顯して、備へ嚴しく守りゐる。中央には光秀の母皐月、褥の上に座をしめて、さつき「イヤナウ四王天、何事も見ざる聞かざる云はざるに、咄しが有らば嫁女庚申待、緩りと聞かう、ドリヤ奥へ行て夢でも見ましよ」と、立つを引止め田島頭、四王天「後室樣の御立

掌ぞや」と、抱きしめ〳〵、伏轉びたる女氣を、不便と察する久吉公、こたへこたゆる宗治が、恩愛一度に持ちかね、淸水涌來るはら〳〵涙、血水川邊に浪越て土砂吹飛す如くなり。哀を見捨て眞柴久吉、彼所を屹度打見やり、久吉「アレ〳〵〳〵見られよ兩人、相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく、切て落せばあり〳〵と、平地とをさまり城外へ、逭れ出たる老若の、悅びの聲鯨波、コレ見物あれ」と大將の、敎にはつと心付き、長左「エ、幸ひなるかな是に物見」と、蹌ばひ〳〵腹帶しつかと白布の、高見を傳ひ攀登り、見開く眸に高笑ひ、宗治「ハ、、、女房悅べ、死後の思ひ出此上なし。浮世の夢も今日限り、昨日の敵は群るる白鷗、鯨波と覺えしは、浦風とこそ聞えけり。我は朝の露と消え、淸水流るゝ柳蔭、しばしが程の世の中に、心殘さぬおさらば」と、白布解んとする所へ、隆景「ヤア〳〵宗治暫し〳〵、小梅川隆景、安德寺が理解によつて、尾田家一體水魚の因、見屆けて成佛あれ」と、聲諸共に大將隆景、衣服改めしづ〳〵と入來る跡に安德寺、手に捧たる白臺は、神文とこそ見えにけり。互に和議を取納め、惠瓊は神文押戴き、安德「ハア、目出度和談整なふ上は、拙僧はお先へ歸り、久吉公の御神文、兩家へさし上奉らん」と、禮儀も足も勇み立ち、衣しぼつて歸らるゝ。久吉は詞を改め、久吉「兩家和順に及ぶ上は、何をか包まん、主君尾田殿都本能寺に於て、武智が爲に御落命」と、聲搔曇る一雫、萬里にみちて袖しぼる。驚く人々制

諸人を助けあたふべし。いざ〱是へ」に淸水長左衞門宗治、兼て期したる討死の、弓矢打捨て庭上にどつかと坐し、長左「エヽ天運强き久吉殿、只今射込みし矢文の返書、いよ〱御承知下さる上は、味方の助命賴み入る」と、鎧脫捨て腹一文字に引切る苦痛、夫の跡を慕ひ來る、妻は手負と見るよりも、やり梅「なう痛はしや悲しやな、斯した御最期させまい爲、郡一家の人々より、わたしを以ての御敎訓、無になすのみかいたいけな、此子は可愛うないかいな」と夫に縋り伏轉び、前後もわかず泣居たる。宗治苦しき目を見開き、宗治「ヤア愚や女房何繰言、郡三家の人々は、某が胸中をよく御存知、そち達親子に今生の、暇乞をさせんず爲の御情。」ハア冥加なや有がたや、一才の時よりも喰ひ込んだる大祿の、恩義はいつか謝すべきぞ。それに引かへ小知の銘々、主恩に命を捨る、數萬人の最期をば助けん爲の此切腹、玉露山三が密書の使、心を込めし久吉の書中、味方に取ては盲龜の浮木、悅べ女房何吠える。氣を張詰めて忰をばよき武士に仕立上げ、主君に忠義を怠るな」と、高松の良將も、子故に暗む深手の苦痛、見るに付ても彌增る夫の最期稚子の、行末思ひやり梅は、「女の淺い心から、大守の仰誡ぞと、斯した別れ知らずして、お跡を慕ひきたものを、暇乞さへろく〱に、云たい事の數々を、いつの世いつの添ぶしに、語らう物ぞ情なや、アレ〱〱何にも知らぬ稚子さへ、蟲が敎へる寐覺の愛、てうち〱は父上の、今端を拜む合

天地の道理を知らせんず」と、惠瓊を目がけ打かけ給ふ以前の蓮花衣、是は如何にとためつすがめつ見て恂り、覺の袈裟は矢剝の橋にて、天下を得ると見付置いたる奴殿かと、鞆れ果たる計なり。久吉莞爾と笑はせ給ひ、久吉「如何に惠瓊老、其時は臺無しの一文奴、算木書物も當にはならぬと貴僧の詞、後の證と其時に、申請たるソレ其袈裟、矢剝の橋にて我相面、見付し貴僧の天眼通、此久吉が望む出世にあらね共、天より生ずる惠なれば、惡くな思ひそ惠瓊殿。此上は尾田と郡の和を結ばるゝが出家の役、よもや違變は有るまじ」と、名智の詞に安德寺、頭を摺付摺付て、安德「ハア、理非明白たる御仰、訓狐といへる物は、夜は微塵の蟲をも見れ共、晝は大山さへ見る事能はず、此坊主も眞其如く、御身黑どんたる日蔭の、其時はよく奇相を見分れど、今天下に名を得、武威白晝に輝く時は相見あたはず、見損ぜし訓狐に等しき此坊主に、和議の御掟は冥加至極、仰に從ひ和談整へ奉らん」久吉「ホヽ、早速の會得は道の名僧、一刻も早く急がれよ」と、仁者の詞にハヽ、はつと、天より照す久吉の、威勢に恐れ引かへす。道は道なり明らかな、心照して立歸る。跡見送つて久吉公、心を凝す軍慮の庭先、見越の松が枝はつしと射たる、矢文はいかにと立寄りて、かなぐり披けば返書の實名、淸水が自筆一紙の血判、つら〳〵と讀終つて表に向ひ、久吉「ホヽ、高松の城主淸水氏、眞柴久吉が一書の胸中、射拔しは遖々、此上は三流を切落し

志の供養ある事を、眼前見捨て歸られるお僧の心底訝かし、そこ動くな」と眞柴久吉、障子をさつと押開き、上段に餝置いたる金鴨の、煙も薫ずる手向草、心憎しと尻目にかけ、安德「ヤア大將の詞とも覺えず、出家たる我を訝り動くなとは、物を知らざる今の一言」久吉「ヤアいふな惠瓊、都の大變立聞して、郡へ注進せんず心底、隱しても隱されまじ、軍勢を引入れ、修羅を導く惡僧、寺領が望か知行が望か、返答聞かん」と未前の眞柴。屈せぬ惠瓊、大口開て高笑ひ、安德「ハヽヽヽヤアぬかしたり猿冠者、愚僧を捉へ惡僧とは何の癡言、儕が主たる春長は、伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄責苦しめ、佛敵遁れず本能寺の、庭に於て野仆死したる尾田の幕下、主に劣らぬ暴れ者、五畿七道で喰ひ足らず、此中國迄攻下り、民家を苦しめ人種を絕さんとする魔王の根元、亡し絕すが佛の役、奇代の名劍請取れ」と、はつしと打ば確乎と止め、久吉「ハヽヽヽ出家に似合ぬ好い嗜、童劣の坊主が惡口、久吉が耳には入らぬ。誠相手に成りたくば、天地の道理、成佛の明らかなる事を悟りし上、相手に成りて取らせん」と、飽迄嚴しき嘲哢に、奥齒碎くる無念の眼中、つか〳〵と立寄り、眼尻逆立て息をつぎ、安德「ヤア威勢に募り人も無げなる今の惡言、當時安德寺の大寺を踏へる此惠瓊、童劣りとは何をいふや久吉」久吉「ホヽたとへ大寺の名僧たり共、心中に六道の迷ひ有ては、成佛の道思ひも寄らず、汝が目より魔王と見拔し某が、

てましますか、氣を付られよ阿野の局」局「ハッア」久吉「君には御安體にて座ますか、心元なし、如何に〳〵」局「ハッア申すも便なき事ながら、運の盡きとて蘭丸殿、田島が手鎗に無念の最期、勝に乘たる光秀方、味方は殘らず討死し、春長公にも御腹召され」久吉「シテ三法師君は」局「若君樣は細川殿へ落し參らせ、二條の御所も一時に亡び、火中の煙と失せ給ふ。是ぞ僅のお家の御旗。此上は久吉殿の智略にて、武智を討取り、亡我君の亡魂に、手向て給べや眞柴殿」と、死る今端の際迄も、君を大事と張詰し心の花もがつくりと、折れて散行く貞心貞死、義女の鑑を殘しける。始終の大變聞く久吉、身體忽ち壞敗に苦しみ、途方に暮て居たりしが、つゝ立上り大音上げ、久吉「ヤア〳〵、旁我を謀る女が不敵、只今某切捨たり」と、諸軍の心迷はさぬ遉智人の名大將、先立つ主君亡人の生死は同じ梓弓、弔ひにこそ入にける。無常に傾く夕陽は、坊主頭も伸び欠び、時刻移ると安德寺、エヘン惠瓊は咳拂ひ徐々歩み獨言、安德「ハレヤレ此永の日中待せて置き、返答もせぬ上に、鷹爪はまだな事、鼓屑一服志さへなき大將、主腹計肥すと見ゆる。餘りな釣付樣、佛の顏も三家の使、歸つて此由申上げん」と行かんとす。久吉「ヤア〳〵安德寺惠瓊和尚、何所へござる、久吉對面仕らん」と聲かけられ、安德「ハヽヽ、いや愚僧は生れ付いたる近飢、餘りの隙入に甚だ腹中窮困に迫り、一鉢の御芳志に預り度、勝手へ參る」といふを打消し、久吉「ハテ扨久吉が

心定めて押し戴き、足早にこそ駈出づれば、夫の跡に引添うて、命の親の久吉樣と、悦び足も地に付かず、飛が如くに立歸る。又も聞ゆる陣鐘につれて駈來る女武者、金石ならねど湯王鐐萬葉を亂し都より、夜を日に繼たる阿野の局、局「久吉公に御見參」と支へる組子事共せず、廣庭傳ひ歩みくる。久吉「ヤア者共、某に逢んと有る女武者、曲者なり共何程の事やあらん、對面して取らせんず。者共引け」と御下知の、聲聞取て阿野の局、局「ヤ、久吉殿か」といふを押へて四邊を見廻し、久吉「音高し／＼、御自分の形相一方ならず、一大事の注進ならば、敵へ漏ては味方の非運、心を付て物語られよ」腹帶確乎と、卽座の氣付。久吉「サヽヽ、樣子は如何、何と／＼」局「ハアヽ、されば候、春長公には安土を出立まし／＼て、都本能寺に入らせ給ひ、中國加勢の御心配、諸軍を催す時こそ有れ、逆臣武智が夜討の企」久吉「フウ何、光秀が謀叛とや。シテ／＼勝利は如何に／＼」局「ハア、明れば二日子の下刻、水さへ音なき眞の闇、早洛陽に亂入り、夢驚かす俄の戰場、太刀よ具足も乏しき寺內、數萬の敵は甲冑に、身を固めたる小手脚當、味方は薄衣綾錦、濃紅の玉襷、自始め蘭丸兄弟、死地に入たる働に、庫裏方丈も忽に、血汐隈取る修羅道の、巷に迷ふ築山蔭、射つ射られつ切つ切られつ劒の山、八寒地獄となる鐘は、五臟を射拔く君の弓勢、先手の軍兵一筋の、鮑につらなる三人五人恐をなして引退く」久吉「シテ／＼君には御安體に

縁、妹脊わりなく見えにける。山三「是は思ひがけもなき玉露殿、何故爰へは來られしな」玉露「サイナ、此城中へ入込しも、兄樣の深き御思案、お前に逢うて力を合せ、眞柴を討てと呉々の仰、首尾能く仕果せ立歸らば、誰憚らぬ夫婦中、手柄を見せて下さんせ」と、夫頼みの女房は、胸に遣瀬ぞなかりける。山三「ホヽ我も矢竹とはやれども、一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智慧と、聞きしに違ふ眞柴久吉、此軍配に我々式が及ばんや。所詮すご〳〵高松殿へは歸られず、清水殿への申譯、只今腹切り相果る。其方は立歸り此通り、傳へて給べ」さらばと計柄に手を、かくる夫に縋付き、玉露「マア待つて下さんせ、姫御前の身で敵城へ、お使者に來るも何故ぞ、お前に逢ひたさ顏見たさ、死なば一所と語らひし、私を振捨て死なうとは、聞えぬわいな胴欲な、わたしを先へ手にかけて、殺してやいの我夫」と、命惜まぬ武家育、涙色めく婉孌の、袂は戀の淵ならん。涙隱して山三郎、山三「ヤアいらざる繰言嗜まれよ。敵へ漏ては互の恥辱、そこ放されよ」と突き退る。玉露「イヤ〳〵わたしも倶に」と爭ふ後、久吉「ヤレ早まるな」と聲をかけ、立出る眞柴筑前守久吉、久吉「高松より使者に來りし玉露へ、山三郎を返し與ふる。又浦邊へは此書面、久吉が心を込めし清水殿への送り物、此役目仕果せなば拔群の高名手柄、早々小船にて歸城せよ」と、差出し給ふ情の賜、其文章は知らね共、一先城へ立歸り、其上生死を決せんと、

存じます、自らは高松の城將淸水宗治が使玉露と申者、淸水申越るゝ趣は、此方の家中浦邊山三郎と申すお若衆樣、サア其山三郎不慮に城内を拔出たる不忠者、御隱の由承はり、早々使者を以て所望に及ぶと雖も、御歸し下されざる段、我々共不審晴れず。もしや使の不念不骨なる事ばし有て、武士の意地を立ぬき御歸し下されんも計り難し、此度は汝參つて御機嫌の窺ひ、同道して立歸れと有る使の口上、御前宜しく御披露」と、詞のあやも玉露が、詳に相述る。安德寺詞を正し、安德「玉露の申さるゝ通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方よりも使を立つると雖も、御承引なきによつて、頭役に愚僧が使、兎にも角にも貴所の御執成偏に頼み存ずる」と、頭を下れば加藤正淸、正淸「何事かと存ぜしに、浦邊に付て昨日といひ今日といひ、何か事も有さうなる三家の胸中、軍は脇へ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さるゝは、此虎之助一切合點參らね共、女儀の使出家たる御方を、追返すも大人氣なし。取次は致し申さんが暫時隙入事も有らん。あれなる一間に相待れよ」「然らば後刻」と式禮目禮、玉露引連れ安德寺、左右へこそは別れ行く。朱明の空も一面の、雲かけ隔つ浮草の、浪に漂ふ山三郎、又降雨に足音の、紛れ出るもしめぐと、いとど憂さをや重ぬらん。後の此方に玉露が、物音窺ひ立出る襖もそつと人目の關、盡ぬ緣の顏と顏、なうなつかしの山三樣、御身にお怪我はなかりしかと、縋付いたる振袖の、竝ぶ翼や連理の

兵具靫と竝べしは、事嚴重に見えにける。太郎兵衞治郎兵衞と呼集め、落葉枯枝を搔き寄せて、濕氣を拂ふ雜兵共、一つ所に寄集り、雜兵「何と斯した所は、かんしやうゆうの煙と出かけた」雜兵「ヲヽサ〳〵、今にも合戰というたら、戰場の切合、集錢出しの呑喰、軍場の小商人の手目上させてやらうもの、何をいうても長の籠城、我身で我身の儘ならぬ」と、重き口から空ぞめき、珍紛勘六智慧あり顏、雜兵「へヽヽヽ、尤なり勇しよ、某迚も戰場に出立ちなば、彼唐土のあぼす東六が奇計を以て、鎗先尖き餅田樂、串ざしながら摑喰、鬼殺しと見るならば、あたり次第に呑乾て、代物といふ大敵には喰逃呑迯、早いが勝」と惣々が、咄しの耳を突拔く鐘、雜兵「スリヤこそ軍が始まる」と、達者な物は口計、足もしどろに立て行く。スハ事こそと加藤正淸、一間を出る庭先へ、雜兵一人駈來り、雜兵「只今遠見いたせし處、怪しの兩人陣中さして參るよし、引捉へて詮議に及び候處、郡高松兩城より使者として、女一人僧一人。通しませうや」と伺へば、正淸「ホホ使者と有れば捨も置れず、案内致せ」と追立やり、待つ間程なく取次に、從ひ來る葉月の使者は二人の品形、振の袂に名香の、高き寺僧諸共に、使者の座にこそ著きにける。正淸威儀を繕ひて、正淸「是は〳〵郡高松兩城よりの使と有て珍事の御兩人、お使者の趣承はり、加藤取次仕らん、樣子いかゞ」と正淸が、尋ねに受持つ玉露が、玉露「ハア、正淸樣とやら、お取次の段御苦勞に

へ味方の郎等片山藤太、水に浸せる惣身の、汗諸共に押拭ひ、藤太「仰の如く水中を潜つて敵の陣所に近付き、事の様子を窺ふ處、猶も流るゝ水筋を、堰き切る手當の石櫓、或は土俵蛇籠の用意、是を支ふる清水が郎等、忍び入て水筋を、切らんとあせれど敵陣の、備は名に負ふ加藤正清、近寄る軍兵事共せず、右と左に薙立て追立て切伏られ、水の哀れと流行く清水が勢の敗軍は、目も當てられぬ無慚の有様、斯くて空しく時日を送らば、底の水屑と成行く城兵、御賢慮有て然るべし」と、息継ぎあへず訴ふれば、隆景は打點頭き、隆景「かく迄敵に取切られ、拔駈けして高名せんとは、自殺を招く清水が城兵、只此上は惠瓊老、宗治と申談ぜし如く、玉露諸共久吉が陣所へ立越え、兩家和睦の計略こそ肝要ならん」と、隆景が詞にはつと頭を下げ、安德寺「修羅の巷へ出家の身の、入べき筈はなけれ共、危急を救ふも敎の道、玉露様には御用意有」と勇み進めば、隆景「神妙神妙、兩將へも此趣具に某言上せん。イザ兩人も本陣へ、同道申さん來られよ」と物に馴れたる小梅川、其名薫し武士の、刃切れ尖き直燒刃、鍛ひに鍛ふ隆景が、譽れは世々に顯はせり。

同五日の段

聞鱗山揮一同して、風雨烈しき中國の、物騷しき蛙が鼻、久吉公の陣館、亂杭高垣幕結ひ廻し、

暫時の休息あるべし」と、詞の折もこなたなる、茂みの枝に飛違ふ、數多の鳩が爭ふ餌ばみ、隆景屹度打詠め、隆景「ハァあれ見よ、只今鳥類の餌ばみの爭ひ、思ひ合すは昨夜の夢、我陣中へ飛來る村烏、色めきたる草葉を啣へ、塵塚山をなしたると見えて夢散せしに、目前人を恐れず餌による鳩の嘴先にて、責つゝきたるアレあの蔓物、瓜は春長の紋所、三つ五つは五體を表し、其身を包む衣服こそ敵の城廓、鳩は源家の臣鳥、我は清和の末孫たり。此蔓物の瓜によりし、尾田春長を一戰に、討取べき神の告か、但しは既に變ある告か。ハテ怪しや」と明慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩の、不思議は後にぞ知られたり。安德寺進出で、安德寺「ハヽ智人の仰至極せり。唐土周の世に當つて、赤色の烏武王の陣に泊る、人々怪しみ迷ふといへども、大公望是を吉なりと悅す。果して其詞違はず、周武の正に天下と成る。君に眞其如く、今陣前に鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞、愚僧もそぐはぬ戰場の、役目もやはり此姿、赤色ならざる此衣の、頭ごかしに取入つて、强氣の尾田方取挫ぐも、國家の御爲天下の爲、玉露樣にも御油斷有るな」玉露「ホヽヽ、御念に及ばぬお僧樣、わたしも名にあふ清水が妹、見馴れ聞なれ軍學軍術、夫に迫り力を合せ、味方の怒り兄樣の、無念を晴らすは敵の大將久吉が、首討取て立歸らん、やはか仕損じ申べき」と、詞涼しき玉露が、怯める色なき武家育、さも勇しく見えにける。かゝる所

く、三家の心もまう〳〵たるに、三澤久代が非道の企、隆景が見察違はず白狀の上、國元へほつ返し、禁籠申付し上は、敵方へ裏切なさん妨なければ、先此山の頂に柵を結ひ敵陣を見づもり、明日中には攻かゝり、敵の勇氣を試んは、サア〳〵いかに〳〵」近習「ハヽヽ、仰迄も候はず、我我共は先手を乞請け、雌雄の合戰、一命は風前の塵義は金鐵、千變萬化とかけ破り、さしも名を得し久吉が、頭を取んな瞬く內、御心安く思召せ」と實勇しく見えにける。遙向ふに人音は、何者成るかと見やる內、現世未來を一寺に納め、大地の僧頭安德寺、淸水が妹玉露姫、伴ひ步む一木の影、それと見るより手をつかへ、安德寺「ハア隆景公には御健勝の體恐悅至極。拙僧今日淸水長左衞門樣へ御陣見舞に參りし處、妹御玉露樣を以て何か密談の御使、味方の諸士にも心置く籠城、幸なる安德寺誘ひくれよとの御賴、委しき仔細は存ぜね共、是迄同道仕る」と、申上れば玉露も、面はゆげなる顏を上げ、玉露「女のあられぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景樣の御賢慮を、伺ひました其上と、兄上の差圖故、安德寺樣諸共に、御見舞かた〴〵參りし」と、差出す文箱小梅川、手に取上げて讀下し、隆景「ムヽ一旦和議を相調へ、事を計らん計略有と、先達て申遣はせし所、此使に惠瓊老、淸水が妹玉露を、差越んとは面白し。去ながら大寺の住職、敵陣への使者とは憚り有れど、他聞を恐れる密事の大役、足下ならでは叶ひ難し。先々陣屋へ入らせられ、

然れば父の鬱憤を散ぜん時節なしと、透を窺ひ本望は達したれ共、御赦しなき敵討、いかなる咎あらんも知れず。惜むべき命にはあらね共、亡兩親の跡をも營み、其上にて切腹致す我存念。暫しが程の御恵、御聞屆下さらば、忘れ置かじ」と手を摺て、頼めば正淸嫣乎と笑ひ、正淸「ホヽ事明白なる汝が願ひ、尤其理なきにはあらね共、敵々たる此時節、諸卒の疑念も如何なり。萬事は主人の賢慮に有らん。日も早西に傾けば、イザ同道」と正淸が、深き心の計らひや、士卒來れと夕映の、下知の詞にハヽはつと、立上れども内心は、久吉討ん血氣の若者、毒蛇の口の水筋を、伴ひてこそ行過ぐる。向ふ遙に漕渡る、主は誰共白浪を、振と衣の戀無常、急ぐ船路や行く空も、浮世なりける次第なり。

同四日の段

東魚來つて四海を呑む、西鳥來つて東魚を喰ひ、四海既に穩ならざる戰場の、地の理を窺ふ山傳ひ、近習召連れ隆景は、しづ／＼谷間に立休らひ、隆景「ヤア／＼旁、此度の合戰誠に武門の晴軍、郡の枝城尾田が爲に悉く落城に及びし上、軍慮に賢き淸水が城廓、久吉が謀に乘せられ、入水と成たる高松の味方を助ん其爲に、遙々此土に陣を取れ共、敵の要害強くして、味方を救ん術な

もせよ心得ず」と瞬もせず見渡す向ふに、我組止んと數多の軍兵、小船に打乘り、右往左往に追廻せば、山三郎は水中を、潜ッつ拔つ働けば、鵜よりも早き水練水魚、そこよ爰よと組子共、うろ付中に舳先を持ち、えいやうんと打返せば、水は漫々小船の組子、浪の藻屑と成りにける。此有樣に殘りの兵船、進みかねてぞ見えにけり。此方の岸には正清が、何者なるぞ心得ずと、手ぐすね引き引き待つ所へ、血氣の浦邊は拔手を切り、忠孝二つを額に當て、飛鳥の如く遙の堤一聲諸共飛上れば、何者なるぞと取卷く雜兵目もかけず、加藤が前に兩手を突き、山三「某は郡家の家臣浦邊山三郎利氏と申者、高松の城内に於て親の敵を討取り、立退んとせし所、城中より討手かゝり手詰の難儀、何卒武士のお情に、御隱まい下さらば、生々世々の御厚恩」と、敬ひ入てぞ願ひける。加藤正清聲を荒げ、正清「ヤア紛らはしき願の筋、誠親の敵を討たば、武門の譽と郡家より、恩賞も有べき筈、返つて搦捕んとする高松勢、紛らはしき御邊の僞り、眞直に申されよ」と、疑ふ詞に、山三「ハヽア御尤なる御仰、某が討取し親の敵と申は、冠の城を拔出し、林丈左衛門と申者、我父李之進と聊の論により、父を欺し討に討たる奴、其無念止事を得ず、何とぞ怨を報ぜんと、主人へ敵討を願へ共、軍中とて取あへなく、剩へ敵丈左衛門は、淸水宗治殿に預けとなれば心に任せず、空しく月日を送る内、此度の合戰に付、久吉の計略にて、一城諸共兎の如く、水底の藻屑とならんは治定、

城外の水を潜り、久吉の陣所へ馳込、僞りならざる次第を頼み、隱まひ貰ふが術の第一、敵の空虚變の次第、相圖を以て知らされよ。折も有らば眞柴を討取り、名を末代に殘されよ。サヽ、一時も早う〳〵」と急き立つ淸水、山三「ハアヽコハ有難し、武士の數にも入べき大功、命を的に仕果せて立歸らん」と、駈出す。やり梅「ヤレ山三樣お待なされ、玉露樣とのわりなき中、最前ちらりと、ナ、イヤ申し宗治樣、お妹御と浦邊樣との二世の御緣」宗治「ホヽ好き合うた二人が中、門出を祝する」扇も時の島臺土器、松は元來常磐木の、袷にはあらざる松竹梅、末廣びろと夫婦の固め」山三「ハアヽ重々の御恵、玉露殿も隨分無事で」玉露「お前もお怪我のない樣に」と、立派に言へどなま中に、馴し枕の紲れ髪、離れがたなき兩人を、わざと制する宗治夫婦、扇屛風やあふぎの別れ、心定めて城外へ、飛ぶが如くに三重駈り行く。囊沙背水の謀を廻らし、見ぬ唐土の元帥も舌を卷べき奇代の軍術、水嵩增さる大河の流、堰止たる土俵岩石、大木運ぶ地車の、木やり音頭も跛馬、揃はぬ肩も降參の、空腹武士と知られける。加藤は土手の高みに上り、正淸「ヤア者共、汝等はこと〳〵く降參の者共なるに、此度の勤功、大將始め某迄滿足せり。此合戰終りなば、急度御扶持有べきぞよ。ソレ兵粮を遣ひ終らば、暫時は休息致すべし」と、下知を傳ふる其内に、向ふに何か騷ぎし人聲、正淸きつと打詠め、正淸「ハテ合點の行かぬ、高松の城外に怪しき取合ひ、何に

居たりける。慌しく庭先へ、士卒一人馳來り、士卒「何か談ずる筋ありと、郡家よりの使として、安德寺和尚只今本陣へ參著せり。殿にも早く御越」と云捨て家來は引返す。長左「ム、汝が歸城の上安德寺の使の樣子聞捨難し。是より諸士に對面致し、事の仔細を申聞ん。其方は郡より預り有る丈左衛門、囚人同前なれば、萬事心を付よ。サ行け〱」やり梅「心得ました」と立上り、奥と表へ引別れ、二の丸さして出て行く。雨吹拂ふ松風の、夏山籠し蟲の音を、しるべに漂ふ浦傳ひ振も小褄も甲斐々々しく、夫を導く健氣の玉露、花も木草も落花狼藉、互に切合ふ穗先と穗先、汗に浸する計なり。いらつて切込む太刀先を、しつかと受止め丈左衛門、丈左「ヤア小賢い浦邊山三、儕が親の杢之進、評議の席にて某に惡口吐し入耳蟲、討て捨てたを恨に思ひ、刃向立は及ばぬ事」山三「ヤアぬかしたり丈左衛門、さいふ儕は、冠山の落城を外に見て、當城へ迯込し人畜生、父の怨旁の恨、思ひ知れよ」と刎かへす、刃尖き雙方が、受つ流しつ烈しき爭ひ、見る玉露は心も空、山三が念力通じけん、林は刀打落され、逃んとするを切伏せ〱、父の敵覺えよと、のつ懸つてとゞめの刀、首引切つて大地に打付け、山三「ハヽア嬉しや〱、コレ玉露殿、禮は未來で」おさらばと、腹搔切らんとする所、戻りかゝりし長左衛門、やり梅諸共走出で、宗治「ヤレ死るとは狼狽者、赦しもなき敵を討ちし言譯の切腹ならば、某が計ひを用ひ、まさかの時の討死こそ武士の道。

に違ひなくば、まだ云聞す仔細も有り、此方の部屋へ」玉露「そんならかう」と手を取て、顔は上氣にちる花の、玉露姫は情の露、濡に彼所へ入りにける。折もこそ有れ立歸る、館の主清水長左衛門宗治、智勇を兼し其骨柄、跡に從ふ女房は、まだ十九二十二つ三つ、雪の白粉やり梅が、紅花色添ふ嬰子を、抱き痛はり立歸る。宗治は眉をしわめ、宗治「ヤイやり梅、晩春の末より三家へ人質、忰諸共遣はせし處、いまだ合戰の勝利も決せず、敵に圍まれたる此城中へ、歸されしは仔細があらう。何と〳〵」紅梅「ハア丶尤のお尋、此度三家御加勢に向ひ給ふといへ共、手を空しくして日を送り、水の手一つ切る事叶はず、無念さは夫迚も同じ事、もし討死致されては大事と成る、手立を以て一時の合戰は遠からじ。それ迄は英氣を養ひ置かるゝ樣、憂を晴すはコレ此若、隨分々々やり梅も、心を付けよとはけしき御諚。此子の顔も見せたさ見たさ」と懷に受持つやり梅が、色ぞ籠りて見えにける。義に張詰し宗治は、指折りて日を數へ　宗治「今日は早六月三日、皐月の末より敵方に、大變有る凶星を見極め置きつるに、土俵を突上優長なる仕方、間者を以て敵方の樣子、聞出さんと思へ共、是ぞといふ謀なく、空しく入水する時は、後々諸人の物笑ひ、降參するは家名の恥辱、是迄度々の合戰に、不覺をとらぬ宗治が、猿冠者如きの計略、斯口惜き籠城も、天より我を責給ふか」何とせんかとせんと、名に秀たる武士も、傾く運と突息も、天を睨んで

の合戰、強勇も手に汗握る計なり。武家の家でも姦き奴共は寄集り、姶「何とあげは、每日々々降る雨で、水の增るが癪の種、是といふも尾田勢の皆仕事、中でも憎いは眞柴とやら松葉とやら、突さがしてやりたいわいなう」あげは「サヽコレ〳〵、其突序にお痛しいは、妹御の玉露樣、浦邊山三郎樣に强い惚樣、大方埒の明く時分に成つて、山三郎樣の爺御杢之進樣、アヽ林丈左衞門めにお討れなされた故、此程はふら〳〵と戀病ひ」姶「ヲヽ左樣かいなう、此方も覺の有る事、どうぞ首尾して上げましたい」と、逍柔しき女の情、打連れ一間へ入にける。思ひ内に有れば、其色眼中にすゝむとかや。父の最期に亂れ髮、無念の仇を角額、浦邊山三郎利氏は、主の留守を窺うて、林を一太刀恨んと、屋敷へ入込む生死の境。斯と白齒の玉露が、出合頭に見合す顏、はつと驚き引返す、袂に縋り、玉露「コレ待て給べ浦邊樣、お前は深いお望が、有てのお越と、見たに違はぬ形かたち、其お姿に戀ひこがれ、送る千束の返事さへ、ないは無情いお心ぞ。せめて一夜の添臥を、赦して給べ」と取付いて、じつと締めたる手の内に、心餘つて見えにける。山三「コレ〳〵聲が高い。推量の上は包むに及ばず、隱まい置かるゝ敵丈左衞門、何卒今日中に手引して、勝負を遂げさせ下さらば、此方の心も無息にせじ。サヽ何と」と急いたる面色、玉露も胸を据ゑ、玉露「成程々々、わたしが爲にも舅御の敵、折を見合せアノ垣越に御案内申ましよ」山三「ホヽ其詞

太鼓、亂調に打立て〱、先に進みし田島の頭、手勢引具し一同に、喚き叫んで攻かくれば、春長公一越調、 春長「反逆光秀は何所に有る、主に背く天罰思ひ知らせて呉んず」と、弓杖ついて詈る大音、さしも勇ある武智勢、恐れて思はず進みかね、避易隙に差詰引詰め、射給ふ矢先に先手の軍兵、はた〱〱と射斃され、仇矢は更になかりける。此虚に乗て坊丸力丸、鑓を捻つて八方へ、突立て薙立て阿修羅の如く、廣庭さして追て行く。客殿には春長主従、膝を竝べてどつかと坐し、力丸無念の歯がみをなし、 力丸「エヽ口惜や、往昔天文年中より、今天正十年迄、四海の内に横行して、武威を以て天下の兵亂を切しづめ、民の塗炭の中に救ひ、四方の敵國君の英名を、鬼神の如く恐れふるひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしに、逆臣惟任が爲に空しくならせ給ふとは、天魔の所爲か口惜や」と、血汐に注ぐ血の涙、止めかねたる計なり。春長一言の詞もなく、御佩刀を脇腹へ、がばと突立て引廻す。倶に冥途の御供と、力丸坊丸殉死の切腹、無慙といふも餘りある、御身の果ぞ 三重 哀なり。

同三日の段

董卓は漢室を燒捨て、伯知は水を以て趙を浸す、例を爰に眞柴が軍師 名に高松の城廓も、水死

人し、蘭丸が宿の妻、心殘さず成佛せよ」と、仰に手負蘭丸も、はつと計に有難涙、顔に紅葉の唐紅、血汐に染る兩の手を、合すも二世の名殘ぞと、物言ひたけげに夫の方、御大將を伏拜み、笑顔を娑婆の置土產、あへなく息は絕えにけり。歎を外に御大將、勇を付んと、春長「ヤア〱蘭丸、我は是にて討手を引受け、此場を去らず討死せん。汝は是より馳向ひ、敵の奴原一泡吹かせ、名を萬天に輝かせよ」と勇め給へば、蘭丸「ハア〱ハ、、、仰にや及ぶべき、たとへ光秀何萬騎にて寄する共、片端撫切り捲立て、君の御供仕らん。早おさらば」と立上れば、涙を拭ひ宗祇坊、局を諫め勸むれば、是非も涙に袖の浪、漂ひながら若君を、宗祇が背に確乎と、是ぞあふぎの憂別れ、見かへる名殘見送る名殘、又立戻るを蘭丸が、中を隔つる鯨波、早亂れ入る諸軍勢、切立て薙立て女武者、其名も高く假名書の、筆に留めて末の世の、美談とこそは三重成にける。寺中は合戰眞最中、力丸蘭丸一同に、一進一退離散して、或は討たれ或は討ち、續く新手も有らばこそ、堅甲利兵の大軍を防ぎ戰ひ、流るゝ汗と湧出る血汐、唐紅に水くゝる、龍田の川に楓葉の、落て流るゝ如くなり。寄手の從將安田作兵衞、春長を討取らんと、塀際にさし寄れど、味方の勢に隔られ、たやすく內へ寄付かれず。得たりと鑓を力杖、えいと一撥高塀に、飛上りたる早業早速、目覺かりける次第なり。さしも名高き靈場も、修羅の巷と鳴る鐘の、天地に響く陣

とどうと伏し、歎沈めばお道理と、心を汲んで諸袖を、絞るしのぶが倶涙、泣音を添ふる計なり。數多の切首片手に引提げ庭先へ、立歸つたる森の蘭丸、それと見るより春長公、春長「ホヽ今に始めぬ汝が働き。シテ〳〵樣子は如何に〳〵」蘭丸「されば候、一條の御所へは明智光安立向ひ、當手の寄せ手は左馬五郎光俊、采配取て嚴しき下知、なれ共味方は必死の勇者、御覽の如く首討取り、一泡吹かせ候へ共、始終の勝利は」春長「成程々々、只此上は潔く、死出三途も主從倶に。サア今聞く通り我覺悟、早く此場を落延ぬか、但し三世の緣切うや」局「サア其儀はなア」春長「緣切が悲しくば、一時も早く落延よ」蘭丸「コレサお局、君の先途を見屆くるは此蘭丸、片時急ぎ裏門より。宗祇坊は何を茫然」宗祇「ヲツト合點。イヤもう最前から落ちたうて〳〵氣は上つり。コレ〳〵しのぶ殿もお供の用意」といへど遉に忍夫、云ひたい事も面伏、萎れ泣く〳〵立上れば、蘭丸聲かけ、蘭丸「しのぶは君の御供叶はぬ」と聞て恟り驚くしのぶ、しのぶ「エヽそりや何故」蘭丸「ホヽ汝にお咎なけれ共、そちが兄齋藤藏之助、光秀に一味の反逆、敵の末は根を斷て葉を枯す、命を助け其儘歸すは是迄、サア是迄君への宮仕」と明て言はねど妹と脊の、中を隔の垣となる、しのぶが憂身詮方も、涙ながらに用意の懷劍、咽にがばと突立れば、コハ何故と驚く人々、大將春長感じ給ひ、春長「ホヽ女ながらも遖の生害、兄とひとつでない潔白、今日只今春長が仲

り森の力丸、廣庭に大息つぎ、力丸「御油斷あるな兄者人、武智光秀我君に、多年の恨を散ぜんと、手勢選つて四千餘騎、左馬五郎を始とし、或は齋藤藏之助築地間近く押寄せて候」と、いふ間もあらず蘭丸は、其儘ひらりと、飛下りて、蘭丸「我君には恐れながら防ぎ矢の御用意有つて然るべし。イデ某が彼處に向ひ、一當あてて眠りを覺さん。力丸來れ」と兄弟は、飛ぶが如くに馳行く。跡打見やり春長公、春長「この上は防ぎの一矢、まづ差當つて一大事は三法師。ヤア〳〵宗祇、若を誘ひ早く〳〵」御諚の下にかひぐ〳〵しく、しのぶ諸共茶道の宗祇、若君抱き參らせて、足もわな〳〵胴振ひ。しのぶも倶に狼狽付く所へ、多勢を切拔け阿野の局、其身は數ケ所の痛手ながら、血に染む長刀かい込で心も強に立戻り、局「申し〳〵我君樣、最早敵は込入て候へば、君に代つて一軍、御身を遁れ下さるべし」と、口には言へど御名殘、涙彌增計なり。春長「ヤア愚愚、なまなか身を遁れんと、却つて名もなき奴原に、首を渡さば死後の恥辱。汝は我に成かはり、宗祇引連れ三法師を、何とぞ守護し落延びて、此旗諸共久吉が手に渡し、我存念を晴させよ、猶豫は却つて不忠の至り」と、仰にわつと泣崩れ、局「たとへ不忠になるとても、君の御最期外になし、何と此儘落られう、此儀はお赦し下さりませ。是を思へば自が、宵の酒宴の其時に、斑女が閨の嘆言、其一さしの扇とは、別れを告げし前兆かと、思ひ廻せばいとゞ猶、悲しいわいの」

蘭丸「ハテ扱たしなみや。人目を忍ぶ二人が中、殊に今宵は君の宿直又の首尾を」と振切るを、無理に引立て奥の間へ、入やいるさの月影に、しのぶの亂れみだれあふ、わりなき夢や結ぶらん。早更渡る夏の夜の、そよ吹く風も物凄く、寐られぬ儘に御大將、手づから障子押開き、何心なく茂みの方、見やり給へばさは〳〵と、驚き騒ぐ塒の鳥、春長「ハテ訝かしや、まだ明やらぬ夏の夜に、庭木を離れ騒ぐ群鳥、合點行かじ」ときつと目を付け、怪み給ふ時しもあれ、遠音に響く鐘太鼓。春長つゝ立ち耳そば立、春長「アレ〳〵次第に近付く人馬の物音、宿直の者はあらざるか、急ぎ物見を仕れ」と仰の下より阿野の局、長刀かい込み走出で、局「君の大事に候ぞや、蘭丸殿は何所にある、早く物見を致されよ、妾も倶に」と表の方、呼り〳〵かけり行く。聞くに蘭丸一間より飛で出れば春長聲かけ、春長「ヤア〳〵蘭丸、反逆有と覺えたり、急ぎ物見を仕れ」と、上意にはつと蘭丸は、振返り見る廊下の高欄、「是幸の物見ぞ」といふより早く駈上り、四方を急度打見やり、蘭丸「物の黒白はわからねど、此本能寺を目ざし押寄するは、察する所武智光秀」春長「スリヤ光秀が反逆とな。今こそ後悔汝が諫、聞入れざるも傾むく運命。只此上は防の用意」蘭丸「ハア委細承知仕る。が縱一致に防ぐ共院内僅三百餘人。思へば〳〵主君と倶に」春長「蘭丸」蘭丸「我君樣、チエ、口惜や」と主從が、怒りの齒がみ逆立つ髮、無念涙の折からに、表の方よ

く油斷大敵」春長「ハテサテ局迄が同じ樣にいらざる此場の長詮議、御客人が嘸ふら〳〵眠り、身もほつと退屈、イデ一睡の夢の間の、契りはいざ」と戲れて、座を立給へば阿野の局、若君誘ひしづ〳〵と帳臺深く入給ふ。跡にうつとり蘭丸が、心一つにとつ置つ、思ひは同じ女氣の、人目しのぶが寄添ひて、しのぶ「申し蘭丸樣、もう何時でござりませうなア」蘭丸「これはしのぶ殿、そもじはまだ奥へ行かずか」しのぶ「アイ」蘭丸「ハテ扨それは不埒千萬、御用もあらん早奥へ」と、いふ顏じつと打詠め、しのぶ「ほんにまあ女の心と男とは、それ程迄違ふものか。只齋藤藏之助殿にお頼み申して、春長樣の奥勤も、あなたのお傍に居たいばつかり。今更いふも恥かしながら、去年の初春洛東の、地主のお庭の花盛り、媼共に誘はれ、願ひかけまく初戀の、色も香もある殿御ぶり、觀音樣のお仲立、互の胸の下帶も、とけて嬉しい新枕、變るまいぞのお詞が、直に心の誓紙ぞと、片時忘れぬ女房が、お傍に居るがお厭なら、いつそ手にかけ給はれ」と、ひんと拗木の絲櫻、花も亂るゝ風情なり。さしもに猛き蘭丸も、心の外の曲者に、取挫がれて背撫さすり、蘭丸「イヤもう何事なう申せしが、お心に障らば眞平々々。百萬の强敵にもびくともせぬ某が、斯の通り」と手をつけば、しのぶ「エヽ又人を術ながらすのかいなア。春長樣も大方に、班女が閨のお睦言、お局樣の取梠で、出船の相伴、サアござんせ」と手を取れば、

猶裏表ある物は、人心なりけるぞや。あふぎとは空言や、あはでぞ戀はそふものを〳〵。春長「局が一曲出來た〳〵。悴春忠が名代孫殿へ御馳走に、何と面白いか。サヽつけ〳〵」と大盃、はつと心得しのぶがお酌、「蘭丸へさす所なれ共、阿野の局が舞の一手、勞を謝する其爲に、局へ盃さし申す」局「是は〳〵不束なる一奏、御意に叶うて此上もなき身の冥加」と、言ひつゝ局は御盃、少し引受け差置けば、春長公笑壺に入り、春長「ナニ蘭丸、局が間を仕れ」と、重き御諚も諂なく、蘭丸「コハ仰に候へ共、一滴も及ばぬ某、此義は偏に御高免を」春長「ハテ扨呑ぬ所を呑すが興、肴は汝が望次第」蘭丸「すりや御肴を下されうとな」春長「ホヽ六十餘州を手に握る此春長、サヽ何なり共望め〳〵」蘭丸「ハア然らば何とぞ此蘭丸に、軍勢を四五千計下し給はらば有難からん」と相述れば、春長「ムヽ心得ぬ汝が望、もし軍勢を與へなば」蘭丸「さん候、丹州龜山へ押寄せ、只一戰に光秀が首討取つて、君の災を避け申さん」春長「成程尤なる願なれ共、いらざる心配無用々々。左樣な事に骨折らずと、早く一盞を傾けて、暑を凌ぐが身の養生」ウタヒ飛立計り有明の、夜晝となき樂しみの、春長「榮花にも榮耀にも、此春長に及ばぬ〳〵」蘭丸「我君の御諚には候へ共、安土の無念を散ぜんと一度は謀叛の旗を上げ、窮鼠却て御身の大事」春長「ア遉は若氣、北國には柴田勝家、西國には眞柴久吉、龍に翼の尾田春長」局「君の御諚は去事ながら、蘭丸殿の詞の如

下郎「何と三助、暑くて堪へられぬぢやないかい」下郎「ヲヽサ此下郎には何が成る、朝疾くから手桶の切り水、暮れ方も又此樣に、汗水に成てのはき掃除、俺も後の世には大將に生れて來べいと思ふが、如何であらうなア」下郎「されば此本能寺を假殿にしてござる春長樣は、前生は鬼だといへば、奴が大將にならぬ事も有まいわさ」と、いへば傍から珍內が、珍內「ハテ扨二人ながら何を言ふぞい、死での先は片便り、奴から大將に生きながらなられた眞柴殿、それを知りつつ、ほんにやれ〳〵來芝の事は由男にして、山村程今をため、里虹者ぢやといはるゝ市紅が肝心だ」と、どつと笑ひの折こそあれ、下郎「アヽコリヤ〳〵、あれに見ゆる御先供、南無三、春忠樣の御入だ」と、猫に鼠の奴共、己が部屋へと迯て入る。程なく近付く鋲乘物、數多の武士が前後を圍ひ、築地御門に舁据うれば、斯くと知らせに森の蘭丸、禮儀正しく出向ひ、蘭丸「阿野の御局、御苦勞に存じ奉る」と、詞の內に乘物の、戸を開かせて阿野の局、三法師君を抱まるらせ、しづしづと立出で、局「春忠樣の御名代と此君の御入故、祖父君春長公より御迎ひとして、自が守りまして參りしに、殊なう御機嫌も宜しく、お嬉しう存じまする」とのたまひければ、蘭丸「ホヽそれは一段、さぞ祖父君にもお待かね、いざさせ給へ」と蘭丸が、案內につれて付く〴〵も、門內さして 三重入にけり。ウタヒ 鹿の音蟲の音もかれ〴〵の契、あらよしなや、形見の扇より〳〵、

尾張、主を弑して一日も、安穏ならぬ天の責、お年寄られし母御樣、いとし可愛子供迄倶に惡名とらするが、夫が本意か情ない。妻子不便と思すなら、御身全う月と日の、曇らぬ鏡武士の、操を立てて給はれ」と、わつつ口說いつ理を責めて、夫を思ふ貞心の、思ひは千筋百筋の苧綛を亂す憂淚、止めかねてぞ見えにける。元來仁義の豐後守、光秀に打向ひ、豐後「文武二道の我君に、お諫め申は憚りなれ共、和漢の書籍に記せし通り、反逆謀反の輩が、本意を達せし例はなし。世に秀たる光秀公、高木風の俗語に等しく、皆佞人のなす所、時節を待つて誤りなき、申開きの手段はさま〴〵。上使に立し赤山と、君が五音を考ふるに、水火既濟の卦に當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝利有りと雖も、日あらずして災生じ、終に全からざる前表たゞ幾重にも思ひ止まり下されよ」と、事を分けたる諫の詞、いへども兎角の返答なく、光秀「ムヽ、心なき人は何とも言はゞ言へ、身をも惜しまじ名をも惜しまず」豐後「スリヤいよ〳〵御謀反の思立でござるよな」と、言はせもあへず豐後が首、討つてかたむる謀叛の首途、光秀「ハヽ、適々、此上は軍の手配、ホヽいで出陣の用意をせよ」「ハア」所存の程こそ。

同二日の段

急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下に屬し、戰功を勵むべし。其功勞によつて、出雲石見の兩國賜はるべき間、今迄下し給はる丹州近江二ヶ國は召上らるゝ旨城代へ申渡し、急ぎ城を明渡すべしとの嚴命なり」と、いふに人々二度恟り、主從顏を見合せて、暫し詞も口籠る。物に動ぜぬ光秀は、禮儀正しく上使に向ひ、光秀「ハア、台命の趣委細承知仕る、直樣是より西國下向、城あけ渡しの用意萬端、家中の諸士へも申渡さん」與三「ホヽ早速の領掌神妙々々。一刻の延引は一刻の不忠となる、出陣やら宿がへやら、がらくた道具片付て、はや〳〵城を渡し召され役目は是迄おさらば」と、憎體目禮取混ぜて、眞綿に針の靑疊、蹴立てこそは立歸る。一徹短氣の田嶋頭、四方天「コレサ御主人、今赤山が上意の次第、前後揃はぬ詞のはし〴〵、西國加勢と披露して、實は御身を改易し、自滅をさせんず春長が姦計。良禽は木を見て栖む、不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姫昌は殷を討ち、つひに天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今目前に顯はれたり、今隨臣の空虛を考へ、一時に尾田を討亡し、天下に覇たる功を上げ、名を千歲に留めんは、サヽ、いかに〳〵」と急立つ田島。やゝ默然たる日向守。始終こなたに立聞く操、襖あらはに走出で、夫の傍へ差寄て、操「忠義一途の田嶋頭、さら〳〵無理とは思はねど、勿體ない我君を弑して四海を奪ふとは、聞くもうるさい穢らはしい。罪は目前美濃

なり豊後守、主人へ恥辱を與へし素丁稚の蘭丸め、素頭引拔き立歸る、妨げすな」と振解き、行んとするを猶も引止め、豊後「イヽヤ其憤りは麁忽々々。汝が不骨は主人の誤り、返つてお家の仇とならん、先待たれよ」と支ふる九野、「シヤ面倒な」と勇氣の田島、放せ放さぬ二人が爭ひ、光秀聲かけ、光秀「ヤレ待て兩人、身が詞も出さぬ内、立騷いで見苦しい、靜まれやつ」と制すれば、物に怺へぬ田島頭、武智が前にぐつと詰かけ、四方天「縱 誤り有るにもせよ、丹州近江兩國の太守、殿中での打擲は、我々も倶に恥辱、頰恥を曝さんより、蘭丸めを打て捨て、叶はぬ時は生害と、覺悟極めし四方天、ナヽ何故お止なさるゝな」光秀「ヤア愚か〳〵。光秀を打たるは私ならぬ主命、スリヤ蘭丸に遺恨はない。元來短慮の御大將、心に叶へば飽迄寵愛、又叶はねばうち打擲、縱 命を召さるゝ共、君に捧し我一命、ちつ共惜まず厭はぬ某、我存念も知らずして、息筋はつて尾籠の振舞、靜まれ退され」と睨め付る。道理に逌 荒者が、行くも行かれず立つたり居たり、勇氣もたゆみ猶豫ふ内、下部「御上使の御入」と下部が聲。光秀不審の眉を皺め、光秀「ハテ心得ず、思ひがけなき上使とは。何にもせよ、女房紛は次へ立て、早く〳〵」と追立やり、威儀繕うて出迎ふ。案内につれてのつさ〳〵、役目を功に肩肘はり、頰も眞赤山與三兵衞上座にむんずと押直り、與三「上意の趣餘の儀にあらず、先達て眞柴久吉、郡三家を退治の爲、中國へ馳向ふ、

へず、操「夫光秀殿、十次郎諸共未明よりの御登城、殊に大事は今日のお役目、常々短氣な春長様、生れ付いた夫の一徹、何の障りもない様と、案じるは女の常、悲しい時の神佛と、手づからのお供物」豊後「是は〳〵、イヤもう萬事抜目なき光秀公、追付け吉左右上首尾」と、挨拶取々なる所へ、殿様の御下城と、知らせの聲に妻操、我子の乙壽諸共に豊後守も座を改め、待つ間程なく武智日向守光秀、常に變りし其面色、疊ざはりも荒々しく、不興の體に立歸れば、跡に隨ひ十次郎、しを〳〵として座に直る。夫の顔色額の疵、心ならずと操の方、光秀の傍近く、操「申し我夫、常にないお顔持、お氣もじ惡うはござりませぬか、お怪我でもなされたか、どうやら氣がかり胸騒ぎ、心がかり」と尋ぬれど、とかう答へもせぬ夫、十次郎顔振上げ、十次郎「今日二條の館にて、饗應司を勤むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我々へ様々の惡口雜言、それのみならず春長様、以つての外の御怒りにて、蘭丸に仰付られ、アレあの通り、父上の眉間へ疵の付程に、殿中でのうち打擲、目通りは叶はぬと、警固の武士に追立られ、無念ながらもおめおめと、顔押拭ひ歸りし」と、云つゝこぼす口惜涙、聞くより妻はハアはつと、胸を貫く釘鎹、豊後も倶に拳を握り、咬牙齒ぎしみ無念の涙。様子立聞く四方天、物をも言はず表の方、駈出す裾をしつかと止め、豊後「事を急いたる汝が顔色、仔細ぞあらん」と言はせも立ず、四方天「ヤア愚

舊惡を憎む御性質、諸士の恨は小車の、終に御身に報ふといふ、御心の付ざるは、へエ、淺ましや悲しやなア。御心を飜され適仁義の大將と、呼れ給はれ我君」と、或は怒り、或は歎き、五臟を絞る血の涙。思ひは千々に十次郎、父の心を察しやり、歯を喰しばる忍び泣、心ぞ思ひやられたり。金言耳に逆立つ大將、猶も怒りの聲荒らか、番長「ヤア言はれぬ諫言、推參至極、目通り叶はぬ立てうせう。ソレ〳〵蘭丸、武智光秀親子の者門外へ引出させ、早く〳〵」と烈しき下知、はつと領掌蘭丸が、猶豫は如何にときめ付られ、無念重る光秀が、我子を引立て出て行く、底意は誰かしら浪の、萬里に羽打つ大鵬や、面目涙十次郎、身は鷦鷯の片羽がい、父の心はしらにぎて、神も佛もなき世かと、身を嘆ちたる忍び音の、胸は暗闇五月闇、せん方涙諸共に御門の外へと、三重出て行く。名にし負ふ、花の都を隣して、時に近江の本城を、跡に見なして今爰に、假の舍の上屋敷、千本通りに一構へ、日向守光秀が、出仕の留守は操の方、夫子の武運長久を、神に祈をかけまくも、手づから備ふる神酒供物、殊勝に見えて爪はづれ、流石は武家の奥床し。折から次の襖を開き、出來る武士は武士武智が組下、九野豐後守、年も五十の分別盛り、操が前に兩手を突き、豐後「先以て今日は、林鐘の初日、大内にても氷室の節會、殊更太守光秀公、大公儀より饗應司の大役仰付られ、御家の眉目我々迄、大慶至極」と述ければ、操の方取あ

何と、さうではござらぬか」と、心に思はぬ傍若無人、さしもの光秀赫とせき上げ、光秀「ヤア物に狂ふか蘭丸、大切の場所と事を愼み、いはせて置けば法外千萬、今一言云つて見よ、舌の根を切下げん」蘭丸「ヲヽならば手柄に切て見よ」光秀「ヲヽ切て見せう」サア／＼と兩方が、互に詰寄り／＼、既に斯よと見えたる所、襖あらはに春長飛かゝつて光秀が、衿がみ摑んでどうど捻付、春長「やをれ光秀、凡武家の格式は、古實を以て式法を用ふる、過たるは猶及ばざるに若かじとは、古人の詞、院の內使も重けれど、皆それ／＼の例法あり、中納言殿饗應の膳部、金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥の如く鏤め、法外奔走。此後、主上仙洞の行幸には、何を以てか饗應に叶はんや。其上蘭丸が申は我詞も同然なるに、異變致す慮外者。頰打て蘭丸」「ハア」「早く打て」蘭丸「ハア／＼／＼、御上意なり」と蘭丸が、腰の鐵扇振上げて、眉間眞向續け打、喰入る要に血は瀧津瀬。是はと馳寄る十次郎、膝にかためて引敷光秀、流るゝ血汐諸共に、眼血走る無念の顏色。春長つく／＼打守り、春長「いかに光秀、今蘭丸が手を以て春長が折檻、口惜うは思はぬか」と底意を探る大將の、詞に光秀居直つて、光秀「コハ仰とも覺えず、數ならね共武智光秀、君に捧げし我命、骨は挫れ身はずた／＼に成迚も、大恩ある御主人をお恨申さん樣はなし。左は去ながら世の人口、春長こそ鬼の再來、情を知らぬ大將と、譏を殘し給はん事、末代迄お家の瑕瑾、

目八分に捧げ來る。蘭丸見るより、蘭丸「コレサ十次郎先待れよ、饗應の役目は、お手前の親父光秀殿と此蘭丸、兩人立合ひ申合せも有べきを、自分一人の取計らひ、此蘭丸は呑込めぬ、膳部の次第は如何でござる」十次「ハア御料理は板元奉行中井半左衛門、七五三の獻立」蘭丸「ナニ七五三、ハテナア何にもせよ、相役の某に一應のこたへもなく、氣儘なる致し方、近頃以て不躾千萬、此分では差置れず、光秀殿へ直應對、イデ役所へ」とかけ行向ふ。襖ぐわらりと出來る武智、蘭丸傍へぐつと詰寄り、蘭丸「樣子殘らず聞れしな、武士は禮儀を表とするに、此蘭丸を踏付し仕方、如何なる趣意か言へ聞ん、返答次第手は見せぬ」ときつぱ廻せば、光秀「ハヽヽヽコハ仰々しや蘭丸、遉若氣の一徹、何故貴殿を侮り申さん。最早御膳の時刻故、役目大事と勤る光秀」蘭丸「默り召され、饗應の役、貴殿拙者に相勤めよとは主人の云付、主命をもどき、自分の氣儘にせらるゝは、ヱヽ聞えた、こりや何か拙者を役に立ずと思召すか、但し又智慧者と呼れし武智殿、人を見下す高慢か。イヤハヤ、人も知つたる其元の素性、何か浪人の寄邊なく、所々方々をうろたへ廻り、北國に於て詮方なく、糧に盡たる身のせつなさ、土民共の小倅を集め、手跡指南の禮物で、命をつなぐ寺子やのお師匠樣。ハアヽまだ有、日外、江州佐々木征伐の折から、木下と先手を爭ひ、箕作和田山時限の合戰、久吉に仕負ても、恥を恥とも思はぬ其許、

の力に及ばん、三好を初め逆徒原、四方に退散いたせしも君の聖德、數ならぬ躮春忠身に餘つたる官位昇進、天恩謝するに詞なし」と、勅答有れば兼冬卿、やゝ滿足の御氣色。春長重ねて、春長「軍務に暇なき某、心計の御饗應、鄙びたる觀世能御上覽も時の興、イザ奥殿へ」と有ければ、袖かき合せ兼冬卿、武智が案内にしづ〳〵と、奥の間さして入給ふ。春長跡を見送つて、「蘭丸是へ」と近く召され、春長「汝も兼て知る通り、無二の忠士と思ひの外、心得難き光秀が心中、彼が心を探らん爲、いつぞや寺に於て諸侯の見る前、恥辱を與へ恥しむれど、面に怒りを顯はさず、無念を忍ぶ彼が胸中、猶以て不審の一つ、其儘にさし置かば、虎の子を飼に同じ。逆心の企有や虛實を探り試し見よ」と、仰に蘭丸、蘭丸「さん候、武智が行跡聊不審に存ずる折から、割符を合す君の御心、思ひ合する彼が俗性、頭上に喜怒骨有る者は、主人に祟ると異人の禁め、もし逆心に極まらば、討つて捨んに手間隙いらず、奥へ踏込み引捉へ」春長「ヤレ麁忽なり蘭丸、實否も糺さず荒立なば、却つて僻事出來せん、事によそへて、ナ、合點か」蘭丸「ハア、畏り奉る」春長「必ず油斷いたすな」と、牒合して春長公、帳臺深く入給ふ。蘭丸は只一人、兩手な拱んで思案顏、工夫を凝す折も折、奥は亂舞の打囃子、二番三番ワキ能も、終りと見えて配膳の、時刻も移る、巳の上刻、武智が一子十次郎、古實を守る饗應司、配膳のかけ盤山海の珍味を盡し、

君有つて臣、臣有つて君たる事を知らず、情なくも大國の主たる光秀殿を、童劣にうち打擲、天罰佛罰一時に報い、墮獄にくだしくれんず」と、怒り重ぬる額の天弓、光々として日運の、出現有かと身もよだつ。春長「ヤア〳〵物な言はせそ、早くも國境へ引立よ」と、御下知恐れ家來共、はつと計に引く繩の、頓て恨を知らさんと、題目の聲一心に、佛敵春長赦さじと、詞は正に本能寺御法の庭の露となす、佛の報い宗門の威力の程こそ三重

六月朔日の段

扨も其後天正十年六月上旬の事かとよ、内大臣平の春長、東北に猛威を振ひ押て都に上洛有る。御嫡男城之助春忠一條の御所に居をしめ給ひ、天奏御沓を入れ給へば、饗應の役人は武智日向守光秀、森の蘭丸初めとし、譜代の良臣古老の諸士列を正して相詰る。院の御所の内勅、浪花中納言兼冬仰出さるゝは、兼冬「往昔應仁の亂れより、諸國の逆賊王威を輕んじ、都の内へ軍馬を引入れ、玉座近く馬蹄に穢し、叡慮穩ならざりしに、幸春長大志を抱き、帝都を無事に治むる條、主上叡感淺からず、其功を賞し給ひ、嫡子城之助春忠を從三位に叙し左中將に任ぜらる、院の内勅、斯の通り」と有ければ、春長はつと平伏あり、春長「コハ有難き勅命、不肖の某、何ぞ一臂

び返すにあらず、汝等を番人に申付る間、其旨急度心得られよと、冥途の高祖へ申達せよ、不承知ならば直樣に晋天を以て冥途より返答有るべし、儕も法華の妙を知らば、二度此土へ立歸り、某に詞をかはせよ。最早左樣なる法力は有まい〳〵、一時も早く使を急がせよ、早く早く」と不敵の春長、重惡募る權威の仰、怺へ〳〵し晋天坊、ずつと寄つて齒嚙をなし、晋天「ヤアぬかしたり嘲つたり、汝が宗門で有りながら、高祖を輕じ奉り、惡口雜言報忽ち遠かるまじ。愚僧只今命を滅するも、汝が使に行くにあらず、閻魔の廳へ趣き儕が惡逆訴への爲に此世を去る。見よ〳〵頓て火の車を持せ、拙者迎ひに來るべし。サア一時も早く冥途の門出急ぎたし、イザ光秀殿介錯」と、罵る晋天を光秀がはつたとにらみ、光秀「ヤア我君に詞をかへし、惡言を吐く手間で、なぜ助命の願ひは致さぬ。恐れながら我君にも、御怒りを鎭められ、御助命の程偏に願ひ奉る、元來勇猛盛にして、良もすれば靈場佛地を破却し給ふ事、君の一失。山門の衆徒等も急難を遁れんと、一七日の加持祈禱、惡逆の勇將と、世の人口默しがたし、只仁惠の御計らひ偏に願ひ奉る」と、事を分けたる光秀が、詞に春長突立上り　春長「默れ光秀、我惡逆とは憎き過言赦されず」と、拳振上げ明智が頭りう〳〵、打据ゑ給へど手向ひの、ならぬも主命ハアはつと、誤り入たる無念の淚。晋天猶も怒りの顏色、晋天「エヽ惡鬼魔王といふは汝が事、

「御尤成る御尋、某考へ申せしに、草木心なしとは申せ共、佛地に育ち朝夕妙經を聞込み、一度枯れし木なれ共、元の如く榮えしも法華經の德ならずや、法力の尊きは御宗旨の有難き所なれば、君にも御滿足ならん。急ぎ佛地へ送還し給はるが、肝要ならん」と法印が、水を流せる辯舌は、實晴明の末孫の、器量顯れ見えにける。血氣の大將道理に迫り、春長「春長が手に入れし蘇鐵返すべき理由なし、暫らく妙國寺へ預くる旨、使者を以て申遣し、身が心に叶はざる法華の族、いはれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段々、牢獄へ押込め置たり、其上今日捕置たる普天一人、身が目通へ引出せよ、安部氏には休息有て然るべからん、久吉には麁略なき樣もてなすべし」はつと領掌式禮目禮、眞柴に隨ひ法印は、次の一間へ立て行く。程もあらせず下部共、普天坊を高手小手庭上に引据れば、光秀は普天に向ひ、光秀「ヤア貴僧、かゝる縛に遭ふ事も、法義故とは云ながら、獄の苦しみ察しやる。君にも是に御座ましませば、退つて出牢の御願ひナ、サ致されてよからん」と、普天を庇ふ明智が詞。尾田殿赫と怒りの面、春長「ヤア某が詞も出さぬ内、出牢の願ひせよとは、いらざる汝が贔屓の沙汰、控へて居よ」と居丈高、春長「ヤイ根ぐさり坊主よつく聞け、此度妙國寺の庭木の蘇鐵、某所望し此安土に植置きたる所、無上に妙國寺へ歸らんと吠ゆる、餘り喧しきによつて、暫らく彼地に預ける間、佛木たり共春長所望の上は、再

繪本太功記

發端

天にかなひし故やらん、八百の諸侯從ひて、紂王を討んと言ひしを、我未だ天命を知らずとて、諸の軍を引具し先歸りぬ。實戰國に大勇を示す亂舞の音高き、內大臣春長公の一構へ、遠近の諸士大半屬し、登城は櫛の齒を引く如く、さも嚴重に見えにけり。取次の侍罷出、侍「仰付けられし安部の法印、只今參著仕る」と申上ぐれば近習の面々、斯と取次ぐ間もなく內大臣平の春長、從ふ武士は羽翼の臣眞柴筑前守久吉、武智光秀諸共に、緣際近く座に直る。久吉下部に打向ひ、久吉「ホ、君にも殊なうお待かね、早く案內申せよ」と、いふ間程なく法印安部氏、適都の水淸く、淀まぬ公家の交りに、衣紋正しく入り來る。春長莞爾と打笑給ひ、春長「ホヽ、法印には大儀々々、其方を召寄せしは餘の儀にあらず、あれなる大庭の蘇鐵、泉州妙國寺に有しを、此安土に植置く所に、頻に聲を發し、妙國寺へ歸らん歸せく〳〵と震動する事三夜に及ぶ、正しく變化の所爲ならん、判斷いかに」と有ければ、始終を聞入る內よりも、理を考ゆる道々の、胸の算木に眉を皺め、法印

鎌倉三代記　終

繁昌、佛法繁昌武家繁昌、五穀成就願成就、佛力神力の整ふ國こそ目出度けれ。

家ハット計りにて、差俯伏て在せしが、稍有つて宣ふは、賴家「人窮する時は僞り、鳥窮する時は摑む、窮鼠却つて猫を喰ふとは汝等が事なるよな。エヽ過つた重忠や義盛、數度の諫言を思ひ出るも恥しや。覺悟極し上からは、命は更に惜からず、爰を放せ腹切る」と、二人を左右へ突倒し、既に斯よと見えける時、怪しや御座の疊の下、ぐわらり〳〵ぐわた〳〵と、百千萬の地雷、天地も崩るゝ如くにて、賴家卿の座ます、御座の疊の下よりも、ずつと差上げ朝比奈が踏んばたがつて立たるは、けんろう地震の湧出かと、恐れ慄く計りなり。判官漸〳〵氣を靜め、判官「ヤア後れたかかね〴〵に、示し合せし悴共、笠原中野は何所にある、出あへ〳〵」と呼はれば、朝比奈かッら〳〵と打笑ひ、三郎「甲に似て穴を掘る鼹鼠のへろ〳〵武士、御用ならば進上」と、ばらり〳〵と人礫、投げ出し〳〵投り出し、大太刀寛げずつと寄り、三郎「コリヤそこな護摩の灰、身が法力の鐵縛、三寸繩の數珠繫ぎ、ナント弟子にならぬか」と、二人が細首引摑み、えいや〳〵と絞付れば、眼を見出し血を吐て、「眞平御赦免〳〵」と、手を合するぞ心地よし。斯る所へ和田秩父、本田花垣駈來り、伊織「出來した〳〵朝比奈」と、煽ぎ立れば義秀は、三郎「コレ伊織殿、此法師めは其許で、御慰みに料理あれ、判官は某が、只今庖丁致すぞ」と、首宙に打落す。伊織もすかさず豪海を、氣も堪らず打放す。「チヽ潔よし面白し」惡人退治國

たりしが、徐り〳〵と忍出で、判官を見るよりも、豪海「ヤア比企殿か」判官「法印か、先々君の御容體、如何渡らせ給ふぞや」豪海「然れば次第に日を追て、元氣弱らせ給ふと見え、正體も無き御風情、コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條など御居間に詰かけ、御家督の沙汰あらば、貴公の仇とならん事、鏡にかけて見えた事、此頃心を盡されし、用意如何」と囁けば、判官莞爾と打笑ひ、判官「御坊氣遣なさるゝな、そこらは疎忽らぬ呑込だ。言るゝ通り毛蟲めら、病ほうけの頼家に、差込れては年來の大望が成就せぬ、所詮本復ない命一思ひに刺殺し、御家督は一幡へ御相續の遺言と、鎌倉中へ披露せば、差詰め拙者は執權役、悴どもは自から、外戚の威を振ふべし。貴僧へも又千石か、二千石は知れた事。其上にも和田秩父、北條などが意地ばらば、片端から欺し討。コレ床の下を掘拔いて、忍びの者を入れ置た、悦び給へ」と云ひければ、豪海ぞく〳〵小踊し、豪海「ハテ御殊勝な御了簡、萬事は賴み上ます」と、頷き合うて居たりけり。頼家卿それぞとは、夢にも知らず御寐間より、徐々と歩み出で、兩人に打向ひ、頼家「今日は一入氣も勝れず、宿直の者がつく〴〵と、取廻すのも鬱とし い、暫く爰で語らう」と、打解け給ふぞ危ふけれ。二人は悦び目配せし、左手右手より飛かゝり、刀を胸に押當て、判官「コレ迂愚殿、どうで快氣のない命、生けて置ては某が、大望の妨げ、覺悟なされ」と突掛る、頼

のこほりに、白無垢却つて唐紅の、花も紅葉も月も雪も、人間萬事は胡蝶の戯れ、酒は仇をば結ぶの刃、色は命を切るの鉞、皆をり捨て今日より政道正し給へ」と、聲華やかに夕告鳥の形は其儘消てんけり。賴家泣く〳〵慕ひ惑うて、座敷の隈々此所よ、其所よと尋ね廻れば、又立歸るえんぶの有樣、向ふに翻然と形を顯はす。抱き止んと走り懸れば、其儘消えて電光石火の、水の螢のちら〳〵、ちらり〳〵と立廻ろ、面影月影諸共に、あくろ詫しと云ふかと思へば、形は其儘元の掛字に立戻り、畫空事とぞなりにけり。賴家はつと手を打て、「迷悟三界唯一身、昨日の酒の醉醒て、今日は衣の玉を得つ、家には子あり弟あり、國の警衛は和田秩父、動ぎなき世の鎌倉山、我身は思ひきりが谷、唯今幽靈道場へ、手向の花」と、髻を、切て彼所へ投げ給ふ。順緣あり逆緣あり、共に成佛得脫の道とは、往古の聖人も說き置き給ひけり。

第五

天道は滿るを缺き、地道は驕奢を憎むとかや。扨も判官能員は、若狹の局自害故、積惡世上に露顯の上、先つ頃より賴家卿、御不例甚だ重うして、事極り見えければ、謀計日夜身に迫り、野心の胸に手を置て、御次に控へ居る處へ、願行院豪海は、御祈禱の爲宿直して、御枕元に居

に出給へば、比翼連理と契りたる、羅綾の袖も仇し野の、露かあらぬか魂の在所を、尋ね詫びさせ給ふとかや。憂き事を暗部の山の鶯の、子に迷ふのも恩愛の、薄き契りの袂には、涙を包む春雨に萎める花の若君を、最一度見たし抱きたし」と、障子の元に立寄れば、コハなんとせん情けなや、此世あの世と立隔つ、罪障の雲高くして、涙の霧や戀慕の霞、瞑々朦々朧々として見れども見えず聲も聞えず。南無三寶親子は一世の契り知られて、泣て笑うて悶え焦れて、かつぱと伏してぞ泣き居たる。頼家頻に大音上げ、「李夫人去つて漢王の、空しき床の寫繪に、魂迎せし烟のうち、云はず笑はぬ佛を、歎きしも身の上なるを、現世の逢瀨叶はずば、刃に死して此世を去り、極樂諸天は愚かの事、假令地獄の底迄も、誘へ連立て伴へ」と、手に手を取て行くも歸へるも逢坂の、關も此身は止め得ぬ、泣も笑ふも夢よ現よ幻よ、最早別れのあら堪難や、刃の罪に修羅の太鼓の「去ば」と云へば、「暫し」と止むる、袖振り放せば、目にこそ見えね、踏む足元は猛火の煙、こは淺ましやと、逃つ轉べどまた行く先も、火焰の煙に姿も焦れ、身慄してこそ立たりけり。惡かれと思はぬ山の峯にだに、あふなるものを人の歎きは、「君を侮り民を惱す判官父子が惡心惡逆、緣にひかるゝ我身に報うて、廻り車のくるりくる〳〵、くる夜も〳〵明けても〳〵千年萬年、百千億刧獄卒惡鬼の笞に打れ、山に上れば劒に劈き、谷へ下れば紅蓮

山の中を行く、吉野の川のよしや世に、何がつらうて悲しうて、屋敷は遁出でけるぞ」「ア、愚かなり〳〵、誰に恨みを由井が濱、親同胞になのりその、名乘れ迚しも假初に、忍び出たる閨の戸の、跡だに未だ鎖ざりしを、誰が通ひ路と今ははや、つまや重ねし小夜衣、妬ましの男やな、いやらしの妬みや」と、迯んとすれば引戻し、拜めど顏を打振て、悋氣は女の手擲口擲往古今も、貞女きう女もていかかづらや蔦蔓、這纒はれても、此身元よりうへきにあらねば、臺に輝く鏡もなし、煩惱菩提は法の道連、あら面白の世の中や。夕邊朝たの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞て驚く人もなし。花は根に、鳥は古栖に歸れども、行きて歸らぬ死出の道。「申殿樣」「なんぞ」「酒をばふつゝり止めさんせ」「なぜに」「色遊をも置しやんせ」「そりや成らぬ」「すれやどう云うても止ぬ氣か」「おゝいかなこと〳〵」「そんなら妾は最う往る」「どこへ」「あの世へ」「あの世とは」「はて冥途へ往まする」賴家はつと氣を注て、「何と冥途へ歸るとは、扨は此世を去りしよな」「藻に住む蟲の我からと、刃の上に消し身の、此世に心は止めねど、迷ひ來るは君故ぞや。直きを捨て曲るに、親み給ふ誤りも、色と酒との二つとぞ、諫め申さん爲ばかり、二度見え候なり。唐土玄宗皇帝は、御心賢くて治まる御代は五十年、國土も民も太平の、天子と呼れ給ひしが、海棠眠る楊貴妃の、桃の媚ある顏ばせを、御目尻に懸りしより、逆臣起つて御輦も、帝都の外

こやうけいがいに歸り、鳥雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の、寄邊はいづく雲水の、身の果いかに知らざりし。御悼はしや賴家卿、瓊樓玉樹の閨の内、二世の三世の七世のと、互に契り交されし、若狹の局何となく、屋形を紛れ出給ひ、今に御行方知れざれば、現心も涙の床、身を知る雨の明暮に、翼しをるゝ雛鶴の、一幡君も朝夕に、母よ〳〵の諸聲に、いとゞ歎きを增鏡、俤うつす姿繪も、それも心に任せねば、せめては夢を賴むてふ、假の枕の假御殿、一念既に亂るれば、迷ひの門を開くとは、知らぬ御身ぞ味氣なき。石に勢あり水に音あり、風は大虛にわたる、形を今ぞあらはす女、掛字を離れて心魂忽ち顯はれ出でたり不思議やな。水莖の筆の禿と身を染めて、眠りならひの夕邊より、幾朝ごみの春秋を、梅は柳に靡き合ひ、松は櫻の合床も、昔語に成りたるぞや。奥樣なりの釣夜著に、鴛鴦の衾の羽根かはし、情かはすも色の淵瀨と、水のかしはの浮沈む、身は浮草の根を絕えて、娑婆に殘れる輪廻の業過は、雲霧の軒端に立ちて雨に霰に、霜に霙に積り〳〵て消返りては、又降る雪の姿のふじよ、烟比べは淺ましや。「なう懷かしや一幡君、親子の中は一世とは、誰か云ひけん空言や、泣音は遠き苔の下、露のそこなる魂に、答へて餘り悲しさに、姿をかりの懸物に、映りて是まで來れり」と、障子の内の床しげに、すつくと立ちてお在す。賴家見るより走出で、「恨めしの若狹やな、妹脊の

されて、敵を討ちて父上や、又自らが修羅道の、苦患を早う救うて給べ。本田殿へは取分て、申置度き事こそあれ、一幡君の行末を、宜に見立てて給はれと、重忠殿へ頼うで給べ、是のみ黃泉の障りぞ」と、口說言こそ哀れなり。親經淚押拭ひ、親經「お心易く思召せ、伊織殿の御事も、敵を首尾よう討せん爲、成敗せしと僞りて、大罪人の首を討ち、獄門の木に曝せしも、是皆主人の計略なり。一幡君を御代に立て、重忠後見致す事、何しに違背申さん」と、世に賴しく答ふれば、若狹の局手を合せ、若狹「アヽ有難や忝なや、此上思ひ置く事なし。兄樣去らば」と云ふ聲の、弱ると聞くぞ玉の緖も、切れて果敢なく成にけり。淺茅も共に泣狂ふを、親經伊織押止め、「姉の魂止りて親の敵を討つ迄は、こなたの骸は預り物、麁相成れな怪我有るな」と、諫め賺してたづか弓、「矢竹心はさる事にて、云うても敵は大身者、主人なんどが智慧も借り、力も借つて討ち給へ。若狹の局の御最後は、沙汰なしく御死骸を、密かに寺へ送らん」と、先長持に舁入れて、本田は先肩跡は兄、逢はぬ昔の戀しさと、逢うての今の悲しさと、擔ひ較ぶる棒先の、永き別れぞ是非なけれ。

まよひのすがたゑ

營中を離れぬよし、狙ひ寄るに手術なく、そなたを語らひ討ん爲、遙々此所に下りし」と、始終を語れば若狹の前、若狹「こはそも夢か淺ましや、假令暫しは別るゝとも、待つとし聞かばいつぞは又、鎌倉へ呼取て、朝夕御顔を拜まんと、仇の賴みもなき身ぞ」と咽入り〳〵歎かるゝ。漸々涙を押止め、伊織「能くこそ思ひ立給ふ、親の敵と云ふからに、討たで叶はぬ道なれば、心を盡し氣を碎き、狙ひ果せて討ち給へ。兄樣賴む」と云樣に、守刀をずばと拔き、心元に刺通せば、こはそも如何にと人々は、驚き騷ぐ計りなり。伊織は膝に搔抱き、伊織「心得難き有樣や、兄弟名乘合うたるが、一分立ぬと云ふ事か、樣子を語れ」と云ひければ、若狹は苦しき聲を上げ、若狹「アヽ愚かな事を宣ふかな、廻り逢うたる嬉しさは、冥途の道の土產ぞや、宿世いかなる報にや、憂も辛さも悲さも、身に積む罪の味氣なや。聞けば聞く程自らは、世に存へん樣はなし、判官殿の常々に、若狹の誠の親兄弟、生て此世にある內は、いつか名乘出づべきと、心の休まる事なじと、戲れ事にのたまひしが、其豪海と云ふ法師、分けて懇志の中なれば、それを賴みて父樣を、殺し給ふに紛れなし。討れし親も自ら故、討する親も自ら故、今又狙ふは誠の兄、手引をせぬは不孝なり、心を合せば是迄の、榮花の恩に預りし、後の親をば親とする、義理に背くが悲しさに、斯こそ思ひ定めしぞや。體は朽て行くとても、我魂は妹の、淺茅が胸に殘し置き、兄弟心を合

あらば、昨日にも、名乗て御出成さるゝ筈、イヤ〱身こそ大事ぢやと、御引成さるゝ心底なら、只今是へは無用な事、生ける時には無禮をし、物をも云はぬ死首に、諄々とした言譯は、心得難し」と冷笑へば、淺茅は頓て差出でて、淺茅「ヲヽ能い御不審さりながら、遊女は義理の商賣にて、身を庇保など云ふ事は、かけても知らぬ事なれど、大將軍の奥樣の、昔のしがを云はるゝは、夫の恥辱子の恥辱、判官殿の恥辱にて、名乗り合ぬは伊織殿、只一人の恥辱ぞと、最かる〱しき量見が、思ひの外に兄上の、身を滅ぼせし悔しさの、言譯もせず御首を、烟になして亡跡を、弔らひ給はん其爲に、御所を諸共出たれば、再び歸る心でなし。高札を打割りて、首を此方へ渡されよ。但しは了簡成るまいか」と、守刀を取出し、妹が拔けば姉も拔き、どうぢや〱と詰寄るは、何れせつなき心なり。親經ハット感涙し、親經「何しに惜み申べき、首は勿論軀共、只今進上致さん」と、櫃を明くれば伊織之介走出で、「ヤレ妹よ」「兄樣か」是は〱と計にて呆れるも又涙なり。伊織泪を押拭ひ、伊織「昨日の恨引替へて、今日の心底滿足せり。某當地へ來る事、御身に逢うて身の榮花、極めん爲にて更になし。去年三月五日の夜、羽黒山の修驗者、豪海と云ふ法師に、一夜の宿を貸けるが、親玄蕃が寢首を掻き、夜の内に迯失せしを、此所やかしこと草を分け、縁を求めて尋ぬれども、知れぬこそ道理なり、賴家卿の歸依僧にて、

如く汝が首、獄門の木に曝すぞよ、心を鎭め能つく聞け。あの高札に若狹の局が兄伊織之介と書付しは、確かな證據あるならん、然る上には彼の者を、上を僞り掠めしとて、なぜ刑罪には行うたぞ。但し僞り者ならば、若狹の兄とはなぜ書たぞ。二つに一つは重忠が、誤りにても有るまいか、返答聞かん」と宣へば、親經莞爾と打笑ひ、親經「云うても女儀の事なれば、そこ等は御存じ知れぬ事、國の政道致すには、非理法權の四つの文字、第一に仕る。理非の捌きは常の事、理は持ちながら一國の、法を背けば落度となる、理も有り法も背かねど、權威には叉壓るなり、權威と云うては誰あらん、比企の判官能員殿、理非善惡をも顧ず、法も無法も辨へねど、君に出頭無二と云ひ、若狹の局の親御ぢやの、一幡君の祖父様のと、持上したる權威をば、碎く時節の來らぬ故か、洲を潛つて泥水の、澄るをじつと待つてゐる、重忠は温和の武士、花垣伊織お局の、兄と見据て有りながら、首を打しは政道に、權の一字を用ふるなり、叉高札の書付は、親經自分の量見にて、學問したる事もなく、智慧に餘計も候はず、善なれば善惡は惡、見えた所をまつ直に、云はねば聞かぬ生れ付、御名を出したが落度なら、獄門の儀は扨置て、火焙にも遊ばせ」と、道理をならべ云ひ立つれば、二人は兎かうの詞なく、差うつぶいてお在す。親經威丈高になり、親經「拙者めも叉御局へ、御不審を申すべし。兄を敬ふ禮儀をば、御存じ

き岸陰に、高札立てて高提燈、さし寄て見給へば、若狭「何々若狭の局が兄、花垣伊織と云ふ者、上を偽り掠めし故、刑罰に行ふ」と、讀も終らず此所其所と、見渡す向ふに獄門の、顔は知らねどそれとのみ、する〳〵と走り寄り、若狭「なう淺ましの御姿や、人をも害め盗みをし、重き科有るものこそは、斯る憂目に逢ふと聞け、ありの儘なる有り事を、云ひも開かでやみ〳〵と、非道の掟に逢ひ給ふ。是と云ふのも自らが、名乘て出ぬ誤りを、百千萬の言譯も、今では甲斐も渚漕ぐ、蜑の小舟のこがれ來て、せめて最期の御顔を、拜まんとこそ思ひしに、早くも變る兄上の、御佛」と計りにて、二人は其所に倒れ伏し、泣くより外の事ぞなき。本田の次郎親經、夫とは知れど知らぬ顔、親經「ヤイ〳〵女寄るまいぞ、言語に餘る大罪人、首なと盗み取らんかと、本田が番を相勤む、はや〳〵歸れ」と云ひければ、二人は頓て起直り、若狭「ハア秩父が家來の本田よな、我こそ若狭の局なり。是なるは又淺茅とて、汝が主人重保が、樣子は知つてゐる女。就ては彼なる高札に、心得難き事こそあれ、詮議が闇い狼狽た、秩父に是へ參れと云へ、尋ねん」と宣へば、親經ハツト畏り、親經「驚き入たる仕合かな、扨又詮議の筋に付、何か御不審候よし、重忠召にも及ばぬ事、憚りながら拙者めが、申開き候はん、御尋あれ」と領承す。若狭「ム、何といふ其方が、主人に代つて返答とや、只今尋ぬる色品を、若し言譯に詰りたら、まあの

第四　若狹の局道行

嬉しとは昔ぞ詠し星月夜、明くる詫しき鎌倉の、御所の御門の七重八重、越えつ忍びつ隱ろいつ、若狹の局妹は、淺茅と云へど淺からぬ、思ひは一つ二人連、現心も亂ればし、一幡君が今も猶、母に添寐の夢や見ん、寐顔脇顔笑ひ顔、目にちらつきて身を去らぬ、袖と袂のうら〳〵に、涕碎けて音無しの、瀧の白絲、絲による、物ならなくに別路の、心細くも夜の道、迷ひ來る身がやつ過ぎて、春まだ寒し雪の下、積る思ひに哀別離苦の、理しるき曙や、東光山の鐘の聲、別れを歎く人有れば、眠りを覺す法の友、親同胞は遠近に、菫蕙も名のみして、霜の芝道踏しだく、紅匂ふ空燻に、誰待宵の侍從川、寄せては返へる白波の、ふじが谷とはあれやらん、一刷毛さつと横雲は、誰筆染て隈どりて、四季の詠めもとことはに、代々を重ねし鶴が岡、こゝはやれ何處ぞと道人に問へば、此處は坂川辻町ぢやとさ、心ばかりは由井が濱、つらなる枝を打つ波の、胸に答へて身に懸る、責て空しき骸にだに、行合川の丸木橋、踏は返へさじ一筋に、千代の例しの細石、無き名の數や數ふらん。無常を告ぐる野烏の、聲も鋭き松陰に、暫らく休らひ給ひける。梟は寐に行く鳩は起て出るとかや、明けなんとして玉鉾の、道まだ闇

めたる、詞はいかで違ふべき、篤と樣子を聞屆け、死で叶はぬ道ならば、跡にはなどか殘るべき、三つ瀨の川を諸共に、手を引いてこそ渡らめ」と、諫合ふこそ優しけれ。若狹の局顏を上げ、若狹「なう嬉しの人の詞や、七度結びて姉となり、六度契りて妹となる、それは誠の兄弟よ、是は今日しも假初に、云ひ交したる契りとて、一所と迄にのたまふは、先の世よりの約束と、思ひ遣るさへ睦まじき、眞實覺悟極めてか」淺茅「アヽ愚なる仰せやな、武士の性根は時に依り、味方が敵に裏返る、例しはあれど傾城の、言替したる心底は、違へぬと云ふ手本は、末世の人に見せう物、急せ給ふな姉樣」「怯れを見せな妹」と、互に顏を見合せて、莞爾と笑ひつ泣きもしつ、死を待つ内ぞせつなけれ。斯る所へばた〳〵と、乳人腰元駈戻り、腰元「なう悅び成されませ、判官殿利潤に成り、大黑舞は大騙、由井が濱にて御刑罰、仰せ付られ候」と、きほひ懸れば兄弟は、命を延る悅びの、中に歎を引出す、伊織之介が縛めを、本田の次郞繩取にて、屠所の羊の引綱や、隙行駒の足元も、よろり〳〵と行く道を、若狹はわつと泣倒れ、又起上り「あれ〳〵、あれなう兄樣々々」と、聲からしたる呼子鳥、浮川竹につらなれる、枝を放れし鶯や、子は子なりけり時鳥、悅びのうら歎のうら、恨を誰に由井が濱、波なき方に立波の、袖の裏とは兄弟が、身の上にこそ知られけれ。

が、今の詞の愚かやな、天下の鑑と云はるれど、流石は吾妻戎にて、武道は知れど文は無く、花は有れども實を結ぶ、辨へさへもなかるらん。后高位の御身にも、徒ら有し噂もあり、海女の腹から大臣の、生れ給ひし例もあり、傾城遊女の胎内に、大將の子が胎らぬとは、なんの書物で見出し、泥の中より生出る、蓮より猶美くしき、花の顔面白露の、玉よりげなる若君を、追失なはんと云ふ事は、忠義か扨は逆心か。源氏を守りの御神は、など餘所に見てお在ます、頼家卿の御運さへ、末になつたか悲や」と、咽返り〳〵、わつと叫ばせ給ひける。涙の中に若君を、膝元近く引寄せて、若狹「果報拙くまし〳〵て、賤しき母が腹よりも、生れ給ふが淺ましや。稚く渡り給ふとも、只今母が云ふ事を、篤りと能う聞き給へ。大將の子と云ふものは、死ぬべき時に死なざれば、人の笑ひを受くるぞや。母が詞を懸けたらば、此守刀にて咽の邊を突貫ぬき、頼家卿の胤と有る、證を見せて母が身の、恥辱を雪ぎ給はれ」と、云含めれば一幡君、わろびれ給ふ氣色なく、一幡「腹十文字に切らうか」と、莞爾と笑める稚顔、見るに目もくれ心消え、抱き付てぞ歎かるゝ。淺茅暫しと押止め、淺茅「アヽ、道理やさりながら、二度の便りに跡先の、詞の違ふ所あり、傾城の名も假親も、變らぬ姉と妹を、我は秩父の嫁にして、お前を若君諸共に、追失なはん樣はなし。浮くも沈むも同じ世に、今より誠の兄弟ぞ、甥子と契り初

國には、知らぬ者とてよもあらじ、諸國の大小名に若狹の局と傅かれ、榮花を見るは君の恩、元の根ざしは判官の、惡にもあれ善にもあれ、須彌より高き恩ぞかし。去とて誠の親兄を、仇に思ふに無けれども、一幡君の一門に、大黒舞と云はれんは、瑕ある玉の如くにて、親子の光は消失せん、親子の光失せたらば、判官一家は滅ぼされん。逆心募る天罰にて、外の口より知るゝとも、恩をば仇で報ずべき、道理は更に無きものを。いまこそ情無く過ぐるとも、若君御代を嗣ぎ給はゞ、心の儘に親兄へ、御孝行申さんと、思ふ心の一筋を、神ならぬ身は御存じなく、見捨て歸る恨みと云ひ、打ち敲かれたる無念さに、訴人に出させ給ふこと、恨みと更に思はれず、正直正路な四五右衞門、我身の上と知らずして、扨々惡くい妹めぢや、將來が能うあるまいと、云ひしは胸に應へしが、早く報いの來りしと、思ひ出すさへ淺まし」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。淺茅も左右涙のみ、應答もやらで居る内に、二人の腰元立戾り、胸押撫で息をつぎ、腰元「御身の上を唯今が、大黒舞と判官殿、角め要めの受答、秩父殿の仰せには、お前が遊女に極まらば、賤しき腹に若君は、よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか、負けものかの二つの内、一幡君も門前より、大黒舞の面を著せ、追ひ拂はんとの御評定、若も左樣に成たらば、こち等は何と成べき」と、縋り付てぞ泣出す。若狹「聞しにも似ぬ重忠

元二人立歸り、 歷元「大黑舞は何者やら、秩父殿を一番に、諸大名衆が贔屓して、相手は比企の判官樣、仔細は未だ知れませぬ」 若狹「ヤレ取わけて氣遣ひな、またゆけ〳〵」と追ひ遣りて、胸に手を置き思案して、最早大事に成つて來た、確な事を見ぬうちは、秩父が取持つものでなし、腹立紛れに兄樣の、如何なる事か宣ひて、我憂名をや流さんと、忍び淚ぞ道理なる。乳人の松代遽たゞしく、走り歸りて云樣は、 松代「いや早興の醒めた事、朝比奈殿へお嫁入の判官樣の娘御は、京六條の遊女ぢやと、和田殿からは宣ふを、判官樣は眞實の娘とあるの爭ひを、秩父殿が中へ出て、一つ二つのたまふと、判官樣が轉りと負け、親でない子でないとの誓言の上にて、朝比奈殿のお內儀が、秩父殿へ貰はれて、此一埒はさらりと濟み、跡がお前の詮議ぢやげな、聞て參ろ」と走り行く。淺茅は心いそ〳〵と、 淺茅「姊樣最早御苦勞に、成さるゝ事は入りませぬ、重保樣の女房と、私には札が附いたれど、お前の事が氣遣ひ」と、案じ顏こそ優しけれ。若狹はハット泣出し、 若狹「ナウ浦山しの淺茅やな、扨淺ましの身の上や。實に世の中は飛鳥川、變る淵瀨と聞しかど、二人が中を今の間に、早く歎きと悅びの、替る物とは知らざりし。何を隱さん最前の、大黑舞こそ自らが、誠の兄にて候ぞや。傾城の身の習ひとて、賤しき兄を持たるが、差て恥にはあらねども、判官が娘こそ、君の寵愛淺からず、一幡君を儲しとは、日本六十六

それまでもない自らが、思案一つで添はしてやろ。昔は勤の兄弟分、今改めて眞實の、姉を持つたと思うてゐや。嫁入も自らがさせませう、化粧田に卅町、一幡君の伯母上を、重保妻に遣はすと、使を以て云はせたら、秩父殿で御座らうが、否ぢやと云うて御覽うじやれ、ア丶慮外ながら」と時にあふ、人の詞ぞ頼もしき。淺茅はハツト手を合せ、淺茅「そんならお前は姉様か、此若君は甥子か」と、髮を搔撫抱き上げ、今は心も落付て、お庭のかゝりお物數寄、谷七郷を手の下に、見越の塀の馬場先を、引つれ來る大名は、何十人と知らね共、色の黑いは朝比奈殿、御器量よしは重保樣、不思議や今朝の大黑舞、本田が肩に打かゝり、此處へ來ますと云ければ、ハツト計に驚きて、若狹も立て見おろせば、無慘や花垣伊織之介、顏も手足も、疵つきて身に添ふ物も切れ〳〵にて、諸大名に引添うて、評定所にこそ入にける。コハそも何の詮議ぞと、納め兼ねたる胸騷ぎ、若狹「ナウ姥もおぢや誰も來い、今朝の樣子は知る通り、大黑舞も浪人とや、打敲かれたる口惜さに、人を過めし物ならん、賤しき形と云ひながら、一幡君へ一度でも、お目見え致せし者なれば、相手はどなたで有うとも、品によつたら自らが、肩を持まい物でもない。次の間へ往て聞ておぢや、ヤレゆけ〳〵」とせり立て、詞は强く心には、如何なる罪を仕出して、憂目に逢せ給ふぞと、立て見居て見うろ〳〵と、案じ入りたる氣色なり。腰

内に此の恨み、おのれ晴さで置うか」と、悄々立て行く袖や、紙子もちぎれ頭巾さへ、行方も知らぬ大黒舞、打出の小槌現なき、身の行末こそ覺束な。玉しける家に住む身は物思ひ、知らで貌さへ形さへ、若狹の局とは、名にこそ立れ人知らぬ、下の歎きに消えかへる、雪見の亭に立出て、淺茅を近く招き寄せ、若狹「扨々久しや懷しや、ほのかに聞しは和女にも、判官殿の情にて、朝比奈を殿御に持ち、侍かるゝに沙汰せしが、思ひの外の姿形、氣遣しや」とのたまへば、淺茅は暫し涙ぐみ、淺茅「問るゝさへも恥かしき、あだに果敢なき身の上を、哀れと思し給へかし。勤めを致す折からに、重保樣と云ひ交す、深き中をばひき裂れ、思ひも寄らぬ和田殿へ、嫁入て往たる其晩は、恐ろしいやら悲しいやら、現心もなかりしに、武道を磨く朝比奈殿、事の道理を聞分けて、重保樣とお出合に、變らぬ中の縁結び、御取持に預りしを、父御に劣らぬ堅意氣で、惡逆無道の判官が、娘とあれば添はれぬと、顧みもなき御返事故、然らば親子の縁切つて、其上添うて給はれと、詞を詰て別れしが、工の多き判官に、逢うて云ふのも氣味惡く、傳を求めて賴まうも、お前ならではなき故に、今日物詣を幸ひに、道に待受け候」と、しを〳〵として語りける。若狹「扨なう左樣な事ぞとは、夢聊かも知らざりし。いとしや苦勞しやつたの。遠慮がましい今迄に、なぜ談合はし給はぬ。氣強う思や親と子の、緣が切りたか切らしてやろ。

沈むは頓て我身なり。取亂しては叶はじと、形を作り居直りて、「よし無き事に暇取つて、上や晩しと待給はん、鳥追ひ計りは若君の、お伽に屋形へ召連ん、大黑舞は立歸れ」と、輿の戸はたと鎖し給へば、「ソレお乘物やりませい」ハット答て行列の、足もしと〳〵過行けば、伊織之介大音上げ、伊織「若狹の局よつく聞け、嫌はゞ兄には成るまいが、たつた一言人知れず、問はで叶はぬこと有つて、形を窶し樣を替へ、漸々巡り逢たるぞ、一夜は屋形へ連て行け、若狹の局、妹」と、人目も云はず呼叱れば、笠原太郎駈戾り、笠原「何とも成らぬ横道者、若狹の局の御事は、比企の判官能員とて、お大名の親里あり、何者に賴まれて、斯る慮外を吐出す、白狀する迄家來共、それ打敲け」と罵しれば、伊織「ヤア麁忽ばし成さるゝな、容こそ微祿致したれ、心は花垣伊織之介、棒の先でも當たらば、八幡堪忍致さぬ」と、反打かけて氣色する。笠原元より武骨者、「痩浪人の腕ずんばい、叩き落せ」と下知せられ、追取卷て打けるは、笑止と云ふも餘りあり。若狹の局身を悶き、若狹「ヤレ麁忽すな早まるな、廣い世界に同じ名の、有まい物でなき物を、堪へて往せ浪人も、蟲を死なせて迯て去ね。ヤレ迯け迯がせ」と聲を上げ、あせり給へど心なき、雜人原は聞入ず、起れば敲き立てば打ち、落花狼藉花垣と、どつと笑うて入にけり。無慘やな伊織之介、聲を計りに泣叫び、伊織「エヽ胴慾者妹め、此體を見て能も〳〵、打捨ては歸るよな。命の

穢い大黒、大黒舞を見さいな、むさ大黒見さいな。大黒の能には、一チに妹が見ぬ顔で、二に惡い根性で、三に左あらぬ面をして、四つよい物著張つて、五つ いつかい氣色で、六つむさいげしんで、七つ何が惜うて、八つ厄介嫌ひをる、九つ此方を得向ひで、十ヲで吐胸つきをつた。扨も慘い大黒」樣子知らねば、四五右衞門肩身搖りて打頷づき、滑川「嘸々腹が立ち申そ、扨々々妹めは、言語道斷惡くい女郎、當分榮花に誇る共、何の將來善んべい。そんな不義奴此方から、勘當をぶち切て、若いが花ぢや立身の、思案仕覺を仕召されい、近頃侮づりがましいが御合力申すつ」とて、腰を探つて百の錢、轉りと傍へ投やれば、ハツト計りに押戴き、伊織「冥加に餘りし御合力、迚もの事に此錢を、妹が面へ投たい」と、恨みを含む目の内に、餘る涙ぞ道理なる。若狹も今は人目にも、餘る難儀の色見えて、四五右衞門に差向ひ、若狹「其方はようぞ氣が付た、貰ふ者より妹が、蔭で聞たら嬉しかろ」滑川「イヱいかな事〳〵、悦ぶ事は扨置て、戲けた老爺と笑ひましよ」若狹「ハテなうさうは云はぬ物、他人の目にさへ淺間しき、見る影もなき姿形、妹は身にも命にも、替へて苦しう思ふらん。され共若しは國の爲、家の爲又子孫の爲、三ッを一ッに絡めたる、切ない義理の有る故に、一人の兄に憂い共、犬畜生と云はれても、名乘らぬ妹が心かと、他人の我身に引當て、思ひやるさへ魂も、消ゆる計に悲しや」と、餘所目は餘所の涙川、

やんら目出たや、やんら樂しや、千兩の萬兩の身請客が參つた、比企の家に祝ひ米、姉御もよねやろ、妹御もよねやろ、よねやろがぢやうには、慾と惡と巧んで嫁らそと申す、よめらし候へば比企も榮え候、我が身も榮え候、嫁らす處とは誰人の誰やろ、和田殿に秩父殿、大將軍のお手かけぢや、御代の盛りとは若殿の御祝」歌や心に懸りけん、若狹の局顏さし出し、よく〳〵見れば都にて、同じ流れを勤めたる、妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と、問ひ度も有り淺茅も又、語りたさに來れ共、人目を忍ぶ粹同士の、顏と顏とに知せあふ、夫さへ有るに大黑舞、面引取れば是はそも、兄の花垣伊織之介、あら懷しや戀しやと、飛付く程に思へ共、若君の爲比企殿の、身の仇とこそ成べきと、急來る胸を押鎭め、若狹「ヤイそこな大黑舞、おぬしは麁相な、當り障りに成る事を、必らず云ふな謠ふな」と、詞は下げて心には、戴きまする兄樣と、知らせま欲しき風情なり。四五右衞門氣もつかず、滑川「大黑舞も何なりと面白う申ませ」伊織はじつと會釋して、伊織「然らば拙者も身の上を、お慰みに申ましよ。大黑々々ならず者の大黑、大黑と申は天竺の人でなし、上京の素浪人、爺が一せん荒金の、槌で打ても金は出ず、乘るべき俵持ざれば、米に妹を代なして、それで親子暮した、さつても哀れな大黑、左れば果報は知れぬ物、米に賣た妹が、此國の殿樣の奧樣になつたげな、左らば無心を云はうと、旅立の大黑、さつても

ましらげも米やろ、よねやろがぢやうには福と德と參つて、宿かろと申す。宿借候はゞ殿も榮え候、我身も榮え候、大黑舞を見さいな、福大黑見さいな大黑〱。大黑と申すは大唐の人ならず、天竺の人ならず、住吉の角の方に炭屋を仕て居られた。夫で色が黑いはやんら樂しや、やんら目出たや、大黑舞を見さいな、福大黑を見さいな誰人の誰やろ、左大臣に右大臣、關白殿のお手かけぢや大黑と申すは〱、角前髮の昔より夜這好なお人で、あちらの角でもちよこ〱、こちらの角でもちよこ〱、角々でちよころとて、炭消に躓いて、夫でお色が黑いは」「コレ大黑舞、疾とと彼方へ退てたも、鳥追歌の邪魔になる」「ホヽ〱なめたり〱、女の口から鳥追とは、いかなる君が鳥追ぞ。色の黑いがお好なら大黑舞も相伴せう」「ハヽ〱〱有樣がわしや傾城ぢやが、樣子が有て此通り、今日鳥追の水上ぢや」「ハイいはれを聞ば面白や、身共とても浪人者、妹の傾城に何卒巡り逢ん爲、大黑の今ぶきぢや、あんまり退た中でもない、なんと一所に行まいか」「成程々々そうしましよ。さあ大黑舞やらつしやれ」「先こなたから謠はつしやれ」「やんら目出たや、やんら樂しや」四五右衛門聲をかけ、滑川「コリヤ〱鳥追大黑舞、よい所へ參つた故、和子の御機嫌直されて、皺腹一つ助かつた。とてもの事に今一節、お慰め申てくれ」鳥追「コレハコレハ有難いお詞を聞まする、お望みと有からは、傾城の身の上を、鳥追にして謠ひましよ。

よ、爺めが膝へ乘せませう、お出なされ」と愛すれば、「イヤ〳〵此處が面白い、いつもの樣な切合しよ、爺も人形を持て出い、はやう〳〵」と大將の、わやくは心廣かりし。滑川「サア切合も仕ましよが、あれ〳〵あそこを見さつしやれ、西から南へ押渡て、漫々たる大海も、おつくるめて若殿の、お泉水も同じ事、鯛も有り海老も有り、鰹節の生たのが、ひち〳〵と跳まする、連立て往て見せましよ」と、紛らかせ共、「イヤ〳〵〳〵、おれは切合々々」と、お膝元なる辨慶人形、鉞持て禿頭、こつりと鳴れば、「アイタシコ、八幡堪忍ならない」と、心得て持つ懐中人形巴女が大長刀、エイヤツトウ〳〵エイヤツトウ、如何はしけん若君の、人形砕け落ければ、「母樣大事の辨慶を、爺めが此樣に仕をつた」と、むづかり給へば母君や、女房達は入かはり、賺せどきかぬ〳〵とて、泣入り〳〵仕給ふに、うろ〳〵涙に四五右衞門、「若君堪へて下さりませ、今年ちやうど四十年、御奉公仕れど、か樣に不覺仕らぬ、正八幡も照覽あれ、企んでは致さぬ」と、幼き人に誓言も、實體過ぎて笑しけれ。

鳥追大黑舞

「やんら目出たやんら樂しや、千町や萬町の鳥追が參つた、福の神を祝ひ込めしらげも米やろ、

重保朝比奈両人は、かうせいようが刺客の、猛きを寫す虎の髭、獅子の吠ゆるが如くにて、往つ戻りつ飛返り、踊り狂ひし有様は、須彌勃海を跨りし、りやうはくこうの勢も、是にはいかで勝らんと、見る人聞く人今の世に、語りて共に興じける。

第三

唐土に優りし物は何々ぞ、京羽二重と大名の、お道具持の造り髭、揃うてゝ徒士の衆、手を振る腦振る鳥毛振る、鶴が岡への御參詣、先驅後乘きらめきて、光を三つの大鳥居、だん葛の松蔭に、御乗物を舁据れば、乳人おはした立かゝり、高麗の飴仙家の蜜、龍眼肉ともてかしづく、御果報日本一幡君、實生を出すは帚木や、若狹の局當年は、お厄年とぞ白重、薄紅梅の袖匂ふ、柳が枝に初櫻、咲せて見せる景色なり。後乘滑川四五右衞門、二重の腰も奉公の、七重に折りて若君の御前に膝まづき、滑川殿御怠屈成れたか、もう追付で御座るぞや。八幡様へも厄神へも、手々を合せてのゝ様と、仰しやると早今の間に、お背がによんによと伸ます る。取わけて今日は、放下もあり能もあり、くも舞あやをり八ちやうがね、鳥追萬歳大黒舞、見せましたならてつきりと、館へ往のとはおつしやるまい。久しい事ぢやかゝ様の、お腰がな痛みまし

て殷空しく、范增死して楚は亡びし。兩人蟄居致しなば、土屋北條土肥岡崎、新田佐々木千葉上總、其外名有る諸大名、賴みなき世を憤ほり、皆分國に引籠り、讒臣奸人時を得て、禍必ず蕭墻より、忽ち起つて萬代の、源氏のお家の恥辱となり、君萬歳のお命も、亡し給はん、淺間しや」と、秩父はお袖に取付けば、和田は疊を打敲き、諫言實に道理なり。賴家左右の返答なく、扣ふる袖を振放ち、殿中深く入り給ふ。二人は溜息はつとつぎ、「實に良禽は木を擇ぶ、賢人は師を擇ぶ、愚將と知らで今日迄、仕へし事の後悔さよ。廣言憎しと聞き給ひ、重ねて討手給はらば、潔よく腹切て、臣下の手本にせんもの」と、悄々立つて歸らるゝ。近習の者共聲々に、「ヤア後れたる人々かな、君を恨みて腹切るに、所撰みは無い筈ぞ、所望々々」と取捲て、スハ事こそと見る所に、重保朝比奈龍象の、浪を蹴立る如くにて、一文字に馳來り、大太刀振て立懸れば、詞にも似ず我一と、逃て御殿に走り入る。義秀猶も怒りをなし、三郎「しや物々し愚人めら、帝釋天の威を藉て、喜見城に籠るとも、朝比奈手くせの門破り、捻り殺して捨つべし」と、兩人御殿へ駈入るを、和田も秩父も取付て、重忠、義盛「ヤレ逸まるな若者共、三度諫めて容られねば、身を退くは君子の道、首陽の蕨に世を凌ぎ、渭濱に釣を樂まば、鎌倉計りに日は照るまい。御殿へ向うて慮外すな、ヤレ待て／＼」と引止る、秩父は伯夷が仁を說き、和田は四皓が義を守る、

諺に、猫には遊女が成るとやら、承つて候へば、何れを寵愛なさるゝも、さして變らぬ儀と存じ、獻上致し候」と、眞顔作つて言上ある。比企の員家つゝと出で、員家「扨々旁骨折て、巧み出された事ながら、外の目からは出來過る。言ば武將の御身にて、是しきの御慰み、有まい儀とも申されず。其上朝比奈女房は、親判官が乙娘、若狹の局の妹を、遊女なんぞと言ひ落し、猫の或は鎧のとて、我君を嘲るは、兩人共に反逆と、睨んだ眼は違ふまい、返答聞かん」と罵れば、重忠カラ〱と笑ひ、重忠「ナニ我々が逆心とは、古秦の趙高が鹿をば馬と爭ひて、世を傾けし故事なんど、聞はつゝての咎めよな。それは惡人此方は、忠義の鎧讒人の、鼠を取らする猫なるぞ。隨分用心あられい」と、空嘯いて在します。頼家甚だ立腹あり、頼家「ヤア推參なり汝等、諫は臣の道なれど、若年者と侮つて、嘲弄するこそ奇怪なり。二度對面叶はぬぞ、其所立去れ」と宣へば、兩人聲を打揃へ、義盛、重忠「ナウ御勘氣とは曲もなや、主君は二代我々父子、元曆治承の昔より、建仁正治の當代迄、身は泰山に倚懸り、命は鵞毛に等くて、奉公怠る事なければ、追放たるゝ覺えなし。諫の詞は苦けれども、身を助くるの良藥にて、諂ふ辯は甘けれども、命を滅す毒草とは、夢聊かも御存じなく、忠臣は遠ざけられ、佞媚の族が勸めに寄り、翠庭の柳腰、きんこくゑんりの花の顏、酒宴妓樂にお目眩み、心を奪はれ給ふ事、お笑止や情なや。三仁去つ

割符が知れう物、然らばお尋ね申すまい」ハテ扨後程々々と、互に尻目遣合ひ、物をも言はず控へたり。斯くと聞くより頼家卿、頓て廣間に御出あり、義盛此方へ〳〵と、仰に從ひ乘物を、手繰々々に舁出れば、大將浮れ出給ひつゝ、「籠の鳥とは恨しい、姿をちよつと水鳥を、飛せ飛せ」と御意を受け、義盛頓て乘物より、黑革縅の鎧を出し御前に指置て、謹んで畏る。君を初め近習共こは抑如何にと呆れつゝ、きよろ〳〵として居たりけり。義盛顏を振上げて、義盛「ハア心得ぬ旁かな、朝比奈が最愛を御所望と有る御墨附、重保上意を述られし、惣じて武士の最愛は、弓鎗小太刀薙刀など、色品數多候へども、忰に候朝比奈は、度々の先驅矢軍に、裏をもかへさぬ鎧とて、親より子より兄弟より、別て最愛致す故、中々惜み申せども、上意を如何で背かんと、無體に持參致せしが、若し粗相ばし候か」と、然あらぬ體にあいしらふ。頼家赫と赤面あり、賴家「汝等今日來る事、素直の所存に有るまじと、先達て推量せり。重忠が慮外をも序に聞て遊ばん」と宣ふ内に乘物を、同じく手繰に舁入れて、白銀の猫取出し、御膝元に差置て、其身は遙に押退り、重忠「是は先年頼朝卿、西行法師に下されし、銀猫にて候を、修行の旅の妨げとて、門前の童に投やりて通りしを、緣を求めて某が、家の祕藏に仕る。承れば我君は、朝比奈が妻女をば、無體の戀慕あそばす由、彼の女儀も出生は、京堀川の遊女の由、實や世上の

ざる事なき樂みは、富貴のかくの癖とかや。斯くて御所には重保が、遲參いかゞと夕暮の、鞠場に騒ぐ女中鳥、こだまの響く大廣間、弓鎗計役日とて、立列びたる氣色なり。然るに和田の義盛は、黑緣の乘物を、玄關深く舁据させ、義盛「誰ぞ御取次頼ましよ、頼みませう」と言入る。中野五郎立出て、五郎「ヤア珍しの和田殿、何故御出仕あられしぞ」義盛「サレバ上意の旨を受け、朝比奈が最愛召連れて參つたり、宜く御披露賴みます」五郎「ヲヽ御大儀〳〵、追付て御對面あるべし」と、奥へ入らんとする所へ、畠山の重忠、是も蒔繪の乘物を、お次の間まで舁入れさせ、重忠「コレ中野殿、お取次賴みまする」と聲かくる。五郎「ハア是は〳〵重忠殿、貴殿も御出仕有りしよな」重忠「然ればとよ悴重保め、上意を受けて朝比奈の、妻女を伴ふ途中より、俄に邪氣に當られて、身心惱み候故、遲參を憚り、某誘引致し候段、御披露賴む」と云ひければ、中野合點はゆかねども、咎だてして拗者等に、したゝかなめに逢うかと、「成程承知致した」と、御前を指て走り行く。義盛顏をさし寄せて、義盛「ナウ重忠、朝比奈が女房は此乘物の内に居る、御自分同道致されし、其乘物は何者ぞ」重忠莞爾と打笑ひ、重忠「其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは、慥に見屆け罷在る、此方も又朝比奈の妻女をば連れ參つた。如何樣武士の魂は割符を合す樣な物、合ば仕合違うたら、その時互に改めう」義盛「ハヽハヽハヽ、秩父成程尤ぢや、追付

持つか自然又、君へ上うで連行のか」重保「ムヽあたらしい詞かな、始に貴殿の内室を、迎ひに來たる某が、今では自分の妻女とて、何と違變が成る物ぞ、只今御所へ連行く」と、聞より中に押隔り、三郎「弓矢八幡そりや成らない、此朝比奈が媒介は、大鎹を數百本、打付たより堅い事、日本國が動しても、びくとも動く事はない、臆病至極の腸が、臍の下へ落著たら、何時にても迎ひに來い、夫迄は身が預る」と、腕押捲れば重保も、氣色を損じ聲荒らげ、三郎「ヤア無禮過た朝比奈、汝が媒介を賴みにて、六郎妻を持つべきか。假にも比企が娘とは、名を聞くさへも穢はしい、さつぱりと緣切たぞ」三郎「チヽ去らば去れ、此上は朝比奈が女房にする」重保「イヤ御諚意ぢや連て行く」三郎「ナンヂヤ實正請取るか」重保「スリヤ何分にも渡さぬか」ヤルマイ渡せヤルマイと、互に詞詰合うて、鍔元寛げ立寄れば、淺茅は左右に取付て、淺茅「詮ない事にお命を、果し給ふか情なや、自跡を暗して、屋形に見えぬと有るならば、お二人樣は我君へ、申譯こそ立つべけれ。時節を待て判官と、親子の緣を切たなら、心變ず六郎樣、女夫に成つて給はれ」と、涙ながらに立出れば、兩人ハツト感じつゝ、重保「出來したり神妙なり、今出て行くは知らぬ分、夫婦の緣は切た分、此屋形をば缺落分、朝比奈殿の分も立つ」三郎「貴殿の分も立つであろ」重保「如何にも〳〵」三郎「去らば」重保「去らば」去ば〳〵と三方へ、別れ行く身ぞ切なけれ。斐として爲

事なくば妻女を君へ上られよ、但悪人一味の氣か、有無の返答眞直に、承はらん」と云ひければ、朝比奈顔を和げて、三郎「成程得心した。扨なう女房と云ふ者は、一夜でとんと持重り、捨し所を其所此所と、思案して居た眞只中、上意殆ど滿足せり。淺茅々々」と呼び猛る、聲に從ひ走出で、淺茅「喃六郎樣懐しや」と、縋り付てぞ泣きにけり。重保ハット赤面の、色も聲音も押靜め、重保「比企殿のお娘御淺茅の前とは御身よな、如何樣世間の沙汰程有り、天晴御器量御容體、我君の御望みも、道理々々」と立退くを、淺茅は猶も取縋り、淺茅「未練に候御卑怯な、恨が有らば打明けて、なぜ聞えぬと宣はぬ。判官殿に欺られ、憂い月日を送りしも、お前にどうぞ逢うかと、思ふ心の樂みに、今まで生てはありしぞや。誰が怖うてうじ／＼と、見知らぬ顔を仕給ふ」と、千々に思ひを一口に、云うて歎くぞ道理なり。重保ほうど持扱ひ、返答もなくきよろきよろと、溜息ついて居たりけり。義秀立寄り襟元をほと／＼と打敲き、三郎「ぬつくりとした顔付で、怖事して置たな。根本根元聞いて居る、些少には候へ共、女房一疋進上する、三百目とは強請まい。先抱付け噛付け」と、焦燥がるも可笑けれ。重保莞爾と打笑ひ、重保「遠來と仰られ美事の女房賜はりて、千萬大悅仕つる、私宅に於て打置ず、賞翫致し申さん」と、手を引合て立歸るを、朝比奈向うに立塞がり、三郎「先待て、一言問ふ事あり。シテ其方は眞實に、女房に

には大仕合、願ひの通りさつぱりと、埒を明けて其上に、重保と媒介も、此朝比奈」と、言ひも果ぬに奏者番、御上使として畠山六郎殿の御出と、聲々に呼はれば、淺茅はハット立上り、淺茅「サア彼の人が見えました、早う逢せて〳〵」と、うろ〳〵するを押止め、三郎「某所存有る間、先暫く」と奥へ遣り、式臺にこそ出にけれ。重保上座に押直り、威儀繕ひて云ふ樣は、重保「貴殿の内室淺茅娘、容儀優れし其聞え、上聞に達しつゝ、御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御諚にて、某迎ひに參りたり。きつと御請け申されよ」と、詞鋭く相述る。朝比奈ふつと吹出し、三郎「色狂ひする程あつて、嘘劫の經た狸殿、尾を出せ〳〵手も出して、下されませいと降參せい。喰ぬぞ〳〵六郎」と、頭を叩いて打笑ふ。重保少し色を變へ、重保「某一生假初にも、虚言言うたる覺がない、疑はしくば御墨附、頂戴あれ」と差出す。義秀ハット立寄つて卷返し繰返し、寸々に引裂て、大太刀半分抜寛げ、大聲揚げて、三郎「コリヤ六郎、此お使を承り、うつかと爰に來りしは、三浦一家を侮るのか、但は比企の判官に、眼を剜れたが怖かつたか、所存を聞ん」と突懸る。重保騷ぐ氣色なく、重保「非道の使者に某が、望んで來るは仔細あり、當時大名多けれども、和田と秩父の兩家こそ、文武の人を指れたる、其義盛が何故に、無道卑劣の判官が、聟に貴殿を致されしは、重保更に呑こまぬ。善惡探り知らん爲、態々推參致したり。忠心變る

念な事と抱附けば、三郎「アヽしたたるい許してくれ、拜む〳〵」と逃廻るを、淺茅「イヤ〳〵人の來ぬうちに、お前に些と無心がある」三郎「サア其無心が嫌ひ物、今日は大事の精進日、嫌ぢや嫌ぢや」と聲立る。淺茅「スリヤ賴む事聞かぬか」三郎「エヽあたくどい」と振放し、駈入んとする所を、淺茅は頓て懷中より、護脇差取出し、既に自害と見えければ、朝比奈頓て抱き止め、三郎「サア品に由て聞てくりよ、短氣なる女がある。如何にも無心聞であろ、ひらに〳〵」と押止む。淺茅悅び手を仕へ、淺茅「無心と申は別ならず、恥しながら自を、判官殿の娘とは、僞りにて候」と、云はせも果ず朝比奈、三郎「ナニ能員が子でないと云ふ仔細は」淺茅「アヽ御不審は御尤、誠は都六條の傾城にて候が、畠山の重保樣、京詰の折節に、假の枕の重なりて、仇に思はぬ中なりしを、御奉公とて是非もなう、つい此國へ御下り有り、程なう迎のお乘物、身請も首尾能く相濟で、いそ〳〵爰に下りしに、思ひの外な判官殿、奧の一間に呼入れて、向後身共が娘分、風俗も更めて、諸事高尙に嗜むべし。和田か秩父か兩家の內、聟に取るとの仰ゆゑ、重保樣に逢ふ事もと、存生有りし効もなく、此お屋形へ嫁入は、死ぬべき我が時節なり。お情あらば朝比奈樣、我戀人に逢せて給べ、賴みまする」と泣居たり。朝比奈覺えず手を拍て、三郎「扨巧んだり〳〵。コリヤ氣遣すな、禍ひも三年おけば役に立つ、身共が女房嫌ひなが、和女が爲

れば、官職を削られて隱岐の國へ左遷ある。斯樣の例も候へば、一寸一筆御墨付、某に賜はらば、朝比奈に對面し、淺茅を迎へ參らん」と、手に取る樣に言ひ放す。判官重ねて、和田秩父同志討さする陷穽、仕濟したりと下笑し、判官「チヽ賴もしい〳〵、娘自慢でなけれども、小憎體なる朝比奈には、些と過たと思うて居る」賴むと云ふに賴家も、硯引寄せさら〳〵と、一筆書て賜はれば、重保頓て懐中し、お氣遣遊ばすな、彼奴を云ひ伏せたつた今、御輿を入れて此御所を、目前の龍宮界、珊瑚の枕、瑪瑙の帶、琥珀の盃、眞珠の鍋、人魚の吸物鰐のぬた、鯱の一こん燒、孔雀の摺身鳳凰の、玉子のふは〳〵ふはと乘る、人心こそ愚なれ。吉日を、三浦の家の御祝言、九十三騎の一門は、云ふに及ばず大小名、出入の町人御用人、御部屋見舞の菓子杉折、蒔繪の文箱紅の、紐解初る花嫁御、淺茅の前と聞えしは、二八に二ツ三ツ計、數へ足したる容色よし、聲の鶯百千鳥、聞て詠めて口吟む、歌の趣向ぞ懐しき。斯る所へ朝比奈は、不興顔して立歸り、三郎「エヽ嫁入程世にこくな面倒な物はない、外へ出れば髭頬が細つたなどと、夢聊か知らぬ難題云かけられ、あた胸惡さに立歸れば、目結めらが散ばうて、油臭くて頭痛がする。傍八けん寄るまい」と、拳を振れば女房達、逃て奥にぞ走り入る。淺茅の前は立寄りて、淺茅「去とは初心な、其樣に當言は言ぬ物、嫁入た晩からお側へも、寄らぬといふはあんまり」と、無

ない〳〵、些とも御騒ぎ遊ばすな。重忠こそは年に恥ぢ、片意地ばかり申せども、此重保めは我君の、日々夜々の色遊び、御浦山しう存る故、扨こそ推參致せしが、武將共有うずる、御器量には去とては、御慰みが小い」と、氣を持すれば頼家卿、頼家「ムヽなんといふ重保、手の變つたる挨拶は、是も意見の色品よな。それとも遊び小いと、難じて見たる心は如何に」重保「さん候、我君の遊樂遊ばす名は高く、見れば女中四五人など、相手に取てのお樂み、大磯狂ひ仕る、小大名より下の事。和田酒盛の昔など、手放した儀が面白い。某熟々存るに、女中の五百も三百も、お泉水へ追放し、龍宮城の樂みは、如何あらん」と言ひければ、頼家近習口々に、「八幡飲る物好かな、サア〳〵女中用意あれ。乙姫は美人の由、差詰に若狭の前、それ〳〵つかめ」と立騒ぐ。重保は小聲になり、重保「イヤ〳〵子持は寫るまい、その妹の淺茅こそ、比企殿の乙娘、乙姫の名も御容色も、似合しからん」と勸むるを、頼家暫しと御思案あり、頼家「成程淺茅が容色の儀は、聞及んだり去りながら、氣の毒は夜前はや、朝比奈と云ふ男を持つ。あの髭面の意地張者、斯樣の事を聞たらば、鎌倉中を一夜さに、でんぐり返すと云うもの、殘念さよ」と宣へば、重保「アヽお氣弱い事ばかり、往昔鳥羽の法皇は、源の仲致が妻女の美質を聞し召し、仙洞に召入れられ、御寵愛あそばされ、祇園女御と是を稱ぶ。其後仲致法皇を、恨むる色の見えけ

枝を離れぬ風情にて、太股抓める痣ぬく、姿頽れてしどけなき。若狹の局奥よりも、悠々と立出て、若狹「ナウ申我君樣、どう思召すお心ぞ、正體もなき御風情、母君樣や北條殿、御耳へ入ば嘸やさぞ、御嘆かしう覺さん」と、實體つくる風俗の、爪はづれさへ優しけれ。賴家殆ど無興有り、賴家「總じて女と云ふ者は、子を產むと早や氣が沈る、此界の樂は、色と酒とに極つた。なんほう富士が名山でも、抱て寢たらば冷たかろ、更科の月ぢやとて、左のみ變つた事もなし。兎角浮世は柔かな、膝と談合」と引寄せて、足擦らせておはします。若狹の前は聲を上げ、「コレ申父樣、兄樣も聞召せ。女の目にさへ餘りたる、取所なきお遊びに、踊り狂うて座ます、こな樣方の御心底、何とも私は呑込ぬ。一幡君は御幼少、近頃大事の御命ぢや、なぜ御意見を成れぬ」と、心一杯理を切て、恥しめるこそ道理なれ。判官眼に角を立て、判官「入ざる和女の諫言だて、悋氣の樣で見苦い。大將の御榮耀、珍らしい事でもなし、女護の島へ渡らうと、仰られても是非ないに、屋形の内のお慰み、重疊の儀と思うて居る。御意見は此方の役、和女の役は氣に入る役、やくたいもない事云はずとも、一幡君のおむづかろ、奥へ〳〵」と睨られて、殘る詞を言へばえに、言ねば胸も乳も張て、悄々として入給ふ。斯る所へ秩父の六郎重保、披露も遂ず入來れば、賴家卿も近習も、俄につくる武士行儀、咳拂ひこそ可笑けれ。重保「ア、大事

次に列ぶはいつとても、向ふ敵を宇都の宮、好む所の藤縄目、龍虎の指物嚴しき、末座なれども隱れなき、黑革縅に金紋の、二ッ頭のまうたるは、駿河の國の住人天智天皇の末孫、竹の下の孫八左衛門。扨其外大和源氏美濃侍、近江の國には山本柏木木村姉川、播磨の國には富田高梨赤松黨、伊賀に服部伊勢平氏、三河に足助矢矧武者、出雲に道田河井山、伯耆に詫麻姉輪の一黨、總じて日本國中の侍所武者所、嫡流祖流陪臣迄、末世末代子々孫々、永く源氏の幕下に屬し、不忠の心を挾まば、神罰疑ひ有るべからず、今日よりしては重忠が、若君輔佐の臣となり、眼に魏徵が鏡を張り、肱に諌の鼓をかけ、胸に批判の木を抱き、美惡邪正を手の内に、四海太平國繁昌。漣や〳〵、濱の眞砂は盡るとも、源氏の御代は盡せじと、三べん謠奏づれば、母君若君諸共に、悦び勇み立給ふ。漢の太公きじんけつ、慈あり敬あり忠ありとも、中々申すばかりはなかりけり。

第二

手車の品こそ變れ源は、淸和の流れ堰留む、戀の湊に賴家公、色と酒との亂れ髮、捌け過ぎたる近習が、そより上たる太鼓口、拍子に乘て手車の、女房達はざは〳〵と、殿御一人を宿の花、

忠心標し揃へ

再拜々々、愚臣重忠敬つて申して申さく。それ神道人道正直の一ッを以て建立す。就中正八幡宮は源氏累代應護の尊靈、神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の、鎧一領旗指物、寶前に納め奉る。扨若君の御手を取り、一々次第に教へ給ふ。先づ東の第一は御代萬歲の春秋を、重ね櫻や八重櫻、小櫻縅花やかに、射向の袖の白妙に、曇らぬ光久方の、月に星の指物は千葉之介胤直、忠義の弓の一張に、矢竹心の幾度か、敵を欺くやり梅や、鳥毛にまがふ鶯の、花に留りし印はそも、坂東の八平氏、時めく武士の名取川、名乘て通る時鳥、卯の花飾る腹巻に、夏の雪かと過たる。團扇の紋は兒玉黨、風にそよ〱吹貫の、梢走りに散り浮ぶ、紅葉流の龍田川、緋縅は岩永黨、五番に見えしは春日野や、紫裾濃の割小札、兜の星の晃きて、眞向眉庇忍の緒、鐘の指物は、信濃の七黨ござんめり。萌黃匂ひの最上方、障子の板の揚巻に、四目結を附たるは、近江源氏の佐々木とは、誰も知らん白糸を、染ぬ心に色と香を、錦がはの胸目綴、鬼の腕を鋭くも、一きは目立つ指物こそ、淺利の與市と御覽ぜよ。扨八番に飾りしは、紺絲縅の胴丸に、總覆輪の筋兜、大籏小籏吹流し、お花流しの染こみは、武藏の國の住人仁田の四郎忠常、

切て此子を亡人の、形見と思ひ障妨なく、成人さして眺めたし。其方ならでは後見に、賴まん武士はなきぞとよ。日頃の忠義改めず、勞り仕へ給はれ」とお手合すれば重忠、重忠「コハ勿體ない御有樣、賴家公のお若氣は、老臣どもが入替り、千度も萬度も諫をいれ、夫にも承引なされずば、お家の爲には換られず、無體に押込參らせて、此若君を守育て、管仲晏子が義を守り、鎌倉三代將軍と、侍き申さば四海の內、靡かぬ草木は候まじ。人數ならぬ奴原は、轍魚の水を慕ふとも、遂には自滅致すべし、お心安かれ母君樣。今宵お成の壽に、指古し候へども、畠山が重代を若君に獻上」と、太刀をお前に差置ば、母君顏面打解けて、母君「ヲ、賴もしゝ去乍ら、りれうが如き忠臣も、夷の方へ降參し、章邯が勇持たるも、秦を背きし例あり、二心なき神文に、血判あれ」と宣へば、重忠少しえせ笑ひ、重忠「神文誓紙と申す事、武內の大臣の、湯起請より事起り、鐵火を握り或は又、牛王に血をばあへしなど、上古の風儀に候へども、末世は人間邪曲なゆゑ、神も非禮を受け給はず、誓紙の名有て誠なし。義經を僞る土佐坊が、七枚起請の先例など、お家に於て不吉なり。夫までもなく御心を、安め申さん、「それ〳〵」と詞の下に親經奥の襖を引明れば、朱の鳥居のあり〳〵と、八幡宮の額をかけ、鎧を列べ玉垣の、光輝く有樣は巖しくぞ見えにけれ。重忠頓て懷中より、一紙の願文取出し、高らかにこそ讀上たり。

忠お召あるべきを夜陰の御歩行、去とは氣遣しく候」と謹んでおはします。母君暫し御涙、御衣を絞らせ給ひつゝ、母君「さればとよ世の中に、自程な憂事の、數々多き者はなし。賴朝卿に別れし時、共に黃泉に赴くか、去ずば如何なる山の奥、谷の陰にも世を厭ひ、後世願はんと思ひしに、二人の若に身を繫れ、心にもなく世に立ちて、歎きを重ね日を重ね、漸くとして賴家に家を讓りて嬉しやと、思ふ甲斐なく此頃は、酒と色とに打亂れ、親の諫を聞ぬから、まして臣下の強異見、憎み疎めば旁も、出仕を止め給ふに付き、小人共が世に誇り、人を人とも思はずして、今日此若が供先を、乘打せしとは何事ぞや。いかに文盲野人とて、刀も腰に帶む身が、主從の禮を知ぬとは、よもや世間へ云れまい。賴朝生てましまさば斯樣な不義は致すまじ、後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を、匹夫の馬の蹴上をかけ、衣裳を汚せし無念さを、思ひ量りて給はれ」とさめ〴〵泣ておはします。重忠橫手をちやうと打ち、重忠「古今稀なる狼藉者、狐は虎の威を借るとは、斯樣の事を申べき。糺明致すは易けれども、露顯に及ばゞ賴家公、政道暗き儀あり、何れを何れと別き難き、御連枝の中なれば、知ず顏こそ御慈愛」と、宥め申せば母君は、母君「成程其方の云ふ通り、此事のみは自が、心ひとつに濟ません、只恨めしきは、賴家が邪曲者に氣を奪はれ、其行末は身を亡し、國をも遂に失ふは、鏡にかけて見る如し、

同然と、世を恨みたる御眥、近習の武士も口々に、扨も憎い比企がやつ、いざ追著てきりがやつ、ほつこしもないやつ〳〵を、越て屋形に入り給ふ。善惡を身に與らず忠言の、鋤鍬止し畠山重忠の屋敷には、賓客車馬の道絕て雨を疑ふ松の風、糸に亂るゝ淺みどり、五柳先生窓に倚り、七松居士が床に伏す、氣色を見せて文机に、文武の眼まくばりて、悠然としておはします。本田の二郎親經、宿直に詰て居たりしが、差寄て小聲になり、親經「今日御所の樣子をば未だお耳に達せずや、巨細は確と知らねども、佞人原と朝比奈殿、口論を仕出され鬪諍に及びしを、親父義盛駈付られ、事穩便に納まる上、判官が乙娘義秀に妻すとの、契約迄ありし由、一門廣き和田殿が、惡人徒黨に成れては、やす大事にて候はん。何とぞ御思案廻らされ、此緣組を妨げて、然るべうや」と伺へば、重忠莞爾と打笑ひ、重忠「ハテ吉左右かな〳〵、比企の緣組致せしは義盛天晴發明者、敵の手段を此方の、手段にするが軍書の祕事、おゝ賴もしき和田殿」と咄の跡もとりあへず、又差向ふ物の本、氣もしん〳〵と澄渡る、夜も闌に裏門を、忍びやかに音づる る。親經頓ておつ取太刀、駈寄つて差覗けば、賴家卿の御母君千幡君と只二人、扉の外に立ち給ひ、母君「重忠に對面し、密に尋ぬる事の有り、案内せよ」と宣へば、ハツトばかりに立歸り、斯と告れば重忠も、驚き遽て迎に出で、御兩所を勞り上座に誘ひ奉り、其身は遙に押退り、重忠「重

ても、銀くれるやつ呉れぬやつ、吝いがやつか酷いがやつ、あらまし斯樣に候」と、呆言盡せば若君は、氣さくな奴とのお口合、馬上靜に歩ませ行く。東見かどの向ふより、比企の二郎員家、御所よりの歸るさに此所へ來掛りしが、出頭自慢の鼻の先千幡君のお先とも、知ず顏なる咳拂ひ邊を拂ひ打て來る。御近習の若侍つか〳〵と立寄て、侍「ヤア比企殿にて候か、若君のお供先下馬なされい」と立塞がる。二郎驚く氣色なく、二郎「當時某下馬せん者、武將ならで恐らくは、鎌倉中に覺なし。家來の者共片寄るな、通れ〳〵」と云放つ。お先徒士の衆聲々に、徒士「ヤア緩怠なる詞かな、大樹の御舍弟千幡君眼が見えぬか醉狂か、但しは引摺下さうか、返答聞ん」と罵れば、員家けら〳〵と笑ひ、「眼潰ればお主等よ、我君の小舅辨へ知ば其方より、きつと下馬をば致す筈。若輩人に見許す」と傍若無人に言散し、一鞭あてゝはいしいと中突割て駈通る。コハ慮外者遁さじと、一度にはらりと拔つれて、追駈んとする所を、若君は聲を上げ、千幡「ヤレ早まるな〳〵、彼等が無禮は賴家の御心よりする事ぞ、大老役を相勤る、和田秩父さへ了簡して、見遁しにする狼藉者、若年の身が言募り、彼めに迷惑致させては、賴家公の御心に、嬉しとは思すまじ、親兄の禮重ければ堪忍するぞ旁よ、必粗相致すな」と道の道たる御一言、御幼稚ながら賴朝の器量の胤を受け給ふ、聰明叡智の生れ付、色には出ず心には、千里の馬も伯樂に逢ねば跛

米油、其外天壤無上ぢや」と、笑ひて屋敷に歸りけり。頻伽は卵の内よりも、其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結、千幡君と聞えしは、頼家卿の御舍弟にて、今年十二の干支の馬、手綱搔繰り靜々と、春の野懸の乘姿、優しやかに美しく、ぼつとりしてしをらしく、實にも武將の嫩とは、名乘てしるき御器量や。山の内の松蔭に暫し御馬を控へられ、谷七鄕の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勘齋を近く參れと召寄せて、千幡「汝は當地の者なれば、此所を以前より鎌倉と名付たる、謂れを定めし知るらんな」勘齋「イエ／＼、所には住み候へども名所とも、舊跡とも白河夜舟、又してもうまい所を引起され、鬢作つたり燻べたり困つたる若旦那、語つて聞せ給び給へ」千幡「されば入鹿の大臣とて、猛惡無道の逆臣あり、又大織冠鎌足とて智仁勇を備へたる、忠臣是を悲みて、天神地祇に祈誓をなす、忠貞神にや通じけん、天より一つの鎌ふりしを、これ吉左右と押戴き、欺り寄て入鹿が首、水も堪らず搔落し、それより天下太平の守りの爲と其鎌を、此相州に納し故、鎌倉山と名付たり。なんと目出度い所ではないか」勘齋「ハヽ／＼／＼殿樣にはいつの間に左樣の事を御存じ有、然らば拙者も覺えたる谷々の名は多けれど、寐もせで君を松葉が谷、耳と口とにさゞめが谷、託は盡ぬいづみが谷、憎いかイヽヤ可愛がやつ、のほせばいこふ舐るが谷、すしなやつとて誹るがやつ、折角茶の湯敎へ

にても縛つて見よ、然ないと汝大騙一寸も立せじ」と、太刀捻くつて押直る。勢に氣を呑れ豪海左右返答なく、五人の者もうぢ〳〵と片隅欲しき氣色なり。斯とは誰か知せけん和田の義盛馳來り、御前に畏り、義盛「君を始め諸歴々御尊敬ある客僧へ、悴に候朝比奈め、持病の我儘差起り、慮外の振舞致す由、千萬恐れ入候。義盛日頃の忠勤に思召かへられて、御赦免あらせ給はれ」と頭を付て言上ある。判官大きに悅んで、判官「ヲヽ御尤々々、子を持てこそ世の中の、親の心は量るれ。法印へは某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取ては武士一疋、浦山しい〳〵。底意を殘さぬ證據には、若狹の前が妹に、淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進ぜたい。朝比奈殿を判官が聟に取る儀は成まいか。どうぢや〳〵」と抱いるゝ、是も謀の一ツぞと義盛合點行きながら、然あらぬ體に會釋して、義盛「出頭無二の能員殿殊更以て我君の、御緣家に繫る事、身に取ての大慶」と、世に嬉しげに領承ある。朝比奈ずつと立上り、三郎「ヤア付上るな入道め、今日此頃に漸と取立武士の分際で、聟なんどとは存在な、口引裂かん」と飛懸るを、義盛中に押隔たり、義盛「是非辨へぬ若者哉、汝を聟に取んとは、心に一物有ての事、契約申す義盛も心に一物有ての事。平に〳〵」と囁けば朝比奈早く合點して、「成程聟に成りませう」三郎「是判官殿隨分と、仕拵にお氣張られい、嫁入長持塗簞笥琴箱貝桶狗張子、部屋の世帶も其方から、味噌鹽薪

迄御長生なさるゝとも、誰あつて其時迄御奉公を仕り、虚か誠の證據には何者が出て立べいぞ、どうやら護摩の灰臭い。判官殿も旁も、獨鈷仲間の一味らしい」と、頭叩いて嘲笑ふ。かね〴〵牒合せたる中野の五郎つゝと出で、五郎「いしくも言れし朝比奈殿、八幡拙者と同腹中、正法に不思議はない、外法成就の人ならば其段は知ぬ事、命を延るも縮めるも畢竟以ては同じ事、某を一加持に祈殺して見せられよ、經文の端くれも些と覺えて居る男、驗證なくては信用せず、如何に〳〵」と詰掛る。豪海些とも惡びれず、豪海「ヲヽ面白し〳〵、邪正一如の宗意なれば善惡には拘はらじ、望みに任せ其方の命を落して只今、嘲笑を塞がん」と印事々しく結びかけ、神咒を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に、不思議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し、五郎「あら耐がたや苦しやな、大聖不動明王の索に五體を締付られ、手足も竦み動ず」と眼を見つめ戰慄しは、不思議と云も餘あり。各是はと仰天し天晴御坊の御法力、方便の御殺生最う此上は御赦免あれ、縛をも解せ給れと、聲々にこそ詫にける。豪海は打頷き、豪海「夫こそ出家の本懐たり、苦痛を救ひ申さん」と、重ねて印を結びかけ、數珠さら〳〵と押揉ば、五郎卽座に起直り、先非を悔む涙の體、皆々ハツト感じ合、頭を垂れて居たりける。朝比奈かツら〳〵と笑ひ、三郎「此義秀がむき出した黑い眼を拔うとは、むごたらしい旁、賣僧坊主が行力にてちくとん計朝比奈が、腕先

はざる年來の病人を一祈に働かせ、啞に忽物言はせ盲人に眼を開かせ、難病癈病加持力にて本復させずと云ふ事なし、世擧つて此驗者を活不動と尊稱す。去に依て某も密に私宅に招き寄せ、殿若君の御身の上、祈禱を賴みしに、丹精を擢でて御壽算二百餘歲迄は、慥に加持し延せしと、卷數を持參し今朝より、大廣間へ相詰させ置く。御目見得を遂げさせ度願ひ入候」と詞を盡し言上す。賴家卿、御機嫌麗しく、賴家「其驗者儀は某も、先達て聞てあり急いで招喚致すべし」それ此方へと御諚にて、奏者に連れだち願行院、悠々と立出て御目通に畏る。賴家御覽じ、「ムム願行院豪海とは貴僧の事よな。世は濁亂に及べども三密ゆがの功積り、病苦を救ひ且は又、鎭護國家の止觀の旨、甚以て神妙なり。今日よりしては賴家が祈の師ぞ」と宣ひて渴仰あるこそ笑止なれ。豪海諂ふ氣色もなく、左右を見廻し打咳き、豪海「其昔役の優婆塞孔雀明王の咒を主持し鬼神を役し人民の壽命を延し、法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人、此度修法の加持力にて御壽算二百餘歲迄、慥に請合申せし」と廣言放つて言ひ散す。問注所に控へたる朝比奈の三郎する／＼と走り寄り、豪海が膝元にどつかと坐り、三郎「コレ御坊、某元來武骨者、佛法の有難いも仙術の不思議なも、曾て以て存ぜねども、大かた人の壽命には方量の有るべい物、大食大酒濡事を隨分謹み嗜んでも、百年は活にくい、よし又和僧の咒咀で、我君二百餘歲

鎌倉三代記

廣德神異錄に曰く、天地は凶惡を長育せず、蛇鼠は龍虎と成る事能ず、天網恢々たり去て何處に行んとす、天性大樹の御氣性、花實備はる鎌倉山、動きなき世に扇が谷、千代萬代の龜が谷、春知りがほの梅が谷、時めく源氏ぞ芳ばしき。時維建仁三年源の賴家卿、故右大將家の讓りを請け征夷將軍に拜任有る、虎は威有つて猛からぬ廿二歲の若綠、丁固が松と見ゆれども、李白が酒杜牧が色、二つのしなに身を浸し、政道怠り給ふ故、秩父北條土肥小山、舊老竹馬の忠臣等、度々に諫の術盡きて、勤番出仕も遠ざかれば、辯佞邪曲の若者共、晝夜お側に蹲踞する、中にも比企の判官が、いつき娘の若狹の前、君御寵愛淺からず、一幡君とて當年は、四歲の若君ましませば、舅心に邪を裁けど比企能員とて、貪欲驕邪のあら入道同名三郎員家、笠原太郎兼澄中野の五郎廣敎、胸に惡事を徒黨の武士、まくらをわつて謀計の、色には出ず判官は謹んで申樣、判官「抑も此頃出羽の國羽黑山の山伏、願行院豪海とて當國に徘徊し、假令ば手足叶

関七九郎兵衛
釣船三ぶ
一寸徳兵衛
夏祭浪花鑑　五七七—六七四

道成寺現在蛇鱗　二三九―三三二

傾城阿波の鳴門　三三三―四三四

姉は宮ぎの妹はしのぶ碁太平記白石噺　四三五―五七六

淨瑠璃名作集 中 目錄

碁太平記白石噺　天明七年八月十二日　豊竹座

作者　烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛、焉烏旭、三津環

夏祭浪花鑑　延享二年七月十六日　竹本座

並木千柳　三好松洛、竹田小出雲

此時はじめて人形に帷衣の衣裳をきせはじむ。

大正三年十二月

校訂者　松山米太郎

緒言

本巻に收めたるもの左の七種、何れも流布の丸本によりて嚴密に校訂せり。

鎌倉三代記　享保三年正月二日　豐竹座
作者　紀海音

繪本太功記　寛政十一年七月十二日　豐竹座
作者　近松やなぎ、近松湖水軒、近松千葉軒

近江源氏先陣館　明和六年十二月九日　竹本座
作者　近松半二、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田新松、近松東南、竹本三郞兵衞

道成寺現在蛇鱗　寛保三年十月二日　豐竹座
作者　淺田一鳥、並木宗輔

傾城阿波の鳴門　明和五年六月朔日　竹本座
名代　近松門左衞門　作者　近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郞兵衞

淨瑠璃名作集

中